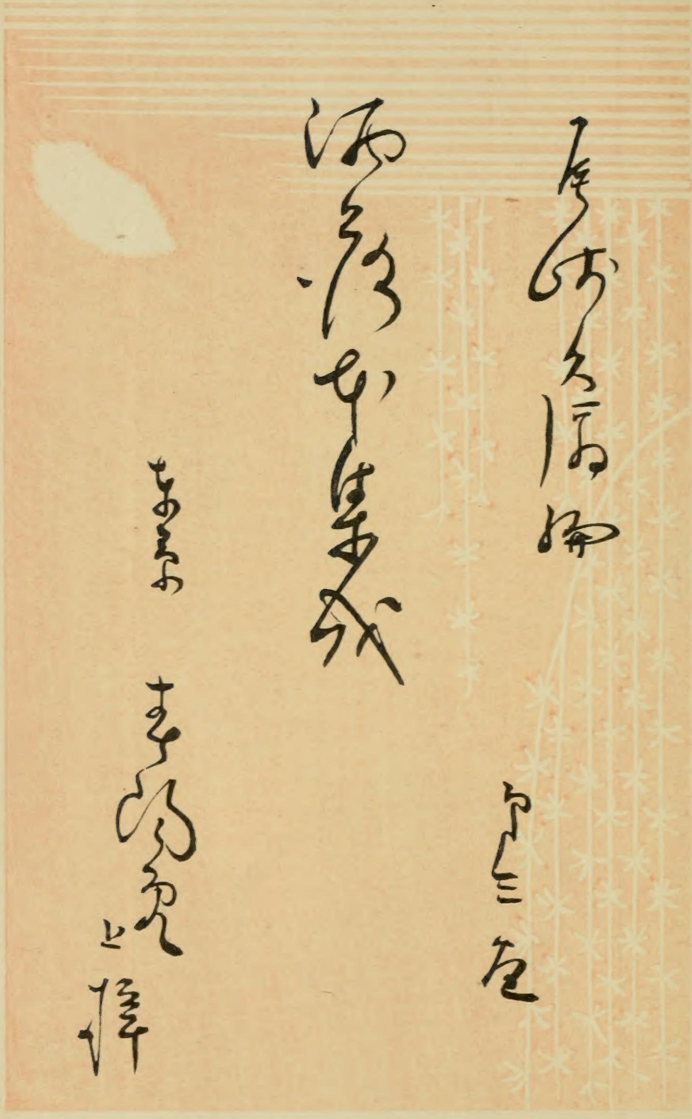
PL 777 .35 09 v.3
Ozaki, Kyuya
Sharebon shusei

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

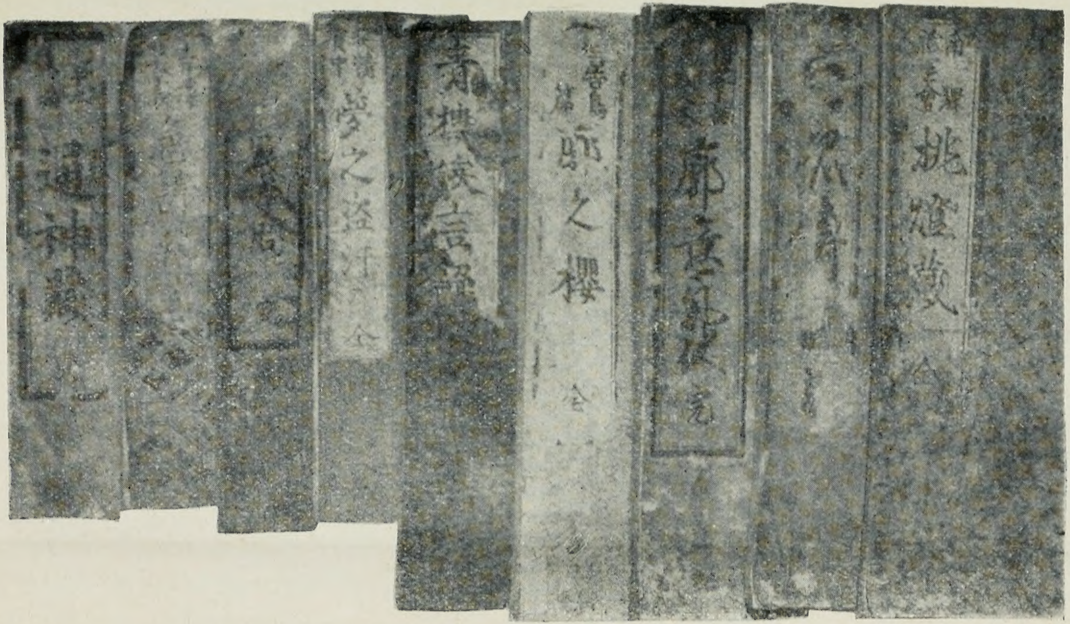


PL
777
.35
09
V.3

LIBRARY
JUL 30 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

全部
三冊
條通柳馬場西入

大極堂有長作
春川五七画
癸未春發兌
笑枕 全部三冊
京都三條通柳馬場西へ入



洒落本題簽のいろいろ

洒落本集成第二卷叙

江戸文學を、江戸時代文學の意味に取ることなく、これを地理的江戸の文學の意に取るならば、則ち一方政治法制の中心であつた江戸、に發生した文學の意に取るならば、その概念の中核に何があるだらうか。(若し地理的とか時代的とかの區別が緊瑣なれば、汎稱江戸文學は、誰しも知る享保頃を界して、以前は京阪中心、以後は偏稱江戸が中心であつた。事實享保以後、地理的江戸以外に文學らしい文學は、生れなかつた。乃ち此の語を斯く變へると同じ事である。江戸時代文學の享保を界して、文化東遷以後の文學の中核は、と)俗曲類には、相對的に謂ふ上方文學に比して、劣らぬはある。幾流派榮えた。が、特に小說に於て何がある。誰しも考へ及ぶ事は、(重ねていふ)江戸文學(地理的)の興隆、寧ろその發祥とも謂ふべきは、享保以後であると。享保は、江戸が文化の上にも中央集權となるべき兆の頃である。安永・天明に至つてその確實さを加へた。

其頃に生れ、以下幕末延いては明治へ傳統影響を垂れた小說は、何か。洒落本と黃表紙とより無いではないか。洒落本も、その起りは、上方に影響又は示唆が尠からずある。が、俗曲の江戶物の榮えのやうに、よく江戶の畠で、新穀の豐かなものを生み、やがてはその種を京阪に逆輸入させた。黃表紙は、多面多角、よく時代も捕へ、作爲にも耽つてゐる。がそれだけ、一處に集注した味がない。且又それには、每丁の挿繪が、半量の重きを爲してゐる。洒落本は、これに較べると、全く讀む文學である。加之、一處に集注した。且つ小說の正系らしい浮世草紙――それは、上方畠で、上方產が多かつたが――の風格を僅かに受けて、或は劇臺本の影響もあつたらうが、――凡て僅かにである。手法の上に、欸と思はれるので、大體に於て、「江戶」自身が醱酵させ釀したに外ならぬ。――始めて地の文會話の截然たる區別、日本に寫實主義なるものを、形式的からも樹立した。しかも始めて俗語本位を以てし、一篇の首尾伴つた說話といふよりも、描かんとする中間のみの正確に力めた。卽ち物語式ではない、斷面の精寫式である。但しその描寫が、遊里に集注したのは、誰の罪か、誰の好みか。然し當時の遊里は、今日の概念のとは、

全く異る。當時の遊里は、全く社交機關の有數である、流行事物・言語の發祥地（劇場の幾分を除いては）だつた。遊里に殆ど集注した洒落本、それは全期に於て約四百篇、成程讀物としては、佳不佳も出でよう。書き慣れたる作家と、書き慣れざる作家とによつても。まして黄表紙よりより以上、此の洒落本には、所謂文筆に専業の徒でないものの刊本が多い。（稿本の作は、無論此の素人の作者にが多い。）勿論時の流行と、一は遊里體驗を誇示せんとより生れた筈である。が夫等可不可の孰れにも、時の風俗言語流行は、籠られてある。我等は、一にそれに執することを遁れない。黄表紙は、諷刺と滑稽、又は話其儘の滑稽。合卷は、その延長と讀本。古代物語其他の傳奇的趣味、所謂獨創らしい、創作と名づくべきは、尠い。讀本は、又奇の爲にする奇なる設巧、又は强ひて勸懲に韜晦。唯一に滑稽本あるも、此の滑稽本、誠に此の我等の洒落本を廣範圍ならしめ、更に通俗的、品格を自ら賤したものといふに過ぎない（價値的には）。人情本ありて末期文壇に、脂粉の徒の人氣を集めたるも、こは、洒落本を學んで、此の簡素と穿貫とに若かなかつた。と觀來ると、眞に江戸文壇としての收穫は、その土地色と時代色と、創作

雰圍氣を多量に有するは、洒落本一個である。唯、それその洒落本が、寧ろ洒落なる語を奪ひ、當世本、浮世本（浮世繪・浮世草紙の如く）と、名づくべきが正當であるやうに、主に遊里の魂膽、洞房前後の描寫に中心を持つてゐるのは、たとひ前古比なき短篇小說の形式を以てし而もよく寫實主義に徹したとはいへ、或は從來これが認められながらも、他の比較的古典に近い近松・西鶴の上方中心文學に比して、ひけ目をそれ自體感せしめる理由となつたかも知れない。成程、洒落本は、彼等に比して近代であり、又ナマである。又遊里といふ一處に集注の感があり、俗語本位であるから、雅味がない。且つ首尾完了しない斷面描寫、暗示又は推理本位の非說話文學であるから、大衆的でもない。その構想も、一處であり斷面であるから、ちよつと見れば、千篇一律、膚淺とも思へる。西鶴・近松の如く、好色・世相と內に外に廣汎に物語式に描寫したのとは、違ふ。がそれだけ、西鶴は少く、近松は多く、より以前の古典文學又は古典文字の潛入を認めない譯には、いかない。洒落本には、見らるる通りその影が殆ど無い。强ひて謂へば、廣義の江戶文學のうち、最も古典の影響少き文學、獨自のものは、といへば、前

に西鶴(歟)、文化東遷後洒落本ありと謂ひたい。

文學論をするのではなかつた。唯、此の洒落本の、獨自の地位を、より強く主張したまでである。謂ふ事は、既に定理に近い、平凡なものである。

○

「洒落本集成」刊行の企劃成りてより既に五年、昨年第一卷第二卷を刊行はしたが、實を謂へば、大正年度の蒐集と校訂との誕生である。五年の間、(なほ今後も)恒產なき自分は、原本の蒐集に、人並以上の苦楚を、嘗めた。二三の原本後援者はあつても、自分の企劃が未飜刻と志した以上、所要部數は、極少い。やはり底本の大部分は、自分の、否自家家族の食を節し衣を節しての結果たる、原本の蒐集とその勞苦である。未飜刻なるが故に、既飜刻物の原本に比べて、原本益〻稀少、入手の値も高く、さりとてその機會も少い。最近の自分の經營は、此の原本と原稿と、校正とに盡きるといつていい。而もそれは、全部首尾、人手を借らない、自分一個である。――原本の手入れだけは、荊妻に任してあるが――本集成全六卷、以て約百五十篇の洒落本を世に復活せしむべく、心

がけてゐる。自分以外の既翻刻物と加へて、洒落本刊本數の過半には達しよう。
洒落本以外、その以後は、職業的文筆の徒輩出、且つそれと生じた讀者の批判力によつて、名作は多く迎へられ、從つて多刷せられ、今日傳本も尠くない。さりとてその筆法を以てしては、此の洒落本だけは謂へない。洒落本だけは、珍本必ずしも、凡作ではないからである。何となれば、洒落本當時は、以後の如き、作者と書肆との截然たる投資關係なく、寧ろ作者の作物依托出版の形があつた。それだけ、有名無名といふ程の所謂文壇空氣をも作らなかつた。唯、如何に出版費の幾分或は全額を提供するとはいへ、本屋が見ても下々作と思はれるものは、生れよう筈がなかつた。まして如何な下作なりとも、内容は體驗を主とし、寫實の形を基とした事に於て、素人たりとも、文才なく金銀ありの徒では、生れる筈がなかつた。正體を探れば、多くは、狂歌に狂詩に漢詩に、儒學に其他に、一方の玄人准玄人だつたのである。まして此の洒落本は、小說としての鑑賞以外、當時の生活史資料を最も多く含むに於てをや。卽ち下作なほ値ありである。江戸文學を戲作と自らもいひ、人も稱した。成程、戲作——自己享樂のためにする、

又は大衆興味の爲にする、との差はありとも、戯作ならぬは、殆ど無いであらう。洒落本をのみ排すべきではない。今日の如く進んだ文學鑑賞眼からは、例へば洒落本にありては、先に歸橋、後に京傳、其他數輩のみ、稍水準線を超えたりといふべきか。但しこれは比較しての作品論である。其他は、既飜刻物まれ、未飜刻まれ、駄といへば凡て駄、好といへば凡て好であるのである。但し以上の言、未飜刻既飜刻、凡て特に洒落本（出版事情の渾沌たる狀であつた時代の作多き）にありては、價値上區別なしを强調するための、自辯のための、一家言に過ぎない。重ねていふ、既飜刻物と雖も、京傳、其他二三の外は、强ち作の嚴密なる價値上よりその飜刻に先後あつたのではない。（人にも予にも）唯、材料寓目のままと、自分は見るのである。然程に、洒落本の傳本數は、他と比較して、總數的には、最も尠いと思ふ。例へば、本編第二卷所載の「三幅對」の如き、果して天下に幾本の存在があるだらうか。

本第三卷所載の、「眞似山氣登里」、「辯蒙通人講釋」、「鯉池全盛噺」、「其あむか」、「南門鼠歸」の如きもである。「三幅對」程ではなくとも、恐らく天下有數の傳本であらう。

在るも紙魚の餌食となり、又は屑紙となり、偶〻その完全なるもの、發見せらるるあらば、奇蹟であらう。我等は信ずる、此の小本一統、作的内容には、是非の論があらうが、その散佚の性他と比較して甚しきにより、早晩、江戸文學殘存典籍中の、骨董味を呼ぶ事、西鶴本の次に來るであらう事を。嘗て高山林次郎、日蓮を釋迦と比較した。今日に於ては、敢て不思議でもない。西鶴本、假名草紙、などの小說系骨董掖の王座、其他滑るり物の夫等と相伍する機が必ずあらう。否、現に我等の本編着手の大正十四年に比較して、五倍又は十倍、その量と形と、一見その貧寒なるに似合はず、なほよく日增しの騰貴を見つつある。

さりとて、洒落本は、合卷の如く讀本の如く、滑稽本人情本の如く、在々處々より、決して發見はせられない。その大多數は、一本の刊行部數少く、且つ需要も、他の如く遠近老幼といふではなかつた。初版にして絕版は、その過半である。(此の絕版の意味、上司の禁止彈壓の意味には、非ず。) 成業文筆の徒以外の、體驗作は、無論である。卽ちその大半は、江戸に產れて、江戸で泯んだのである。大正十二年の震災に於て、この

舊江戸、新東京は、無論洒落本の傳本をも燒亡せしめたであらう。がさりとて現在、洒落本の所在及び發見は、未だに東京が最である。そは、これのみは、殆どが出版元の土地に、産れてさうして埋れた證據である。然り、物好きな淺黄裏が、その城下へ齎したか、又は餘程の流行作が、貸本として地方へ流れ込んだ、といふに過ぎなかつたからである。

名古屋を中心として蒐集し、此に仕事の過半を爲した自分は、思へば、淺黄と罵られる以前、彼等作者の靈により、感謝せられねばならぬ。同時に、此の自分一個の遲々たる成績にもめげず、刊行を續けつゝある書肆春陽堂氏の支持にも。此卷の如き、昨年八月より初校、年内に約四百頁、今年に入りて其後を續け、前後全部四校を經た。當然とはいへ、獨力なるが故に、自分の健康も生活も氣づかはれ、また此の刊行のため犧牲としつつある荊妻、母、及び現在六人の子女にも、二三生死はあつたが、ともあれなほ現在九人の家族がその日〳〵を迎へつつある、否生かしめつつある自分の及び家族の、運命と名づくべきものに、自ら感謝もしたい。――

いひ忘れたが、既に第三卷、從來原本に或は此の擂校訂本に、贊意と鞭撻とを賜はつた諸賢は、多い。昨年來、此の第三卷の遲刊を責めて、促さるゝ人々も少くはなかつた。一々お答はしたが、重ねて此の機會に謝意を表したい。さうしてなほ此上とも、本編六卷完了に至るまでの聲援と支持とを、好意とを、天下無數の同學同好のために、切に希望したい。

本編の裝幀は、全部小村雪岱氏に願つてある。第一卷、獅子虎の對比よく、第二卷、政演好み春信好みの構圖と描線とよく、第三卷は、見らるゝ如く、見立牽牛織女である。よく古典に新味を持たせ、而も版畫を成すは、現代、氏の獨擅場であらう。此卷表紙、扉及び口繪の複製、共に昨年末に摺了となつてゐたものであることを告げておく。

昭和五年夏六月

久彌　誌

解　題

本卷所收、刊本二十三、寫本二、計二十五篇の洒落本、覆刻に當つては、前二卷通り、皆原本のままとした。本卷特に、はハの使ひ分にも注意した。即ち原本には、（洒落本とも限らないが）凡て或る戲語の中のはと、助辭のはとは、使ひ分けがしてある事にである。成程、當時の物、今日の如く句讀點の嚴密なくとも、よく讀み易からしめたのは、この區別だと思ふ。助辭の場合は、殆どハである。其他許す限り、衍字の如きも、其儘とした。組體裁また原本に近よらしめた。但し原本、本文中の、二字一行書の部分だけは、括弧にて六號文字とした事、前卷の如し。以下、廿五篇の年代、書形内容に就て、略解を述べる。

一、放蕩虚誕傳　慶手古山人作　挿畫無落款　安永四年正月刊

小本一冊。元表紙茶六方枝・慶手古山人自述の序、一表より四表まで、此部分、罫を引く。すいのき老人の序・（別）一表より四裏まで。本文、女郎買大意、五表より「傳に曰」まで八表。八裏・九表。

九裏・十表。十裏・十一表の三見返し、挿繪にて、吉原・品川・深川の順序。此の畫家不明である。或は、春重（司馬江漢）ではなからうか。最後の構圖、これに似た中判錦繪を彼の版畫に見受ける。なほ、同時代に、彼（春重）の挿繪ある小咄本（安永二年版、「俗談口拍子」）もあるから、それに挿圖の描線なども似てゐるから、春重歟と思はれる。本文のつゞき、「まづ。其姿風俗に」以下、十一裏より二十三裏まで、奥附の著者名と年月と、廿四〆八（これで一丁）の表、出版及び近刻の廣告、同裏。以上、全丁數廿八丁。末尾の廿四〆八とあるのは、最初の序の（別）四丁分を、計算に入れたのであらう。變手古の自序、原文は、五行の罫で、一行九字位、〻の讀點を打つ。ずいゆきの序は、罫なく、半丁が七行、一行は、十三字位、〻の讀點を打つ。本文は、半丁七行、一行は、十二三字、〻の讀點を打つ。（本文、罫なし。）柱は、變手古の序の四丁だけは、上に序の一字、下に、一二の丁數。ずいゆきの序以下本文は、上に放の一字、下に一二の丁數。毎丁、輪廓がある。

作者の變手古の序文、頗る氣が利いてゐる。すつかり序文からして、唐本の摸倣である。當時、唐趣味の摸倣著しく、此の本の如き、洒落本起原論のうち、唐本摸倣説に味方する、一證左でもある。現に、末節に、「唐本仕立仲間へ入るのさ」と告白してゐる。最起原には、唐本の唐趣味摸倣とばかりいへないかも知れないが、洒落本生じて既に享保・寶暦・明和を經た、此の安永年代は、この作者の

如きが證據で、洒落本則ち唐本仕立と思つてゐたらうこと、一般であつたとは謂ひうる。なほ、ずいゆき老人の序文の一節、「倡婦のミに。あらず。妓者あるいわ。磯せゝりなんどの。たよりにも。ならんかと。……世間の美男(いろおとこ)のために利なからざらん事を」というてゐるのは、則ち當時の、洒落本の目的を明らかにした言葉でもあると思へる。本文は、欺(だま)される筈の客が、却つて女を欺す手を說いたので、一種の座上の理窟とより思へぬが、こんなのでも、時人の放蕩家殊に息子には、受けたらう。元手に入れた金銀を取り戻し、更に儲ける事を說いた。こんな順序に、引つかゝる女郎ばかりもゐないだらう。とにかく、漸く此の安永頃より、魂膽手管を互ひに盡す、情本位ではない、理智の相撲が愈々烈しくなつた樣子を、露骨に示してゐる。「深川ハ頗る行ひがたし」とあるのは、深川は、己惚氣の女郎はゐなかつたのか、客の心以上に、敏感だ、といふ意味であらう。それとも、此の作者、それに懲りた經驗があるのか。眞の色男の定義を、「金銀をつかわずして。女郎を自由自在にするを。」いふというてゐる。成程、これでは、ただら遊びの息子共への、最もよき頂門の一箴だらう。とにかく此の理智が、洒落本の大半の氣分で、これに飽かれて、情に歸りかけたのが、天明の末から寬政及び以後の末期本で、谷峩の持てたのは、理智に代ふるに、情を以てしたせゐであらう。その方が、萬人に早(はや)分り、深淺の度はとにかく、人の心を打つからである。ともあれ、此の「放蕩虛誕傳」は、洒落本の

比較的初期のもので、しかも傳授形式である事に於て、注目すべき作である。

二、北遊 穴知鳥　松壽軒東朝作　久豐挿繪　安永六年正月刊

小本一冊。此の本の外題の角書は、北遊である。序文にも、北遊とある。然るに、從來の諸書年表類、全部一樣に、北樓とあるは、何故か。朝倉氏の年表、誤植か誤記であつて、それが全部に災したのであらう。一名を當世穴知鳥といふ事は、本文初めに示すが如しである。元表紙不詳。東朝の序、此分のみ一丁の輪廓があつて、一表より二裏。本文は、輪廓なく、三表より三十九表まで、奥附、三十九裏。內、第十七丁缺丁（落丁には非ず）、よりて、全三十八丁。第七裏より第八表、挿繪、此の久豐、不詳。柱は、全部、上にアの一字、下に丁數。

此本、特に謂ふべきは、天明（寛政）版の「通志選」の元摺元本たる事である。「通志選」（本集成第一卷所收）は、此の穴知鳥の一部改刻新作、大部分原版木使用の、即ち補足改題後摺本であつたのである。即ち「通志選」本位でいへば、その原本の序及び本文第九丁裏までと、末尾の第三十一丁の一丁分とを新刻したもので、其他は、この「穴知鳥」を應用、その版木の、柱のアだけを削つたものである。よりて、挿繪も、新刻の部に入り、從つて二種となつてゐる譯である。此の飜刻本で謂へば、本

集成本卷の第廿七頁、二行目よりは、全く第一卷の「通志選」と同一である。(第一卷、一七五頁八行目參照。)末尾は、「通志選」は、「穴知鳥」より短かく、「穴知鳥」の第三十二丁以下七丁分以上を削り、第三十一丁だけを改刻して、文章は、「穴知鳥」のままとして、第三十一丁裏の、五行目(本集成第三卷の、三十九頁十二行目)の、「わけはしらず」までを生かし、アト、「拐表座敷にハ」と以下七丁分以上の敍述があるのを、「早明がたのかねのおとにくや鳥がかあ〳〵」で、臭をつけてゐる。即ち、「穴知鳥」の方、これより完璧で、「通志選」は、餘程のごまかし本で、しかも臆面もなく、序や初めを變へ、挿繪も變へて、別本らしく見せかけたには、當時には、例が多いとはいへ、恐れ入る。即ち本集成の頁に直して、七頁以上、序文ともでは九頁以上の相違があるから、重複も厭はず、再複刻した所以である。從つて、「通志選」から引用することは、まづ避け、此の「穴知鳥」よりせねばならない。元版と再摺補足版との差を知つてゐないと、それより古く安永のものを天明に取扱つたりして、迂濶な間違になる譯。

筋は、二人遊の形式、淸幸なる半可通がよく描けてゐる。前後、武左客と田舍客との點出も生きてゐる。小說體として、佳作の方であらう。

原本字詰の體裁。序文、半丁五行、一行十四字位。本文、半丁八行、一行十五字位。

三、南客先生文集　南楼坊路銭序　春章挿繪　（安永八年刊）

原本、刊記がない、姑らく年表類のいふ所に從ふ。原作者も不明である。珍南品といふも、南楼坊云々といふも、凡て品川に因んだ假名である。なほ、此の序文は、蜀山人歟と思へる。文體と、末尾の扇面巴の印からである。それに、蜀山人の洒落本に多い、春章の挿繪である事と。然し、この作者が、序者の路錢とは、別人かも知れない。序文の樣子からは、別人のやうに思へるが、或は逆に、これが序の上の見せかけ、序者作者同一かも知れない。尠くとも、此の本、蜀山人の序（路錢を蜀山人の此作上の假名として）だけは、疑ひないと思ふ。然し私ば、作も、中々皮肉に、手の屆いた描寫である事、何となく蜀山だと思へて來る。（雜誌「古本屋」第九號、拙稿「蜀山人の洒落本」を參照せられたし。）南客が、服部南郭にもぢつた事謂ふ迄もない。これも、外題及び序の體裁などが、唐本好みの例證の一。

小本一冊。元表紙茶三方截。路錢の序は、一表より二表まで、その裏は、餘白。此の序、野を引く。本文は、別に、一裏より三十五表まで、但し一と名づくる前に、本文書出しの半丁と、挿繪見返しの半分との、無丁一丁がある。よりて全丁數、序文二、本文無丁一、有丁三十五、計三十八である。本

文末尾の第三十五丁裏は、底本は、補足のあとがあつて、餘白となつてゐるが、同本所藏の三村竹清氏に當て問合せた處、やはり餘白であつた。柱は、無地、丁數は、裏の綴目の下。毎丁、輪廓がある。

序文は、半丁、六行。一行は、十八字位。本文、無丁書出しの表だけは、罫を引く。此分、七行。一行は、十九字位一行。有丁、第一丁裏、即ち挿繪裏の「芝幸」ウ、戻りなら、以下罫なし。七行半丁、十九字位一行。蜀山の作であるか否かは論外としても、とにかく此作、中々面白い。終りの、角太夫と、隣りの勘太との、なほざり論は、格別に。角太夫の嬲られ方、芝幸の持て方、捌け方。勘太も齒ぎれがいゝ。凡て躍如たる描寫である。それこそ、これ迄なほざりになつてゐた品川の名作本の一である。

四、呼子鳥　鷺鳥亭作 挿繪ナシ　安永八年春の序

小本一冊。品川と山下との二ケ處。品川も、遊里にはあまり偏れてゐない。山下は、田舍者の婆と馬子の見物を主題にして、當時の賑はひを描いてゐる。洒落本の本格からいへば、まだ前半の品川八景、きほひと息子と、それに屋敷と三者を點出した遊里の素描、その道程の描寫を拾ふべきである。殆ど會話本位で、光景を打出してゐる所もいい。後半の山下は、寧ろ駄洒落に過ぎてゐる。が、當時

の見世物などの資料は多い。此の田舎者の江戸見物は、田舎者描寫の最初の方に屬し、方言も混へ、且つ江戸の眞中で、田舎者の半可通さが面白い。田舎者描寫流行の一で、これもあらう。後の滑稽本の「舊觀帖」などの先蹤である。次掲の「にたやまさどり」も、これと同じ意味の田舎者描寫である。無論逆には、江戸子作者の江戸自慢、さうして、讀者の江戸人に媚びた所もあらう。山下八景の問答のうち、（本卷九一頁八行目あたり）仁王門のお仁王云々の問答は、ちやうど是に似た小咄が、同時代にある。一寸、落がちがふ。此の洒落本の方は、「とら三郎あれはどこへござつた」とある。これは、お仁王を鬼王と聞き判じ、鬼王から團三郎を呼び起したが、それを間違へて、虎御前と團三郎とをごつちやにして、とら三郎というたのであらうと思ふ。小咄の方では、餘程分り易い。曰く、

田舎者二人づれにて江戸見物に出て、「作左どの、おみ樣は度々お江戸へお出やつて勝手はよく知りなさろ。まづ淺草さまへ連れて行きめされ。」「ナ、サ己に從つて來なさろよと先に立つ。程なく雷神門、「サア是が淺草樣だア申し、此の御門番はお雷さまと風の神樣だ。よく拜みなさろよ。」「ア、成程恐ろしげなアお眼ざしさまだアというて内へ入り、「コレ／＼是を拜みなさろ、此の御門番は又御仁王さまだア。」「チヤうつたまげたア、でかい御仁王さまだアもうし。こつちらのが御仁王樣ならば、あつちらのは、あんだんべいなア。」「ハテしれた事、團三郎さまだアはよ。」（安永九年、祠眞人序、「大きに御世話」所收の、仁王）

場所を、山下（寧ろ上野）と、いふのを變へて、淺草にしてゐるが、よく似てゐる。順序は、この洒落本「呼子鳥」が先であらう。――次に、をかしい事は、上野の仁王門は、文献には、明和九年大火にて燃え、其後再建なし、とあるが、これはどうした事だらう。本作、あれは中どう（堂）さ、と來て次の仁王門ゆゑ、上野と思へるが。次の「にたやまきどり」にも、上野の仁王の話がある。（がこれでは、燃えた事にしてゐる。）どういふ譯といふのであらうか。とにかく、此の「呼子鳥」、會話の連續で、息もつがせぬ、讀んでも面白きものである。

小本一冊、元表紙茶三方散。自序が一表より一裏まで。品川の本文が、別丁で一表より十四裏まで。やましたの本文が、別丁で一表より二十三の裏、末尾に版元の名がある　柱は、無地で、ウラの綴目の中央に丁數。此本、序以下、毎丁輪廓が無い。

五、當世真似山氣登里（にたやまきどり）　上戸菴醉人狂作　挿繪無落款　安永九、太郎月序

これも、田舍者の江戸見物である。作者は、大呑先生門人、上戸菴醉人狂（或は、醉人か）といふが、無論假名で、實氏名不詳。挿繪も自畫か、不詳。普通洒落本の二人通ひを追つてはゐるが、これは田舍の二人が、お山下、又は淺草などの見物。（この本では、上野の仁王門は、文献どほり明和九年

に燒けたといふやうにある。曰く、「此の七八年跡にやァ、でつかちねへ仁王門があり申た、おしい事をし申タ」とある。)淺草の團子茶屋で休んだはいいが、そこで田舍の戀を、得意げにいふのも、これがにたやまきどりか。とにかく遊里の臭は、全く無く、寧ろ洒落本を遊里小說の一體に限るならば、これは横道のものである。が、「田舍芝居」や「田舍談義」やと同系統で、江戸文壇へ田舍者又は田舍を貢ぎ入れた最初の方で、洒落本たるとたらざるとの如何に不拘、注目さるべき物である。山手馬鹿人(蜀山人)の「道中粹語錄」(安永年間)とは、先後何れとも、斷定出來ないが、天明七年の「田舍芝居」や、寬政二年の「田舍談義」やより古い事は、當然である。とにかく、前の「呼子鳥」と此の「にたやま」と、及び蜀山の「道中粹語錄」と、此の安永期、主に洒落本に田舍者又は田舍描寫が輸入せられたのは、如何なる譯か。然し無論「道中粹語錄」と、「呼子鳥」の後半と、此の「にたやま」とは、同一には論じられない。「道中粹語錄」は、新宿本の延長と見るが可であらう。すれば、江戸の舞臺で、田舍者を躍らせる、その洒落本延いては滑稽本の最初は、此の「呼子鳥」や「にたやま」だとも謂ひうる。さうして、「田舍芝居」や「田舍談義」は、「道中粹語錄」の遊里を、況田舍に延長したとも思へるし、又は、「にたやま」系のその本土――田舍を描寫したとも思へる。或は、事は、單なる江戸自慢の種(たね)として、江戸の舞臺で田舍者を躍らせたに過ぎぬ、此の「にたやま」などが、かも知れな

い。安永天明期の小咄本に多い、江戸見物の田舎者の咄は、同一の流行と見るべきのかも知れない。
とにかく、注目すべき諸作。

此本、小本一冊。序、一表より二裏、本文、三表より二十五表、二十五裏は餘白。插繪は、五裏・六表である。序文は、七行半丁、一行が十三字位。本文は、半丁七行、一行が十七字位。序以下、一重の輪郭がある。柱は、無地、丁數は、裏の綴目の下。

六、遊婦里會談　蓬萊山人歸橋作　插繪無落款　安永九年春の序

小本一冊、底本は、天明頃かの再摺本、一竹齋達竹の序一丁分を缺く。(此序は、山中共古氏著「砂拂」によりて、補ふ。)よりて元摺本を、底本再摺本によりて案ずるに、一竹齋の序文、別の一表より一裏。作者の自序、本文丁數の一表より二裏。(再摺本は、安永九ッのとしの春の年月を缺く。)本文は、三表より三十一(但し、底本は、此の丁數に限り誤つて、二十一としてゐる。)表まで。三十一裏は、餘白。元摺本には、跋があるのかも知れない。あらば、再摺本に至り、削つたのであらう。(他日、元摺本と嚴密に比較する機あらば、なほくはしく補記する所あらう。)插繪は、七裏・八表。作者の自序は、半丁六行、一行が十三字位。本文は、半丁七行、一行が二十字位。柱は、無地、丁數は、裏綴

目の下。毎丁、輪郭がある。底本、元表紙、茶の三方截、題簽は、一重の太い輪郭で、遊婦里會談完とあるが、手擦れてゐるから、寫眞には撮らなかつた。

此本も、歸橋本の例に同じく、自分を作中に入れてゐる。此の歸橋の許へ、船臥、馬遊、隣波、廓子が集り、色々の遊里の挿話をするのである。人物名が、深川、新宿、品川、吉原をもぢつてゐる事は、謂ふ迄もない。隣波の話の、襟を入れて、幽靈が來たと見せかけたのは、やがて、本集成第二卷の「契情實の卷」と同工で、恐らく「實の卷」は、これを延長したのであらう。廓子の金のやりくりも、細(こま)かい話ながら、當時の遊びの相が見えて面白い。馬遊の、枕探しの上(うへ)を行つたのは、恐れ入る。がこれでは、或は、新宿から抗議が出(で)はしなかつたか。船臥は、話の代りに、早速實行。それが凡て夢、と常套に結んでゐる。やはり面白さに於ては、此の作者は、一段と傑れてゐる。

七、辭蒙通人講釋　强異軒作　北尾重政口繪　安永九春の序

小本一冊、元表紙茶、三方截。此本、一切丁數を打たない。菅江の序、無丁一ノ表より二ノ裏、署名ともその二行目まで。但し、口繪半丁分は、その間に挾まり、無丁二の表を占む。自序は、菅江の序のつぎ、無丁二裏の三行目より無丁三ノ表裏にて終る。本文は、無丁にて、二十七丁半を費してゐる。

即ち序・自序とも計三十丁半。最後の半は、本文の末尾、三行半ばかりで、これが裏表紙に貼られてゐる。體裁等、ちよつと普通本とは變則である。序も自序も略同じく、六行半丁、一行は、十八九字位。本文は、普通より細字で、半丁が七行、一行が二十三字位。一切輪廓なく、柱も無地である。

此本、論議物の一で、中に會話を混へて、小說體を加味してゐる。本卷第一の「放蕩虛誕傳」に、似た所もある。あけぼしにしてよりつかず、女郎をぢらして此方へ向けさせる魂膽は、旣に虛誕傳にもある。（但しあの方は、餘り掛引すぎて、資本の取戻ばかりをいふが、これは、さうでもない。）金を出すばかりが、大通ではないが、さりとて金を吝むは、人外である。已惚禁物、但し當つて砕けろとも說く。虛誕傳ほどの掛引を敎へぬかはり、一片の遊女對客の情味が漂つてゐる。後半の體驗談は、小說體を爲して、面白く、最後の大通否定も、けだし眞理であらう。

偖、此の作者、强異軒は、强異見で、假名である。別人のやうに書いてはゐるが、或は、序者の朱樂菅江と同一人ではなからうか。

次に、此本、同版で三種本がある。イは、この辯蒙通人講釋。ロは、安永九の後間もなくの再摺改題と思はれて、廓中閨語なる一冊、無論同一版木の再使用で、異る所は、菅江の序の表、一行目の外題が、廓中閨語序とかはり、自序の末尾の、安永九ツのとし子の春の二行を削つてゐる。自序の末の

通人講釋といふは、その儘である。以下、本文全く同一。ハ、は、狸の穴這入と再び改題、版木を三度目使用のものである。卽ち、第一、辯蒙。第二、廓中。第三、狸である。然るに、新撰日本小說年表及びその後の近代日本文學大系本の小說年表、共に、その安永年間版の所に、廓中閨語と通人講釋とを載せ、さうして別物の如く扱つてゐるが、これは、自分の發見によりて、訂正されねばならぬ。（自說は、辯蒙と、廓中との二本、原本比較に據る。）さうして近代本の年表に、辯蒙通人講釋とした事はいいが、（朝倉本の新撰年表は、辯蒙の二字が無い。）その假名に、いひわけとしたのは、如何なる譯か。底本、紛れもなく、いりわりである。決していイにもわけにも讀めさうもない。なほ、新撰年表に、同安永年間版としてある「廓中契語　一冊　朱樂菅江」といふのは、如何なる本であらうか。此本、全く存在しないのではなからうか。卽ち、結局「廓中閨語」の事で、その序の朱樂菅江を、直ちに作者の如く記したものではあるまいか。卽ち此の一行は、當然抹殺されていいものと思ふ。廓中契語の朱樂本は、百年千年待つたとて、姿を見せぬのではあるまいか。ともあれ、あらゆる年表書目に、左の斷定だけは眞實である。

○辯蒙（いりわり）通人講釋　一　强異軒　北尾重政畫　安永九年

後、「廓中閨語」と改題再摺。後、再び「狸の穴這入」と改題、三摺。

爲念。「花折紙」には、廓中契語、菅江として、この契語本、朱樂菅江の存在を認めてゐる。がこれは、「花折紙」の誤記で、(花折紙の誤記は、他にも例がある。)結局「閨語」本を謂うたのであらう。無論「閨語」本の所載はない。菅江の作としたのも、序者の菅江と强異軒とを同一と見たか、又は、序者の菅江ばかりをうつかり誌したのかも知れない。或は、「花折紙」の編者は、强異軒が菅江の別名たる事を知つてゐて、「閨語」を書かうとして、誤記したのかも知れない。

八、鯉池全盛噺(こいのいけ)　雲樂山人作　老蘭畫　天明二年初春序

此本も、江戸自慢物の一である。鯉池は、鴻池で、大阪の富豪を拉し來つて、先には深川、今度は吉原と新宿で遊ばせ、共に虐待の目に遇はせて、結局上方通りにはいかぬ、所に、江戸作者が鼻うごめかしてゐる。かゝる實說、烟はどもあつたか否かは知らない。最後、愛宕の天狗にごまかしてゐる。三代先の鴻池の失敗、それも今更らしく說かれ、今度の鴻池も、この態(ざま)。今度のは、音羽屋(菊五郎)に、悴が厄介になつた縁に、山木座(結城座)を取り立てようといふ爲に來た、かうした實說が多少は、あつたらしく思へる。大阪に於ける角力取との意地の競べあひも、當時逸話として傳へられたものであらう。今度の鴻池、深川での遊びは書かれてゐない、が、取卷の雲安の言葉では、やはり冴え

なかつたらう。吉原でも、又盃から失敗、宿では、（宿にもである。）取卷共ばかり精寫されて、鴻池はかすれてゐるが、末段の告白が振つてゐる。いしやの雲安は、作者の名からの思ひつきであらう。田舍者と大阪者との差はあれ、江戸を自慢してゐる事は、「呼子鳥」や「にたやま」と似たりである。

此本、小本一册、元表紙茶、三方截。元題簽は、子持輪廓で紅の色をつけ、鯉池全盛噺　全と行書體にある。が破損もあつたから、寫眞には撮らなかつた。自序、一表より五裏まで。本文は、遶丁で、改めて四表より始まる。然るに、五の次に無丁の一丁分があり、此間に、挿繪の見返しがある。即ち五裏・無丁表が挿繪。無丁裏より更に本文が續き、三十六裏で終つてゐる。即ち全丁數は、自序が五。本文は、三丁を缺いた三十六、よつて正味は三十三丁、それに無丁の一丁分で、計三十四。序の五とも で總計三十九丁である。自序、半丁五行、一行十一字位。本文は、半丁七行、一行は、むらであつて、本の前半は十五字位、後半は十九字位。柱は、自序より本文の十六までが、上は無地で、下に丁數。それ以下は、柱は無地で、ウラの綴目の下に丁數を打つ。自序のみ輪廓あつて、他はいゝいゝ無い。畫家の老蘭といふのは、無論花魁の宛字で、假名。不詳であるが、春章に似てゐる。

九、其あむか　中橋散人作　挿繪ナシ　午（天明六年歟）のはつ春序

年代、序に午のはつ春とあつて、明らかでは無いが、年表類のいふ如く、天明六の午であらう。

小本一冊、元表紙不詳。序文、序(丁數を打たず、その部分に序とある。)の表裏一丁、本文、二(一を缺く。一は、序の一丁を斥さう。)表より二十裏まで。全丁數、二十。丁數は、柱の下部、柱の上部は、文字が無い。全部、輪廓が無い。序は、半丁五行、一行は、十字位。ゝの讀點を打つ。本文は、半丁が七行、一行は、十三字位、ゝの讀點を打つてゐる。異色のある作で、其大概は、地の文ともいふべく、其二階以下、地の文は稀で、會話のとりやりで、一場の光景、彼此情の交叉を描破しようと力めてゐる。純脚本ではないが、それに近い。內容の作は、それ程でもない、妓二人と客との三角關係である。がさすがに、齒切れのいゝ、辰巳の女の啖呵は、聞かれる。二三、その啖呵に、現代の田舍者たる我々には分らない所もあるが、元のまゝとした。

十、虛實情夜櫻　庭鶯作　口繪無落款　申(天明八年歟)のはつ春序

序に、申とあつて、明記はないが、從來謂ふ如く、天明八年のであらう。小本一冊、元表紙不詳。自序、一表より三表。三裏・四表、口繪。四裏は、目錄。本文、五表より三十四、次の丁は、三十五ノ三十八とあつて、三丁分飛ぶ。以下、四十三表にて終り、四十三裏より四十四裏まで跋。飛丁三丁

分を引き、全四十一丁である。柱は、無地、丁數は、裏綴目の下。毎丁、輪廓がある。自序は、五行半丁、一行は、十三字位。本文、八行半丁、一行は、十九字位、〇の讀點を打つ。然し此の讀點は、不揃である、打つてない所の方が多い、本飜刻本の如しである。

內容は、大分入り組んでゐる。言次郎と銀蝶と、本名新といふ六三郎。言次郎の馴染は、花哥。銀蝶は、東路。六三郎は、二人に無理に誘はれて出かける。いたづらを三人で計畫する。花哥・東路も同じ家の者で、花哥の姉女郎に、花(華)町といふのがある。この花町・花哥と、東路の三人は、仲がよいが、それと仲の惡いので、同じ家に、武藏野といふ妓がある。この武藏野、此頃も花町の客を奪つて、花町をして意氣揚らしめぬといふ噂。六三郎を、吃(どもり)の野暮侍にしたてて、武藏野に逢はしめ、武藏野が嫌ふのを、花町の客を武藏野が奪つた傳で、花町に奪はさせうとする、さうした計畫で登る。六三郎の狂言、巧く行つて、初めは、計畫通り武藏野に振られた。その隣座敷で、花哥と花町と東路と三女の述懷談。花哥は、自分ゆゑ、父親を人手にかからせ殺した、言三郎とは、以前からの結緣。花町は、もと深川にゐたが、その頃馴染んだ新さんといふ客、勘當されて消息不通、氣欝の保養かた〴〵、此の吉原の武藏屋へ來た。が、元の深川の家からも新さんの沙汰はなし、愈々浮世が味氣ないといふ。東路も身の上を話す。東路の話は、銀蝶が來て、中絕する。そのあと、六三郎、本性を現は

して、メリヤスの爪彈。折から隣の座敷で、厭世自殺しかかつた花町を助ける、花町の戀人新さんとは、六三郎の事であつた。奇遇に驚く暇もなく、武藏野が飜然悟つて來かかる足音に、早速別れて元の座敷。武藏野も、六三郎に打つて變つて執心、指までも切る。たうとう、三人の思はく違ひで、六までが武藏野の俘となり、肝心の奇遇を喜んだ花町は、隣で溜息。物語の山で切つてゐる。後編があるやうに書かれてゐるが、出ずに終つたらう。とにかく、天明本としては、ちよつと風變りな、變哲もない技巧に富んだ作である。それだけ、遊びの教科書であつた洒落本以外、傳奇的傾向を多量に持つた洒落本となつたのである。

十一、青樓五ッ雁金　梅月堂梶人作　礫川亭ゑひり插繪　天明中（八年）春刊

この本及び次掲の「染拔五所紋」とは、前後編を爲してゐる。五人男物の一である。雁金文七と妓の清川、その文七をとりまく五人男の中の三人。他の一人雷庄九郎、清川を強ひてゐる侍角左衞門の取卷で、清川や文七に辛く當る。とそれが庄九郎自ら書く機で、誠は、文七の味方。清川の入墨も消さなくて濟ませ、切らせた指も、仕掛があつた。外の三人も心解け、惡だと思ひ込んで振つてゐた庄九郎の敵妓も馴染むといつた筋。獨り此作によつて酷使されたのは、角左衞門である。

中本一冊。元表紙不詳。自序、一表より三表。三裏は、目錄。以下別丁にて本文、一表より四十表まで。四十裏より四十一裏まで、浮粱軒の跋形式のもの。但し四十、四十一は、丁數を打つてゐない。四表の半丁分は、挿繪の初めで、文七と朋輩妓との隙見の體。四裏・五表の見返しは、庄九郎と淸川。畫は、珍らしく礫川亭永理。ちやうど錦繪の三枚續の如き、一丁半に亘る挿繪の趣向である。柱、下に丁數。全丁、輪廓がある。序は、半丁が六行、一行は、十一字位、但し此の序文、輪廓の中に、更に輪廓があり、序文文句の圍りは、本文初めに凸版で挿入したやうに、安、布袋の袋と軍配、雁金の三ッ番ひの紋、雷を意味した太鼓の面の二重丸に三つ巴のやうな紋、櫂のちがへのやうな物の下に千の字の千右衛門の紋と、これをとり〴〵散らしてゐる。罫は無い。目錄は、五行の罫を引く。本文、半丁が九行、一行は、二十三字位。跋は、罫なく六行半丁、一行は十五字位、○の讀點を打つてゐる。

作者の梅月堂梶人、は、後の初代梅暮里谷峨の事である。此の事、從來何書にも無い事であるが、それは確實な話。文政五年版の越前屋長次郎（爲永春水）刊の人情本「貞操小笹の雪」―谷峨作―初編の版元靑林堂主人（春水）の序文に、此作以前の谷峨の作として、此の五ッ雁金などを擧げてゐるからである。成程、梅月堂梶人は、梅暮里谷峨の初號としては、字面からも由緣がある。くはしくは、拙著月刊「江戸文學硏究」第一卷第三冊を參照の事。

十二、染抜五所紋　梅月堂梶人作　挿絵無落款　戌（寛政二年）孟春序

五ッ雁金の後編である。角左衛門に請出される事となつて、前半、清川の嘆き、清川養母の黠出もぜひ無くてはならない敵役。すつかり情話物の型である。後半の初め、駕籠で行く途中、五人男に救はれた、と見るのが、文七清川房中の夢。友だちの四人や、朋輩妓たち寄り集り、二人を慰めあつてゐる所へ、角左衛門不意と立ち歸る、騒ぎ、といふので、幕を切つた。然り、すつかり情話を骨子に多分にお芝居式である。前編と後編と、まだ續編を書く積りでゐた作者の言葉と、是等からも、此の谷峩（梶人）の天明末寛政初の洒落本は、すつかり物語式、しかも芝居のやうな興味を織り込んでゐる。洒落本の從來が、一局部の精寫で、魂膽をいふに止まつてゐたのを、人物の既往や素性、家庭まで描いて、一篇の哀史を成す、此の後の人情本傾向となさしめた、新機軸といはうか、洒落本の一轉化といはうか、又は墮落といはうか、漸くさうした兆が見えかけた頃の作。この一轉換を、寛政十年の「二筋道」三部作其他に於て、谷峩は十分成績を收めてゐるが、その前驅となつたのは、此の二冊前後編の作である。

中本一冊、元表紙、黒褐色の三方斫込。丁數は、自叙、一表より三表。三裏・四表は、口繪。四裏は、

目錄。本文、追丁にて五表より三十二裏まで。六裏・七表は、挿繪。此の描線、皮肉な所がある。三十三表は、作者の口上。三十三裏は、餘白。自跋は、三十四表より三十六表。その裏餘白。柱は、下に丁数。毎丁輪廓がある。序は、七行半丁、一行は、十一字位、、の讀點を打つ。本文は、半丁九行、十八字位一行。跋は、大字で、五行半丁、一行は、七字位である。

十三、傾城眞之心（かただぎ）　作者名ナシ 口繪無落款　不詳（寛政二年と云）

小本一冊。元表紙、靑の三方截。丁數は、自序、序の無丁一表より二表まで。目錄、序の無丁二裏より同三表まで。以上、自序・目錄とも、罫を引く。次ぎの一丁半分は、口繪である。本文は、別丁の（以下、一二の丁附あり。）一表より三十四裏まで。自跋、三十五の一丁。計、三十九丁である。自序は、六行半丁、一行は、十五字位。本文は、八行半丁、一行は二十一字位。自跋は、罫を引き五行、一行は、十二三字。毎丁、輪廓がある。

此本、底本は、作者名も、序其他に年月の記載も、自跋の署名も、無い。あらゆる年表・書目に、作者名を記さないのも理。但し普通に、此本、寛政二年といふは、如何なる譯か。姑らく謂ふ所に從つて、寛政二年とする。成程、天明には遡らない。內容の、人情噺風、殊に第一回には、妓の出生を、

その親兄弟貧苦の様を描いた、義太夫「堀川」のやうな氣分を出してゐるのは、その内容からは、寧ろ「二筋道」以後の刊と見てもいい位ゐである。とにかく果して寛政二年であるなれば、梅月堂梶人の前二本と同じく、此頃既に、洒落本に情話傾向著しい證左である。

此の本に、異種がある。版木同一、唯、丁數の打ち方が、此の異種本は、自序のところ、序三、序四とあつて、以下、本文の別丁一までに、序三、序四、序五、序六と數字を入れた事である。然るに、序一序二は之を缺く。いきなり自序の序三からである。此の異種本から考へれば、序（他人の）が二丁分あり、それが序一序二であるべきなのが、事情により製本間際に削つたのか、とも思へる。さうして本集成の底本は、序の下に、全く數字の記入が無いから、これは後摺本で、從つて序の下の數字を削つたかと思へる。卽ちもし、自序以外序二丁を製本した物の存在を、假想すれば、A、序及自序の完き本。B、序二丁を削り、序三より製本した本。C、自序及び口繪に、丁附、序の下の數字を削り、摺つた本。と此の三種になる。此中のAは、未見であるが、――或は初めから、存在しないのかも知れない。――初摺本。Bは、その落丁本。Cは、序二丁分を削り、板木に手を入れた再摺本といふ譯になる。が私としては、Aは全く存在がなく、當初がBであり、これが初摺本、本集成底本のは、再摺本かと思ふ。

かうした序二丁の缺とか、作者名の何れにもなき事、又は刊記のなき事、及び作の版元の記載のない事などは、ちやうど寛政二年（此の作假定の年と同じ）冬の、好色本其他の禁令によつたものではなからうか。とすれば、寛政二年冬の出版である。或は、逆に此の體裁から、好色本禁の寛政二年冬頃だとも思へる。

さて、本稿底本、柱は、一切無地、丁數は、裏綴目の下で、自序は、序、本文は、心一（心二など）。自跋は、跋三十五とある。

作は、夕霧・伊左衛門に名を借り、夕霧の出自、里に入つてからの夕霧のうぶな様子、二人の馴れそめ、伊左衛門の落魄、それに立てる夕霧の實情。今まで敵と思つた阿波大盡が、伊左衛門の親と分り、夕霧の身請も濟んだ粋な取り捌き。此頃の洒落本に時折見受ける、此の敵に廻つたのが、こゝでは親だが、叔父御だつたとか、又は昔、息子の親に恩になつた侍客で、息子に添はせようとして、妓の實情試驗のため入り込んでゐたとか、散々息子と妓を苦しめ、最後、二人の命も危ない場合になつて、種をあかしてどんでん返し、芽出度し〳〵に終らせる、――かうした趣向は、此の頃から榮えて、享和本あたりへまである。芝居の影響がある、といふべきか。

十四、風俗通　松風亭如琴作　おきな齋挿繪　寛政十二年序

小本一冊。元表紙、うす日な帶藍黑色三方截、題簽は、一重の輪廓に、大磯新話 風俗通 完、此の題簽に、うすき靑の色を引く。丁數は、扉、一表。自序、一裏より三表。目錄、三裏。本文は、別丁一表より五十二裏。跋は、五十三の表裏。跋は、司馬（芝）晉交である。挿繪は、本文一裏・二表の見返し、おきな齋とは、不詳。丁數は、裏綴目の下、柱は無地である。自序と跋と罫を引き、他凡て輪廓がある。序文は、六行半丁、一行は、十一字位、ゝの讀點を打つ。本文は、半丁九行、一行は、二十字位。跋は、半丁六行、一行は十七字位。此頃の深川本としては、佳作の方であらう。

内容。第一は、お染のゐる妓家の體。お染に逢ひにきた母との會話、半九郎を蔭に出してゐる。第二、半可の文長とお染、文長がごまかされる。附たり、深川の情調を濃くするためのあしらひ、船宿の男と妓との私語。第三、半九郎とお染の口說。第四、新交と東吾の登樓、この新交あたりに、此本の跋者の晉交をかけて、作者の體驗を混へてゐよう。次ぎ、久兵衛とお染の床。間もなくお染の脫出、半九郎とすつかり「明烏」式の斷落、果は自害といふのを、助けるのが作者の如琴、それが夢だつたと、結んでゐる。如琴とは、誰かは不詳であるが、或は、跋の晉交自身ではなからうか。司馬（芝）晉

交なれば、寛政十一年に、「品川楊枝」の作もある。

十五、比翼紫　宇田樂庵嬉丸作 挿繪無落款　寛政辛酉（享和元年）春序

品川本の一。小本一册、元表紙不詳。丁數、扉、一表。自序、一裏より三表まで、罫を引く。目錄、三裏・四表。口繪、四裏。本文、追丁にて、五表より四十表。自跋、四十裏より四十一裏。計、四十一丁。挿繪は、六裏・七表の見返し。柱は、無地、丁數は、裏綴目の下。毎丁、輪廓がある。序文、六行半丁、一行は、十一字位、。の讀點を打つ。本文、半丁八行、一行は、十九字位、、の讀點を打つ。跋は、六行半丁、一行は、六字位の大字。毎丁輪廓がある。作者の宇田樂庵は、不詳、嬉丸と同人たる事は、本書自序の示す如しである。此の作名の下に、別に一本、文化三年版の今昔物語夜慶話、小本一册なるものがあるが、これは、京傳の「四十八手」の、最初四丁分を改删しただけの僞版本であるから、問題にはならない。此の男の創作としては、此の「比翼紫」の一册だけだと思ふ。

（此の「夜慶話に」就ては、嘗て拙著月刊「江戸軟派研究」及び、舊著「江戸軟文學考異」などに詳述したから、略く。）

此の「比翼紫」は、品川本で、僞作のある作者としては、中々巧緻に近い作である。人物は、長兵

衛、權八、小紫と、比翼塚の人名を借りてはゐるが、それを凡て洒落本の今風に代へてゐるから面白い。話の筋も、權八說話を追つてゐるが、それも、どうやら洒落本の型に箝つてゐる。第一、鈴ヶ森。第二、品川遊里の、此の順序も、品川本だけに自然である。權八を敵と狙ふ筈の介市も、こゝでは、權八と小紫を張りあふ相手とせられてゐる。介市兄の介之進も、こゝでは小紫の朋輩女郎に手玉にとられる。作り替のための興味、さうした事が、古いのにもあるが、格別、當時の享和頃の洒落本に多い。當時の讀者には、定めし受けた事であらう。これが一種の流行でもあつたらう。忠臣藏の摸擬作もある。曾我もある。五人男物もある。時代と世話と、交々ある。ましてや人名を單に借りた、淨るり系芝居系の人物名の活躍は、頗る多い。小紫と權八、これも當然無ければならない筈だつた。先には、同年頃の「廓臍競」（本集成第一卷）があり、こゝにまた「比翼紫」が現れたのである。然るに此の「比翼紫」、作爲の跡は、ありながらに、品川情調は、割に出てゐる。見直して讀んでやるべき作の一であらう。

十六、廓の櫻　梅暮里谷峩作　口繪無落款　酉（享和元年）初春序

中本一册。底本は初摺本、元表紙は、三方裁の水色の更紗表紙。元題簽は、子持輪廓内に、言告鳥二篇

廓之櫻　全。丁數は、自序、一表より二表。口繪、二裏・三表。目錄、三裏。本文、追丁の四表より四十裏まで。谷峩著目錄、丁數を打たずして、末尾に一丁分。序は、八行半丁、一行は、十五字位、○の讀點を打つ。本文、半丁八行、一行は、廿六字位、讀點なし。柱は、上に櫻、下に丁數。毎丁、輪廓がある。第二卷所收の言告鳥の二篇、伊久と介六、揚卷と人名だけを借りた、結局、好くと好かぬの客と妓との三角關係である。

嫌はれる伊久を、上方者とした所にも、江戸自慢の氣味がある。「お前方に好かれるにハ、いかにも東訛りでなけりやならぬ」と伊久をして告白もさせてゐる。一旦歸つて二度目、介六を匿したと氣付いてなほ口說き、介とは、雪と墨、誰もとり違へるものはないと、本當の愛想を盡かされた。讀んでゐると、却つて伊久がかはゆくなる、それ程此の邊の描寫は巧い。二立目、お定が揚卷にやり込められるのは尤も、その揚卷が、新兵衛の情深い詞ゆゑに、若紫に義理立てる。三立目、揚卷が、介へ知つてかかつての愛想盡し、腹で泣く仕科、介のムキになつての怒り。四立目、介六の出あひ、凡て芝居の世話物、常套々々。現に、叙述の體裁も、殆ど脚本體である。すつかり首尾を叙述する、説話式になつて、昔の洒落本の、一斷面の描寫ではない。然し此の描寫ぶり、谷峩が愈々得意、人情本以前の人情本として、流行もした。讀者の方にも、善い意味にも惡い意味にも迎へた責任はある。

十七、夢之盜汗　谷峩作 口繪無落款　酉（享和元）の初春序

小本一冊。元表紙、帶紅の茶、三方裁。元題簽、子持輸廓で、契情 買中 夢之盜汗　全とある。丁數、自序、一表より二表。口繪、二裏より三表。目錄、三裏。本文は、四表より三十五表まで、三十五裏は、餘白。次ぎ、無丁にて谷峩著の目錄一丁分。序文は、半丁六行、一行は十六字位。本文は、八行半丁、一行は二十字位。柱は、上に夢、下は餘白。丁數は、裏綴目の下。全部、輪廓がある。お妻・八郎兵衞に名を借りた、情話物。第一囘、八郎兵衞とけん七との、古着賣買の幕を一寸出したのも、首尾叙述の、說話式となつてゐる。第二囘の、妻琴、新造の妻戸、遊草の連と詐り上つた氣樂、誠は八郎兵衞の連のけん七、そのけん七が、遊草の連と詐り、遊草へ贈る妻琴の手紙を預る所、すつかりお芝居。此の手紙が、次囘、八郎兵衞が妻琴を責める材料となるのである。その伏線として、八郎兵衞が屆ける自作の洒落本も面白い。遊草と八郎兵衞と、妻琴との三角を書いたものである、作中の作。その實、妻琴は、遊草は、昔の馴染故、義理一ぺんの心に過ぎぬ。それも朋輩の科戸がやかましくいふからである。科戸は、八郎兵衞に反感がある。けん七、二囘目の登場、八郎兵衞と一緒になり、化の皮を顯はす所は、平凡だが面白い。八郎兵衞と妻琴との和解も自然だ。敵手の心を探る計策、ちと冗

いが、情話ながら、稍洒落本の本格らしい所もある。けん七（氣樂）が、最もよく描けてゐる。

十八、妓情返夢解　谷峩作　口繪長喜畫　戌（享和二年）初春序

中本一册。夢汗の二篇。序、一表より二表。二裏・三四表、口繪。（三は、三四として、一丁にしてゐる。）三四ノ裏、目錄。本文、五表より四十九裏まで、以上、三四の一丁あれば、誠は四十八丁。末尾に、谷峩著の、中本體裁の目錄一丁と、戌新版の小本體裁（中本大に刷る）の目錄一丁分を附す。序は、半丁六行、一行は十六字位、本文は八行半丁、一行は、二十七字位。柱は、上にユメ（ユメともある）、下に丁數。全部に輪廓がある。初めの、八郎兵衞と妻琴、內外の苦勞からの愚痴も、手に入つたもの。（つまらぬと思ひながら、かういふものを書かせては、京傳の穿ち本位以外、花柳情話の意味で、谷峩は、一頭地を拔く。）氣樂の無駄話は、相變らず悲中の喜。八郎兵衞が昔馴染の藝者のお富の闖入と、よく描け、それが夢と落ちつく。秀我といふのが現れ、これが、作者谷峩の影を多分に持たせたやうにも見える。作者のほゝ笑みも窺はれる。いい役廻りである。未解決に終つた所は、まだ人情本となり切らぬ所が、流石に見えてよい。九重といふ妻琴の朋輩も、割合にはつきり描かれてゐる。

十九、南門鼠歸（みなとねづみがへし）　蘆屋艷二作　北溪口繪　戌（享和二年）刊

小本一冊。丁數、扉、一表。淸々老人序、一裏より三表。口繪、三裏・無丁表。附言、無丁裏。以上、四丁分。本文、別丁にて一表より三十二表まで、內、三十一丁は缺丁（落丁に非ず）。再叙、三十二裏・無丁表の一丁分。無丁裏は、出版目錄。以上、序の四と、缺丁一を除き三十二と計三十六丁。序は、本卷複刻の如き體裁にて、半丁五行、一行は、十四字位、〻の讀點を打つ。附言は、八行の罫、一行は、二十字位、これに「南門鼠」が絕版禁止となつた意味がある。本文は、八行半丁、一行は十七字位、初め〻の讀點、半ばより●の讀點を打つ。（本複刻は、、に代ふ。）再叙、罫を引き六行、一行は、十字位。柱は、無地。每丁、輪廓がある。

此本、末期本では、群を拔いた氣持のよい作である。叙述の冗くないのもうれしく、情話となつてゐず、情話かと思つてゐると、さに非ず、末段、女の心變り（寧ろこれを常套として作者は、描く。つまり客に向ける當座の手管、これを眞に受けるが馬鹿。）によつて、急轉直下、がそれを又、夢だとして、茶屋男の「オ目が覺めましたか」に、兩樣の意をかけて、大尾とした所、感心するのが馬鹿だらうか。人名は、小糸佐七と情話中の人名を借りてゐるが、氣分は、すつかり洒落本、しかも命題ど

ほりの南國情調が、巧みに盛られ、殊に小糸の行動と言葉とには、當時の品川の手取りは、斯うもあらうかと迄描破されてゐる。唯、眼につくのは、此本、稍、他に較べて、エロチツクな描寫に平氣である事である。（勿論これは、本卷では、削つたが。）これは、小糸の莫連を現はすための必要でもあらうし、情とか眞實以外、欲情の轉換に徹底した女郎としては、これが當然であつたらう。因みにいふ、此の本、末期本としては、稀本の中でもある。谷峨の作の甘い冗さに較べて、こゝに至つて快然とした。艶二は、もつと稱揚せらるべき作家といふ事が、此の一作でも分らう。艶二は、例の如く全輪廓不詳の男であるが、此本の跋にあれば、葵丘の邊に住んだ事は、慥か。（一説には品川に住すともある。）葵丘は、赤坂溜池のであらう。因みに、此の作名が、己惚の代名詞、艶屋と、艶二郎とをくつつけたもので、似てはゐるが、「疇昔の茶唐」の艶示樸と別人であることは、自分が既にいひ陳した事である。

二十、通神藏　小金あつ丸作　北齋口繪（享和二年刊）

仇手本（本集成第二卷所收）の後編である。本文初めには、通新戯ともあるが、本外題は、仇手本後編通神藏である。袋も顯簽もしかくあるからである。丁數。自序、子持輪廓のうちに、本複刻の體裁に罫を引き、序一表より序二裏。まぼゆきの序、同じく序三表より序四裏まで。五・六・七は缺丁。八表

より（九缺丁）十一表まで口繪。十一裏、附言。本文、別の一表より三十二裏まで。自跋、跋表・同裏の一丁。序口繪の七丁分、本文三十二、跋一、計四十丁。柱は、無地。丁數は、裏綴目の下で、初の四丁は、序一（序二）の體裁、アトは數字のみ。三十二の一丁は、三十二大尾、跋は、跋とのみある。自序、半丁六行、一行は、十五字位。序、六行半丁、一行は十七字位。附言、罫を引き八行半丁、一行は二十一字位。跋は、表、八行、裏は四行、と二行分の印（アトは餘白）。一行、十五字位から二十字位。每丁、輪廓がある。

此作、忠臣藏の擬作、それを洒落本の世界に書き直したもの、仇手本の續、その七段目よりである。凡てその擬作化が、面白く、殊に九太夫の床下や、又は小浪道行の段、九段目の大星屋敷など、興味がある。終りを高野屋の煤はきとし、高野屋を胴上げに濟ませ、夜が明けたら大勢で、品川へ年忘れにも面白い。普通の滑稽本にも、人情本にも、合卷にも無い、特殊の世界。下らぬながらに、作者の苦心がある。これの摸倣が、文政期、東西散人の「安名手本執心廓」であらう。

二十一、深淵情　楓茱作　口繪挿繪無落款　享和三年望春刊

中本一冊。元表紙、茶の三方截。元題簽、廻覽奇談 深淵情 □（全なりや完なりや、不詳）、子持輪廓

付。丁數、序、罫を引き、一表より二表。心底、二裏・三表。胸中、三裏・四表。凡例、四裏。羅廓島之記、五表・五裏。平安島之記、六表・六裏。黒主云……不入云、上ノ七表。口繪、上ノ七裏。以下本文、七表（卽ち第七丁は複）より四十八裏、跋の如き「金の姿は千變萬化」以下の文字で、四十九の表裏。但し、十一、三十五の二丁は複丁となつてゐる。されば、第七丁の複一、序文以下本文四十九と本文複丁の二、計五十二丁。挿繪、十二ノ裏、本文の細字の續きあるもの。柱は、無地、丁數は、裏綴目の下。毎丁輪廓がある。序文、六行の罫にて、一行十三字位、○の讀點を打つ。心底は、罫なく八行、一行十六字位、○の讀點を打つ。胸中、心底と同行、字詰略同じ。羅廓島之記以下、また同じ。本文、九行半丁、一行は、二十字位。此の本文、人名と會話との分界、不たしかで、はづかに人名の文字だけを、小さくしてゐる、が複刻は、略（ほゞ）原本の如くにしておいた。人名を六號活字とし、會話の初めに片假名の來るのは、人名と少し間を取る事にした。原本では、此の區別はない。

此本、冗漫ではあるが、享和期本としては、稍異色がある。卽ち支那趣味の多い事。安永頃に流行した支那趣味の復活との如くに見える。成程、遊女を天人とし、天人島への探檢とした構想は、これまでありさうに思へたが、恐らくは、此の享和の深淵情が、唯一であらう。――酒落本としては。

其一は、靜風清矣一瓢の天人の噂。こゝでは、靜風が先輩である。（此の其一あたり、讀點の意味で、

原本は一を用ひてゐる。此の複刻は、ヽを以てした。）其二は、羅廓島（吉原を斥す）へ出向く靜風。其三は、茶屋での話。其四は、鶴跡樓での蛾山と清奕。其次、蛾山の馴染客大里との借りる貸さぬのもめ事になる。白老母（やりて）が先づ清奕に交渉して、理窟に負け、若者も負け、こゝもと、大里の席と清奕の席と掛合になる。大里の名代のかみの千も、やりこめられるが、トド、清奕がいふには、今宵は、蛾山は俺が女房、左程にほしくば、夜の明るまで百兩だ、と、甘いと見くびつたがとんでも無い事。羅廓島へ初見參といふには似合はぬ啖呵のきり様、こゝもと泉鏡花の作にでもありさうな意氣込。興味のヤマへ來た。たうとう、大盡の大里も清奕が席へ來て、即金百兩投げ出す。と今度は、蛾山が、故障をいひ出す。わたしの耻は、ぬし（大里にとうはべではいふが、腹は、初會の清奕に向いてゐる。）の耻と、大里をお爲ごかしにし、百兩で買はせもせず、賣らせもせぬ。結局、折角の交渉も不調。折から曉の鐘、かみの千が行司になつて、此の金を遣手に預けて、此のいきさつは、後篇の會にしやせう、といふので、終る。その後篇は、出ずに終つたらう。

讀みづらいが、辛抱して讀めば、面白い作である。

なほ、此本の刊行年代、從來、如何なる年表書目も、これを安永八年版に取扱つてゐる。（洒落本書目も新撰年表も、近代日本文學の年表も其他も）これは、全くの誤、享和三年版である。これは、

全く自分の手によつての發見であるが、それも、此の本原本の見返しを獲たに據る。見返しは、本複刻本の如く、明らかに享和三とある。然るに、從來の凡てが、(その最初は、蓜雪氏であらう。他は、凡てその傳か)安永八年と見たのは、序文に、已亥とある、この已亥を、己亥と見て、その干支に當る安永八年としたのであらう。無理もない事である。然るに、今此の見返し(はじめ袋かとも思つたが、見返しと見る方が、間違ないらしい。)發見によつて、問題は、全く簡單である。唯、殘る疑問は、享和三年が、己亥でない事である。享和三年は、亥は亥でも、癸亥である。癸亥とあるべきを、この序文では、誤つたと見たい。發音は、何れもキである。決して、享和三年に至つての再摺、それを新物らしく見せかけたのではない。

私の此の發見も、一に、此の見返しの入手である。古典の取扱には、此の種の事往々あらう。既成の年表書目類が、絶對に信用出來ぬ例は、こゝにもある。要は、原本本位である。この見返しは、此の「深淵情」の原本に、當初から附いてゐなかつた。原本の入手は、昭和二年九月、見返しだけの入手は、昭和四年九月である。丁度二年の經過で、めぐりあつた。無論同一手澤本の原本と見返しではない。恥をいはなければ分らないが、本卷の編輯は、昨年(昭和四年)六月に終り、八月より初校が出始めた。その時は、無論私も、從來の定說同樣、此の「深淵情」を安永八年とした。已亥を己亥と

推定し、此の干支では、安永八年か、天保十年であるから、安永とするは、常識である。唯、原本を讀んで、その冗さに、稍末期本の臭がするとは思つた。が、唐趣味の摸倣からは、安永を是認した。(豈圖らんや、本集成既刻の末期本にも、ちよい〳〵序跋などに現れてゐるやうに、唐趣味は、安永頃と限らない、寛政末享和にもあつた。享和以後の滑稽本にも、可なりあることは、無論。)そのため此本、「南客先生文集」の次に編入、その校正は、既に、八月に出てゐた。幸はひその頃の初校は、まだ「遊婦里會談」までくらゐだつた。その再校目の九月頃に、此の見返しだけを入手した。事は、その月の、東京本吉からの目錄で、「廓中掃除」を注文した。とその本が來たが、その本後の見返しに、此の「深淵情」の見返しが、晏如として貼られてあつた。私は、眞に驚いた。初めは、袋かと思つたが、體裁上、どうも見返しである。なほ、此の複刻には、現はさなかつたが、楓南仁賀止から廻覽へかけて、圓形に天人街の棟並びの繪が、黄搯となつて現はれてゐた。共他の體裁は、一切原物通り。偶然、書體も一致した。原物も明朝體であつた。「廓中掃除」は、小本、これは中本のであるから、裾だけ切れてゐた。早速、御手の物の修理を施して、「深淵情」原本の前見返しに貼りつけた。こゝで、以上の斷定を得た譯である。その後、三校目の「深淵情」を假一頁の假四二頁として、組置かせ、本集成製本通り、「通神藏」の次へ、組入れた事は謂ふ迄もない。そのため、三百頁頃までは、頁が狂つ

たのである。と内輪話は、これで止めるが、此の一例を以てしても、古本の年代は、迂濶に序文の干支や支ぐらゐでは、推定はしても、斷定は出來ない。もし此の見返しが私の眼に觸れなかつたら、本吉の「廓中掃除」を買ふ氣にならなかつたら、（それは、すでに第一卷に刻して、不用ではあつたが）まだ此の發見は出來なかつたのかも知れない。平氣で、安永版とし、平氣で安永の唐趣味流行の一だとしたかも知れない。安永三年「和莊兵衛」などに、よそへて說いたかも知れない。畏るべしである。

二十二、傾城買杓子規　風月樓一枝作 自畫　享和四年（文化元年）孟春序

稿本である。小本一冊、元表紙茶三方截。自叙、無丁一表より同三表、五行の罫を引く。一行、十字位、〻の讀點を打つ。口繪、無丁三裏・同四表。目錄、無丁四裏。本文、二十八丁。計、序とも三十二丁。本文は、八行半丁、一行は十五字位。柱、無地。全部に丁數を打つてゐない。輪廓は、一表以下、全部に亘つてある。作者、全く不詳。

家藏本の稿本酒落本のうち、准刊本と認めていいと思ふ、則ち佳作の方のものである。稿本には、由來つまらないのが多いからである。內容、共一は、一枝を訪れる榮三郎と南幸の二人。里の噂から三人で出かける。共二は、三人遊びの樣子、就中、一枝事源は、菊の井としげるが、かねて馴染んだ

他の女が見つけ、歸りを待ちぶせ、髮を切らんと圖る。南幸一人は、不首尾だつたが、その南幸に起されて、三人揃つて立出でる。出がけに、榮三郎に一枚の着物を着せ、一枚は紫の着物を着て、南幸と別に出かける。一枚を捕へたと思つた敵の廻し者、顏を見て紫なのにびつくり、難を遁れて、三人喝采といふので終つてゐる。最後のが、一寸興味を引く。その外も、總體に、酒落本の普通を學んで相當の出來榮え、特に、一枚の作者自らを、三人中の景色男にして、その房中を精寫してゐる所など、體驗郎酒落本の、私の見方からいつても、生るべくして生れたとして背づける。此の稿本、作成以後百二十七年を經て、かの手この手をくゞつて予の手に入り、こゝに本集成に飜刻せられて、數十頁を與へられた、とんだ原作者一枚への奉仕である。刊本でないから、一層に嬉しいだらう。

二十三、くるわの茶番　楚滿人遺稿 口繪無落款　文化十二年春序

楚滿人（初代）の遺稿で、近櫻山人の序。楚滿人は、本來は、酒落本作家ではない。黄表紙が多く、黄表紙に敵討物を流行らした男である。その楚滿人としては、珍しい作で、晩年の作であらう。此本、朝倉氏の新撰年表に漏れてゐるものである。楚滿人は、文化四年歿、歿後數年を經ての此の遺稿出版、それが何の動機かは分らない。序者の言——遺稿といふを信ずれば、文化四年以前の作稿、享和頃の

執筆か。末期洒落本の流行により、我もの試作であつたかも知れない。

中本一冊、序文、無丁一表より同二表。口繪、無丁二裏・同三表。傾城に誠なし云々、無丁三裏。但しこれに、屏裏、三浦園が見え、その上に一枕の載れる圖が、此の數行の文字の下にある。此圖、故ありて略く。恰も「千人のまくら」のまくらが、圖の枕のすぐ右にある。本文、五表より始まり、以下丁數を打ちて、五表より廿三裏に終る。總丁數、無丁三、四一丁を缺き、以下廿三、故に誠は二十二丁。柱は、無地、毎丁輪廓がある。元表紙、體裁は、寫眞版の如きもの、地色は薄墨色の三方折込、題簽は、貼、薄墨二線の中に、黑、文字は白ヌキである。序文、半丁五行、一行は十五字位、ゝの讀點を打つ。本文は、半丁八行、一行二十三字位、ゝの讀點を打つてゐる。

此作、渡邊綱の羅生門にもぢつたもの。洒落本として、此の摸擬作ありさうなと思へたものである。鬼の手は、女郎の指。それを取戻すは、女郎の馴染客の茨木屋童次郎の廻者、茶屋の女房である。綱次郎、初會から指まで切らせての心中立に逢ふのは、ちよつと「深淵情」に似てゐる。何處かに、硬い所があつて、洒落本作家らしくない所を現はしてゐる。然し、賴光、四天王、金札などのこじつけは、巧い。

二十四、夜色のかたまり　算亭玉守作　自畫　天保三年夷講の日序

稿本の一。京傳の「四十八手」の摸倣作。だが、世界を變へてゐるだけ、それに序文にもいふ如く、折々新工夫見え、且つ天保頃の時說を採り入れてゐる。琉球人來期の噂など然り。それに四十八手の吉原に比して、此の品川は、品川らしく描けてもゐる。それが爲に、採つた。作者不詳の男。

原本、表紙靑、三方折込。題簽は、白の貼、圍みの線は、朱である。扉、無丁の一表、同一裏は、餘白。序文は無丁の二表より同六表に至る。同六裏は、双枕の自畫と贊。本文、次ぎ四十五丁を費してゐる。跋、二丁半。三丁目の裏は、歌。最尾に、目錄と豫告とで一丁分。計五十五丁。丁數、全部に亘り、打つてゐない。柱も無地。扉の外は、輪廓もない。序文は、半丁四行、一行十二字位の大字。本文、六行半丁、一行は十七字位。跋は、六行半丁、一行は、十二字位。評曰として、川柳をあしらつてゐるのも、ありさうでない珍らしさである。

二十五、雜文穿袋（もんせん）　朱樂館主人作　北尾重政畫　安永八年正月序

小本一冊、元表紙茶の三方截。外題は、ざつもんせんたいか。せんたいは、筌蹄を含ましてゐるこ

とは、謂はでもの事である。此本、洒落本に現れる支那艶史系統の、用語解とも謂ふべく、從つて特に附錄として此卷に輯錄した。丁數は、扉繪、重政畫、一ノ表。題、同裏。服袨遊序、二ノ表より三裏。服袨遊は、黑仕立の遊客、當時の大通を意味してゐよう。それを、支那人名らしく見せかけた所に、趣向がある。（袨は、黑衣、盛んに好き衣と辭書にもある。）賓毛子序、四ノ表より五ノ表。自叙、五ノ裏より六裏まで。此本、扉繪以外は、序文凡て罫を引き、本文また罫を引く、略々、此の複刻の體裁である。本文、追丁、七表より三十七裏まで、三十七裏は、本文末、一行餘白、他の五行は、埋木となつてゐる。本文は、複刻本の如く、本文文字は、大字、その解は、本文文字の下、主に二行書となりて、細字、當複刻本の如し。服袨遊の序、半丁五行、一行十字。賓毛子の序、半丁七行、一行廿一字位。●の讀點を打つ。自叙、半丁七行、一行十九字位。●の讀點を打つ。本文、半丁七行、本文文字の所にて、最初の一丁ほど細字、一行二十一二字、あとは十八九字。語彙に入つては、大きく、大抵、二字位ゐの語は、四語の名と解で一行。柱は、無地。丁數は、裏綴目の下にある。

　此本、三序、既に氣が利いてよく、純酒落本ではなくとも、洒落本の雰圍氣は、多分に持つてゐる。現代人の思ひもよらぬ、衒衕文字、凝つたものである。本文、またよくも、此程度まで氣取つて書けたと思はれるもの。語の解またよし、宛然辭書の體である。此の支那趣味、享和前後まで盛んに、現

に京傳・馬琴等の洒落本以外、讀本又は合巻にも現れてゐる。まして、此の安永以前、及び當時、及び以後、特に此種文字の驅使多き洒落本、のそれを讀む筌蹄とは、慥かになつたであらう、と思はれるもの。花柳語の語彙字引の如きものは、なほ洒落本に、無いではない。が斯くの如き、洒落本、全内容の、特に支那趣味隨喜の、通人遊客、さては作者叙者などの用語の筌蹄ともなれるは、餘り見ない。とにかく、凝つたものである。（本篇、字音の假名に、變なのがあるが、凡てマヽ、である。）

×

以上で、略解説を終つた。本巻底本二十五冊のうち、「呼子鳥」は、日比谷圖書館本を參考し、「鯉池全盛噺」は、伊藤爲之助氏、「雜文穿袋」は、花岡百樹氏のものを借用した。他は凡て、家藏本である。

本巻、口繪二葉。一葉の、二頁大木版手摺のは、京阪文政五年「箱枕」の袋の複製である。原物と甲乙なく、殆ど上乘の複刻。色ざしもである。此の「箱枕」は、原本所藏、本編第六巻の京阪本のうちに入るべく豫定してゐたが、其後、山口氏校訂の「洒落本集」に、此の「箱枕」は採られた。よつて重複を避け、袋だけを生かし、此の巻に發表した。畫者は、春川五七である。次第四巻では、京傳の「夜半の茶漬」の袋を複刻したい。家藏の原品、圖としてもよく、また濃厚な着色あるものである。

口繪第二の寫眞版は、洒落本表紙、題簽の體裁見本として見せたのである。なほ云ひ忘れたが、本

卷所收のうち、表紙元表紙にして題簽殆ど完全なるものは、一頁大の寫眞版に縮寫した、殘缺のものは、これを割愛した。本卷も、これに倣ふつもりである。

依例、本卷二十五篇を、内容描寫の土地によりて、類別してみよう。

○**吉原本**。穴知鳥。遊婦里會談の一部。鯉池全盛噺の前半。虚實情夜櫻。青樓五雁金。染抜五所紋。傾城眞之心。廓の櫻。夢之盗汗。妓情返夢解。深淵情。傾城買杓子規。くるわの茶番。

○**品川本**。南客先生文集。呼子鳥の前半。遊婦里會談の一部。比翼紫。南門鼠帰。夜色のかたまり。

○**深川本**。遊婦里會談の一部。其あむか。風俗通。通神藏。

○**新宿本**。遊婦里會談の一部。鯉池全盛噺の後半。

○**論議**。（一般遊里に偏る。）放蕩虚誕傳。辯蒙通人講釋。

○**語彙**。　雜文穿袋。

○**雜**。（遊里以外）呼子鳥の後半。眞似山氣登里。

「眞似山氣登里」は、雜物として、本來謂へば、本編第五卷に收載すべきであつたが、「呼子鳥」との對照上、本卷に收めた。

次第四卷は、目下原稿輯錄中。豫定としては、當世花街談義、魂膽總勘定、花姿色名寄、風流仙婦

傳、金枕浮女相談、無陀物語、古今三通傳、良夜静搔、松登妓話、翁曾我、雨夜噺、商美知之娌、句嚢、後篇句嚢、五大力、青樓松の裡、野干寶這入（青樓奇談と假外題して）、祇園會挑燈藏、傾城買花角力、北系兵庫結、東海探語、吹矢の當りぐら（假）、安名手本執心廓、（以下稿本）廓遊唐人寢言、津國毛及、退屈晒落。の廿六篇。

なほ、此の機會に於て。未飜刻の原本蒐集探索に、此上とも自分が力めるは無論であるが、大方の後援にも與りたい。未飜刻と思はれるもの、または未飜刻既飜刻不明のものの原本所藏の諸賢にして、特に寛政以前のものにあつては、書名の通知と借覽が乞ひたい。知らるる如く、既に市場の物としては、平々凡々、最近更に新外題に寓目しない事、夥しい。四十八手や三教色の類か、よくいつて、享和度のものである。ましで未飜刻物の原本に於てをやである。ぜひ後援ありたい。

序でに諸家文庫に御尋ね。家藏本洒落本の底本のうち、落丁本が二三ある。官公立圖書館に同本あるものは、その落丁を補寫して、以て本卷底本と供したが、次に擧ぐるは、特に自分の知れる範圍では、原本の所在が見當らない。もし、同本所持の方あらば、その丁だけの教示に預りたい。物は、

俗談諺種（本文外題には、口學諺種とある。）

中本一冊、年代は、年表に、安永八年といふも、原本よりいへば、同九年である。泥田坊夢成の序と作。

そのうちの、挿繪部分の見返し右の一丁（表が、文字の半丁、裏が挿繪見返しの右。即ち原本の第四丁目。）分だけ、落丁である。內容は、普通の諺を捉へて、遊里並に解釋した、附會のもので、洒落本としては横道物、論議の方である。

此本、元表紙外題付の美本を、嘗て平出本入札當時、寓目した事がある。此の美本、何處へ流れ込んだものやら。自分の手には、高くて入らなかつた。どうかして此の一丁の所在に、めぐりあひたいと思ふ。

以上

昭和五年六月十二日夜七時、八日目に脱。

本卷本文の後半、全第三校了のたり

久彌しるす

洒落本集成 第三卷

目録

放蕩虚誕傳……一
北遊穴知鳥……一九
南客先生文集……四七
呼子鳥……七一
眞似山氣登里……九三
遊婦里會談……一〇九

辯蒙通人講釋……一三九
鯉池全盛噺……一五一
其あむか……一七一
虚實情夜櫻……一八三
青樓五雁金……二一一
染抜五所紋……二四七
傾城眞之心……二七五
大礒新話 風俗通……三〇五
假廓南渚 比翼紫……三四七
言告鳥二篇 廓の櫻……三八三

夢之盗汗……四一五
夢汗後篇 妓情返夢解……四四三
南門鼠帰……四八三
仇手本後篇 通神蔵……五一五
廻覧奇談 深淵情……五四七
傾城買杓子規……五八九
くるわの茶番……六〇九
驛情新話 夜色のかたまり……六三一
雑文穿袋……六六三—七〇〇

通計廿五篇

○

「箱枕」一の袋（口繪）……巻頭
洒落本外題のいろ／＼（同）……同
叙……前一
解　題……前一一—前五六
巻　末　に……七〇一—七〇六

放蕩虛誕傳

全

虚誕傳序

古語曰。君今來將歸。晒手拭藍の不足怨。思壘積て情郎と爲。或臺物の華に黄金を。投事を恐れ。煙筒引出入る金更烏有。疑是貧賤の人。放蕩の中に產れて。溺酔で不食者となり。此世上の風塵と交る。人の心中を閲て。愚成者にハ放蕩となり。千變萬化して。人間と倶に葦原に游ぶ。門を潜バ。髣髴仙境かと疑れし。風俗秦の衣に似て。鳳凰の表着裳に羽飛こり。金蘭夜着徘緬の蒲被。噁々金不足謂所也と。頭を搔飄々と漂て品川に走る。水亭高閣飾レ珠玉。遊客武士多

して街人少。山の手切て此土に來。貌ハ葦原を手本とし。辨舌出きかね頗似たり。馬嘶東雲と明。轡の音ハ鐵棒の聲を奪。肩輿高輪を走れバ鴨ハ海を飛。南風に帆上て巽に至。此を名深川樓と呼。河縦横を囘て舟頭佳。樓仲街土橋の銘在。總雖レ妓者不レ妓。嫣然娟々く仙女の娘。腰ハ纖々として絲の如し。帶を纏に欲レ解未レ結。鬢ハ燈籠如し。櫛ハ三ケ月如し。腰を貫此土留と雖。穴の奥を禪。今日偶然此書を得て。近々堂需に應て。唐本仕立仲間へ入るのミ

變手古山人自述

序

虚誕先生ハ。東西南北の人なり。いとけなきより。女郎買の奥義を窮て。世人色男と。ならん者ハ此門に入べし。是をひろむる者ハ本屋なり錢と。金とを。もうけんが。ため。金なくして。女郎を買も。皆利勘。錢やすより初る。其たとへに曰。鈷徳の丸も四角となり。鐵橋の加役をつとめ。蒸籠の四角が。丸なりて茶釜の上住居し。寺納豆ハ。桐の箱と角たち。背戸葛籠ハ横へ口をあけられ。髢さし變じて。鬘さしとひろがり。笛でよぶ。按摩。風鈴で賣そば。冷水すたれて。炎天に煎花。屋根舟に火燵をのせ。錐の先が。堂社を建立し。開帳ハ花子がひろめ。神樂堂ハ神子で落をとる。素人の狂言娘の義太夫。豐後ぶしも流義が別れ。河東ハ。半太が。上にたち。大ざつまは。長唄になり。女筆指南ハ。杵屋にまかされ。葛西の源十も。が法樂で棹さ

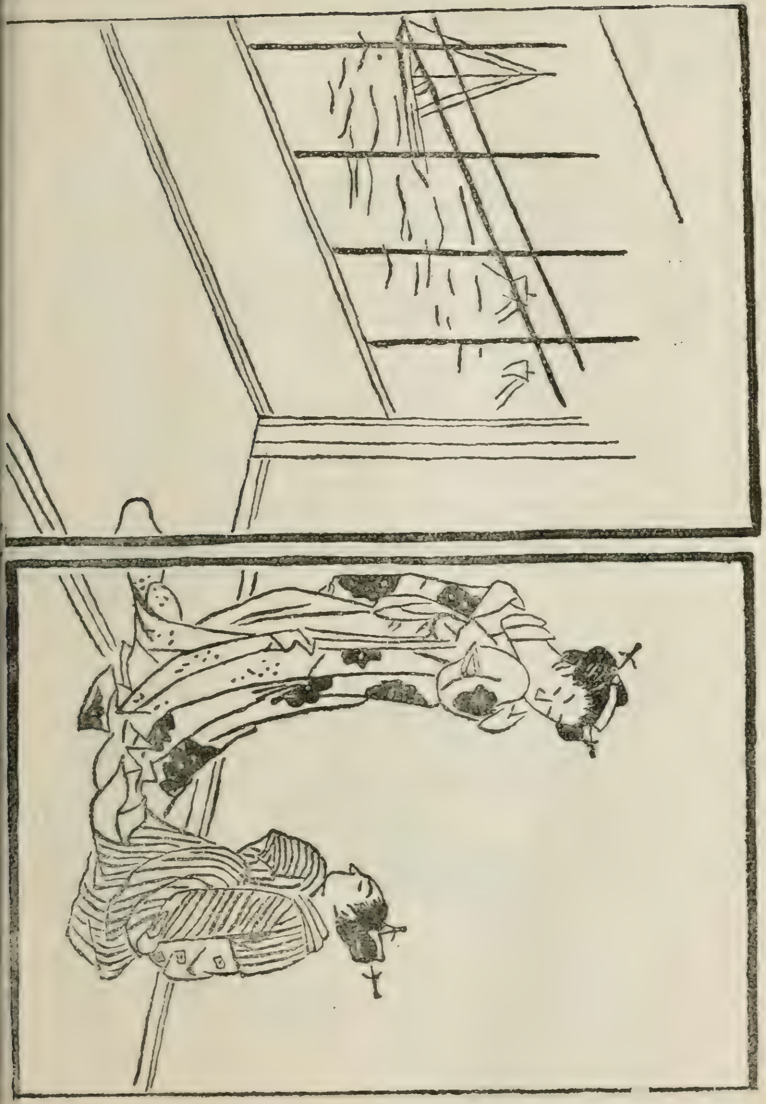
し。大工の大坂詞。呉服や見せニ唐犬額。侠客が本田に髪を結。歴〻の内室が唐茄子むすびに釘打た樣に笄。男ハ鼻へ前垂をかけ。貴人の河豚じる。居酒屋の鮟鱇。上州で天鵞絨を織バ。江戸に壹分の紙たばこ入。上方風の月切の妾。貧乏人の女房が地獄へ落。裏店に提重。番太郎に敷きん。年季野郎が小菊の鼻紙。大工左官が。ちりめんの下帶。盲人の厚びん。邪魔な脇差。風雅の宗匠ハ末社と現じ。吉原引張が。はびこれば。南に二間持有。眞崎の田樂ハ吸物におされ。葛西太郎に硯ぶた有。鹽濱に駒下駄の音靈岸じまに目立格子。中洲に煙艸の吹がら本町の角に。煎賣見世。通丁の眞中に一服壹錢。女太夫が黑繻子の半襟。屁もひり樣で錢になる。よの中。當世はなしを綺にかいた。小本。富の安賣。見とくの傳いづれ。其もとを。得れバ。其うらハ得やすし。そんして徳を見んと言ごとくならんか。しかり余も其岸によりける時ありしに。先生の言葉なかんづくうる事かたからんと。思ひ。倡婦のミ

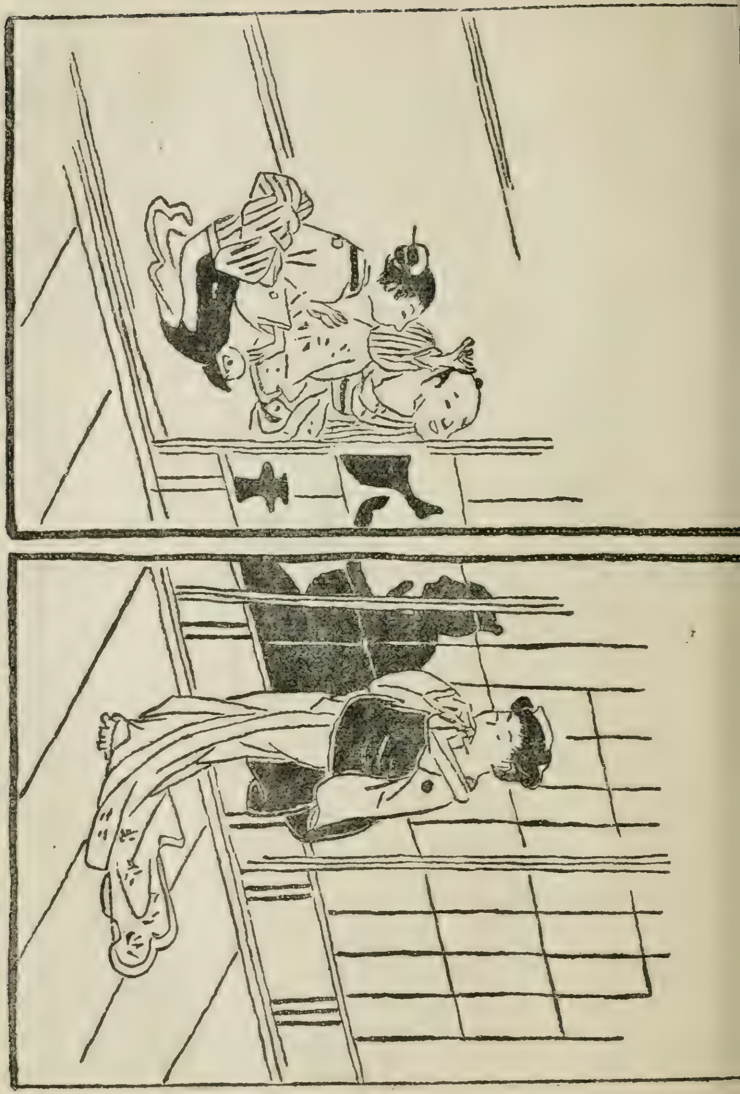
に。あらず。妓者あるいわ。磯せゝりなんどの。たよりニも。ならんかと。
書林序を。こふ。やんごとなく。世間の美男のために。利なからざらん事
を。しらしめんが。思に。つい筆をとりぬ

ずいゆき老人しるす

女郎買大意

それ。女郎買の手段。其きどり區々にして。おの／＼天より請得たる。氣質の賢愚在といへども。心を用ひざる時ハ。倣（マヽ）蕩でもふられ。心を用ゆる時にハやぼでも。もてる事あるなり。當時人ハ。かの己惚の二字をわすれて。まづ本田天窓に。百介が。くこ油。菊蝶を崩した。かゞ紋に。緋ぢりめんの胴裏。身はゞのせばき小袖を。臙色の下駄に引づり。むなだか帯にほそみの脇差も。ちと近比醒ぎハなりとて。ふとからず長からぬ。鯨ざや（マヽ）に。置手ぬぐひにて。遊里をぞめくわ。うのまねする烏にて。いかぬこと成。唯美男醜男に差別なく。氣どり第一が。女郎買の大の奥義也。おれは。色男なりと。心得。當世の哂落言葉などにて。女郎にすいならんと。思われんとする事。反て大キにふらるゝの基なり。されバ眞の女郎買ハ。けつして哂落言葉などいわず。しつぽりと遊ぶ故に。大もてにもてるなり。しかしもてるハ。眞の色男にあらず。今時の。放子。もてるを色男と思ひ。金銀を費事。是わ眞の色男にあらず。眞色男と言者ハ。唯金銀をつかわずして。女郎をじゆう自在に。するを。眞の色男といふ者なり。此門に入。女郎買をせんと。思ハヾ。密客といふ者になるべし。ふるくいへバ。間夫と言ものにて。先女郎の色客なり。常〻つらきうきつとめ。いやな客に挨拶を僞りいふてたらし





かけ。山吹色を身に付て。苦界のうさをはらさんと身上りして。逢亦ハ。しげ〳〵來る客の前をしのびて。逢なり。女郎の方ゟ金錢をおくらせて。此上もなきたのしミなり。扨其密客にならんと思ハゞ。傳に曰

まづ。其姿風俗に手段在。餘りいきなる身ぶりハあしゝ。大躰常躰のなりにて。衣服の十月指處をきろふ也。月代はそり立あしゝ。髭をばよくそるべし。扨遊びに行と思時。初會の事なれバ一人行てハ手持なくてあしし隨分氣にあいたる友達を。誘引。二人づれにて。其前方より。とくとだんじ。其連に我いとを引せ。氣ふうの様子能躰に。內證にて噂をさせるやうにして。行べし。先隨分品のよき。うつくしき。女郎を見立。それより。案內をさせ。座鋪へ通れバ。それお茶よ。たばこぼん。御盃。といふ內。程なく。女郎座しきへ出て。ようお出なんしたと挨拶をする。時。言葉ずくなにあしろふべし。禿どもさけ酒菜を。持はこび。無間盃もすみ。四方山の咄しのうち。彼女郎の氣はい取なりに。氣を付かんがへ見る事。甚大事なり。隨分。おちつきて。世事の咄しなど。すべし。酒など呑過し。又ハはやり哥など。唱べからず。夫より部屋へおもむき。閨へ入。女郎ハ衣裝を着かゑ。しばらくきうそくに行物なり。あとにて淋しく。思ひ。かならず。鼻哥など。うたひ。或ひは。寐入たるふ

りなどする事。堅く慎むべし。

たばこ抔吸。まつべし。煙草もあまり過せば。口中香あしく成バ。其心得有べし。女郎來りておやすみなんしたかと。言ざま。そばへすハり。たばこのむ。其時大キに待かねたる。躰にしてあやなすべし。女郎心よく悦ぶ物也。只世事の咄しをすべし。女郎初會の事なれば。そこ／＼に挨拶する時もあり。亦ハ咄の途切に寐入るも有。又は女郎客を呼んとて。女郎の方より手くだ有もあり多くハ初會の事なれバ。打とけぬ物なり。されバ一向に　すべし

［傳在］女郎の。思ふにハ氣にいらざるか。どうか。かうかと。氣をおくなり。其儘。夜をあかして。歸るべし。此處が大の傳授なり。何か成放子人も。此樣成事ハ。せぬ物なり。されバ。其翌日間をおかずに。行べし。又前の通りに心得。座敷にて。ゆるりと遊びて。　隨分。惚たる手管ありたし。此時も。　すべし。女郎ふしんがる事限りなし。其儘歸るべし。是より三度目なり。三度めを越ねバ。つい通りの客なり。三度目過れバ。女郎の方より。文抔も。よこす法なり。されバ。二三日間を置て。行べし。是も同じくやハらに遊ぶべし。　隨分。いやみなしに咄しを。すべし。はなしに傳有。浮世ばなしハあしく。言葉やハらかに。女郎の苦界勤の。つらからん事を。人情深く。はなすべし。女郎に向ひ。どふして。爰ゑ流れて來りし。謂所をバ。たづね。又は親兄弟などを。尋ぬべし。色／＼。むかふの言葉つかいを。考へ聞べし。女郎人情を顯ハし。生れ古鄉を。殘ら

す咄す物なり。此手くだに。隨分法を用べし。尤我身ぶんを。正直に言べし。僞りかざり抔。言べからず。此時も咄し明して　　歸るべし。扨歸るに望んで。女郎の曰。いつ。きなんすと言事うたがいなし。其時いふにハ。イヤ内の。しゆび。何の。かのと。其身分相應に。しげ〳〵來られざる事を。いふべし。女郎言やう。わたしが方で。どふぞして。仕廻て。置いすから。何日に來なんしと。いふ樣にすべし。若言ざる時ハ。床の咄しの。あしゝと知べし。しかし。いふても。いわいでも。文の來る事雨のごとし。尤一度位にて。行べからず。文二三度を越て行べし。其身ぶりに。傳有其傳に。曰。羽織など。着ずに行べし。殊の外。貧に。見せかけて。行べし。さきにいふ。三會めの時吉原にてハ。やりて出る也。金壹歩のいた事あり。勤と。兩方共に貯行べし。女郎吉原なれば三會めの。床花の金有。身上りして。まつて居る所を。金をひらめかして。やりてと。つとめにやる。べし。女郎思ひらく。なりの。あしきを見て。金のなきハ。見ゑて居ながら。金をくめんして。來たるをかんじ。情をあらわす事。限りなし。　　色ゝの咄し。手くだ。有たし。此時にハ。女郎の方　　仕内あるなり。是より。女郎を。只買の段也。爰迄が。元金入て。心遣多。亦歸りに及んで。羽織などの。なきわけを。聞か。何れにしても。やくそく。有なり。其時に。金なき樣子。ありていに。いふべし。夫より。女郎の方より。むかふ何日にハ。かならず〳〵。身上致し。

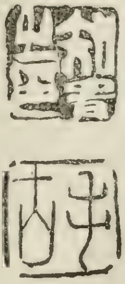
内のしゆびもよろしく致。まちおり候まゝ一寸成共。御出の程。神かけていのりまいらし。などゝ文にて。いふて來る。處で先唯買それより。まへ〳〵元手に入し。きん銀を。取もどす手段あるべし。金樣子を見合せ。女郎へむしんいふべし。隨分〳〵着物にても。かんざしニてもよこす物を取べし。金ハ外の。客をたらかし。貰よこす物也。それ故。女郎のきりよふのあしきハ。欲にて引るゝと。おもふ心づきて。返て永く此工夫おこないがたし。きりやう能女郎ハ。うぬ惚がある故。かへつて金になる也。葭原品川ハ。此法を行ふ事いとやすし。深川ハ頗おこないがたし

一余青樓に。登し時。壯倡をあげ游しに。倡婦ハ。つとめの外に間夫有事を、尋ねたれバ婦人の曰。初會より。ほれる事有。美男醜男によらず。皆氣に惚なり。寬和にして言葉の少き人を。よしとすなり滑稽人ハ。甚だにくき。者也とかたりし

一余心やすき。倡家に立より醉間語する間。色〻客來り中に大キに。粹なるていの客來り。番頭などゝ見へて。相方女郎出て。咄しのうちに。女郎に金三片やりける躰あり。其客ハ餘ほど。粹成しこなしにて。程なく歸りぬ。跡にて女郎のいわくあいつわ。金があると。言けるなり余海内を。めぐり。こゝろ見るといへども。貴も賤も皆氣風。あへて替事なし。よつて。此傳を。世人に施す。我獨とくと翫味默讀して。人に見すべからざる。秘書なり

虚誕堂

變手古山人著



安永乙未正月吉旦

放蕩虚誕傳　出板

同　後篇　近刻

此本ハ地色ノ仕様或ハおどり子と
しやれよふ色〳〵おもしろき本也

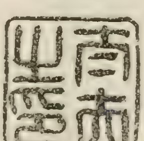
北遊
穴知鳥
全

序

夫兼好がつれ〴〵艸に曰色このまざらむをのこハいと騒〻敷玉の盃にも底なしとかたい奴〻を第一にいじめ誠や我國は大に和らぐといふ腹なれバ人の心石火矢のごとくにもあらず花に鳴鶯が長唄を謳へば水に住蛙は三味線をひく、美婦一曲をうたへば猛き武士の心をも和げ目に見へぬ鬼が〻をも感ぜしむるなれば當世のしやれを更に禁むべきにもあらず唯北方の無垢世界に生を請んこそ本意ならめと貴賤上下千差万別の氣〻見聞なれしを取あつめ

今様の穴をあらハし百囀りの心を直に北遊穴知どりと題して石部流の學者たちの眼玉を驚しむる而已

松壽軒東朝



安永六丁酉のとしの春

當世穴知鳥

花のもとに歸らん事を忘るゝは美景によれり樽の前に醉を勸じては薫りくる春の風も山ぶき色の光りあらざれバ黄金の肌をさぐる事あたわず北方の吉原はいふもさらなり南方に品川東方に深川西方に根津音羽中ウを飛せて門ッ手の懸聲豬牙船の勢ひも朝暮いさぎよく色でかためた世中の有さましやれに高慢を第一にして虛と味噌とハ胸のうちに封じ籠メ我こそ色男と心得いきな風俗に躰をかため年中ぬらくらで斗り日をくらす淸助といふ者元ハ富澤町邊に小屋しきを持て居る古着屋の若旦那家督なりしが何に隱るも淺才に疎く適ゝ親父の名代に自身番へ出れバ林間に酒をあたゝめて公用を閑語事に取りぬめりのないやつ故勘當までハゆかねども遠まへを仕くじり近頃は久松町に裏店をかり少しの元手をもらひ幼少より見馴たる事なれば古着のせり賣して世をわたりけるがたま／＼うら波の壹本も借るといなや有きり呑んで仕廻南鐐の一片も殘ると忽に欠出し晦日／＼には大屋米屋に虛八百の言譯なしても八百跡引ケに斗りしなし商内の下手な替りに借錢を倍す事が大の功者近所で知らぬ者もない男なり或日淺草仲町の仲間市に出て少しの物を買とり先是で能くすればバ南鐐ぐらゐはもふかると賣らぬ先から早ヤ一歪違ッ付る氣に成ッて並木の町をぶらつき市で買ッた長脇指をおとしざしの風情きつとした色

男の氣で二十軒の湊屋の床几に腰をかけお六さん久しいのと茶を飲ながらも往來の女の貞を詠てゐる所へ長谷川町邊にて質商賣する大和屋の手代喜七觀音堂の方へ行をちらと見付て大喜〳〵と呼かけれバ 喜七 へハア是ハ淸助さま此間ハすきとお目に懸りませぬと小腰をかゞむれバ 淸助 へコレサ〳〵それじやァ堅いハなマア〳〵久しぶりだ一ぷく呑さな〳〵 喜 へアイと喜七腰を懸れバ淸助ハ喜七を無たいにすゝめこミサア〳〵ずい行〳〵とふたり連淸助がからミそに喜七がりちぎ先ツ船宿からと相談きわまり裏門を出て「（虫（北カ））新町へ懸り聖天町から堀でマアおれが心安イ船宿があるコリヤアおれが久しい事大イの恩を懸て置イた所さとちよつとにもみそを言イ三河屋の見世を（マヽ）覗けバ内より後家が聲をかけ淸幸さんお珍らしい御出だネマアお上んなんしあなたお出なんした 喜 へアイ 淸 へコレかゝさん此男ハおれが兄弟ぶんだからたのむによ 後家 へアイおはつにお目に懸りやした是からおたのミ申んす 喜 へアイおせわになりやしよう 下女とめ へアイお茶ア上りんし 淸 へムウおとめどうだちつと逢ねいうちに大ぶ美しくなつたナント大喜能のふ 喜 へアイサきつい事ツてござります 淸 へしかし此ごろハきつく尻が大キく成ツたト一ツたゝく とめ へエヽモおよしなんし 後家 へアリヤアわたしに似てさ とめ へアノ淸幸さん久しい物さ 淸 へコレかゝさんけふハとんと遊ぶ氣じやァ出ねいがの此男に道で逢ツての一盃呑ンでからの思ひ付だが先けふハ茶屋を止メの奢なしのずい行のずい歸り

といふしやれだがおらアともかくも此男ハ奉公人の事ッたからきつい務はさせにくいそれに大見世は大かたおれがふさがりだから幸にしていつそ半じやれと出よふと思ふが何ンとどこぞ能とこが有ふかの〔後家〕へアイいくらもござりやす〔清〕へそんならどこがよからふの〔後〕へ若松屋になさりませ〔清〕へ何サ悪さ〳〵〔後〕へなぜへ〔清〕へおらあそこじやアもとまきを買やした〔後〕へアイそんならバ京町の海老屋になされませぬか〔清〕へムヽそりやアよしさ〳〵〔喜〕へそんならゑびやにおきめなされませ〔清〕へヲイさあそんなら大喜一ッ打やせう〔喜〕へアイ〔三人〕へシヤン〳〵何かにつけて惣雪隠ほどミそをひりちらし程なく薄昏になれバ〔清〕へサアかゝさんモウいきやしやうがけふハミんないないネ〔後〕へアイけふハ権八ハ宿へ参りやすネ藤兵衛ハかけを取りにやりやしたが何さわたしがおともいたしやしよふとちやうちん付て是おとめや〔とめ〕へアイ〔後〕へ戸を明やんな〔とめ〕へ〳〵アイといゝながらはきものをなをせば後家さきへたち〔とめ〕へアイゆるりとおあそびなんし

土手のゆきゝ 附見立

四ッの時をきらハず日本堤の往來に挑灯は星のごとく貴賤高下千差万別の中に彼両人は後家が先達

にて土手へさしかゝればうしろのかたからモシ旦那そこハぬかりますもそつと右へおよりなされ（以下、第一巻所收「通志選」と同一版本」全く同文句也。―校者）ましといふをふり返りて見れバ是も堀の挑燈を先へ立て三人連の客壹人ハ花色ちりめんの小袖に紅粉かばのうら紺ちりめんの羽織に緋ぢりめんの備うらが四五寸下まで見へる樣に仕立四ツめ結の一ツ紋壹人ハ黑繻子の小袖に淺黃むく黑たんごに玉蟲裏の袷羽織又壹人ハちと輕イと見へて上田八丈の格子嶋の羽織にちゝぶ絹の目引小紋の小袖いかにもしろべらしい聲で（こんちりめん石部金太夫）ヘイヤ武左どのモシ貴公とハ久ゝでの御參會でござる度ゝ御文通に預りましても彼是と勤仕に暇のない拙者が儀でござればとんと御出會相成がたく委き御紙面に貴報さへつど／＼に相ならぬ譯故心外にうち過ましてござる今晩の御同道此金太夫に逢ましてハ千万大慶至極に存まする（黑ちりめん形井武左衞門）ヘハヽア石部氏の仰の通り自分儀も殿の御目がねを以て當役儀を仰承りまして此かた一向に寸ン暇を得ませぬ故に誠にお物遠に罷り有ましたが今日ハ久ゝにて御門出ッ致ましたも貴公の御誘引なし下されたればこそ存よらず能イ鬱散を仕るだん過分至極に存まするなんと新五左せまじき物ハミやづかへとハ能ふいふた物じやの（上田八丈の羽織菅野新五左衞門）左樣でござります甚以私儀も御用多に罷有まして片ン時も役所をはなれませぬ所に御兩所樣の思召をもちまして今晩の御供此新五左衞門いかばかりか忝イ仕合にぞんじ奉ります「武左衞門」ヘ是

さ新五左衛門其様におりめ高でハわるいぞや屋敷はやしき又こふ悪所へ同道するからハ今宵一夜ハとんと格式にかまわずずつとやわらいだがよいぞやナントさがミやそふでハないか［船宿の男］へなる程左様でござりますイヤモおまへさまのやうなすいなお方にあなたのやうにおかたくなさつてハおあそびになりませぬ［武左］へチヽサそふじやテイ［男］へちとおくだけなされませ［金太夫］へ成程武左殿の仰らるゝのが御尤じや［男］へイヤちとおまちなされましらうそくのしんを切ませう［金］へそりやけしたハ［男］へイヤ是ハ私一生の無調法［新五左］へサア〳〵早ふともをせい〳〵［武左］闇夜燈火(かんやのともし)なふしてハ歩行成りがたしじや（船宿ハ番屋へ立寄火をとぼす）此うちに彼二人ハ行過て［清］へ是ミ大喜今の二人ハとんだやつらじやアネエか［喜］へアイサ［清］へ此しやれた世の中にもあんなこけどもが有ノウかゝさん［伝］へホンニネ［喜］へしかしどれも人がらの衆でござりました［清］へナァニサどこへ行ッても女郎にかわひがられぬやつらさト噂のうちに土手も半過(なかば)になればバ田町の方から［新交］へ是賤鳥(せんてう)やあんまり急ぎやんなサアこけが女郎買に行やうにそんなにせくなァ［賤鳥］へなんだ新交今夜ハなんぞといふとあぢな事斗リいふハあんまりいやミからミないふネイ［交］へハテおのしやァあぢにおくねた事をいふなおらアそんな氣じやァいわねエハイ云にくる事ッたがおれも新交と云ッちやァ石原から中の郷きつてつらを見しられた男だァ［鳥］へなんだエあんまりミそをひるネエおのしがそうならナおれも相應

にナ水がミの銀ぎせるでな陵鳥サン〳〵とナ立られてナ來たもんだア [交]へコレおのしがそんなしや(じか)くほくを云のもナおらアがつてんだアアノ此中かねつき堂のおはなが帯をおのしがかりてな吉田町の伊勢屋でナ縄目(なは)にあわせた事をおれがちよつと口を出した事を今に氣に持て居るからそれで此頃ハ何ンぞといふとあぢにひねくるのだア [鳥]へハテ色〻なごたくを引ずり出スハイそれじやアなんの事ハねヱおれにさらさせるのだアコレそんなしつけいを云ハふよりやアなおのしちつとたしなミやれヨ

[交]へなんだおれにたしなめとハなんの事ッたアおら何もたしなむおぼへハねヱハイ [鳥]へヱイコレおれがしろめいと思ふかヱイあんまりりつぱな口をきくねヱ夫あの跡月ナおのしら鐘下のお市にかんざしをやつたがあれもきゝやア割下水のはた元に勤て居るおハしが二三年跡から心がけて漸(よう)〻とこしらへたかんざしだけなそれにマアかあいそうに一年にたつた三分弐朱の給金で勤るやつの物を色をしかけてかんざしをあやなすといふ事がある物かホンニおのしも引事にかけちやアこうしやなもんだア

[交]へ是ヱヽあんまりそんなたあごとをぬかすねヱ云ハせて置ケバとほうもねヘあごのたゝきやうだアなんにせい是じやアすまねヱぞ [鳥]すまざアどふするイヤどうするのだヱヽ(ト云ときはるか跡から)へ是ヱヽ [万八]へふたアリながらマアまてヱヽと聲をかけれバ [二人]へそふいふなア万八じやアねヱけヱ [万]へムヽヨといひながら息を切て欠來り是ナアおのしたちやアなんの事ッたおとなしくもねヱ

マア〳〵何ンでもそれじやア濟ねエからなんでもおれ次第にしやれ能イよやう（マヽ）に譯を付やうマア角ドの酒屋まで來やれとむりにふたりを引つれて跡へ歸る所を朧月夜にすかして見ればニ人ながら仲藏が定九郎といふかたちなり 喜へ大喜あれ見やれ色〳〵なやつがあるもんだノ 喜へアイサ 彦へホンニ人がらのわるいねエ△扨又大音寺前のほりからすみる茶色の樣な聲で長うたへかき（マヽ）をさそなら春日山是ぁ神のちかひとていとしとのごと合（マヽ）相傘のしつほりと（田中の方から）彦へ五郎じやアねエけい 五郎へ彦かエ 彦へムウかりまウさつきからたづねたア 五郎へなぜ引 彦へ今夜こゝいに行てな仕廻にナ伏見丁へ上るべいとおもつてよ 五へムツそりやアいきだな 彦へムヽヨ 五へヤちくるいめ 彦へきまりであろふが 五へきつとだノ〳〵 彦わりやア今迄どこに居たエ引 五へおらノな人谷の十がとこでナ能ばくちができるときいたからナ此中こしらへた大嶋の半てんをナ釜鳴屋へくらわしてナ壹ツ本かりてな道のわるひにナゐつちらおつちら行やいなやなア二三番でナミんなはたきおとされてナヒイに成てけゐつたハイ 彦へヤそいつアいけねいナ 五へムウヨきいてくれろへまだあらナその上にナ今朝貳百で買た日和下駄のナ歯をふんけいたハイ 彦へイヤそいつアいけねエナ 五へムウヨ 彦へそれから見ちやアおらアよつほどりくつが能ワイ 五へどうしたエ 彦へとなりうらでナ七八百もふけたからナ直に山谷の小張屋でナおごつてきたッイ 五へそりやアおつだなしたがあそか

あよせバ能ハい 彦へなぜ 五へハテ酒がいけずかつぎがわるしかそうていあだらけ（マヽ）ねヱハイそれよりやア佐野屋へいけバ能ハいまづ酒がよしかとうふが大きいツイヱヽ是あぶねヱツイそれミろころんだハ 彦へヱヽいめゑましいはなをゝふミ切たアホンニはつつけと云道だア 清へイヤ今夜ハいろ〳〵なやつらに出あふ晩だ 喜へホンニきゝていい事をきゝやすネ　是より衣紋坂へさしかゝり清助曰イ手ぬぐいを出して前がゝりにかぶれバ 喜へモシ清考（マヽ）さんそれハどふしたおしやれでござります 清へイヤサ是から先ハ通る程の者がミんなおれを知ッてるからゆだんがならぬ夫レに五十軒からぶつたつて中の町ハ雨がわそのうへ第一にするがやのかゝアしうが見付ても大の悪也大かなやの女郎も中の町へ出て居よふもしれずほんにうつかりとあるかれるもんじやアねヱ 喜へ如何さまおまへ様の事なればそうも有そうな物さ 後へホンニおまへ様ンのやうにしやうのわるいおかもござんすめい 清ヲット聲高しモウお屋敷前に成やしたと清助小聲に成て大門へ入り是ゟ大喜今大門に居た禿はおれを（マヽ）おれを見付ハせなんだか 喜へイヽヱ 清へ拐もあぶなかつた 後へモシ清幸さん今大門に立て居なんした新造さんがおまへさんをじろ〳〵見てわらひなんしたにヱトのせかけられ 清へそれにハ大イの譯有りさアリヤア去年おれが五六度も買たやつが出した新造さとうそとみそとの中の町から京町へ入り海老屋の見世をさし覘けば中座もまだ半分の餘もならんで居れば清助そゝろになりこけが十九文

見世を見物するやうにきよろ〳〵と見廻し 清へコレかゝさん あんまり どつとした のも見へねヱノ 後へ何さよふござんすにへ 清へ是大喜どれにしやる 喜へアイどれも〳〵美しい揃へで目うつりがいたします 清へ何さどいつもあんまり氣の有のハ見へねヱ 後へモシヱそふおつしやるけれどネ此くらゐ揃た内がそんなに有ルものじやアござんせんにヱ 清へそれもそうけいサア大喜早くきめやれ 喜へアイマアおまへどれになされます 清へコレかゝさんアノ文を書てゐるやつがどうかよさそうだがどふもつらがみへねヱ 女郎住の江へ千どりやア 禿へアイ引 住の江へめしつぶを持てきやア 千鳥へアイ引 住へそしてノウ二かいへいつてノ清花(きよはな)さんの客衆(きやくしう)にノ封(ふう)じ紙を二三めいもらつてきてくりやア ト顔を上る 清へチツトよし〳〵きれい〳〵こいつハすごいかゝさんおらあれにしやう 後へアイさあおまへさんハヱ 喜へアイわたしがのハおまへ能イやうにたのミます 後へイヱサそうおつしやらずとお見立なんし 喜へアイ 後へモシヱ今こつちらを向イて何か云なんしたのハヱ 清へそれよりやアアノかんざしであたまをかいて居るのが能からう 後へアノお子かへ 喜へアイあれに致しやせう 清へサアそれできまり〳〵 後へサアそんならおはいりなされましト先へ立てモシ若イ衆へお客様ンがござんすヨ 若者源兵衛へヱヽイ御上りなされまし 清へサア若イ衆コレ腰(こし)の物をたのむよ小柄は中橋〳〵といわれぬ先に階子(はしご)をあがりサアどこだノ

廓中の諸譯

若ィ者座敷へ入サア是へお這入なされませトあんどうをかきたてる　後へモシ若ィ衆へ今云たおふたり様を間違ハぬようにおたのミ申やす　若者へアイ　清へこりやア能座敷だノあそばふなら諸事表座敷の事ツた　喜へアイサ　清へ掛物ハなんだ休山か布袋だなんだアノ花の生ようのぶきようさ次ぎわが第一わるいおらが生るとまだよつほどおつがあるテ　幽し禿へアイお茶ア上りんし　清へヱヽコレわりやアいつ江戸へ来た國ニアどこだ伊豆か遠州か　禿へヱヽモすかねヱノウトいふうち若ィ者多葉粉盆二ツ持て出て　若者へアイちとこちらへおよりなされませ　清へヲツトのミ込〳〵是で調度女郎衆の居り所がきまるといふ時（住の江が禿ちどり）盃臺持て出る　清へヤ是リヤアとんだ美しいノ　喜へいかさまネ　千鳥へおがミんすヨウ　清へしたがモウこハめしくさくなつたおいらんのむなさきへつかへる時分だ　千鳥へすかねヱノウ　後へ又清幸さん穴をを（マヽ）おつしやります　清へやらうぞ　若者へヱおまへ様ぬかつた事をおつしやります　モウとふに私がいたして置ました　千鳥へしつたかヨウトせなかを一ツたゝいて行　ミな〳〵へハヽヽヽ　こいつア能〳〵トミな〳〵わらふうち女郎一人来る（清幸が相方ハすミの江表座しき也大喜が相方ハらうか座敷にて松風禿ハ遣ハす）

若者へサアこつちへおいでなさりまし 女郎二人へアイトたんすのそばへ居る(すハ)ト（座敷ハしばらくしんとなる）若イ者盃をはじめハイあなたへ御上申ますと清幸へさす 清へマアノ＼大喜 喜へイエ先上りまし 清へそんならおさきと一ツ呑ミ住の江が方をしり目で見ながら喜の上へをく 若イ者へモシどなたへ 後へアイあなたサ 若イ者へハイト住の江が前へ出スすミの江ちやうしの口でこつちりとして喜の上にをく若イ者大喜がかたへ出す 喜へちとおあけ申やしやう 住の江へマアおとり上なんし 喜半分受る 清へハテひとつのミやれナア 喜へアイト 盃松風がかたへ遣ル 松かぜ少し請て 松かぜへモシおかさん上んしよウ 後へアイちとおさわり申やしよう 松風へアイおあいをおたのミ申んす 清へちと見申んしようか 松へわつちやア呑んせん 清へ初会にやアどこの女郎衆もそうした物さと盃をとる若イものゆるりとお上りなされませ（コゝ原本一字位アキ）へモシかミさんおたのミ申ますト立て行ク 清へこりやアねつからひやだ 後へそんならちとおかけなされまし 清へアイト火鉢へ懸る大喜鼻がミにておふぐ（此所にて吸物出る盃しばらく廻る）らうかゞへイこりやアどなたもようお出なされましたと（船宿の若イ者藤兵衛）へちやうちんけして座敷へ入 初へけふハおそかつたの 藤へアイやうノ＼今帰りやした 清へどうだ藤兵へきついもつたいだの 藤へイエサけふハモウほうノ＼あるいてけつくりくたびれやしたしかし帰つて聞(けバ)バおまへがお出ときゝやしたから茶づけを一ツぱい立ながらかつこんでじき

に参りやした [清]〽ソリヤア御苦勞〳〵 [後]〽ほんにあの大文字屋の文ハとゞけやつたか [藤]〽アイ
[後]〽そして下谷のハちつともきたか [藤]〽アイ イヱサるすだからお歸りまでまてと男衆がいひやした
から待ツておりましたれバやう〳〵五時分になつて歸らしつてネどふで二三日のうちにおれがいくか
ら今夜ハマア歸れとつてネほんに三文にもならずに歸りました [清]〽そいやアきつく茶になつたノ
[藤]〽ヤモ一言もござりませぬ [後]〽コレ藤兵衛やおらモウいくにヨ [藤]〽アイ [後]〽モシおふたり
様ゆるりとおあそびなんしアイ女郎さんがたおいとま申んすヨ [二人]〽アイ [後]〽コレ藤兵衛やおむ
かいハ何時かきゝ申てきやト後家ちやうちん付てかへる [清]〽是さ大喜そんなに火をあふぎやんなア
女郎衆の髮へ灰がかゝるハナア [喜]〽アイ是ハそゝうをいたしました [清]〽そしてマア炭がたんとい
ろうと思つて女郎衆の顏が青ざめて來たハなナ [住]〽エヽ氣が違つたそふだ [藤]〽清幸さん又きつい
穴サ [清]〽よしか [藤]〽アイよしさ [清]〽サアそんなら一ツいきやしやう [二人]〽アイ [三人]シヤン
〳〵 [清]〽しかしこんなに穴斗ツリいふと女郎衆のしうちがわるくなるもんだ [藤]〽モシそれも穴か
へ [清]〽よしさ [喜]〽よしさ(是よりちぐち) [藤]〽よしさ [清]〽よしさが茶をたて [藤]〽をたて [清]
〽をたて [藤]〽をたてがながし [清]〽ながし [藤]〽ながし [清]〽ながし組がしら [藤]〽かしら [清]
〽かしら [藤]〽かしらかくし [清]〽かくし [藤]〽かくし [清]〽かくしによらい [藤]〽によらい [清]

〽によらい [藤]〽によらいのわたし [清]〽わたし [藤]〽わたし [清]〽わたじけない [三人]〽ハヽヽヽ

[清]〽けないとハ大のさし合 [藤]〽ヲットそのけないで一ツ上りませ [清]〽何さおれ斗ツリ呑ハなアサアノ＼大喜一ツノ＼ [喜]〽アイとひとつ呑でさす [清]〽ちよつと揚屋町 [藤]〽アイそんならちよびとおあいをおたのミサ [住]〽アイぬしのおあいならひとつのミんしよゥとちゆうと呑 [清]〽イヤちつとやけるハイ [松]〽モシヱおめへよりやアわつちがネやけんすよゥ [禿共]〽アイおめしよう上りんしと(だんノ＼ならべる) [藤]〽サアノ＼お膳が出やしたちとお上りなさりまし [喜]〽モシ清幸さんお上りなさんし 清〽何さめしハ内でもくうハナア諸事のミ事さノ＼ [藤]〽そんならおひらでもお肴に上りんし 清〽さらバひらをくわんとてトしやれながら明て見てなんだ此切身ハ鯖じやアねヱかイヤコリヤアスコ來たハイヤモ甚くさしノ＼長いもにしいたけとハきつい病人イヤおらをバ麻疹でもしたと思ふそふだ(此間女郎ハふたり向合てゆふべのきやくのはなししてゐる)〽禿衆おちやアもつてきてもらおふぞへ

[清]〽サアノ＼大喜此ひら皿で廻すぞ [喜]〽イエノ＼それハ大の悪でござります [清]〽何さ一盃ヅヽぐい呑さノ＼といきもせずにぐいと呑んで大喜へさす(大喜ハしやう事なしに受る禿八分めほどつぐ)大喜ちよつと口を付れバ [住]〽モシヱわつちが助て上んしようと住の江すつと呑んで [住]〽コレちどりや此平アそつちへ下ゲやとなける(若イものきたり) [若]〽モシちとあちらへお出なされませ [清]〽おつとのミ

込〳〵と兩人立バ　藤へアイおたばこ人ハわたくしが持て參りますと　藤兵衛つゞいて廊下座敷の中程松風が部屋へとろ〳〵と入　モシ清幸樣今のうち　清へなんだ　れいこくか呑込〳〵　喜へマアこゝから遣しませう　清へ何サおれが方からやるハなアと(ないものをあるやうにいへば)へ大喜　藤兵衛に一角わたせバ　藤へ行燈のきわであらため　そんならわたくしハおいとまにいたしませうお迎ハ何時へ　清へハテ七ツサ　ノウ大喜　喜へアイ　藤へそんならゆるりとおあそびなされませとちやうちん付て階子をおりる　清へナント大喜此たんすも中ハからであらふノ　喜へそふかネ　清へ此ふとんは大ぶすへくさくなつた　喜へアイそれでも夜具ハ能イ物のはてゝござります　清へ何さおらが仲間の市にせり物に出ると八十四五ぐらひに外ふめねヱ　きさまなどの見世へ持て行と四百こゝの三分ぐらゐ外付ケハせまい　喜へアイマアそのくらゐな事でござりませう　ちどり來り　もしへあつちへおいでなんし　喜へサアそんなら清幸さんお出がよふござりませう　清へマア爰で一盃やつつけふ　ちどりへイヽエマアあつちへきて上りんしよふト手をとり大喜も一所に表座敷へ行キ住の江が床へ入ル千どりハたんすから何やら出して出て行　清へコレ大喜ヤおらがやつハ餘ツ程きん〳〵物だの　喜へアイサ美しいものでござります　清へ何サ夫よりマア此夜具を見やれ仲間へ出しても百四五十匁引ゐが物ハ有こん地の錦にそして緋ぢりめんの三ツ　喜へもしへもん所ハ三ツ柏でござります　清へヤそりやアおれと同じ

紋だなんときついか／＼［喜］ヘヤモすごい事さ［清］此茶だんすの中ハどうだハヽア一ツハざぜん豆一ツは梅ぼしの煮たのだ是さ此ように酒じほだくさんに煮るから此あまつたるさ［喜］ヘモシ／＼それハきつい悪でござります［清］ヘしかし此たばこぼんハ安イコレ／＼下の引出しにハミす紙の残りが少しこりやァなんだハヽヽヽ引ツペがしが四五まい有こちらの引だしハなんだハァ金龍丸だ［喜］ヘモシ今に来やせうにヱ［清］ヘ扨とちがひ棚はどうだハァ浅草のくわんおんのミゑいと三河じまの不動が有ルこつちらハなんだハヽヽヽ改名が張ッて有［下どりおり］ヘモシヱ何をしなんすへと云すてゝ火入を持てゆく［清］ヘサァ大喜一ツ盃呑ふ［喜］ヘイヤわたくしハモウ御めんなされませ［清］ヘハテつき合だ一ぱいのミミやれとつべたいやつを茶わんへうけて喰ちらしの硯ぶたを引よせ残りしゝたけや梨子の小口切をつまミかゝる所へふたりともに来りまだおやすミなんせんかと屏風の際にすわる［松］ヘヨゥ酒をのミなんすネ［清］ヘアイ諸事酒の事さ［松］ヘモシあつちへお出なんしと大喜をつゝけバ［清］ヘそんなに早くねたがらねいもんだヨ大喜もつとあそびやれなァ［松］ヘイヽヱぬしのおじやまになりんすこつちへおいでなんしと大喜を引ッ立モシ住の江様ンおやすミなんしモシヱ　と大喜と一所に部屋へゆく　［松］夜着をかけてやり　モシヱあの清幸さんとやらハ能ク酒をのミなんすネ引そしてマァ能クしやれなんすね引トたばこすい付て出しぬしもちつとおしやれな

んし是ヤそこを通るのハはる野じやアネヱかへアイ　是やァたのミてェ事があるよゥへなんでありんすヱとしやうじを明るへあいノ能子だからの茶を一ッぺい持て来てくりやアへァイへそしてまだ用があると立てはる野が耳へ口を付てアノ丶源兵衛にのそつとノ云ッてくりへ何をヱへアノさつきにノたいんで置イたじやぜんまめをノはやくこしらへてノかミさんの目にかゝらネヱよふにしてノそつとよふこしてくりやといつてそつとそふ云ッてくりやヨウ（以上まで、通志選と同一版木也。以下通志選は、改刻一丁分のみ。——校者）［禿］へァイト行　扨松風ハ立てたんすから　　たばこを吸付て出しそのきせるにて松風も一ッぷくすい　　春野茶を持てくる茶わんをとり　［松］へのミなんせんか［喜］へアイト大喜一日のめバ松風そのあとをのミモシヱぬしやアどこでござんすへ　［喜］へれたしやアいなかさ［松］へ何いなかだへ［喜］へアイ［松］へヱヽにくいノゥ　　［喜］へアヽイタ丶丶

へ扨表座敷にハ住の江あんどうをかんざしでかきたて文を多ばこぼんの引出しから取出して読ム清幸ハムウ今夜ハさむい事ッたそれにゆふべろくにねなんだからねぶくつてならぬ　［住］へそんならねなんしなア　［清］へアイト夜着を足でひろげて半分きて寐る住の江ハ火をせゝりながら枕元で楊枝を遣ひな

がら多ばこを吸バ清幸ハおれにも大かた吸付てくれるであらふとおもつて居れどそふもなく二三ぶくのんで 住へ千鳥やァ引 千へアイ引 住へァノ丶幾里さんのざしきへいつてノ客衆にノ 千へアイ 住へ源さんの所へふ〻を一ッ本届ケておくんなんしと云ッてきてくりやァ 千へアイ 住へコレ 千へアイ 住へそしてもふねや 千へアイへ夫ゟ住の江ハ硯ばこを出して墨を摺り又たばこを吸かんざしであんどうをつゝついてゐる所へ障子の外トより 清うらへ住の江様ンねなんしたか 住へ清うらさんか這入なんし 清うらへアイト内へ入モシおゆるしなんしト清幸へあいさつして今夜の一座の咄しをして半時程あそんで そんなら住の江様ンおさらばへ 住へもつと遊びなんしナァ 清うらへアイぬしさんお休〻なんしと出てゆく夫より住の江はまた硯箱を出し文をなが〳〵と書しまいてヱ丶くやしいナアト筆を捨て

扨となり座敷のせうじの外客の聲にてへコレ文しうモウおきねヱかへ　二のうらが聲ニて）へイ丶ヱなんでも夜の明ケネヱうちやァ歸(ケヘ)しやアしいせんぬしもマァいつてねなんし

いふをきくに付ても清幸ハ氣もすまず多ばことあくびをたがい違イにして居る住の江ハ半時程過てき

たり文を封じて是から上書をしてもらつてこよ　うと又立て行清幸ハ　その内そら寐入して居たれどひとりなれバ永ィあくびを四五十ほど　して耳をすましてきけバ　向ふ座敷　　にて是もちて客と見へて　女郎にしきの　ヘモシヱコレサちつと目をさましなんしヨトゆする　田舍客　ヘヤアおらアハア餘ツほどうんねたそうだ　にしきの　ヘサアめざましに一ツぷくのミなんし　田舍　ヘおらア多ばこくりヤア酒ナ一ツぱい引かけべいサアそれのかんなべサ取てくれなさりやう　にしきの　ヘほんによくのミなんすぞお前ハしんじつがねヱから酒を吞んじやアねて斗ツりゐなんす　そしてマアいつきなんすヘ　田舍　ヘヤアハアさいぜんも言た通り十日時分にやア江戸サ立て歸るからマア當分ハこられネヱヨ　にしきのヘそしていつごろ江戸へ出なんすへ　田舍　ヘ是から又十月になると冬荷を附ケて江戸サへつんでるのだア　にしきの　ヘヱヽモウお前のやうな旅うど衆ウを大じにするわつちやアきついこけでござんすホンニわつちに斗り氣をもませてからにト一ツつめる　田舍　ヘアイタノヽいんにやそりやアいゝなさるなサおいらも一年に三度ヅヽ江戸サへつんでるがおとゝしの春ふつと爰サへきかゝつてから江戸サへくるたんびに万事うつちやつて爰サへ斗り來て居る程のしんじつだア　にしきの　ヘそんならわつちがよふなもんでもかわいゝかへ　田舍　ヘハアテ扨そりやアしれたアこんだア　にしきの　ヘそれがほんならね宵にいつた事をわすれなんすなヱ　田舍　ヘアンニわすれるもんだアしかしさつきもいふ通りだアお

らが國にやアちゞみハねいヨウちゞミハノありやアいちごといふ所から出るヨおらが國じやアきぬや
つむぎふとりのるいでなけりや出來ネヱヨ にしきの へそれでもモウなくツちやアなりんせんヨ 田舍
へハアテ扨むりな事を いふ女郎衆だアいゝわさそんだ ら今度しやうで金でくれべいハサ にしきの
へイヽヱそりやうそでござんす今渡といふと又わすれなんすヨ　田舍へハアテ扨うたぐりのふかいハ
アテそんだら今夜おいていくべいハサ にしきの へほんにかへ 田舍 へムヽウヨさあ〳〵此酒ちくとべ
い助てくれなさりやうサ にしきの へヱヽモウねなんしヨウトあとハひつそりとなる扨それより廊下座
敷へ新造の聲へモシ松風様ンヘアノね住の江様ンの客衆ハぬしのつれ衆じやアござんせんか　松へア
イ 新造 へなんだかいつそはらアを立ていつそ小ごとを言ッて居なんすよ 松 へハアそして住の江
様ンハどふしなんした 新造 へおいらんもねて居なんすよ早くきておくんなんし 喜 へハアそいやア行
ずバ成めいと起る 松 へイヽヱやつばりねたふりをして居なんしわつちがいつてきんすとらうかへ出
て聞バ 清 へそふたい今夜はいめヱましい晩だアなんの事アネヱ川止にあつたよふだアとんと宵から
おれをあけぼしにしてやう〳〵今床へはいつてたハいハネヱそふたい宵からひんしやん〳〵して鬼ぶ
るめヱをくわせらアおれをバナンダきついこけだとおもふそふだトむしやうに手をたゝく 松來りへも
しへぬしやア何をそんなにいひなんすへマアふしやうして ねなんしヨト云時大喜もきたりへモシ清

幸さんコリヤアマアなんの事ッてござります〔清〕へヤコレ大事マアきいてくりやれナア宵からのしうちがそうたいおれが氣にくハネヱけれども何もおのしへのつき合だとおもつておしをこらへてゐればほんにほうづのネヱ事ッた是ナ大事も知つてゐる通り吉原の事タアノ五町に家の数が何ンげん有て茶釜の數がいくつどびんやすり鉢の數までも知て居るおれだアあんまりそんなにこけにしてもらうまい〔松〕へマア〳〵ようござんすふしやうしてお上なんしト松風ハ住の江をモシヱ〳〵とゆすりおこせバ住の江ハ今目の覺たよふな顔をしてなんだへ〔松〕へモシアノネぬしがいつそはらを立て居なんすハナトいわれてふしやう〳〵に起上り〔住〕へヱヽ通らネヱきせるだとはいふきを一ッとんとたゝきモシヱなんの事ッてござんすへあんまり大キな聲をしなんすなへアノよその座敷へ聞へてもわたしよりやアおまへが外聞がわるふござんしやうにヱわたしもネ見立られたがふしやうだからネ

あんまりそんなに太平とやらをいひなんすなへといへば清幸ハやたらに手をたゝけバ下タでハくゞり戸の音がぐわら〳〵〳〵〔清〕へモシ松風さんお前ちよつと若イ者でもやり手衆でもよんでくんなんし〔松〕へ何さゝんなよくねて居んすヨモシ住の江さんマアちつとねかし申しなんしといふ所へはしごをどた〳〵ちやうちん下ゲて〔藤〕へアイおむかいにまいりました〔清〕へムヽ藤兵衛かいゝ所へきたマアきいてくれろトいふより早く明ケの鐘がごん〳〵鳥がかあ〳〵〳〵駒下駄の音

ががらり〳〵

北遊穴知鳥終

安永六季 丁酉 正月 日

神田鍛冶町貳丁目
池田屋傳兵衛

南容先生文集

全

南客先生文集序

橋向 珍南品鑒定

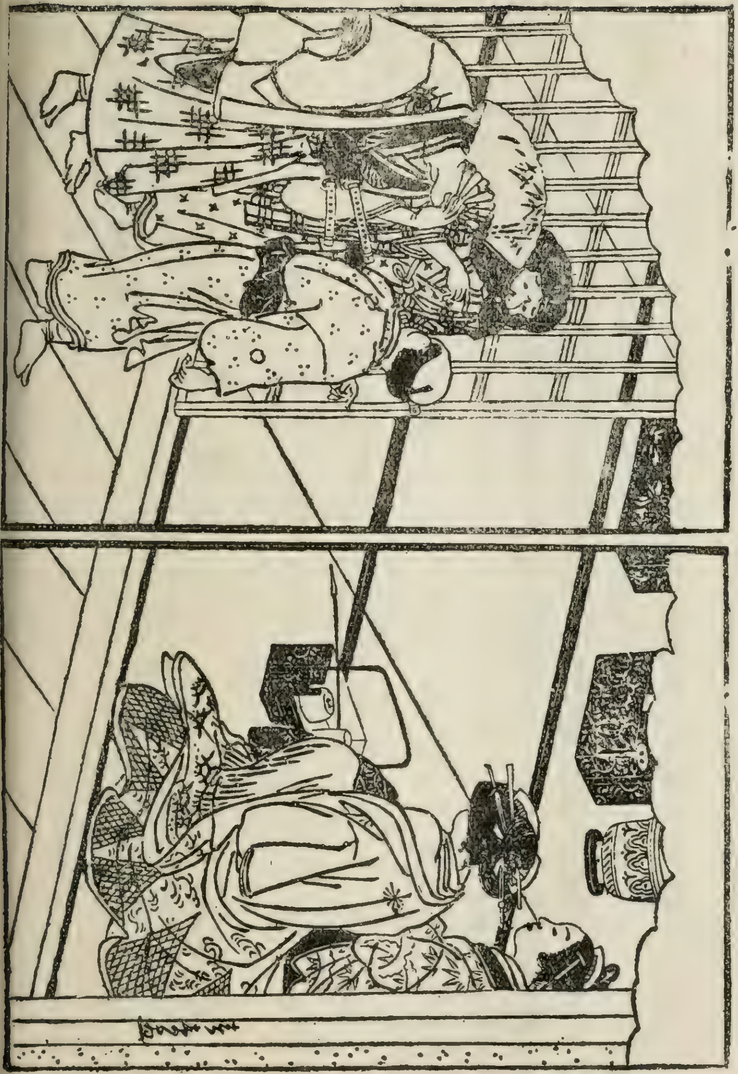
ひとりふられた床の内に南客の文集をよミて牛の小便十八丁の長きをわすれ七ツ八ツ山の一二をさとし得たり　夫東西とハ西東南客とハ南樓の客なん〳〵なさけの文ミるごとくなんだら法師のかきあつめてなにがなんだかしれぬなるべし　此書をいよし御げんの輩日夜にとかく神信心してかよふ神の力をたのミ御殿山の花の朝二十六夜の月の夕母ちよろしき内の首尾に八中宿の大きに御世話となり糠味噌汁の味をしりて咽のかハく時にいたらバそれぞ誠に新橋のお茶でもあがつてお休なんしとかなんとか云

南樓坊路錢書（巴）

南客先生文集

南亭春望

日ー長風暖柳青青北雁歸飛入ニ窅冥　夫は西亭これハ南亭鴈は駕籠なりやつさこらさハ厂の聲　南ハいはずと御すゐじ歸るハ慥に戻り駕籠これハかすりと□［虫（筆カ）］懸て　芝 コレ駕籠よ〳〵　かごかき ハイめしますか　芝 幸ウヽ戻りなら宿まで乘う　かご アイ一盃ぶら下さりやしノウ棒組　バウぐミ ヲヽサなんでもやミけんこさ　かご いさなしに百五十いたゞきやせう　芝 いや〳〵いつでも赤羽根から百五十でのるもいを　かご 今夜ァお前道が惡ふござります　芝 道はかゐくつても下駄ハはいてゐる挑灯ハ有しこまる事ァねへそんなら歩行う　ばう それでも今夜ァもう大分遲ふござりますぜへ　芝 さして屁るなんぞも中〳〵遊びに成ものさ　かご さうおつしやらずとめしやしな　芝 百ならのろう　ばう お茶屋までならそれでも參りやすが宿までハ又よつほどござりますから　芝 夫だから無理にとハいはねへあるく氣さ　かご ようござりますサァ召やし　芝 ソノようござりますにお度ミこりた者だねだり引



ハねへぜへ〔かご〕なにさ御前〔芝〕そんなら直にやつて置う（とかご代を出してわたしながらのる）〔かご〕ばうぐミらうそくが有めへの〔ばう〕ウヽ一挺かつていたゞかう〔芝〕ナニ蠟燭か己が挑灯に今ついだのが有筈だ〔かご〕そんなら夫をつぎやれ〔ばう〕旦那アなんでもむだアねへ（とらうそくをつぎかへ下駄をかごへつける）〔かご〕サアよしかおはき物アつるたか〔ばう〕チイよし〳〵垂ハおろしませうか〔芝〕いゝにやゐへ〳〵〔かご〕二人ヤツさアこらさ〳〵〔ばう〕だんなおなじミかへ〔芝〕もちろんさ〔かご〕何屋でござります〔芝〕川崎の奈良茶だ當て見や〔かご〕万年屋かへ〔芝〕ウヽあすこイも往たが〔かご〕アイあすかア出入でござりやす〔ばう〕一昨日の朝もあすこからお客ウ送り申やした〔芝〕フウ何所まで〔ばう〕丸の内でござります〔芝〕誰が所へ来るの〔ばう〕されば どなたでござりますか夫ア存ません〔かご〕なんでもこいらアゐへお客でござりますよ いつでも究めの外に貳百ツ酒手ハ下さりやすへゝ〳〵〳〵〔ばう〕さつきのお客もよかつたぜへ〔かご〕ウヽ土器町で日が暮たから蠟燭ウ買ますといつたら一本下さつたぜへ〔芝〕宵にそういふうゐへ事をしたら己をば只乗てもゐへぜへ〔ばう〕へゝ〳〵〳〵何をいつても此だんなア如才ハねへぜへ〔芝〕酒手の咄しをすると中で寝たふりといふ所ハむかしの事だよ〔かご〕其御如才のねへ所で此様に急るだものを只じやアごぜんすめへネ〔ばう〕はうぐミだまつて居やれだんながやぼじやア有めへし〔芝〕ちよ〳〵らに懸つたのじやアねへが万年屋が出入と聞ちやア一杯飲せさゐ成めへ

〔かご〕ソレ下さるとよ〔バウ〕なんだとつて大通だもの〔二人〕やつさこらさ〳〵〔かご〕旦那もウ参りやしたぜへ〔ばう〕なんと早うござりませうが〔芝〕ウヽとんだ早かつた〔二人〕さあこらさ〳〵〔かご〕チットまあるぜへ〔ばう〕よし〳〵（万年やの正面へかごをつける）〔若イ者源兵衛〕御出なさりましお遅ふござりましたね〔芝〕チイ如何〳〵（とかごを出てそつと酒手をかごかきにわたし）御太儀〳〵〔かご〕ハイ有難ウござります〔ばう〕ハヽ御きげんよう〔正めんに女郎二人居る〕幸さんお出なんし〔芝〕あいどなたもお揃ひだね〔女郎〕あい左様さ後にいつて逢いすよ〔芝〕ほんに後に来なよ〔源兵衛〕ハヱお腰の物〔芝〕おい（とぬいてわたす但わきざし斗り）〔源〕お小柄ハ〔芝〕なし〳〵（かげみせたしりめに見ながら二かゐへ）〔源〕（先へ立て）ヘヱまづ爰イでも〔芝〕客か〔源〕はい（おくざしきのはうへ行）春風さん〳〵〔春風〕あい（とらうかへ出て小聲に）誰だ〔源〕幸さんさ〔春〕ほんにか何所だ〔源〕角六疊でござんす〔春〕（うれしさうにばたく〳〵と来り）お出なんし大分遅く来なんしたね〔芝〕悪かア帰らう〔春〕ひさしいものさあつちやアどうでもしいすよ〔芝〕どうでもするとつて貰ハねへじやアいや〳〵〔春〕なんでもゐへやうにしゐすよさ〔子共平次〕幸様お茶ァあがりゐし〔芝〕ウヽ平次どうした〔春〕なんでも居なんすね〔芝〕いゝにやけへる〳〵〔春〕おらアいやよ（とそバへ来てよりかゝる）〔平次〕そんな事をおつしやらずとお出なんし〔芝〕あつちの客ァ誰だ〔春〕ヱヽもうすかねへやつこさ〔芝〕やつこたア〔春〕ソレ屋敷のせへ高サ〔芝〕角太夫か

〔春〕あいしい〳〵いやだよ　〔芝〕ナニいやな事が有もんだあんまりかきをいつてくれるな　〔春〕又そん
な事をいひなんすよ大業つもりにもしれた事をあんなものに誰が　〔芝〕今時の女郎衆ア勘定だけへから
知れねへよ　〔春〕何ぞといふと勘定高への気の元に付のといひなんすけれどもなんぼいやしいつとめへ
してもそんなのじやアござんせんよ（とふさぎつめる）　〔芝〕チヽいてへ〳〵　〔春〕それだから居なんしと
いひさあな　〔平〕何かア持てめへりやせうかね　〔春〕しれた事さそしての源兵衛どんにさういやひとり居
なさるとつて　〔芝〕よしか居やあしねへよ　〔平〕あい（うち〳〵してゐる）　〔春〕エヽもうはやくさういやよ
〔平〕それでも（といひながら下へゆく）　〔角大〕（奥坐鋪にて）子供〳〵（とむせうに手をたゝく）　〔芝〕手
めへの客じやアねへか　〔春〕うつちやつて置なんし　〔芝〕そして手めへどうするのだ　〔春〕（少しいびかれて）
どうぞかうしておくんなんしモウ床が廻た物だからどうも床ア貰ハれいゐせんがなんでもわつちせへ
こつちに居ていごかざアようおぜんせう　〔芝〕そんならそりやアそれでも気へがとんだ早へ床の回しよ
うだの　〔春〕ナニサいけすかねへあかるい内から来るしたもの　〔芝〕なんでも金まん〳〵には叶ハねへ　〔春〕
又そんな事をいひなんすとつねりいすよ（此間に〔平〕てうし硯ぶたなど持来ル）　〔春〕ちつと酒を飲なんせん
か　〔芝〕いや〳〵　〔角〕（大きなこゑにて）子ども〳〵　〔春〕アレ呼なさるいきやな　〔平〕あい（とおくざしきへ）
〔芝〕月見はどうする　〔春〕アノへんちきに仕回せやす　〔芝〕そんならつとめざあなるめへぜへ　〔春〕なあに

さ［平］春風さんにお出なんしと［春］エヽすかねへ今にめへりやすといやな［芝］マア往てきやな［春］そんならさうせうかね［芝］ウヽそして今往て後にやアいかずと済やうに何もかも仕廻て來や［春］エヽもうよしなんししミ〳〵すかねへ（と出て行）［芝］平次やあつちの客ハほんにやつこか［平］アノ角さんとやらでござんす［芝］今夜來たか［平］イヽエ晝からお出なんす［花里］（らうかより）幸さんお出なんし［芝］どうしなすつたちつとよりな［花］エおい（とざしきへはいりつくばつて居る）ほんに今夜ア悪うおぜんすねへ［芝］いつでも此位なものさ［花］ほんに春さんも氣がもめるだらう勤といふものハ仕かたのねへもんだねそれといへば助さんハどうしなんしたへ［芝］助も此比じやア四谷イはまつておゐねへよ［花］ほんにかへ成ほど客衆といふものハまアいゝもんだねお前なんぞもアノまねへしなんすなへ［初梅］幸さん遅くお出なんしたね［芝］初さんかきな〳〵［初］おめへひとりかへ［芝］あい［花］助さんハ新宿イいきなさるとさ［初］何所へでもいつたがゐへのさ［芝］ありやアまあなによを腹ア立た［初］ナニサはじめハなんでもねへ事でござんすそれといふがわつちがいやになりなんしたからの事さ［芝］お前もまた文でもやれバゐへハサ［初］エヽモウ文も幾度かやりやすそれに春風さんや此子達の所からも文をやつてくんなんしたけれども來なんせん［芝］それじやアどうも仕様がねへ［初］どうせわつちがつき出された物だからあきらめちやアおりいすがどうぞ成う事ならモウたつた一度つれ巾て來ておくんなんし［芝］なん

でもあやなして見やうよ 〔初〕本にお頼ん申いすよ 〔花〕初様がなあにノ＼といつても助さんにやアまだ氣が殘て居るて 〔初〕さうじやアねへけれどもさ 〔平〕次アイお茶漬を上りゐし 〔芝〕どれ爰へよこしや 〔初〕なんざくハせなんし 〔芝〕何もねへさうだ 〔花〕ちよくハなんだへ 〔芝〕もミ大根ださうだ 〔初〕よしノ＼それでまんまアくわせなんし 〔芝〕さあ喰なノ＼ （初）コレ平次やあつちイいつておれが箸を取て來てくりや 〔平〕あつちたアへ 〔初〕ヱヽ此子もほんに春風さんの小單笥（マヽ）のいつちうへの引出にあるハナ 〔平〕あい（と立て行） 〔花〕サアまんまを盛て上んせう 〔芝〕いゝへわつちが 〔花〕ハテお出しなんし 〔芝〕そんなら憚ながら 〔花〕さあ 〔芝〕アイとんだ盛様が上手だの 〔花〕其筈さ飯盛だものホヽノ＼ノ＼ 〔平〕アイお箸 〔芝〕ウヽよくしたノ＼あつちの客がめづけ（マヽ）やアしねへか 〔平〕ナニ寐てお出なんす 〔芝〕春風も寐て居るか 〔平〕どうでおぜんすか 〔初〕さくやつさ 〔芝〕二人ねて居るときいたら飯もくへさうもねへ 〔花〕ヱヽあつかましいの 〔初〕コレ平次や手めへに頼む事がある此かさア持ていつての醤油をちつと貰てきや（此間暫く有てめしもすむ） 〔平〕あい 〔初〕モウ入ねへ 〔花〕今に成て持て來てなんに成るもんだ 〔初〕サアお膳をさげや 〔平〕アイ此醤油アどうしやせうネ 〔花〕どれ（と取てしるわんへあけすぐにふたにして） さあそれでゑへ（膳さがる） 〔源兵衛〕今晩はだいぶお涼しうございます 〔芝〕段ノ＼斯だらうよ 〔源〕チトあちらへ 〔芝〕何所だ 〔源〕表坐布（マヽ）でございます 〔花〕又後にめへりいせう 〔初〕さあおらもいかうそんならお頼ん申しいし

たよ　芝春込〳〵（花ハおくざしきへ初ハ表のはしごへなりる）芝サアいかう〳〵（と羽折鼻紙入など取集て表ざしきへ）春（此所へ來かゝり）何所へいくのだ　花表ざしきだよ早くいきな（といゝながら行）春いらぬおせわさ幸さんおめへ何かを持なんしたかへ　芝ウヽ持た〳〵　源まだ何か落てをりますへヱお箸だそうだ　春ドレ爰へよこさつせへ（取て同じく表ざしきへ）源（もつてゐて來り）介さんハどうなさりました　芝此ごろハとんだ所いくよ　春どこいへ　芝新宿さ　春お前もいきなんすだらう　芝ナニいくもんだ　源ほんにだいぶあつちもゐへさうでござります　芝助がいく内なんざアとんだゐへ内よ　春ソレ見なんしいかねへものがゐへ内か悪い内かどうして知れるもんでおぜんす　芝ナニサ助が居つゞけの時迎へにいつた斗り遊びハしねへものホンニ源兵衛どんが待遠だらう（とつとめた出してやる此とり引の内ハ女郎ハはずすものなれどもふかきなじミのきやくゆゐかまハず居る）源左様なら御きげんよう　芝おさらば〳〵　春蚊屋ア釣うかね　芝ナニそんなにゐるやアしめへ　春役に出たら起て釣うね　芝ウヽさうしや　春そんならわつちやア　芝一寸と手水にいつて來よう　春手水がいやだね　芝手前の眞似へしい〳〵したらつゐくせになつたよ　春ヱヽ氣味さはやく往て來なんし　芝ウヽそこの手拭ひを取てくりや　春さあ　芝（いきな聲ニてしん内ぶし）義理一ぺんの仇つきハ結句心のもめるたね（と語りながら小用所へ行

ほどなく 芝 今度は唄にて）それを疑ふ事かいなさらりと柳にやらしやんせ 戸川（廊下ざしきせうじの内たし）幸さん〳〵ふゝものをあげう 芝 なんだ〳〵（ざしきの口にまつて居る）戸（手ばかり出して）サアおめへにやらうと思つて除て置た眞實だと思ひなんし 芝（紙づゝみをあけて見ル）チヽきゐ〳〵ちつと噺しに來な 戸 後にめへりいせう 芝 おかたじけよへ（といひながらせうじをあけてはいる） 春 誰に礼をいふのだへ 芝 戸川さんがこんなものをくれた 春 何だへ 芝 煎餅さ 春 久しいものさ子共じやァ有めへし戸川さんハなんぞあるとお前にやるよそしてかはつた事でおらが内の女郎衆アみんながお前をば可愛がるよ 芝 男がふへからさ 春 又鹽屋アいひなんすよ 芝 みんなに可愛がられずとも手前に可愛がられてへ物だ 春 是よりうへの可愛がりようはねへものを 芝 まだ〳〵 春 ナニまだ〳〵な事が有もんでおぜんす 何でもおめへのいひなんす事をちつとでもそむゐた事アおざゐせんそれが可愛くなくつて成もんじやァおざいせん 芝 それでもおらァまだうたぐつて居るよ 春 なぜへ 芝 マァ第一手前が唄をつくからよ 春 何をわつちがうそをつきいした 芝 あつちの客ハ晝から居るさうだそりよう手前ハ今夜來たといつたじやァねへか 春 それだからわつちやァあかるい内から來たといひしたもの 芝 あかるい内といつちやァどうか晩方來たようだハサ 春 そんならわつちがいひ様の悪るのだから堪忍しておくんなんし 芝 そゝやァ夫にもしてやらうがどうも

疑へハはれねへよおれにする程の仕内アあつちの客にもするだろう　〔春〕そりやアもうお前の欲といふもんでおぜんす始終の事迄約束しておくものを　〔芝〕その始終の事からしてがおらアまだあやふやで居るよ　〔春〕そりやアもうお前でもおぜんすめへマアよく積ても見なんしこれが年季で永いといふじやアなし今月がたてバ中二タ月外アねへものをそりよをお前ハまだうたぐつて居なんす様じやアどうもうれしくおざいせん　〔芝〕それでも引手數多の客だものその中にやアどんなきまりがあるかしれねへ　〔春〕又そんな事をいひなんす夫もどうも詰りいせん何でもお前のよぶなといひなんす客衆ア一人でもよびやアしいせん久米さん達だとつてもさうさわつちがはうに何の氣もねへけれどもお前がなんのかのとつて氣にしなんすもんだからさつぱりつき出して仕回いしたほんに此ごろじやア外聞の惡いほど初會ばつかり取て居いす夫だとつてももうちつとだと思つて構やしやせんはうべい衆の前も部屋のめへもかまはずになんでもお前いひ次第にする物をいつまでもうたぐつて居なんしちやア余りむごいといふもんでおぜんすどのやうにもお前の胸に落るやうにどう引でもしいせうからどうぞ疑ハねへ様にしておくんなんし　〔芝〕なんぼ手前がそんな事をいつてもおれも又うたがふめへもんじやアねへなぜといや今でこそおれが名斗だけれどもほりものも三ツ四ツあつたじやアねへかさういふ氣の多る手めへだからうたがう筈だハサ　〔春〕さあ夫もお前がけせといひなんす物だからミんな灸をすへて仕回いしたと

へ又けさねへとつてもいつの事たかしれねへ死だか生たか知れもしねへ人の事をそんなにいひなんす事アおざいせんお前こそ此頃じやアひところのやうじやアねへ少の事をもやかましくいつてあひそをつかせがしな事をいひなんすけれどもわつちやア又おめへがどのやうな無理を云なんしても腹ぉたちやアしやせん此中なんぞも足蹴にまでしなんしたけれども なんとも思やア、やせん一通りの客衆ならなんぼ腹ア立ても足げにもしやアしめへけれどもお前も一通りでねへ氣だからと思へバ嬉しゐとこそおもひいす外の客衆にあんな事てもされて見なんしどうしてだまつて居るもんでおぜんす 芝 そんなら此中あしけにしたのが今にくやしいといふ事か 春 アレ又おかしく聞ていじめなんす何でも此ごろじやアお前の心がかハつたよ大かた助さんと新宿イいきなんすからだらう道理でさつきもゑへ内だのなんのといひなんしたつけ 芝 そりや又付合でも一度や二度ハいくめへ物じやアねへハサ 春 そりやアはや付ゑへでいきもしなんせうけれどもひよつとあつちが面白くでも成なんしたらわつちやアどうしようと思ひなんすお部屋はじめ傍輩衆お針様までもわつちをバお前の所へいく物に思ひ切てゐるものを若お前の氣でもかはるとどうも(なき聲にて)皆の前イも立ゐせん 芝 夫だから手めへを呼めへたアいやアしねへそう云ばどうやらそつちから注文を付て己が心がかハつたといはねへばかりだ 春 ナニサそうじやアおざゐせん よもやかハりやアしなんすめへけれどもひよつとかハりなんしちやアと云

事ておぜんすちつとの事をも詞質をとつていぢめなんす（しく／＼なく）〔芝〕夫ならいじめられるが悔しいのか　〔春〕アレサ何くやしいのなんのといふのじやァおざいせん否に成なんしたからの事かと思ふからさ（なきながら）いぢめられてもどうされてもさうされる筈の人にされるのだもの何の爲に悔しるの腹が立のといふもんでおぜんす余りといへば疑へぶかい（としきりになく）〔芝〕そんならゐへハな馬鹿な泣事ァねへ　〔春〕それだこつてもあんまり　〔芝〕ゐゝよ尤だよおれが悪かつたから堪忍しやよよさ（マヽ）〔春〕そんなら御前の心ハかハりハしねへかへ　〔芝〕ナニかハるもんだおれだとつても助はじめ皆も知つて居るわけだから手前を女房にしねへけりやァどうも皃が立ねへ　〔春〕さうせへ思つてくんなんせばなんにもいふ事ァおざいせん先も近へ事たからどうぞお前も辛抱しておくんなんし　〔芝〕手前も替てくれるなよ　〔春〕ナニサ馬鹿らしい私をば案じなんすなよ　〔芝〕見やわせて兄貴の所へも行て置うか　〔春〕どうぞさうしておくんなんし此中來た時大概咄しちやァ置いした　〔芝〕此比にいかう　〔春〕その時ァ一本さしていきなんしよ　〔芝〕しれた事さ　〔春〕今夜ァ寒ゐねへ　〔芝〕寒いといふ程じやァねへが涼しる　〔春〕なぜかわつちやァいつそさむく成たよ

[奥坐鋪]（[角]ハひとりまじ〳〵とねもやらずまてどくらせどこぬ故若イ者を呼たく思へどもいつも夜更て手をたゝくと春風がしかる故夫もならずめつたに小便にばかり行て下の廊下をうろつく所へ中ばたらきの治助が居風呂の水をくミ込に起て来たをうれしく）[角]コレ若イ者〳〵 [次介]はい私かへ [角]ウヽお身にちと頼たい用があるて [次]何でござります [角]どうぞ源兵衛を呼で呉やれ [次]まだ臥て居ります何ぞ御用なら私に [角]イヤお前じや済ぬて一寸起してたもれ [次]ハイ只今さう申ませうマアお二階へお出なさりまし [角]そんなら待てをるぞや（と二階へあがりおんどうのそばへしやんとかしこまり扇をぱち〳〵してゐる）[源兵衛]（目をこすりながら来ル）あなた様お呼なさりましたかへ [角]ヲヽ呼だてや [源]なんでござりますお駕籠の事かへ [角]いや〳〵左様な事でハおじやらぬアノ春州が先刻手水とやらに行とて出られて今にわせぬがこりやマアどうした事ちやい [源]イヘ大形お客のお連さんでもお出なさりましたらうから [角]イヤサお身までが其様にチヨチヨラとやらをいふがマア能思ふても見い晝から身共が買切た女子じやぞやそれにまたお身なども粗聞及んでも居やらう彼人とハ永い契約をもして役替の時ならでハせぬ血判のある書付まで取かハした身どもじやぞや夫とも身共がいふが虚言だとおもやるなら今にも出して見せ申さう [源]イヱモウ其事アつね〳〵あのお子もおつせんすから存てをります [角]それに又かの人のいやる事ハ（小ゆびいはらを大ゆびでおさへ）是ほども背るた事ハないぞや此とり

つきにも寐道具を拵てくれといふてじやゆへとうに松坂やへ申付た大かた翌などハおこすじや有う去春などハ身どもが在國の時分しばらく逢ぬゆゑなんぞ望ミのものハおじやらぬかといふたらばわたしやどうぞ小袖がほしひといふてゞ有たからに色〳〵の望ミにまかせ夥敷申付て遣ハしとんと上り金をミなにして道中なども太かんなん苦勞したてイ其時分かの人の方よりも何ぞかたミをくれんかといふたらバこれ見い肌に付てあかづいた繻絆を一ツたもつたコレ此やうに少しも肌身はなさず守り袋と同じやうにしておくていナかく〳〵のごとくの心底じやその外諸事万事何でもいはるゝ通にしておますも年季さへ明たら國許へ同道しようと存るからの事じやハサ尤年季の内にも金銀づくで濟事なら今にも同道しようといふたけれども親方殿の厚恩をうけられたゆゑ年季のうちハ勤たいといやるから忠臣の心にめんじて其分に差おくケ程に存る身どもを等閑にせらるゝハ何とも其意得ぬ事じやないか　源イヱ何さ春風さんもお前の事を中〳〵そまつにしなさる氣じやアごぜんせんけれども大かたお客のお連が（と云ながらざしきを立ておもてざしきの口へ來り）春風さん〳〵　春なんだ　源ちよつとこゝで　春ゑへハな這入せへ　芝來てもよし〳〵　源はい（せうじを明て入ル）どうもやかましくつて成やせん　春ヱヽうつちやつて置つせへな　源夫でもいつそくだら（カ）すでごぜんすマアちよつとお出なせんし　春ナニサもうちつとさつきまで居て　芝やかましかァ往て來や　仝ナアニようおぜ

んすそしてどうしたこんなア（マヽ）呼つけたか　[源]アイ次介を起しによこしなせんした　[春]おへねへとんちきだのヱヽ今にいくといはつせへ　[源]ヱあい（と立かれてゐる）　[春]さういはつせへよサ　[源]あい（出て行又おくざしきへ入）　私が申た通りでござります表ざしきにお客のお連さんがきてお出なせんすそれに何かいざがござりますから其譯をつけて今にお出なせんす私によく申てくれろとおつせんした　[角]今にわせるかの　[源]へヱもう押付お出なさりませう　[角]そんならよいハ大きに世話じやつた　[源]はい左様なら　[角]ヲヽ休ミやれ〳〵　[奥の]　[隣坐布]　[客勘太]長坊や〳〵　[割床ツレ長吉]なんだもうだまつて寐やれ又醉が出るぜへ　[勘太]いんにやよ今のせりふウ聞たかとんだ化物もあるもんだの左様屋の然者様といふ女郎衆ウ買せてへの　[長吉]惡口をいやんなよ　[勘]夫だつてもあんまり變だハナいざりといふ物ア有が等閑たア何の事た　[長相方直江]もしへそんな事をおつせんすなへありやア御やしきのネかのさやわりだよ　[勘]ナニサゐへハナたかであいつらア爰へ來ちやア日影もんだハナ本の事たがおいらアまた（だカ）しらきちようめんの取てあるの明いお客様だ御門番のせうぶ革にお薬をかつてちいさくなつて御門を出這入ウするちんころウ見るやうな野郎たア違てゐるハイ醉て太平樂ウいふようだけれどもおいらが女郎買に出るにやア大屋さんが鐵棒で逐らつしやるな番太郎が三拍子木か自身番じやア町代書役ウはじめ皆が惣下坐だ錢金アナ日なしの所から遣ほうでへだまだ質屋のばんとう殿アおじ様ぶんだ

から通ひなしにちよんのまの通用もすきにする箔の付た女郎買だあしたの朝歸るとナ地主様から水雜炊をよこさつしやらア 〔長〕是さ〳〵 〔勘〕エヽもう打遣ておかつせへな 〔直〕〔江〕こまつた物だね 〔長〕あの子アどうしたの 〔直〕ねてゐるさうさ（とおきて）おゆるしなんしよ　コウ花ざとさん〳〵 〔勘〕相方花里エヽウヽヽ 〔直〕是さ花里さん〳〵 〔花里〕（ねごと）そけへ置いしたよ 〔直〕チヤどうしやうの寐言ウいはずと起なよ是さ〳〵 〔花〕何だへ 〔直〕なんだへじやアねへ客衆が起て居なさるハナ 〔花〕エヽけしからねへお前も何でおぜんすな 〔勘〕なんだけしからねへ。こいつも唐人だけしがからけりやア山椒や蕃椒ア佐渡イ金堀にでもやるハイ 〔花〕チヤつゐぞねへどうしいしたナ 〔勘〕つゐぞあるかねへかふさつて居て何知るもんだ 〔直〕よしか隣の客衆の物言がをかしいとつて先から何のかのといひなんすから喧嘩にでもならふかと思つてはあ〳〵するハナ 〔勘〕ナニ喧嘩こいつアよからふきついおれが好物ゝだ久しく切れねへちつとひや〳〵と切れてへの西瓜じやア有めへし 〔長〕コレ勘太や〳〵 〔勘〕何だナお身さま達ア上納あけの切店へ見るやうにびく〳〵怖がる事アねへハナ 〔花〕ナニ怖がるのじやアおぜんせんけれどもネ 〔勘〕けれどもならそつくらと共へ置てくんねへそして何だナ宵からくたばつて居やあがつて今になつて息を吹返して騒ぐ事アねへハイ 〔花〕夫でもお前がねろといひなんしたじやアごぜんせんか 〔勘〕ウヽ寐ろたアいつたが死だまねへしろたアいはねへハイ 〔花〕何所に私が 〔直〕

是さ〳〵主ア酔て居なさるハナ［花］夫だとつても［直］お前も又あれほどに起てさはぎなさるもしらずに寐たのも悪いからちつと腹の立事が有ても［勘］なんだ腹ア立たとこいつアゑへハイ隣の客と金平の子を取アゑへ［直］（小ごゑにて）又隣の事をいひなんすよ［勘］（生酔のくせにてとめればとめるほどおほきな聲して）いふがどうしたイ隣のべらぼうが（といふ所を花勘太が口へ袖をあてるをおしのけて）［勘］なんだ此ふんばりめがおれう殺すのかどうするのだどうでもしろ〳〵（と花ざとへ取てかゝる故となりのうわさハやむ［角］ずいぶん虫をころして居れどもとなりのべらぼうといふにむつとしそのうへ春風がまだこねゆゑむせうに腹も立てなんとぞいひたけれども　相手が相人(マヽ)なれバ小氣味もわるく又若ひ者を呼んと思ひて　廊下へ出る所へ［春］ハ奥ざしきの大聲を聞つけ心元なく來たる）［春］（つこど(マヽ)なるこゑにて）何所イお出なんす［角］（うち〳〵して）いゝや何所へも［春］何所へもなら這入ておよりいしなモウ何時だと思ひなんす［角］イヤ何時とおもふとハ此方からいふ事ちやハイ［春］何をお前がおつせんす事が有物でおぜんすそして恰好の悪いちつとの內連衆の所イいつたとつて寐て居る若へ衆まで起しなんす事アおざいせんお前だとつてもきのふやけふのお客じやアあるめへし何のためのなじみでおぜんすそして又若衆ウ呼びに行なんす氣かへ［角］イヤそうでハないが隣の客人が身どもが事を悪ざまに雜言しめさるけれども場所がわるいと押默て居れバ付上り彌以過言を［春］エヽモ大かた酒にでも酔て居なんすからでおぜんせうハナ［花］（となり

できゝつけ）春風さんおやかましうおぜんせう [春]いへもうお互ひでおぜんすサアもしおよりいしな[角]寐ハねようが　[春]寐ハ寐ようじやアおざいせんハナ（とむりに　引すりこむ）[角]お手前表の坐布ニも客が有じやらう [春]アレサそんな事アしりいせんよだまつておよりいしナ [角]そんなら客ハないじやの [春]あれバ有といひさアナ [角]それならよいハサ其様に腹をたつ事ハおじやらぬ [春]夫でも有もしねへ事をいひなんすから [角]イヤ身どもが推量でいふたハ不念じやから堪忍し給へ是さ／＼ （春となりハます／＼） [勘]長坊や／＼手前斗もてたと思つてむねくそが悪いぜへ [長]いゝにやモウもてたかなんだかしらねへが賑過て夜一夜ねずにしまつた [勘]そんならお身様アおれがさハいだといふ事か [長]ナニ其事じやアねへ [勘]夫でもどうか [長]どうかも何もいらねへ今朝アおらア早く屋敷ィ棟上にいかねへじやアならねへからモウいくぜへ [直]まだ早うおぜんせう [長]いゝにへもう [勘]マアもう一盃 [長]いや／＼又伊勢屋で飲うさあ／＼[勘]おれがきせる袋ア [花]アイ爰におぜんす [長]今夜ハ大きに [花]そんならお帰りなんすかへ　又お近へ内に [長]あい [直]おさらバへ又御出なんしよ [長]あい此頃に [勘]サアいかう／＼ [花]アレサお待なんしぬしも一所に（四人とも下へ行） [角]隣の客人ハ帰られたさうナの [春]エあいさつき何といひしたへ [角]いゝやサ身共が口眞似をしたりなどしてありやアまあ何者じやの [春]初會だからしりいせん何

でも町さ [角] いか様丁人といふものハ法外なものじやてナ [茶屋久七]（きたる）町人がどうしたとへ [角] 是ハ御免〳〵時に何時じやの [久七] 今六ッ打やした [角] 夫ハ遅く成た（とうろたへる） [春] 伯父さんマア一ぷく呑なんし [久] 今朝アよくおきてお出なんしたネ [春] ナニサまんじりともしやアしいせん [久] 夫アきついものネ [角] いゝにやの [春] エヽサ譯も何もいひなんすにやア及びゐせんそしてお前父いつお出なんす [角] 月見前ハモウ來られまいよ [春] そんならお出なんせんでもゑへがかの物をバよこしなんすだらうネ [角] ウヽ夫ハ歸つたら直にもたせておこそう三ッでよいの [春] エヽモウ夫じやア足りいせん四ッおくんなんし [角] ウヽ何でも後におくさうよ [春] そんなら待て居いすよ [角] その代に文をバ認めて置じやらうの [春] そりやアもう [四] そんならおさらば [春] アイ文を拵て待いすよ [角] おゝさ [春] おぢさん又お頼ん申いすよ（とうらばしご方三人ともをりる暫くして） [春]（おもてばしご方上りきたる）幸様〳〵サアこつちイ來なんし [芝] いゝにやモウすぐに歸う [春] アレサ何でもけふハ歸しやアしゐせんよ [芝] 夫でもどうも居ちやア詰らねへ事が [春] エヽモ夫アわつちが方でどうともしいすよ [芝] そんなら居てもゑへか [春] ようおぜんすよサアあつちイ [芝] そんならいかう [春] さあ〳〵（とつれておくざしきへ行） [春] サア湯のあく [芝] ウヽ大分 やつこ臭ようだ [春] すかねへよしなんしよ [芝] 何も小言アいはなんだか [春] ナアニお前の來た事アしらねへハナ [芝] 夢助だ

の成程さういふ所で結句面白からうよ［春］ナニサ面白へかをかしいかねつから氣がしれねへのさ

○二かいハひつそと靜まれば表はにぎほふ馬士ぶしのなあアヽよ引の尻聲長持も戻れば輕ゐとへらず口瀧登りする鯉すらもしたがる物は女郎買所かはれバ品川の粋事惡洒落持て來い（マヽ）客ひとつに綴る滑稽にもう百足て酒を壹斤〳〵

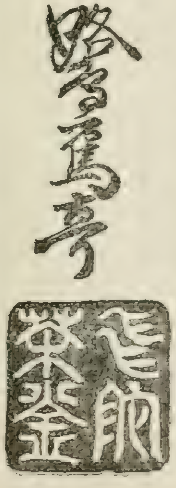
呼子鳥　全

序

孔子曰。卿人儺てうふくしてそかいにたてりといへり。我朝にて儺する事。慶雲三年に天下諸國ゑきしつ百性多死。依て土牛を造始て儺すと日本記に見たり。今にたへせぬ節分の豆まき。分て今年ハ淺艸の年の市の豆蒔と。我も〳〵と祝ひ壽くなかにも。幸なるかな年忘せんと朋友ども大勢あつまり。三味線長唄淨瑠璃聲色の大さわぎ。中にも浮世こわいろを得てたら者。餘りにおもしろさ書うつしけるを。朋友のうち書林伊勢屋の某。櫻木にちりばめむ事をこひて。呼子鳥と名附て小冊とハなり

安永八ッのとし

亥の初春



品川八景

口上

もんも七年かつぱも一度ハ川ながれ。どろつくどんとなる神なりも。雲のたへまをふミはづし。大地へとふどおちこちの。神子でさへさの(マヽ)とおりまして。ぼんぶわれ〳〵の中まする事いたしまする事。申そこなへがちいたしそこないがち。そこどころハぜんご柳原の古着物ハのりづけじやとおぼしめされ。御やうしやあつてお聞下されませうず。先ツ上ハ金杉ばし肴市がはじまりでござりまする。肴市 たいやはもふハ大わらもハアめたハア しらこへ わらさハアいしもちハア 大ぜい やつさ〻〳〵いくら〳〵〳〵 こへがハり ぶりがれんか五まいでか うりて い〻や。そうハうらん。やつさ〻いくら〳〵 かいて ろんじがれんかアい うりて ろんじがれんうりよ なまゑい 権やい つれ なんだへ。あれミやもう七ツ過た なまゑい おつつけ日がくる〻のふ つれ うさアねヱ なま なんとし〻へでもいかふじやアねヱかのふ つれ よかろう。あれあそこへ七がくるのふ なま どれよびやなア つれ 七やい 友だち 何ンだ なま てめヱどけヱいく つれ 七さんなんざア。此ごろハしくへおいでなさるハイ

[なま]いたねヱやろふじやァねヱか。うぬがあたまをもつて火事見まひにいきたいわい [つれ]これそんな事をいふな [なま]それでもあいつがあたまが。とがつてゐる [友だち]いやらしい。うぬがおれがまねがなる物か。おれさまなんぞハ。此ごろハかごにのつておいでなさるハアヱ [なま]いけねヱ。もつこうにのるがあきれるハイ [つれ]よしやれな。てめヱハ酒をのむとわりいことばつかりいふ男だ [かご]はいかご かごわいかいかご [なま]なにかへゑヱかごならかきやれな [つれ]よせといへば。むかうハせうばいづくだハなァ [なま]なんのかりてのつていかァな。かごよ [かご]はい [なま]しくまでいくらでやる [かご]はい貮百五十でござります [なま]ばかつつら。貮百五十だせばおぶつてかへるわい [つれ]これのらバのりやな。ゑいおれがのみこんでいるから。いくらでもやりねヱ [かご]はいさやうなら。ぼうぐみやい／＼はやくきやな [ぼう組]おゝい。さあおのりなさりまし。それおぞうり。さあやらかせ [かご]おいがつてんだ [かけ合]やつさアこれハさア／＼／＼

[とちのきをい]なむあァだァ。なァむあみだァ [むすこ]高尾を一トくちうたふへたばこのんでもきせるより [きをい]文吉さん／＼／＼ [むすこ](やさしく)なんだな。たれだか [きおい]たれもん。おれだハなァ [むすこ]フム喜太郎さんか [きおい]ウム [むすこ]おまへどけヱいく [きおい]どけヱいくとハしくへでもいくにハ。店下廻りほうかむり。ヨクあるやつさ [むすこ]そふじやアねヱか(がカ)のむかふからお

ぢさんがくるからの〔きおい〕なんの事だかやくがくるがあきれらア〔むすこ〕そん事(なノ脱カ)をいわずと。おれといつしよにあいびなよ〔きをい〕それじやアどうか。おぶさりたいようでよくねヱのふ〔むすこ〕おぶうもだくもいらねヱ。あいびねヱ〔きおい〕そんならいこうか〔かご〕やつさいこれハさい〳〵〔きおい〕あれみな。にぎやかだのふ〔むすこ〕ウムおめヱ一ツぱいのまねヱか〔きおい〕まあもつとさきにしやう。それハそうとおめヱたちや。しくへでもいくとつうだのふ〔むすこ〕なにさ〔きおい〕それでもしくすゞめだ〔むすこ〕マアしくすゞめまじやアいかねヱが。しくとんびくらゐな物さ〔きおい〕うそアねヱ。しんねいぶしをかたりねヱ。しんねいぶしを〔むすこ〕なんのとだ〔きおい〕だいしさんよ〔むすこ〕しん内ぶしがなる程あいさにやアいきな物よ。ずつといきやす。それから女郎を見立てあがると。さかづきがすんでしまふと。しやれがすミやす。そうするととこがまわると。もふくるか〳〵とまつてゐて。たぬきねいりもふるいから。それしん内ぶしよ〔きおい〕ムヽうそアねヱ〔むすこ〕ところで茶(ちや)やなんざアつうだ〔きおい〕そうだろう〔むすこ〕まづとつつきが石ばし萬やか。そのつぎが新万か。ときわやか。しなのやか。坂口か〔きおい〕なるほど〔むすこ〕それよりハまだきつい事があるが〔きおい〕なんだ〔むすこ〕しくのうちで。四百ぞう五匁十匁のしるしがしれるが〔きおい〕ムヽこいつアきつい。どこでしれるのふ〔むすこ〕から紙(かみ)にハ四百にハこもちすじがあるが〔きおい〕はてな〔むすこ〕

五匁にハ梅ばちがあるが きおい はてな むすこ 十匁にハ九やうのほしがあるが きおい きつい物だ
ちつとまたつし むすこ なんだ きおい ふんごんだ。紙（かみ）を一まいくだつし むすこ おめへのふんごむ
たんびに。小ぎくのがゝがいたいの きおい ヱ、いけねヱ。小ぎくとゝせて小ばんしか むすこ そん
なじやァごんせぬ。御りやうがんがくもらぬかどゝさ きおい なんの むすこ それハそうとにぎやか
なとだのふ きおい ム、 かご やさアこれハさア〳〵〳〵。もうしだんな なまゑい ム、ウ、、
かご 申いびきといふ所じやァござんせんぜヱ。七間へ参りました。ほうぐゝと二人に山ゝ一升とい
ふ所おたのゝ申ます。申 なま なんのこつたィ。のましてよけりやァこつちからのませるハい つれ
ゑヱおれがのゝこんだ。やりねヱ 七間茶や おちやあがつておいでなんし。たばこをあがつてお
いでなんし。（これハいろ〳〵 聲かハり）きおい おゝい。ちとまたつし むすこ なんだなァ。よふまて〳〵といふ
のふ きおい はながゝ入だとおもつたら。わらじだつた むす そんながいぶんのわるい事いひつこな
しさ。おめへ金をひろつたらどうする きおい 金をひろへば。すつとなりをこしらへるのさ むすこ
ム、どうこしらへる きおい まあ今じぶんなら小袖三ツ。あかはかたの帯むなだかやわたうら付ケ小
ぎく四ツおり むすこ それがやほだ。おいら金があると。まづとび澤町へはけやす。女物の古ィのを
あさ市でやすくかうハ。それにつれて帯のやすいのをかつてしめるハ。のこつた金でけいせいかい

〔きをい〕こいつァゑいわい　〔あんま〕（こへなかへて）三人程あんまはりのりやうじ・こはたのすし引・そばい〱引・にしきだんごハようござい　〔きおい〕是ハにぎやだ（マヽ）　〔茶や〕さハぎ（ふか川ぶし。さまよはや事あり）　〔茶や女〕これ申およしなんし。おてうしがこぼれんす　〔きやく〕ゑェハな。もちつとこつちへよりねェな　〔きおい〕あれミさつし。もうしく〱きた　〔むすこ〕どれ。はゑイ物だのふ　〔ばん人〕火のやうじんさつしやいませう　〔女郎や〕申〱大ぜいござります。申〱申　〔きおい〕こゝハ何やだ　〔女郎や〕はいほていやでござります　〔きおい〕フムていしのはらハさぞ大きかろふのふ　〔むすこ〕ざつをいひこなし　〔女郎や〕申〱〱おあがりなさいや。大ぜいござります　〔きおい〕こゝハ何やだ　〔女郎や〕こゝハさどやでござい　〔きおい〕む（ん）しくでもくるにハゑイ内だのふ　〔むすこ〕そんな事いひなさんなよ。女郎衆ハふたりあるか　〔女郎や〕あいおあがりあそばし。それ御見せよ　〔小ぢよく〕あい引　〔きをい〕ひろい二かいだ。むまでもせめるにハゑのふ（ヽノ脱カ）　〔むすこ〕そんな事いひなさんな　〔女郎や〕あなたがたハおなじミでもござりまするか　〔きをい〕ばかつらだ。なじミがあつてくるふうかい　〔むすこ〕これさ。うつちやつておかつし。おれがミたてゝこよう。あのこちらのこびちやちりめんと。三ばんめのぬいもんをだしてくだつし　〔女郎や〕あれハをゝの美し。あの御二人かへ　〔きおい〕あいなァコレすゞりぶたのざまをミさつし。きん平（ぴら）ごぼう上。そて（でカ）いらァ芝てんびんぼうをミるやうに　〔むすこ〕そんなざつをいひこなしさ（ざつでご

ざいとをハりをいふ）〔十〕へ（てをたゝく）さアてわかいしゆ。ちとおめにかゝりたいなア〔女郎や〕ハイなんでござります〔十〕わたくしども。さんきんこうたいのじぶん。このやのかどをとをりかゝりて。はつ梅といへるの。ゝそめてから。なじんだてなア。なれどもせんころきたりし所。用あるといひおるゆへに。たちかへりしに。文つかわされし。其文のもんごん。何ンとかいていくしたら。こうかいていくした。きゆう共やらきけハ（バカ）われども女郎のぬしとりひんたうち（かカ）かゝへるが。たかなわ茶やまで御出下されべく候なんぞとかいていくしたゆへ。どうもたちきられんよつて。やう〳〵と。ほうゆうのたのんで。しのびでた。茶やがところにてやしよくくひにいくとぬかいたゆへに。やしよくくひにやつた所が。八ッ九ッまでめしくろうものがあるもんか。こりやちよとちやをもてこいよ。酒かんあつうしてはやうもつてうしよ〔子ども〕巾はつ梅さんにかへ〔女郎や〕きやくしゆがこゞといひなんすから。はやうおいでなんし〔女郎〕今の一座のきやくしゆが。一ぱいのめといひなんしたから。のんでゐておそくなつたがなア〔女郎や〕はやうおいでなんし〔女郎〕今いくよ。エヽばからしいのふア江戸屋しきへさいきなんすと。わたしが所へきなんすに。なぜそのやうにはらたちなんす〔十やしき〕さあて。すこもとの御けんぱいして。何もはらたつ事ないてな。此手のちべら〳〵やわらかな所。たちきれたもんでないな〔女郎〕よしなんし。むしがかぶりんす〔十やしき〕むしがかぶらバ。しやうとく丸のあぎよか

やました八景

馬かたやれ／＼もうなんどきだんべいかしらんまでへおうかた七ッだんべいぞよ。茂久左エ門殿のばアさま。山下を見にゆきたいといつたが。はやくいかぬと。山下見る事がかなわぬが。やれ／＼はやくむかいにいくべいぞ。どれむまでも引出すべいか。どう／＼此ちくしやうめ。なんでもくびべいぐり／＼して。たゝたづなでぶんなぐるぞ。それ／＼うたでもうたふべいかへくもらばくもれはこねやま。どう／＼それハ／＼どんなちくしやうめだ**かいる鳴**へこれハきついけヱるだア。又あしたアあめだハイ。おれハまたおほし様ハあめのふるあなだとおもつたら。ひよりになるそうだハイ。いつも茂久左エ門家根にハ。どんびがとまつてゐたつけが。こんやもとまつていてくれゝバよいが。ばアゑ何をかふん付たがよくした物だハイ。いんでんのかハきんちやくだハイ。なんでも金なら五十兩べいのかさだが。五十兩あつたなら二十兩でハ田地(でんじ)をかいかけべいし。十兩でハきものふこしらへべいし。のこり二十兩でハ江戸へいつて。ゑらべんな子をひつかついでくれべいし。あんでもよくしたもんだハイ。むまいんハ喰こんだんべい。まぐろにこわめしべいくふべいぞ。よくしたもんだハイ。茂久左エ門殿の所ハたしかこゝらだ。つきやアとをたゝいてミべい。おきさつしやヱ／＼**おやじ**たれ

だ八ッ九ッそう〳〵しい 〔馬ご〕あんだねぼけたそうだ。八ッ九ッだ。人をふんごろばいた。てんとう様がひとびろべいあがつた。はやくおきさつしやい。ばあ様が山下へいぎたい(マヽ)といふこんだから。はやくいがねへと。おやました見ることがかなわぬから。それではやくいかつせヱと。いがつせい(マヽ)といふこんだハい 〔おやぢ〕ばァおきろやィ〳〵 〔ばァ〕あんでござり申。八ッ九ッにぢいさまハおれをおこすのハ。ぼんのふでもおこつたこんだァか 〔おやぢ〕此ばァ、とんだことべいいふばァめたァへ。四左工門の向ひにきたこんだから。はやくおきろといふこんだァ 〔ばァ〕やれ〳〵。それハいしハ(いカ)氣どくもんだァぞよ。そんならつれてあよんでくれなさろ 〔馬ご〕さあむまにのらつせい 〔ばァ〕どれやい。おつかないむまだ 〔馬ご〕なにおつかないことがあるもんだ。それのらつしやへ。どう〳〵。なんでも江戸へいぐと。いろいぎやうなものがゐらうあるでミさつしやい 〔ばァ〕そうだんべい。にしやァびやうど江戸へいぐから。あんでもちつてゐるだらァ 〔馬ご〕そりやまたこなさまのしつ(て脱カ)いるとをり。ぎやァといふから江戸へいぐもんだから。ぢよせいなとハございましねヱ 〔ばァ〕あにがあるこんだヱ 〔馬ご〕まづさけヱ町といふ所。かん三様羽左工門さま其中ひばわるのしばやといふがあるこんだァ 〔ばァ〕まちやれよ。年のよつたしばいハねヱこんだァかよ 〔馬ご〕あァにばかァいわつしやい。あんでもそのしばやで。でくがあるこんだが。それハ〳〵ゐれィものよ。此あとにいものにころばしといふ

じやうるりをかたつたが。太夫ハばんじやう太夫【ばア】ばんじやう太夫とハのミやかんなをもつているこんだアべい【馬ご】あにをいわしやる。しかしおれがわるかつた。たゝミ太夫とはる太夫とかけ合にかたつたア【ばア】いきがきれたんべいなア【馬ご】ばかべいいわつしやる【ばア】それでもにしやア。いまかけやつたといつたじやあねエか【馬ご】人のはなしをだまつてきいてゐさつしやい。それからむすめやひなしかしや大事清水。しろいでくあかいでくや。むらさきのでくや青いでくや。こびちやのでくや黒いでくや。もへぎのでくや。それハ〳〵いろ〳〵なでくがゑらうでるこんだハイ【ばア】それハほんに。どこのこうやでそのやうにミごとにそめるこんだぞよ【馬ご】此ひたアばかべいいふ人だア。それからすだれの中へはいつて。べろりとひいてハ。きやアといひ。べろりとひいてハきやアといひ。しんだかいきたかそれからハしらねエ。あんでもにぎやかなことよ【ばア】そんなら共さけへ町とやらへも。つれていくのか【馬ご】まあ人のはなしをきかつしやい【ばア】それハそうとこゝハ。なんといふ所だ【馬ご】こゝハすじかいといふ所さ【ばあ】それでもまつすぐに道があるぞよ【馬ご】そんなこんで。わらわれべいぞ。此人もほんに【ばあ】それかさをとりなされ〳〵【馬ご】あぜ【ばゝ】大きなお宮があるからよ【馬ご】ばかな事べいいふばあさまだ。あれハすじかい御門といふ門だハ【ばあ】やれ〳〵なア【ばあ】あれミさしやい。木戸のうちに。かどなミけんかがあるぞよ【馬ご】とんだべいぶんぬく

人だ。あれハミかんやかきのうりかいだハなァ [ばあ]こつちの柳の木の下タで。うでをのばへてつつぱつていかい事あるが。あれハなハだ [馬ご]あれハ土手のふるぎだハな [ばゝ]やれ〳〵おれハわるくミた。のりを喰た人が。ひなたぼつこしているとおもつた [ふるぎや]ななんデござい〳〵 [ばあ]こつちへよらしやれ。しかるぞへ [馬ご]なにしかるもんだ [しらミうせ薬]さておたち合のうち。どのやうなおれき〳〵でも。ゆやせんとう。あるひハこうしやくばなぞにて。袖から袖へ一ぴきうつれバ。すまんと一夜の内にふゑますのミしらミなれども。さつてや茂兵へばかり五三のきりのもん所。六尺のつりかんばん。只今でハ薬うれ出しまして。さつてやの手代の豆代ふミ代と申ますれバ。にせとぼうしとほう(コノ邊マヽ)はんな天下一どうの御はつせき。是これがおらん(マヽ)だのせんうづおらんよりながさきまでのみちのり。一万三千里があいだのかいじやうを。つミ下りまするせつ。船むし船ねづミといふものがつきまする。それをそれ(マヽ)をしりぞきまするための此薬。御くわい中なされますと。うつらせまいたからせまいのうけ合。さりとハ身ぎれいなる薬とあつて。白山ンの御天(てん)え千貼(ぞく)。御じやう内へ千貼(ぞく)。合貳千ぶく此御用おふせ付られ。もしきかずバ此もうせんをひつさばき。私をふミのめし。そのうへ右代物急度返濟仕りまするると申わけ合 [ばあ]どれちつとべい。くれさつしやい [馬ご]何ンにさつしやる [ばあ]なめてミべいとおもつてさァ [馬ご]ばかべいいわつしやるのふ [ばあ]これハあんだ [目薬]目の

せうに合薬やくに丹。めのせうに合せて差上ます。目のせうに合薬差上ゲてやくに丹。何れ御人躰にても御雨がんなけれバ。ほこうが出來ぬ。依て貴様こゝへござれ。貴様の目ハ晝八ツ時分より。七ツ時分までかすむであらふ。これ〳〵目の雲といふもの。御立合御らうじろ。さ一かい差上ませう[ばあ]あれハなんだ。こうやくだアかよ [馬ご]あんでもゐい。うつちやつておかしやい [ばあ]こゝハあんといふとこだァ [馬ご]こゝハおかち町といふ所さ [ばあ]あは、、、、、 [馬ご]あぜ。わらハつしやる [ばあ]それでもにしやァおかしい町だァといつたでハないか [馬ご]とんだヿべいいふ人だ。そんな事でわらわさべい [ばあ]こゝハどこだア [馬ご]こゝハいづミ殿ばしといふ橋だァ [ばあ]此はしがなくなつても。あとからわいて出るこんだアかよ [馬ご]あにとんだヿべいいふ人だァ [ばあ]こゝハあんといふ所だァ [馬ご]エ丶しつこい人だァ。平川町といふ所だよ [ばあ]それでも川がないぞよ [馬ご]あに又川があるもんだアか [けんじゆつ]ヤアトウエイゝ [ばあ]あれハあんだアよ [馬ご]あれハけんじつをつかふのだア [ばあ]けんじつとハあんのこんだァぞよ [馬ご]ほうをもつてたゝき合のさ [ばあ]やれわけてやらつしやい [馬ご]なんのせわにもならない事べいいふ人だア [ばア]あれむかふからあにがくるぞよ [馬ご]あれハ土平といふあめうりだハ [ばあ]アニ土平といふあめうりだア。ちつとミていくべい [馬ご]ミねいでもくるハさ [土平]エヘン土平飴〳〵。エヘンばいこう〳〵からばいかうにつのにから

べて／＼とかくばいこうめハのら／＼とさんせうのせいエン土平／＼／＼ [ばあ]あにおもしろくもなんともない。きちがいをミるようだ [馬ご]ばかべいいふ人だァ [ばあ]あれむかふから。おい佛をしよつてくる事だァ。あれハあんだァ [馬ご]あれハおこま飴といふあめうりだァ [ばあ]ヤレ／＼つらハきたねいが。名ハかハいらしいあめうりだァなァ [おこま飴]とうざい／＼／＼／＼。おこまあめのはじまりハ。ふいたりなめたり壹文じや。ひやうばん／＼／＼。ありやさとうなア。こりやさとうなア。あめだもおしやかも色のヤチイ。ありやさとなア。こりやさとなア。さんべろべい／＼。さんべろ／＼／＼べけいべい。大門口から。あめやいつぱいありやさとなア。こりやさとな。さんべろ／＼／＼べけいべい [ばあ]ヤレ／＼だんぎぼうづが。狐にとつつかれたやうだア。あれ／＼むかふからくるのハ。あれハ仁王さまのいきたのかなア [馬ご]ばかべいいふ人だア。あれハすまふとりさ [すもふ]すまふとらうなら。こうとるもんだァエイ。なんの事だこいつア／＼。おもしろうございますから。すもうでござい。はアエィなんのこんだ。こいつア六十日ほどわづらひましてこうなりましてござりまする [ばあ]やれ／＼。あれハあじなすまふとりだアハ [馬ご]これさ。ばかべいいふ人だア。だまつてあいばつしやい [ばあ]あれむかふからくるのハ。あれハあんたんべい [馬ご]あれハすた／＼ぼうずだ [ばあ]やれ／＼おれハ。わるくミた。ミやさまのおかまだとおもふた [馬ご]あぜに [ばあ]おひどへし

めのはつたのをはじめてミた【すた〳〵】ヤア參りました所がうどんやさま〳〵。名代をミればはたつた樣。門ドに立ツたとおつしやれバ。ちよこ〳〵ハまいりませぬ。やうじのやうな御手しほから。やつこ壹文くだされまし。壹文やつこハもらハねバ。やつこがのどハほしうどんじや。うどんなやつこがそば立はづかしいとおつしやれど。大根氣根をつくしても、根木ない事ハ申まじ。あれ〳〵やれとおつしやれど。二八あまりのおむすめさまでも。けんどんな事をおしやります。さア〳〵御となり〳〵じや。おとなりハなんじや米屋樣〳〵。ほんほち米やつこめがあさハとうから唐はうしじや。うハべで人そうなされても。表たわらとおわらいじや。あれ〳〵やろふとおつしやるが。永らくにおくらしじや。われせんだいと下さるが。なんぶにももらいたいじや。サア〳〵おとなり〳〵じや【ばあ】ヤレおもしろいこんだぞよ【馬ご】ミさつしやい。もふ御山下へきたこんだア【ばあ】こつちらのしやミをひいているのハ。あれハなんだ【馬ご】あれハつる吉といふおこぢき樣だハ【ばあ】あにつる吉とハ。中からつるくつてあるこんたアかよ【馬ご】とんだとべいいふ人だ【鶴吉】そう〳〵〳〵どんなやろうだ。もちへ〳〵。むねへおつつけてもらへ。むねくるしがつてよこすハ。源八はじまつたア。にけるとうしろへ石をぶつつけるぞ。御あいきやうになげますハ。まめととつくりでござい。豆ハかるし。とつくりハおもい。つりあわぬ所又石がはいりまする。こいつおもたいやつでござい。間を見合せて

ふうわりとうける。間をゝ合せてなげまする。こいつこわいやつでござい。所をふうわりとうける。とう〳〵〳〵。さてありがたい仕合。鳥目のおねがい申上ましたれバ。鳥目が四ぶ六八十ござりまする。これを後ほど十六文に百にしておやりなさい。それさゝせん引たりよゥ [ばあ]やれ〳〵いろいぎやうなァ物べいあるこんだぞよ [からくり]さてさいしよ御めにかけまするおらんだのとんたんのけいしよく。しやうめん一万三千里が間。かいじやうはるかむかふハからき山々ハからきの御てん。やうきひゆうらんのてい。これもあまたくハん女付そひまする。夜ぶんのていとかハりまするへつぎのさいくとりかへ御らんに入まする。つぎハあきいつくしまべんざいてんのけいしよくでござりまする。しやうめんな。とりゐ水ぎわより。かさぎまで。壹丈二尺とござりまする。左右くわいろう百廿間。まわれバ七里七浦のけい。これも夜ぶんのていとかわりまする。す万のあんどうぼんぼり。茶や〳〵二かい石どうろう金どうろふ。のこらず火をてんじまする。なんとどうでござりまする [ばあ]やれ〳〵火の用心のわるいからくりだなァ [まご]ばかべいいわつしやるな。あれさつしやい。これが山下に名代万八といふ一年中。ゆいしやうしやべつているこうしやくしだ [ばあ]こうしやくしたァあんだ [馬ご]はなしよ [ばあ]はなしとァあんだ [馬ご]ヱゝぢれつてヱ人だァ [おかだ三けんじ]扨ゝなかけてお聞なさい。床(とこ)代六文ヅヽ先御人よせにつほい所はなしませう。こゝにみのゝ國藤枝れうといふ

所に。はんの木谷といふ大きな谷がごぜヱす。此せうせつがかつてをしらずににげこみ。はんの木谷へとびこみ。なれども木のゑだに仕合とさし袖がひつかゝつて。中へぶらりとさがつてゐやす。つゞいてとびこむ大山ぶし。大石をなげこんだやうにどつさりといつておちたが。そのおとのすさまじさ。あの木のゑだをたぐり。この木のゑだをたぐり。たぐつてあがつた所が三里四方のはら中へ出やした。こゝへ山ぶしが歸へると。大せり合になるが。こゝハ一ぺん書もつ一ぱうに廻りませう。ださん衆ハにげないでお聞なさい［ばあ］ヤレ／＼ぜにべいとりたがるこんだぞよ。あそこにあるのハあんだんべい［馬ご］あれハ豆藏だァ［ばあ］豆藏とハ、まめがそうになつてころげるこんだかよ［馬ご］ばかべいいふ人だア。ミさつしやい［茶やていしゆ］おかけなさつておきゝなさいや。とこ代ハ八せんヅヽじや。まへ江お出なさい［豆藏］とう／＼／＼おどれ／＼。まめになれ／＼とゝう／＼豆藏にしてしまつた。ごろうじろやこんやとんやととん／＼おどれ／＼。なにをくらつてもあたる氣遣ひがない。あたるほどついぞくらつた事がない。そう御手がる／＼とさい／＼さて烏目の御願申ましたれバ。てうど七十貳文ござい。これを後に百文にして。おミきを上たい。うしろにゐるあきちからとつて十六だァなアきんごなぞ一本くらつたがきんごでハ一本ゞだがないじやてい。二本や三本でハないそうさ。これないしやうのはなしさアハヽヽヽヽヽばァ［井上藤八］さてお立合。藤八つらがかんばん。いつも上野仁

王門下をさだめゝせとしてあきないまする。やつこずんどべいをあいてといたして。かまの一ト手をミせう。棒ハ面六本うら六本。棒の極りが七十貳本。合せて八十四本の棒でござい［うけ］さやうでございい。此大太刀つかさやかけて九尺八寸。おもミが貳〆三百目。らうぜきやらんときりかける。心へたりとぬきにかゝる。うでいつぱいたぐつたあとが。いしやさまのさしぞへほどのこる。今もお立合でそうおつしやる。茶わんの上へあしだでのるハあぶないとおつしやるが。せつしやなか〳〵あぶなくない。はんごんたんはミがきうろうといひしせつ。ひよつとにげられうかとそれがあぶない［ばあ］あれぬいたハ。こちらへよらつしやい［馬ご］ばかなはミがきをうるかんばんだァ［ばあ］こつちらのハあんだァ［馬ご］あれハ中どうさ［ばあ］これハどこだ［馬ご］仁王門さ［ばあ］ねつからおれがはなへハ。にほわぬハィ［馬ご］これミさつしやい。お仁王さまといふ神さまがござる［ばあ］とら（マヽ）三郎。有ハどこへござつた。こゝにあるのハあんといふはしだ［馬ご］これハ三まいばしといふはしさ［ばあ］壹まいでハまにあわぬか［馬ご］中のハ。おくほうさまのわたらしやるはし。こちらのお町人のわたるはし。これがおこじきのわたるはし［ばあ］またつしやい。おくほうさまといふハどんなほうさまだ［馬ご］ばかばつかり［ばあ］ヤレきのどくな。ゑらいはたけへ水がついたハ［馬ご］とんだ事いふ人だァ。あれハしのわずのいけといふべんてんさまだハなァ［ばあ］こつちらへよらつしやい。しぬばづならおらァいや

だ［馬ご］ゑい年をして。しにともながる事ハねヱ［ばあ］なんまみだぶつ［馬ご］あぜねんぶつを申さつしやる［はあ］ゑらう。べんな子があるから。うつくしい佛だとおもつてさ。あれハまあんといふもんだ［馬ご］あれハけころばしといふべんな子さ［ばあ］やれ〳〵あにとがで。けころば□(虫つさカ)れるこんだァなア。きのどくせんばんなァこんだァなァ。コレ四左工門。あれハあんだんべい［馬ご］ありや。じしんばんつくぼうさすまただァ［ばあ］やれ〳〵おれハわるくミた。なまこのほしたァだとおもひ申たァよ［十九文みせ］何ンでもかでも十九文〳〵［ばぁ］あれミんなで十九文だァそうだァよ。かつていくべいじやァねいか［馬ご］ばかべいいふ人だァ。一ッで十九文だァな［ばぁ］やれ〳〵それハたかいもんだア。これハあんでござるか［十九文］ハィそれハしやうぎのこまでござい［ばあ］やれ〳〵おれハわるくミた。小人じまのせきとうだァとおもつた［馬ご］ハァ一ッぱいのむべい［ばあ］おゝよかんべい［馬ご］其こんにやくのでんがくでも。貳本べいくれさつしやい［ばあ］やれからいでんがくだァなァ［馬ご］ほんにからいでんがくだァ。此からいので。めがさめましてござりまする

馬喰町二丁目

伊勢屋吉兵衛板

山下八景　終

眞似山氣登里

全

當世 眞似山氣登里

序

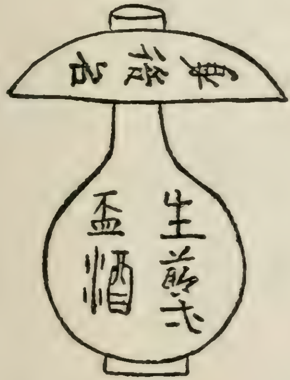
折助几巾の尻かるく空でやつこをふる如月のうらゝかさながめにあかぬ四方の氣色蝶の居眠る菜畠の花に見とれ春の夜の短きをひとりこち(マヽ)て誰いさむる人しなければいざや晝寢せんと枕とる手をゆり起す友人燕雀亭來りてつれ〴〵をとふ予枕をあげて云くお袋御無事かおちやでもあがれと云に付て一書や有とこふにまかせて穴を掘穴を堀る蟹の横ずきなるまゝに筆をあゆませ鷹の眞似する猫頭鳥の小鳥(マヽ)のとりはづしを夫になぞらへ眞似山氣登里と題するものならし

安永九子太郎月

大呑先生門人

上戸菴

酔人狂述



都右左鄙〱

御代はめでたの松と竹　引しめ縄のながき日あしに　當所なしのひとりあるき　空行雁にさそはれてうかれゆくまゝに名にし負叡山の麓にさしかゝりしに　むかふミれバ御成小路の方より　近在のものと見へて　貳人づれにて來る有　與茂作（青梅の綿入にしぼりのひとへ物を下に着棧留の袷ばおり手折嶋の帶はちくぞうりに紙のさげたばこ入白もめんい手ぬぐひに紋付て帶にはさむ）　なんと八どん　げへに日がながくなり申タ　けふもハア四ツ半でも有べいか　八五良（是も上田の綿入に小くら折の帶茶がへし小もんの袷ばおり小サキ朱の長門印籠にもめん打のひもながくむすびさげて　あめ色のさげたばこ入白手ぬぐひをおかしくかぶろ）　チヽサハア九ツまへでもあんべい申シ　いゝ天氣だ申シ　コリアハア上野だ申シ　此七八年跡ニヤア　でつかちねへ仁王門があい申タ　おしひ事をし申タ　わりさま江戸さ度ミおでやつたが　江戸一番の大橋を　おミさまアしりやるめい　與コノ八どんハとんだァ事べヱいひなさる　わしらも一年ニヤア四五度江戸さ出申スゆへ　大方しらねへ所ハねへが　大橋といふハ兩國橋　これも泡雪の喰飽し申タ　其先の大橋　こゝでも咄しのたねにも成べいかとおもつて　びくにんサアモかい申タ　亦

そのさきの永代橋　是も八まんサアへまへるべいと　幾度も通り申タ　近來出來申タ吾妻橋とやらも淺草くわんをんさアへ參る時　二三度も通り申タ　その外ニヤア大橋といふハしり申サねへ　ヱヽかけんに人もなぶんなさろといへバ　八去バこそ　江戸一番の橋をバしり申サネへヨ　まづ橋の長サがこゝの黒門前から淺草のくわんをんサアへ行ほどもあんべい　是程の大橋をしり申サネへジヤにしらア江戸不案内タ申サ　輿小シハラチ立て　コヽナ八どんハ　とんだ事べヱ云なさる　其やうな橋ハ見もきゝもし申サネへ　其橋の名はあんといひ申スヨ　八ヲヽその橋の名か　輿ヲヽサなんと　八それハの　けころバしといへバ　輿ドツト笑ひイヤハアとんだ事ダア　ほんたア〳〵とおもつてきゝ申タリヤイヤハア跡方もねへ事だと笑へバ　八も　とも〳〵わらひながら行　むかふよりふたり連にて來る有（形ハいづれも同やうの出立にてすこししやれの身有ておかし）新八　富松こなたのふたりを見付てこれハ〳〵輿茂作どん八五郎どん申シ　おそろひで　すけんと出られ申シタノ　輿コリヤハアいゝ所で出くわせ申タ　さらバ連立申べエヤニ　ハア　ひるまへでまださゝしい申シ　是からいつそ待乳山とやらの方へ　行申べいか　新コリヤハア面白かんべい　まつち山はげへに高ひ山ダアと聞申シタいざ〳〵とて四人づれにて行　富皆の衆　なんぞいひきどりハ有めいか申　八アンダヨそこらで一ツ呑べい申シ　どこがよかんべいといひつゝ　淺草の方へ行て　あんとこゝらでちくとんべエおごり申

べいか 新 コリヤお江戸ではやるよかんべいだ申シ　と云つゝ女川菜飯の前に行懸る チヤヤノ女 おあがりなさい　なめしでんがくおはよふござりやす　およんなんし　奥がすいておりやす　おやすミなさひ 八 コレミなのしゆ　こゝがよかんべいと　さきにたつて茶屋に入　二階へ上り下の通りを見物す 女 お四人まへ　なめし上ますかへ 奥 チツト出してくんなさろ　はやひがへゝ 女 アイ二階のお客　御膳およつたりまへ 男 アイ引 奥 おもての往來を見て　アレミなさろ　むかふから來る男ハゐゝおとこだ申シ　こんがすりのみぢか羽おり　きじまのせんすじの着もの　おびハあさ黄の小くらそふな　いつぱいの氣どりダ申シ 八 アヽおゐどハ　いゝ所だ　あれハしやれとやらいふ風だの申シ 新 亦見なさろ　そこへ來申ス男ハ　古手がへしの小もんの羽をり　黒ちりめんの上着　下ぎハ黄八丈　じゆバんに黒びろうどの半ゑり懸た申シ 八 ハヽミあれハよくねへ風だ　わるじやれだ申シしやれもだん〲と燒直して　大きにおせわと　いまの小もんを笑ひ申シたが　こちとらがしやれもあまり見よくハ有めへといへば 奥 うへ見れバ　およバぬ事のおほかりき　といふはいかいとやらもあれバ　こんがすりの短か羽折も　うらやましくもおもひ申サネへ　いざ立申べいと　二階を立　ミな〱あひゞなさろ　御てい主大に御世話と　表へ出　サア是からかんおん様へ行べい　いかにも參詣し申さふとゆく 八 アヽかんのんどのハ　ちつさなりで　ゐらい堂へ住居め

さろ　さて〳〵きつひ参詣だ申シと　四人づれにて堂へあがりて拜ミ　また表へ出んとする　新これ〳〵ぼんさま　わしらァ安産のおまぶりが　いたゞき申てへと　十貳文かぞへて　半紙のかミ半分ひきさきつゝミ出せバ　坊安産のお守とて出す　新手にとりいたゞき　表の方へいづる　八わりさまァ女房も持タネへが　安産のおまぶりハ　あんにしめさる　大方近所のかゝしうを　ミつ〳〵にほつパらまして　夫ゆへにいたゞき申サルべいと云バ　新コリヤァ又八どんのわる口べゝばかり　となりむらの新右衛門に賴まれ申シタが　すんでにわすれべいとした　いゝ所でおもひだし申タと云ツゝ　ミな堂よりおりる　新ト富少しわきへより　何かさゝやきしが　アニ申シ與茂作殿八五郎殿　こゝ迄ハどうしにき申タが　わしらハちと外へより申サニャアならねへ用事が有申ス　近頃殘念ニャアあり申スが　是からハァ　わかれ申べへ　與ト八ハアそりやざんねんだ申　今すこしあゆびなさろ　新ト富イヤハアこゝでわかれ申べへ　とうりう中にハ　又かさねて出合申すべへ　さらバでござり申スと貳人はわかれ　うら門の方へ行　與ト八跡に殘りて　そこよこゝよとのめり廻りて　奥山へ行　こゝで一ぺい吞べい申サト　だん子茶やへあがり　表を詠める　ちや屋女房おちやあがりませと出すおでんだん子でもやきやせうかへ　與ト八ドリヤ一ツと　茶を吞ながら　田舍ふうにながくなりてかミさんそんならでんがくを燒　酒をこなからかんしてくれなさろ　だん子も三くしべへ　やいてく

れなさろ 女房 アイ頓て田樂酒を出す 與 サアマア一ツ呑なさろ 八 はじめなさろと 互にさいつおさへつせしが はやきげんに成て いろ〳〵ふじやれの上にて 八 コレナきゝなさろ あとの月 となり村のおさくめが方へ すてゝんがうに狀をやり申たりや へんとうをし申たが さて〳〵文句がよく出來申た ちくとんべへ內見めさるか 與 そりやハア ほんだか申シ 見せなさろ 與 そんならおがませ申べい 結ぶの神のおまぶりだアとおもひめさつて いたゞいて見なさろと懷中の紙入ゟとり出しければ 與 うけ取てひらき見 さても〳〵おさくめハ よふにじり申スつ ほんにハアたまげ申タ きやうがる文躰でおんじやり申ス ハアゝこゝにあじをこぢつけ申たの ナンジヤ過し田植のころ にしらとひとつに出申タ時 見かじり申され

それから戀とやらおもひとやらに成申され 雨の夜もかぜのふく日も たゞわすれやらねへとの御事身にとり申てハ いか斗りかハうるしう思ひまいらせ候 されども男の心といかきの內ハ かわるがはやひと いつぞや明神樣のおまつりの時 來申たおでゝことやらの哥もん句を 耳にかつぱさんでか どふもハア誠ならねへ事なれど さほどおもひめさらバ せいもんとやら きしうとやら(マヽ)をかいて見せなさろ 其うへじやアぞんぶんに成申べい たゞハアわりさまの こんじやうほねがしれ申さねいと 書おつた 是じやアおさくもいやじやアねへそうじやの 八 チヽサ成ほどわしらもいやが

らるゝ身じやアネヘ　かういへばかうまんだがの　むら中でハ　いゝかゝしゆもむすめ共も　わしにやアきのあるやうで　ほんほんに所によつちやア　こまり申スヨ　一躰ぜんてへ　おさくが方からうつぼれていれどの　さすがニヤア女のどせうぼねで　いひ出しかねおつた所へ　狀を見しらせたゆへたちまち返事をし申タ　まだそのさきに　うめへ所が有　しかし夫まぢやア見せめへ　【輿】コレサ見かゝつた狀　其面白ひ所がかんじんかくさずとゝんなぶんまけなさろと又ひらき見る　【おく山びくにん】まつ植て　花も咲そろ小がね花　おやんなんし　【輿】コリヤ大事の所をゝかゝつたに　じやまナアびくにんだヨ　いきなさろ　【八】テモいゝ聲いゝしよ形じやと云つゝ　きんちやくの內より貳三文とり出しあまりにふうがおもひ付じや　やり申べいとなけてやる　びくにんハ笑ひながらゆく　【輿】コレサ八どん　たしなゝなさろ　是ほどの色をしながら　またびくにんにかつほれめさる　いゝ〳〵おさくにつけ口申スべいといへバ　【八】ハヽヽヽ　インニヤヨ此狀もわりさまだアから　うちわけ申タ　かならず人にハアもらしめさるな　【輿】イヤハア何しに人にやア語り申べい　迚の事にゝなよむべい　なんじや米のめし喰ぬほうもあれ　にしにやアわれらもおもひとやら　むなさきにたへやらず　明暮野らにて見る度に　おもひのかずハ　いなぶらよりも高く積り　案山師の弓ハきるゝとも　思ひきられぬ身のいんぐわと　心の內にほつこんで入ど　いふもこつぱづかしく過申タ所に　そなたよりの文玉章

とる手もうるしく思ひり〳〵　されどそれさまの心のそこが　しれ申さねへから　しんじつを見せなさ
ろと　よむを聞て［八］ナントゐらへ戀じやねへかへ　夫でハアわしらもこしぼねをぶんぬき申タ　そ
こでたて引に成申タゆへ　きしうを書て二世三世　さんづがわの瀨は淵と成とも　かわるな替らじ是
とても　うそだアとおもひめさらば　日てん樣月てん樣かけ　いつわり申スなら　氏がゝおとうくわ
の罸をかうむるべへとかいて　壬生のべねしぼりのやうに　血しほをべつたりとつけてやり申タりや
すぐさまなびき申タ　なんとうまひ咄じやアねへかへ［與］イヤハヤこんたんおもしろかつた　わりさ
まの咄に　たましいをうつとられ申たと云所へ［女房］おまへ方ハ　おはなしばかりで　一かう御酒あ
がりやせぬと云に［八］是かゝさん　此田樂　もちつとあたゝめて　くんなさろ　イザ一ぱいとほして
與茂作にさす［與］おさへて今一ツ　ひつかけめさろ　其うへでかんじんの　所が　きゝ申てへ
［八］コリヤ過申が　も一ツ呑で咄すべいかと　ずつとほしさす［與］そんならもふ半分といふを　むり
につぎ　肴にやア　うめへ所をはなし申べいか　しかしこつぱづかしくて　いひにくひ申シ［與］わり
さまア　やぼの事をいひめさる　おとこハ氣でもてといひ申ス　何がくるしかるべい　ぶんまけなさ
ろ〳〵　是からさきが勝負のかんもん　じしんにいひまけなさろと　すこ義太夫ぶしにて云バ［八］ハ、
、笑ひ　そんならいふべへ　それよ　ことし春の事　何がハア庄屋どんで　二十六夜待をせられた

夫わりさまもいきめされた 奥チヽサにぎやかだつた申シ 八其ばんにやア庄屋どんでの おさくをたのミ申されて はたらきに來申タが だん／＼夜もふけ ミな／＼ねぶりころぶ時分 わしら小べんに立ふりして せどの方へ出て 物置に 居申タ

さへわへふところに あさ草でいつか買申タをし忍のやうじさしがあつたから やり申タ そこできげんがなをり申タが かさねてハむりべへしめさるなと いひ申タが其ときやア かわゆかつたもサといへバ 奥ハテサテ忍へきミをしめさつた どうやら心もちがわるふなり申タヨ さりとハあやかりもんだヨ さア／＼一ツ吞なさろ 面白ひ長ばなしに けへに時刻をうつし申タ といふ折ふし 七ツをつき出せバ ハアもふおさめなさろ 是からそろ／＼かへるべ

へ [八]今一ッ呑なさろ [與]イヤハアけへによひ申タ　かミさん　さん用しめさろ　いくらべエ置申べへの [女房]アイ百八十九文でござりやす [與]もそつとまけなさらねへか　サア〳〵取めさろと　錢を拂ふ [八]立あがりて帯をしめ直し　與茂どん　是から見せ物を見べい　かミさんおせわと　立て表へいづる [與]よろぼひながら　出る [八]ソリヤミあぶなひぞ [與]ハヽヽヽ　今の咄しに　腰ほねがぶんぬけ申タ　ひよろ〳〵し申ス [八]て手(マヽ)を引ゆく [與]コリヤアあんだんべへ [八]コリヤア山あらしだ [與]へへつて見なさろ [八]わりさまアばかべへいひなさるアリヤァ作りもんだアヨ　ぜねづいやしな置なさろ [與]そんならかりわざア見べへ [八]コレサミにしやア　けへに醉めさつた [與]コレミとつさん大ころバし一ッくんなさろ　ハミミたつた一ッで貳文　ゐらたかへもんだ　コレサ八どん　しづかにゐゝびなさろ [八]アレきゝなさろ　三芝居のこわいろダアヨ [與]わしらアあんだかしれ申サネへありやたれだんべい　大きなおとほねダア申　おらが名主どんのはら立めさつた時のやうだ申 [八]とんだ事べいいゝなさる　ありやァ市川の三甫右衛門左(マヽ)ア申　そんな事べい　人中じやアいゝめさるなわらへ申スヨ [與]八どん　これのやうじやで　ふしのこをかうべい　あねさ　ふしの粉を八文べへくんなさろ　テモうつくしひあねさダ　たばこの火かしてくんなさろ　是ハ大きにおせわ　亦市の時分かへ申べい　おさらバでごんすよ [八]わりさまア　ゐへめさると　ゐらふざけめさる　それじやア女

に嫌ハれ申スよ　たしなゝめさろ　輿ハゝゝわしらアお身様がよふにやア　しこなしやアでき申さね
へ　どふでもにしやア　むら中でのいろ男ダ申　と云つゝ　木の道に懸れバ　はや日も入相の　かね
に花ならぬ人もちり〳〵に　おのが家路におもむくを　跡に付て終日の　慰となしゝを　其まゝにし
るして　人ゝの笑ひを求るも　大におせわと題して筆を捨ぬ

安永九の初春朗日

遊婦里會談

全

序

夫花開在田樂月明在檀子成書無序如有酒無肴如有餅無茶曾歸橋子臨著一小册予請序予謾諾曰其句承知讀之甚雅馴也意氣慷慨以足施世上之好子今吾謂愚鹵費一紙而說空口春者御婆々之談儀參之留主事于慰徒然秋者親父于紅葉見與曰虛言之爲一助棒組合點乎ヤッサアコレハサアト其書開卷又不田分乎橋子曰大於御世話與遂以爲序歟

安永九子正月

一竹齋達竹誌

一竹

達竹

遊婦里會談

序

春はお婆ゝが。氣をのべ〳〵に談義まゐりに皺を伸す。あとハ娵子が足をのし。少し居眠る。その處へ。本屋が附込新版はミなそれ〴〵の。洒落にして。いま岡場處の多き事。さつまいものふゐたるごとく。中に取分賑ふは。北と東と南なり。鼎のごとくと云ィたきが。次第に西方盛なれば碇のごとく爭ひて。誠にめでたき君が代は。千代に八千代は。舟臥女の通名にて。それ相應のいきまを賣れバ。知つたる顏に筆を采る。作者の零餘子多く有り。とし〳〵彫す。小册も能ひと惡ひはゝ見くらべて。ヨテイ賣人にならしやむせ

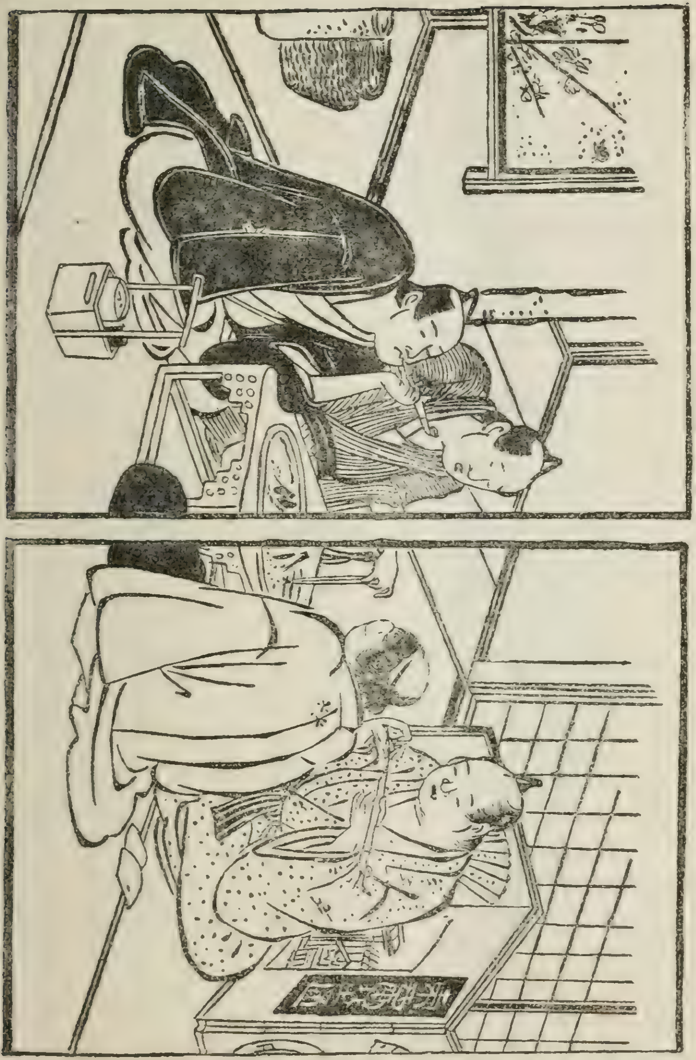
安永九ツのとしの春

東都龍の腮ふ住
蓬萊山人歸橋戲に著

遊婦里會談

夫大通の通言ハ。深川より始る。通矢の能く通るをもつて。通といひ。通らざるを。不通といふ。故に大通不通ハ。富ゲ岡をもつて。根元とやいわん。傾國の通ハ。異名の通にして。吉原通。あるひハ廓通と呼とかや。その通にもあらずして。世を雪隱こうろぎのごとく。ひよい〳〵と。くらせども。かの男の一ッ徳にや。朋友したがつて。南鐐一ッ片遣ふ時ハ。翌日來つていきまをはなす。家暮なる者の聞時ハ。毛唐人の錢相場を立るにひとしく分らぬを以て。極品とす中にも心安き通人にハ。東方の船臥。西方の馬遊。南方の隣波。北方の廓子。是らハ蓬萊山人の許に鶴龜松竹とも謚へん。今日も來ッて。いきまはじまり〳〵。[船臥]モウ亭主ハ歸そふな物だ[馬遊]ぶしやうな人だ床もあげずにさ。[廓子]長湯をするも程が有る。歸に足袋がはまるめへ。[隣波]煮ばなでも仕て置かねへと。歸ッてきじめ汁を喰せるぜ。（と噂をいふ所へ。歸橋ハあんけら染のゆかたに。黑なゝこの帶を〆小袖をもたせ錢湯ゟかへる）[歸橋]コレハミんなお早ひの。[船]さつきからまちやした。[歸]コゥ揃つての御出ハきのふあたり。イヽ徳場でも有ッたかね。[馬]お目覺のぶる〳〵から。どふも來たくてなりやせん。[歸]わたしもひまだ。今日ハ四人して。ぐつと新しひ所をはなしねへ。向ふでわつちが点をしやう。

|隣|ちつとハイゝのもありとをしだが。マヅ船さん喘しなへ。|船|何ンでも是ハ丁からがいゝ|廓|丁からするハ定石でわりい。案じの有る隣さんからがいゝ|隣|やかましなしに。口明ケをしやしやう。ゝんなだまつて聞たりノ\。去年の今ごろだつけが。ソレ。おめへなんぞも。しつて居よふ。米屋の吉が新田の歸りに。品川へ行ッて。秋しのが妹女郎の。荻野とやらに。馴染だ所が。こゐつが又あしくするに。のぼせたと來てハ。お里付の立聞もどきで。おれにいふにやア。こふノ\だから。どうぞおもしろく。買ハせてくれろと。たのむから。安ひこッた。其くらひな事ハ。どふでもなると。連立ッて行やした。まづ荻野が。けし炭の付た。燒ゝそでも。喰ッたよふな面をして。座敷の案じが。能ねへから。藝なんぞをむだに呼んで。ふりを直して見たけれど。はじまらねへと思ひなせへ。わつちもわるかつた。鹽屋で秋しのをあげた。こゐつも。ふけいきな面をしているから。相應にかき廻して。はやく床へ廻つた所が。秋しのハ初會だから。おそく來るも合點だが。荻野も來ねへのさ。ふたりして。伸たり縮んだり。清玄風巾の水を扱やうに。(マヽ)して。待つて居たら。ようノ\荻野が來て。みづ点といふ口上で這入ッていふにやア。ぬしの座しきへナゼ行なんせんといふから。おめへの來ようがおそいから。今まで横を勸めやしたといふと。ぬしも見かけに似ねへ初心だねへ。品川の風を。しんなんせんそうだとぬかしたから。モウいまノ\敷なつて。コレ此新ハ。大キな口から。大キな事を。いひ出



したの。おれをだれだと思ふ。石町の隣さんと云てハちつとけぶつてへ。荒神さまだ。どこの臺所でも。松薪を焚かれた事のねへ男だ。なんだまだ。小切レ賣の化ものを見るやうな。形りをしやアがりながら。大キな燒直しをいゝ出したが。よしにしろ。おきにしろ。そういふ事で。女郎の出世ハできねへぞ。向ふが初心で。鱚長いもの器なら。それ相應に賣て遣るこそ。公界の道のけへどうだ。に。此ごろアノ子の咄で聞ケバ。百番も洗て來た程。おそく來て。勞症をやむ雉子をミるやうに。けん〳〵して。どぶさる所ハ。狼のひいばゝアほど。鼾をかくといふこつた。あの子もあれ程ほれているし。ちつとハそこをなんとかおてらへたのまれて。納豆をかき廻す氣になつて。勤てくれてもいゝ物だと。いつべいに。おろしたを。秋しのも聞たそふで。妹女郎の。おろされるを。おも入れ胸にはり込で。わつちが床へ行と、惡しくしたといつちやア。なんだ。年ン季のぼたもちの。くさつたように。取あつかわれたけれど。初手に吉が事で。通をいゝ抜たから。まさか亭主を呼ぶの夜ハくれども。晝見へずともうたハれず。ていちん持の糞をふんだ面をして。歸りやした。その幕ハだれにも。ぐつと明やしきにして置た所か。惡事二三里を走るとやらで。誰いふとなく。藏まへきつて。隣波が秋しのにふられたのイヤつき出されたの。洲が出來たのと。ばつ、沙汰になつたと思ひなせへ。そふいふ事を聞くと仕廻のついたかんしやくが。みけん尺のやうに廻つて來て。ふんぞ仕かへしをして遣ろうと。

額から火の出る程かんがへた所が。いゝ案じが出て。まい日三ンべへ喰ふめしを。一ッぺへ半くひ。内に斗り廿日ほども居やして。日南へとつてハ。土龍の身をなげた程も出やしねへから。ひわ茶の年ン明ケといふ色になりやした。もふよしと思つて。ひでへくめんをして。三十両こしらへて。あつちへいつた所が。六ツ時分さ。秋しのが坐しきへ居ハると。ものをもいわんか。何も喰ハんか。たばこをも呑まずに。おかしく氣のぬけたやうに。秋しのがつらばかり見ていると。秋しのも色ハ青し。月代ハ青し。何か氣のぬけたやうなつらだと。思つたかして。見て斗り居るからそう／＼にして。床へ廻つた所が。いつもの通り來ねへハさ。おつ付ケ九ツをもつかふと思ふ時分シに。來ていふにやア。おめへハ久しく。お出なんせんといふに。アイとばかりいつて居ると。又秋しのがつらばかり見ていると。おめへハどふぞしなんしたかへと。いふにのりこんで云イやしたハ。おめへの目にも。わつらつたと。見へやすかへ。何をかくしやしやう。どういふこつたか。忘れられねヱ程。おめへにほれやしたけれど。おぼへも有ろふ。アノ通りあしくしなすつたから。此すへ逢ふ事もなるめへと。思つている内。ふら／＼と病付やしてだん／＼能くもなく。きのふまで寐て居やしたが。又是ほどに思ふ。わたしが心を。一ト通りおめへに。はなしたそのうへハ。お心に有らふと。それをいひに來やしたと。泪をこぼしていつたら。わつちが樣子を見て。むごひとも思つたかして。それほどのおこゝろざしを。

どふしてわるく。思ふもんで。有りんす。と。いふをさいわいに。何ンとかいふ所を。はやく仕まつて。これほどに思つてけふ來やした所が。おめへもそふいふ御心なら。是ほどうれしい。事ハござへせん。是ハちつとばかりだが。心ざしだとおもつて。なんぞに遣つてくんなせへと。鼻紙ぶくろから三十兩を出して。多葉こぼんの引出しへざらざらと入れて。見せたら。そふいふ事ではござへせんと。そうこふする内。八ツをぽんとつくを聞くと。どふもわつちやァ。歸らねへけりやァ。ならねへと。のこりおし引さうにいふと。まだいゝのなんのと。駕を云付に行つた留守に。今の三十兩を。樒の葉といれかへて。外にじゆずを一れんと。髮の毛を入れて歸りやした。あした人を廻して聞た所が。わつちが歸ると秋しのが。床へ上つた所が。何か有るといつて。ふとんをまくつて見たれば。念珠と髮の毛。ハツといつて倒れた所へ。若ひ者や。勝手から。來て。くすりを尋に引キ出しを明た所が。しきミが有る故。秋し野に氣をつけて。だん／＼のようすを聞て。ざしきのかつこう。幽靈に。ちげへねへといふ沙汰になる。その身も。幽靈に。まくらをかハしたと。氣にしてぶら／＼病が出て。日を重る程わるくなりやした。評判が江戸中へしれて。やつとわつちが耻ハ。とり歸したがそこで壹ツ。かんげへを付やした。コウして置くと。この女郎ハ死から。そこを殺すも大通で有るめへ。と人をたのんで實ハかう／＼した事で。ゆうれいになつて。行たのだと。秋しのへしらせたら　肝を潰して。ど

ふぞ其人を。連て來てくれろといふから、行た所が命の親とか云つて。ほんの色客に成やした。先生こいらハどうだろう。[歸]よし〳〵再考十八ぐらゐな物さ。是からハ誰だ〳〵[船]さし馬遊さんだあろう。[馬]廓子さんまづ丁が聞てへ。[廓]どうも丁ハ。新しい事もねへが。此頃逢木屋の金扇が。身うけの沙汰を。聞なせへしたか。[歸]金の事なら古ひぜ〳〵。[廓]サアその身うけの金の事にやア。大ぶ句のある事さ。ぜんてへ。金扇が色客に。里曉といふものが。久しくなじんで行やしたが。去年の暮。逢木屋の亭主が。アヽいふ客を取つてハ。しようためになるめへと。不揚た事を。金あふぎが聞出して。云ふにハ。親方さんでも有りンすめへ。わたしが呼び申ス客人に。どうして何ン（マヽ）な事が。有んすもんか。そういふ譯なら。わたしやア。二階へハ上りンせん。勤めもしいせん。したでまゝでも。焚んすといひ出して。あとへも先へもいかねへのさ。そういふしようちになれば。八人の新造も。油けになるから。よう〳〵かたが付やしたほどの事だから。此きやくも。相應に錢ハ有るし。金あふぎがほうから。すけハするし。大がいにしていた所が。こんど旅人の次郎兵衞とやらが。身うけをすると云ひ出して。中之町をも。引かせやした。サア金扇ハもちろん。里曉が胸がもめ山で。死ふの生ふのと。色〳〵した處が。さすがは三千人に壹人の。金扇程有つて。里曉にいふにハ。ぬし百兩こしらへなんしわたしが百兩こしらへんす。しかしその金も。じきに返りンすが。能ふ有んすれバ。ぬしのために。

いゝ事も有りンすと。都合。二百兩こしらへて。里曉も身うけをすると。手づけにうたせたハさ。サア内じやア。らんちきの山でせるめへ事か。小道具市の。口をよむように。した所が。旅人ハぎり〳〵千二百兩で。身うけしやうといふ。里曉ハ千五百兩で身受しやうと云ふ。亭主も金扇が惚れて居る。里曉が事でハ有るし。千五百兩の方へ遣ろうといふ。中の丁きつても。里曉が方へ行くだろうと思ひの外金扇がいふにハ。今まで里曉さんを。色客のようにして。身揚りまでして。よび申んしたハ。去年の暮うちで。せきなんしたばつかりの立引で有んす。里曉さんの方へ行ンしては。行すへがつまりんせん。二度のつとめをしても。する〳〵ハ次郎兵衛さんの方行ンすと。點が違つた故。旅人へその事を通じた所が。なる程。このうへ二百や三百ハ。出すめへ物でもねへがそれでハ。金扇を呼んで。くらしやうがねへのなんのと。少し乘地でいふから。なに。のゝくちやになるめへ事か。またどうしても。里曉が方へハいやだといふ。内でハ千五百兩の方へ遣ろうといふとう〳〵。身うけハ。じやゝせんを引ても。出バこそ。金扇ハ又の勤をしても。次郎兵衛が方へ行と。四萬六千日の物日から。中の町へはじめて。出やした形りが。古手がへしのひとへもの。白羽二重の下タ着。黒なゝ子の帯髪のさしものも。ぐつとかるくさして。八人の新造ハいつもの通り。見事にして。その日の客ハ今の次郎兵衛さ。こゐつが一ッぱいに承知した所を。金扇がいふにハ。こんどの立引で。どふもくるしくて

成りンせん。わけハ。新ぞうの形やなんぞをいつもよりハ氣をつけんしたから。二タ包ほどの。借金が出來んしてあすから。中の丁へも出られんせんと。泪ぐまれて。なんの。そのくらゐな事で。氣をもむ事ハねへと。二百兩よこしたを。里曉が所へ直に遣りやした。手附二百兩ハかへるし。つがう四百兩出來たから。里曉が内にやァ。金扇が文と。けんどんやの。はしより外にやァ。ねへ所だから。何やかやをこしらへて。内も相應に仕直しやした。なんとおもひなさる。いゝようにして。身うけをやめるのミならず。身代まで。こしらへて遣るといふハ。まことに高尾このかたの。傾城だといふ事だが。先生こゐらハどうだろう［歸］かんしん〳〵。是からハだれだの［馬］わつちが賑しい所を咄やしよう。この夏。新宿へ行やしたが。なる程きつい物ンさ。まづずつとざしきへ通つた所が。床の置もの。掛ものゝようす。能しさ。出た玉も。十兩づめぐらいで。座のようすもそうおうにして。床へ廻つた所が。まてどくらせど。來やせんから。少し腹が立ツて來て。懐中のはさミを出して。蚊屋のすそを。だんせんに切ツたり。丸く切ツたりして居たけれども。來やせん。また枕をして居た所へ。だれか來て。から紙をそろ〳〵明ケる。わつちがおもふには。座頭の客の。門ド違かと見れバ。女郎さ。こゐつハ。おかしいとおもつて居たれバ。そつとはいつて。から紙を又そろ〳〵立。わたしが側へ來て。寐入ツたか。ねいらんかと。尻目にかけて。たバこをおよそ。十匁程のんで。わつちを少しおこした。

能く寐入ツたふりをしていると。能く〳〵見すまして。寐息をかぐ。こゐつ品川なら猫だが。この土地じやァ馬か知らぬ。馬なら何を。くふだろうと。考へている。またこきうをかんがへて。烟艸をのミ。能く〳〵寐入ツたと見すまして。枕もとのかミ入に手をかけ。だん〳〵中から出して。金入の壹兩貳分を。手につかんだ。サァおきて。つかめへようと。おもひやしたが。もふちつとこれへて居たりや。だん〳〵仕まつて。又多葉こをのミ。ずつと立やした。もうつかめへようと思ひやしたが。どうであいつが取つたもんだ。どうしても取り返されると。これへて居たりやァ。床の前へ行て。何かかんがへていやしたが。今の金をかけ花生の中へ。さら〳〵と入レやした。よし〳〵。今の金ハあすこに有る。金さへ有りやァ女郎をまくらさがしに。するでもねへと。思つていると。またから紙を明ケて。下へ行やした。モウこれへられねへから。飛でおきて。花生から手へ明ケると。中から金や銀が。ざら〳〵と。よつほど出た。殘らず。つかんで。はな紙袋へ入レ。また寐ていると。女郎が來て。いふにハ。寐なんしたかへと。いわれて。やう〳〵おきた風をして。今おもひ出した。急に歸らねへけりやァならねへ用が有る。駕を云イ付てくんねへといへバ。はやひのなんのといふを。どうも歸りたくて。駕にものらず。そこを出て。かぞへて見たれバ。十三兩貳分貳朱。ふたたびそこへハ。行やせん。先生。こゐらハ。へんだろう。[歸]そんなにほめた事でもねへ。是からハ。船臥さんの番

だ。〔船〕こんなのいきまを聞たれバしきりに遊びに行たくなつた。〔隣〕おらもなぜか行てへよ。
〔馬鄗〕かわつたこつた。おゐらもさ（とミな〳〵。はなしをして居たりしが。ふしぎやつなまぐさき東風ふく
と。次第にねむけいやまし。終に四人ハ寐入ける）〔船〕サアへゑりねへ。爰だ〳〵（ミな〳〵小松やのくゞり
を明はいる）〔女ぎん〕お客だよチヤ船さんか。お久しいねへ。サアミなさん。お上ンなせへし。（四人ハ表ざ
通しハ明イているか。〔ぎん〕見通しにハ。客がごぜへすおもてざしきへおいでなせへし。〔船〕見
しきに行）〔馬〕是が四けんとやらか。〔鄗〕てへげへなうちだねへ。〔隣〕船さんおなじミは居るかの（女
ハてうしさかづきお定りの通もち來る）〔ぎ〕船さんへ。おくまさんハ。見通シへ出て居なせへす。どふせ
うねへ。あなた方ハ。だれぞいゝ子を。呼びやしやうね。〔馬鄗隣〕どふともしてくんねへ。〔船〕そん
ならおくまに逢たうへで。あいつがうちの子でも呼バふ。でへぶにぎやかだの〔ぎ〕大一チ座さ。藝者
衆を六くミ呼んでさ。おくまさんも。あすこにさ。〔船〕見合セて來ひといつてくんねへ〔ぎ〕そう申や
しよふ（と下へ行吸もの肴鉢もち來り）今に來なせへす。（女郎おらくお吉おいねきたる）〔三人〕おぎんど
ん〔ぎ〕はいんねへ。（さかづきを段〻古風のとをり）〔船〕モシおめへなんぞハ。すミに斗り居ずと。こつ
ちへよんねへ〔三人〕あい（とばかり少ひざをよせるまた見通しニて拍子木の音する）〔船〕狂言か〔ぎ〕アイこん
ど幕が明やすと定九郎場さ〔馬〕久しいもんだ。どこでも忠臣ぐらをするやつだ。（女郎三人ハ下へ行キ少

し酒事有）［船］この酒にハ火がへへつた。料理ばんへそういつて。口をかへで（マヽ）來てくんねへ。［ぎ］取りかへやしやう（と下へ行。船臥ハおくまが逢に來ぬを。むしやくしや。思ひいるに。外の女も女郎も。狂言なミに行。來ぬ故猶ミごうをわかす）［隣］船さんおなじミの所ハ。とんだおつだねへ ［郭］出し物もいゝが。一ツてへ内の仕うちが。違つたもんだ。（船臥ハいよ／＼せいて手をわれるほどたゝく）［ぎ］なんでござへす。今のおてうしかへ。モウ出來やす。［船］コレわいらハ。こふして置てどふするのだ。この日のあたる。せうじの中に。あまぼしじやアあるめへし ［ぎ］（やかましくならんかと思ひそばへより）モシこふでござへす。見通しの客人が。やかましくつてなりやせんから。ツイ爰が明きやした。そこをばひとつ。くミわけねへ。おめへさんでもござへせん。［船］側へよらずと聞へるハ。こつちの耳からこつちへ通ると。高田の不士の際へ出るハ。そのくミわけるも。氣にいらねへ。雪ころがしハ。手がつべてへ。通ころがしじやアそんがたつ ［ぎ］イエサ。アノ。てゑゝが。ぴか／＼を。二ツさす客人で。ツイおそまつに成やした。［船］まだこのあまハ。いやアがる。なんだ。ぴか／＼を二ツさす。合躰の雷でも落ハしめへし。二本ンざしがこわければ。いてう屋のかばやきと。居酒屋のでんがくハ。さかさに立ツて喰にやアならねへ。この鉢肴のざまをミろ。かれゐの煮びたかしらねへが。しぶうちハの鰯出しを見るやうで。どうして是がくわれるもんだ ［馬］コレてめへが坐しきをまハす女中衆か能く聞けよ。並

らんだやつらの面を見ろ。親ふねの雪隱から。日ッしよくを見る。眼つきをする。中のがつらの長ひと來てハ堀ぬきの足代に。火の見の纖穗をしたほど有るその次に居たふんばりハ俄雨に菰を着た脊むしのようなふうをする。あれでも女郎で賣れるのか。うぬらも爰へ出されるのか。と屋の夜鷹のこんれいに。惡魔ぱらゐを見るような。われからさして。氣にくわねへ［廓］火入のたどんもむしがいゝらかんのあたまで吸うようだ。［隣］せんたく箸もむねがわりひ（といざこざをいふを聞付おくまハ見通ガ來）［くま］船さん大きな聲をして何ンだへ。［船］大きな聲をしたがどふする。うぬに逢たそのうへで。新ぞう呼ぶとも呼ぶめへとも。さつきに云ッて遣つたのに。今迄つらも出さねへが。いめへましひあまじやァねへか。［くま］（ハすこしむつとして）來ねへハわつちが惡かつたが。あつちハとんだにぎやかだよ。こんな淋しい事じやァねへ。人のいゝ客人さ。武士でやしきで侍さ。あんまり蚰をいゝなさんな。そんなに。あまだの川だのと。かんやの夜うちじや有るめへし。［船］なんだ。うぬまでが向へなをる。ぶしがどうする。陳皮がどうだ。甘艸でも本藏でもこうなつちやァ。がつてんしねへ。モウ是からハ。やぶれかぶれだ。（と鉢肴と硯ぶたをけとバしうでまくりをして）このやてへに。居るやろうハ。耳の穴をせつけへか。しやくしで堀ッて聞きやァがれ。爰いらの。でへ地にな。かくし賣女をうらせるも。誰がおかげで置くとおもふ。おゐらが壹ッどつこいと。ふんどしを引つめれバ。蝙釣り艸をし

つかりうゑて。いぬ引ころの小屋ァ建て。ぺん〳〵艸の住へにやァ。こうろぎの藝しやを置。それに大きなつらをして。硯ぶたとおらばかりさかづきなんぞが。喰ハれるなら。大門通か中通りか。藤木がうちのねづミになる。こふ云ッちやァてへそうだが。洲先の升屋むかふでハ。孫四郎でも太郎でも。中洲の四季菴。上ハ手でハ。三ン橋亭に甲子屋。芝居の事なら二文ン字や。樽三ぶでも。百川でも。寒と土用にや見舞をつかふ。コウいふ。しがねへ。へんちきな。四軒のうちへ來て遣るも。おための御の字が。御(マヽ)で來ルに。つき上りのした內じやァねへか。 [歸](ハ。きん〳〵金平と云。そうしを見て居たりしが。よくねいりし四人の內。わけて船臥がうなさるゝゆへ。ゆりおこす)。船臥さん。おきねへ。どうぞしたか。(船臥はおきてあせをふく。三人もおきる) [船]遊びに行てへと。おもつたせへか。四軒へ行ッて。いざをいつた夢を見やした [鄭]わつちもさ。 [隣]おれもさ。 [馬]替たともあるもんだ。舟(マヽ)さんが頭取で。小松屋のゆめを見た。 [歸]コレ有るまじき事にもあらず。遊里へきざす四人のこゝろ。四軒へ行しハ。卦のおもて。通なる者を柾といふ。是ぞ則。まさ夢なりと

やつぱり夢ハ。さめにけり

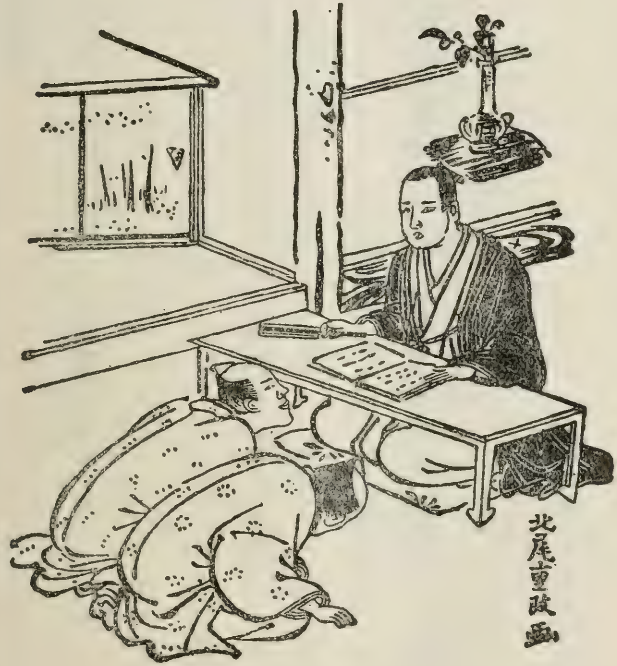
辯蒙通人講釋

全

辯蒙通人講釋序

雀どんぶりこをして。樓臺を吹出し。田鼠早替をして。ちゝつくはいとほざく。成程天地ハ一大戯場也。その仕組をかんがミるに。遣り手食ふとつて。立臼と變じ。南瓜小兵にして。陰瓜と稱ず。大ぞうむだを仕盡して。大通となれども。全盛窮て至極の徒然たり。世の中の榮枯流行。一向きまりなし。予强異軒が通人講釋を讀で。三度うなづき。七度嘆じて曰。强異軒〳〵。通哉强異軒。强異軒あつてより以前强異軒なく。强異軒有てより以後强異軒なし。强異軒〳〵通哉强異軒と。むしやうやたらに似山の。山荘自(マヽ)列亭の生壁に落書す

朱樂菅江題


北尾重政画

自序

講師強異軒。辯舌ながるゝ柳かげに。よし簀張の水茶屋をかまへ。床代六文八文の湯歸りの息子をあつめ。欣々として告げて曰。それ通人の寐言にハ。俏人妄語鹽屋佐平次甚氏胡はつたり。おつときた山かん烏やつちよん〳〵やちよちよんちよん。三七八ァ。ないところきんならまごらあ。とらやあ〳〵さんげ〳〵。六根から油をしぼる智惠の海。硯の海と鳴戸の海。ふかいあさゐハ姦夫と客。姦夫がなければ倡妓ハ闇。やミらめつちやの野夫でハいかん。有趣人といはるゝうれしさハ。是大通の一德と。席をたゝいて席料の。波ならんだる太平樂。その太平記の剽竊。名づけて通人講釋といふ

安永九ッのとし

子の春　　　強異軒述

講師よう今晩ハ。皆様御詰なさいました。あまり今晩ハ大入なれバ。拙者著述の辯蒙通人講尺（マヽ）と申ものを講まして。おきかせもほしましよう。（ときゆな呑。咳拂二ッ三ッして）扨世上に申ます野夫物知能人大通と。四色にわかりますれども。ぎやつと生レるより。物知も能人も大通もなく。ミなやぼ也。野父せい人して物知となる。物知化して能人と成る。能人日をへて大通と成る。此大通と申まするが。誠に是追分也。身のうへ〆て堅爺となり。又ハ菰をもかぶる。人間の先生死の境と申ハ。此大通ふでございます。見きる時で見きらずんば。身のうへ成るべし。また女郎をもつぱら買ものにも。大ィの野父あり。百両の金も貳百両に遣が。女郎買の口傳でございます。ト申て金を遣ハ。野父と覺しめそふが。又そふでもございませぬ。多くの女郎共。ミな客のふところがあてゞございます。新造の五六人から遣ふ女郎ハ。お歴〳〵のおく方様よりも。大キウございます。それ節句物日遣り手若イもの茶屋へのつけとゞけ。新造を出すの。袖を留るの。部やを持せるのと。其上に毎日〳〵中の丁へ出るにも。同じ小袖も着られず。夫〴〵に高そん料をかりても。着て出ねばならず。大ホ金の入ル事でハござりませぬ。其金をやらぬと申ハ。是人外でござります。ト申まするハ。拙者がもふさいでも。ミな様御ぞんじのヿでござります。其金の遣りよふが。野父なれば。女郎の身にハつけいで。其金で呼たい客をよび。或ハ此節句がどふも出きんせんから。三両くんなんし。五両くんなんしとひつたくり。

其金でわがすいた客の仕廻にして呼。是なんのとなく。おさきにつかわれるの也。夫故女郎ハ。所ゝくいちらして見ますするも。よふござります。其内にハ。呼ふとおもふ女郎もあるものでござい。扨又此方も。野父でせきこんでもいけず。又ちよく／＼ら斗りもいかぬものでござります。トいつて。ほれてミせねば承知せず。女郎だとて木で作たものでもなし。ほれまいものでも御ざりませぬ。先申内にも色男がとくで御ござります。どのよふな女郎でも。何いろおとこにほれるものか。なんでも氣どり次第とハ申せども。是まつたく女郎のがと申もので御ざります。寄合てのはなしを聞に。千風さんがゐゝ男だ。イヤ千風さんより吉さんがゐゝのと。陰でハうわさたら／＼。よく／＼末ゝを考まするに。噂もされず。行先／＼で髭をかゝせられたり。又ハ鼾のかん病斗して居るが。末繁昌でござります。女郎にほれられると申ハ。誠に天命にもつきはてたと申もの。ハテ身代棒にふり仕廻ハいつでも。銚子の里へさすらいの身と也。是がひいきの引だをしでござります。しかしケ様ハ申まするものゝ。私はじめ。一生ニ一度ハ。女郎にほれられてミたいものでもござります。成程たまりますまい。野父物知能人大通とわかつてハおりますれど。そふ言だんになりますれば。大通も野父になる道理でござります。只初會裏のとりなし。早く女郎ニ心やすくなるといふ所が。野父でまいらぬ所でござります。しかし金なしに。身ンからもミだす大通と申ハ。ござりますまい。大金を遣ツた上への大通。コリヤ

其くらいのヿハ。ありそふなものでござります。又大通の中にも。十人が九人は。ミなうぬぼれなものでござります。又我心から大通だと思ふと。やぼよりハ女郎にむごくされるもの也。尤むごくされるとて。ふられるのでもござりませぬ。我大通の氣でいると。せんどいつてかふ言ッてやつたら。ほんのことにして。かふいつてよこしおつたの。夕べいつて。かふけうけんをかいてやつたら。誠とゝ思つて。いろ〳〵なヿを言ッて泣キおつた。又今夜いつてかういはふと思ふと。いつぱし女郎を化カした氣で居る所が。先でハこいつ野父でもなし。だましてハしよせんいけんやつだと思ふから。客のいふことをまにうけた皃で。泣て見せたり。笑て見せたりすると。今夜も狂言を書てやろうと。我イツカばかされている所へハ。いさゝか氣もつかず。足を近く行が。是すいが身を喰ふと申ものでござります。女郎の心と申まするものハ。金を出して買ゥ客にハ。どふいたして知れるものでハござりません。夜毎〳〵にかわる枕のヿなれば。ずいぶん中には呼びたいと思ふ客もござりましやうが。能すればよくするほど。まよいが來て。せきこむものでござります。それだから女郎買の一トさかりにハ。何も手につかず。只ぼうぜんと。寐ても起きても。何のやくにもたゝぬヿを。考て居ますものでござります。又何を喰てもむまくなし。又こしらへて喰氣もなし。そこで女郎買のぬかミそ汁と申傳へましたとミへました。あながちしわい斗の。ぬかミそ汁でハござりませぬ。一躰が女郎買と申

名斗で。万人に壹人も女郎を買ものハ。ござりませぬ。何ンのともなく金を出して。女郎のきけんを取りに行ようなもんでござります。とかくなじミかさなつたうへでなければ。おもしろミも出てまいりません。扨又其なぢんで行時に。禿などが來て。なにか耳こすりいたすと。間もなく女郎立ッて行。跡へ遣り手が來て。モシ今晩ぬしの客人がお出なんしたが。一昨日の晩來て。腹を立ッておかへりなさんしたから。こよいはどふも名代も出されず。こつちがわるいと申せば。かへろうとおつしやりますの。又ハ二三日の内に。旅へお立なさいやすお方でございやすが。今夜ぬしを出しもうしいせんじやァ。わるうござんすのといふ時。ウヽ〳〵と斗りいつてやるも。よくなし。まつたはらを立ッて。やらぬもわるし。こゝにはミな様の。御工風のあることでござります。こゝが女郎買の。いつちむづかしい所でござります。だれしももられてハ。心もちのわるいものでござります。それだから。ろくに氣のしれぬうち。一ッ寸おめにかゝりやしやう〳〵にハ。ひやり〳〵いたし。又とくしんづくでやつて置て。一人り腹を立テ歸へらうの何んのとて。むづかしくおつしやりますも。あるもので御ざいますが。さうすると女郎一人りこまつて。いろ〳〵の言譯をいふ内に。又あつちらの客が。座しきを明たとて腹を立。女郎をこまらせ。又かけ出して出て。外の内へ上ッたり何かするハ。大イの野夫ともうすものでござります。それがツイつのつて。がんがらがんのかねに成るもので御ざいま

す。其はづで御ざんせう。女郎も我すいた男で。腹を立ッと違ッて一ッこく斗りやつてすてますれば。ツイ夫ぎりに成ます。又其ように腹を立ッても。又行客がございますが。それは鼻の下の永ひともふすものでござります。さよふいたすと。女郎にうちかぶとを見ぬかれ。腹を立ッて歸ッても。又來るからうつちやつておけ。といふように成ると。いくぢハござりません。先ヅすなをにいたさうなら。もらわばやつて。其晩の仕打を見て。翌晩の仕廻を付。其あさもいつもと違ッて早く歸ッてハ。腹をたつたと見られますから。ずいぶんこらゑて。いつものごとく歸り。尤其晩ハ。至而きれいに遊び。よくばんハあけぼしにして行ず。さすれば其朝早〻。文をよこすべし。少〻用事あつて。少しおそく成たゆへ。参らなんだなどゝ。ざつと返事をやり。又翌晩の仕廻を付。又あけぼし。さうすると女郎も氣どり。毎日〳〵文にふミ。そこで二三日過て。ふら〳〵と行と。わるければ直にもらつて出べし。其夜女郎も腹立皃にて。よくたび〳〵あけぼしにしなんした。おかたじけなふおざんすなどゝいふべし。そこをこつちでハ。ずいぶん腹を立た皃をせず。來るならこられたつけが。又來てももらわれるだろふと思つて。そこでこなんだ。來て氣をもまうよりやア。内に居てお袋の皃をミて居るが。氣がもめねへでゑゝから。内に寐てしまつたなどゝ言ッて見れば。女郎も何やかや。一ト言二言いゝ。おもしろおかしく。口舌のよふなけんくわに成べし。其内に女郎の氣どり。おもしろくないハ知レます。此

方でもこんたんをくだく時ニハ。ぜひしれませんともふすとハございませぬ。夫だが今のおかたハ。ミなうぬぼれ斗多ウございますから。買女郎がほれた〳〵と斗り思つてございます。其くせそれだとて。半年となじんでハいきません。まだ〳〵女郎にはらをたゝせる。また氣をひいて見る。ふられた時を取り直す。いろ〳〵口傳もございますれども。中〳〵一朝一夕にハもふされません。勿論是ハ。女郎買をなさるほどでハ。人〳〵に御工風がござる物でハあれども。女郎の氣どりの高ィひくいとにも。寄るでございます。又一向にたわひのない女郎と手取ものと。欲心な女郎と。色深ひ女郎と。それハ見ねば。しれません。中〳〵一ようにハもほされません。（先ヅ〳〵一ツぷく給ませふと二三ぷく呑又吸ながら）時にお前様がたハ。何んと覺しめしますか。ぞんじませんが。女郎に寄りまして。いろ〳〵なつまらぬ引ごとなどをもふして。氣をひいて見ますやつが。あるものでございます。夫を拙者などハ。ちやにして。何もかもそけてうけ給ります。それともふすが。なんでもあいつめにだまされまい。ちよ〳〵らにかゝるまいと。むねに一ツぱいあるゆへに。先が實でいふかうそでいふか。そこハぞんじませんが。たとへに申ますけいせいに誠なしと申とを。子耳にひつぱさんでおりますれば。あれもうそだ。是もうそだらふと斗りぞんじて。實なことをもふしても。かつけなしてしまいますから。元もこもうしないます。先ヅうそであらふと。ほんであらふ

と。向ふから橋を渡してまいつたら。渡ツて見るがよふござります。ひよつと實のつるへほりあてまいものでもござりません。しかしそのつるを堀當テよう〳〵迚。拙者共もかくの仕合でござります。マア女郎の心があらわに知レいで。もつた物でござります。是がいち〳〵知れましたら。家賃の出入と勘當されるので。庄屋様ハいそがしうござりましやう。ト（たばこをはたきさゆを呑）扨是から拙者が身の上を。ちつとおはなしもほしませう。拙者も只今でハ。かよふな浪〳〵の身のうへでござりますれども。むかしハ何ンの何がしと申て。ゆうふくにくらしましてッ乳母もりこし元などあまた遣ひ。さあやちりめんでばかりそだちましたが。只今でハこれごろふじませ。ぐん内島の七ツ半時過と申小袖一てん高麗やじやァ御ざいませんが。アヽ大屋さんのかゝさんも。ぐん内島じやァねへがぐらいで扨やぼなやつでございます。夫よりだん〳〵せいじんいたすにしたがひ。手習ハ勿論。讀ものそろばん。香なけ入しうきく。茶の湯琴。楊弓亂舞はいかゐ。碁に將棊。あるとあらゆる稽古事。金にまかせて致ました。夫ゆへ親類ハ勿論。近所の者もゝな。アレハきよふなものじや。多稽なやつじやと。譽そやされましたものが。十五の秋。ふと手前へ心安ウまいるいしや大野卜庵と。宗匠の巾蟠と。よし原へ燈籠見物に參りました所が。誠に錦繪のごとく新造禿打連て美を盡シたる駒下駄の行かふ有様。何とも言葉にも盡しがたく。左右の茶屋ニハ客と客。三味せんやら牽頭やら。氣上りのするほど取ま

いて。さいつおさへつのやんちや酒。川柳がゐらみにも。待間ほどなく駒下駄のしとやかさ。又。のんで居る所へからアりからり來る。と申ごとく。歸るとハ打わすれ。中の丁の眞中にもたおれたた（マヽ）き風情なれども。つい女郎といふもの買ましたとがござりませねば。きみわるくすご〳〵歸りまする江戸丁の角ド。客をおくつた歸りと見へ。唐土の楊貴把（マヽ）か我丁の名主のかゝ様かともいつつべき美人。ソツトきんとふに承りました所が。とら巴屋の庭こす。どふぞあれを買たいものじやと申ましたりや。夫ハ安イ事と。早速卜庵巴やへ參り。うけ給りし所。隨分宜よしもふしますゆへ。飛立ツほど拙者もうれしう存ましたゆへ。サアまいらふともほしました。巾蟷が申ます事ニハ。中三かいのさしこゝでも參られますまるから。茶やハわたくしが心安ひ内が御ざるとやら申まして。中の丁の大津屋かん四郎方へ參り。酒など給。大津やより間に遣しました所が。客ハ歸てございませんが。仕廻がついておりますから。座敷ハ外になすつて下さいませとのこと。隨分どこでもよしと。早〻ちやうちん附させまいりました所が。只今ハあの様な作ハ御ざりません。ミセから出這入ハ成ませぬ。ミセのわきの細道から這入ますと。臺所へ參りますおかしな作で御ざりました。座敷ハ廊下の廻りざしき。ほどなくずつと出てまいつた所が。見事なものでござりました。只今あのくらいな女郎ハ御ざいますまい。其跡からしんぞう二人り。拙者もあがりハあがりましたが。おつかなうれしさ。若ものが盃を

出しましたから。少し給べまして。盃臺へのせますと。禿が庭こすが前へ差出しますと。なんとももふさず。かつちりといわせ。のむまねをして盃臺へのせますと。卜庵が前へ盃まいり。順ニト庵巾蟷とも。おさだまりの通り盃済ますと。吸物など出します。茶やからも何か送りもの。次ニ膳を出しました所が。拙者も晝給べましたまんまでございますから。殊の外空腹でござりましたが。向ふに美く〳〵敷並らんで居られますから。ぐつとのまれまして。一向一口もいけず。やう〳〵少し盛ッたのを給べた所が。一チ膳めしをくふと。けして裏をかへさんものだ抔と。女郎が申といふことをうけ給つておりましたから。むりにまた少し給べ。卜庵巾蟷などハ。酒もしたゝかのミ。めしも給べ。ちよ〳〵らしつかりむだ半分とやらで。大さわぎ。暫くいたすと。若ものが参り。ちとあれへと申から。卜庵巾蟷と連立。禿に案内いたさせ。奥座敷のれんじで涼ンでおりますと。禿がゆかたをもつてまいつて。おきけへなんしともふしましたから。ゆかたを着かへ。たばこを給べておりますと。又壹人リの禿がまいりまして。あつちらへお出なんしと申て。拙者を連てまいつた所が。元トの。座敷一ツぱいの蚊屋を釣り。裾通りにハ緋ぢりめん。内ハひぢりめんのふとんを二ツ敷黒びろふどのふちを取ましたひよくござ、夜着ハ小夜着。さよふ致と。卜庵もきんとうも。是あの子おれが寐所アどこだと承ると。こつちへお出なんしと。連てまいる。卜庵巾蟷もいとまごひしてまいりますと。拙者壹人リ。サテ〳〵

心ぼそく。蚊屋の中へそつとはいつて。片わきのほうへ寄てふせつておりました。只今のむすこたち　を承るに。中〳〵拙者共のおつぱつて(マヽ)買ます時分よりハ。むねがたくましうござります。なんとも覺しめしません。拙者などはこけと申のか。今の息子達ら馬鹿ぶとひのか。是ハミな様の御評儀(マヽ)でござります。まづ〳〵是ハ追てのこと。右のようにいたしておると。禿がたばこの火を入レてまいりましたから。たばこなど給べ。うれしさもうれしし又こわさもこわし。いつそ女郎がまいらねばよいが。ともぞんじました。女郎がまいつたらなんともほさうかと。あんじております内に。廊下ばた〳〵ずつと這入ッて。しやうじを立。あんどんの火をかきたてゝ。

しばらく扇遣ひいたしておりました。サア拙者も。寐たふりをしておりましてもわるし。又おきておりましてもばからしうござりますから。なんごともほしたら。夫レに取りついて。はなしでもいたさうとぞんじておりますと。やがてたばこを給べにかゝりました所が。火がきへました。エヽ馬鹿らしいトカなんとか申まして。手をたゝきますと。禿がまいりました。なぜ火を入ておかねへ 〔禿〕今いれてまいりんしたものを 〔庭〕夫でもミや。どこに火がある 〔禿〕そんならきえんしたらふと。火入をもつてまいりますと 〔庭〕これ〳〵水も一ッもつて來や。と申て。又扇を出してものをもふさず。あをいでおります。拙者も初手からものを申たら。ようござりました

らふに。今さらあついとも。藪から棒を出したよふにも申されず。卜庵でもまいればゑゝにと。ぞんじておりますと。だれもまいらず。中三と申ものハ。此ような仕打のものか。たゞしハふられたのか。一向しれません。所がやがて禿が。片ゝに火入。片ゝに水をもつてまいつて。アイとさし出す火入を取て。たばこぼんへ入まして。二ふくほど給べまして。三ぶくめをすいつけて。あいといつて出しましたから。すぐに給べても。あまりおかしうござりますから。だまつておりましたら。あいたばこ呑なんしと。もふしましたから。ふいと目のさめたふりをいたして。あいととつて給べまして。すぐにはたき。そこで拙者がきせるで。また給べますと。女郎も水をぐつと呑。

拙者もたゞさへあついのに。少しのぼせてまいつたから。扇でやつたらあをいでおりますと 庭 ねつから風がおざんせんねへ 客 アイなんだかいつそ。あつうござりやす 庭 けふどこいぞ。お出なんしたお歸りかへ 客 舟へ出やした。夫からとうろうけんぶつにきやした 庭 いつお出なんした 客 五ツ時分でもござい やしたろう 庭 其時分ハ。いつそ込ゝんしたらう 客 アイいつそ込んで。とうろうもろくにミやせん 庭 わつちらも。どこに何があるか。ついに見んせん。もふ〳〵わつちやァ込ム時分に。中の丁へ出んすのが。しミ〴〵いやでおざんす(ト咄して居る所へ たんすながら〳〵) 庭 だれだ 新造岩波 アイわつちでおざんす 庭 岩波さんか 岩 アイ 庭 是〳〵ちよつと来な。

おめへさつきのこたア。どふしなんすヨ［岩］おさきどんにさうもふしんしたらア。タヾアイと斗いゝした［庭］アイと斗じやアすまねへはな。おさきどんにさつきのこたア。どふしなんすとつて。コレ〳〵そしておめへにいはうと思つた。さつきゑちぜんやに。万里さんが居て。よくいつてくれろといゝなんした。あつちらに居なんす此客人の連衆が。心安ひといゝなんすから。文を書イて。ぬしの連衆にたのんであげもふしな［岩］ほんにかへ。うそでおざんしやう。モシほんにかへ［客］アイたしか。（マヽ）つかづきでございやした［庭］マア今のことをいつて來な。おし付ぬしの連衆に。たのんであげよふ［岩］そんなら早くいつてきんしやう。そしてわつちが客ハ。今歸るといゝなんすから。鳥渡かへしていつて來んしやうと。出て行［庭］あの子の所へ万里さんとて。とんだ色男がきんす。いつそあの子ハ呼たがつていゝすが。まだあゝいふ新造衆のこつたから。しゝても來ハなんせんが。いつそあの子アほれていゝすよ。

夏の夜の短ひを長ふ覺へ。漸七ツ半時分になりますと。大津やの若もの。アイおむかいと參りましたから。ミんなをおこしてこい。ともふしながら起あがりました所が［庭］マアよふおざんす。夜が明ケておかいんなんし［客］どふもうちがやかま

しうござゝやすから。はやく歸らねへきやァ。わるうございやす【庭】どふぞ又此頃にお出なんし【客】そんなら九日の晝きやしやう【庭】待なんし。九日ハゥ、よふおざんす。お出なんし【客】晝ならいつでも出られやす【庭】そんならきつとおいでなんしとはなして居る所へ。卜庵巾蠕がまいりまして【卜】サァ〳〵まいりませう。おひんなりやし【庭】ぬしやァさつきから起て。かへらう〳〵といつてゐ（マヽ）いなんす【卜】さうでございやしようと。屛風を明ケ。此あついにどうゐられやしよふ。けへりやしよふ〳〵ハ。わつちらが事さ。そしてわつちらが女郎衆ハ。まくらをおつつけるかおつ付ねへに。高鼾さ。そして又寐言をいふと出してハ。夜中寐言さ【卜が新造】寐むそふな貞をして。ヲヤうそをいゝなんし【卜】なにてめへしるもんだ【新】なんといゝしたへ【卜】向ふの人。なすび漬を五文がんと。ちさのはのよごしを三文が。もつてござへと【新】ヱヽよしにしておくんなんし。そんなものハ。きれへでおざんすものを。と（咄して居る所へ）【岩】御めんなんし（卜來る）【庭】モシ〳〵おめへ。ソレさつき中の丁の。ゐちぜんやニ居なんした。万里さんをしつて居なんすねへ。ソレさつきのさ【卜】ウン〳〵しつていやす。なぜへ。あの子のきやく人ンかへ【岩】ほんにぬしやア。しつていなんすかへ。うそでおざんしやう【卜】しつてるだんかへ。わつちが兄ぶんだものを【岩】ナニおめへよりやア。いつそわかうおざんす物を【卜】わかくつても兄さ。そりやアおめへ方のほふにも。御ざいやすハ。妹女郎に

ソレ部やももたず。化ケそうなのがあるものを【下の新】インヱわつちらが内にやア。そんなのはおざんせん【下】こゝになくつても。ほうぐ／＼にありやす【岩】モシ／＼そして万里さんといふハ。どんな男でありんす。あてゝミなんし【下】先ヅ目が二ッあつて。耳が両方にあつて【岩】モシおどけずにいゝなんし。そんならもし万里さんのうちやアどこだへ【下】アレハ何さ下谷さ【岩】うそをいゝなんし。番丁でおざんすものを【下】番丁と下谷とハならんで居る、わなミが番丁ならこつちらが下谷サ。てふどこゝのうちから。角ミ丁のかどへ行ほど外アねへ【岩】ほんにかへ。わつちやア番丁ハ。是から百丁ほどもあるとおもひした。どうもぬしやア。たしかうそでおざんすよ【下】うそなら文を書てよこしな。あしたとゞけて。こんどくる時返事をもつてこよう【廷】文をたのんであげもふしなんし【岩】今夜アどふも書ておきんせんから。どふぞこんどお出なんす時遣レて来ておくんなんし【下】しかし文をやらずバこまいさ【きん】ハどれも／＼じやうなし共が。客をよんでハちよ／＼らでおつくるあるやつサ【きんが新】エヽおいておくんなんし。客ほどじやうのねへものハおざんせん【きん】来る客にじやうのねへといふがあるものか。女郎といふもなア。居ていて呼のだから。くればよし。こねへでもよし。客ハつきものはなれものにしておくものを。客といふもなア。足をはこんで来るだけ。一チわりじやうがある【きんが新】エヽ客といふものハ。あそこへも行。こゝへも行。いつそしやうわるうしいす

[きん]夫でもおいらハ。じやうのあるのさ。はる〴〵來て。寐ぞふの追かけつくらアして居るものを。モシおいらがわつちらが女郎衆の寐ざうのわるいを出しちやァ。マアきいておくんなさいやし。八ツ過でもございやしたらうが。あんどうがきへやした。わたしもとろ〴〵寐やした。さうするとこの子ハ。蚊屋のそとへいつか出て。寐ていたそふさ。あんまり蚊にくわれたかして。目をさまして。わたしがほうへ手を出して。蚊やごしに。もし〴〵とつておこすから。目をさまして。なんだといゝやしたらァ。おめへハとんだ蚊やのそとへ出て。寐てお出なんす。こつちへ這出ッて寐なんしといゝやしたから。是ハしたりとぞんじやして。蚊やの内へ這入ル氣でずつと出た所が。蚊やの外トさ。てめへがいつか蚊やのそとに出て居て。内に居るわつち迄ひきづり出して。蚊にくわせるやつさ[きんが新]うそをつきなんし。おめへがわつちをずり出しなんしたものを[きん]それでもおれを。いつそおこしたじやねへか[きんが新]ありやァあかりがきへんしたから。いつそおつかなうおざんした[庭]あの子たちやァなぜあんなに寐ぞうがわるうおざんすか。いつでも蚊屋の外トへ出て寐ていんすにへ[きん]時に。いつまで居ても。おなじこつてございやす。サアけへりやしよふ[庭]ようけへりたがんなんす。サアおめへ壹人りおけへりなんし[きん]わつちらァ三十日が五十日。けへらねへでもようございやす。なろうとなら。こゝの部や子にしておくんなさいやし[庭]ぬしと一所に來てお出

なんし。おめへ壹人りハ。いやでおざんす。ぬしと一所にならら。おいてあげんしやう〔下〕サア〳〵モゥめへりやしやう。此ごろに又おいでなさいやし。ひよつとぬしを。どらものにすると。ぬしの親ゆびに。わつちらがしめられやす〔庭〕モシ九日の晝。お出なんすはづでおざんす。つれもふして來ておくんなんし〔きん〕これハきつごと〳〵。九日アいつだ。あしたと。あさつてハ八日。しあさつてだね。もし早アく來やしようと。ちやうちんとぼさせ。その朝のうれしさ。まう晩にも參る氣になりまして。こわいとも。少しもなくなり。はしごの下迄。女郎におくられ。堀のたん州やから船にのり。かへりますると。もう九日がまちどほで。九日ハ晝よりまいりました所が。もうこわいとをわすれ。おもしろく成り。三會目ハ床花（とこばな）。あくる日ハ鼻紙入に文を添へ。それからハ日ごとにまいる文。それより致て。もうこゝにもあきがまいり。あそこへも行爰へも行。五丁の女郎の紋所迄。くうに覺へ。あそこからもこつからも。どうなんしたつちつとお出なんし。又格子先をとほりますれば。呼びかけられ。又大門につけられて。（コ、原本一字分アキ、二カ）日三日の居つゞけ。それがこをじて此躰。是よりハ女郎のこんたん。色〳〵御ざいますれど。是ハ明晩もほしましやう。先今晩の所をよく〳〵お考なされまして。かならず〳〵。大通にならうと覺しめしますな。大通にならうと覺しめすと。拙者同然。誠ろんご讀ゞのろんご知らず。大べらぼうのひつこぬき。といへば。一座どつと笑ツて立ツと。表でハ四

ッの拍子木。かつちく〳〵

鯉池全盛噺

全

自序

蠹が曰金銀藏に滿るといへども不施掃溜に如ず錦を貯置といへども着事なけれバ腐薦に如ず金銀もつて寶とせず仁親もつて寶とするとはずつとむかしの安坊の金言錢金なけれバ乞食也こじきがなんの寶なるべし世に寶とするは金銀なり然りといへどもかねハ暫も手に附事無金の飛事翼在が如し又人に借んと欲れバ其高事新富士山をふミ臺にして雲中にのぞむ金をもふけんと欲折介ハ貳合半のうちを引て腹をすかし草鞋を作て手にまめを握る船頭は帆柱となつて川風に吹れ獺肝と割床にて一睡を結ぶャッサヲッサの駕籠かきハ旦那を川岸の眞木と見てなんばいかあける按摩ハ木兎に似て

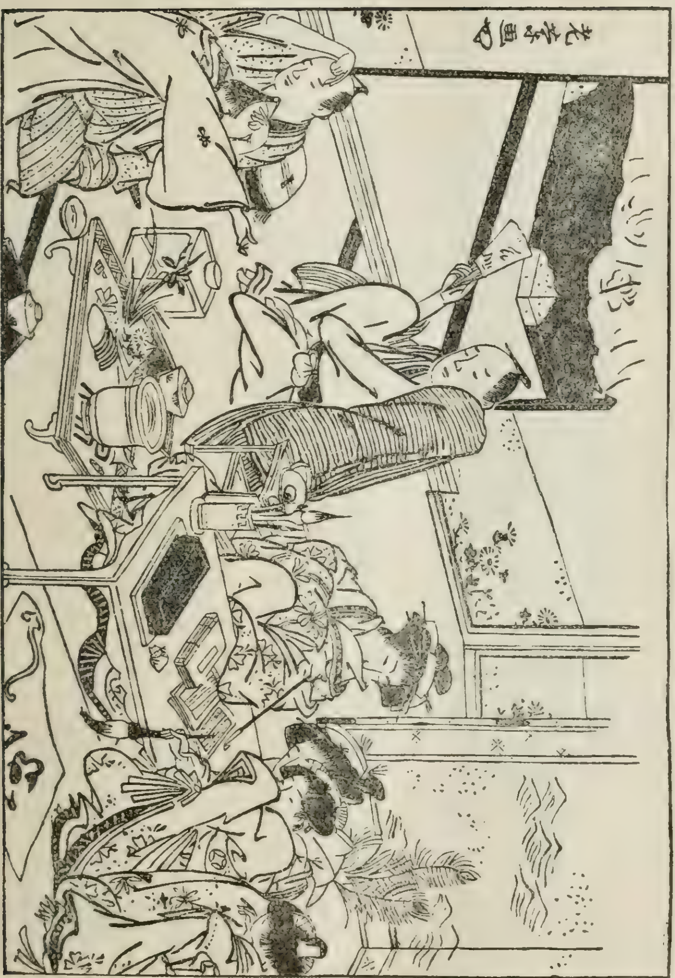
夜を晝になし杖を眼ニして大道を歩く醫師ハ藥取を待せておとりとなし野良の鷹羽子を立て病家を欺も皆是金をもふけんが爲なりかゝる貴金銀をほしいまゝに遣捨一生を有福にくらす事ハ如何なる果報やらん爰に鯉の池名も傳右衛門と人も習(マヽ)る大坂の大盡金銀を塵よりも安く遣捨れバ泉のごとくわき出る金のなる木を鉢植にして室に入置にひとしく年〳〵に黄金の花を咲得て樂美(マヽ)にたへず其遊興の莫(マヽ)太なる事を書林につ(マヽ)ゝけて鯉の池全盛噺と題する而已

天明二寅ノ初春

雲樂山人撰

鯉池全盛噺

魚ハ鳶の高飛を不恨足ハ鶴の長き足を不恨予貧也といへ共金持を不恨勘略の巻ニ曰千両の寄楠の下駄を履て行んより寧三百が駕籠に乗れといへりなんぞ貧敷事を愁んやと智恵有顔の下手高慢鼻（マヽ）高キが故に不貴といへ共我にまされる大通のあらんやと慢心常に不絶今日ハ廿四日なればば愛宕山へ参詣し變通共が不洒落を見て心をなぐさめんと行道にてどつと吹くる風にさそわれて雲井はるかにのぼると見えしが不審なりつる次第也しばらく心をしづめて見れバ様子有ゲなる老人寛〻と書を讀で居けり彼老人ニ所を問へバ爰も婆娑也と答其書の文を聞に我朝の洒落本なり面白そふな事と耳をすましてきけば遠き物ハ音にも聞ケ近き物ハ眼にも見よとハアヽつがもない大平楽音に聞けとハ徳りに残た酒の脈の事眼に見よとハ道具の市のせりものか大坂の金持の噂ハ江戸中に聞へ三升が評判ハ京大坂に満チ悪事千里を不走して善事百三十里を走る道中記で見れバ鼻のさきなる大坂に隠もなき鯉の池傳右衛門此人代々福貴にして日本に指折のてうぢやなりけり今ハむかしなりけり三代先の鯉の池傳右衛門立引第一にしてしかも人に用ひらるゝ事初鰹のごとしまことや何に不足もあしこしの達者なうちと江戸に下り下町



邊に旅宿を取り毎日江戸の名所を見物す或日手代伴頭のすゝめにて新吉原へ牽頭まつしや大勢引ぐし中の町へ至り其頃三浦屋盛なりけれバ三浦屋の小むらさきを揚る其ぜんせい筆に盡されず三浦屋の内惣仕廻町の藝者惣あげ二階の賑わひ淺草の市にひとしくぶんご長哥河東ぶし身ぶり聲色或ハうき世物眞似にて新地のすゞミに玉屋が花火なき風ぜいかくて半なる頃牽頭の何某小紫にさゝやき言樣今宵の客人ハ名にあふ鯉の池傳右衞門とゆう人也隨分勤め給へ餘程爲にもなるべし又は此内の繁昌吉原中の潤にもなるべし必ず麁略なきよふにと頼けれバ小紫も心得たるよし答て二階にあがるいまだ酒盛最中にてさへつおさへつ酒は瀧を流すが如く肴ハあくたを捨るがごとし布袋の腹を一夜かりておもいれ喰たき風情なり鯉の池小紫ニ酒をすゝめけれバ小紫も珍客の盃一ツうけければ肴をせんとて鯉の池懐中より金子壹包取出し小紫が手に渡せば小紫見て是ハ何なりと尋ければ鯉の池夫ハ金子なりといへば小むらさき傳右衞門に金を返して座敷を立ければたいこまつしやも立さわぎすハ事こそと二階のはしご上りつおりつする内ニ牽頭の喜作と曰ふ者小紫ニ向て曰ふよう何しに座敷を立給ふと問バ小紫答て我ハいやしき流の身とハいへ共座敷にて客人ニ金子をもらいし覺なしさもしき心の客人なり遊のわけもしらぬ人と見へたり我客と人ニぞいはれん事名の穢なり早く返シて給ふべしといへバ喜作もあきれはてしが爰こそ我役めなりとなるほど腹の立給ふ所ハむりならねどそこが勤と曰ふ物なるべし遊の譯

もしらぬ客を取立て客にするハ却而ぬしのきほならずやかつハ先ニもゆふ通りぬしひとりのためならず此里のうゐをいにもなるべしと思ふ客也此所をくゝ譯て少しハふせうして給れかしといへバ小紫ゆふようハなる程客に取立てやゐまじきものニもあらず併シ金子をもらいし故ニ筋なき人を客に取立しと人ゝにいはれん事小紫斗りが耻辱にあらずしかも此廓に遊女千有餘人に及ぶといへ共司をあらそふ三浦屋の小紫がわづかの金子をうけて遊女の立をくぢかん事返〳〵もいまわしけれゐこそハ座敷へ出まじきよし答けれバ喜作も今ハ手持なく座を立バやりて若者など取寄てさま〳〵なだむるといへ共さらに聞いれず小紫が耻ハ三浦やが耻也三浦屋のはぢハよし原の耻也よし原の耻ハ江戸のはぢ也今宵の客人ハ上がた邊の人と見うけたり我心一ッにて京大坂迄江戸の遊女の名おれを聞せん事はづかしき次第なりと理をたゞして語ければさすがなすべきよふもなく其よし鯉の池ニつたへければ傳右衛門も力なく其夜歸りぬ誠やおづゝの遊女のたてハかんがへに餘り有かな其後鯉の池彼の地ニ歸り江戸の便りきかまほしく小紫がもとへ錦を以て織立たる小袖ひとかさね送りければ小紫是をうけずして其返書ニ曰

　思ふも遠き雲井のよそより御心にそへられし御文のやう御嬉しく拜しり〳〵左様ニ候得ば過しハ御通の折からいさゝかの御事ニ候へ共此里のならわせニ候まゝ御けんもとけず嘸〳〵深ふ御に

くしミもあらんと存つゞけ候に御しんにも留られず却而はる〴〵の遠路御尋ヒ下殊ニ見事成小袖一重送り下され思召のほど不淺存候さりながら御馴染もなき方ゟかよふの品御もらい申事も是またくるハのならいにて致しがたく候まゝ御氣毒ニハ候へ共御返し申候御しんほどハ御もらい申同前ニ如何斗御嬉しく存候　且又此品麁末ニ候得共當所にて染させ候まゝ御目ニかけ候もしや御服沙(マヽ)にもなり候ハゞ御嬉しく存候誠ニ何歟の御禮申上たく文の印迄ニ候めでたくかしく

と認紫羽二重三十巻送りける鯉の池も是を見て何歟の禮として送たる巻物なれバ返す事なりがたく其儘請取しとなり是よりして鯉の池傳右衛門と名乘てハ末〴〵迄も大門ゟ内へ入る事なるまじきとのうわさなりけるがそれよりしてハ三代も過ぬべし今も其名ハ鯉の池むかしにおとらぬたて引者也常に醫師俳諧師能太夫或ハ角力男達京大坂の惣役者舞子藝子ニ到るまで皆此人にしたう事風ニ草木のなびくが如しかゝる中にも嵐の何某といへる役者彼レひとり鯉の池へ不行傳右衛門思ふよふハいかさま嵐もたてはの(はカ)あるものなるべし面白とて傳右衛門方ゟ嵐をわざ〳〵招けれバ嵐も鯉の池方ゟよびニ越スうへハとて行ける傳右衛門ハ兼而繪師ニ言付置嵐が眞さかさニなりて鯉の池が盃を戴居ける所を數枚かゝせ來る程の人に配りけれバ嵐是を見て我家に歸り下部の名を傳右衛門と替させ髪をバはけなか(がカ)

にこしらへ鯉の池が如く長羽織をきせ我草履を常にとらせこれを又扇子にかゝせて大坂中へ配りしとなり此沙汰三ケ津ニまち／＼なり然るに此度鯉の池江戸へおもむく子細を尋るに傳右衛門が倅金ニ任て遊興ニふけ身持不埒になりけれバ兩親是をかなしミさま／＼せいするといへ共用ひざりけるを音羽屋の異見にて身持も直り鯉の池が家督もつぐべき男となりけれバ傳右衛門悦あふかたならず音羽屋へ此禮何がなと思ふ所に江戸ニ絕て有由木座を取立音羽屋に送らんと思ひ立てはる／＼江戸へ下りける其沙汰與所に隱もなき鯉の池是より傳右衛門が遊ひ魂膽の初り左樣御覽ヒ下ませう

凡傾城といへバ高尾薄雲小紫それにも何かおとるべき大木屋の華扇美しいとは何の事だいくらほめても舌の先のむづかいほどほめたらぬどこからほめよふやら西施がまなじり小町が眉揚貴妃が唇赫奕姫が鼻筋飛燕が腰付に衣通姫の衣裳の着こなし美成るかな／＼其淸き事ハ春 柳舍 初 月艷なる事ハ似桃花帶曉烟此姿を見てハ石地藏もこんにやくのごとしぐにや／＼となつてよだれをたらす死で又來るお釋迦の身でもまよひ安きハ色の道とハ斷也しかも此人筆に妙を得て弘法も指をくわへ親和におとらぬ名筆也詩哥の道くらからずさるニよつてあふぎやの内の繁昌日に增月にいやまして花扇がうわさ世上專也爰の通人かしこの大盡手ニ入んと欲して酒落をみがく事名玉をあざむく折ふし鯉の池傳右衛門江戸ニ下り居ける旅宿といへ共美麗を盡し風雅ハ利休もへいかふといつつべき物好キくわれいなる哉

あたりハ金銀(きんぎん)ニまばゆく天人(てんにん)もよふこうあらんかと斗り見へたり 〔いしや雲安〕なんと旦那どこへぞちとお供致しませう 〔鯉〕どこがよかろぞへな 〔雲〕深川もせんどのよふなあんべいぢやアあんまりさへた事も御ざりませぬ 〔手代〕しかし雲さん二軒茶屋の趣向にハかんしんだらへ 〔又〕さればあれハきつい物さ一ト晩の内ニ疊替から腰ばり迄みんなしなをすと曰ふものハとんだ事だ 〔鯉〕江戸と曰ふ所ハ待た事ニきをはる所ぢやネ 〔雲〕そりや旦那のおつしやる事だが來る程の客にそう〳〵りつぱにしてハつゞきやせんそれ旦那のお出と曰ふ物だから何がな御馳走もしたし又ハ江戸の三ッ子もしつて居る鯉の池傳右衛門様彼レが所お出被下バせけんへの外聞身のほまれと申物　それで隨分きをつけていたしました 〔鯉〕そふ曰ふさかひ料理なども風雅な事ぢやナしかし日外品川へ行た時あじの鹽燒に青ィ物をかけて出したがあれハ青海苔を酢でといたのかな 〔雲〕旦那ハ御存じあるめいあれハたで酢で御ざります 〔鯉〕あれハなか〳〵よい物ぢやナ 〔雲〕時に今夜の御趣向ハどこにおきめなさります 〔鯉〕どこがよかろぞへな 〔又〕いかさま藝者斗りでもさへませぬこん夜ハよし原へお出なさりませぬか 〔鯉〕いかさま氣をかへてよかろぞへよし原でハ何屋がよいのふ 〔雲〕てうじやか松葉屋か玉屋角つた中あふミ出世あふぎに大ひしやかなや四ッ目や越前屋あるいハ鶴や松がねや 〔手代〕アヽ是〳〵雲安様其やうにあんまり言立なすつてもなんだか一ッも覺へられぬ口がすくなろふ御茶でもあがれ 〔又〕むだをやめてきめるがいゝ旦

那あふぎやになさりませぬかあふぎやの花あふぎとゆう物ハとんだ尊ひ物でござります [鯉]そんならあふぎやときめよふかなア（と言所へ平六来るうきよ物まねなどする男也座頭通都同道）[両人]旦那御機嫌よふ [鯉]けふハおそかつたの [平]私ハ早くめへるつもりござ(マヽ)りましたが此ぼふづめが大づるけ [通]是ハめいわく　おらアおめへの所でたばこを十八茶を五はいのんで待て居た [平]實ハ私がづるけさ夕べの酒に大きにしつけられました今朝は頭が上りましなんだ [雲]どふりでおれが所へけさ藥をもらいによこした共積りで調合してやつた [平]ありがたいあれで人間になつたあんまりおそくなつたからかけてきたれバ此坊主が目チ白く黒くして取たてのかきをこくせうへ入たよふな目をして [通]わたしが目をかきとハふるいさる(マヽ)ほうのむきミとでもいゝなせへ [又]まぶちの赤い所は赤貝とゆふきどりだ [通]（ゆびの先へつばきつけ目のふちをいぢつてミて）アヽ是ハきがわるい [又]是ハきたない [大勢]アハヽヽヽ [雲]もう暮ます旦那早く御仕度ヒ成ませんか [通]どこへお出なさります [又]どこでもいゝよ [平]今夜の御趣向ハとんとわかりません此ぢうのうらとゆふ所かね [雲]何北國さ [平]是ハ珍らしい何やの思召立だの [通]おれが當てよふか　まづゐきの表は　松がねやの　あけ巻と出た [又]何介六ぢやァあるめへし [通]アヽそれで思ひ出した下駄のはなをがゆるくなつてすでにさきころぼふとした一寸直そふ [又]らちがあかねへ早く行かねへか [平]お船かへ [又]何サもふみんなかごを言付て置た（皆〳〵かごに乘り十

五六てうならんで）[又]（中の町の茶屋へ行かくとしらせけるゆへ大門迄迎ニ出る程なくかご大門へよこづけニならべる十五六人取巻て茶屋へあがる此内しばらく噺もわからず）[平]今の内たれぞよびませふ [鯉]たれかれと日ふ事ハない藝者と名のついたものハ皆よんだがいゝ [雲]此方ていの遊でハあるめへしなんでもむせふにつかみ込〳〵（亭主心得てはたらく其内盃もたび〳〵廻る）[雲]今爰を通つた男を見なさつたかなんぼ長羽織がはやつてもあんまりだぜへやろふの傾城がしゆごきをぬすまれたとゆふなりだ [平]あの又つらはむぎわらのぢやが舌をぬかれたとゆふきどりだ [通]何さい日でハあるめへし（其内藝者共くるはなしきち〳〵ニて書とりがたしそれゟ直ニあふぎやへそのよそほひ小鳥のねぐらをあらそふニ似たり鯉の池を中にとり巻あふぎやへあがる尤惣仕廻二階のていうや〳〵敷皆〳〵座ニつく）[又]旦那ずつとこちらへ [鯉]平ハどこへいつた [雲]ハイ今参ります [通]なんと中座敷でハねへか [雲]よし〳〵うしろに燭臺が有よ [通]是ハあぶないすでに耳をこがそふとした [平]みんな旦那のおそばへもふちつとつめかけねへか [又]今夜ハ涼しいほうで御ざります [鯉]されバ秋をもよふしてくるさつきたんぼのむしの音ハにくうない所だ [平]ごんぜぬ事ながら一首ありたい所で御ざりました [通]わたしがあの時一首よみました [皆々]なんと〳〵 [通]かごかきハむせふにいきをきり〳〵す我ハゆられて風にすゞむし [平]こいつハいゝ（皆わらふ其内藝者共三味せんとり出すてうし盃硯蓋臺の物などおし出すほどなく花あふぎをはじめなゝこしかたらい

こと〴〵くならぶ共うつくしき事高尾が紅葉に夕日のうつろふにことならず盃臺を鯉の池がまへにおく傳右エ門一ばいのんで盃をむかふへなげる此盃花あふぎとなゝこしが間をあいたへおちる兩人共盃を見た斗りにて手ニとらずしらぬかほして居る　牽頭の又見かねて[又]此盃ハちつとまちがいまづ是ハいたゞきませうといつて（又盃を取あげる）花あふぎ座敷をたつつゞいてあとの女郎のこらずおりる座敷のもよふおかしくなりしゆへ藝者共三味せんなどひいてさわぐといへ共玉をぬすまれたる龍神のごとく座敷もしらけゝれバ[平又]兩人下へおり花あふぎニあい）

[又]もしへ今の盃の間違ハぜんていわたし共もわるし茶屋も手ぬけ若イ衆も氣がつかねへとゆふ物だあのくらいの客人がぬしへ白身に盃をやりなんすといふ事ハねへ事だ川岸の女郎でも初會の盃ハやりて取繼やすひつきやうこん夜の盃の間違ハわたし共がまぬけからおこつた事でござへやす客人にとがハちつとも御ざりませんどふぞりやうけんして座敷え出直しておくんなせへしわたしがおたのミ申やす

[花]なるほどそれハぬしたちのわるいにもしなんしかしあんな客人に出る事ハいやでござんすはやくつれて歸りなんし　[平]そこの所でおぜへやすそこをりやうけんしておくんなせへしと曰ふ事で御ざりやす　[花屋]（これなしてあいさつもせずたばこのんで居る　兩人共ニすべきよふもなく何やらしばらくさゝやいて兩人共二階へあがり）　[平]あたまをかきながら　時にもし旦那こん夜ハあやにくな事でござります花あふぎさんがおすぐれなさりやせんそれで今おさがりなさりやしたがとかくよくござりやせんから今

夜ハあつさりとさわいでお歸りなさつて又此間にお出なさりまし [鯉]おれをきろふのぢやなおもしろ
ないはやう歸ろふサア〳〵皆こい〳〵 [雲]もしそふおつしやらずとももふ一ツあがつて [鯉]いやじや
〳〵 [又]平様どうしよふ [平]宿へでもやりやせう(皆〳〵あふぎやの内なほう〳〵出て直ニ新宿へとかごを
とばして急ぎ行) [玉川亭主]是ハ雲安様おめづらしい [雲]今夜ハ大間違だらけ時ニマア貴さまに一寸噺
さねへければならねへ事が有今夜彼鯉の池の旦那をてうへつれて行た所が大のはちふとふ(マヽ)□(虫ニカ)しどふも
いたまられねへから出て見たがしめいがつかねへからこつちへ今に來る隨分よく賴むぜへ [玉川]それ
ハ大へん時ニマアと(ゆうちかご十四五てうならべておし來る) [玉]是ハ〳〵見ぐるしい所へよふこそ
〳〵マアヽヽこちらへ [鯉]あまりかまい給ふな(とりあへずてうし盃など出ス) [玉][雲]さん橋本ニいたし
ませふか [雲]そうさ〳〵何でも殘て居る女郎ハみんなずつとしまうとゆふのだなんと おそろしいか
[玉]是ハ難有いこれ〳〵嘉助橋本へ行てな(書[少ノ誤カ]しさゝやきて嘉介な橋本へやる) [平][雲]さん藝者
ハどふする今けんばんかけて置たよ [鯉]もふ何時であろふ [又]大木戸で四ツをうけ給りました [手代]
なるほど馬よりはやい駕籠だぞ雲介かごハはだしで迯る [平]下駄をはいてありくかごかきハついぞ見
ねへ(これら橋本へあがる座敷のよふすハ略ス) [雲又平通]さよふなら旦那御きげんよふ [鯉]やすみや〳〵
[雲]もとまちさんおたのミ申ます(部屋〳〵へ引とる) [おりへ]もしおやすミなんしたかへ [平]何兼る物

だ [折]なぜへ [平]ひとり寐るくらいなら内に寐やす [折]すきな事をいゝなんしたばこをのミなんせんか [平]たばこゟ酒がのミてへ [折]よく酒をのミなんすネ是かめじや [亀]あい引なんでごぜへやす [折]あの雲井さんの座敷にてうしと硯蓋があつたから持て來てくりや（へんじもせずニ行） [平]硯ぶたゟなんぞそこにハねへか [折]ひしこのこうじづけが御ぜへす [平]よかろふこいつハへどの中から引づり出したなめくじとゆふなりだ [折]きたねへことをいゝなんすなまずくなるわな [平]まずくバよしたがへエおれ獨りで喰て見せよふ [折]むしのいゝ [亀]アイおてうし [折]らちのあかねへ持て來よふだ [亀]かんをして持てきやした物を [平]是ハありがたい此硯蓋ハなんだあわびニにくるミしゝたけに枝豆に焼海老かむまくねへやつだ此ゑびのしやちこばつたざまハへせんたくをした皮羽織とゆふミだどしやでもふりかけて出せバいゝに [折]死だ物じやア有めへし [平]手めへ此ゑびがいきて居ると思ているか [折]しれた事さ死ンだゑびさ [平]それ見たがいゝ死だ物だから土しやをかけるがいゝ [折]何人間じやアあるめへし [平]人間も肴も同じ事だ死ねバ物をいわねへ [折]おや〳〵おめへの方じやァ肴が物をいゝすかへ [平]ゆふのさ [折]海老ハなんといゝやす [平]ゑびはかまくらゑび車ゑびいせゑびしばゑび手（マヽ）長がゑび色〳〵にゆふのさ [折]ヱ引じれつてへその事じやァおざんせん [平]其事でなくバ三昧せんにでもしたがいゝ [折]おもしろくもねへふしやれハよしなんし [平]手めへにかりた口じやアあるめへしお

せわだ [折]そんなら勝手にひとりでいゝてへ事をいゝなんしわつちやアさきへ寐やす [平]行灯の番人ぢやあるめへしおれひとり起て居る物かおれも寐る〳〵てめへハむせふに夜着をかぶるのみの蟲とゆふ身だ [折]アイわつちやアミの蟲さ [平]ミのむしハいゝがかさハ御めんだぜ [折](少し腹をたつて)よしかそんな事をいゝなんすなそんなものハひとりもおざんせん(又くる) [又]是平さん一寸きねへ雲坊がどふもならねへ [平]例のかんしやくかうつちやつてをきねへ [又]やかましくつてならねへ [平]ヱ引ばか坊主めがいま〳〵しい(と出て行) [雲]けふ爰の内のしめへをつけたのハだれだとおもふ黍も此鼻さまだ [平]是〳〵雲公どふしたやかましいしづかにいやれな [雲]平さん聞てくんねへあいつめがやくてい紙のうへにごふんをなすつたよふなつらアしやアがつて宵からさま〴〵な狂言をかきやアがるからおれもしらミたかりをだいて寐たきになつてかゝせておけバいゝかと思やアがつてあげくのはてにやアおれをバ通り町の月行事をミるよふにとをつたの大通だのと上手にくるめてかくからおれもなまこの上下をきせられたよふな理くつになつてきたからいざこざなしにさつぱりやつたればいゝ事にしやアがつてそれからしてなしもつぶてもうたねへから手のひらのくぼくなるほど手をたゝいたれバすつぽんがどろによつたよふなつらをしやアがつてのろ〳〵うせてあんまり手をたゝきなさるな何時だと思ひなさるとふじの山をうのミにしたよふな平氣なつらをして居るから何時だとおもふとハうぬが事だ

はたけにあふれたとふなすじやァ有めへしふとんのうへゑほうづあたまをころがして置くこたァねへどこへ行て居やァがるといへば此あまがゆふにやァ〔平〕これ〳〵もふゝんなきかずとのみこんだがマァおめへもおとなしくねへ海坊主が茶にうかされたよふに夜中にさわぐ事ァねへ〔初風〕ぬしが今聞なんし(マヽ)とふりの悪口(あくてへ)でおぜへす物を何共いゝよふがござんせんかど見せの上郎(マヽ)衆なら何とかかとか相應挨拶もしなんせふが〔雲〕それうぬが共口がかんしやくにさわるうぬが壹分だと思やがつてあんまり高くとまるなへ五重のとふでとんびが腹すじをよるハへ貳朱でも壹分でもめしもりハ飯盛だうぬがなちうさんニなれバうなぎが天上(てんじやう)するハへ〔平〕あふさおめへのが尤だよモシ初風さんおめへまた仕方が能(よ)くねへさつきから臺所唐人(マヽ)が嶋流シになつたよふにそつちらを向(むか)て多ばこ斗り呑で居る事ァねへ此坊主も錢こそ無けれ土左衛門じやァねへが眞水と鹽水を一チ時にのんですいもあめへも小便くさへも呑込で來た男だそれをかきのめしたと思て毛だ物店で狼をあつかうよふ枕ァさせて床のうへでさらす事ァねへ此坊主が跡の客物ハわりィ初てのおめへのしかたがよくねへからだ〔玉川や〕もし〳〵旦那(マヽ)もふお歸りなさります〔雲〕なんだ旦那が歸るかへつても大事ねへ此わけをつけねへけりやァ歸らねへ〔鯉〕是〳〵雲坊何もいやるなおれが呑込だ何もいわずにはやうかへりや〔雲〕旦那そふ仰しやれバいゝ此けんくわハおめへにあづけやした〔鯉〕おゝよしさ〳〵　はやうかへりや〔雲〕サアヽヽ歸る〳〵

【玉川や】雀の千聲通の一聲とハ此事（皆〳〵歸る玉川やのうちへ入て）【玉川や】時に旦那ゆうべハどふでござりました【鯉】いやもふ新宿とゆふ所ハ物をしらぬ所じやなア【玉川】はいどふ致しましてもかゝがたとハ違まして不風雅でござります【鯉】風雅ハなくてもよいがあれでハ客がこまるて【玉川】はいそれハどふ致しましたな【鯉】二の膳にはしをつけぬそうゆふさかい若ィ者をよんでゐら（らう）をしかつたれバ笑ながら箸を持て來たあの若ィ者ハあほふじやそうなそれを女郎がきのどくがつて夜中あちらむいて寐た【大勢】旦那是ハありがたいと皆いちどふに笑ふと聞ゝしが聲杉の梢にかすかに殘り我ハもとの愛宕の下の廣小路にほうぜんと立あかす扨は天狗にさらわれたかもふ大通の高慢ハやめよふ

其あむか　全

其あむかの序

遊をしらぬしかつべは。花の爲に笑るゝと。李太白が金言。眞に通夫子と稱すべし。吾尾竹屋のあんかにあたり。此卷をつゞるによつて。其あんかと題し終ぬ。庶幾太白が笑にあわざらむ。

午のはつ春

其あむか

中橋散人著

其大概

春の花秋の月、とかく遊のことなるべし、しかし青樓ハ、ありんすをざんすこじれつたし、南楼は、似て芍藥の花なれバ、もとより齒牙の間にはさむにたらず、唯深川の任俠、しんに東都のきしやうといふべし、猪牙搖〳〵としてかろくあがり、やね船悠々としてようやくゆく、うぬぼれのながばをりハ、ふりむかれてもほれたとおもひ、臺所であふあたまは、どれもそろつてきれいなり、おちつきの茶ハ枇杷葉湯をあざむき、吸ものゝおしきせさだめてあぢわいなし、火鉢のほのうえんゝとして、燭臺のひかりくわう〳〵たり、さけいではをりきたつて、むだようやくせうじ、絃なり音高して客しばらくだまる、こどもの顔まつしろにして、船人のいろます〳〵くろし、しゆす鬢の一藤治ハ師子(マヽ)をもつて興をそえ、ばん頭の傳七けんざけにてかまびすし、なまにえの唐なす尻をいだき(マヽ)、京だんのさ

つまいもだまつてねる、天井を見る夜ハ鳥の聲嬉しく、枕をおわるゝ曙はおいだしのかねを恨、懐中ともにきゆ棧橋の霜、身上おなじくかたむく曉樹の月、鷲へゆく樓船どこのさるまつぞ、春をしまう大臣いづくのとんきちぞ、豈おもわんや而後につきだされんとは、いかんともすることなしかぶつて田舍へゆく事を、やんぬるかな黄金再きたらず、いきなる哉あすびまたやめがたし、

其二階

［きんろ］おいと、すつぱりきれてくれろ［おいと］あきハしめへが［きんろ］あきた［おいと］ほい、これハしたり［きんろ］つらアみると、ごびようきにさわる、ろうけへいけ［おいと］いきやすめへ［きんろ］いきやアがれ［おいと］いやだ［きんろ］このこじきあそふへ、いけぜんせへなさるじやアねへか、かとうもんだり、けつうけへても、このきんろさんによばれるなア、めうがなこつたとおもやアがれ、がんくびから、すいくちまで、くじふかしやちほこが、をうらへする、ちよつときりふう、いほふなら、だつこなさるじぶんにやア、ごほうそうのまじねへと、りゆうさ川のいけすなくらい、ちつとをむしのいてへときやア、八百やてうりいしやがくる、ござへじんあそばすと、傳八彌兵衛をこしぎんちやく、てうどことしで十万兩、つかひはたしたせうがにやア、きんたまがかいけりやア、てうしで

いわしがたんととれ、かゞとでむしのかぶるときやア、米のそうばがいくらする、うぬらがようなこ（とか）んちきに、ばかされるやろうだと、おもやアがるか、べらぼうめ、もつてへしごくもねへ、なぜおかほをよごした、このはつつけめへ、しるめへとおもふか、そつちのうでへ、ミせやアがれ〔おいと〕ゑゝそがつきたから、けしたのさ〔きんろ〕まくらをもつて、よこつつらをなぐる〔おいと〕よごしても、あらうことをしつていやす〔きんろ〕おきやアがれ、うぬが〔おいと〕わたしがあらいやす、マアきゝなせへ、らへねんのなつといつたが、まつにまたれぬうきつきひ、どふぞしようもあろうかと、あのたこやこのたこを、にたりやいたり、すにしたり、めうがやしやうがゝ、しつかりきゝ、おせへつけて、こうらアはぐきりと、てくだのいとすじを、ひくにひかれぬてうつがい、かなしいくやしい、いやだとも、えやはいぶきのさしもぐさ、かんにしねへ、やきけしたも、あんどが、はやくしてへからと、金をしつかりだす〔きんろ〕よしやアがれ、うぬがなゝだも、ひさしいものだ〔およし〕もし／＼、きんろさん、藤さんがおいでなさりました

内では、かねておいとをきをつけているに、まくらでなぐられたかほのきず、おゝきにせかれ、ふミをだすにもあらためられ、たよりをする事もならず、外にわけもあり、しばらくひつこむ、きんろもびようきにて、ひさしくいかず、たよりのねへも、いゐへましい

其いほり

春をむかへては欄前(らんせん)の花匂(にほひ)を飛(とば)し、秋にあふてハ庭上(ていぜう)の紅葉色をそふ、いしまの水きようして、風のをとすゞしく、まどの雪深(ふかう)して、竹炉(ちくろ)のかま浩蕩(かうたう)たるいほりのあるじ［きんろ］これは、おふたりさま［き十 ば十］此あいだハ、ごちそう、ときにごしようろういかゞ［きんろ］まづいゝほうで、ごぜへす、きのふ友交(ゆうかう)がきて、五十いんをいたして、ゆふべ八ツまでさ［き十］だれてん［きんろ］とせずに、き十、それがようごぜへす［きんろ］ば十さん、ゆうべハ青楼(せいろう)としやうちいたした［ば十］いや青楼でおゝわれへ、さん公がおくめへかつたら、をかばしよのきやくハ、いやだとのぜんせい［きんろ］よこつつらアなぐればいゝ［き十］おくめもいつてへ、くろうせう［きんろ］あいつアあゝなるはづよ、きゝねへ、ほんてうのやろうを、くづ(マヽ)とだゐて、こどもまでかわせ、そのやろうがかぶると、どんとつきだし、そいから三丁がくつついて、品川へ見世へだしてもらつて、そして京橋のやろうをおりふしよぶか、三丁がかぶつて、いなけへいく時も、よつほどおいていつたに、あいつア手紙一ほんやらず、そのばちでうんのつき、品川のミせがく(でカ)つすりやけ、それからうろついて、むまミちへでゝ、またやまつけへりをしたところが、あゝいふめ、いゝきミとはいふものゝ、かわへそうでもあり、しかしおもしらへ

あま、わかつたものよ[ば十]めつきだけのこたアある[き十]おいまは、またでるが、なをきれへになつた[きんろ]あいつも歯をそめ、はをみがく、いくたびの春ぞだよ[ば十]あゝいゝくだ[き十]きんろさんハ、おきくでなけりやアしやうちしねへ[きんろ]まだはつがつほといふむすめだ、そして茶(花)やはなもしやうち、でへいちおやかう／＼だからいゝ[ば十]ほめるもんだ、おらアどうもむしがあわねへ、おすてなら、ひときれいきてへ[き十]きれへになつたよ[ば十]おつまがことう、(マヽ)古道にきかせてへ、はるにならざアけへるめへ[きんろ]古道といふもなア、いゝものよ[き十]おいとたア、ひつこんだそうだ[きんろ]はての[き十]おめへ、あのわけへしらずか[きんろ]しらねへ、おめへ、きいたか[き十]おめへのとけへ、なんとも、いつてよこさねへか、どこのか、やしきへいくといふ事だと、せかせる[きんろ]いゝ(マヽ)のきもとんちきだの、コレ万吉、ごぜんがよくバ、あけろ

其夜の夢

うつゝなや、ひとりね夜半のまくらに、ふきまよふ深山おろしに、夢さめてと、となりざしきの琴の音を、きゝながら、うと／＼まどろむ、まくらの夢、花のかんばせうちしほれ、なゝだながらにかきならす、糸にうらみをくりかえし、うたふをきけば

其哥に

ほにいづる、野べのをばなにまねかれて、よりくる糸のひとすじに、そむるこゝろハくれないの、深えにしをむすぶいと、しめつゆるめつかわらじと、かわすちぎりのながかれと、くりかへし〳〵、あふさきるさのかずつもり、ほんのめうとゝがんかけて、いのるちかひハしらいとの、いのるちかひハしら糸の、しろきハいろの色〳〵に、うつりごゝろのあさぎ糸、あさぎに染てまたそめて、はなだのいろやさま〴〵の、手くだのあやの、あやのあやいとを、うけつながしつ水鳥の、うきねのとこのかりまくら、かひなきゑんをくゝ糸の、うつてかわりしごしんぞと、おもへばむねもみだれいと、きるのがましかえんの糸

［小ぞう］もし〳〵ごぜんをあがりませ、

きんろハ夢さめて、唯ぼうぜんと、おきあがり、さつきのき十がはなしといゝ、こいつァすてゝおかれめへ、こんやいかふか

其うつり香

おゆふ
およし　きんろさん、此間ハどうなさりました、おうわさばかりとたんこ也（たんごカ）［およし］からかみを

あけて、これハしたり〔きんろ〕すぐがいゝと、二階へゆく、今きやくがけへつた見えで、枕もとのあんかに、火もあり、およしよぎをふるい、あんかをいれる

〔およし〕おいしさんハ、びようきでひつこんでいなせへす、たれにいたしませう〔きんろ〕だれでもよし、およしたへゆく、おきんハかれて、きんろにほれているによつて、およしをたのんで出る

〔おゆふ〕きんろさん、でへぶおいろがわりい、どうなさりました〔きんろ〕ひさしい病氣さ、こんやもこゝろもちがわりゐ、すぐにもふねやしやう〔おゆふ〕そりやアおわるうござります、さよふなら、おやすみなさりまし、みな下へゆく、〔きんろ〕お糸アなぜひつこんだ〔おきん〕おいとさんハ、ちけへうち、梅本の露月さんの方へ、いきなさるそうさ、きんろきゐてびつくり〔おきん〕おめへ、そんなにいゝなすつても、おいとさんがでたら、またよびなさるであろう〔きんろ〕それがどふした〔おきん〕おめへに、でたがるこが、あるからさ〔きんろ〕ぢさんきん、いかほど〔おきん〕しぬほどでたがつているから、どふぞよんでやんなせへ〔きんろ〕てめへも、なかうどをして、いゝじぶんだ〔おきん〕わたしやアたのまれたから、ぜひおめへにせうちさせねへけりやアならねへ〔きんろ〕よしやアがれ、きんたまが、どつこいさと、ふんばつていらア

こゝハぜひ、かミをきらにやア、ならねへばだ、ミなさま、なんとおぼしめす

きんろハ、おいとがひつこむときゐて、をゝきにせき、またおきんもそれなりにもならず、又あしがちかくなる、おいと四五日すぎて出る、此事をきゝて、ぐつとせき、身をすてゝふミこもふか、たとしおきんにわけをいつて、されてもらおゝかと、しやんもしてミたが、うらみのほのう、たえかねて

其ほのう

おいとすつと、　あけながら、きんろきん、こつか きんろ だれだ おいと なか丁で、たてひきのつゝ、こゝろいきのいゝ、おいとゝさんといふこどもしさ きんろ はァ おいと あかろくして、ものういわふ とあんどんをかきたて、どんとすはる きんろ とんだきれへだ おいと きれへなことを、ちつとよびなさんねへか きんろ しんこのない(しカ)やさつまいま(マこ)ア、こかけばかりで、あじがねへ おいと ふゝよしなせへ、とんだひとじやァねへか、あんまりぎりよを、しらねへ、なぜおれにだまつて、おきんをよんだ きんろ てめへそんなにほれたか おいと ほれたがどふだ きんろ ほれたら金へよこせ おいと さるにやるかねへ、もたねへ、とんちきめ、いぬのくそめ、もふやぶれかぶれだ、このあま

もこのあまだ、なぜおれにわたらずに、でた、とんだじようろじやァねへか〔おきん〕ほれたから、でたが、どうした〔おいと〕なにほれた、てめへが〔おきん〕なか丁のおきんさんがよ〔おいと〕たァごとをつかずと、だんぎめへりにでもいけ、ごふさらしめ、うぬがよふなまじめへ、むかふじまのどぶつぱたに、いつくらもいらァ・ゑゝくやしい　と、きつそうかえて、とびかゝり、きんろがたぶさを、ひつつかむ

是より二ばんめ、はじまりス、、

虛實情夜櫻

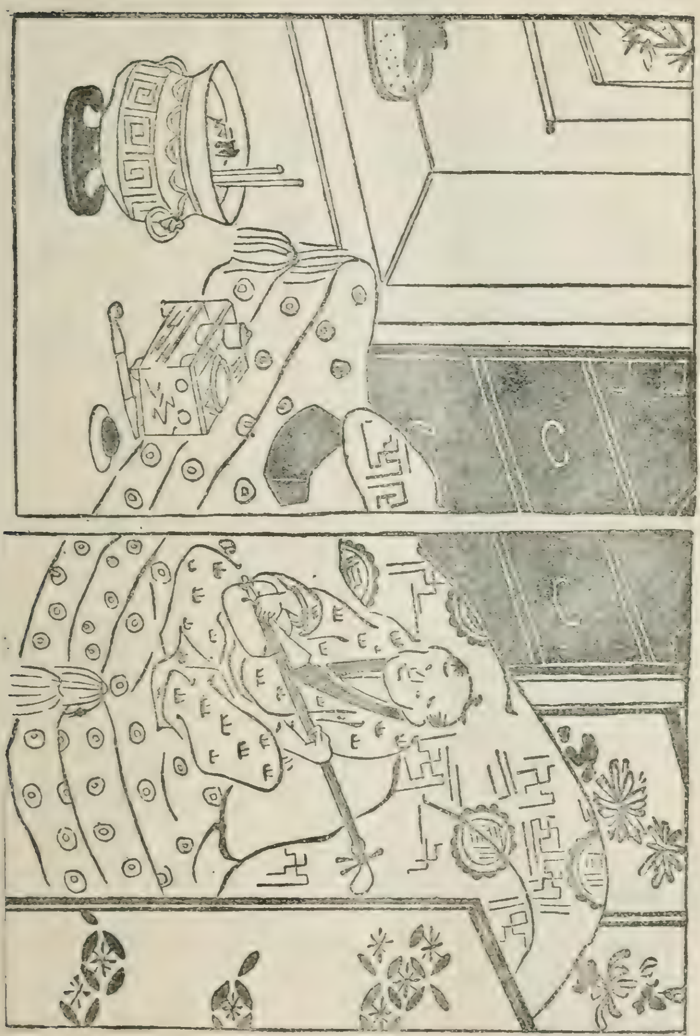
全

虚實情夜櫻

心こゝにあらざれバ見れども見得ず喰へども其味ひを知らずとハ實なるかな遊女にうつゝをぬかす杜人ハ己れが夜食を忘れ廻し部屋の獨り寝に初て空腹をしる亦夕を思ふ朝歸に下を見て行ながら向ふに高き石あるを不知これ悪道へ踏込て挑燈をうらやミ大道に巾着を摺れて内のかゝアに當るのたぐひなるべしすいまだ流身の實を知らずしらざれバ深く通ふ事もなし亦通ハざれバ其穴を知ず故に虚も實と趣せり足わぬがちのわつちゆへ皆さんお頼んもふしんすと顔を赤めてお笑ひなんすとつめりんすよと云ゝ

時申はつ春　梅松亭

月もなを朧に見せつ華の雲　庭鷲



宵の虚言

愛もかしこもすがゞきに
武藏野が格子の模樣
うわきながらも東路が
こがるゝ人の來るぞとハ
白雲と見る

虚の夜櫻

夜中の實言

だましあふせた獨り逢に
とたり座敷の囃しの模
樣貞女た立た花町が
戀しき人のあるぞとハ
白雲と見る

實の夜櫻

明の情言

逢て別るゝ人目の關に
ふすま一重此方の模樣
殺す氣で來る武藏野が
かく氣になつてかゝれるとハ
白雲と見る

情の夜櫻

虛實情夜櫻

宵の虛言

庭鷺述

明行春の山見へて花を見すつるかりがねのそれハ越路われハ又東にかへる名殘かな〳〵下ハアイヤア（扇で譜本をたゝいてしまう折から）［下女］モシ旦那さんへ只今銀蝶さんがいらつしやひまして外に侍なすつていらつしやいます［言次郎］ナニ銀蝶が來たとか。はやくこつちへあがれと言てくりやそして茶を持て來いまだ用がある火も消てしまつたハ早く持て來い［女］はい〳〵（下かつて出行　入かわつて）［銀蝶］言さん此間ハイヤモウたべ醉て内までむちうこう〳〵でかへりの子ハおたまじやくしハどうだト（ひとりしやれながらすわる此うち下女ハ茶を持て出銀蝶がしやれにこらへかねてふきいだし茶わんの茶をばら〳〵とこぼし顔を赤くしてちりがミだしてふきそのかミで）［女］ちん〳〵〳〵ト（はなをかむを笑ひながら）［蝶］なしぐの紙で一トつぶかの子の鼻をかむとハよつほどあたらい［女］チヤかわいそふにト（かつての方へにげこむ此内言次郎ハ茶の小もんちりめん二まい尤も一まいハ化むくなりうへにねずミゆうきじまいづれもうすわたにてほそきばつちをはきくすべの二まいうら付羽おりハりうもんの小紋前さがりみじかくけぬき合せの

黒うらにさらしの足袋をはき白のじよしんのきせるでたばこを吞ながら）〔言〕サアいゝかへ〔蝶〕こつちハとうからいゝで御たいくつさ〔言〕マア内じやアちつとしづかにしてくんなゝ〔蝶〕（小ごへになつて）静かにしたら義經ハ尻をはしよつて欠落だらう〔言〕コレサ（親ゆびを出して）知とわりいから見つけられねへうちはやく出かけよふ（折しもひどく暮のかね）ボヲン／＼／＼（辻うい駕かきども）旦那おかごハめしませんかへおやすくめへりましよふ（兩人ハ足ばやにゆき過るゆへあとにて）チイ駕ヲイ／＼／＼それぞ名にあふ日本橋西に鶴城高くとして夕霞たなびき東に入海滿々として白魚の篝うすしといへども空をいろどる足ばやに行違ふ人ハ三拾［ ］文の櫛の歯をひくにことならず。市中の肴ハ板臺のうへにおどり勘定の外のなすびハあわれ土足に踏つぶされ腹のきたつた小でつちハやたひ見せのごまあげに出かゝつた鼻をすゝりこむ二人が足のはやき事二十四時のひきやくの如し（折しも向ふよりびくたかつぎ四尺ほどの刀をさし下に鳴ちりめんを着て上に黄八丈のもへぎじま もちろんゆきたけともにミじかし長し其上一日照付られて目ばかりひかりよふすハ知らず作者の眼にハ千里もあらん遠國から の勤番の出人とも見へたり然る處此二人を見付知らぬふりにて行過るを）〔言〕チヽイノ＼六さんじやアねへか〔六〕せつかく逢あふせたとおもつたにだいぶおふたりともおきまりだね〔蝶〕おめへなぜそんなにつれない今朝からおめへの所へ七度熊野へ三度あたご樣へハ月参りじやアねへが足の裏が豆だらけさしかもがんくひ豆でけしからねへ大きひに

ホイ其間に日ハ暮るサア北國へあつたまりに行つもりよマア其なりですぐに行事サ [六]すんならいつそ。ふうをかいて。ぐつと。いじんでいかう [蝶]なに。いじんがいつたら。たんぼで雉子がなくだろう [言]モウ澤山だよ六さん〳〵わつちが咄た事を。今夜なぞのようなとき。うまくやらかすと。大出來だぜ [六]なにも遊びだ。やらかして見よふが。あつちのわけをくわしく。もふ一ぺんきゝてへね [言]ナアニわかりきつている事さわつちが花哥の姉女郎が華町さよしかへ其花町の客を武藏野と言なに色事じかけでとられたのさ。そこで今ハむさし野のほうへ通ふと思ひなせへ。華町もくやしがつて。ひつこんでいるけれども。どふもしかたがねへだろうぜんてへ内がわりいのさ。いかにむさし野がおや玉でもありよう。うつちやつておいちやアぜんてへつまらねへのさ [六]そこでおいらが其武藏野をかつて。そうして花町と色事をしよふと云もんだの [言]うめへ咄しだろう [六]首尾よくいきやアおなぐさみだ [蝶]ナニいくのさあいた口へぼたもちひもじい時のまづい物なしといふたとへのとふりおいらのようなものハそんなにくるしまづと色事ハしあきているわな [言]それまたはじまつた [六]なんとでも云なせへかふいう客へつかわれるのも色男の役だと思へば。さのミくるしもねへのさ ト(足にまかせて行ほどにはや見付を越てめうと橋より地内にかゝり 馬道を馬より早く行ほどに はや日本づゝみにさしかゝる是までのミちにいろ〳〵面白きしやれあれども道をいそぐゆへ爰にりやくす) [六]おめへたちやアちつと爰に待て居

てくんな鳥渡三谷までいつて來るから 〔言〕なにしに 〔六〕着物の事にさ（是ハ舟宿へ着物をあづけ置をゝ見へほどなくきたり） 〔六〕おゝきにお待どふ 〔蝶〕どふだ内に居たかへ 〔六〕ほんにみんなによろしくと言、やしたつけ。どなたも此ごろハさつぱりいらつしやりませぬと云て。いたつけそして。おいらのなりを見て。笑ふからわけを咄したら。そりやア面白いしゆかうだと。笑ていたから壹分だして是で知ん貞をして來てくれろと云たらこりやア面白とひとりでよろこんでいたつけ。時に是を洗つていかふ（松の屋と云茶やへはいりながら） 〔言〕おさとさん此間ハ 〔お里〕チヤ言さんモウきついものでございますねへ蝶さんも。けしからねへおはやくいらつしやひました。二三日ハけしからずおあつたかで。ようござひます ト（茶を六三郎がところへ先へもつて出。なりを見ながら） 〔里〕あなたハよふいらつしやひました 〔六〕アイ〳〵 ト（茶を取てのむ） 〔里〕蝶さん。おめへさんのお口合もひさしくうけたまハりませんねへ 〔蝶〕そうさひさしぶりのせへかさつぱりでやせん 〔里〕おめへさん此間向ふをおとふりなすつたから。およひ申たに知ん貞ハあんまりで。ございますせつ何かけしからずおいそぎの御よふすハどつちいお出たはいます 〔蝶〕やつパりさ 〔里〕御深切でありますねへ言さん 〔言〕ソウサ蝶さんのような。しんせつな人がなくつちや。廓に月の夜ハねへといふものゝあんまり人ハ笑われねへ。手めへの鼻の下は棚のすみにごミだらけでイヽサちつともはやく出かけよう 〔里〕さようならおかへりに 〔蝶〕すんならお里さん此間に

ト（出行三人とも大門をくゞれば）右も左りも春氣色人間わづか五十年を爰にくらさばかんたんの夢よりもなを面白からんと（うかれゆく向ふより來るおいらん禿やりてを引つれ箱ちようちん行違ふ）言コウ〳〵六さん今のが今度淺草へ額をあげた。よそほひかの 六ソウサまた別なものだのおいらを横目で見ていつたがどうだ蝶公いろ男ハどうもうるせへもんだよ 蝶ナアニおめへのなりがおかしいから見て笑つていつたのさ。だれが見ても。ゐぞ松まへのお方とはきやア見へねへものを艶次郎もよつほど。できだぜ（ト笑ひにつれて又一ッ門をくゞれば）天人のあま下りたもふごとく新造礼義をみださず。文をかくおいらんあれバ。天窓をかく。ふり新あり心に笑ふあれバ眞になミだぐむのがあり。格子に客をひく禿あれバ。壁にもたれてすがゞきをひく新造もあり。よりどり。見どりの。かうし先にたゞずみて 蝶六さん〳〵あの新造ハ千手觀音様か。げじ〳〵を見るやふな女だのウ 六なぜだ 蝶べらぼうに手がありそふだと云事よ 六おもしろくもねへ。そんなとをいやア狆のつらへぬひあげか唐茄子へあて身をしたと云のかこつちらのほうの角兵衛獅子のくさめといふのがまだましだろふ 蝶いやもふ六さんなアどれとも（マヽ）そろつたおぶしやれだ ト（よう〳〵來かゝるかうし先△●なれども女郎もおゝくのれんに武藏屋とあつて内のようすハ大見世にをならず新造に至るまで玉揃へと見へたり）言サアおさきへ ト（のれんをあげてはいる六三郎も刀をぬいてはいらんとするを）若者モシだんなおこしを 六ヤミミこミれサミさむらの

こゝこしのもゝのへテゝ手をカゝかけるりゝのよくわひやつト（大きにはらをたてる若者きもをつぶすゆへしづかに）　[言]ナニ六右衛門様あれはなにもぞんじませんもので御ざいますゆるしてつかアさいまし。お大小ハわたくしへつかアさひましてこちらにおきますところがございますから　[六八]ウゝなる程ゝゆうしよでハコゝこしのものハアゝあづけるとモゝ申す事ウゝうけタゝたまわつたがヲゝお身にシゝしつかりアゝあづけチゝおく　[言]よろしうございます。おあずかり申ましたサア上へおあがんなさいましト（六三郎を先にたて其あとより二人何かさゝやき笑ひながら言次郎が相方花里の座敷へいたる程なくちようし盃持來りて）　[若者伊八]是ハ皆さまよおいらつしやひました（此内言次郎ハろうかへ出て）　[言]コウ伊八どんちよつと來なト（しバらくさゝやき又座敷へ來る六三郎が相かたのそうだんと見へたり程なく）　[花哥]どなたもようお出なんした言さん此間ぬしにお噺し申いした事でわつちまでくろふがましいしたわな。いつそ氣がもめてなりんせんト（はなすハ花哥が姉女郎華町の此頃ひつこんでいるゆへの事なり折しも入來る）

[武藏野][東路]（あづましハ銀蝶なじみのことゆへ少しそばへ寄て）　[路]どなたもよおお出なんした蝶さん此間のものはどうなんしたト（笑ひながら云）　[蝶]どうするものか守りぶくろへ入て寒いめハさせやアしねハな　[路]そうして其替りハどうなんすへ持ておいでなんしたかへ　[蝶]どつこい其かわりハ色男がする幕だから。こつちハ鎌と椀だ　[路]おぶしやおなんすな今になつて。ひきようでおすよつ色男とハなん

りこつておすへ(トしたゝかつめる) 蝶 アヽいちゝ。ひとをばかにしたモシ六右衛門さん是ハ持あわせましたからはゞかりながら。さしあげます言さんちよつとおとりつぎを 六 イヽヽいやヽゝヽ身どもサヽさいせんからスヽヽすごしてチヽヽおるから 蝶 すんならさしづめ言さんのおあいだ(此内げいしや。たいこ持入かはり。ちようしの替りの。しげきに。まごつく料理ばん居ねむる禿ハ新造の耳つとうに。きもなつぶし。すかねへよ。知つたかよウに。かけ廻る眞のめりやすにハとなり座敷まで情をまさせ程なく座敷もひけんと思ふ頃廊下へ出て) 蝶 エヽシむさし野さんちよつと(ト言を若者がよびしとおもひ) 武 チヤだれだと思いんしたらぬしやアなんでおすへ。わつちに用があんなんすのかへ 蝶 あるだんじやアねへ。大あいさ。おふあり大根の切ほしとハちつと。てめへでこしらいた。かたちだネ時に今ばんの客人ハ トロなたゝいて)是だから。どふぞお頼みだよ。ありやアだいじな人だから。どふぞはらアたゝせねへようにして。くんなせへ。そして　たつても。こつちは知らずトどつこひ口がすべつた 武 なんでおすへわつちやァしやくでなりんせんかんにんしなんし ト(帯へ手をさしこミとなり座敷へはいりしようじぴつしやり銀蝶も元の座敷へきて) 蝶 言さんおかしくねへ 六 (ぐつと立てろうかへ出る) 太こ持 モシおてうづに。いらつしやひますか(ほどなくむさし野が座敷もかたづき。げいしやも。そこ／＼においとまないたとき。六三郎をつれて銀蝶むさし野が。ざしきへはいりながら) 蝶 おいらんお楽しみだネ 武 是も。

しようばいなら。しかたがありんせんわなおめへさん。もうちつとはなして居て。おくんなんし。今にじきしまいんすから［蝶］マアそりやアあしたの事に六右衛門さんさようなら。のちほど［六］コこれ〳〵銀蝶コヽ此華はナミなにりりうでいけたかゾミぞんじてヲミおるかコミこれハセミ石州りうでイいけこのだかワミわるいワミわるひ［武］ちしへサアお休みなんし（おりしもげいしやたいこ持しようじのそとから）さようなら御きげんよう（むさし野が座敷のようすな。見るに十畳に八畳片〻に四畳半のかこい。あつて旅だんすに利休ごのミの茶入に。ちようせん風爐懸物に。だる磨の畫ハ不伯がふですくなに書たり武蔵野ハ風爐のそばに居る六三郎ハ　中から首をいだし）［六］ゲイフウコミこれ〳〵ハミわしにもチヤミ茶をイミいつぷくヲミおくれんカミへ［武］（小ごへになつて）みよし野さん。爰へ來てくんでおあがんなんしと云ておくんなんし［三芳］（一ツ穴のきつね）爰へきておあんなんし　ト（大きな聲でいうゆへ六三郎ハむく〳〵とおきてよろ〳〵しながら風爐のきわへ來るゆへ武蔵のずつと立て。しようじを明ながら）［武］アヽいちゝ。わつちやアしやくがおこりんした（おりから六三郎が手に持し茶わん風爐のなかへばつたり）ふう〳〵〳〵（火ハまつくろ座敷ハはいだらけ）［三芳］ヲヤどうなんすへ（むさし野が障子をたてろ（るノ誤）おと）ばつたり（廊下をあるくうハぞうりのおと）ばた〳〵

夜中の實言

夜ハはやひけ過なさし野が座敷にハ六三郎たゞひとり。宵のしうちも我ながら。なにかおかしく思ふおりから。ふりしん三芳野障子をあけて 三芳 チヤまだおやすみなんせんかへ。おいらんで。おつせんすお氣のどくざんすが。しやくがおこりんして今くすりをたべて。ひらきしだひにまいりんすから。ぬしによく申せと云なんしてそして。あすこで寐ておいでなんす（トいきなくきつてせつこんで云ゆへわざと）六ウミミミウソミそだロミろうト（よふ／＼貞な赤くしていふ）みよし チヤおかしうおすよ ト（笑ひながらしようじをたてゝいづくともなく出ゆくハ此新ぞうませものにて六三郎が。どもな實とおもひなぐさみに來るなるべし六三郎ハ。にくきーかたとおもへども又おかしくひとり床の中に色ごとしあんの折から。となり座敷に二三人の咄し聲）華町（是花哥の姉女郎なり）今のいまゝでなんにもおはなし申いせんが。ふしぎな御ゑんでマアわつちがようなものでも姉とおもつておくんなんして何からなにまで。身にひきうけて。せ話をしておくんなんす事ハもう／＼死んでも忘れいせん。ありがとふをす。ぬしのようなしんじつなものを妹といふハほんにもつたいのうおすが。わつちがしやわせ。又わつちのよふなにんがいを。姉とおもつていておくんなんす。ぬしハふしあハせとも思ひなんしようが。何もうき世と。あきら

めておくんなんし「哥ぬしハ今夜にかぎつてなぜそんなに心ぼそい事をお言なんすへそしてマア其はなしなんすと言なんしたとハへ「間其事でおす。今まではおかくし申いしたけれども。是ほどにまで。わつちの事をおもつておくんなんすぬしゆへ。おはなし申います。よふきいておくんなんし。わつちも元からこふ言。いやしひ身でもありんせんけれども。ふつとした事から去〻年の春深川へうられんして。つひ付だしの其時から思ひそめたが身のいんぐわ。一世とやくそくしいした人ハ其年の暮の事。親たちが。やかましくかんどふをうけなんして。かゝるうしまがあんなんせんゆへ。どふぞわつちが身のつゞくだけ。みつぎ申てあげんしよをと。つらいつとめの其なかにも。ぬしばつかりの樂しみと。すこしづゝの。小遣ひまでおくつてあげんした。其内にふつと。風をひきなんしたのも。ひとりの身ゆへおしなんしたゆへか。だん〳〵と。おもんなんして人參や彼是で。とゞのつまりハ身のなんぎ。難義ばかりハいといんせんが。それからしてハどふなんした事やら。おとづれもせず文の返事も人を頼んで書て。もらいなんすか一日〳〵と。おもんなんすよふすゆへわつちもつく〴〵思ひんすハ。なんのいんぐわで此ようにうきが中なるうきめを。見る事よと。眞にかなしうありんして。夫からしてハぶら〳〵と。わづらいんして勤ハいや。ほうばいさんの噺しをしておくんなんすのさへ。めんどうで〳〵だまつてばかりおりいしたが。旦那さんの言なんすにハ。おめへもそうわづらつちやアどふもな

らねへちつと氣をたしかにもちなせへ。おめへハぜんてへ外の者とちがつて。氣がちいさひから。もつと大きくもつがいゝのさ。そしてどこぞへちつと出る氣になんなせへと。度々言なんすゆへわつちも。若や外へでも出て。かんのんさんへがんがけでもしいしたら。ぬしの病ひがなをんなんして。又逢事の叶いゝしよふかと。淺草へめへりんした其時に。旦那さんのおいゝなんすにハ。おめへもきけバ新さんがわづらいなさるのを氣にしての。病ひだ。そうだが聞バ。此頃ハだいぶいゝそうだ。それについてハ此あいだむさし野やが來たからおめへの事をはなしたらちつと。保養がてらによこせと。言たからやるつもりにした。ちつとおめへも所でもかわつたら又あんべへもよかろうと。おもうからまアいくつもりにしなせへ。夫ともおめへのむねも知れねへものだから。兎もかくもしなせへだが爰の所をきゝわけて。ちつとあつちへいつて見るもよかろう。若新さんのほふからたよりでもあつたなら。內證で知らしてやろうから。心づよく思ひなせへと。事をわけて言なんすゆへ。わたしもびつくりしひしたが泣にハなかれずとほうにくれんして。すぐに死のうとおもひんしたが旦那さんが。それほどにことをわけて。お言なんすし若またこつちへ。まいりんしたならバぬしにはれて。あわれんすこともありんしようかと。其日すぐに爰へ來んしたが。マアどうなんした事やら彼是一年になりんすが。旦那さんの。とこからもよくなん／＼したとも。またわるいともなんとも。さつぱり便りハなし。

ほんに死にでもしなんしたらわつちやア。マアどうしんしようと思ひんすりやア。いつそ死んだら此うきめはありんすめへとおもひんす 哥（なミだをふいて）なるほど。そうお言なんすりやア。おめへさんも色／＼くろうをなんした。其おはなしわつちも。かなしい身のうへでおすト（又なミだをふいて）聞ておくんなんし。ちようどわたしが十三のとしおとつさんハ。人手ト（言ひかけて）かうしんせつにしておくんなんすぬしたちゆへ。若も便りになつて。おくんなんす事もありんしやうかと。うちあけておはなし申しんす。わつちが内より一里ばかり。はなれておりんす所の郷士のむすこで。ありんしたがわつちとアノ言さんの言なづけのありんすのを。知ながらわつちを。むりむたいにもらおうと言なんすのを。おとつさんが大きに腹をたちなんしてことわりにおいでなんした。其かゑりに誰とも知らず。やみ／＼とひがうにお死なんした。其時ハどうしんしようと思ひんして。ともに死のうとかくごをバきわめて。かへりんしたが。わつちが此うへ死にんしたら。はゝさんもとも／＼おしになんしようとおもひんして。おしからぬいのちをながらへて。今此うきめにあいんすなかにも言なづけの言さんにお目に。かゝりんした時のうれしさかなしさ。どれからまアはなしんしようと思ひんしたが今ハこうゆふ身のうへに。ぬしもわたしもなりんして大事のある身の行すへがおぼつかのうをす 町 ぬしもマアそふゆう苦労な身でおすかへ。そしてマア其かたきと言ハ知れておりんすかへ 哥 その事でおす。お

とつさんの切れなんした其夜から郷士のむすこも。おりんせんゆへたしかに。夫とも知れいせんけれども。うたぐるいハ。此人ばかり外にハなにも。ありんせんそしてマア聞ておくんなんし。いとゞさへ。よわつて。いなんすかゝさんの夫からしてハ。月にまし日にまし食もたべなんせず。おはつかしい事ざんすが少しの。田地をうりしろなしてもたらぬ藥料。おぢさんに相談して。わつちがねがいの此つとめ。おやのため妹のためとハおもへども。元のおこりハみなわたしゆへと思ひんすりやァ生れぬ先がこひしうをす 路（身をふるハして）なるほど。おめへさんがたの。おはなしなんすのを聞んして。つく〴〵おもひんすりやァわつちほどばちの。あたつたものハありんせん。夫ゆへで此うきめを見んすのも。今よう〳〵と思ひあたりんすりやァおめへさんがたにも。おはづかしくつて。はなされいせん

哥 かう打あけてお咄し申んすうへハぬしも。うちあけてお聞せなんし 路 かならずお笑ひなんすナさんけに罪もはれるとやら。申んすからおはなし申んせう。ぬしたちの孝行や貞心にうつてかわつた身のしだらをいたしんしたが。今おもいんすりやァよくマアこう生ておりいしたが ふしぎでおすト（又跡をはなしかねているゆへ） 哥 なにも此なかで。おかくしなんすとはありんせん。つゝまづはなしてお聞せなんし 路 お咄し申んせう。聞ておくんなんし わつちのおとつさんも。此商賣をしておいでなんす折ハ。川崎におりんしたが。わつちがてうど十四のとき。品川へきなんして。茶屋を出

しなんしてから二タ月ばかりおりんすうち。近所へ居そうろふに。来ていなんす松さんと云色の白ひ目はなだちのいゝ。男でありんしたが。ふつとして心安くいたしいして。まだぬしの心も知れぬ内證河のほうへにげて参りんして。そこにわつか三十日ばかりくらすうち。年のいかぬ心から又内が戀しく江戸から来ておいでなんす。御加番の衆をだまして。よう／＼江戸へ逃てかへりんして。本所にしばらくおりんすうち又ト（はなしなかばへ廊下にた／＼しようじを明てはいりながら）蝶六さんホイおかどちげへ御めんなせへト（障子をたつて外へでる）哥モシちつとおはなしなんし蝶イヽへはなすとにげやすわりひくせさ。今もちよつと。はなしたらこけへ逃て来やしたから。もうつれてかへつてかじりついて居ねへけりやアなりやせん。どうも女ハいゝがうハつくだけがきづさト（火ばちのきわへよびだしなとつて）コウてめへそりやウなにをつけて居のだ　路どこにへト（あたまへ手をあげそうにする）蝶どつこひふるめかしいが。ほうずになる氣か　ト（ぎん蝶が口あいにミな／＼笑ひになるあづましもなミだなかくして）路モウじようだんもいゝかげんになんして。いつてお休ミなんしもうじきにめへりんすから蝶ソリヤもうおひ出すくめんをかんがへるハ。行すへハ思ひやられたもんだぞ。いゝかげんなじぶんにおひだされるのだろう美しい。をひはぎのよふだ　路にくらしひ口だぞ。すんならわつちもいつて。ねんしようサアおいでなんし　ト（障子の外へでる折しもかすかに）迷ひ子やアイ／＼（升のそこたゝく

おと）ことく〳〵

夜明の情言

夜ハしん〳〵と更わたり二階も下もしづまりて。いびきのほか音とてハつるべもる水カン〳〵と。枕にひゞく軒の小雨のしよう〳〵として。物あわれなる其中に。武蔵野が座敷のようす。宵にかわりしめりやすの聲高ゝと

めりやす へうき中の。ならひとしらバかくばかり。花にゆふべのちぎりとなるも。はじめのなさけ今のあだ合

ふすま一ト重こなたにハ。浮世をうらむ心から。今ちりかゝる華町の手に持筆をとりおとし 町 いまのハたしか。いや〳〵心のまよひからト（ふでとりあげて）

申上たき御事ハ海とも山ともかぎりのふおわしまし候へどもさいごをいそぎり〳〵まゝあら〳〵申のこしり〳〵らし

はなゟ

しん様
御もとへ

かへす〴〵どう候へども

こなたにハまた

めりやす へいつそあわねバこうした事も。ほんにあるまひよしなやつらや合

みらいハかならず一ツはちすとそれのミたのしミより。おんなのぐちなこゝろから筆のたてども

おぼへのふおしきふでとめより

ふすまへだてゝ

めりやす へあだにくらせし月日のほどもの。いわず思ひの涙の雨に。いとゞくちなんよつのそでチヤン

[町]なむあみだぶつ ト(なでにじがいと見へ、折からふすまをへだてゝ)[六]これはやまるな ト(右の手をしつかとおさへかほつく〴〵と見て)お花じやァねへか [町]しんさんでおすかへ。どうぞはなして殺しておくんなんし [六]血まよつたか。お花わけハくわしくとなり座敷で聞ての。しぎマァおのしやァ何のために死ぬのだ ト(いわれて氣がつき手をあわして) [町]ほんにわつちとした事がぬしに逢たいばつかりの。思

ひがあまつて死ぬかくごマアどうして爰へハ來なんした [六]是にはだん〴〵わけのある事。後にゆるりとはなして聞そふ夫までハ。かならずともに [町]さとられぬようにしろと云なんすのかへ。わつちもさつきたしかぬしのお聲と思ひんしたが。是も心のまよひからぬしのお聲と聞へんしたのでおつせうと思ひなをしてたつた今 ト(折から廊下をうハぞふりのおとにびつくりして) [六]すんならいちに [町]うれしう御ざんすト(ふすまばつたり折しも來るむさし野障子をあけて) [武]チヤなぜお休ミなんせんト(あがり)ぬしやァさぞ。お腹がたちなんしやうかんにんなんし。實にしやくがおこりんして眞にくるしうおつしたからつい今まで(ト言かけて) サアおやすミなんしな [六]うそにもおめへがそふ言なさりやァうかむと言ものだ。しかしもう夜があけるそうだ御ゑんがあつたら又かさねてと。いふもんだそれだからしやくがあるなら跡で。ゆるりとおすとも揉ともかつてにしなせへト(多ばこをのミけむりをわにふいている) [武]ソウおいゝなんすならほんとうに申んしようが。ぬしハマアなぜわつちをおだましなんした [六](わらいながら) かねておめへの咄を聞て。とふから來て〳〵と思つていたがしよせん。おめへ方の所へとげてこられるような。わつちでもなしおめへも又わつちがような、しミつたれをよぶ氣もあるめへ。そうすりやァいくらおもつても外にしよふらねへのさ。そうして又おめへだますのなんのと言けれども。ありやァよくつもつても見なせへ。外の者ハ。たがいに深くなじん

で來る。なかへわつち獨り初けいで來るのに。あんまり手がねへと言もんでくるしい思ひで。あんなまねをして來たのサそれと言も。おめへに聞ほれがして。來たくつてならねへゆへさ ト（おつにからんで言ゆへじきに言ばをとつて）〔武〕ヲヤなんとおいゝなんすへ。ぬしやアきゝほれがしてお出なんして見なんしたらあいそうがつきんしたのかへ。わつちがわるい事がありいすなら。いく重にもあやまりいすから。どふぞかんになんしてマア少しのうちお休なんしナほんにぬしが今おうたひなんしたいを。聞ておりんして。じつにト（跡を言かねて疊のちりをひねつているゆへ）〔六〕はらが立たといゝなさるのか。所詮わつちらアおめへたちの。お氣にやアあわねへのサ 〔武〕どういへばこふ言といつて。よく人をこまらせなんすト（小聲にて）よび申てへと思ふ客人ハなぜ。こんなだやら もしへぬしやア今日おいでなんしちやアわるうおすかへ 〔六〕わつちもじつハ居てへのさだけれども。いやマアけへりやしようよ。そして又此頃にきやしよう。かゝれて居のもあんまり知惠がねへ 〔武〕ぬしやアこれほどに申いしてもまだおうたがひなんすかへ ト（用意の剃刀とり出し枕にあてゝ小ゆびふつゝりいたさをこらへミす紙につゝみてさし出す）〔六〕手めへがそうゆふ心ならうたがいはれた 〔武〕マア是をとつておいておくんなんし 〔六〕すんなら是ハとつておかう（ト血にそまりたるミす紙を手に取あげてふところへ入るふりにてまくらの引出しへそつといれるをしらず）〔武〕それでわつちもおちつきいした。ぬしハマアどこでおすへ。どうぞお聞せ

なんし 六てめへまたそれを聞てなんにするのだ 武もしやぬしがこれぎりで。おいでなんせんときハ。ぜひ人をあげ申いす 六（笑ひながら）いゝかげんにかいておいてくんなせへ 武なぜでおすへわつちがいつかきひしたへ 六そふゆうけれども。おいらがひとりで來る客じやァあるめへし。言だの蝶だのといふしつかりとした。なじミのてやひがあるから。跡でわかる事だ 武いゝへそれにやァちいつと。いりくんだわけがおつして。此ごろハ花哥さんともあんまり。心安くしいせんからどふも聞にくうおす 六そりやァまたなんのこつた。色男出いりだろう。むりに聞も思ひやりがねへが。またきかねへじやァふたゝび來てもおもしろくねへ。初めて來てこんなことをいふのも。あんまりだもふだまつていよう 武いゝへさ。もうかふなつちやァぬしにハなんにもおかくし申いせん。おはなし申いんせう。共かわりちつとぬしにもねがひがおすが。かなつておくんなんすかへ 六そりやァおめへが咄したらねがひもかなつてやるまひものでもないが。まァそりやァなんだへ 武ト（六三郎が手をまくつて見て）さア此ぬしの手にある花命をどふぞ（ト言ゆへひつこめんとすれどもおさへてはなさぬゆへそらさず笑ひながら） 六そりやァそつち次第でどふとも今でもほりなをそうが。よくつつ（も脱り）ても見や。まだなじみもなし。たがひに。

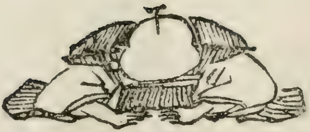
心もしれねへうちそんな事を。したつて。何もわかつたと言ともあるめへじやアねへかへ 武 ハテぬしでもおつせんわつちが是ほどまでに思ひゝすに。ぬしハ。じやすいでうたぐんなんすのかへ 六 なアに。てめへをうたぐるのじやアねへが。もふ夜もあけそうだ。今にミんなが來るだろう。又いづれ此頃にこよふよ 武 いゝへどうおいゝなんしてもおかへし申いす事ハなりんせん。言さんとかァわつちがいゝように申しんすから。明日ハぜひおいでなんしておくんなんせんけりやアなりんせん。時節にはづれて今夜ハさむうをす

折しも) 蝶 サア六さんどうだあかるくなつたぜ言さんハけへらねへとさ 六 さアいきやしよう (となり座敷にて花町がためいき)ほツ(こなたにハ作者がつバ呑こむおと) くびり

跡は居つゞけ晝遊びの咄し華町と六三郎がこんたん
花哥が敵武藏野が客となる末のすへまで葉ばかりな

がらまち玉へと

梅松亭
庭鷺
謹而申



跋

北國樓の魂膽小冊數多透（マヽ）作の中へ云猿事とお笑ひをかへり見巾と御呵りを聞ざるふりは誠に猿の人眞似と顔を赤くして其席をさるもの狒々うとし

てひ鷲

青樓五ッ雁金

全

青楼に入てひとゝなるとも人間わづか五十間大門口から呑込で五丁町を五臓におさめみせすがゞきの三味弦にハ心を空にし一寸先ハ廓の三十日の闇もなく冗頭の夜光の玉も魂ととともにひかりを失ひ最中月も竹邑が丸きがうへに丸かれと堅所は山屋豆腐の耳を取で鼻につくほど喰バ豈其軟かき事を覚へざらんや異見の眼玉は食へども其味を知ねば颯颯押押堤八丁土手腹に竹輿をのりすて自負にハ晒の手巾乾土木履籠に立て足ハつくとも二階へ上らバ唯一本のやりてのために脊中も見すべし大盡の襟元につくあれバ色男の繻件（マヽ）で咽をしめるあり胸

三寸にはたらきあらバ必しも母堂の臍くり金を窺ことなかれ
親の恩深支事大海の如し夫ハ南是ハ亦北國五ツ、厂金と題して
水道尻の穴窄不佞此小册を努ゝいだすこと呼嗟云云

梅月堂

梶人述

むつまし月

青樓五ッ雁金

題辭

天
てんハ初會のざしきの新ぞうかい
ふざけきやくのおてぶりおどり

地
ちハあいかたの部屋のちやづけに
きやくいうわさいしんいあめ

人
ひとハいきぢの男だてくだけてこれバ
ぜんあくのなき五人一座

其　壹

天筆和合樂壽福開延滿（先かき始の初會ざしきの三人一座せかいハまちりミせいづれもとしハ三十になろやならす衣裳つきハいろハかわれど三人ともに上着ハついのふとりの紋つき下着ハゆうきじまはおりハ小もんりうもん黒うらのけぬきあわせ帯ハ新おりはかた　もちものハ丸角ゑち川両家のしこミあいかたのいせうつきたいがいごすいりやう）

市右衛門（新ぞうかい尤なじミ）

そら琴（としハ十八か九）

千右衛門（これハ初ゞきもち）

山がた（としハ二十一か二）

平兵衛（これも初會ハやもち）

さく花（としハ十九か廿）ざしきもよほどことすみてしろかたむかん三寸まへ　[千]もふ酒ハいかねへから市さんひさしぶりでぬしのおどりがミてへの　[けいしや]これハよふござりましよふそういつてもおいらん市さんのあてぶりおどりハ多之介さんよりおかしくつてきめうでござります　[市]なんだきめうだきめうとりにてしらふじ源太おいらハしらふでけんだサア一ツけんいこう　[けい]まいりませうまけたものがおどりつこでいきませう　[市]こいつハおもしろのぎよでんだからきつねでいこうサァいくぜ[げい]まいりやしよう　[市]おいでなせへシャン〱〱〱　[げい]これハわたしがかちかいな　[市]是ハわたしがまけかいな　[花]市さんはやくおどりなんしへ　[市]おどる〱おどるへいけひさしからずと

いふからすこしやらかそう〔平〕あしくしやれずとはやくやらねへかイ〔市〕やるとも〳〵やるともこうおいりとしよふなんとおれがおどりをきりにして座敷のうち出しとしよふ〔千〕それもよかろふ〔けい〕市さんよしわらとんびにしやせうねうたへそうした黄菊としらぎくのおなじつとめのその中に〔市〕なんと道中ハやるもんだろふうたへほかのきやくしゆハすて小舟ながれもあへぬもゝおばの日だつふよふのわけへだてたゝなでしことかゝかけていつかくるわをはなれてしおん〔そら〕あれちよつとゝなんしあんなふざけたまねをしなんすわなばからしいうたへそうしたこゝろのおにゆりとおもへば思ふほどきもせきちくになるわいな〔市〕もふ〳〵ごめんだいきがきれておどれねへ〔そら〕いまのハたしかかゝなりさんのおなりなんす時のまねでおざんすよほんにかゝなりさんといへばぬしたちもしつていなんす庄九郎さんが中の町のきよ川さんの角左衛門さんといつしよにきておいでなんすとさ〔市〕あのやしきもの丶角左衛門か角左衛門とハよくつけたおいつがつらゝなりもとんとずく銭のせんだいつうほうといふもんで四角ばつているぜ〔そら〕そのよふにわるくおつせへすなきよの川さんのきやく人だ〔市〕わるくいつてもいゝのさこつちにも文七といふ一チ座があるからどふも庄九郎がきたがわからねへこつちのうちへなじんでくるか〔そら〕アノ角左衛門さんと一座でぬしたちのおいでなんせんうちいなづまさんのところへたしか二三度もおいでなんしたろふ〔千〕アノあく玉がついてきてハたいへんだとんだ口がわるふ

ごぜんやせうね 〔そら〕あいさいつそにくい口をおきゝなんすとさ文さんの事をわるくおつせんすからおいでなんすたんびにきよ川さんがはらをおたちなんしてしやくをおこしなんすわきできいておりんしてもほんににくらしうおざんすもしへほんに文さんハのちにおいでなんすかへ 〔下〕モウおしつけきやせう どうしても此ごろハうちがわるいからねたつらでぬけてくるから ひけすぎにもなりやしよふ 〔そら〕うれしいねへ 〔千〕おめへハ文七がくるのをそのよふにうれしがるがあしでもつけたか市さんコリヤうさんだぜ 〔市〕うさんだどころかからてんぢくに天にあらばひよくのとり地にあらばれんりのゑだ 〔そら〕よしておくんなんしきよ川さんと云おれき／＼がついておいでなんす 〔半〕それハそうと下さんそのきやく人といつしよにきてハいよ／＼庄九郎ハむこふづらとミへたの 〔千〕そうさ此中もきけば文七がところへごうぎにしやくりの手紙をやつたといふ事だそれにつけても文じがこぬうちきよ川さんにあいてへもんだ中の町からかへりなすつたかきかせてくんなせへまだおめにハかゝらねへがうわさにきいたきよ川さんなにかのれいもいゝたし文七が事についてハだん／＼はなしてたのミてへ事もあるから 〔そら〕モウおかへりなんしたもしれんせんでへぶおもてざしきがにぎやかになりんした 〔下〕かならずおめへがたが庄九郎にあいなすつてもわたしらが来ている事ハさたなしにしてくんなせへこのごろあいつはこゝのわるいことがあつて（トきせるのすい口でむねのところをたゝき） それだからおなじ

桑川亭

ともだち中でもこつちらへくるなぞハたがいにかくしやつてくるからそれともろうかなぞでいんがとあつたら百年め　きよ川さんのきやく人ときていてハなをの事　なりたけあわぬよふにしてへもんだ　平そうさあいつがつらを見るといめへましい市さんなぞハ氣がいゝからなんともおもわねへがおいらハあいつにあふと一ばんいふきだ　市ゆふきよりしまちりめんにしてしよじだんまりのかくしうらハがくむくがいゝいさくさがあつちやあきよ川さんもしにくしのちに文七がきた時むづかしでもできてハたがいにわるいなんとそうじやあるめへか　茶や男さよふさきよ川さんの客人と御一座でハむづかしいときに市さんまづこゝハちよつとおかたづけといたしませうまたのちほど文七さんがおいでなすつたらともかくもちとあちらへサアおめへがたも三味せんをしまいなせへこれあの子さく花さんのところへおつれもふしてくんなせへいゝ子だ　かむろもしへあつちらへお出なんしへ（トかむろがあんないに三人ハまづかんとうのつれ小べんそれゟさく花が部やへおちつく）　茶まづこゝですこしのうちおはなしなさいましたどいま山がたさんのおざしきでハおまんまがはじまりましたから通をとふして　千しよふち〳〵おめへたちハもふいかねへかゑんなとまりのすハしれている　茶市さんハしたでござりますよおむかいハれいのとふりでよふござりませうね　市よし〳〵文七が來たらはやくよこしてくだせへ　茶けいさよふなら御きけんよふ　三人ごくろう〳〵（これなきつかけにひきとる　入かわつてきよ川

きたる この所きよ川千右衛門文七が事にていろ〳〵とはなしあれども これハのちに山がたがざしきにてくわしくあらわす）

其 貳

地も木も我が大君の國なればいづれか鬼のすみかなるらん （鬼もやわらぐ此里の山がたがつぎの間にハただし物のざんぶつにたしなミの七色ざぜんまめなづけのこうのもの大だいを五とくにとりまききやくのうわさと一口ませぐつとのみこむきいたふうはしにもかゝらぬよたんぼうかミわけてよぶ手くだのむま事しがなききやくハ茶づけのごとし）［山］やまじや清川さんのちやづけ茶わんとはし箱をもつてきておきやそしてのきよ川さんがさく花さんのところにいなんすからいつておはなしがすミんしたらきておまんまをおあがりなんしといつてきやそつとよまた大きなこへをしていふのじやあねへよそら琴さんそのくろいものハなんざんすへ ［そら］これかへこれハあのいぢきとやらいふもんでおざんす ［山］おやばからしうおざんすいぢきとやらいふものハこのよふにたべんすことをもふしんすでハおざんせんかへいろけのねへなでおざんすねへそういつてもそらごとさん市さんもよつほどいろけハおざんせんねへ ［さく］いろけがなくつてもよふおざんすとさそのいろけのねへ所にまよいなんしたもいを ［そら］ごしよふだからよして

おくんなんしへあんな奴（やつこ）になにまよいんすものか　〔山〕さましてたんとおあがりなんしおまんまをもつてあげんせうおだしなんしへ　〔そら〕モウたべんすめへおなかも身（み）のうちとやらもふしんすから　〔山〕身（み）のうちといへばあのわたしがでた千さんとやらハ文さんとしんるいでもありんすかいつそしんミらしくおつせへしたどれもとんだおひとがらでぢよせへねへふうでおざんすねへ　〔さく〕あふかたわたしがきやく人もおめへさんのきやく人もたしか二丁目あたりへなじんでいきなんすよどふもミたよふでおざんすうぬぼれらしいがもしきなんすならよんで見とふおざんす　〔山〕なに来（き）なんすもんだほんのこんやハつきあいで文（ぶん）さんのことできよ川さんになにかはなしがあつてきなんしたのサ共事ハさつきざしきのうちにそら琴（こと）さんにはなしておきんした　〔そら〕あいさその事を市さんにそうもふしんしたらじよせへもねへあのこたちだからぬかりハあるめへが初會（しよくわい）のきやく人と玉子（たまご）ハかへしざわがかんじんだからよくあつためてかへしなせへといへとおつせへしたそれだからおまへさんがたもよくあつためておあげなんしへ　〔山〕どふいたしんせうつかりとその玉子（たまご）をたべんしたたちものざんしたものをどふいたしんせう（トぎよふさんにさわぐすべて女郎のたちものするハこのさとばかりでなくほか〳〵にてもよくすることなりわが身のことにするにもあらずおや兄弟のためにするにもあらずあふかたきやくのためにする事多し△さてきよ川ハ千右衛門がせつなるたのミにせんかたなく文七が身のうへをあんじてむねミにるの夜のしんし

んとふる雨のあしあゆむろうかもわが身よりさきだつものハなミだなりよふ〳〵山がたがざしきに來りせうじを

あけて入るよりも）　[き]山がたさんもさく花(はな)さんにきいておくんなんしどふいたしんせう（下わけもい

わずにひとりなき）　[山]どふじ(しノ誤)なんしたマアわけをおはなしなんしそのよふにないてばかりおいでな

んしてハわかりんせんひざともだんごうでおざんす　[き]ほかの事でもおざんせん文さんの事でおざん

すがかなしいわけになりんしたそのわけハぬしのきやく人の千さんとやらがおつせへすにハこの頃文(ころふん)

さんハうちをばかぶりなんすしやしきもしくぢりなんすそのうへアノおかみさんもだしなんしたとさ

それにつけてもいろ〳〵といままでのふしだらにもしいゝわけがなければふりやうけんなこゝろもで

よふかと思ひすごしてこのごろでハおつかさんもすぐれなんせんとさそれといふのもミんなわたしか

らおこつた事とうらミらしくもいひなんせずいままでおめへもくろふをしてはぢもかゝせず文七をよ

んでくんなすつた心(こゝろ)をむにしてなんにもしらねへよふにこのよふなむりな事をたのむのもさぞわから

ねへやつだと思ひなさるだろふがこういふわけだからわたしらもたいてへいけんもしてミたがともだ

ちやおやのいけんじやあとまらねへどうぞ文七がかわいかあはでながいわかれにもしめへから二月と

三月もしんぼうするよふにとふざかつてやつてくんなせへすこしのうちでもしんぼうすりやあまたう

ちもでいゝからなんぼとふざかつてもたがいにじやうがありやあ又どふでもなると男(おとこ)なきになミだを

こぼしておつせへすからアイとハいつてまいりんしたがどふいたしんせう［山］なるほどそういふわけならむりにとやこうとしなんしても文さんのためにもなりんすめへしたがこんやざしきのきやく人がもつてくるやくそくでハありんせんかそれがきたらマアあのかたでもつけなんしたら又どふかあんじもおざんせう［き］それにこんやハアノ角左衛門づらが庄九郎をつれて來ていろ〳〵なむりばかりもふしんすもふ〳〵いやで〳〵なりんせんがかの事ハありんすしいま又角左衛門をつきだしてハミんな文さんがさせる事だとわるくかんでもつけるとわるいからいやでもあろふがしんぼうしてよびなせへ文七をつきだしたなぞといつたらおめへのためにもぶん七がためにもなるよふな事もあるめへもんでもねへしかし庄九郎がついてきてハそうゆふきやうげんもできめへとおつせんしたがほんにあの庄九郎へせじでたいてへくろふをする事じやあおざんせんなんでもこんやわぜひ〳〵こゝろいきをわけさせねバならねへ文七をつき出してしまへそうしてもらわねばおれがぶしがたゝぬのかほがたゝぬのともふしんすがミんなこれハ庄九郎づらがしやくつていわせる事でおざんす文さんをつきだすくらいならあんなやぼやあく玉にきがねハしんせん（トなミだな袖ではらいながら）もとわといへば文さんをいままでの様によびもふしてへからこのよふにくろふをいたしんすひるもはね出やのわけできがねをいたしんした吉さんでハものもいひにくし何かゞいたしにくふおざんすからおぢさんをよんでこんや文

さんがきなんしたら大なり小なりかけもかたがつくだろふからどふぞこのふミをそふ〳〵とゞけてぜひ〳〵きなんすよふにいつてやつてくんなんしわたしがほうにもちつとこゝろあたりの事もあるからぶさたにハいたしんすめへからこゝのところを吉さんによくはなしてくんなんしともふしんしたらいま迄あのよふにはでにしてきさしつた文さん十五や二十ハうちでもさいそくをするきでもありますめへが山の手のかけのわけがさつぱりとつかねへからよんどころなく文さんにももふしたそうさそれでどふもかけのかたのつくまでハきにくひといつてよこさしつたがそうゆふわけならわたしがとこからもよくそのわけをかいてなんにもこゝろづかひなくきさつしやるよふにいつてあげやしよふとうけやつていきなんしたがまだおじさんハかほだけのうつくしいとこがありんすへしかしこのよふにあめわふつてまいりんすし文さんハきなんせんかしらもちろんこんやきなんすとアノあく玉がきておりんすからわたしがこゝろづかひハいちばいでおざんすがまた角左衛門がやくそくのものをこんやもつてくるはづだからすこしもはやく文さんにわたしして文さんの手からはね田やのわけをかたづけて今までのよふにあいとふおざんすさりながら千さんとやらがアノよふにおつせへしたからきゝわけぬのもぎりたゝずわづか五日か六日あわぬといつてこのよふにまいにち〳〵うか〳〵としておりんすものを二月と三月とおつせへすが一ト月もあわずにいるとこがれじにゝじにんすいつそしぬのがましでありんし

よふ(トまたかきくもるなミだのあめきゝいるものも身につまされしばしことばもなかりしがかゝるおりから　かむろの)[めなミ]おいらんに庄九郎さんがおいでなんしとマアおいでなんしへ[き]この子ハなんだな人の氣もしらねへよいままいりんすといつてきやそら琴さんその酒をこれへついでおくんなんし(ト盃にちやわんのあたつきり目をねむつてひといきにのミむねをたゝきなミだをはらい)モウ〳〵色男ハよびんすめへ命がつゞきんせんそのうへにきいておくんなんしあの角左衞門づらがおれがこゝろのすむよふにしたら身うけをしてすぐに身どもがやどのつまじやいまだミどもハどくしんじやてともふしんすわな文さんとわかれてそうでもなつたらどふいたしんせうそれをおもふとかなしゆうおざんす[山]ソウくよくよと思ひなんすな文さんがお出なんしたらまたしよふもよふもおざんしよふぬしたちがそういひなんしてもそのよふに二月だの三月だのととふざかるよふにもなりんすめへから氣をぜうぶにおもちなんしモウ文さんもきなんすだろふからいやでもおざんせうがいまのうちざしきへおいでなんしてかの事をしゆびよくおしまいなんしへ(トいさめるもなだめるもひごろなかよきほうばひどし)[き]文さん來なんす事を庄九郎づらがしつておりんすからざしきへまいりんすとなんのかのといつてめつたにハざしきをだす事でハおざんせんいつその事文さんがきなんしてからまいりんせう[山]それでハわるふおざんす文さんがきなんすとまたはなしがながくなりんすからざしきのきやく人がはらでもたつて見なんし

かの事をしゆびよくするにハわるふおざんせう［き］それでも文さんがきなんしたおりかほだしをしずバもしもはらでもたちなんしてハわるふおざんす［山］それハわたしどもがいゝよふにわけをいつてはらをおたちなんせんよふにいたしんすから文さんのとに心づかいをしづにざしきへおいでなんしへ［き］そんなら文さんの事ハおめへさんがたにおたのミもふしんすにへぶんさんがおいでなんしてもかならずざしきへしらせずにおひておくんなんしかミなりががんづくとまたごろつきだしてかの事をしゆびよくするにわるふおざんすどふでいつもはやがへりだからしゆびさへよければあとハかまわずじきにまいりんすおりあしくアノいなづまさんもきやく人だからなをかミなりがおこりんす（トはなすおりからかミなりごへ（に）［庄］きよ川さん〳〵（トよぶこへにふせう〳〵にたちあがりいかんとせしがたちもどり）くどふおざんすがそんならはらをおたちなんせんよふにおたのミもふしんすにへ（トあとハたがいに耳に口あんまり小ごへゆへなにをいつたか作者もしらず）

其 二

人ハ武士なぜ傾城にいやがられ（きよ川のざしきにハ里のなさけもあさぎうらくろはぶたへのもんつきにしたぎハぐんないじまはおりハはないろらしや黒こはくのはさミおびさもいかつげにとがりごへ）［角左衛門］庄九

郎とめやるなゝどもハもふかへりもふすかよふなところにながいハいたさぬ〔き〕なんでそのよふにははらをおたちなんしたマアしたにお出なんしおけへしもふす事ハなりんせん〔庄〕これハそうでありそうなものだ〔角〕なんではらをたつたとハこゝなとぼけものめがいままでどこになにしておつたいまだ身ども

〔き〕どこに何をしておりんすものか山形さんのところにおまんまをたべておりんしたちつとのうちハしんぼうしていておくんなんしてもよさそうなもんでおざんすわたしが心をしらねへよふにわるくバあやまりんすからなんであろふと　おいでなんし〔角〕イヤ／＼いくまい左やうないつわりごとをもふしたとて誠にするものかあふかたてまへおやしきへ出入いたす文七がうせたであろふしるまいと思ふかよつく存じてまかりあるだていこふふかまじやそうな庄九郎おゝハなんとおもやるさよふでハあるまいかな〔庄〕なるほどおまへさんのおつしやるが御尤でござりますきよ川さんわるいりやうけんだぜさつきも中の丁でいふとをりアノしゝつたれをつき出してしまやア角左衛門さんの氣もすめばおめへもうじなくて玉のこしだうしにむまをのりけへるといふもんださもなくつてハこんりんならくたからの山へいつたとてもいままでつくした手もむなしくもとへたちけへるよふになつてゝなせへくやんでもうらんでもけへりハしねへそこでかのうつされたしゝつたれがからだ中にはいまわつてにへゆをかけてもさつてやでもぬけるこつちやアねへしめへにハしゝつたれ蟲に

くひころされるぜなんでも命がものだねだはやくうんといゝなせへどふでひとつからだてしら玉もちと庄右衛門がかうやくをうるよふなむまい事にハいかねへからどふともこうともふんぎりなせへ【き】モウこうなつたからなにもかもかくす事ハおざんせんなるほどぬしもよんで文さんもよぼふといふハわたしがわるふおざんすが庄九郎さん文さんの事ハせんからおめへさんもきいてしつていなんすとおつせんしたでハおざんせんかなんぼ今までおつきあいなんせんとつてあんまりでおざんすそのよふに文さんの事をわるくおつせへしてももとハといへばわたしがわるふおざんすからわたしをおろしなりともして角左衛門さんの氣のすむよふにしておくんなんしなんぼいま文さんをつきだせとおつせへしてもいまそうしやあんまり欲にかゝつてものするよふでほかへきこへてもはづかしゆうおざんす文さんがあのよふになりなんしたももとハといへばゝんなわたしからでおざんすかりたくにいるおりからほかにきやくと云ハなしなにをするにもかをするにもきよ年こつちらへまいりんしても此ざしきから夜具までもゝんな文さんでおざんすものをせめてハ茶屋のかけのかたでもわたしがつけてきれいに兄だいぶんのさかづきでもしてきれてしまいんすどふやら茶やのさがりのかたをつけてハやつぱりみれんをのこしてすると思ひなんしやうが是ばつかりハわたしががいぶんでおざんすそれだによつてちつともはやく茶やのかたをつけとふおざんすどふで文さんハよべんわけになりんした【角】それハはや

それにいつわりのなき事ならきつといたしたせいしを見たうへでハどうで身どもがぢさんした金子十五や二十ハやりもふそう身どもなぞハやくそくにいつわりハもふさぬこのうへけしてほか〱にあくしよふのないよふに庄九郎やくだくをきめておくりやれ（トせきこんでだすきんからかわはら（マヽ）せこ入のさんとくよりミゝをそろへて二十兩）庄まづこの金ハわたくしにおあづけなさいましきよ川さんどふやらこうしてハ金ぜきのよふでこゝろもちがよくねへがぬしのおぼしめしだいまいつたよふにしたくバはやくわけなせへこればかりじやあねへよことによるとあしたがあさつてでものりてへ時に玉のこしだコレサその様にだんまりでいる事ハねへわなわるいところでミへばるぜたゞしハ金がいらねへのか此庄九郎が見ていてハしにくひのかはてそのくらいな事ハあふめにミてやるわなそのよふにうつむいてなミだ斗りこぼしてだんまりでいてハなんの事わねへこうとく寺めへか廣こうじでわたくしぎ兩親にはなれましてとかいてある口上がきへ手をついていよふとゆふミでけびるわななんでもはやい事がいゝどふだ〱（トせかされてもほかにミせべき手くだもなければいかゞハせんとこゝろひとつでとつおひつそれにぜひなければならぬ二十兩△となりのあき部やにハ文七がせんこくきたれどきよ川がかほ出しせればあんじられよふすいかゞとたちぎくおりから庄九郎がいろ〱とのあくげんにこらへかねきよ川がざしきへふミこまんとハおもへども出入やしきの角左エ門袖にすがりてとめるハそらごとなだめる山がた）山マアおまちなんしそれ

でハ一も二もおざんせんどふもそうしなんしてハわたしどもがきよ川さんにたのまれたかいがおざんせんぬしもきゝわけていながらはらのたちなんすハもつともでもありんすがちつとの内しんぼうしていなんしへ（トさゝやくきでもついこわだかとなりへもれておどろくきよ川それとがんづく庄九郎）庄なんだとなりハあき部やだと思つたがでへぶどたばたとするがどろぼう猫でもへゑつたかくらゐものもあるめへにたゞしハこゝがうらやましいかうらやんだところがねこに小判だどふしてなじミにはがたつものかこゝにハ庄九郎さんといふいちもつのいぬがいるぞ　角なんじやとなりへねこがはいつたドリヤ身どもがほいまくつてミせもふそう（トたちあがるをそなきよ川おさへ）き　ゆるしておやりなんしいま見でまいりんしよふわな庄九郎さん角左衛門さんの見ていなんすまいでこのほりものをけしておくんなんし（トすそをおさへし手をまくれば角左衛門これにておちつく）角　庄九郎か様な事とハぞんぜんから身どもハもぐさもちぢさんいたさぬおミがところにハござらぬかな　庄　清川さんまことにこのほり物をけすきかいひりやうけんだそうでもしつバおさまるめへ　き　これでぬしの氣がすむならちつともはやくけしておくんなんしへ（トいわれてせきたつ角左衛門むねハどき／＼）角　サア／＼庄九郎またもやざよいのかわらぬうちじやミどもが心をやすめておくりやれ　庄　そのやうにおせきなさる事ハござりやせんなんのほりものをけしたくらいであんまり氣のすむ事もありやすめへそのくらゐなとでハこの庄九郎

ならふせうちだ〔き〕なんぼいぢめいひとつて庄九郎さんあんまりでありんすへ〔角〕シテ〳〵庄九郎おゝがりよふけんハいかゞだな〳〵（トひざをたゝいてしやちこばる）〔庄〕りよふけんとつて外にふかいこともございやせんがよくつもつてごろふじやしほり物をけさしたとつても清川さんがけしなすつたとつてもこれがはでゝもゝへでもこぜへやすめへソレともこれでおめへさんのきがすんで

この子の身うけをしておやりなせへますか〔角〕イヤハヤそれハなんともふしてもこのくらゐな事でハなるまい〔庄〕ソレごろふじやしそういふもんだからとてものことにおめへさんのいのふにおちつくよふに　物がはやくすむといふもんでござへますはて一日でもこの子がこゝにながくいなされバやつぱりおめへさんのごそんでございますそしてまたどのよふな事ができよふもしれねへ〔角〕なる程おゝがそういつてゝればそうかいの爰においてハこゝろづかいじや夜もよふねられんじやて　よくきめておくりやれそれさへすめば明日にもはや茶屋のてい主とだんがうしてきめもふすぞや〔き〕庄九郎さん　おつせへすがなんの事でおざんすどふでコウなりんしたからなんであろふといたすめへもんでもおざんせんがその身うけの事ばかりハおほし召ハありがたふおざんすがマァゝやわせておくんなんしなるほどこの中うちからそのよふな事をおつせんしたがぜうだんだとおもつてまだはなしもいたしんせんけふのあすのとおつせんしてハあんま

りきうでとくしんさせるまがおざんせん 〔庄〕とくしんさせるとハだれにとくしんさせるのだアノなじミかなじミハモウだんぎりなはずだが 〔き〕なじミといふ人ハしりんせんがそうだんといふはわたしがかゝさんさなんぼくがいに身ハしづめてもげんざいうミのおやでありんすものをわたしがどのよふなしやわせになれバとつても一ト通りハそうだんしてとくしんさせたそのうへでこのごあいさつハいたしんしよふ 〔角〕シテ身どもへのしんじうハナ、なんでミせやるのぢや 〔き〕ハテやかましくおつせへすこの文さんのほり物をけそうともふしんすのさ 〔角〕ソノほりものハさしおいてほかにしてもらいたいじやてな 〔き〕シテどふすればよふおざんすへ 〔角〕ゆびをきつてもらいたい（トいわれてきよ川へんとうなくたゞうつむいていたりしがよふ〳〵とこゝろをさだめ）〔き〕づいぶんゆびもきりかねハいたしんせんがどふして今それができる物でおざんすそのどうぐもなくつて 〔庄〕そんならゆびもいよ〳〵きるきか 〔き〕ハテあらほどまでに思つておくんなんすものをなにしにうそをもふしんせう 〔庄〕そのばでいやとハいわさぬ（トふところよりとりいだすかミそりにすゞのこうばこ見るよりきよ川ハびつくり　となりざしきハまたがたひし）〔庄〕角左衛門さんおめへさんが見ておいでなすつてハこの子も氣がおくれてわるいからおめへさんハ　はいつてミずに寐ておいでなせへまし（トいわれてのろき角左衛門）〔角〕たゞ何事もミな庄九郎おミにまかせもふす（ト　はいれば庄九郎屏風をとつてひきまわせバきよ川ハいまハにげるもにげられず

となりでもしや文七がまことゝ思ひてうらまんかと思へばなをも氣ハおくれしばしなミだにときうつれバ庄九郎ハそばなるてふしなとりちやわんにつぎ）　庄 清川さん酒でものミなせへそのやうにふさぐ事ハねへこれさへすれバ何もかもむまくいくといふもんだ（トいわれて清川かほをあげよふ〳〵と酒をのミ）き 角左衛門さん　ほりものをけそうといふもゆびをきる様になつたももとわといへばミんなぬしをよびもふしてへばつかりかならずわるく氣をまわしてあいそをつかしておくんなんすなへ何事もまゝにならぬがうき世のならひとあきらめてそばにいなんすならたのんだ事をわすれずにかならずたんきをおこしなんせんよふにしておくんなんしへ（トとなりへあてゝいふ事もわがミのうへとこゝろへて）角 なんのミどもがわるぎになりもふそうこのうへハ思ひハいやますともあいそのつきよふ事がござらぬずいぶん屛風のそばによつてきいておりもふすたのんだ事ハ先刻庄九郎にわたしておきもふした庄九郎どふでござるなまだかな　庄 清川さんなにをぐづ〳〵そうミれんでハいかねへもんだどれこのゆびか（トむにむさんゆびをおさへてたばこ箱かミそりあてゝはつしりとまくらでたゝけばふところより手ばしこくかミとりだしてゆびへまきべうぶをとつてあくるまもはやほどちかき七ツのひやうしぎカツチ〳〵〳〵〳〵）

茶や 角左衛門さんおむかいでござりますたゞ今七ツでござりますおしたくをはやくなさいましいつもよりあふきにおそくなりました　いつもハ八ツ半でござりますがついかごをよびにわすれましたから夫

だけおそくなりました 角 おそくなつてハ成もふさぬ夜があけてハ役がらがすまぬあいにく今日ハとふばんだもちつとおりたいところだが身どもハすぐさまかへりもふす庄九郎おミハのこつて何かの事ばんじよろしくたのミぞんずる 庄 左やうならわたくしハおあとにのこつて何かのそうだん身うけの事がまたかんぢんかのものをおわすれなく（トさしいだせバ角左衛門ハにこ／＼わらつてとりあげ）角 おこゝろざしの一トしなじゆのふいたす（トいたゞいてふところへ入る）庄九郎ついぶんきづとがめのいたさんよふにくすりでもつけてかいほうしておくりやれ はせうふうにならんよふにたのミますぞや身どもハ明後日ならでハまいられんがそれまでしまつてまいるからほよふしてたも（トミれんをのこしてたちあがる）き けさハいつそよつておりんすから中の丁へハまいりんせんしたまでもまいられそうもおつせんかかんにんしておくんなんしへ 角 なんといたしておくらずともよふござる庄九郎もこれにおいやれミどもばかりいきもふす 庄 左様ならごめんをこふむつて是におりますまたおことばをそむくもおそれだから 角 そんならおさらば／＼（トおにのうでゝもとりしやうにいさミすゝんでいでゝゆく）二（文七ハきよ川がよふすいかゞとたちぎくおりからゆびまできりしくやしさむねんさ かんしやくもいきまでハこらへしが角左衛門がいくまおそしとからかミをけはなしとんでいづればきよ川ハ）き 文さんか（トとりつきすがるをものもいわずつきたをせバくしかうがいもミなばら／＼ミだれしかミを手にからミそばにありあふたばこ

ぼんとつて引よせふりあぐる手を庄九郎しつかとおさへ）　庄マテ〳〵文七はらのたつのハもつともだがこれにハだん〳〵わけがあるせかづときけ（トたばこぼんをもぎとれば）　文庄九郎われにハたんといひぶんがあるぞモウこふなつてハ百年(ねん)めだあく玉(だま)ならあく玉のよふにねをつよくしろ何の事だいまになつてわけもへちまもいるものか　き マァ〳〵文さんおちついてひとゝをりわけをきいておくんなんしそのよふによふすもきかずにかんしやくをおこしなんしてハあんまりむちやでござんすわなそしてあたりへきこへてもがいぶんがわるふおざんす　文がいぶんもとふぶんもいるものかわれにいまつきだされてハわれにハかまわぬおれががいぶんだわへわれも庄九郎もかくごをしろ（ト又たちさわぐそのおとにきゝつけかけくる一座の三人）　千せくな文七庄九郎きやうげんハどふだむまくいつたか　庄チレガむかふづらのかたきやくでまんまとむまくやりあふせたきよ川さんさつきの二十両ちつともはやくはね田やへ（トなげだせバ文七もかんしやくのなかおれがしてしばらくだんまり）　庄きよ川さんさぞ此中うちからはらがたつたであろふけふハあかしてしよふかこんやハはなしてしよふかと思つたがそれでハおめへが文七への心(こゝろ)もしれずうちまくでした時ハなんぼでもそれかれにゝれんがでゝどこぞのはしでハ角左衛門にがんづかれでもして見なせへ今までしてきたかたきやくがむだになつてアノ夢市といふまことの悪玉(あくだま)におむまでものりけへられてちんになつた時にハ文七がためにもならずきよ川さん

のためにハなをならずと思つたからこの三人とそうだんして氣にいつたをさいわいに角左衛門をだきこんでこゝろに思わぬあく玉ハかんにんしなせへきよ川さんわたしがなじミのいなづまさんもこの事ばかりハちつともしらねへ 千 文七ととふざかつてくんなせへとたのんだもおめへの心をひこふためひとつにハ文七もこの頃ハかんぢんのせうばいも手につかずうか〳〵としているがこつちでおもつているよふにさきでもおもつている事やらまよつている時ハしれねへもんだから一度もこぬをさいわいにまじめになつてたのんだらこれでよふすもわかろふし　まんざらなわけならば出入やしきの役人とはりやつてあすんだ處がとゞのつまりハためになるめへと思つたからたのんでミたのさ　わたしに出なすつたアノ山がたさんとやらにおめへのこゝろをだん〳〵きいてかんしんした き それミなんし文さん外日でさへそのよふにわたしがおまへにこつている事ハしれているでハおざんせんかなんぼこの頃五六日とふざかつたとつてうたぐつておくんなんす事ハおざんせんもちろんこんやのわけだとつても山がたさんにくわしくはなしておきんしたがそれとも間をミてちよつとおまへにあつたうへこうゆふわけだとはなしたうへとおもひんしたがとてもの事にどふぞなるならこれをもつていつておまへにわたしてはやくあんどさせよふとおもひんしたがどふもざしきハはづされずこふなつてミればかミともほとけともおもいんすが庄九郎さんぬしさんハよつほどにくふおざんしたモウ〳〵なんの事もおも

わずにいつそ思ひきつてさがろふと思ひんしたがいや〳〵そふしてハこらほどまでにしてこれがなければはねだやへもすまぬと思ひんしたからしんぼうしておりんしたそのうちのくやしさくるしさもしへモウいまゝでのよふに文さんをよびもふしてもよふおざんすかへ　〔千〕よふなくつてどふするもんだこれからわわたしらがうけやつてどふともするからあんじなさるな　〔き〕それハうれしゆうおざんすが庄九郎さん角左衛門さんがもつていきなんしたゆびのわけハどふいたしんしよふ　〔文〕どふするもんだきつてしまつたゆびだものをなんぼ庄さんがぜんだまになつたとつてもつてきてつがれハしめへしいつその事はり物をけせばよかつたぜ〔庄〕はり物ハけさずともそのゆびをついでミせよふ（トきよ川が手をとつてこゆびのかミをほどけばむきず）〔文〕どふしたわけで此ゆびのつめにもきづのつかぬのハ〔き〕角(かく)左衛門さんのもつていきなんしたアノゆびわへ　〔庄〕あのゆびのがくやハこゝ（トはんくつ(マヽ)とつておしないだし）みんなきいてくんなせへあんまりばかげたはなしだからたかくわいわれねへがわざわいも三年たてバやくにたつとやら此中ひさしぶりで目(め)ぐろから大師(だいし)がわらへいつたときごふぎなまめをかゞとにふミだしやしたそいつをはりでついて水をとつたあとのかわをはさんだがとんだいゝゆびのミがわりだからこれこそうぬぼれをいふたねになろふと思つたからすゞのこうばこをかつていれてミたところがきめうなんでもだましてやろふとおもつているうちいんがときのふ角(かく)左衛門がいふにハ庄九郎おミハな

んとおもやるかしらねへが此中きよ川が二十兩のむしんをいつたがこんやもつていつてやるやくそくだがそのかわりにアノ文七めがほりものをこんやけさせよふと思ふといふからこゝでこその玉をつかつてやろふと思つたからまじめになつてモシほり物をけさせるもいゝがそれよりハゆびをきらせなせへしそれでハおめへさんもよつほどいろ男だといつたらぐつとあつくなつてそんならどふでこんやいくやくそくだからどふぞしてゆびをきらせてくれろそうすればおれがすぐ身うけもしてやるといふくらいにのりがきたからなんでもわたしがきつときらしてあけやせうとうけやつたらうれしがつてあさから大さわぎよそこでおれも三十二文いたんですゞめを一羽かつて血をしぼつてかのゆびにくるんだところがほんにゝせたかつたどんなやつがみてもゆびにちつともちがいなしよそこでもつてきてきよ川さんにうちあけてこうゆふしだらだからこうしなせへといほうとおもつたが角左衛門がそばについてゝちつともはなさずあいつがよふなやきもちやきはねへ耳こすりでもするとわるくかんをつけてならねへからそれもならずなんでもおめへをあのよふにひどくとりあつかつてすこしおろしあんべいにするをうれしがるがアレハへんだせ〔き〕アノヲそうでありんす茶やの人とはなしをするのを見てもいろ／＼とやかましくつてなりんせんそういつてもさつき文さんがなにかとなりでおつせへした時庄九郎さんがねこだとおつせへしたらねこならおれがおつてやろふといつてたちなんした時ハほんにこ

まりんしたモウかなわぬと思ひんしたからほり物をけそうともふしんした【庄】そのほり物をけそうとおめへがいつたおりハおれもこまつたよふ〳〵ゆびをきるにむりこぢつけにこぢつけたがくるしかつたなんでも思ふとをりにむまくいつたからおめでてへどふでアヽゆふほんくらわこんなめにあふわあたりめへだしたが貳ばんめの大づめがすむまでハだんまりのひやうしまくだせ【文】コウゆふわけならなにもおれがあのよふにせく事はねへあんまりせいてはづかしいおめへがたもなんぼおれがうちをかぶつて五六日あわねへといつたとて此きやうけんをかくしてしてくれる事もねへこんやきたおりにはなしてくれヽばいヽ【市】ソウするといまヽでしぐんだおいらがきやうけんにはながねへコウいふわけをしぐんだももとわといへばぬしにはぢをかヽせまいとおもつたからたいてへゝんながくろふをした事じやアねへ【き】くろふといへばさしあたつてくろふな事がありんすアノ角(かく)左衛門さんがあさつてまでしまつていきなんしたがあさつてきてわたしが身請(みうけ)のそうだんをしてひよつとうちへつれていこうとおつせへしたらマアどふいたしんしよふかそれがいつそきになつてなりんせん【庄】それもこつちのきやうけんのやまだわなつれていこふとゆふならちつともはやくそれにしてしまうがいヽ【文】こらほどまでにしていま角左衛門につれていかれてハどふもおれが男がたヽねへからおめへがたにぬかりわあるめへが此そうだんはとてもの事にばらしてくんなせへ【庄】これをばらしてつまるものかいま此子

をうちへつれていくにハ五百と六百もミヽをそろへているがそのくめんがぬしのいまのからだできるかなんぼぬしがこふやのだんなさんでくろぞめのおはぐろかねハたんとあろふがそれじやあ此子の身うけハできねへからせかずとおいらにまかせなせへぬしにはぢをかゝせるよふな事ハしねへから〔き〕そうならどふあつてもいつたんわたしが身のうへハ〔庄〕角左衛門にまかせたうへ〔千〕はなをかざつてくるわのなごり〔平〕四ツ手をやめてびやううちのだい丁しりめにかしかんばん〔市〕土手八丁を四まへがた〔文〕かゝれながらもうけだす大じん〔庄〕おかごわきにもおつぽねにもついて行のハ庄九郎〔き〕ソリヤほんまでありんすかへ〔庄〕ほんまとうその中たんぼ〔四人〕ぱつととび出すかりがねぐミ〔庄〕なるこのおとのがら〱にふいをめがけてさらうわかミなり〔き〕なにから何までうれしうござんす庄九郎さん〔文〕ともだち中とハいひながらそらほどまでにおもつてくれるミんなのこゝろざしなんにもいわねへかたじけねへ〔庄〕なんのれいにおよぶものかそれハそうとおめへがたもちつとのうちでもねゝへか此そうどふでちつともねゝへやつさ〔き〕マアよふおざんすわなどふでけふハけへしもふしんせんいまのよふになつてミなんしこのうへとめもふしたくつてもとめもふすをハなりんせんぬしたちもおけへしもふしんせんからけぶ（ふノ誤）ばかりハおちついていておくんなんしへ〔千〕なるほどこふくだけて五人一座をしねへもわるいからなんとそうながしにしよふミんなハどふだ〔市〕これハよかろふゆら

の助さまだちとおめをさますよりちとおめをやすめよふ　【庄】まづ御てい主やくだきよ川さんからさきへ寐なせへおいらも部屋へひきとろふがおらが女房ハかほだしもしねへどこにいるか女房ども（下ざしきのせうじもほの〴〵とはやあけわたるはるのしのゝめ）女房ども〳〵（一ばんがらすかおもやのやれ）

カヽア〳〵〳〵

林（マヽ）月堂

かぢんど

此小册のきやくいづれもとこなし
このとこハ居つゞけのひるのせかいハ
來春のこう編に御らんに入り〳〵
目出たく〳〵し

天明申の春

所謂謀計ハ蜜なるを善とすとや。客に手段の透間無ければ。遊婦に殺の手管あり。そも此書の佳功なる。清川の流れにたゞよひ。雁金のかり䏻の夢。むすぶえにしの淺からぬ。中を流るゝ友千鳥。敵となり實事師と成て。切幕の一趣向韓信も爪をくわへ。張子房も舌を卷く。烏呼後世恐るべしきのふの信友けふの向坐。斗り難きは人心なり。しかじ一たんの利ハ得る共通人といわれて乏しからんより。不粹と侮ハれて山吹色の艶男こそ樂しミ其中にあらむかと。一階上の軍慮も不意氣人の味方をなして野暮天の奥の手を誌事しかり

浮梁軒書

染拔五所紋

全

鳥獸羽毛あり、艸木花實あり、娼妓襠の立姿、遊子粧調の出立、をの〳〵季を知り色を分てり、都是十目の視を歡ばす所也、その艶色好まざる少年は、玉の盞そこらが些不通の愚才ならんか、其情色深を好も亦すこたんと紺樓の藍瓶に沉がごとし、全身に染こむ心の濃紺、馴染の色の紫を訪て、籬に忍てあひ御納戸、魂魄飛むで天の空色となり、牛壁と見らるゝも知らずして、酒落誑にあふ時は存之外ぬ帋花を取られ、或は實情て紅閨の逢目忍、一夜八まんぢりとも不眠身がへし、後朝のあさ氣に烏の黑飛、爰におゐて不知行末とならば、地生丈婦の產得といへども、家業終に綴となりて、垢買人の手にかゝり、柳原店の軒に漂泊も、實悼悼然成行なるべし、茲に當春も又、瑤池堂

が誂染の助僕となりて、予手の拙を恥ず、染拔五所紋と表して、五ツ、鴈金の後編を、明後日までの嘘なく、例の群染に染あげ、新紙も春乃戯になれかしと爾云

梅月堂

戌孟春　梶人述

染拔五所紋

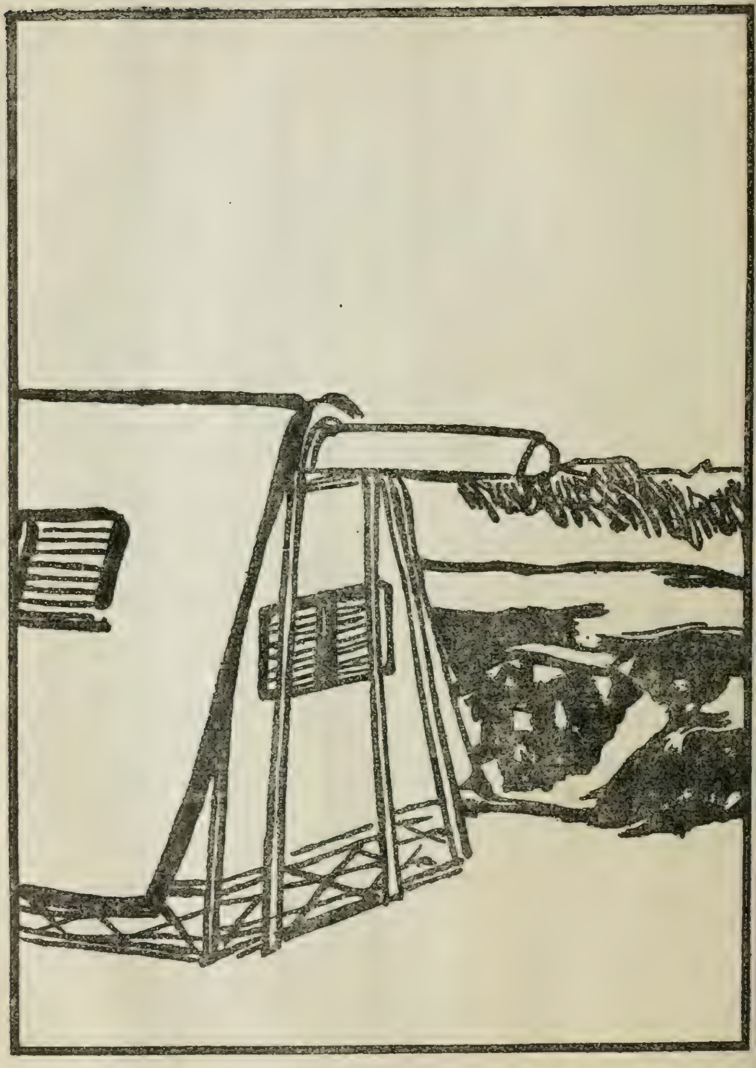
題辭

陰

仲の町の夕げしきすまぬ身うけに
淸川が淚とともにちるさくら

陽

居つゞけのしんの闇中
五人一座のさかりの花



其壹

五人一座の衣裳つけあいかたのくらいつけ仕好の山から里のせかい樓は前編にくわしくしるすさて初會より居つゞけうらの羽二重紅絹ハ△千右衛門　平兵衛　なじみだけゑんりよもなく　しごきの帶ハ△市右衛門　庄九郎　見ゑもなくかきもなくたがいに實事をかさね着のがくむくハ△文七もん日もの日に身うけまで惣縱のうちかけハ△角左衛門　清川がおもいれにしたておろしのはれ小袖今日ぞくるわの名ごりぞとかざれる華の仲の町空にしられぬぎんせかい花のふゞきハ雪ならてとけぬ心をむり酒にうかすも花の黄昏どき〔茶や女房〕アレ〳〵おいらんのおさかづきへ　花がちりこみました〔たいこもち〕是ハありがてへおいらんそのお盃はわたくしがおすけ申ませうなんでも華のはいるといふがおもしろい　モウよくばつた事をいふやつさ（アハヽ〳〵トわらふ）もしおいらん〳〵といふのもけふあすばかりあしたハよめのはなざかりさぞ角左衛門さんがまちかね山ではなのした　　をながくしてまつていさつしやるだろふこらほどなお目出たになぜおいらんはうかつしやらねへのだへ〔清川〕モウごしよふでざんすからめでたい〳〵といつておくんなんすなこんなかなしいつらいいやな事はおざんせん〔清川母〕またそのよふなもつたいない事をなんのかなしひつらいとがあるものかあふかたほうばい衆にわかれるが

かなしくつて泣のかと思へばそうでもなくいわしておけば我まゝいつぱい是からはそなたのためだからちつといわねばなりませぬさだめし酒によつていふとおもおふがわしハちつとも酔ハしませぬ（トいへどもよつぽどよい〳〵）［清］かゝさんなんの事でおざんす　がいぶんがわるふおざんすかんにんしておくんなんし　［はゝ］イヤ〳〵かんにんしませぬ（トひざたてなおしすりよれば一座げいしやたいこもち）

［げい者］もしへおふくろさんなんの事でござりますそれでハわたくしどもゝこまります［はゝ］もふ〳〵おめへがたハかまつておくんなさるな　どふで一ト通りハいつてきかせねばなりませぬまづおめへがたをよぶさへあるにヤレはなだのしゆう義だのとむだ事ばかりそんな栄よふをするはだれがおかげだミんな角左衛門さんだよ　わしが事ハちつとも思わずに此間うちもなんといつた　かゝさんおまへが勝れなんせんと角左衛門さんにはなしておいたからねだりごとにいつてハわるいとこらほど丈ぶなものを病人にしてたいてへ不自由をさせた事でハない是からハ御いん居様になつて扶持でももらつて孝〳〵にしてもらわにやなりませぬほんにそなたハ仕合ものだぞよあしたからハ四もん五文のおはぐろの世話もなく香の物のかいがゝり櫛かうがいのあげさげをのがるゝばかりもたいてへ有がたい事でハないさぞこのよふな事をいわれるハせつなかろふいわれるがいやならはやく支度をしていきやサアどふだ〳〵（トひきたてるその手にすがりむせぶなミだのかほふり上ゲ）［清］もしへかゝさんおまへあんまりで

おざんすとく心ずくでこうゆふわけになりんしたからさら〳〵角左衛門さんのところへいくがいやでハおざんせんがどふもあわねばならぬ人がおざんすからたとへどのよふに人中で恥をかけばとていといんせんたんとはじをおかゝせなんし 〔はゝ〕なんだあいたい人があるその逢たい人はついに壹度錢一ツ本くれた事のねへあの文七か文七ハおけあの一座にも逢せる事ハなりませぬ 〔清〕ならぬとおつせへしてもあわぬ内ハたとへおまへの氣に背きよしや勘當うければとてしかたがおざんせんどふぞあわしてやつておくんなんし（ト思ひきつていひはなせばなをもはらだつあらきのはゝ）〔はゝ〕かんどふが請たかろふ緣がきつて貰いたからふがそうハ成ませぬ七ツのとしからもらつて十五まで面倒ミてそだてたもすへにハ樂なしよふばつかり今まで共よふにうつくしく成て清川さんのおいらんのといわれるようにハだがした獨でもそだつたよふに恩しらず義理しらずおや子のゑんがきりたくば七ツのとしから十五までそだてた養育金一年十兩づゝにしても九十兩共金出したらゑんを切ツてやりませう角左衛門さんの所へいつたらしらぬ事今の身でハほんに九百の錢でも出來ハしめへ（ト黒八丈のまへ帯をちからをいれてしめてハすりよりきせるでたゝミをたゝきたて古人勘左衛門あたり何ばゞあとかめうじのあるしろものなり清川ハうつむきてしちういらへわなかりしが　ひまどろほどはちも多しとよふ〳〵しあんを定メ顏ふり上ゲ）〔清〕成ほどわたしがわるふおざんすからどふぞかんにんしてなんにもいわずにゐておくんなんしすぐに角左

衛門さんの所へまゐりんす［はヽ］そんならちつともはやくしたくをしやヲヽ夫でこそかう〳〵ものだ其なき顔でハいかれまい化粧でもしなおしておせわながらおかみさん髷をもなをしてやつておくんなせへ（トこと葉までさそくになをるごふよくもの）［女房］二階の三疊へ鏡臺をだしておきましたからかほでもなおしたり成ほど其ひやうごでもすむまいからよくハなくとも勝山にわたしがなをしてあげませうきよ舟さんもふそのよふにながずともいつしよに二かいへいつておいらんのしたくを手つだつてあげなせへ［清］きよふねさんおまへにはたんとはなしておく事がおざんすからわたしといつしよにサア來なんし（ト手をとる人もとられる身も　おさへゐなみだにはなされぬ右と左の袖たもと）［清］もしへそんならそこにきげんをなをして待てゐておくんなんし　おまへがたもにぎやかにどふぞさわいでおくんなんし（トきよ川きよ舟女房おうき三人ともにかいへあがる）△（はや入相のかねに花やちゐらんきよ川ハ三ぜうのきやうだいにむかい）［清］おうきさん眉毛をとつてこいといひなんしたから剃刀をかしておくんなんし［う］ほんにそふいわしつた其引だしにありますからわたしがすつてあげませう［清］爰にあるならマア今でなくともよふおざんす［う］成ほどおしいもんでござりますからそんなら夫ハのちの事さ［清］きよふねさんおまへばかりハほかならず眞實の兄弟もおよばぬしんゝになつてだいじにしておくんなんしたが今別れてまたいつお目にかゝりんす事やらわるくしたら一生あわれんよふになるまひものでもおざん

せんずいぶん煩らわんよふにして旦那さんをだいじにして傍輩衆ににくまれぬよふにしなんしだんだんおまへも客人がふへて座鋪でももつよふになりなんすだろふがかならずきやく人がたんとあればとつて高慢な顔をしなんすなわたしがふだんいふとをりだからいやなきやくほどしんぼうしてつとめなんしへ地まわりのものがなんともふしんしてもからかいなんすなわるい評判をうけんすにへ〔きよ舟〕共よふにいつておくんなんすほどわたくしハどふもおいらんのそばをはなれるハいやでおざんすあしたからわどふしておりんせうなにをするにもたのしミがおざんせん〔清〕わたしが小袖ハミんなおいてまいりんすからわたしだとおもつて着ておくんなんし〔う〕おまへさんがたが共よふになかつしやるからどふもわたしまでがかなしくつて貰い泪で此やうに袖をぬらしましたおいらん今のうち髷をなをしてあげませうか（ト立あがりうしろへ廻る折からとなりのわすやにくま吉がどくぎんのめりやす）めりやすへ黒かミのむすぼれ〆たるおもひにわとけて寐た夜のまくらとてひとりぬる夜の仇まくら〔清〕このかり金の紋をミるにつけてもあいとふおざんす　めりへそでハかたしくつまじやといふて〔清〕もしも文さんが來なんしたらやつぱりおまへがでなんしてけふのわけをくわしくはなしておくんなんしどふで此世でハお目にかゝりんす事もなりんすめへ〔きよ舟〕なんとおつせへすにへ〔う〕までばかんろのひよりとやらまたそんなあわれらしい事を〔清〕なさぬなかほど義理のあるかゝさんにハ氣をもませ恩をうけたる

角左衛門さんにぎりをかき人なかでハはじをかきこれといふのも心からミんな文さんゆへ　めりへぐちな女子のこゝろもしらでしんとふけたる鐘の音〔清〕なまなかきのふきなんしてすへハこうしてどふしてとおつせへしたが今おもへばあのはなしがまよひのたねになりんしたほんにこれが悪縁でおざんしようどふぞなるなら顔ばかりでもミとふおざんす　めりへゆふべの夢のけさ覚てゆかしなつかしやるせなやつもるとしらで積るしら雪（となりのきやくやん〳〵）〔清〕おうきさんさぞ角左衛門さんの事でハ腹がたちなんしたであろふ堪忍しておくんなんし〔う〕なにおいらんそんな心づかひ文さんハぜんたいわたしどものお客でたいてへおせわになつた事でハござりませんがちつと譯があつて今でハ下から送られていかつしやるがとんだわけのいひお方でおり〳〵こつちらへもおよりなさいます　そのぶんさんとおいらんだものふどふしてかへつて今でハおきのどくでなりませんこふ言事までになるまいと思つてすゝめてお送りもふしましたがどふもいまでハおきのどくで成ません〔清〕また手間どつてかゝさんに氣をもませてハわるふおざんすからしたに着がへが來ておりんすからよこしておくんなんし　きよふねさんハかゝさんをもちつとだましておいておくんなんし（トたちかねる二人をむりにしたへおろし清川ハかくごのしたくかねてきゝおくきやうだいの引だしよりかミそりとりだしすでに自害とミへければよふす　うさんとたちぎく　ふたりころしハせじととりつき　すがれば）〔清〕どふぞはなしてころしておく

んなんし 二人 いや〳〵ならぬ〳〵（のものおとにきゝつけかけ来るきよ川がはゝ） はゝ われを殺してよいものか角左衛門さんのところへ行がいやならほかへ賣る　身うけがすめばこつちのしろもの（トかミそり取てなげいだしその手をすぐにしばりあげなき入る口へ手ぬぐひのさるぐつわとめるふたりをつきのけしたへおろしてよふいのかごへ引のせて） はゝ かごの衆いそいでたのミます（トおしいだす） かご ほうぐミよしかがつてんと（はやかきいだす大もんぐちそのぎのげいしやたいこ持もらいなミだのちりからすた〳〵となりのさわぎのときも時ともにひかれておくりさんちう）三味せんツウンテチン〳〵〳〵〳〵

其　貳

華・酔蝶ハ入相のかねに酔をさましゆふべに酔仲の丁の酒ハ心こゝに持こしてあとひきとなり一樹のやどりハ盧生が夢の五十けん道さめ〴〵なげく清川がなをすかし間もなき衣紋坂なミだをつゝミ八町もそでなきかたへひかれ行その身ハ魚にもあらず網にもあらず四ツ手のかごの中田甫（マヽ）かゝるおりからうしろより田の面にのこる雁金ぐミばつととび出す 庄九郎 そのかごまて（トたちあがる） にゝ たれだとおもつたらしミつたれ組の庄九郎だなわいらに清川をわたしていひものかこれかごの衆かまわずにやつてくだせへ 庄死におくれのよい〳〵ばゝァめ　いのちがおしくばきよ川をわたせかごのやつらもそ

のとをりじやまひろぐと此世のいとまをとらせるぞ（ト仁王だちにさきぼうおさへうごかさず）［かご］むまい仕事のこのしろものまきあげられてなるものかじやまひろがずとそこのひてとふせ［庄］きよ川をわたせ［かご］そことふせ［庄］イヤわたせ［かご］とふせ（トたち廻りありかごのもの二人ともいきづへとつてふりまわし）［三人］どつこい（これをきつかけに寺／＼のつとめのなりものちやん／＼ぽく／＼／＼かミぎぬたのつけひやうしかた／＼／＼）［はゝ］そふだ／＼このやろうを思入れにたゝいてやつてくだせへ手傳てへがあしがふるへて氣がせいてどふもならぬおのれくひついてやりたいが齒ハなしせめてあしでもひつかこう（ト庄九郎にしがミつくその手を取てすてんどうはゝハたんぼへまつさかさまこゝちよくこそ見へにけり二人のものに庄九郎うつてかゝればひつぱづししたをはらへばひらりととびこの所しばらくたてあれど芝居にまゝ有かたゆへこゝにりやくす△庄九郎ハ二人のものをよふ／＼おひちらしかごのうちのきよ川がいましめのこしおびをときさるぐつわの手ぬぐひをとれば）［淸］庄九郎さんいひ處へ來ておくんなんしたどふなる事かといつそ怖ふおざんした［庄］モウこわい事ハねへこの間にはやくにげるがいちの手さあノ＼（トせきたつればきよ川ハうれしさこわさこゝろハさきへいそげどもあしはかどらぬゆめのミちしんきつかれて持病のしやくむなさきへさしこんでうんと一とこへ聲たつれバ　文七ハ目をさまし）［文］コレ／＼どふした目をさまさねへか（トゆすぶれバきよ川ハ目をひらき）［淸］文さんでおざんすかうれしう

おざんす庄九郎さんハどふしなんした心がらとハいひながらかゝさんハさぞせつのふおざんせう（トまた目をねむりたわいなし）［文］なんだわからねへとをいふぜへまだろくに目がさめねへそうだ　これしつかりと目をさまさねへかこゝにぬるい茶があるから一口のんで氣をはつきりとするがいゝ（トいへどおこせど氣がつかればその茶を取て口うつし淸川がのどへとふれバほつといきをつきて）［淸］そんなら今までのハ夢でおざんしたかほんにこわいゆめでおざんした［文］どんなこわい夢をみたかしらねへがこれ脊中もむねもびつしよりとあせになつたしやくでもおこりハしねへか［淸］アイサいつそ積がゆめでハつよくおこりんしたが目がさめんしたらそのよふでもおざんせん思ふ事ハ夢に見るともふしんすがいやだ／＼とおもひんすほどどふしたわけかきうに角左衛門さんの所へいかねばならぬよふになつてぬしにあわぬうちハ行事ハいやだともふしんしたらアノぬしもしつていなんすわるいこゝろのかゝさんだからいつそ腹をたちなんしてもふ／＼あるとあられん外聞のわるい事をいひたてゝゑにやのみせでおろしなんしたから人のまへゑわどふで顔むけハならず主にもあわれず角左衛門さんの所へいくハいやなりいつその事しんでしまうがましだと思ひんしたから剃刀をだして死ふといたしんしたら［文］命がおしくなつたか［淸］マアおきゝなんしおうきさんときよふねさんがとめなんしてまあまでどふしてもころしわしねへといつそとめなんすさわぎをかゝさんがきゝつけて二かいへ上りなんして手

ぬぐひで口をしばつたりこし帯で手をしばつたりして無理やりにかごへのせてつれていきなんしたなかたんぼとやらへ参りんしたら其所に庄九郎さんがいなんしてかごのものをぶつたりたゝいたりしてさわぎなんしたらみんな逃てまいりんした　文　その跡で庄九郎に　　きめられたか　清　ばからしいそんないひ氣ぜんでハおざんせん此うちはやくにげろとおつせへすから逃よふと思ふほど一トあしもあるく事がなりんせんから積がおこりんした　文　夢はさかゆめといふ事があるからおふかた角左衛門のところへいくよふになろふから何も其やうにしやくをおこす事もねへ　清　ちよつと見やまだそのよふなことをおつせへすたとへ人なかでどのよふながいぶんのわるい事をいわれてもじつとしんぼういたしんしたもぬしにたつたひと目あつてから死ぬこゝろにおりんしたこらほどまでにおもひつめておりんすものをぬしをはなれて何がたのしみうれしくつて月日をおくつておられんせうさつしておくんなんし（トなみだながら　　文七もふさぎが來てだんまり）　文　夢ハ五ぞうのやまいとハいひながらそふいふわけになる事ハしれているなんぼ庄九郎がせうちしていてもゆめのよふにもいくまいしこれが日數の十日と十五日もある事ならまたほうのつけよふもあるめへもんでもねへがあしたハきまるてめへの身のうへこのよふなわけになるならあのよふにくろふをしてかけのかたをつけづともよかつたものを　き　アイサどふぞしていままでのよふによびもふしてへから庄九郎さんといひあわせて

ゆふべもらつた二十兩かけのかたがついたとおもへばそのかわりにだましたむくひかきうな身うけほかの客（きやく）ならしよふもありんすが角左衛門さんハぎりめ（あノ誤）るゑミやのきやく人ゆへこのそうだんをへんがいハならずおもふとをりにまいりんせんとかくごわいたしておりんすからふびんとおもつておくんなんし愚痴（ぐち）な事だがけふばかりが七ねんも八年もあるよふにしてほしうおざんす 文 それハおれとてもおなじ事うちのわるいうへゆふべからの此居（い）つゞけぎりあるおつたハたゝきだすやぶれかぶれの百ねん目いひあわせたきやうげんがむまくいかねへその時ハ手めへばかりをころしハしねへたとへ人をあやめよしやくびのざへなをるまでも一日なりと九尺二間のたなでもかりてそつてミるこゝろだ 清 うれしうおざんすそんならなんとおつせへすあのおつたさんをばおさりたんしたかへさぞやわたしが事をぎりしらずと思ひなんしたでおざんしやういつの頃でかおざんしたわざ／＼人をよこしておくんなんしたそのときの文がおざんすからのちにとつくりとミなんし 文 なにミずともいひさつた女房（にようぼう）にミれんハねへしたがなんといつてよこした 清 いろ／＼な事をいつてよこしなんしたがうらミらしい事ハすこしもなくなんぞふぢゆふな事があるならゑんりよなくいつてよこせ兄弟（きやうだい）のよふにおもつているどふぞなるならさくらのうちちよつとなりともあつてはなしたいといつてよこしなんしたが共後（そのゝち）へんじも上ゲずにおきんしたがミんなわたしゆへだとさぞうらミなんすでおざんしよう 文 成（なる）ほどおれも

三年そつてるうちまる壹年半ハこつちにばかりきがとられてあれにハさつぱりかまわなんだがついに一口やきもちらしい事もなくはやく手めへを身まゝにして一所にくらしてたがいにちからとなつてくらしたらうれしかろふとふだんいつていたがあれもけつこうすぎたべらぼうよそれだからおれもだすきハなかつたがおふくろがごふぎにかわいがつて子でも出來てはたがいにわるいどふでおれがよふなものにそつていてハためにならぬといんがをふくめておれがまへハとまりにやつたつらで里へやつたがそれがすぐにだんぎりよそれやこれやでどふでうちにやアどふも居られねへそのかくごでゆふべ出て來たがもつてへねへおふくろがさぞあんじてかへりをまつているだろふこのよふな子をもつといふのも〔清〕こんなわたしがした事でおざんすかんにんしておくんなんしへ（トまた二人ともふさぐ　きよ舟はれたやわかいものきたる）〔きよ舟〕おいらんモウおきなんしたかへ〔茶やわかいもの〕ぶんさんとんだげしなりよふだね〔文〕いゝ所へ來たそこに酒があるならよこしてくれねへか〔きよ舟〕今こんなもりけへにさけて参りんしたからちつとおまちなんしなんぞ來てからおあがんなんし〔文〕もふこせがはじまつたのいつ日がくれたかしらねへやつさいつもひだるがる市がでへぶおとなしいが茶めしでもとりにやつたか〔若イ者〕さつき山がたさんのおざしきでむま事がござりましたおまへさんをおよび申にまいりましたがきついもんでござりますおふたりながらいくらおこしもふしてもさつぱりさ〔清〕きよ舟さ

ん子どもわどふしたへそこらにいるならよこしておくんなんし [文]そしてみんなをよんで來てくんなせへこれさぬしハちよつといつておつるをよんで來てくれねへか [若]かしこまりました（トろうかへいでたちもどり）もしわるくバだれにいたしませうね [文]お楊がいゝ（茶や男いでゝゆく入かわつて市右衛門庄九郎きたる） [庄]どふだ／＼おきねへかごふぎによくねるぜ屏風をとつてしまわつしきよさん [清]庄さんもふ／＼とんだこわい夢をみんした [市]ゆめはもうぞうのわずらいだから用心しなせへ [文]もふしやれるぜあとの二まへのいろ男ハどふした [市]なんだか一日かいたりかゝれたりして　あのてへゝのよふなやつらがいまじぶん田町のほうからよくでるよ [庄]そりやァなんだ [市]かごのけいこをするやつらさ [庄]こいつはわからねへなんでもわるくハねへよふすだ一ばんしゆこうをつけてしやれほんにかゝれよふといふ色男がふたりできやしたきよさんどふいふもんだろふね [清]どふいふもんでおざんすかあふかたぬしもそのうちでおざんせう [庄]なにさそんなやくハつかねへつらさ [市]なんでもふたりがあめとなり　なつたからさしづめかミなりがごろつこうといふところだがけさつから地震のいりづめで天氣になりやした [庄]おきやァがれ（此庄九郎先のうちハ角左衛門がかミにてむれきばかりしたゆへいたつてできあしきところ　文七きよ川がためにむこうづらとミせいま又ミかたと成て身をすてゝする心いきをしりあいかたのもしく思ひま

んざらでなくいま迄わるくしたるをくやんで一通りよりかへつてよくする事まゝある事なり△おつるおきた千右衛門平兵衛あいかたミなく〳〵來る　五人一座にてハ一トくミでハちつとしがなし）[つる]おいらんさくばんハ文さんおながしかへ　[きた]どなたもおそろいなすつて　[庄]なんとのろかろふ　[市]いかさまそうでござりますとやらねへか（トゑもんおなをしながらすこしくびをふる）[つる]また市さん人のまねをして　[庄]これものか　（トかたのあたりですこしそり身にてたゝくまねをする）[つる]左よふさたんとまねをなさいまし（このうちにおきた三味せんのいとをかけるおつる大づゝミのかわをほうじゆびさきではぢきながら）[つる]文さんおいたゞきもふしませう　[文]いもせ山だからなげるぜへ（トさかづきをほうるさかづきふす）[つる]ヲツトふしました　[きた]わたくしがおこしてあげませう（トさかづきをとるあげしんつぐ一ッのんで千右衛門にさす）[千]このさかづきハかどちげへだ　[きた]そんならおつるさん（トさすこのうちおさだまりの大小いりからたいこちまでのうた一トくさりあり　ミなく〳〵やんや〳〵とほめる）[つる]これから市さんのぢあまりだ　[市]おれがこの子へ心いきのぢあまりをこしらへやした　[平]きゝてへの　[きた]市さんはやくおうたいなんし　[つる]サアどふだへ　[市]そのよふにせかれてハたまらねへせかれるといふハおいらが身のうへにハきんくだ　[千]わるもつてへをつけずとやらねへか[市]うたいやす（ト兩ほうのほうへ手をあてゝ）いたこ〽これさかきやるなしゝじやおしゝじやよい〳〵のごん七さんでござりやすあとで太郎兵衛が

きのどくだ［きた］とんだうぬぼれないたこでざんすねへ［市］どふもこの子がかいてならねへからあきらめるためにこしらへやした［そらごと］よしておくんなんしかく事ハぞんぢんせん［市］何しらねへ事があるものかおれをかいてあしたのそうざいへいれてミなせへだしがきくぜ［そらごと］かんにんしておくんなんしそんなけびぞうじやあおざんせん［市］ほんにしんぞうだのはやくおいらんにでもいんらんにでもなりなせへ客人(きやくじん)がつくぜへ［そらごと］ぞんじんせん又はじまつたたんとおしやべりなんし（トたちあがる）［市］チツトそうハならずのかばやきだ（トおさへるひやうしに盃の上にあるてうし横になる）［千］それいちこうぬしのひざへてうしが小べんなする［市］是(こゝ)ハたいへんだいなしぬらしたわるい所へおくぜ［つる］はやくおたちなんし［きた］それミなんしそら琴(こと)さんのばちが　あたりんした［千］ちつトそんな事もよかろふ　あんまりしやべるから［そらごと］ほんにいゝきミでおざんすねへ［市］なんと［そらごと］おざんせんといふ事さ（ミな〳〵わろうそのおりからあミやのむすこ京三郎あわたゞしくきたり）［京］庄さんとんだ事がござります　角左衛門さんがきさしつてすぐにくるといわつしやるからおいらんをおよびもふしてまいりましよふといつてとんでまいりました［庄］そいつハとんだ事だしかたがねへつれて來るがいゝ［きた］なに角左衛門さんが來なんしたとへ［文］たいへん〳〵こゝをあけずバなるめへ［庄］あいつがゆふべあしたまでしまつていつたからまつこゝハ出がたさんの所へひきとるがいゝ

「京」そんならどふぞそふなすつてくださへまし文さんどふもおきのどくでござります 「文」なにさ氣のどくな事もねへ家ぬしが來ちやアしかたがねへ 「庄」ぬしハはやくいかつせへいまあけておくから外にだれもきわしめへの 「京」どなたかおひとりしらぬお方がおいでなさへました 「庄」いよ／＼もつてむづかしい 「京」そんならおいらんはね田やさんおたのミもふします（トあしをはやめて出て行あとハミなし／＼そうが〻りりやうり茶やのす〻はきのごとしわかいものだいのものをはこぶげいしやさみせんばこをはこぶしよくらん硯ぶたをはこぶ酒のみハてふしをはこぶ）「きた」庄さんどふいたしんせうねへ 「庄」あんじなさるなどふかいこうわな 「市」たゞなに事もおくの一ト間で 「きた」たしかにあのこへハ角左衛門さん 「庄」ゝつけられてハいちだいじ 「文」そんならとなりのあき部やから 「市」そこらハおれがつてん（トふつとふきけすしよくだいのあかり はやいり來たる角左衛門）「角」これハくらいだいぶとりちらかつておるわへ そのあかりをこれへよこしやれ（トてうちんのあかりではしがミをひろい） なんだうわがきハ（トよまんとするを）「きよ舟」およこしなんし（トとろ）「角」たしかに文七 「茶や男」なむさんしまつた（トばつさりてうちんをおとす折からおもてのひやうし木カチ／＼／＼）「角」もふひけだそふだ

鳥渡申上候未ひけ四ッにも御座候儘
あけ迄ハよほどのしやれも御ざ候へ共
清川ハ文七が居つゞけにてとの外
つかれほか一チ座のものもよわりの
やうすにミへますれば先當年ハこれ
きりに仕又來春くわしくしたて御覽
に入レ可申候以上

わたくしゟ

いづれも様

跋

普賢菩薩の化したる江口の君も清川が千手観音の手をもつて書ときハやハか劣まじ紺屋の獨息子文七ハ愛染明王に愛敬を受て通ふ佛神〆て三まいの竹輿に乗りて大道を行といへども或ハふ信心あるひハふ心中のこゝろあらば必罪とともに辱をあたへらるべし此道を守りて信心おこたらぬ輩ハ旭如來も九郎助稲荷もあんまりもめる御神託も有まじとおもへバ後編さきにたゝず又作やつがれふんでをとる

傾城眞之心

全

自序

今不侫曾傾城眞之心の風流を著蓋鼻紙入の底を掃て以一部の書述是大通初會に不遊南一の工面に何親讓之重代を殺哉早⊕の粋と成て吸付たばこの味ひを知らば異見折檻の野暮なるに不構忽馴染之深間の切なるを樂夜來魂膽深金落知是似山之知非所結句粋ほど指の輪の洒りやすきは此道にあらず哉然者粋と不粋の中の町せかれた客(マヽ)を揚町二人一所に角町と京まち兼て見勢先にたがひに文を江戸町におもひに暮て伏見町其戀中の色即是空朱子性善の教にあらずして何嗚呼若水を硯に汲惠方に向てしるす

第一回
為レ親身賣夕霧妓名轟ニ廓中一

其二回
藤伊遊レ樓忘レ歸節妓諫ニ夕霧一

其三回
安波大盡夕霧匈旬叫ニ娼家一

其四回
伊請ニ勘當一夕情至遂契ニ同穴一

意學丸呑 傾城眞之心

第一回

夫儒道に三墳八索より九經三史まで皆孝の一字を出ス佛門の八万の聖教五百の戒法皆孝の一字を說然りといへど（假名マヽ）此界に生往て守る事難奈人情禁好のなき者ハなし鳥獸に至るまで好める道には一命もかる〳〵べし武士は義につのる時命露よりもろし好色の人ハ親をすて居住をこれが爲に失ふて二世の契りに一日劔の死期（マヽ）をいさむ花の春の鶯ハ障子ごしの人におどろかぬもおのが好める梅の香にしたふてからき命を籠の內にくらす紅葉に通ふ鹿ハ獵人の營を養ふて市中にかばねをさらす鼠の油揚にハ人を迷す野狐も自ラ命を失ふ魚ハ餌（マヽ）あるを知て針あるをしらず人は迷ひの餌に掛りて一生をおくる是身を養ふ爲にもあらず後悔不レ立レ前流水不レ還レ源とハ宜かな夕部の妓代朝にかへる叓を聞ずかゝれてつのり惚られて往ぬあり眞にほれて見る占は十二文餘錢を氣張色男にあふ夜の傾城はひとしほ悅氣としるたこにふさぐ年明前客上止ふてる戀の意路ふざんの昔にあらね共夕べの霜朝の雨一夜の情に百夜のつらさをいとはず惚たといへば不男にも情立るハ廓の習ひもてたるをしんせつふられたを惡ずとは

京橋のしれ者がいひしにあらずや中の町の夕げしきにハ内の張合を忘むなしく一夜をこゝにあかすけにや北新此所に有て萬客こゝに廓の賑ひ都太夫が美音河東の一曲富本萩江が音聲にはおいらん買の心をすまし素見の日和下駄はむつ言の寐耳にひゞく石部金吉もうつゝをぬかす功言令色も所がらとて日に立ぬもおかしひけいの拍子木は傾城の心を悦バし素見のむねをおどろかすあすの御迎ひはといふ念あればいつ来なんすの捨句あり櫻につなぐ駒下駄の音ハ天にひゞきおいらんの頭は鼈甲揃の清玄の笠の如く禿の兩てんの花かんざしは吉野の櫻にことならず見上れバ萬客寶盡見下せば素一本夜中の雨にむねを轟す上下陰樂ハおなじ孝行にうられ不孝に請出されとハ川柳點の秀句甚宜也こゝに倡家軒を並べし中に多人にあふぎやの内こそいとゞ賑ハへり（こゝに扇屋夕ぎりの昔をたづねるに川崎の邊小泉といふ所にて始めの名ハおふんといひけり父ハ三年あまりの病氣にて枕もあげぬおき伏にたよりにおもふハ我子二人り弟の名與四郎とて今年十の上を二ッ三ッ日の内は舟方にやとハれ親姉をはごくみけるが中〳〵壹人りの手業にてくらしがたく日ゝ夜ゝに心をいためいたりしがしだひにおもる父の病氣おふんも日夜おこたりなくかんがくも手をつくしあそこのきとうこゝの加持良薬さらにしるしもなく今ハせんかたなく〳〵もしるべのかたをたのみ見て我身を賣て父の病氣のたすけにもと親おとふとにハ咄もなく其身ハ知るべの方へ行ぬかくして與四郎ハ今日も舟方にやとハれかへりしが）父 おふんか〳〵 與 イヽへわたくしで御座ります 父 與四郎か待兼たそこの

藥を吞せてくれろアノおゐんハいつになひけふハどこへいつたやら［興］姉さんハいつでましたへ［父］盡じぶんからゐなひいつになひ事とおもへば／＼くろうになりもしや二人りに壹人りゐないければいしやの藥も加持きとうもたよりにおもふハ子供事（ヲノ誤カ）（神ならぬ身のぜひもなや）［興］（おんじながらも）そんなにくよ／＼とおもハずともはやく病氣さへよくなれバよふ御座ります姉さんも今にかへられませうと（とも／＼に力を付る）［父］ヲレガ病氣ゆへに舟も三ぞうといふもの賣はらひ今はそれゆへ賃日雇親のいんぐわが子とやらにと世上のたとへも今目前さぞさむかろふつめたかろふかんにんしてくれ我ためにハ氏神同前子とハおもはぬ（トなミだはら／＼と老のくりごとせにしミ／＼）［興］もつたひなひ子が親な大事にいたしますがなんのめづらしひ事が御座りませう［父］ソレそふやさしくいふほど猶かわいらしくわつか十二か十三でおれを親とおもへばこそ大切にしてくれる（トとゞめかねたるふぜひ也）［興］とゝさんおひへなさりましたら又わるふ御座りませふぞへおまひさんがそのやうにおなきなさるといとゞたよりなひわたくしかゝさんハなしおまへ壹人りたよりにあねさんとわたくしよひもわるひも一所にゐらばとあさ夕神佛をいのります（ト子供にまれなることばのはし　いとゞあはれなましにけり）［父］アヽやくにもたゝぬ事を思ひだして手めへにまでなかせた千べん万べんいつたとてかへらぬ事かゝが今年で十一年跡てめゑをうむとけつうんと云て血の道がのぼりはかなひわかれ姉がてうど六ツの年てまへ

ハさとにやり姉と二人りできのふけふトおもひしがはや十年の月日の下三年已前より此病氣いつかうきく〳〵した春を見る事だやらとおもへバ〳〵つらゐ月日を床の内におくる事だ[與]（しどう涙にくれけれどもさとられなばあしかりなんと）わらひながら　御あんじなさひますなおしつけ又よひ事も御座りませう御まくらが高ければひくゝいたしてあげませう（トなに心なく立よるあんどんのかげ姉の手跡で親の名のはつと心に五寸くぎうたるゝおもひ　れなたる親）[與]モシ御あぶなふ御座ります　（ト立よる所にいぜんのふミ）父ハとつて見　なに〳〵おとつ様ゑんよりとよみくだしてミれば

返〳〵御身を大せつになされ下されかし是のミくろうにいたし候あら〳〵めもうくし

一ふでもふし殘しり〻さて〳〵たゞ今までの御世話御禮もふそふよふも御座なく候わたくし事も御まへ様のそばを少しにてもはなれ候へば御ふじゆふがちとおもひ候へども與四郎手業にてハ中〳〵まいりかね候間わたくし身のしろの金子にて御藥其外御とゝのひなされヒ下かしまた與四郎もわかき事に候へばこれのミくろうに候又〳〵申あげ候なにとぞ御まへ様もびやうきよく候はゞわたくしかたまで御たづね下されかし月日のたつははやくと

よみもおわらず[父](わっと涙に)コレ與四郎われハさだめしいつた所を知ているであろう早くつれてこひコレ〱なひていてハしれぬどこだ〱ト(すでに病るのとこなたゝんとす與四郎あハておしとめ)[與]マア御あぶなう御座りますなんのわたくしが知てハこふまではさせハせぬに仕様もよふもはなしハなし姉さんにはなれて片時もいられませうかと親子手に手をとり合てなくありさまいかなるむくるとなげく親(おりふし遠路の鐘いとしん〱ときこへ)

其(マヽ)二回

陀羅尼藏ハ是六波羅密經の眞言にして三世の諸佛の法藏を五藏に分給ひ極惡人の爲に說玉ふなり速に涅槃安樂法身を證する事うたがひなし色即是空と聞時は自他平等にへだてなし三界猶比(マヽ)火宅と說給ひしも宜哉一休の哥に世の中ハ心のほどにたのしめよ佛になりしありさまを見よとハ莊周性惡朱子性善の裏表韓雲孟龍のちかひも花にあらし鯨に鯱まゝにならぬハト戲哥も理なるかな(こゝにおゑんハ知るべの方をたのみ身代金五十兩にうり其金ハ父におくりすぐに我身ハかごにのり北國さしていそぎ行心ぞおもひやられたりほどなく內に入ぬれば家內のよろこび內徒のにぎハひ千兩箱の玉とよろこびぬおゑんハ父の病氣をあんじ二三日もしよくにもすゝまずいたりしがかくてハはてじと內のてい主なひしやうよりとりたつてつゐ

に中三のくらひになりぬ其容顔うるハしくかほにてりそふもみぢ葉の一枚おりていへづとにとおもはぬ人もなかりけり名も夕ぎりの夕まぐれこゝにむれくる大じんありなにはに名高き伊左衛門たいこ三人引つれ吉田やの内に入ぬれば てい主）［喜左衛門］コレハよふこそまづ／＼みな様トそうにたつ（マヽ）［伊左］此間堺町でミかけたつけ どこへいつた［喜左］ハイ芝居へさそハれました［平］モシ喜左衛門様此間扇屋へつきだしが出たといふひやうばんが御座りましたがどのよふな御子で御座りますへト［喜左］さればさ其御子ともふしまするハ親のために我身を沈たとの咄うけ給りなミだがこぼれますきりようといひけいといひ貌姿のやさしさ生た辨天様を見るよふで御座ります（トはなす内いろ／＼さけ肴出る此うちげいしやつま太夫里長きたりべン／＼と引出す平三ハなにがなしやれをひろうざしきのていいとはへ／＼としてにぎやかなり）［伊左］此盃ハ平三に一ツさゝそふ［平］コレハ御見立にあづかりましたト盃をとる［女］つぐ［平］おつと御座りますモシ［女］（一ツおかあがりなんしな）（マヽ）［平］唯今二丁めへ参りましてゝうじやの御ざしきでいかひ事たべよひましたそれに兵庫やの御いんきよ様へ参りましたら親ひがあるとて又たべました［妻］どうでも平こうだぜ［平］旦那ひとつけんじませふ［伊左］こいつハおさへよふ［平］そんなら里長さん御あいだ［里］そんなら一けんまいらふ［ミな／＼］よかろう／＼［平］ごうさい［里］むで［里］どふだ／＼吞ざあなるまい［平］（よし／＼とぐつとのむ）［妻］おそろしい／＼（とゞどふいふひようりにかはなしやミてこんどのつきだ

しタぎりを伊左衛門買ふつもりになりぬ此所にてチャン〳〵とひやうしまくにて夕霧のざしきのていとかはる）

夕ぎり（小ぎくの鼻紙にて茶をほうじながら）コレそめはや其琴をそこへ立かけておいて花いけの水をかいや そめ アイ引もしおいらんエ　アノ琴の糸を一すじおくんなんし 夕ぎり なんにする そめ アノおもてにいんす犬をしばりとふ御座りますからさ 夕 犬にちかづきがおゝいから此間のよふにくひつかれなんすモウ犬とねんごろにしなんすなよ そめ それでもさきからくるいすもの ト（あどなきことばも里のならゐなり）（おりふしろうかをかけてきながら） いそぶね ふしやれだヨウ 夕（なんざんすへしづかにしなんし） いそ それでもアノ客じんはきなんすたびにじようだんをしなんすから今からかつてつかわしんしたノサもしへおいらんへもふしんす八汐さんがおまひさんの此間御かきなんした御扇子をどうぞおくんなんしトサ 夕 そこの引出にありんすから出しておくんなんし いそ おいらんこれで御座りますかへ 夕 アイそして八汐さんにちつとあそびに御出なんしといつておくんなんし いそ アイ引 夕 しげじやそこの障子を立や（ト机にもたれて源氏物がたりをよんで居るいつたひ夕ぎりがざしきのよふす雪舟が畫書たる山水のかけ物に一角の花いけ其外哥書たんす香道具茶の湯の数〳〵風流をつくす夜具ハゐそのにしきの三ツぶとん二ツまくらに一ツよぎもれてふきこむ小夜あらしにあんどんの火きへければ そめは ハあわてはしりより火鉢の火をうつせしが　夕霧ハ氣にかゝる父のびやうき） 夕 この間も文をたび〳〵出しんし

たにへんじのないハもしや病氣がおもりハせぬか弟壹人りでさぞなんぎするであろう戀しの我父ゆかしの弟とおもハずなミだ（はら〳〵と顔へかゝれば）ばんしん此梅もしへおいらんへ今あんどうの火がきへんしたがそのよふにかなしうありんすかへ　夕なんの火のきへたのハかなしひ事バありんせんがねわたしが一人りの親が九死一生もしあのあんどふの火のよふにきへたらとそれゆへなミだをこぼしんしたのさそれに此あいだはゆめミバわるし度ミ文を出しんすが一度もへんじのこぬハもしや〳〵とおもひすぐしてミんすといつそ心ぼそふありんす　此梅おいらんにもにやひやせんなんのたれしもあんじんすけれどあんじたとつておとつさんの病ぎがよくなりんすかへそれよりおとつさんをくるわへ引とりなんしてかんがくしなんすがよふありんす　夕かねてそふおもひんすが是ぞと思ふ客しゆもなしいつそくろうでありんす　此梅そんなにくよ〳〵おもひなんしてわづらつ　おくんなんすなヱ　夕はんにおめへがた迄そんなにくろうにしておくんなんすからそふおもふめへとおもひんすがつひおもひ出しんす世話になるのを姉といひうきをかたるを妹とおもふてくらすつとめの身とかなんとかいひんす淨留理本にあるとをりでありんす　此梅じせつがきいしたら又ゐゝ事もありんせうモシおいらん髮がみだれてありんすなでつけてあげんせう　（夕かゞみにむかひなにかしあんしながら）さだまらぬハ人の身でありんす人樽を逆にしてありんす井戸を廣ひとおもつてゐんした井の内の蛙今こふなりんしてつら

ゐつとめといひながらミんながいたらぬわつちでもたよりとおもつてくんなすからそれを樂ミに日をおくりんすつとめする身ハ片時もたのしミなくてハつとまらぬと重井筒にあるとをりでありんす夜每にかわるまくらの數いやもつらひもかなしひも親の爲でありんす 此梅 おいらんのおつせへす通りでありんすたれしもミんな親の爲でありんすかならず／＼くよ／＼と思ひなんすなへマタゐゝ客じんでもつきんしたらトいさむる此梅ふさぐ夕ぎり（ざしきもひつそとしづまり心のほそきとふすミのいとゞおもひハなをくらくそらにしぐるゝ袖のおめかの吉田や喜左エ門ハ伊左エ門だう／＼にてたいこ二三人つれ夕ぎりのざしきへとなりければ今までひつそとしたざしきも急に（マヽ）ざゝめきわたりなにがな夕ぎりが氣をとらんとたいこまつしや口ゝに） 平 もしおいらんエわたくしが烏渡茶番狂言をおめにかけませう ミな／＼ よかろう／＼（是より茶ばんけうげんはじまるやらときうつりひけのひやうしぎカチ／＼ミな／＼いとまごひしてこそかへりぬ夕ぎりも此夜ハうさをはらしぬ跡ハたがひ　　） 夕 もしへ御休ミなんせんかへマア羽をりをおとんなんしぬしハいつそきうくつだねへ 伊 たばこの火がきへたそうだ 夕（チヨン／＼と手をうつと） そめ（きたる） 夕 そこの火をこれいいけやそして花町さんにわつちがいひんすどうぞ此間のしやくの藥をおくんなんしといつてもらつてきてくりやそしてことばをてへねへにいわふヨ そめ （アイ引と出て行） 伊 積のくすりならこゝにあるからト（くすりたとふより出す） 夕 藥をもらいんすとゐん

がきれんすとさ 伊 きれたほうがよかろうじやアあるめへかおいらのよふなものにハ 夕 ぬしやわつちのよふなものハいやでありんせうそれだからきれてもよふ御座りませうがわつちハ ト(すこし顔あからむ) 伊 そりや外の人の事だろうおいらハそういはれるおぼひハなひ 夕 とてもわつちどもにはおよびもねへ事だトあきらめてゐんす 伊 それハわたしがいふ事サ御全せいの君たちだからおよびもねへ事だトこつちであきらめておりやすはじめてきてこんな事をいひんすもおかしらしいがおまひさんにまよひやした 夕 (はづかしそふなかほにて) おまへさんがうそにもそふいつておくんなんせばうれしい たよりのすくなひつとめの身長ィ年季の其内ハたとへ三年に一度でもかよつておくんなんし 伊 おまへさんハ東江流のかきてだ いなか者が初て此二階へあがつて壹人リ小便にいつたよふにまよひやすの 夕 そうおもひなんすればぜひもねへ事だが實にわたしもおまへさんのきなんす迄ハ此梅さんと二人リでふさいでいんしたけれど御まへさんのきておくんなんしてこつちハなんだかいつそうきく\/しんす 伊 ふさいでいたもミんなまぶの事だろう 夕 なんのひとの氣もしんなんせんで 伊 そしてなんでふさいでるたのだそれをきゝてへネヱ 夕 是ばかりハト(うつむいて居る) 伊 咄ねへトいつたのがおれがわるかつたおめへのかわるゝとおもふ男だものをどんな事があつたつてはなしもしめへ (おりふし) そめ モシおいらんエさつきの御藥をもつて參りんした 夕

（とつてぐつと呑）〔そめ〕さすりんせうかへ〔夕〕イヽヨいつてやすミや〔そめ〕（アイ引卜出て行）　夕ハ

モシエねなんしたかへ／＼いつそさミしくつてなりん(マヽ)モシエ／＼トゆりおこす〔伊〕わつちかへ〔夕〕おまへさんハつらゐおかたヾねへ〔伊〕どつちがつらゐやら〔夕〕なぜそのよふにうたぐりなんすへわつちが今はなしんせんから腹が立ゐんすかへそれだつてはかなひ咄をしんして跡で（卜斗りイヽ兼る）〔伊〕そりやおまへのまわり氣といふもんだ一夜　かはして百年の事を語るとやら咄てもみたら又うさのはれる事もあるもんさ〔夕〕そふいひなんすこゝろにほだされてはなしんせうわたしが親が九死一生弟が十二か十三で親とわたしをはごくミんすけれどなか／＼弟の手わざ一ツにてハくらされず日ゝ人參代にくしかんざしうりしろなしてもなか／＼つゞくよふもなく次第ニとゝさんの病氣はおもるなんとせんかたとほうにくれてゐんしたがふつと我身をうつてと知るべをたのミてこの身をうりんした其日から親をかんがくしんす者もなく弟の手一ツで晝ハかせぎにひまもなく夜ハさだめしねむい目にてかんがくをしんすだろうとおもへば／＼かなしくなりんすそれに此間文を出しんしたけれど返事ハこずもしもの事がありんしたらとそれでふさいでゐゝんしたのサ〔伊〕（しゞうだんまりにていたりしが）なる程喜左衞門所(マヽ)でちよつと聞てテモ孝心な者もあるものとふつとかつてみたくそれゆへに今のよふにきいたのサしかしあんまりあんじてわづらわぬよふにするがかんじんだア、おれまでかな

しくなつてきた［夕］おまへさんがそふいつておくんなんすほどなをおもひがましんす［伊］ちふなにもかもきかぬ／＼きくほどけつくなをかなしい　（明のかねコウ／＼／＼茶屋がむかひに目をさまし帯引〆て出にける（夕ぎりハなミだながらいつきておくんなんすへ）［伊］ぜひ／＼二三日中にこよふ［夕］かならずきなんしョ（茶屋がむかひのてうちんに先をてらさせあさがへりの客はしごをおりながら）

契情のまことを知らめほとゝぎす
　雲井はるかにそらなきぞする

［評］契情に實なしと難覺たやほもあり酒て通ふ放蕩ありせひてゆかず酒りて貢ず（マヽ）是を通トいふか妓も又しかりトハイヽナガラ惚れた身に成て見れば中／＼そふゆくものにあらず雨の夕部にかよひ雪のあしたにかへるをわする知者も面前に三尺の暗ありとハ宜なり昨日の美人も今日の白骨となる迷ひたまふな／＼／＼

其　三　回

凡人の力は我得たるほど／＼ならでハ働きがたし蝿の燈心辨慶の鐵の棒もその得たる所にかはる事あ

ろべからず廓に遊ぶ通人ハよく契情の心をうばふ事を得その契情の玉章を三筋の糸に弾なしてゆかりの月の一トふしぞかしされバこゝにふられた客の小言ありもてた客のしつぽりあり豈ふられた客を悪むべからずもてた客に不男あり近くハ通ふて此味を知り給へかし（こゝにあふぎやの二階にハたいこまつしやのにぎやかハあわ大盡の今日夕ぎりな根引とて居つゞけきやくの大さハぎ）〔大盡〕こふ夕ぎりちつとねよふでハあるまひか（トイエド夕ぎりハしらぬふりして居ル）〔盡〕モウ三味せんもひくなたいこもかいれ／＼〔みな／＼〕さよふならば御きげんよふ太夫さん御いとまいたしますと（みな／＼かへりぬ）〔盡〕コウおいらんこれほどおれがおもふのにちつとハおれをかわひがつてくれそなものだ　ほうしのねへゆうれいを見るよふにてめへにやァまよつてゐるぜそれにくるたびごとに積がいたゐの頭痛がするのといつきてミてもいゝ顔をミせた事ハネヱこういつちやァおかしらしいがおいらがおかミさんになるとてめへたちののぞみしだひこふいつてハをかしいがあちらむゐても金こちらむいても金さ〔夕〕そりやありがたふありんすがしかしいやな男にそふされてねかさりよふよりやつぱりするた男ともめんぶとんがよふありんせふョ　〔盡〕（ぐつとせしがはらをたてず）そふ思ふハくるわのならゐだがにげたりかくれたりしたものに始終そひとげたものハねへてめへせへとくしんをしてくれゝバてめへの親もひきとつておのれがかんがくしてやるおふといへ／＼（トいわるゝほどなないやになりとこふしあんもなかりしが）〔夕〕御しん

せつのところハしんでもわすれハしんせんがどふもわっちはいやでありんす［盡］コウてめへも子供じやアあるめへしおれが此ほどいふのが耳へへいらねか［夕］それでもいやでありんすものを［盡］（ぐつとのぼせ）てへがへにごたくをはけ此大盡サマがこふ言出してハぜひだいてねる　いやとぬかしやこふする（下手をふりあぐる所へばんしん此梅來る）［此］大盡さんなんでそのよふにおゐらんを手ごめにしなんて（すノ誤）［盡］をれがいふことをきかねへから［此］おまへさんのおつせんす事をおいらんがおもちいなんせんとてもそふハなりんせん　つとめの身でもすいた客人とすかねへ客人ハありうちでざんす［盡］ナニすいたのすかねへのと下手大工がこしらへた戸じりじやあるめへしそして手めへの名がをれが氣に入らねへハこけがうへ木を見やアしめへし此梅だのあの梅だのとをらが畑ニアそんなとうへんぼくハはへねへ［此］そのとうへんぼくがはへたらわたしにおくんなんし床の置物にしんす［盡］をき物にしたくば三日鹽だちをしておれが所へこい［此］譚だの茶だのをやめて綱太刀で拂ておくんなんし［盡］われがよふな口のたつしやなやつにやかまわねへこれ夕ぎり手めへの所へハ伊左衛門といふすかんぴんな客が來る共すかんぴんに心中を立ても親にかん當をうけ宿なしだハその宿無にほれていとしいのかわいゝのと堀ぬきの井戸がわをほめやしめいしおれサマがかふ言出してハあうんの仁王が猪の熊のかひた長でうちんをこんがらせいたかにもたせ久米ノ平内が羽織はかまで鬼子母神さんお祖師さんが天竺

の羅漢をたのんでへんだんうけん合掌しても抱てねゝうち(マヽ)ハ合てんしねいそれがいやなら身うけをする返事が聞てい(トいはれてなんと夕ぎりハたゞうつむいて居ル)［此］鉢坊主が氣の違たよふにてんぢくのたなおろしをしなんすの　［盡］ナニぬかしあがる(トだん/\にこわ高に成ゆへみな/\きゝつけ夕ぎりが座敷へ來る)　［みな/\］大盡さんなにか殊の外お顔付がわるひまづ/\仲の丁へ御入りヒ成ましておあがりなをしを(トすゝめられみな/\打つれ仲の丁へ出て行すでに其日大盡も我屋へ歸りぬ)○(こゝにふじやの伊左エ門ハ夕ぎりの噂きゝづてにもなりがたく通ひしが次第につのる戀のいぢあるよの　　となりしが)　［夕］モシエこふたび/\來ておくんなんすハうれしいけれどもしや内のしゆびでもと是計りくらうになりんす　［伊］それハいゝがとつさんの病氣ハいゝかの　［夕］アイ此間手がみをだしんしたらおゝきによふありんすとさ　［伊］カノものをやつたか　［夕］アイつかわしんした　［伊］きのふてめへのはなしたきやくハどふしたろう　［夕］うぬぼれ計りいゝんしてにくゝつてなりんせんそしておまへさんのこふしけ/\きなんすをしつてゐゝんすから猶意路にかゝつてきんすハなきのふもぜひ/\わたしをうけ出さねへけりや男がたゝねへのなんのといやみばつかりゐゝんすハなもしそれがほんの事でありんしたらトそれがくらうでありんす　［伊］いゝわなそんな事をくろうにする事ハねへもしそふいふはなしやいになつたらおれも男だどうぞしてうけだそうわな必あんじねへがいゝ　［夕］おめへさんの御はなしなんした事ハど

ふなりんしたへ〔伊〕なんぶんおやぢがほんとうでねへからむつかしいおぢがいふ事にやせひ／＼こゝの跡をとらせねへけりやアならネエトいふ　どうなる事だやらねつからわからねへおれ斗りこふのぼせてきてもし手めへがこねへときにハおれハいきてハいられネエトいふもんだ〔夕〕まだうたぐりなん(マヽ)すへおめへさんこそいひなづけのおすわさんとやらにほれてゐなんすからそんな事をいつでわたしにきれよふとおもひなんすだろうが今わつちハおまへさんにきれるとくるわの内へ顔出しが出來んせんわつちがくろうもちつとハさつしておくんなんし〔伊〕みんなさつして居る〔夕〕そんならうたぐりハはれんしたかへおゝうれしい

其四回

虎穴に入らずんば何ぞ虎の子を得んとハ諺りなり信言美ならず美男ハ爲にならずとハ實なる哉（愛にふじやの伊左工門ハ夕ぎりに打こみ内ハおるすなりければおやのりつぷく一家の義理是非なくかんどうせしが母のみよか(マヽ)んかたより内證にて金子をおくりけれども中／＼つゞくよふもなく茶やのさかりに身をくるしめ今ハ夕ぎりにあふ手だてもなくたゞぼうぜんとして日をおくりぬ夕ぎりハかくともしらずたよりなければ新造に打向イ）〔夕〕此

ほど文をいくら出しんしてもたよりのないハもしやこゝろがはりでもしんしたかといつそくろうでありんす 此茶やのほうがふさがりなんしたからそれできにくうありんすから御出なんせんので御座りやせふ 夕吉田屋だとてゐくらありんすものかわづかなこつて御ざりんせふせんど大盡がいふ事にハかん當をうけなんしたとさせめて格子までもきておくんなんせばいゝに 此おあんじなんすな御出なんすで御座りんせふ 夕此あいだハもつたいねへ事だがおやのびやうきより結句伊左衛門さんのほうをたんとあんじんす 此ほれた身ほどつまりんせんものハありんせんそばでいけんでもしてくれんす人でもあると其人にものもいひたくも御座りんせんそして其男のふうがうつつてほうばい衆にわらわれんすヨあはれぬ時ハいつそくるわを夜にげにしんせふかとおもいゝんすものでありんす 夕くがひとハたがいつの世につけんしたやら行すへ永ひ年のうちハ死もしなれぬ主人のからだでありんす （ト此所夕ぎり大ふさぎにて新造へはなしなしていたりしがにくまれ子くにゝはびこるとかや阿波大盡夕ぎりを身うけせんとたいこ四五人引つれどや／＼来る とやかふする内酒さかな出ル） たいこ モシ旦那わたくしが此間よそでいゝ唱をきゝました ざならしに一ツはなしませふ 皆／＼よかろう／＼ たいこ こゝに長町へんの町人で御座りますが内も有德にくらし一人り息子に唯四郎と申ますが御座りましたが今年ちよふど十八内のていまどらをうたぬうちにそうおふナものがとおもつておりましたところにさいわい向

町に十六歳になります植木屋の娘きりやうといひしなかたちといひなにふそくハなし息子にもその咄をいたしたらさつそくとくしんでそう方が出來仲人ハ青木の某といふれつきとした商人日をゑらんでこんれいさせんと來十八日ときわめ共夜になれば仲人を始め一家のこらず集りければ内のてい主出てあいさつ終りなにか島臺のよふなもの　かやをのせて出しければみな／＼あきれかへり御てい主これハなんで御座りますといへばてい主ぬからぬ顔でハテしま臺でござります　客座敷を島臺といふこゝろハ　てい主ハテつるとかめがまひます　みな／＼　おそろしい／＼　たいこ　此間にしがしでうけ玉りましたがこれハおとしばなしでハ御座りませんほんとうでござります　さる二階でござりますが法印がなじんで參りましたがおりふしとなりざしきに三人一座が御座りましていたこをうたふやらこわいろをつかふやらどん／＼とさわぎますとその法印ハさわがしくつてねつかれませんから女郎にいふ事にハいま／＼しいやつらだ不動のかなしばりにしてやりたいもんだといひましたら女郎もうそと思ひしてミなんしといふからほうゐんやがてふところよりじゆずをとりだしなにかひもんをとなへと今まででさわひだとなり座敷もひつそとしづまりしゆへ法印のあい方あまりふしぎに思ひいつてよふすをミればかの三人さわひだまゝに立ずくみうへをしたへとそふどうするゆへしかた／＼の咄をしければさつそくそのほうゐんへわびごとしけれどもなか／＼とくしんせざるゆへ　てい主よふ／＼とわびごとし

ければほうゐんもぜひなくとくしんして水の印を結びけれバ三人ハゆめのさめたる心持にてその夜ハすぎぬ　はやしの〻めの明ケがらすに三人も歸らんとらうかへ出ければつゞゐて法印たちいでカノ三人にむかひゆうべのしゆこふはどふだといへば　三人きついもの〳〵サア〳〵一しよにけへりやせふとぐつと四人づれで出やしたとさ　みな〳〵あたらしい〳〵（此所大さわぎにてはへ〴〵としてにぎやかなりかく（マヽ）それに引かへて夕ぎりハいつぞやよりきぶんあしくひごとにおもろやまふのとこ　けふ身うけと聞よりもいとゞおもひにかきくれていきてハ思ふ男にぎりたゝずとそつと座敷（マヽ）ぬけいでゝしぬるかくごのおくざしきすこく〳〵はいる伊左工門かほを見るよりなつかしく）　夕ハ我身をとんとうちかけに引まどひ（マヽ）よせとんとれて）モウシ伊左衞門さんわしやわづらふてなアとふに死るはづなれどまいちどあわせてくださんす神佛の引合せなつかしうハなひかひな　伊（とつてつきのけ）よふすハのこらずみなきひたはかなひおれを見すてゝ阿波大盡に今日身うけされると郭中のひやうばんよふ今までだましおつたな親の異見も聞いれず一家の義理もうぬゆへにせけんへ顔出しもならぬよふに成り富士の山をはりぬきにするほど書出しがたまる大晦日さむいにつけつめたいにつけ持病のしやくハおこりハせぬかとあさ夕あんじてゐるわひやいおやのかんどうもみなうぬゆへそれをバしらずいひなづけのおすわハなおれが事を苦にやんで煩ふてゐるとのうわさ　けいせいにまことなしとハ廓の金言（ミろもなか〳〵けがらわしいととつてつきのける）

夕（泪もろともに）うらゝられたるかこちのはいろのならゐと云ながらそれハうわきな水あさぎあいそめたその日よりこんな為にしが唐にもあろか　伊くそをくらやあがれからにもどこにもうぬがよふなうそつきがあるものかうらみられたるかこちのハ色のならゐもすさまじいよしてくれろへ（トとんと後をむく）　夕わたしにうらみがあるならば又こなさんにもうらゝみがある度／＼文をあげんすけれど一向たへておとづれもなくそれゆへに此やまひやせおとろふたが目に見へぬか　伊コレてめへのころしもん何も聞あきたおれがくるだらうとおもつてふくしておゐたろふ　おきにしろモウ聞たくもなんともねへ今まで月頭に一まいづゝ取かハした起請をけへすからおれがのもけへせ　やせおとろへたが目にミへぬもすさまじい　夕せんやくとねりやくと針とあんまでよふ／＼と命つなひでたまさかにあふてこなんにあまよふと思ふこゝろをさかさまな　伊そんなさわり文句を聞ク耳ハもちませぬ　夕外にもしやといひがゝりそれがこふじて内方のしゆびハぶ首尾となりそめのかんどうの身とならのはやこのてがしわのふたりが中いとまごひさへなくばかりそれからたへておとづれなく又此夕ぎりをけいせいと思ふてかほんの女夫じやないかへなけふも身うけの相談ゆへおまいへ義理がたてたさにわしやしぬかくごにこれこのよふに死ぬかくごでゐるわひのふわら（ヽ）貞をミせてくださんせ　ト（伊左エ門がひざにうちふしてどつと斗りになきけれバ岩木にあらぬ伊ざへもん）　伊モウなくなあんなにいつたハ　おれがあ

やまりたとへ木挽の手にかゝつたとててめへトおれハきれるこつちやァねへ又しやくでもおこつちやアわりいなくな〳〵　夕そんならもふうたぐりハはれんしたかへ　伊それはそうと身うけのそうだんハ　夕なにしおふ阿波大盡今宵中みうけのそうだんマアどふしんせふねへ　伊今おふくろの所へそふいつてやつたら十や二十はよこしもせふがそれでハつまらねへはなしだトいつて外でくめんもできずアヽゐゝしあんがありそふなもんだ　夕なにをいふにも今夜かぎりでありんすアレあのさわぎがそうでありんす　盡夕ぎりがいぬがどけへいつた　てい主〳〵　てい主ハイ〳〵ちとたゞ今おしやくがいたゐとて　盡おれがくるたびごとにしやくがいたゐのかつけがおこつたのと今夜ハぜひ〳〵身うけせねばならぬソレ太夫が身のしろ三百兩外に入用二百兩たしかにうけとれ　主ハイ〳〵かしこまりましたさつそく明日太ゆふさんをあげますで御座りませふ　盡太夫をよべ〳〵　主ハイ〳〵かしこまりました（二人りハ是をきくよりも）　伊とてもみうけの金をわたし今夜中につれゆくよふすひとまつこゝをたちのくしあん（ト耳に口）　夕たとへ野のすへ山のおくまでもいつしよにつれてくださんせ　伊にぐる所ハこうらいばし　夕アイトれんじづたひに二階のこうし　夕伊すでに向へとびむめや心の細きほそ引もきれてぞおちる庭の面下にハいぜんの阿波大盡（ミかわす顔のかほとかほ）　伊ヤアおまへハ親人さまどふしてこゝへ（トあきれがほ）　親文四郎ヤイたわけめ　てまへのしよふが下手ゆへにつれそう女

までに苦をかけるわれが事を母ハあんじてないて斗りおれも義理ある子ゆへのやゝ此くるわへ入りこんでよふすを聞に孝といひ貞といひ孝貞まつたき此夕ぎり今夜身請金もわたしたれば天下はれての夫婦なるぞ　ト(聞て二人りハゆめみしこゝちかゝるおりから下女はしたやりてかむろに女房がきをひかゝつて喜ざへもん)モシ伊左衛門さん〳〵太夫さんの身うけのそうだんちがあきたいていうれしいこつちや御座りますまひホヽ〳〵〳〵〳〵ホこの喜左衛門がせい力でほんぷくさしてみせませふと　家内がいさむいきほひにつれて本ぶく　扇屋夕ぎり名を萬代の春の花ゝる人袖をつらねけり

風流傾城眞之心　終

自跋

苦労するそばで禿が春を待トハ宜なり契情の心の内ハ火の車にて引るゝよりも猶つらく朝にさす笄はゆふべに七ッ屋の藏に入と其つらさをつらさとせず一文がおはぐろを買て千金の客をふり寒夜に衣をぬひでまぶを呼廓のならひ當世おそるべしで御座りやすト爾云

大橋新訂 風俗畫 完

風流鶴岡艶話
遊子謬絲臭談

大礒新話

風俗通

松風亭主人著

○加琴

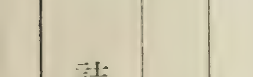
自序

夫大磯の豐饒成や。一剋の價に千金の角屋敷を投て。其氣位を見よかしは。實に艶土生の根性骨にして。妓女も是が爲には終身を謬つ。豈虛のミならんや。蓋紫婦の五十四帖の章譜に比して。不佞淫女の混章を持て。嘘か實情の腸を寸陽醉道の水に洗濯し。放蕩家の覽に呈す。些乎游花を教るに似たれども。彼宋王の好色の賦に。ひとしく色情を戒るの。捷徑ならん世界の君子。さつして見なせえしと。しかいふ

于時寛政庚申春

初仕舞のめでたき日

於松風亭　如琴誌



大磯新話 風俗通

松風亭如琴 著

第一回

高飛の鳥も美食に死し深淵の魚も芳餌に死すと宜哉潘安も妓女の眞實といふ大敵にハ千金にもかへがたき一命を正札附の安賣とでかけ未至迯一句の妙言に身代を棒にふり朝にハ伊丹池田の上著を身にまとふも樂きわまつて後の苦實や女色ハ斷骨の斧迷心の毒なぞと四角四面にハ出かける物のかたひやつほど迷安(マヽ)さハ此道にして千里の道も豈遠しとせんやなぜこんなにまよわせてくんなはる怨だよと泪ながらにだきしめられて見れバどんな癡夫でもたちまち首すじ元からぞつとしてお先眞闇有頂天となり己が家業も手につかずちうしん孝子の輩も是がためにハ終身謬(マヽ)されバむかしよりも色ハしあんの外に有とやらかしたるハ此所の場所ならずや愛欲ハ色よりはなはだしきハなしと天竺の親玉がいつぱいに中の字チならべても千人が千人アヽすてがたきハ此迷なり河東の遊子御ぞんじの戀と情の中裏ハ

うらや住るの小路にして妓家軒をつらねつゝかた時たへぬ人出入まハしかたの御ちうしんハ櫛の齒を挽にことならず駒下踏のおとハ雷に如く耳をつらぬきよせ場にかしましく茶屋の女ハ板をみてあとをつける有バつゝておく有千差万別の夫が中にも福嶋とたつ筆にかきし障子をたてしハ福嶋屋清兵衞とてなが家一ばんの口きゝの妓家なり　あさ飯すぎの内のよふすにて　とやについた［こども］（ト見へ しちりんでちうふくをせんじてのんでいるどびんをあけてすミをつぎ）［子ども］コウ吉どんやはばかりだがの是へちつと水をいれて下せへ　［居候］（惣どうこをみがいていたるが）ドレだしなせへと（水をどびんへいれてやる所へ）［お染］［おいく］（福しまの板がしら板わきといふこどもにて五日勘定にハいつもほめられるてやいおばアにゆかたをもたせ富本でかたるおしゆん傳兵衞花川戸の段といふあだなりにて八文字屋の湯からかへり來りしやうじをあけてはいり　にかいへあがりきやうだいチだし身じまへにかゝる所へ　お染がはゝきたり　うちへいるを見て）［居］おいでなさいやし　［母］是ハおはよふ御座りますだんな樣ハお宿かへ　［居］ハイ内におられます　［母］ヤレ御めんなさいましと（うちへあがるとおくよりていしゆ清兵衞（立出テカ）□□□）［清］ヲヽ是ハおふくろござつたかおやじどんおたつしやかの　［母］ハイこれも風からこつちへぢびやうの癪でらち明ません　［清］それハこまつたもんだのちつともマアいゝかの　［母］とかく毎日さしこミがつよくて　［清］そりやアさぞこゝらつさつしやるだろうとかく寒いのでいちべへ日だちがらちのあかねへものよどふぞ早

く能してへもんだてへ〳〵の心づかひじやァ有めへ 母ハイどふも手がござりませんからこまりきります 清時にまだ朝めしまへだろうしたくをしていかつせへ 母ありがたふござりますしたくをいたしてぢきにでゝまいりました 清ムヽそんなら二階へいつて はなさつせへ 母(二かいへ上る) 染ヲヤかゝさんかよくきなはつたの 母(そばにいるおいくにあいさつをする) 幾よく おいでな はつたの 染とつさんの氣色ハちつともいゝかへ 母どふもまだよくねへヨそれにつひてちつとはなしたい事が有ゆへあひにきました 染なんだへ(ミヽへ口をおしつけ何かはなす) 染わたひ此ごろハどふもつがふがわりいがどふするもんだとつさんのことだ物マア是を持ていきなはつてたりずバまたいつてよこしなはい(トくしばこの引出しより金ヲだしてわたす) 評曰(此お染ハ半九良といへるむすこかぶの色男とふかき中にてたがいにこつて外にハ男も女もなきとおもひせつこんであしをちかくかよいつめしが此色男もおやのまへがふしゆびにておぢの内へいそうろうの權八といふ物なれバ物事もふじよふ(マヽ)がちゆへミな此お染がやりくりのさんだんにてよぶ狂言にて はゝ親にわたしたる金もけふ半九良にわたさんといふ命から二ばんメのかねなり) 母ヲイ〳〵是お染やそなたハだいぶかほの色がわるいが心持でもわるいか 染なにどこもわるくハねへヨ 母そんならいゝが折〳〵ハ灸もすへてあまり酒をのまぬよふにしてわずらわぬよふにしたがいゝおゐら二人ハ外に子とてハなしそなたばかりがたよりでござるしたが老少不定さだまらぬ人の命

ひよつとそなたの身のうへに病煩があつてながい別になつて見やおるら二人ハろとうに迷わいのうかならず共に奉公大事したが（ママ）い〻ア丶此よふなつとめさせるもみな二親のつミの深いので御ざるおと〻しの大病の時ぜひなくそなたをつとめ奉公世界の人のいふ通り人参呑んで首く〻るとたとへのとふりせんかたつきてそなたの身を賣その金で藥代も拂命ハたすかつても何やかやのふてまハりそなたもいかい苦をしやるやらきついやつれよふそのくろうもミな二親ゆへ我子のためにハいかいくびかせはやうしんだら此くろうハさせまいにと　ほろりとこぼすちすじのなミだ）［染］わたいがことハ何もあんじなはる事ハねへからかならずくろうにしなはんなそれよりハとつさんが早くよくなんなはるよふにしてへ物だ　わたいはそれがてへ〳〵くろうじやアねへ　［母］そんならずいぶんたつしやでと（いとまごいなしてしたへおりる）［清］マアゆるりとはなしていかつせへ　［母］ハイさよふなら　［清］そんなら内へもよくいつてくだせへいつも〳〵おそう〳〵だ　［染］か〻さんそんならおさらばヨずいぶんとつさんヲだいじにしなせへ（といとまごいヲして母ハかへる　お染ハ二かへ（ママ）あがり　なにか物おもいにうつむいている）［幾］お染さんごうぎにふさぐもんだの　［染］コウお幾さんきいてくんねへわりい時にハこんなにまでつがうのわりい物か今半さんがくるはずだからほりへ町の客しゆにもらつた壹兩貳分ヲあて〻おいたらとつさんがわずらうといつてか〻さんがむしんにきたといふもんだからその金ヲ内へやつたがどふもあとがつ

まらねへからおそれるかたちさ［箋］半さんハまだ内をかぶつていなはるか　［染］おとつさんやおつかさんがいつそやかましくいゝなはるからまだおぢさんの所にいなはるとよ［箋］それでハてへ／＼でにくいかたちだねまた半さんのおやごさんハあんまりだよノウ若内（マヽ）にやァどうらくもしなはるはずさ何もそんなにやかましくいゝなはることハねへヨのう　［染］そうさこつちの心にもちつとなつてみなはつたがいゝわたいらハ此ごろハ半さんゆへに鼈甲の数ハへるしかけぶんこもかるくなつて着た物ハミんな損料屋のつがふといふもんだからてへ／＼モウくろふじやァねへヨ今のあてにやァ此しのぎでも深本へやつてさんだんチしねへけりやァならねへヨおめへ兄弟ぶんのよしミだからじよさへハあるめへがこゆびにさとられねへよふにやつてくんねへ［箋］そりやァわたいがしやうちのまくだから何もあんじることハねへわなしたがおめへしめへハどふするつもりだ［染］モシモ内でやかましけりやァどふする物かわたいもかくごチきやめてに［箋］（口なおさゑて）コウ壁に耳そのりやうけんか［染］あわれるだけわとハおもつているがモシモ半九良さんがつまらねへ時ハ此土地をはなれて出居衆です ごすきさ［箋］かならず小指にさとられねへよふにしねへ（トいふ折ふし下にハ肴屋きたりしやうじチ明て）［肴］だんないゝまぐろがごぜへやす［清］（おくよりいでゝ）ウヽいゝうをだ　したが安くハあるめへ［肴］ナニ安イわな是チかつてくんなせへ［清］それよりハこつちのがいゝいくらする［肴］是かへこいつハ弐百廿四文

サ 清夫レじやア安くもねへソクガレンにしたがいゝ 肴何たけへ事が有物かごとうなら安イけれどこいつハおめへ伊豆めへだアな喰てみりやアしれらアな 清まけさつせへ夫レよりたかけりやア氣がねへ 肴そんならまけろこいつハ五十安イニヨ燒なさるかへ 清インニヤ つくつて下せへ 肴アイ

清コウ吉やいつ物チ(マヽ)五合とつてきや そこにかよいがあるだろう 居候(ハかよいをもつて酒屋へゆく入ちがつて) まハしお染さん夢本から口がかゝりました

第二回

戻ル猪牙達磨も有バ寢じやか有とハ娼妓買の穿にして頗川柳點の妙なるかな暖簾ハ風に飜て家名客の足をとゞめ面の媚なる淫女よく出番の何がし酒肆の義兵衛が魂を奪なか昔の比(マヽ)か靍が岡八幡の繁昌に續て賑ふ大礒の繩間に大暖簾掛たる茶店軒をつらねあるが中にもわけて名高きおばまやとて風流盡すひとがまへ出船千艘入船に料理場の庖丁やむ時なく下働の男水を汲こみ客人のだした揃の前垂ハ娘分下女の腰に葉手を爭掛にでた女ハ雪の下のほりへ町西河岸を歩行口の掛つたはおり階子の下でねじめをあわせ神店の張子ハしけあがりの松山にことならずお客ダヨウおつれもうしなの美音ハ客人の胸に轟ばた〳〵とん〳〵たる階子のおとハたへまなく口のかゝるあれバ明てかへるありよせばの線香は

客の心もしらず早くたち八幡の明の鐘ハ三分早くしてきぬ〴〵の情ふかし川岸あげの若イ者ハイおちかい内とみよしをつきだせば内を案じる息子株ありねむたき顔のあさ直しも晝遊の世界とかわり客と妓女の手管の序開 [客文長](いしやうつけハ通君子の御ぞんじならんよつてりやくすヘふとんのうへにおゝあぐらをかきだんまりまり(重複マヽ)にて銀目のへろほどたばこをのんでいる) [妓お染](こいつも同じくだんまりでいたるが文長がしうちに心づきひろのよふすをけどつたとハおもへどもなにくわぬかほでそら〴〵しくでかけろ) モシ文長さんわたいも氣こんにおめへさんのしうちをかんがへていなすが何かわたいにいゝぶんの有ルかほつきでふさいでいなはるがそりやァおめへのお心にもにやいやせんいゝぶんが有ならだんまりでいなはらずとなにもかも心のはれるやうにすつぱりといゝなせへしな何が氣にいらねへでそんなに腹をたちなはるのだへねつからわたいハ氣がしれねへョ [文]コウいかに錢がでねへとててへけへに口もきゝやないゝぶんのあるハてめへがせんたくしねへでもしれしおん事だから(カ)くりのいゝたてやく拂といふなが〳〵しい事ハほうつておいてゆずミそのふたをとりやァしねへがちよいとつまんでいつてきかせよふよくみゝの穴をあけてきいてくんなひるおれがきてきいてくれろといつたらお春がねへといふからあとでもつけてこいとたのめバァイといつたがさいごの助までどくらせどらちあかず金つかいの芝居へいつたよふにあくびのいつそく五六拾もしたじぶんうしの道行を見るよふにのそ

りく〵ときやァがつて江戸へいつたの田舎へいつたのとあんまりばかく〵しいことをいやァがるハいつそのことしよてから江戸へいつたといやァかへつてしまうに女までがぐるになつてなんのかのとじやうずをいふからかんしやくの蟲にさわつて此おはらがおすわんなさんねへわ　ほんのこつたが染モシへおめへそういちずにおもひなはつちやァなるほど腹をおたちなはるも御尤さしたがわたいがきやう江戸へいつたは八まん様かけていつわりじやァごぜへせんた(た脱カ)つ今江戸からかへつておめへさんのきなせへした事をきゝやしたなんにもわたいが心にやァくもつた事ハ御ぜへせん文おつとまつたり三助そふしらをきらずときやうの仕ぐさのいちらつをじんじやうにはくじやうしてしまへなんだきまじめになつて八幡様やまりしてん様ヲしやうこにたつても淺黄裏じやァ有めへしその手ハくわねへのやきはまぐりだコレエ、ひるから夢本へ西河岸の半九良がきていることハ覗眼嗅鼻からうんじやうを取ほどなおれさまだ物そのくらゐな狂言をしらねへでどふする物かたとへ高麗屋の親仁をうしろだてにしてふるなが辯をふるつてもびくともくふ男じやァねへはなんぼまじめになつていゝわけをしてもてめへのたましいハ半九良が所へいつているハそのしやうこにハ一ツのまねへかとおれがやつた盃ヲ江戸で呑んだからいやだのなんのとなけちらし高イつらをしていることが有物かざつとみたをした所がそのくらいな心いきで有ながらなんぞこまつた金の入時ハむしやうやたらに實らしいことをならべたて

お先につかふりやうけんはこつちもしやうちのまくの内其あとまくで一番おちを取氣だろうがそううまくばかされる物かふるい扇箱でハ有めへしあんまり安くしやァがるな　染そふおめへのよふに穴の穴までしつていなはれバかくしハしやせんなるほどいまいゝなはるとふりけさ半九良さんがきなせいしたがよふが何といゝなはつてとふに返てしまいやしたたとへ半さんがきていなはろうがおめへさんがきなせへしたときゝやァどふかこふかつがふチしてこねへ事ハ御ぜへせんが何をいふもまをわるく江戸へいつたしぎゆへおめへさんにも腹をたてさせやす是といふもみな半さんのことをあしくおもつていなはるからのことサ　文おもわねへでどふする物か　染モシへマァ腹をたゝずにわたいがいふことをきいておくんなせへしそれほど半九良さんがじやまになるならおめへのお心のすむよふにつきだしてお目にかけやしやうそれできやうのお腹だちをごふしやうなせへし　文ナンダつきだすノ〳〵と水てつほうかかしあけの若イ者でハ有めいしつきだしか引出しかわかる物か(一體此客腹のたつ事が有とむしやうに酒チのミとつちりよつてまきじたにてきつねつきにうゐろうをのませし如くやたらにしやべるは常のことゆへお染もさのミおどろかず平氣にてあいさつをしていたるがとかく半九良がことばかりいつて腹を立ているゆへきげんをなおさせたのんだしかけのほうをかたをつけてしまわんとだんまりのうつむきにていろ〳〵もつてこいどうで有ますといふころし文句チかんがへていたるがこいつひととふりにてハいかずとかくごきわめて中ノ字に

てゝくだの一まきをならべたてゝ此むねよりいでたる妙言にハたちまちうちやうてんのいきあたりばつたりとなりたましいをうバわるゝ［ナント］おそろしい事じやァ御ぜへせんか」［染］モシへなんぼわたいがちへがねへとてそのよふにいゝなはることも御ぜへせんわたいもそうおうに蟲を持たしやうがにハ今にわかるよふにしておめにかけやすがおめへさんも又わからねへ事がごぜへやす［文］ナニガわからねへそのわからねへ筋おいやな紅毛文字の假名をよみやアしめへしわかられへも大笑だ［染］おかしくバ笑なせへしなこつちの事斗りいけてへそふにいゝなはるがそれほどおもつてくんなはるお心ならおきゝ申事がごぜやすそのよふにこわいかおゝせずときいておくんなせへしなわたいが江戸へいつたるすにお春どんにお久米さんをよんでくれろといゝなせへしたそうだがアノ子なぞハ此土地じやァ一といつて二とさがらねへ子さきりやうといゝ心だてといゝたれしらねへ物もごぜへせんそれほどの子だからおめへさんのお心いきでおよびなはつたら何もかもすつぱりと事わかつておもしろうごぜへやしやうョしよせんわたいらがよふな手もねへ女がどふしてお氣にいる物かけれどもモシそこハ又なわ丁戸橋から市場きつて文さんといつちやアしらねへ物ハごぜへせんわョシカエ夫レほどのおめへさんだからたとへつき合で紋日の十や廿ハしまつてくんなせへしてもたれもやほだとハいゝわしやすめへこつちもまよつたれバこそこれほどの中となつたじやァごぜへせんかたとへ人の目にたつほどの事があつたとて何も外

の客人へハ是ほども實ヲ盡た事ハござへやせん是ほどまでにおもつていてもお氣にいらずバけふでもあすでもいゝよふにわたりヲつけたそのうへでお久米さんでもどの子でもおよびなはるがよふござへすわたいがほうをかたもつけなはんねへでアノ子をおよびなせへしてハかつこうもわるうござへす今まで酒を呑ねへのわ此入わけを一通りいおふとおもつての仕内さこゝの所ヲ一ツきゝわけておくんなせへしあんまり情のねへ事ヲいゝなはるからわたいハ腹が立てくやしくてならねへがはかないつとめの身ゆへ心で心ヲ恨んでおりやす（ト文長がひざへかほゝあてないている）〔文〕やれ／＼かなしい事だ富澤町の朝市ヲ見るやうにでへぶならべたてたなるほどお久米をよんでくれろといつたハ情のねへよふだがよくきゝなたとへお久米がでたとつてゝめへをだし物にするといふ筋のわかラねへ本よミをするおれでもねへハなんだのかだのときいた風にあやなしてもないしよの入わけハなにもかもよく御ぞんじだ〔染〕そうおめへおかしくからんで事をいゝなはることハねへたとへ此すへ儀理詰で客人（マヽ）名ヲ彫こともござへしやうがかならず腹ヲたつてくんなはんな實に末のながいを樂にしていやすゆへ是までおめへさんにハわたいがほうからハ是ほどもむしんヲいつた事ハござへすめへ又こんどのしかけのこともおめへのほうからこせへてやろうといゝなはるゆへそんな心づかいをしてくんなはんなとおめへのためをおもへばこそとめやしたけれど半さんのことをとやかくいゝなはるからこしらへても

らいやす是だつておめへのお心ざしを無にしめへ斗りさ 文イヤモウてめへハどんだせじがいゝわへそのかき文句でハどんなやつでものろくなろうがおゐらアそふハとらの巻上下そろつてことめへさいにいゝひらきをしてもさつぱりおとりあげハなしぢのすゞり箱だ（トどふいつてもこふいつてもさつぱりがてんせぬゆへしまんなかへて） 染おめへのよふにそふいち〳〵うたぐんなはれバしやうちごぜへせんから此うへのいゝわけにハおめへのお心のすむよふにおめへの名ヲほりやしやうからそれでごふしやうなせへやし 文（少しうれしくなつて）それが實ならどれマア手をあらためてみよふサアだしたりト（お染が手をまくり）是一ッけし口が有ぜそつちを見せてくれ 染（ぐつとまくつて日先へだし）サア見なせへこつちの手ハやぼなしのしらきちやうめんさ 文マズ上使の役目もすんだ是からハひだり甚五良といふもんでおれが魂を入てほつてやろう 染（ハすゞり箱と はりヲかりに行） 文（ハもはやしめ こと大あぐらにてうすかうばいをのんでいる所へ お染ハはりとすゞり箱を持てきて） ソメサア文長さんおめへの手でかいてほつてくんねへ（ト右のうでヲまくつて出す） 文（笑ながら 墨をすりながらお染が右のうでに文長とかきはりを三本ほどにてまきほつてやるお染ハ文長がまへゝうでヲだし目をねぶりわきをむいて是もミなしかけをこしらへさせんといふ山があればヾ半九良がためとしんぼうしている） 文こうやつた身ハきつい女の關羽といふ身だぜサア〳〵御ふうもんの通りにすつぱりできあがつた是でこそてめへの心がわかつ

たといふもんだいきつぎにあをらねへか（トつゝぢやわんへ酒チつぎのませる）ソメ（ぐつとひといきにのんでしまい）アヽせつねへ文長さんおめへの名チこふうでにほるからにやアわたいが心がすつぱりとわかりやしたろうね 文ウヽわかりにかけて拾匁ちげへねへのまん中だ 染きついしやれさ

隣座鋪寸間色段

船宿コウお秀てめへきのふ何所いつた 女秀きのふハ西河岸へかけにいきやしたそのけへりにちよとはなしも有からよつたらおめへるすだからすぐにけへりやした 船おらアきのふハ下谷の貞助さんをのせて古市のおゝち屋へいつたヨ時に此間のりくつハどふしてくれる氣だできねへじやアおそれるぜ 秀わたいも其事できのふよつたヨ 船そんならできるといふもんの上下かくめんのわりい時にやア地口までねへ 秀マアしやれずにきゝねへ半吉だよ 船そいつハおもくれへハなろうなら大吉にしてへ物だ 秀それでもどふも間がわりいからできねへわな 船おらア共りくつがどふだろうときの

ふかやば町でおゝくじをとつたら大吉だからこいつハ大ぐわんじやうじゆかたじけねへしめこのうさぎとすぐにおゝきをあげたがそれじやアちつとかんじやうがあわずかつせんだ 秀 マアそんなことをいわずと是チとつて置ねへあとハ芝の彌吉さんがきなはるとできるハなト(おびのあいだよりかミにつゝんだ金チだしてやる) 船 マア半口でも持ていつてけまんを(そんなした事)うめねへきやアならねへ有がた山のとんびだこ此眞實ハわすれハしねへと(なくまねをしてしたゞす) 秀 またそんな馬鹿をしなはるよおめへどふだのこふだのといつても又海(マヽ)でも持て行のじやアねへかへごうぎに海へこつて行そうだの 船 べらぼうめだがそんな事をいつた 秀 ほびき丁の源さんにきいたよちげへハ有めへノウ 船 そりやアゝんな虚(うそ)だハそんなこつてむしんをいふ物か はち屋へかねた(カ)(しちチおいた事)はおりとあわせをだすつもりだそふしねへけりやアちつと内のあんべへしきがわりい 秀 そんならいゝがモウ海なんぞへいきなはんなちつとおめへもおとなしくしなはいヨ 船 おとなしくしねへでどふする物かほんのこつたがてめへゆへに好な酒さへこのごろハ呑やアしねへが禁酒といふやつハモウ／＼できるもんじやアねへ 秀 なにもそんなに禁酒する事ハねへわなちつとわいゝが大酒を呑なはんなからだの毒だよわたいハモウ一日も早くおめへのおかゝさんになつてみてへヨ 船 てめへおれが女房になつたらさぞおかぶのつのをはやすだろうなアヽつのもねへといつてくれるな 秀 女房のやくだ物うつちや

つて置物か[船]持のハいゝが道成寺のきりといふやつにハおそれるかたちだろうョなア[秀]またそんな情のねへ事ヲいゝなはるョわたいがおもふよふでもねへおめへハとんだうわきだョ[船]うわきのかば燒お茶づけさら〳〵としてへでへぶ腹がきた山だ[秀]今茶漬もあけやしやうマア是を呑なせへし（とつゝちやわんに酒ヲついでやる）[船]こいつハごうせへにいゝ酒だ[秀]おめへにのませよふとおもつてねへしやうで持てきて置やしたナント眞實なもんだろうね[船]なんの此くれへな事ハ女房のあたりまへだ[秀]なんのおめへ斗リ實の有ふりをしてむしのいゝシカシなんとでもいゝねへしよじ女房の役だからきいていよふわなそれハそふとみゝをだしな（なにかおんみつにはなす）[船]ムヽ

[秀]いそがしいからよばれよふかとおもへばしみ〳〵とはなしもできねへよ早くひまをもらつてひとつになろうョ

[八幡の入相]ボウウン

〳〵

第三回

[客人半九良]（よほどくめんのよいあき人のむすことしわかなれどいたつてはつめへにて物事にじよさいなくあまり口チきかずしてしやれなきらいあそびもしよじ人がらよく男ぶりも何一ツいゝぶんのねへ風ゆへどこへいつてももてる客なりお染とハかれて深き中にてたがいに心チうちあけてしねしのふといふほどこつていれバ親のいふ事もきかずさん〳〵のふしゆびにておぢの内に居候となりいる内も夢うつゝにてたゞあいたいと戀しいの戀やミに人のいけんもうるさくおもひやりくりとさんだんをぬたにしてしゆびチこしらへかよいけるがお染がにり物なした事をきゝだし善か惡かをせんたくせんと夢本へ來りさとられぬやふにとげいしやを三組もあげてにぎやかにさわぎ常〳〵よりきげんをよくし盃もあらかたまハりと〻どふいふひやうりかつぎさをはずし三味泉（マヽ）箱へ入らうかへつきだし）[げいしや]モシ半さん是ハありがたふ御ざります [はおり]さよふなら御きげんよふ [半]是ハおくろう〳〵そんならみんな休ねへ（ミな〳〵いとまごいなしてかへる[半]ハちよつと小べんに立どふいふ狂言にせんとしあんたら〳〵にてざしきへ入りかんがへている所へお染來りしやうじチあけるきしんでがたぴしとしてはずれる）[染]ヱヽ、ぢれつてへしやうじだよ（トはめてはいる）[半]是ハきつい御かんしや

くだ　染（にっこりと笑がほゝ見せ）ハイ御めんなはいましと（すゝり半九良がそばに有かわのさげ多葉粉入チとつて一ぷくのミ又すいつけて半九良がまへゝだし）一ぷく呑なはんねへか　半わたしハたばこハたちやした　染きついあいそずかしね半さんきしよくでもわりいかへ　半どこもわるくハ御ぜへせん　染それでもおめへとんだかほの色がわりいヨ　半色のわりいハ生れつきさ　染なんだかきやうハきついぶにんさうだネ　半（むしやうにあいそづかしばかりいつていたるがしあんをかへて）コウ文さんハいつきなすつた　染（おかしなかほで）ヱ　半文長さんの事サ　染おとゝいきなせへした　半それについてちつとはなしが有がきいてくんな　染なんでありますへでへぶかたい事をいゝなはるね半さんおめへとハ是ほどの中だものなんでもいゝなせへしな　半外のこつちやァねへが文長さんがでへぶこつてくるさうだからなんとおめへおれときれて文長さんのほうへゆくがよからうじやァねへかあつちハ金もちといふもんだからまんざらじやァあるめへおいらがやふなびんぼうがミハさぞうるさかろうヨなんほどふいつても石に判といふかてへ事もねへもんだからひよつとどふいふこつてつきだされめへものでもねへヨおれもマアおもへば〳〵ばか〳〵しいうわきなもんだぜヱあわせかゞミをまにうけてふつてもてつてもかよひつめあけくのはては親にまでかんどうされまだしもたよりにおもふハあれ斗りとこんなにのろくなつてるうへに今またおつな風でも吹てつきだされてみたがいゝ其はぢハいきても死

でもうまりやアしねへから足元のあかるい内身用心にしくハねへモウ／＼此土地へハおいとまごいだなんときれいにつきだしてくんねへ一生のおたのみだ［染］なぜおめへそんなむりなことをいゝなはるたとへだがなんといおふがおめへときれていきていそうなわたいだとおもへなはるかへ［半］おめへが眞實にしてくれるほどなんだか腹が立てならねへヨそれにしけ／＼あふせいかモウ／＼あきて物ヲいふもいやになつたヨ［染］久しい物だよそんな事をいつてわたいが心を引てみる氣かへ［半］引の引ぬのとさん橋のなるこでハ有めへし［染］おめへきやうハ何がきにいらねへでそんなにあいそずかしをいゝなはるわけをきかしてくんなせいしわたいがわるくバあやまりやしやうわな［半］なにも腹をたつのたゝねへのといふわけもへちまもねへがおれもかんどうの身のうへゆへ物事もじよふにならずつがふがわるけりや十日も廿日もくる事もならねへからしよせんつながつていてもおもしろくも有めへとおもつて今のよふにあいそずかしをいつた物のそふいふ心ならあんじる事はねへおれもおゝ氣（マヽ）におちついたよとてものおちつきついでにそつちの心のおちつくよふにしてへからなんでもおめへの手でかいてほつてくんねへそうすりやア此うへ何もうたがふ事ハねへ［染］（ハ氣もつかずに）それほどまでにおもつてくんなはるハうれしいよそんならほつてあげやしやう［半］ムヽほつてくんねへと（はながみ袋より針をだしてわたす）［染］硯箱を持てきやしやうと（たつて行半九良ハちうもんどふりと心によろこびいたる

所へすゞり箱迄もちきたり半九良がまへにすわり）おめへほんとうにほんなはるか［半］しれた事だ（手ヲまくつてだすとお染ハ半九良が手にてまいの名ヲかき狂言とハつゆしらず何心なくほらんとせし手ヲおさへて）［半］コウ眞實(しんじつ)ほつてくれる氣か［染］なぜそんなことをいゝなはるたゞしハいやになんなはつたかへ［半］いやにやアならねへがしんじつほつてくれる氣ならそつちのうでの文長とほつたヲけしてくれ其かわりにハおれがほるいかにつかいごろなひたら(だカ)でもそふこけにやアまハされめへ（とつよくいふお染ハはつとおもひモシへ此ほり物もこふ／＼いふぎりにからめられしたことでごぜへすが何もおめへなつきだすとなんのといふわけじやアごぜへせんとうちあけていゝたいにも半九良にせんなこされ今さらいゝそびれだんまりでたゞうつむいていゝぶんながんがへている［半］是からがかんじんかなめとおくたいなしにおとなしくかんしやくのおもいればかりにてきれいごとにてあたつて(ミる)）コウお染さん定めし是にやアふかいよふすがあるだろうがモウこういふ筋道(すじみち)になつちやアよふすもへちまもきゝたくねへこれほどまでに書た狂言ヲとやかくいふハかへつてこつちが大だわけなんにもいわずにおめへのかほヲ立(たつ)てつきだされよふサアすつぱりとつきだして此半九良が人中(ひとなか)へ此しやつら(マこ)のだされぬよふにしてくんねへ今までハ眞實なものだとおもつていたゆへ二日とあわねバあんじられかよいつめたるあげくのはて親のかんどうみるかけもねハ今のざまあいそのつきたもむりでもねへサアおもいれ通りにすつぱりと手ぎれいにつきだし

てくれと（口おしなミだはら〳〵）[染]（うつむいていたるがかほゝあげ）モシ半さんへ [半]しらねへハ [染]こふいふわけでござへす腹がたとふがたつた一言聞なせへし [半]やかましいわそふいふ替り安イ心としらず今までかよつたハみんなおれがべら坊だ是も二親の有がたい御い見をなんともおもわねばちだろう是から心をあらためてあそびも是でやめにする今こふなつて見ればいつぞやからのてめへのしうちがアゝ今さらこんなことをみれんらしくいつたとてみんなあとのまつりだ（トふさいでだんまり）[染]モシ半さんおめへのいゝなはるハなるほど御尤さこつちのよふすをおしんなはんねへからさぞ腹が立やしやうが此彫物だとてわたいが好このんでほつたのじやァござへせんおめへもしつていなせへすアノ文長さんにしかけをたのんだ其時にのつぴきならぬぎりづめでほりやしたがこふいふ事をしてハおめへにたゝねへからいつその事きれてしまおふとハおもつても外にたのむ客人もござへせんからよんどころなくほりやした是だつて元をたゞせバおめへにちつともくろうをかけめへとの心盡もこうなつてミれバみなむだごと腹がたとふがこゝの所を一ツきゝわけてかんにんしてくんなせへし此事斗りハわたいがいつはらねへといふ心ハ天道さまが御ぞんじだよ [半]モウ〳〵そんなかき文句ハよしてくれてめへがつらもきやうがみをさめだかほハうつくしいが心の内ハおにかじやか丸二年三月といふものよくもばかした古狸めなんといおふとかといおふといつてかへらぬそのほり物みじかい夢であつたなア

染 モシ半九良さんマアとつくりと氣をおちつけてわたいがいふ事をきいてくんなせへしなる程今までかくしていたハぢう／＼わたいがわるうござへすがいかにおめへのためになる事だとてほり物ヲした事をいわれるもんじやアござへせんいやだかなしいくやしいとおもひながらにほつた物ヲおめへにみかへてした事のよふにおもひなはるがこんなふぎりも金ゆへにした事でござへすこふいふからハかくごのまへ此ほり物ヲ今けしておめへのかほのたつよふに文長さんをつきだしやしやうそれでかほのたゝねへ事ハござへすめへ（トあんどうの引出しよりきりもぐさを取だしすへけさんとする）半（すこしハ心もわかつたなれどわざとはりつよく）けすともどふともかつてにしろ咲たばかり花でもなくあかるい斗り月夜でハねへ月に村雲花に風くもるもちらすも胸一つそのあとまくのでるうちにや長イ浮世に短か（マヽ）い命けふまんぞくでもあすしれぬ人の身うへ（マヽ）そんな氣の長イかき文句ハよしてくれおそまき唐がらしだ 染（いさゝかまわず）アヽあついぞ 半 あつい／＼といつてもてめへのつらのかわよりあつくハ有めへ 染 わりいしやれさ（とすへけしてしまい半九良がめさきへうでをまくつてだし）おめへのめへでこふすへけしてしまふからハモウかんにんしてくんなせへしなんの今さらこらほどのなかだ物ヲつきだすのなんのといふ心ハ道しばのつゆほどもおもひハしやせんおめへのかほのたつ事ならたとへころされてもよふござへすしぬ命ハさら／＼おしかアござへせん 半（うつむいてだんまりでいる）染 コウ半

九良さんこらほどあやまつたらモウかんにんしてくんなせへしてもよさそふなもんだ（と半九良がかほゝ見て）かんにんならずバいつそおめへの手にかけてころしてくんねへおめへにころされゝバわたいわほんもふだ。　半（もさいぜんよりのしこなしにてよふすもわかりしゆへ心もとけて）そふいふ心ならなにも腹ヲたつこともねへが今のよふに氣づよくいつたもみんなてめへがかわゆいからだ又こふとけてミれバやくてへもねへ物だ　染　おめへまだおぢさんの所にいなはるか　半ムヽまだいそうろうの權七だ　染おめへのおとつさんもとんだやぼなことをいゝなはるよのう若者(わけへ)だから此くれへなことハ有うちの事さそれにかんどうだのなんのといけていそふに事をいゝなはることハねへぜんてへおめへがあんまりおとなしくしなはつたからだおとつさんだつてへ木竹(マヽ)ハ有めへし若イ時にやアどうらくもしなはつたろうになにもそんなにまじめになつておどしなはる事ハねへわたいらが身のうへヲちつとハくミわけてみなはればいゝに　半（笑ながら）てめへのよふな親があつたり主人があつて見ろ勘當ヲされる物もなくでぼんのつけのほせや遊染(いふあそび)の宿あづけハありやアしめへ今までの内にてめへゆへにしくじつた人ハいくたりと數ハしれめへとんだつミなこつた　染また久しい物さそんな事をいゝなはんな　半あやまつた〳〵

第四回

【四酣の拍子木】（よつちき・ひやうしぎ）カチ〳〵

【船頭】モシ辨子さんモウおかへりなすつてもいゝじぶんで御座ります【辨】モウそのじぶんだろうかの【船】ちつとまハつたくらいで御ざります【客】そんならすぐにけへろうヨ【女久】（まへだれで手なふきながら）辨子さんモウおかへりなりますかへ【辨】又此ごろにきやしやう【妓】そんなら十二日にやァかならずきてくんなせいしョ【客】ムヽ（はしごをおりるとおくよりばんづけをかいた札のついてるはきものを持てきてなをす）【ミな〳〵】さよふなら御きげんよふ【辨】（アイトばかり娘ぶん下女などなじミの客ゆへ川岸までおくつて行ク引ちがへて客二人きたる）【新交】（さいかうしのうへだじまのはおり上着はつむぎのうへだかへしかけ桔梗の五ツ所紋の小袖下着ハ小紋のりうもんと大島の八丈じゆばんハちりめんのらせんしぼりこはくのごばん嶋の帶花色のはんぐつをはきおれ一人色男といふつらにてむしやうにうぬぼれをいふ人物）【東吾】（めんら（るカ）りのせいらすじまのはおりおにふとりをてつおなんどに染た上着たんごじまの下着もうるのしぼりのじゆばんはな色七子の帶こいつもとんだきいたふうにてむだ口やとうしせんのきりぬきおぼへをミそをあけふるいちぐち

たゞ〳〵きたる）[女]是ハおそろいなすつてよふおいでなはいましたサア二かいへおいでなせいしお
ゆきどんおつなさんとおのへさんを口をかけてなんなおつれやなお客ダヨウ引（はしごばた〳〵にかいへ
あがり）[東]みわたせバ新とヽしまをごきまぜて（マヽ） [新]しかけぞ春の錦なるらん（二人ハ、〳〵〳〵）[女]
来り今みとふしがあきますからマアこヽでお一ツお上りなはいまし（トだし物いろ〳〵でる）[船頭]（も来
り）まだ見とふしハあかねへか [女]今あきやすヨおめへ一ツ呑なはんねへかサアどなたもお一ツおあが
んなされやし [娘分]（すい物を持てきたり）きやうハしけでなんにもござりません是で御ふしやうなはい
ましと（二人がまへにすへる） [船頭]サァさめねへ内におすいなさいまし [東]玉碗盛来琥珀光ちよびと
すおふぜ [新]しやうぶ（トふたをとり）なんだ玉子じやアねへかきついきそ海道（マヽ）といふすいものだ [東]
これを喰と閨中少婦不知愁だ [新]しらずしられぬ中なれバおめへのとけへさそふ [東]（ちよいとうけ
て一口のミかほヽしかめ）こいつハのめねへ [新]そんならのめるのをとりにやりさ　時にあんまりさむ
しいから一組よんでくんねへ [東]一組なら松風むらさめがいヽ [新]わりいしやれだ [女]はおいしゆに
しやしやうかへ [東]なんでもしよじはおりのことだモシはおりとあわせだから一分弐朱ハつこうがそ
こハ番頭さんおめへのかほづくでもう一本かしてくんねへ [女]すきなことをいヽなはるヨ（ト下へゆ
く）所へ子共来ル [娘分]モシどなたもおいでなせへし [新]サアどなたもこつちへおはいりなせへしや

うじの穴からのぞいてみるなぞハふるてや八郎兵衛だ 【東】（こわいろにて）おめづおくせずはぢらわずきり〱こゝへぬたくりつんでろヱゝ 【新】中島の中の字ハ妙だ（子ども二人ハ座鋪へでる）【のへ】【つな】よくおいでなはつたねへ（是よりお定り通りの盃のとりやりになる所へげいしや來り ちよいとした物ヲ一ツひく）へうた上略 おもうにそわでおもわぬにそうもふんなりヤしやう事もないぞへおもひおふたる神のなかだちチヤン〱 【ミな〱】ヤンヤ〱 【東】とんだふはむきな文句だ 【新】ドレ其三味ヲちよつとかりばのきつてだ 【げい】なんになはいます 【新】ヲレガ此間妙ミといふ新哥をあんじたから引てきかせよふ 【げい者】ほんでござへますかへ 【新】なにうそをつく物だ 【つな】【のへ】はやくきゝてへねへ 【新】（きうくつそうに三味泉（マこ）をもち）おかざき女良衆ハよい女良衆 【東】おきやアがれ 【新】ねつから手がいごかねへ 【ミな〱】（ハミミハホミミホト）大笑ヲする 【女】來りちとあちらへ 【新】モウぶんまハしの道具がわりもよかろう（げいしやも三味箱をろうかへつきだす）【東】（とつちりよつてよろ〱して茶わんをろうかへけとばすとチヤントわれる）【新】くだけてもとの土くれとなる 【東】けらいども此しがいをやきつぎへかたづけろアヽおゝきによつた（ひよろ〱 いろ）【けいしや】ハイ御きげんよふ（といとまごいをしてかへる）【新】モシおとなりにおりますからばんじ御心安くおたのミ申やす 【東】夫ハおたがいさナント新交子此引きり枕にはおそれるぜ 【新】そうさ天とくじしかせねへがめつけ物だこの又びやうぶの繪のさまをみ

ろ仙人かとばゑかわかるもんじやァねへ［東］仙人口なし人を持ていわしむるだ［新］ごうせへあたらしいね［東］コウ新交子足下の婦人ハ板がしらでござへしやうどふも心いきが妙だ定めし　ハやぼじやァござへすめへ［新］ナニわつちがよりおめへのが古今の名妓だ［東］なにとんだ事をいゝねへおゐらがやつハしかけからつらからきついむかし繪の濱村やといふもんだあれでないてみたがいゝばあさんのお江戸入といふつらになりやすなんぶんおそれるしろ物さ（トむだ口チしやべつていたる所へ子共きたり）［つな］へ　だんまりでいろ）［東］おめへどふしたしやくでもおこつたか［つな］アイなんだかいつそしやくでむな先がいたくてなりやせんからちよつとりやうじヲしてきとふござへすヨ［東］そいつハこまつたもんだいつてきねへ［つな］そんならちよつといつてきやしやうと（出てゆく）

へ新交が　内ハ［新］コウおのへさんゝれバみるほどうつくしまの辮天だ

おがゝのごしやうだ［のへ］

［新］アイ手だの安賣卅八文さ［のへ］とんだ妙地口だね［新］地口にかけてハおいらァ板頭だそれハそふとおめへなどハ五日勘定にハ卅も賣といふもんだからだんなのまへもあんばいよしだろうヨノウ［のへ］なにわたいらが六ツといふあきないができるもんでござへしやうかおたふくなりせじハわるし氣ハきかずといふもんだからおめへさんのよふな何もかもかゝわけた客人でなくつちやァき

ておくんなはんねへのさ 新おめへもじよせへハねへわへ のへなんで有ますへ 新一蝶が圖にもねへ新手ヲかきかけるからなをまよふわなそんなに迷せてくんなさんなつゝになるぜ のへ笑ながらわたいよりおめへのせじにハどこの女郎衆も迷やしやうヨ 新まよふ物にとりてハ氣のおゝいかゝさんのごふく屋へいつたのか田舍者が番町ではぐれたのか　またもまよふ物ハおれがたましいだ
のへ（笑つてゐる）新そのゑくぼばかりも拾貳匁が物ハ有から跡ハおまけにつけてもらうのだわつちがのハてまへつかいだから紙へでもつゝんでくんねへ のへおめへさんのいゝなはることなら命でもあげやしやうわなモシヱつかねへこつたがおめへさんハどつちのほうだへ 新わつちハ出番さ ひへでばんにしてハとんだ人がいゝね 新人がわりいがきいてあきれらあとハいふもんのまだ氣むすこだからおめへなぞにあつちやア平代團子のよふにまるめられるよ のへモウむだハよして

新そふいふ所も有がてへね　なんだかとなりがでへぶそふ〳〵しいちよつといつてみよふ のへなにうつちやつて おきなはいなあつちハあつちこつちハこつちさ
新そんならてん〳〵がら〳〵しやうのふへ

〽それにひきかへて東吉　ハ（大てれにてむしやうやたらにたばこばかりのんでいたる所へよふ〳〵ゐいかたおつなきたる）つなモシおありがとふごぜへますや

つとおさまりやした（トたばこをすいつけてだす所へろうかにて）［娘ぶん］（のこへにて）おつなさんちよときねへな［つな］なんだな（トろうかへいでぼち／＼はなしをしているこれなじミがきたといふ御ちうしんならんしばらくして　来ルが心のうちにいろ／＼とくろうのすじあれバ何かそわ／＼心おちつかず又しやうじをあけて出そうにするゆへ東吉もこいつハなじミの客がきたといふ狂言に心づきしやくも何もみなうそのかわとぐつとかんしやくの蟲にさわりかんにん袋のおゝきつて中ノ字をならべる）［東］コレてめへハ有馬筆の人形飴細工（マヽ）の猩ゝを見るよふにさつきから出たりはいつたりばかりしているな　てめへのよふなやつハ起上り小法師の惣菜でもちつと喰ずバそのしりハおちつきやアしめへ人を馬鹿にするもてへけへほどのあつたもんだ［つな］なにさ今ちつと用がござへしたからさ［東］なんだ用が有たおゝかた其よふといふのハだしつこでさつま芋か腹ぶと餅を買用だろふ［つな］おめへさんなにもそふからんだ事をいゝなはる事ハござへせんコウいふわけでござへすわな［東］コレヱヽそばへよらずときこへるハ床へくるやいなや積がいてへからりやうじをしてきてへといきやアがつて片道も請てくるほどてまをとり用が有のかほちやのとゝんだやつじやアねへか此くらいな間にやア夜鷹でも五六百ハかせへでかへるハムヽナンダナなじミがきたといふ狂言だなおゝかた先のやろうぬすミにもならざアちよつとかりてこいといふ正本かなじミがこよふがねづミがひかふが盗といふまくをかゝれちやアおもしろくねへは三分五リンも

かりのねへ茶屋に何もへこんだあすびハしねへわへ（トまきじたで中ノ字をいふ）[つな]モシエマアしずかにしておくんなせいしおめへさんにもにやわねへい丶ぶんだね盜を賣たのなんのといふわけじやァござへせんきのふ夢本の一座にちつともめがあつてそのことをアノ女がい丶にきたのでござへやすなにもそんなにあしくおもひなはる事ハござへせんわな腹がたつなら[東]やかましいハだまりやァがれてめへたちのよふなしがねへやつにかきまハされてつまる物かほんのこつたが戸橋なわ丁すそ（マヽ）かぐらしねへが大かぐらのはさゝ箱といふやすいとりあつかいをされちやァ此お腹がおすわんなさんねへハ古市から新市藥きつてどこハどふだと穴さがしもしやれ本の久しいつけめでモウうるせへからい丶ハ[つな]なるほどおめへのい丶なはるハみな御尤（マヽ）さしよじいたらねへわたいだからお氣にあたらバかんにんしておくんなせいしあやまるより外しよふハござへせんかんにんがならざァおめへにかわれたからだ丶からどふともかつてにしなせいしな [東]コレ横目でにらむなへい丶きりやうのふりをしてためへかゝみをみやァしめへてめへがつらハなちやうど今戸燒のあねさまといふつらだハ夫になんだふるのてらすのとしやらくさいかびくさい事ハおきにしな菜ばたけにいるびやうにんといふつらの青い出ばんのやつらをとりあつかふとハちがふぞよおいらァぎやつと生れるやいなおんば日からかさでおそだちなすつた江戸ッ子の正銘まじりなしの通人のしやうがにやァどこへいつても色男一疋の通用ハす

ろハ　てめへたちのよふに二階もねへ裏店でそだち　まさきの葉でこしらへたびい〳〵をふいて　うどん屋のしるつきを持て　醤油を買にあるいたとハ　ちがふぞよ　かたじけなくも有がたくも　ちかふよつて御めんそうをおがミやアがれと（やかましくいふゆへ子どもあきれてだまつているゆへ新交もおきて來りなだめる）　東なにおめへたち　おきてくる事ハねへハな　新マアどふいふりくつだかしらねへが　しづかにさつせへな　けいぶんがわりいぜ　東りくつもなにもいりやアしねへハな　アノあまが宵からほりぬきのあししろといふたけへつらをしているからのことさ　アヽいふ風の女良ハしかけもべつかうも色男のためにはだかになりびやうきをつけてひつこんでいる所へ　ためになる客がきて口をかければ　ざしきへハでずに床にまつているふうだわな　あんなきいた風な女もねへ物だ　新コレサ東好さんのこつたこゝで中の字をならべちやア御人躰とおひとがらのすたることさ腹がたとふがそこハそれわつちがこふいふにやアおめへのへこミにもしやすめへからきやうのあんべいしきハなんぶんわつちにあづけてくんねへ　東ハテおめへがそふいつてくれる物をなにもふしやうちなおれでもねへが命から二ばんめといふ金をだしてあすびにくるからにやア中ノ字ハあたりめへだ　新　の　へマアノ〳〵しずかになせへやしと（よつてたかつてだましてしずめるとほどなくときも）〽四ツ明のしつぼりハ　客人久兵衛（かまくら本町邊の大店の若イ衆　ひろさんとめの上着に　たんごじまの下着　本小倉嶋の帯を

まへでむすび　きせるのやにをとふしている）　[妓お染]（こり／＼するうへだ嶋の床着　花色じゆすの帯チヤ
久兵衛がきせるにてたばこをのんでいる）[久]アヽだいぶさむいわい　是じやアあすあたり雪でもふるか
しらん　[染]此さむさじやアしれやせんヨ　しかし雪ハ跡(あと)がわるうござへますヨト（そばのてうした取）
久さん一ッ呑(のみ)なはんねへか　[久]チト酒もよかろう　したが此ごろでハとんと酒にハおゝよハりじや
[染]（久兵衛が所へ盃をやり　いつばいついでやり　そばに有すゞりぶたを引よせ）肴(さかな)ハなにをあげやしやうく
わいかへ　[久]それを喰(くふ)とたいせつな水がへるじやて　[染]ちつとへらしなはつてもよかろうに　[久]此う
へにへつてみたがよい　とんとはやりの権七さんになるじやろう（いふ折ふしお染がほうばいの子どもき
たり）[梅]お染さんあけてもよしかへ　[染]お梅さんか　へゝんねへな（しやうじをあけてはいりあんどふ
のまへにすわる）　[梅]久さんちつと御めんなはいよ　[久]コリヤお梅さんかなんのいノウ御ゑんりよハ
いらんじやサア／＼もち合た物じやから一ッあけよじやないかト（お梅が所へ盃をやる）[梅]是ハちとお
ゝさへ申やしやう　[久]マア／＼わしにかまわずに一ッのんでくだんせ　久しぶりじやさかいに　[梅]そ
んならいたゞきやしやう（ト盃チとり）つぎなはんなよ　[染]おめへのことだ物いづれしやうちのまくさ
と（いつばいつぐ）[梅]（一口のんでかほゝしかめ）アヽのめねへお染さんすけてくんねへ　[染]どれだしね
へよわい酒だね（ト盃チとりのんでしまふ）[梅]モウ／＼此ごろハ酒がいつかうさ　[染]それもしん〳〵が有

からだ [梅]ナニおめへじやア有めへしと笑(わらふ) [久]コリヤなにかこんたんのおはなしじやの [梅]お染さんが何だか此ごろハきついくろふのしよふさおゝかたおめへさんゆへのくろうでごぜへしやうヨ [久]なんのわしらがよふなものがおよびもない事じや [梅]久さん此間ハ久しくおいでなはんねへじやアねへかへ [久]店(たな)でも又一人かぶつたじや それじやさかいこちらもたいていてへ氣をつけにやアならんじやて [染]久さんそれでもおめへ頃日(このごろ)ハ又戸橋(とはし)へおいでなはるそふだね(トすこしいぢめかける) [梅]そふだろうよのう それでわたいらがほうへハおいでなはんねいのだ しよせんせきたくつてもノウお染さん [染]アイサせくきりやうハなしみんなしみつたれといふもんだから久さんなんぞのお氣にいらねへもむりじやアねへ(ヨトごうせいにうれしがらせる) [久]あほうらしい だがそんな事をいふてじやせいもんおほへハないじやて [染]いゝよせいもんでも大門でもわたいらアしやうちのまくだよノウお梅さん [梅]そうさねへ久さんもとんだびわよふとうだねへ [久]またおしやべりがはじまつたわしらがよふな物がなんのそのよな事があろうぞへ ない事いわるゝほどつらい事ハないもんじや(トまじめになつている) [梅]つかねへこつてごぜへすが半六さんハどふしなはつたへ [久]アリヤおめへゆへにだいぶ引こみがあつたさかいにつけのぼせになつたじや [梅]そんなら上方(かみがた)とやらへいきなはつたのかへいつそおきのどくだねへわたいらだつてへ かゝいの身のうへだから どふぞとおもつても しよふもごぜへせん

ヨ［久］わしらもおしつけお染さんゆへにつけのぼせになろうもしれぬわい［染］なんだへ戸橋の子ども衆がかへおめへのよふにこつていきなはれバそれもしれやせんヨずいぶん足をちかくいつておやんなはるがいゝ［梅］ちよつときて長ばなしだ　モウまいりやしやう　お染さん朝ハ早くしたくをしなせへヨ［染］人のこつちやァねへおめへせつかれねへよふにしねへ［久］あすハどこへかおいでが有の［染］堀内さんへまいりやす［梅］おいでなはんねへかへ［久］(くびチかたむけゆびをおり)どふもあすハちと用が有じやてマァなんにしろよい御たのしミじやなにがあてじややらゑらい後生のねがいよふじやおゝかたはよふつとめをひいて色の所へ行たいといふねがいじやろう［梅］(わらいながら)わたいらァ色をしたくてもだれもなつてくれてハござへませんヨ［染］今から後生をねがわねへと極楽とやらへいかれやせんからさ［久］ハヽァそれじやァ極楽の先へゆきすぎるじやろう［梅］それだけにつミをつくるからあんまり行すぎもしやすめへ久さんおやすミなせへしと（いでゝゆく）［久］夜のふけたかげんかだいぶさむうなつてきた［染］そうさねへ(是よりひつそりとなつておもてのかたは)蕎麦賣の風輪淋敷おでん白菊につれてきこへる夜まハりの鐵棒の音も響わたつて火の用心さつしやいましやう（に草も木もねてしまい家内もしづまればじぶんはよしとお染ハてうづにいでしやうじを引たてると下のてうづばとしかけがわりにてお染ハそろ／＼庭へしのびいで京眞田の帯チ松の木へかけてはいのぼりなんなくへいのしのびがへしをとび下る下に

へかれてあいずの半九良　さらしの手ぬぐひにてほうかむりチしてたつている）［染］半九良さん［半］お染かし
ゆびよくいつてうれしい　　［染］人めにかゝらぬ内はよふころして下さんせ　［半］いふにやお
よバんこよいのしぎたとあわれるをたのしミに一日〳〵とおくつていたが此ごろでハおぢごの内にも
いられぬしぎモウ〳〵うき世にあきはつた（マヽ）早う手に手をとりかわしあの世のたびがたがいのたのしミ
かくごハよいか　［染］アイなむあミだぶつ（すでにあやうきその所へはやまろまいぞとこへをかけこかげないで
ゝ袖にかくせしちやうちんさしだせば）［染］ヤアおめへハ　［半］如琴さん　［如］コレサこへがたかひとちやう
ちんふきけし　ふたりをともなひたちかへるとおもへば　さむるはつゆめは松風亭の机上にもたれし
さく者如きんがおもひのゆめ　色じやうに身をあやまち食容の權八となるともがらの　すこしハいま
しめともならんかと　書りんなにがしがすゝめにまかせ　しじうのあらましをかきつゞる　余が才の
癡夫なるところハナソレ後のゆうしの委しきをまつのミ

嗚呼御用心〳〵と云し
一休の示しも所謂
如此の徒なるべき乎

大礒新話　風俗通　大尾

跋

如琴子今風俗通を著す是白虎通の虎の威をかり枕に付る比翼文選を閲す儒者ハ周公孔子の道をのミ心盡し學者ハ暦史文章の上に情を用ゆ　蓋通家の一本ハソレしりんせんも深川の五音に通ふ曉は史記おり〳〵の樂も終は其身を過べし然ば親の五經くんを用ひ四書ゥの教を守らば何ぞ生涯身を過事あらんと不佞知タ風に爾云

芝晉交朝がへりのとろ〳〵目でしるす　駧

假廓
南渚

比翼紫

全

竹八十
若者
茶屋
比翼紫
白井権八

自序

遠海の京魚も。此濱に來て。碑を洲先の。ちよんはなに迸。是通ふこと。繁が故也。此地の產ハ。簀をはなれ。青樓をしたふて。淺艸にその名高し。されバ比翼の先生。萬廻時ならぬ權八も花街に遊んで。目黑のすゝつこに。旧跡を殘す。なんぞ是非あらんや。大壯なるが。嗚呼天なる乎。予モ淫女の中に遊んで。なんざむすの當器をたゝき。質屋の水に目をあらふ而已

於宇田樂庵

コヽロノ嬉丸述

干時寛政辛春

パツカリ開酉のとし

假廓 南渚 比翼紫

總目

第一回　駕かきの喧嘩でこゝろやすくなる江戸子の長兵衛

第二回　見通しハ丁よりまさる假宅のせかひ

第三回　戀ゆへにむねをいたむる介市がこゝろ

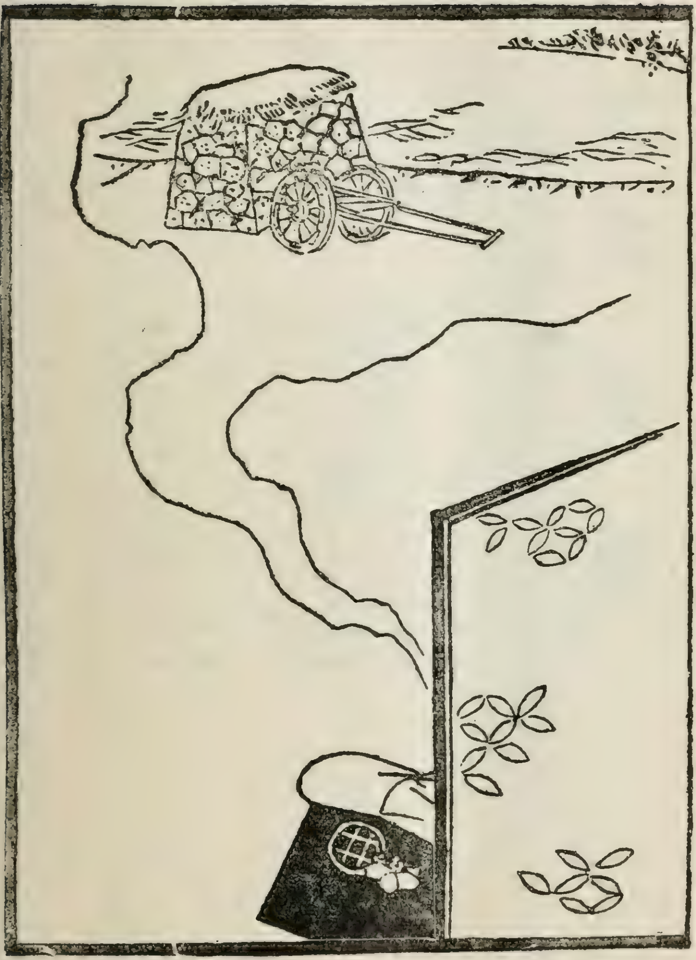
附り　介のしんきいたふうにて
おいらんにきらハるゝ事

第四回　浮氣にて始じうをしらぬ
けひせひの癖

第五回　權八が邪けんに惚る
小むらさきが惡緣

附り　夢さめてひとりでしやれる
南國の二かひ

以上五編



仮廓南渚

比翼紫

宇田楽庵著

第一回

古哥に曰く、日本橋からおつとら馬で、あだな品川通らんすとハ、かきの本ハ人悪公の、詠おかれしも宜哉、そも此品川といつぱ、その昔去大守、此宿に御小やすみありける時、品かたちなまめきたる、女有ければ、大守近臣を召れ問せられ給ふハ、かく女房たちの、あまた有けるハ、いかなるゆへやらん、臣また家の主にとふ、主こたへて、是ハ憂川竹の、流の身なる、傀儡にて候と答大守此よしを聞せられ、たわむれに仰られ給ひしハ、かく品よき川竹のあまた有けるゆへは、今より此地を品川と、となふべしと、仰られ給ひしより、今にいたりて地名となる(このとき大守心のうちにて品川さきの人なまつハどふだとぢぐり給ふ)それ宿のにぎわひハ、のぼる國主あれバ、くだりのひきやく荷あり、嶋金澤の遊客あれバ、嶋のぬのこで付のぼせあり、わる止されての居つゞけあれバ、しやうとなしの人質ありふられて通ふ、ふうたきい、かゝれて通ふ、お國猿も、みなおもひ〳〵のたび枕、げにかた田舎

の人たちハ、こりやアはアけエナこんだと、目をおどろかすも、ことわりなり（こゝにさめずのほうよりかご一てうきたり　くわんおんまへのうへきやのまゑへおろす）［かご］旦な、まへりやした　（トかごのうしろからふじくらぞうりを出しなをす）［客権八］（としハまだ十七八ちとにがミばしつだい（マヽ）ゝぶんなきいろ若しゆなりハうすかきぢよんのかつぱくろらしやのゑりもつとも見かへしハくろびらうど外ハミなともせうぞくなるべし金ものハひいろのいなづまひもハくろの二分さなだもつともすこし長き方うハ着ハれづミがへしのちりめんの小べんけい下着ハなんぶじまじゆばんハちりめんのまめしぼり尤もくろ七子のはん（マヽ）へりおびハはかたのかわりおり銀ごしらへのちよいとしたわきざしと竹やのせいひつのたばこ入と丁子ちやちりめんのながづゝをいつしよにさげにしたるを手にもちおいとかごよりいですぐに茶やへあがり）チイあねさんや　［茶や女］（ミな〳〵上てうしにて）おはよふござりました（トあひさつする女茶とたばこぼんをいつしよにもつてくる）［権］カウなにがありやす［女］ハイかれいと、くろだひがござります［権］そいつア江戸めへだらう、いわずとむだゝが、そのかれいを、につけてなんぞ、ちよつぴら、吸(とう)よふにはやく、こせへてくんねへ［女］ハイかしこまりました、（と行）［かご］旦な、まだお早うござります［権］チイト（一本だしてやり）マア一ツのんでいかつせへ［かご］モシ旦なこりやアちと、おまちがいでござりやせう［権］なぜ［かご］ハテ常(つね)でも四百や五百カアおもらひ申やす、そしてわつちらもおいそぎだからごうぎと、ほねをおりやしたナア棒組(ぼうぐみ)モシ

旦那もふ一本下さりやしな 權ハテ川ばたから、三百でのつて、酒ハてめへたちの、いふ通りにするし、何もいゝぶんハあるめへじやアねへか かごハテそうおつしやりやすな、酒ハどこの、どなたさまでも、お定りいたゞきやさア、それじやアちつと、ごむりでごぜへやしよう 權（このわかしゆいつたひじびやうのかんしやくもちゆへこのをばにぐつとして）なんだと、是エ、むりたア、なんのこつだこ（マヽ）いつらア、くちに問尾場の札がなけりや、（マヽ）ア立場なしに、しやべり通すがわるく、あごたをたゝきやアがると、うぬらが息杖をぶつとめてくれるぞ かご（二人共よつてハいるしわかしゆゆへちとあまくミて）これエ此若しやアいゝかと、思つて、とほうとてつもねへごたくせんを申上ゲたな、コレエコレエうなアおいらチだれだと、おもふエ東海道、五十三次を、きん玉のあいだへおつぱさんで、ふじの山のつき山に、近江の湖の泉水、大井川をどぶつ川と、おもつている、むらさきの雲介さまだぞ、なアんのこつたエおきやアがれ、大もりの茶漬じやアねへが、あんまりやすくしやアがんな、生靈さまの、なすをミたやうな、なまつちらけたつらアしてちうの字も、すさまじひ 棒組だまれエ〳〵コウ、よく物をつもつてミや、なんのこつた、又今時分、ほねを折て、あたりめへでかつひで、つまるものか（ト兩人たがひにいひつのりかごかき共ハよつてハ居るしごん八がむなぐらをとらんとするをごん八その手を取て向へなげ出し） 權何を己（ト身がまへすれバ一人のかごかきこれにおそれてたちよらずそのうち茶やのお

とこ共たちいでりやうほうをなだめてかごかきどもをかへす　かご中の字をいゝながらかごをかついで出て行）［權］あひつらハ、つひぞかごにのつたこたアねへと思て、いやアがるそふだ（トさあらぬてひでそうがんの六角い（カ）もののきせるでたばこをのんでいる）［男］さよふでござります、どふもなりませぬ　（トいふうち酒さかな出る權八一人でのんでいたる所へおくざしきから三十五六のきやくなりハゆふきのあいじまのかつばしよふぞくハ花いろらしやかなものハしやくどうのぼたん上着ハ茶こうしのゆふき下着ハちりめんのかんとうじまじゆばんハとび八丈尤くろなゝこのはんゑりおびハおなんどちやのつゞきなゝこなたまめこじりの五節句こしらへのわきざしとからかハさんとの鐵がなものゝたばこ入をいつしよにもち權八が前へ來りすこしはのぬけたこハいろで）［客長兵衛］モシちと、ぶしつけながら、おめへさんハ、お若（わか）ひに、にやわぬいまのおてぎハ、ヤほんにたのもしい、おかたじやなアト（かんしんがほにてごん八がかほをつく〲とミる）［權］こりやアおほめに、あづかつて、おはづかしひありやアほんの、時のひよふりさ　［長］なにさおめへ、おかくしなさんな、みへていやすよ（ト權八がわきのゑんがわにて白のせきれいばりのきせるでたばこをのミながらうちのおとこといまのかごかきのはなしなしているゆへ權八もひとりでさびしくハあるし）［權］モシはゞかりながら、ちとおあけ申ませうト（長兵へヱさかづきをさす）［長］ヱ、こりやアト（さかづきをとり一ツうけて）ときに今日ハどちらへおいでなすつた　［權］ハイ大師（し）へまいりやした　［長］お一人りでか御しん〲だネ　［權］ナニつ

れも有やしたが、みんな日黑へ、廻りやした（トそれよりたがひにだん〳〵と心やすくさかづきのとりやりあつてしばらく時うつる權八もさんぜんより長兵へがなり風ぞくからことばのよふす少しもすかぬとりなりゆへ心やすくしておくならバたのもしきおとことおもひ）【權】モシおめへさんハ、どつちの方でござへすネ【長】わしかへ、わしやア番通院きん所さ【權】そんなら、おめへさんが、聞およんだ長兵衞様じやア、ござへやせんか【長】イヽエほんにあの近所へ、きなすつたら、ちとおよんなせへな【權】ハイおたづね申やせう　ト（ごん八もきゝおよびし男ゆへはなはだよろこびまたそれよりだん〳〵酒肴いでゝ時うつる）【長】モシなんとこれも緣だが、今やハ宿ハどふだの、したが、おれもよつほど、あにきで居ながら、こんな事をいつちやア、つまらねへノフ【權】そりやアきゝやうだネ定めし、御せかひがござへしやうネ【長】なにさおめエこつちやア、いつこうなものさ、又むすこハさだめしだろうの、【權】なに宿にやア、ござりやせんが高輪に、やけ出されが來ていやす【長】何やだへ【權】玉やでござり、やすのさ【長】おいらがせけへハあつちに居るから、そんなら、今夜ハ、つきやわうハな【權】そりやアありがたふござりやすと（そふだんきまる）【評ニ曰】（こんどのかりたくミなよし原さんじよにて高輪なぞにハなきとなるがかふかゝぬとちと作しやのかつてがわるきゆへなるべししかし古禮のなきにしもあらずだときゝ取がくもんを出しかける）【長】カフかゝさん是でかん定をして下せへ　ト（ふところより二分出してなげる）【權】モシそれじやア、わ

るうござりやすよ　長ハテ（いゝハな）　女まアごゆるりと、なされまし　長そして、かごを二てうたのんでくだせへ　女ハイト（ゆくまもなくかご二てうきたる）　かご旦那方ハどちらまで、おいでなさいます　權いま時ぶんに、どこへいかれるものか　かごハイこりやア、きがきかなんだ、ごめんなさいましチイ棒ぐゝおふとんを二ツ（まもなくかごもできて二人ともにのり）　長權（かごの内から）こりやア、おせハだつけの　女共皆さよふならどなた様もごきげんよふ　かごの衆賴ます、よ

第二回

ダシカラクリカ、リ

ヘ夫遥に、沖を御覽有、誠に、出舟入舟絶間なく、連々として、沖にかゝり、佃新地の挑燈、はるかに物凄く、ちらつき恰も、檀の浦の亡靈かと疑われ、八ツ山ハ、一の谷鵯越の假宅ならんと、思ハれのほせて通ふ、敦盛公を、うしろからヲゝイ〳〵の呼聲ハ、熊谷ならぬ一座の面〳〵、その熊谷の、土手を長き、牛の小、便ゝたる十八丁、げに、その名も高し、高輪に軒をならべし、夕景色ハ諸客の、心を轟かす　かごモシ旦那御茶やハ、何やでござりますネ　權平のやだが、すぐに玉屋へ、やつてくだせへ、ほんにもふ、あんどんが、出たの　かごさよふなら、ちよつとそふ申ませう（トひらのやの

まへでふとざなのいちといふこゑで玉やへおきやくだよふとしらせるのハちとかごかきの方にわけのあることなり）茶や男五郎（かごのあとからせハしなくついて來るかごハすぐにうちへよこづけに付る二人りともにかごより出る）若者源兵衞（きり口上にて）是ハどなた様も、よふいらつしやりました卜（あいさつをしおくの方をむいておきやくだよふ引といふさきへたつて五郎　さこちらへいらつしやりましと三人もろともにかへ（マヽ）あがり見とふしへ座さだまろ）評曰（すぐになじミでハあるし小むらさきが部やへ入そふな所だがさだめしひるあそびのあとにてとりちらかつてあるべし）五郎（長兵へをミて）あなた様、よふいらつしやいました時に、権様、ミなおつれさまがたハへ権ミんな、目黒のかいてうへ、廻つたよモシ長さん、なんと又こふ見はらした所ハ、丁より見通し、ばかりハいゝネ五郎モシ権さん見通しばかりじやア、ちとありがとふござりますネ長そふさ又これも、南国のきもだのふ（トいふうち茶たばこぼんほどなくさかづきだいゐづる）長なんと、むすこ、おめへの心やすい、しやを呼ねへな権そんなら、八十吉と竹がよかろうよ五郎（さよふならミてまいりませうと行まもなくちよふしすゞりぶたすいもの出るとかくかりたくゆへばんじふじゆふがちのせかひなるべしそのうち五郎も來り）五郎モシどなたさまも、ちとおすひなされましト（いふところへ小むらさきがふりしんなるせ　ろうかにて）なるあれさ、よしなんし、いつつけてはしごへ、札をはらせんすにへ（トいきをきつてきたる）五郎モシ日なたへ盛砂をしたやうに、きついは

しやぎやうだの [なる]チヤ權さん、よふおいでなんしたネ、ほんにおみやけハどふなんしたへ [權]ホイひらのやへ、わすれてきた [なる]それ、おみなんし、じつのねへことだぞヨウ引 [五郎]なるさんの、おみやけなら、おゝかた大もりの、やたら漬(づけ)かネモシ權さん御用心をなさいまし、くいもの〻いしゆハこわいものでござりますよ [なる]しつたかすかねへ、人だぞヨウト(いふうちちや屋のおくりもの出る權八ハ長兵へがみゝへ口　おあいかたおミたてハどふだらう) [長]むすこの、こゝろいきのがいゝネト(いふゆへ) [權](ヲゝ五郎が耳へ口そんなら花むらさきさんがよかろふとそうだんきまるかれこれするうち竹八十來りずつと一座のかほをゝ見て) [竹][八十]これハ權さん、あなたよふ、いらつしやりました(ト長兵へゝあいさつする) [長]サアモウとまりハ、きまるし、初(はじめ)よふ〳〵　ト(それより酒事はじまるこのうち八十竹おさだまりの通りのちよとしたものをひきチヤチヤンと仕まうまもなく長兵へがあいかた花むらさき來るとしハ廿一二ちとかみのうすいほうぢよさいのなき風なりハから糸のそふぬいにたてもんのうちかけ白じゆすのへりとりむくかみハ手から(がカ)わけか(けカ)みのうへハ小間ものやの見せのごとくつんとおくめんなしに上座へなをるハところハかわれどさすがさとぶりなるべし) [花]權さんよふおいでなんしたネ　ト(ばかりおさだまりのさかづきのやりとりありてすぐにだまりんでたつてゆく) [權]カウ五郎どん、ちつと、又きせるハどふだの [五郎]ハイまたのどをちと通しませうかネ　ト(れいのきせるを出したばこをのミながらそのきせるをのミそのあとできせる

ツ、からしんちうひばしを出してはなのあなへ入るたかむろがつく〳〵と見て）［禿］チヤこの人アヨおいらんに、いつつけよふヤこんぢうなくなつた火はしを、あのはなのあなからだしんしたよ（皆チホヽ〳〵）［長］カウきゝやうだぜへ〳〵マアおいらにやアめつたにできねへ京の大佛といふ物だ（トかれこれすれども小むらさき來らず權八も初買の長兵へがまへもありまたれいのかんしやくにてぐつとせしがはたをはゞかりさあらぬていにている）［なる］（ぢきにさつしてかむろが耳へ口をよせあのおいらんにはやくおいでなんしといつてきやといひつけてやるまもなくらうかにて）［女郎花住］小むらさきさん、おたのしゝざんすネ［小］なんざんすとへ、ちつともきこゑんせん、ヨト（いゝながら來るなりハむらさきじゆすにひぢりめんのどふにきんしと銀しにて千鳥をぬひつめたへりとりむくばかりにて來るなじミゆへと見へたりかみハしのぶわけいつたいこの女いまだとしハいかぬがはたらきものゆへないおもわくはなはだよろし）ごめんなんしへト（しよふじをあけて座になをり長兵へを見て）ぬしやアよふお出なんしたネト（あいさつをするふうぞくいあつてたけからずどんなぜげんに見せても中三かぶハあたりまへ）［長］モシおいらんヱでへぶ、むすこの顔をおそく、見にきなすつたネ［小］（たゞにつこり　それよりだん〳〵のミつくし　ほどなく花むらさきも來り　このあひだに膳出る　きうろしのわんせいひつむしくひのくわいせきぜんにて出る　とかくかりたくゆへくひものハいつかう出さず　皆はらハよきゆへ茶びん共にならべたばかり　ぜんハ座しきのすて小舟となる　こゝへまたごん八が

内のきん所の野だいこに　ほていの市や　こつくいのせんをはじめとして　白ざや紐のきまぐれども　どふしてしつたかおしかけて來り　うへをしたへと大さハぎ　この所のしやれあまりそう〴〵しきゆへ　きゝとれず　こゝにりやくす　そふかうするうちひけをうつゆへ　ミなそれ〴〵に座しきへ行　げいしやたいこ持ミな〳〵かへろ）

第三回

夫佛說、因果業報と、いふて前生にて、惡をなしたるものハ、今また此世かひにて、むすめ女郎に、きらハるゝも、皆因緣のなす所なりうき川竹の、流れの里に、しばし人のさがりを、せきとむる、戀のしがらミ、女郎ハつらく客ハ又おもしろく、女郎の身のうへに、ふうたきいのはんか通ほど、つとめにくきハなかるまじしかれども、通にならんとてめい〳〵の、作意にあらず、みな前世のなすことなるべし（こゝに二かひ座しきおいらん三ツ花が床のうち）［客介のしん］（此きやくいつたい金ハあれどもふうたきい（マヽ）のさむらいにて少し三八か友藏といふ身ぶりあり年ハ三十四五いしやうつきハ床のうちゆへしよ君子ごさつし）エヽとんだ口があれて、きたがモウきそふなものだト（いゝながら一ぶくついで火入へきせるをいれてかきまハせしがつかぬゆへ手をあてゝミれバ火ハきへてなきゆへ手をたゝけども夜ふけなれバあいさつなし

しかたなしにはだかではい出しあつちらをむいて居るあんどふをまハし手をのばして付んとするにいつかうつか
ずよく〳〵ミれバたばこハなしそこらを見れバ火入のうちにあるゆへとりてつぎすい付る）エヽいめいまし
ひ、きせるにやにがさがつて居たト（はいふきでもなきところへつバをしたるが口がからきゆへうがいをせん
とちやわんをミれバちやハなし枕もとのてうしをミつけ酒でもいヽとちやわんへつぎうがひをしたるがまたそれ
をのミこんでミて）エヽこゝの内ア酒までわりいぜへ（トいゝながらすゞりぶたにのこつてあるからかハとし
らずにつまんで大口にほうばりかんでミてかなゝしかめはき出し）チヽ引からへもんだあいつらアとんだ、
ぢよふだんをして、おきやァがる、ほんにこん夜に、かぎつてこんなつけの、わりいばんハねへぜア、
のどがひり〳〵としてきた　ト（いふところへらうかばた〳〵とするゆへいそいで床のうちへはいりたゞ口がか
らきゆへすう〳〵といつて居る）　評曰（此ところいま迄の小册なれバ油をつぎにくるが（マヽ）ほかの座しきへ行そふ
な場を少しひねつて）　三ツ花（だまりんでしよふじをあけてはいり）もしへぬしやアねなんしたかへ　ト
（いわれて）介（ねたふりをしてたび〳〵こりたものゆへ）なにいままでよくねたが、なんだかうなされ
て、いま目がさめたヨ　三ツチヤどふしんせうね、いつそきみがわるうおすヨ　介なにさ、ゆめハ五
臓（ざう）の、わづらひといつて、なんにもおそるゝにたらずだハナ、どふかこふいつちやア、三ツぼしへでも
ゆくよふだのト（いへどもこのしやれむこふへしれぬゆへだまりん）アヽいつそかれエぞ　三ツなんで、か

らふおすエ 介 いんにやョ今のゆめがョ ト(まぎらかす) 三ツ そんならあの、とんがらしとやらでも、見なんしたかへ 介 おきやアがんなせへ、ばか／＼しい、みなんし、かきやくねんぼうが、きいてあきれラア ト(ふるいしやれないふ三ツ花も たばこをのんでいる 介 コウ三ツ花さん、 三ツ たばこをのんで居るゆへ) 介 (いつたい無手ゆへたゞいろ／＼しあんをして居るこれ前文にいわゆる前生の因ゑんにてかくのごとしこゝをもつてミれバ女郎におもハれんとおもふ人ハ忠孝のみちをおろそかにすべからず) 三ツ モシエぬしやアこんぢう、おたのんもふしんした、ことをおわすれなんすなエ ト(いふのハはやだん／＼とひつこしまひゆへ前かたからミなそれ／＼にきつかけておくのなるべしすけのしんもこのことばにつけこミ) 介 そりやアぬしのいうことだから、ずいぶんせうちさ、そのかわりに又、おれにはぢをかゝせてくんなさんなョ (トいふのハはやくで(てゝ)たきゆへなり此ことばに三ツはな) 三ツ モシエどふもぬしやアいつそ、うハきでおざんすにョわたくしハ、それがしミ／＼苦らうに、なりんすハナト(うろミごへにする) 介 とんだこと、ばつかり、なんにもおいらハくろうに、されるつミハねへョ

三ッ そふいゝなんすな、そんならわたくしがるすに、なぜ源兵へどんをおよびなんして、小むらさきさんのことを、おきゝなんしたエ 介 なにさありやァそふいうわけじやァねへハナのハなからんと

作者曰 (こふしてミれバ女郎ほどおかめからみてハらくそふな内しやうのくがいのもすこし人情を出しすゞりにむかひほろりとなミだホイこれでまァすゞりの水が出來たとぶせうわざをいふ)

第四回

艶道通鑑ニ曰いま時の、人の心當分の、色にほだされ、浮きのねつにもよふして、そこ心からの、なづミにおもわせ、おそろしきちかいをたて、口説に女郎の、あさはかなるハおのれを、たかぶるおもひから、ふハとのつて、すへとげぬことに、うか〳〵となびきぬ、扨かれ〴〵なるを、うらみてむねをくるしめ、いきどふれども、客の方にハ、本よりとふざのうハきゆへ、露見むきもせぬ、むごさ又女郎の方より、しかけたる戀も客つきに不圖思ひそめて、はなのさきのおもわくなれバ、かのきやくの水くさき、とりしめなきをくちおしくとかく、とためらふうちに、ふかく、思ひがほなる人あれバ、そ

のまゝそれにかたむくものなり、又きやくも女郎もさながらわけ道、しらぬにハあらずあれもうたがひこれもおぼつかなくて生涯かたつかぬ、女郎もありこれらの女郎ハ千話りんきハ、すれどもその色男の名を書て釘をうつほどの、ねたミも出ず、又同穴の節を守りて、外にいろ男をもつまひという、まことも、なきものなり、およそきやくの名をかき、釘うつほどの、ねたミハもとより、その色男ひとりを、神ニ守りてそのいとしさわすれぬ心からきやくのうハき心あるを本意なく、いとゞせまきむねのうち、より、ぐど／＼(マヽ)おもひあまりてかこちかたに神のあハれミを、ねがひ奉るなれバきやくの身にとつてハ、ふびんにおもふべきはづなり、かゝる心を、ひるがへしたらんバ偕老の、ちぎりもなどかハるべき、女郎の水くさきハ、きやく又わきの内へ行きやくのわろきハ女郎方にてハ、いかんともすることなし、さすれバ神もあハれミたまハん、魂より灯す、鐵輪の火、めぐる車の、世の中に、捨がたきもの、ならずや、衆客これをおもへ(こゝにまたこゝのうちにてのおてんバものあやいとといふおいらんありいつたいこの女郎生れついてのうぬぼれにてすこし手の有きやく人がもしおめへハこゝろいきがみやうだれとのせてかゝれバぢきにのりほんにぬしやア若いしゆにちかづきになんなさんれへかへなんならまアこの金をおつかひなんしといふふうの女なりそのあやいとが

このきやくよつぽどな色男とみへたり

[あや]それおミなんし、

マアこつちを、おむきなんし　[客乙]あやまつた

ら、ふせうながら、むひてやろう、むかせられるハ、恩ならず、むひてやるのを恩にして［あや］男心の、にくひのもうれしきほどの、やぼになりいしたのさマァあやまりんすから、おむきなんし、さみしうおざアナぬしに、きゝ申いす事が、おすにへ、ゆふべどけへ、おいでなんしたへ、宿とやらかへ［乙］マァおつなことを、いうの黒介いなりが、宿へいつたといふ、うハさハきひたが、おれが宿へいつたさたハ、まだきかなんだ［あや］よしておくんなんし、此花さんが、ゆふべ見通しで、あつちへ行のを見かけたと、おつせへしたサアほんとふに、おつせへし／＼、おいゝなんせんと、くすぐりいすにへ［乙］これさよさねへか、ぶちのめすぞ［あや］そりやアうそで、おすが、此せつ句ハ、どうせうねへ、そして正月もしんせんから、ぜひ／＼このせつ句は、ぬしの名まへで、札をかけねへぢやアどふもわるふおすにへ［乙］そふさ、おれもそふ思てハ居れど、やつぱりまたいつものよふで、つまらねへのさ［あや］ヱゝ、どふもじれつてへのふそんならマアどふせうのふ［乙］どふするものかしかたがねへハ、ほんにまだてめへハ、でへぶくめんがいゝな［あや］フウよしなんし、こりやアみんなしよふべひ道具で、おすハな［乙］そふいふな、それでも時／＼、おれにかすじやアねへか［あや］（乙がかををつく／＼と見てにつこりわらひ）そういゝなんしても、どふも（トかをゝかくして）まよつていゝんすから［乙］べらぼういふな　ト（うつむひてわざとなにかしやんがをにてだまりんでいる）［あや］モシヱ／＼どこぞ

わるかァおつせんかへ 乙 なにどこもわるかァねへヨト（やはりふさいでいる） あや ぬしやァなぜそんなに、ふさぎなんすへ、どふもくろうざんすから、そのふさぎなんす事をいゝなんしな 乙 ふさぐめへとハ、おもへども、こうてめへの所へきながらおいて、節句の、しまひが一ッできねへのミならず、又このごろハ茶やにハ、どんと下りハ有し、けふもてめへにほだされて、こゝの内へハきたものゝ、よくおもへバ、あすハかけ日モゥてめへにもそう〳〵ハいわれもせず、そふしてみれバ、しぜんととまるおれが足、しよせんまた、とまつてみれバ、いつまでもうか〳〵年月ハおくられねへト（わざと目をふさいでためいきをつく） あや モシエあのたよりに、おもいんすおめへさんが、そんなしんなことをいゝなんして、わつちやァどふしんせうネそしてマァそのさがりハ、いくらほどありイすへ 乙 なにさモウいゝどふするものか あや そんな、きのよハひことをおつせへすな、いくらほどあれバよふおすかモシいゝなんしな〳〵 乙 それほどてめへがいつてくれるけれど、どふもあんまり あや きのどくだと、いゝなんすのかへ、そりやァぬしの心に、へだてなんすからのことでおすサアモシいゝなんし〳〵 乙 そんならいわふかどふも あや アレサマァいくらでざんすへ 乙 今こゝに、十両ほどもあれバ茶やの借も此節句まへも出きるのさ、しよせん夫だが、あんまりきのどくだ（ト心の内でしたを出す） あや モシエそんならこゝに、どうも此せつ句前にぜひ〳〵はらいゝしやうと、おもつてこしら

へて、おきんした金がありいすから、これをマアつかひなんし、あとで又くめんをしんしやう、ぬしのことだものヲどふするものか（トよふだんすの下のちいさなひきだしから出して乙がどんぶりへ入たばこをのんでまた一ぷくすひつけて乙にやり）乙ほんにマアてめへなりやアこそそんなにおもつてくれるわすれハしねへ あや そりやアそふと、ほんにぬしやアわつちをよんでおくんなんすきかへ 乙此ごろハ、でへぶぐちになつたぜ あや それでもモシぬしの、とつさんやかゝさんが、ふせうちな時ハ、どふしんせうねへ、それをおもふと、死にたふおすヨ 乙それよりまだ先が丸一年四月と、いふものだからそのうちにハ、そつちにとんだことが、出きるだらふ あや よくつもつてみなんし去年の五月から、このかたわつちが身のためにもわるし、ぬしのためにもわるひと、度(たび)〳〵あきらめんしても、思ひきられんせんものを、ほんに悪縁(あくゑん)でおつせうヨぬしもそふおもつて、おくんなんし、あれさ又ねなんすな、はなへこよりを入レんすにヱ 乙これさあやまつたよ、こんやハむせうにねむひ、これたばこを吸付てくりや、てめへおれがことばかりそんなにいふが、おれがかをのたゝねへよふなことをするなヨこんなのろひ句を、出すやふになつちやアたまらねへ あや まだその、やうに、うたがひなんすから此(マヽ)うへゝ(マヽ)ゆびの二本や三本ハいとイヽせん 乙てめへにゆびをきつて、もらつたとて、しほを付てやひてもくハれねへ あや そんならどふすればよふすじれつたふすニヱ 乙なにかあじ

にゑきもねへことをいゝ出シた、すこしはらがきたハへさつきそこにあつたハなんだ［あや］ありやアよしなんし、土地(とち)のもちぐハしざんすから、あすこに町から、もらいんした仕切場(しきりば)が、有んすから、出しんせうかへ、(マヽ)そいつハあやまる、れいの小梅の、かり〳〵するので、茶ずりにしやう［あや］これ〳〵久兵へどん〳〵、これさ、ごせうになるからの、茶づけぜんを、一ぜんこせへてくだせへヨト(いゝつけるまもなくぜんも出るあやいともほかのきやくならバくひもしまいがてまひも乙があとでくひよふじやつかいながら)［あや］モシねころびなんしな［乙］めしをくつて、じきにねたら、うしになるだろうの、

［評曰］(それ前文にいはゆる浮きのねつにして手前のうぬぼれより出るわざわひなりずいぶん女郎ハうぬぼれをつゝしむべしきやくもまたしかりこのよふに女郎のものを引ミんたんハあまり不人情なりしかしとうせいのきやく初買からみなうぬぼれにて出きぬまでもとかくわかひものなぞをさせたがるものなりつゝしミたまへやうぬぼれ〳〵)

第五回

戀(こひ)せずバ、人の心ハなかるまじ、と詠(よみ)たるハ情(なさけ)をしると、いふことの葉(は)にして、性(さう)わるの、いたづらぐるひせよとの、ことにあらず（こゝに又一本ぎの色いか象權八ハ今までのせかひと事かわりいとしさあまりてのむつごとけんくハそれといふのも權八がかんしやくにて初買の長兵へハいゝしさつそく座しきへきそうなものと思て居るゆへなるべし）小紫モシエぬしやアマアどこぞ、わるふおざんすかへモシエこつちをおむきなんしな　ト（いへどもあちらをむひてだまりんゆへ　權八がまへのほうへまハり）モシエぬしやアさだめしなんぞ、おきにさハりんしたことがありんせうネコレサごせうざんすから、きげんをおなをしなんしな　ト（いへどやつばりだんまりゆへ權八がかをゝつく〳〵うちながめしバらくあつてちとうるミごへにて）たとへわつちが、ものごとに、いきとゞきんせんことがおざりんしても、なぜ（まこ）そそれをそふとおつしんして、おくんなんせん、たゞだまつてばつかり、おいでなんすほど、なを〳〵すへがもしやと、おもわれんして、かなしうおざんす　ト（なにかことばもあどけなくせけんをはゞかるしのびなき）權（しぢうともにねむつて居たるが目をひらきものをもいわずまくらをとつてぶちのめし〳〵）なんだといやアがるものごとにいきとどかねへ、ことが有なら、いつてくれコレエ、てめへたちやア日

ごとにかわる、ごぜんせひおいらァ今ぢやァおもてむきこそこふして居れどナ（このところすこし小ごへにて）手めへゆへ、内せうハ大きくつまらねへハへア、これを思へバ、御両しんの御いけんがいまこの身に、あたつて、しミ〴〵と目がさめたハへそれといふのも、みんなこつちのわりいのかへァむじやうな、世の中だもふ〳〵、なんにもいふめへ〳〵ト（また夜ぎひきかぶるをよふ〳〵とおしとゞめなミだごへにて）[小]ほんにおまへさんの、お身のうへをしんじつ、堀の内のおそしさんかけてあさ夕へんしも、わすれハしイせんほんにマア外の座しきで引哥の、五大力さへ、きにかゝりんすハナどふぞモウごせうざんすおがみんすから、きげんをなをして、わらひがをゝ、おみせなんして、わたくしにうれしがらして、おくんなんし、そしてマアあの助市づらがことにつき、ぬしにマアおはなし申しんすことが、できんしたよ ト（いゝながらそこらにおちしくしこうがひのおれたるをみすがミへツゝんでおしかくしかみなであげてモシヱモシヱトしんじつおもてにあらハれてかこちなくこそあわれなり）[權]（もちまへのかんしやくゆへいつたんハこふするものゝさすが岩木にあらざれバ介市がをゝいひすこし心を取なをし）コレその介市がどふしたのだ [小]そんなら、きげんをなをして. おきゝなんすかへ、ほんにうれしうおざんすヨ（トきうににつこりわらひがほ）[權]ふせうだが介市がをといふから、きひてやるのだ、そして手めへハ介市がほうへ、いきてへといふので、そんなにうれしがるのか [小]あれさどふい

へバこういふとつてにくひ口だのう 権 べらぼうづらめへ、このにくひ口にハ、だれがした、そして介市がどふしたのだ、はやくいへきにかゝつてわりいわへ 小（こゞへにて） マアおきゝなんし、あのとふからぬしに、おはなし申しんすとふり介づらが、わたくしを身うけしんせうと、もふしんすもよもや〳〵と、思て居ィしたが、あのにくらしひ、わたくしを思ひんして、こんぢうからぶら〳〵、わづらつて居んすとサ、それで、はゝおやのりやうけんにて、あに介のしんとやらを、たのみんして、わたくしを、身うけして、とをいお國とやらで、そハせたひと、おもつて居んすッサそれでこんぢうから、こゝのうちへ、きんしてミつ花さんを、あげんして、とふまハしに、わたくしの心いきを、聞んしたり、晝（ひる）も源兵へどんを、よびんして、なにかいろ〳〵はなしんしたッサそれにマアそのすけのしんとやらが、ミつ花さんにまよひんしてむせうに、あしをちかくきんすッサそれでみつ花さんの、しんじつで、宵にわつちを、およびなんして、なにかをいろ〳〵、おはなしなんして、おくんなんした、それでぬしがおいでなんしたを、しつて居ィしたが、つひおそくなりんした 権 ヱヽ、べらぼうめへいつまでいつても、ねつからわからねへハヱそんならなんといふ、ミつ花さんのとけへ、あに介のしんが來て、手めへをとつくと、見たうへに源兵へどんまでよびよせて、手めへのはなしをして、身うけせうといふとか、どふだそふかヱヽねつからわからねへやつだぜへ ト（おふきくせきこんでくる）

【小】（なきごゑにて）そふでおすョもしひよつとそふなりんしたら、わつちやァマァどふしんせうね
　　【権】シテモウねへしやうで、手めへをよんで、はなしがあつたか【小】いんへま
だひるの、こつておすから、はなしハ、おつせんがモウさだめしおつせうよ【権】（がんしよくかハり
　　うでぐミをして）はてなァモウうか〳〵こふしちやァいられねへハヱ　ト（くびをかたむけため
いきをついてしあんする）【小】（こゝへになりて）そんなら、いつそ旦那のごおんもわすれんして、こゝの
うちをにげ【権】（こりやと小むらさきが口へ手をあて小ごへにて）なんの女のあさはかな、どふともこふ共
おれがむね【小】そんならぬしやァどふいふりやうけんでおす、それをきかせて、おちつかせておくん
なんしヱ　ト（しぢうをばもむせびなき）【権】（ずつくとたつてびやうぶをあけあたりを見まハし小紫が耳へ口）
これよくきけョどふであつちやァ金びらで、この権八に、はなあかせ、つれてゆくのハ、しれたこと、
又そうなつちやァてめへより、このおれがかほが、たゝねへモウこふなつちやァ百年めだしてその介
のしんハあさハはやいか【小】アイミつはなさんが、あさハいつでも、はやいとおつせへした【権】ム、
さひわひ、そんならいつそあすの朝(あさ)すけのしんめを、人しれず【小】どうしなんすへ【権】（こゝへにて）
ぶつぱなすハ【小】（ヱ、引トこん八がかほゝミてふるへながら）それからあとハ、どふしんすへ【権】そう
すりやァまた介市めも、おりを見合せぱつさりとこの世のいとま、そしてあの介のしんめがくわひ中

にハ、たしか金がフムモウなんにも、あんじるな 小（さすが女のむねせまくそらおそろしきたくミをきゝたゞぶる〳〵として居たるがおっとにつれる女ぎゆへ）ぬしやァそんならあすのあさハ、はやうおすかへ 権ソウサはやくいかねバ、りくつがわりいァ、そりやァそうと、長兵へどのに、ぎりがわるひが、それもどふも、しかたがねへおきたら、いゝやうにいつてくりや 小そりやァわたしが、のミこみイした、それでもマアちつと、おやすミなんしても、よふおつせう

増上じのかねコフン〳〵〳〵）権八ゆびをおつてミて、あれあのかねハあけ七ツちつともはやく、けへろう〳〵 小ワ（マこ）（よふだんすのひき出しからうハぎとかつぱを出してきせゑりのおれたをなをしながら）ほんになにかに、きをつけなんして、けがをかならず、しなんすなへヱ、モいつそくろうざんすのふ、そしてマアいつおいでなんすへ 権あさつての、ばんにこよふハナ ト（二人ともにろうかへいで）小これ〳〵ねづ番どん（ねづはひ〳〵としきにきたり）ねづこれハ権さま、とんだおはやうございますネ（トさきへたつてはしごをおりるあとより二人りばた〳〵）ねづチイ源兵へどんおかへりがあるヨ（源兵へふとんをはねのけこしをかゞめ）げんだひぶ、けさほどハおさむうございますト（あいさつしながらおくへ行こしの物をもつてきてわたしこしよりかわのふくろにいかひをついているかぎを出し大きなちよふをびんとあけく〳〵りぐゝら〳〵〳〵）権カウ源兵へ

どん、平のやへハ、あさつてのばんに、こよふといつてくだせへ【げん】さよふなら、すぐにおかへりなされますか【權】ちつといそぐからよるめへヨ【げん】さよふならおかごか、おてうちんでも【權】なにあるきやせう、てうちんもじやまだ【小】モシエそんならかならずヨ【げん】さよふなら、御きげんよふト（もろともにくゞりぐハら〱びつしやりぢよふハびん引）【評曰】（このところ廻り仕かけにて大木戸のかゝりになりごん八と介のしんがたてのあらん所なるが丁數のびろゆへ後へんにこれを出すいまのくゞりのおとにびつくりして目をさますのハ日ぐろがへりのきやく人にてこれもやつぱりきひたふうの男）【太介】ウ、（引とのびをしながらそばを見れバ女郎いづ（マヽ）しかたなしのひとりごと）ほんにとんだ、おつなゆめをミたぜへ、きのふひよく塚へまわつたせへか、たしか權八がゆめだつけか、はてな、なんのゆめだつけなト（すこしかんがへてミて）ゆめ〱うたがふことなかれだ、しかしあのあまアゆめ〱しひやつだト（むせうにびとりしておもいれしやれをいつているのハ南國の大かなわのせかひとかわる）まだはやへがおもしろくねへうちだから、けへろう〱（トしたくをして一座のへやをよびおこすゆへほどなく忠介や七藏出てきたり忠介ハだまりんでわらつている七藏ハおびをおつこちそうにしめて）【七】太す公、ふるかの【太】いまハふらねへがさつきふつたヨ【七】（ちとちいさなこへで）なむさんひき窓をあけてきたが、まだおいらが、ろじハあくめへ（此きやくむすこかぶのふりなるがこれにて一人りものとしれたり）【太】なにモウそんなにはやかアね

へかごかきが出たぜ(すべてこのしゆくのかごかきハ九ツより引こんで七ツにハ出るゆへなり)そしておいらハ、ちつとはらがすきやがして、目が丸や丁だ(このきやくさだめししんばしものと見へたり)サアいかう〳〵ト(むこうにあるたかつきをのぞひてミれどなにもなきゆへたかつきのかミではなをかむ)忠そんならいかう、七公おびがはづれるぜへ 七チイサアいきやせう ト(三人ともにはしごばた〳〵とん〳〵〳〵)
おしほ おりきそんならこなひだにへ(ト忠すけや七ぞうが女郎ハおくりしが太すけが女郎ハおくりもせずかふしてミればよつぽどあしくされたと見へたりわかひものくゞりをあけてひもでくゝつてあるぞうりをなをしながら)若イ者さよふならどなたさまも御きげんよふ。駄ちん馬ひん〳〵

假廓
南渚

比翼紫

自跋

我嘗てもつて小册を選す其文拙のふして浮る屎の如し故に諸君子目を舐でこれを見る者なし嗚呼馬鹿な顔だ屎があきれると尻をぼつ立て屁をひり附ん事を畏れ願ハ屎なき處へ置てくむなんしとしかいふ

宇田樂庵誌

言告鳥
二篇

廓之櫻

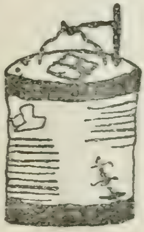
全

言告鳥
二篇目

廓乃櫻

道具替れば。本戯臺一面の花。すべて。よし原仲の町の景色なり。夕ぐれの聲華。植込しげき櫻木の。下艸の挑灯は。坊主禿の丈より高く。程よくならぶ床几にハ。伊久大臣のミへよく。煙管の皿より。高慢の脂口に通じ。頻りに愛す。其髭ハなく。延る鼻毛ハ。腹を過る、是にとりつき。若衆の怒。鉢巻ならぬ頬冠り。人目を忍ぶ。助六に。我とわが身を。總角の姦夫狂ひも。終にハ遣手の目付柱に隔られ。面白酒で。苦勞酒を。呑ども不醉。覗どもうかぬ。花のもと。聽ども聞えぬ。左右の。茶屋揚屋ども。いづれ賑ひに。三弦彈たてる幕明。

酉の
はつ春　　梅暮里谷峩序



目録

初幕　三浦のだん
二立目　異見のだん
三立目　縁切のだん
四立目　待伏のだん

廓の櫻

梅暮里谷峩著

二番目初幕

月折〳〵雲を覆ふ事なくバ人眼を破らん花も風に散らずんバおしまるゝ事もうすかるべしされバつとめの身のうへにも關るれバこそ心をあらわし實ある事をしられ慕ふハなぜかとをさかり思わぬ人ハ又しげくしかもいやなハ金があり通ひにかよふ其人ハあいもかわらず此大臣「伊久」なんじやふゝを見てゑらふおふさわぎじやのコレ聞へぬぞや命から二番目の大事の金をつかつて來るハ外聞のわるひ事じやがゑろうほれねばこられぬに寐もせずおきもせずそのやうにつくねんとしてどふしてくれるのだあまり不人情であらふそれといふがアノ介六にたてる心中でもあろうがハテ助六とわしがしつた中でハあるまいしおれにあつたとて何にも介六がやかましく云ふ譯もあるまひそして助六ハせかれてあげられぬでハないかそんなら猶更のことだマア男へ心中たてゝあわぬなどゝいふハそりや高雄薄雲小紫の時代の事とんと今どきはやらぬことだ今でそうはりのつよいのハ芝居の女郎ばかりあんまりかたいツリヤとんとやくたひといふものコレ來ル夜も〳〵ひとり寐どふぜん介六ゆへにこんな目にあわせられ

てハ京町へきこえてもたゝぬぜひ一度ハあつてもらハねばならぬ揚卷マアそう思ふてたもれ 揚卷 わたくしどものやうなものでも嘘にもそふいつておくんなんすハうれしうざんすがおめへさんこそふにんじやうでざんすハ い久 なぜに 揚卷 さればでざんす若むらさきさんがいつそほれていなんすと世見のうわさそれをミすてゝお出なんすやうなうつり義なおめへさんにどうまあ心がゆるされへすものかへ い久 いけねへよしてもおくれマァきかんせおまへがたにすかれるにハいかにも東なまりでなけりやうつらぬと思ひいつぞなしに云ひならうてミてももちまへの詞ともちやくちやになつてとんとむちやじやぞへアノわかむらさきが事いゝわけがましく云ふでハないがしつてのとをりアノ助六とはじめのうちハはりあふた所がこふいふてはおかしらしいがこれづくでハ(金のことなり)どふして介六などの歯のたつのでハないそこでどふやらこふやら助六ハつまミだされたじやて 揚卷 そんならおめへさんの十分といふものでざんすすれば助六さんに恨こそうけなんすはづだにぬしをかれこれと云ひなんす事ハありそふもねへ事でざんす い久 そこじやてどふやら見へハよいやうじやがかんじんの逢方ふせうちとミえて介六の來る内ハさうをうにしてあそばせたがアノやらうがつきだされてからといふものハとんとろくな顔をミせぬなんじやつてももん日もの口ハいふにおよばず正月なぞハ百品たらずこしらへてやつたその恩もわすれいゝたひまゝの氣隨氣儘マアそれもこらへてやるまいものでもないが

其事故痩衰へめしもろく〳〵くわぬとのことゆへコレ若紫なにが心にかゝつてそのようにわづらふといふたれバアノめろうがいゝくさる事を聞てたもれアイわたくしハ人の中ごとでいのちにかけてしとふお人にあへないわかれをしひしたゆえ其事が明てもくれても心にかゝりそれで此やうに煩いすといふからおれもむつとしたゆへそりや誰といふたりやそのように根どひなんせんでもようざんすおめえさんがおきゝなんしても害にこそなれどうでらちのあかぬ事でざんすとどふかわしがくるゆへ介六との中を裂よふなあてこすりをいゝをるゆえあまりけたいがわるいさかひなんだへ手前ばかり女郎でハあるまひしおれがこねばそちらこそこまらうがわしハことのかけるとハミじんもないとおもいれいゝたひ事をいふたればあの女郎もとしハいかぬが氣のふとひあまじやすこしもうてるやうすなくあいそづかしをいゝおつてミれんなしにわしをつき出しおつた側ではおれが事ゆへいろ〳〵にいふてとめれどもわしも男じや何にもきゝわけずにかへりそれぎりに手をきつて仕もふたもこれミな介六があるゆへおこつた事わしもぐわいぶんがわるひから一ばん顔をふまねバならぬところにかねておまへをミそめておいたゆへ折しも介六がおまへのところえしのび〳〵に行とのうわさはてよくした物こゝこそ仕返シによいところとおもひまたおまへもいき地のあるといふひやうばんゆへ此事をあからさまに咄たならさだめて介六をつき出しわしが顔をもたつてくだんすじやあらうと思つてあめのふる夜も雪の

夜もいとわひで通ひかよつて實をミせても馬耳風畫面水くわしい事をいゝ出すをりがない此わけいふからしては一ばんたてゝ下んせ 揚巻 おめへさん共やうに事をわけていゝなんすからずいぶんきゝとゞけてあげとうざんすがそうしいしてハこつちのつがふがわるうざんすからどふもそうハされんせん

い久 そりや介六ゆへか 揚巻 なんでざんせうともよふざんすそれだから初にお出なんしたときわたくしがところえお出なんすハうれしうざんすがわたくしハ氣隨なものゆへどふでおめへさんのきにハいりいすめへから跡でかれこれおいゝなんすなへとことわつておきゐしたわたくしハつとめの身の(マヽ)上へゆへお出なんすれバ出ハでんすがいつまでおいでなんしてもおなじ事で氣のどくでざんすからせんども外にきにいんなんした女郎しゆがあらバ隨分おかいなんしそれとも外の内へいきなんすともかならずゑんりよはざんせんとまでいゝしたも人にしられたおめえさんゆえ跡で皃のよごれぬよふにと思つていゝしたそれもきゝいれなんせず通ひつめなんしたを恩にかけてかれこれいゝなんすが此うへなんといゝなんしてもむだでざんすからもふなんともいつておくんなんすなまた此うへに氣にさわる事や顔のよごれる事ができてハわるふざんすから い久 そんならおめえもおれにくるな といふのか

揚巻 わたくしハ今いふとをりの身ゆえそりやおめへさんの心まかせになんすがいゝ

伊久も助六をつきださせ思ふまゝに若むらさきの顔をふまんとおもひしにあんにさうゐの事な

れば心のうちにハなぜあのよふに介六にはほれることと一度ならず二度までせきたつ心をしつめ着ものをきかへふくれかへり

〔い久〕羽織を出して下んせ　〔揚巻〕おかいんなんすかえ　〔い久〕どふでわしどもがいふ事ハきひてもおくれぬゆへ歸てこゝろよく寐よふそのやうにうれしがつていそ〳〵する事ハねへ　〔揚巻〕それでもあとで寐いすから　〔い久〕たれと　揚まきばからしいひとりさ　〔い久〕とんだゆめをミてとんだめにあわぬよふにするがいゝ　〔揚まき〕其時ハどふともしいしやうわな

伊久心ならず思ひながら足音あらく下へゆきもはや九ツ時てからまもなきゆへ茶屋の男まだはなしをしてゐる

〔茶や男〕旦那なぜおかへりなされます　〔い久〕なぜでもいゝからはやうはきものをだした〳〵

とふきげんに久しきものと思へども何かうろたえるよふにもてなす揚巻も新造早蕨を引つれ大門までおくる道すがら

〔さわらび〕アレ〳〵お星さんがとびいした　〔い久〕アノとんだほしを夜ばい星といふがしつてゐるか

〔さわらび〕ばからしいそんなおほしさんがありますものかへ　〔茶や男〕とびハとんだがどこへいつたかしれませぬ　〔い久〕それでよばい星といふあれでもどこにか隠れてゐる此くるわでいへバ人の金銀を出

して揚て置く女郎を一文なしのならずのくせに色狂ひそれじやによつてしのびかくれてぬすむじやすれバあの星もよつほど錢氣のなひほしとミへるあれこちらの星の光りのよい事ハあれをバ黄金星ともいふであらふまた金の光りハかくべつなものじや [揚まき]どれでざんす [茶や男]アノ一チばんにぴか〱するお星さまさ [揚まき]アノわるひ光りのするのかへすかぬおほしさんでざんすねへわたくしハそのよばいぼしさんとやらがお星さんでもそのよふに心づかひをしなんすとおもへバいつそかわひそうでざんす [い久]にくむべきをかわいそうと思ふもの〻あるもうき世ハさま〴〵じや　[茶や男]それでもつたものでござります

　といふにはや大門なれバあげまきハそこ〱に引かへし介六が茶屋へきたり

[揚まき]よくまだねなんせんね介さんハかんしやくをおこしてかえりハなんせんかへ [茶や女房]かへろうとおつしやるをやう〱とめ申て置ました [揚卷]そうでざんしたろうおふきにおせわで返事をかきてえにもなんのかのと邪魔がいりいしていつそじれつとふざんしたあの客人をかいそうとおもい〻してもきをまハして意地にか〻つてい〻すからどうせうと思ひいしたが今夜ほどまじなひのきいた事はざんせん [女房]そんならお客人ハおかえりなされましたかへ [あけ卷]アイサかへりひしたよ今夜ハ不寐が五郎(マヽ)衛どんざんすから遠眼がき〻んせんからつれ申てまいりり(マヽ)んせふ　(折から介六二かいより下

り）［介六］今夜ハ伊久がきたといつたからまただましだらうと思つて歸らふとおもつた［揚まき］わたくしが思ふようでもねへ久しい氣ゝじかさ　サアおいでなんし［介六］いゝかえ

相談もそこ〳〵にて夜ふかきこそ首尾なれとこわひ事も打わすれ戀路のやゝのくらまぎれなんなく二階へしのばせる

［揚まき］これ〳〵さわらびさんごせうでざんすから其火ばちでかんをしておくんなんし助さん油をつぎにきいすから床へはいつておいでなんしな［介六］なんだかなまあつたかいとこだぞ［揚まき］ほんにさうでざんせう上下へしきかえてあけ巾いせう（忍ぶれバこつそりと引しまいて）［助六］久しぶりで女郎かいにきたようだ［揚卷］人聞のいゝうそをおつきなんし　よふかしいかずにいなんせうしかししれるときゝいせん［介六］いゝ事をいふもんだぜおれハ氣づかひねへが手めへ伊久にくどきおとされぬよふにしやいつかせうちしたもしれねへ［揚卷］おふかたせうちしいしたらうよそれを手にもされなんすめへわたくしハおどけにもあのよふな心ねえ事をいわれるとはらがたちいすわ［介六］チツトごめん〳〵［早蕨］サアかんができんしたがなんでおあけなんすえ硯ぶたのものでもあげんせうかね［揚卷］そりやよしなんし伊久さんがたべちらしなんしてきたのうざんすアノ茶だんすの内に鯛のみそ漬がありいせう［早］ほんにそうざんしたね［揚］それと介さんハ五分切がすきでざんすからそれをだしておくんなん

し［早］やきいせうかへ［揚］よふざんすあとハわたくしがしいすからねなんし［介］それでも一ツのまねへか［早］アイ［揚］あの子ハ寐るほうがかつてでざんすそれとも一ツのミなんすかえ［早］いゝへそんなら介さんおいらんおやすミなんしこゝにおりいすから用があるならおこしておくんなんし（と次の間へゆきねる）［介］きどくな子だよくせわをする［揚］アイサたのまれた事ハひかぬきせうでざんすサアおあがんなんし（此うち少ゝ酒事あり）［介］マアよく伊久ハかへつたの［揚］マアおきゝなんしいつそぐちをいゝしたつけがはじめからことわつておきひした事があるからわたくしもしんびやうにしてやりひしたらきつくちいわれず腹をたつていろ／＼なあてこすりをいゝして歸りいしたそしておかしひとだし（マヽ）てハざんせん手めへでもなまぬるい詞だと思ふかして江戸の詞をつかふかと思へバまた上方のこと葉をいゝすからなんだかわかりいせん［介］そのはづよ外へ出れば江戸ことばをつきあふ内へ歸るとかゝがたことばのものがおゝいから乞食の狂言といふものでかたゝ替りだ（此事あげ卷にハ一ッかうげせズ）アノ伊久といふ男も敵どうしでもあるかよくおれをにくがつてハ邪魔をする［揚］アイサおめえさんが若紫さんのところえいかねへよふになりなんしてより手一ぱいにしようと思つたところが思ひのほか若むらさきさんにつきだされそれもおめへさんゆへだといゝしてそれでわたくしがところえ來て金でせかせおめへさんのほうをまづくさせよふと思ふも手まへの心に引くらべ あんまりきたない心で

ざんせんかそれでもおめへさんとはりあふ氣があつかましうざんすね〔介〕わかむらさきも年がいかねへとはいゝながらばかなアノ客をはなれたらこまらふと（すぎし間ちがいの事おもい出しかわいそうと思ふにや少しふさぐ）〔揚〕なる程人のことだからそうハおもいひせんがわかむらさきさんの氣になつたらマアどのやうでざんしやうかわたくしならぢきに死でしまいゝすおめえさんの心でハわたくしにかうつながれなんせずば此ごろハ間ちがいの訣もたちおいでなんすやうにならバもとよりハ猶ふかくならふにと思ひなんせうねどう理でおめへの皃のたつようにはれて呼びもふしいせうといゝしてもきゝとゞけなんせんはづだ〔介〕てめへもぐちな事をいふもんだどふかおれが心でものこつているよふなことをいふがたとへ心のうちでどふおもつたとてアゝりつぱにつきだされたものをどのつらをさげていかれるものかまたはれてよぼうといつたを新造買ではじめつからはかなく來てさへ此とをりはでに來てなんだつてたまるものかなる程なミ〳〵の仕打なら一ばんはれてあがるやうになりてへものよそうすればいつたんハ京町へつらあてといふもんだが直にせかれてミればやつぱり外分もわるしおらァ若むらさきのにくいより手めへにはじめつからまよつたからすこしもながくつゞかうと思つて義理も恥辱もうちすてゝいるに其やうにうたぐつてはうらミだぜとハいふものゝすへがつまらぬからおれにかまわず手まへもちつと氣をとり直し客人をあんまりふらぬようにして内所のまへもよくなるがいゝ〔揚〕

そしておめへさんハどうなんすへ　[介]おれが身ハどうならうが力業でもできるならかせいで見る氣もあるが此痩骸でハいかねへしたところが寶舟をおつぱじめてほし大根やしんまいわかめしぶうちわ奈良團扇はしら暦にお神酒の口となんぼ世わたりなれバとてどうまあそれが出來るものか生恥をかこふよりもおらあとふからかくごして居る　[揚]（わつと泣出し）あれあんないまわしひ事をいゝなんすたとへそういふようになれバ跡になんの殘りいせう

と互に愚痴の折から伊久ハ立歸る二人りハうきもどこへやらそう／＼夜着の裾へかくしそしらぬ顔にもてなせば

[さわらび]おめへさんハぶ遠慮な　人がとめもうしいすも聞いれず外の客のいまいものでもありいせんにばからしい　[伊久]何外の客だほかのきやくが居やうはづがない　尤客の落あふときハ本客の歸つた跡へ入レる事もあるじやあろうが今わしがかえるまでハ客の有るさたもきかなんだがたとへあつてもあすの朝までハわしが本客じやによつてどこぞにしのびかくれてゐるやつがあるなら名代座しきへさけてもらをうぞやハヽアあの夜着の裾のむく／＼ゆえおれがじやまになるのじやの　[早]おめへさん其やうに意地のわるひ事をいゝなんせずとうつちやつておきなんし鼠でざんせう　[伊]イヤうつちやつてをくまひそれよりかしかけた小便しておいてうろたへずともよい事にまたねづみならあたまのくろ

い鼠じや　この伊久といふいちもつの猫がミこんではこれがほんの袋のねづミ　何もかも見とゞけてきたのじやイヤ介六とやらぬけろくとやらだいぶ名の高ひ人ときひたがまだ聞ちがうて知る人になりませぬイヤ一寸大義ながら爰迄出て下だんせコレいやかなぜに返事をさんせんめんぼくないのかいかさまそうでもあらうそんならこれからいゝますぞやわしハ上方生れなれど御當地にばかりゐてありがたひ事にハ金といふものが大分あるゆへ子ぶん子かたといふてもないがマア人にたてられる伊勢久といふものでごんす一躰をんくわでなひひげなれど撫て居てひとまかせにするゆへ此廓でハ髭の伊久ともいふ大臣かぶ以後ハ心易したいものじやがいやじや名にもはぢず人の金銀をだしてあげた女郎を盗或ハ客の歸つた跡へつけこミ仲の町でハ引づりこミゐろうむまいぬすミをさんすの抑つけよいぬす人になるであろう　末たのもしひのといわれるが口をしくおもハヾ紋日もの日も此伊久のとをり人にいわれぬようにするがよいそれでもあきたらずハ身請して内えつれていねばこゝろいつぱいそりや誰でもなんともいふものハないそれハ出來まい〳〵夢にもミられまいそんなら男らしくさつぱり思ひきるがよいわいなんじや揚卷そのつらんじなやにらめるなゝんぼ九万里に羽を伸すやうな顔してもきたないぞや人の錢金をあてにせずと年きでもいれてなぜりつぱにあげとふさぬそれもできずばこれもよすがよさそうなものじや　「あげ卷」伊久さんおめへさんハきれいな仕打をなんすそりや疫病の神で敵とや

らでざんすなんぞといふと金〳〵と金で女郎がかわれるものと思ひなんすからどこへお出なんしても女郎衆にきらわれなんす 【伊】それでかねのねへ助六をミるやうなものがすきか 【揚】アイすきのきらいのとハはじめのうち嚔をなんす鼻つき欠をなんす口付までまたかんしやくをおこしなんすもいつそいきにおもいひすほどまよいゝした おめへさんにおそわらずとはれて呼もしつていゝすが是にもわけのありいす事つまるところハぬしの為でざんす 【伊】イヤゑらいものゝきやうといものへこんでいそうなところをまけぬハおいらんだけその氣性になをほれた助六を思ひ切此伊久に返事しやいやだといへば身請してもあわにやならぬ介六も伊久も同じ人間じや何にも差別ハないはづだ 【揚】硯のうミと鳴戸の海うミといふ字ハひとつでも深ひと淺ひハ客と色男色男がなければ女郎屋ハやミ マアおめへさんと助六さんをならべてミれば雪と墨くらやミでもたれもとりちがえるものハざんせん 【伊】そんならどふでも 【揚】アイいやでざんす 【伊】（むつとして）よもやにかゝつているうちハ思ひきろうともおもつたがそうきつひ事をいわれては壹分一厘でもひかれぬ男の意地請出して嚊にする 【揚】からだ斗ハどうともなんし 【伊】やかましい介六に鼻あかしてミせうと （出行立かわつて下より若者どや〳〵と來り）【早蕨】そう〳〵しひこんたしゆハどうするのだへおいらんにその棒のはしでもあたつたら二階はやミでざんせう 【大勢】此子もいらざる（マヽ）うつちやつておきなおいらんそのやうにをちついておいでなさる事ハござへせ

んそのどろぼう野郎を出しなせへし鼻をこすらねへけりやあなりやせん［揚］愛の坐しきにハそのような人ハおりいせんたとへいゝしたつてもこなた衆に手ごめにされてハ人さんの上にたつ此揚巻仲の町へ顔がだされんせんよしや二階のつとめのされんせん其上ハわたくしが内所へいつてわるひ事があるなら呵るゝとも責らるゝとも覺悟のうへ棒踈木ざんまひよしておくんなんし

さすがおいらんの一言にたれも二の矢をつぐものなくしほ〳〵として下へ行そう〳〵介六をいだし

［揚］さぞせつのうざんしたろうかならずあんじなんすな指でもつけさせる事でハざんせん今に仲の町へおくつていきひす

と咄しのうちも行末を思ひやられしばしわかれとなる事かとわつと斗に泣しづむ

［介六］ヤレ聲がたかひ

○二　立　目

揚巻ハゆかりの人を隔てられ日〻のつとめも身にしまづ病氣と下へ引さげられ音づれんとするものも内所の前をはゞかれバ獨淋しき閑皷鳥聲もゑたてづ忍びなきいとゞいや增其人の事のミ

わするゝ非間もなく見えも欲氣もふりすてゝとりみだしたる奥住居
[お定]おいらんどうでござりますね（是ハまへかた此内のかゝへの女郎なりしが今ハ西河岸の女郎屋の女房となりしゆへ此内なバ本店どうぜんに折ふし出いるなり）[揚]おさださんどうなんした[定]わたしハどうでもイヽがおめえハなんだへ其やうにしてゐてもつまるまひマアあのように全盛にしたおめへが男の事からとは云ひながら此やうなもめんものを着てもはづかしくもねへかへどふで主人とたてをついてかたれるといふでハなし出してつとめる氣なら内處へハわたしがいゝやうにあやまつてあげいせう[揚]そのやうにいつておくんなんすのをわるくハきゝいせんがどうもまだちつと出にくひわけがざんすからマアうつちやつておいておくんなんし[定]つがふづくの事かへ[揚]ナニサそうした事でハざんせんが此うへなんのかのといつておくんなんしても聞入ぬときにハぜうのこわひものとおめへにまで腹をたゝせいすが氣のどくでざんす[定]おめへふてれバふてるほどなをにくしミがつよくなるぜ此間も内所でのはなしにハアノ女もわるひ了簡だなんぼおれとたてをついてくらがへをする氣でもあらうがおれも意地づくだながひ年季に飯をたかせてもそうハさせねへまだあれひとりくひつぶしくらゐで身代のつぶれる事もあるめへふてるならいつまでもふてさせるがいゝと云ひなんした　すればいゝかげんに人のかれこれせわをするうちきゝなんすがいゝおめへなぞハ了簡次第でどんな所へもいかれるわなふん

ぎりがわるひととんだ末にくろうをしいすよないゐんだといゝかげんに助さんとやらの事も思ひきるがいゝ　揚 おめえも素人かなんぞのやうに心ねへ事をいゝなんす思ひきるのなんのとうハ氣らしい事でハざんせん此うへどのようなつらゐめにあつても覺悟のうへでざんすそれでなくつてこう引込でいられへすものか　定 思ひきらねへでもあわれめへがおめへ　揚 そんな事をいゝなんすか今の喜のさんとハひと通りならぬわけでひとつになりなんしたじやあありひせんかへなんのかのとやかましひ事もありひしたが其時分子心ながらも覺へていゝすそのとき思ひきれといわれたら思ひきんなんすかへ　定 おめへもどふいやあこふいふと人の思ふやうでもねへ人に口をきかせねへつもりばかりなんすわたしのハそれといふが緣がありひしたによつて添ておりいすおめえがたはかんじんの緣がねへじやアねへか、　揚 いまわしひ其やうなことをいつておくんなんすな何が緣がざんせんへ　定 されバさ子供のときより恩になつたをおめへしりなんせんかへ恩を知ねバ犬猫もどうぜんたとへひとつになつた所が主人の罪でどうであんのんにハそわれやせんまた長ひ年季の事なれば出るまでたてをつきとをされもしめへいつかおれずバなるめへそのながひうちには男といふものはうハ氣なものだから外へ心がうつるおめへだつてはじめのよふではなくそのときになつてつまりひすめへ後悔なんすであらふと思つて氣のどくだ　揚 ちくせうとでもなんとでもおいゝなんすへハ男の心が替ふとさきをくゞらう事な

らひとりでもほれる人ハざんせん介六さんが心替りがしゐしたらどうするものでざんすたかゞ死でしまいんすぶんの事でざんすのさ　[定]おめへのよふに氣隨をいつて浮世がわたられるものかへのちにハ誰もかまいてがあるめへ　せうしだよ

とあきれきり内所へ行ほどなく爰へ来し人は若むらさきが親かた此家の内の身うちとてひさしく出入ル何か用ありそうに揚まきがそばへより

[新兵衛]コレおいらんそのやうににがい顔をする事ハねへ大かた手をかへ品をかへ異見にきたとも思ふがそふじやァねへハテものがたひやしきでさへあらわれゝバ命に及ぶをしりつゝほれ合も悪縁でいくらも有る殊にハ色の廓だものをほれたりほれられたるするたのしミがなくつてからだがどうつゞくものかとおれが口からこふいふハおかしひが掟をおきてゞたてせへすればあふめにミるのもひとつの秘事おいらんもかわいひ男のために其やうに塞でいる所へ何をいゝに来たとおもあふがおれが心ひとつですましていられぬもよく／＼な事なればこそ相談にきたふせうしてきいてくんな外の事でもねへがおらが内の若むらさきのどうした事かぶら／＼煩ひいろ／＼醫者にも手をつくすがしるしもなくドノいしや衆も氣からおこつた病ゆへ氣をとりなをさねば藥のきゝめもうすひと断半分ァノ氣さくものがきやミとはなんでも訣があろふと思つたとをりその病根といふハ介六さんにあえねへわかれをし

てからおこつた事きけばこれまであどない心でも介六さんをさわりなくよほうと思ひいやな客人も能つとめ氣がね心づかひもしたさうだにその思ひやりもなく内處へきてハ何かふづまりな客人の樣にいひなしむぜつかひに中をさいたハ野分がせうハ助六さんに惚ていれど不承知の意趣返しのわるだくミと手を廻してきいたればこそやう〳〵しれたといふものそれから心をつけて樣子を見るに病人のとりあつかひのじやけんさ煩ふときハ親のもとに居てさへ心ぼそく思ふものあのやうにされてハ猶更やきもきと氣の晴る間もあるめへとさつそくとふざけほかのやさしゐものをつけいろ〳〵氣を引立させれど此頃ハゆうれいじミどふでこつちのものとハ思われぬモシ死だらさぞ迷てとおもひすごしがしられると（涙をこぼす）アヽどうかしやうもよふもあろふと思つても今じやあ介六さんとおめへの事も廓中でうき名をたてられたれ知らぬものもなければきつてもきれず切もせぬ中とハわきまへてゐるがなんにしても見殺にするが不便さ少しのうちきゝわけて助六さんのくるよふにしてくれればわかむらさきのためにハ何寄良藥と手まへ勝手をいふよふにさぞ心なく思ふがさうすればおめへのほうからおれて出るよふで内所の顔もたちまた介さんのためにもなるといふわけハ此ごろきけバ伊久がたのやつらが助六さんを目のかたきにつけまわすそうだあつたりといつては助さんがどのやうにはたらひても多勢にぶぜいまたたゝかれるくらゐならいゝがどふいふことがあろうもしれず介さんも男の意地でひよつ

ときつゝはつゝの命づくになるめへものでもねへそうすれバあいてへにも見てへにも此世のわかれ助六さんなりおいらんなりおらが内のとも二三人のいのちにかゝるとおいらんの心ひとつで此なんもさけるといふもの妾のところをきゝ分てせへくれるなら一生も二せうも恩にきる若むらさきもよくなりおいらんも一旦伊久のほうへ出れバおのづとうらミもうすくなるそこぢやアわかむらさきへいさゐのわけをはなせばあれもはしこいやつゆへ取入ろうしまたたとへきゝわけがわるくつて元のとをりにならふともりつぱにおいらんのほうへたちもどらせ跡〳〵ハおれが引受男にかけてそわしてやる

とことをわけたる一言にこらへ〳〵しためなミだ一度にわつとなきいだし涙ながらに

揚まさかのときわとはじめから死を覺悟ではれるがいんぐわこふへだてられても心のうちハ片時もおろか寸の間もきれよふとは思わねどおめへさんのお心根わかむらさきさんもぬしゆへに煩ふほどしたいなんすときゝいしては身につまされていとしうざんすまたわたくしが一旦ハきれねバ助六さんの身のうへにあやまちあるときくからハたとへこがれて死るともぬしのためならすこしのうち思ひきる事ならず共うハべばかりもわかれいせう新そんならきゝとゞけてくれるのか揚アイいつそ死だら此思ひハあろまいに名殘をおしまぬ事ならば死とふざんす新アヽ流石ハ三浦屋のおいらんよくきゝわけてくれたの

とたがいに心をくゝやつてしばしなゝだに時うつしやゝおつて

〔新〕そのかなしミをさせるのも三方四方の爲ながら思へばやつぱりおれが罪〔揚〕モシわたしが胸のくるしさをさつしておくんなんし〔新〕チヽさつしていろだんかうれしいぜかれこれとハいふものゝ二人りが中を引裂も〔揚〕ひきさかるゝも人の爲虚ならぬ僞も〔新〕しばしのうちとしんぼうしな〔揚〕(ハアヽヽヽヽと泣)

○三　立　口

櫻咲櫻の中を揚卷のしばししぼゝし花の貞けふよりハまた返りざき花も位をます仲の町茶屋の床几によりそへバ〔茶や夫婦〕おいらんおひさしぶりでお心もちハようござりますかへ〔揚卷〕アイまだとかく氣むづかしうざんす伊久さんハまだでざんすかへ〔女房〕なぜおそうござりますか〔揚〕おそいがよふざんす〔女房〕おいらんひさしひものさ一ッおあがりなされませんかへ〔揚〕よふざんしやうしかし今まであんまりふさぎひすから一ッたべんしたが久しぶりでざんすから伊久さんのきなんせんうちがよふざんす〔女房〕(勝手へむかひ)サアはやくしなよおいらんハいつもの大きなこつぷがいゝよ〔亭主〕御病氣あげくあんまりあふき(マヽ)かろう〔揚〕よふざんす　そう〳〵酒□(肴カ)来る〔女房〕おかんをゝてあげませうね(トち

よつと受てさす） 揚一ツおあがんなんしな 女房マアおいらんおあんなせへまし 揚そんなら（ト此うち少し酒ごとあり） 女ほうヲヤおいらん其やうにあがつてはあたりませうぜしかしご酒でもあがらずばなりますめへよ此間京町のわけもくわしくうけたまハりましたがなるほどおいらんハ女郎衆の氏神でござります 揚アノおとよさんがちよつとゝなコレたそや助さんがきなんしたかはやくいつてミてきや（ト禿の耳へ口をつけてそつといつてやる） たそや（そう〳〵かけて行ほどなくかへり）お出なんしたと（そつといふ） 揚伊久さんがお出なんしたらしらせておくんなんし 女房今までお出なされませんからもふお出なさる事じやあござりません 揚そんならもふひとつたべていきひせう（ト受ほし跡ハ新造をのこし介六がきたりしちや屋へゆく） 茶や夫婦左様ならおいらんのちほど 揚アイ（といそぎゆく 介六が茶屋女ぼう奥ゟ出） 女ほうおいらんおあつらしひマアおあがりなされまし 揚アイこゝかよふざんすと（トゑんさきへこしをかける中ざしきの二かい折の内より介六出） 介六此ごろハひさしく引込でいるときひたが心もちハいゝかこゝの内でいふにやアたれにもあわせねへといふ事だからふミいつうゐハならずうハさをきくのミそれにしてハはやく出勤したのそしてけふハ上の茶屋へ出ているといふことだが客ハ伊久だろう 揚そうでざんす 介（少しきに持）呼びによこしたハなんの用だ 揚おきゝなんしたとをりおめえさんの事ゆへ内所とたてをつきふてゝゑいしたがよく〳〵あんじてゑひしたが

主人に賣たわたしが身でざんすからまゝにもならずどふでたてをつひたところが行末がつまりひせんし永ひものにハまかれろといゝすから人をたのんでわび事をして貰いやう〳〵すんでけふから仲の町へもでへした内處の譯がつひてミひすれば當分おめへさんと内證でのあひ引をしひしてハ中へはいつた人さん内所へたいしてもすミひせんから此事をぬしに咄んせうと思て呼にあげんしたのさ〔介〕（くわつとせきこミ）なんと來てくれろなといふのかだへぶ醉たやうすだがそりやほんか本性か〔揚〕ざやう〳〵しいなんざんすへいくらのミひしてもいふ事をまちがへるやうなあげまきでハざんせん〔介〕てめえばかりハそういつてハすむめへぞよ〔揚〕ばからしひそれだつてどうするものでざんすまゝならぬが浮世でざんすわな〔介〕（しばしだんまりにてくやしなミだをはら〳〵とこぼし）ミんなのめへもめんぼくねへアゝいふ根性のくさつた女ともしらずあいつにつながれてから人中で恥をかひたハいくたびか腹のたつのもいく度か人めを忍ぶあやまりとこらへ〳〵しハ皆うぬゆへ今になつてよびにくひとハどこをまわせばそんなに替るからくりだ〔揚〕たとへ竹田近江とやらのからくりでも糸がきれゝば此とをりでざんす〔介〕エゝおのれ伊久が爲りもとにつきをつたなそんなきたないむさるこんぜうであげまきもすさまじひ神蒔がきいてあきれるハうぬがやうなやつハ田舎へでもいつて田の草をとりながら色事をするがそうわうだコゝナすそつぱりめどうしてくれたら腹がいよふ（ときり〳〵してくやしがる）〔茶や〕マ

アノ〳〵おしづかになされましおまへさんのごぐわひぶんがわるうござります［介］なんの外聞もとうぶんもいらぬとても恥をかくなら此上千万人のまへでりつぱに恥をかいてなるほどそれじやあ腹もたとふと末〴〵まで（少し涙をこぼし）せめてハ多くの人の口の端にかゝるがこの身のため［揚］ヱヽそんなら［介］やかましひおれがほり物もコレ此とをりけすからハおのれがうでのほりものも人手にかけずおれがけして（とたちかゝるをちや（ちややノ誤）はうろたへいだきとめ）［茶や］もし介さんこれにハわけのありそうなことまづ〳〵（トひきとゞめるあげまき八日にもつ涙をしかくしぐつとへいきで）［揚］思ひきつたといふせうこに夕部けしてしまいひした［介］モウかんにんぶくろがやぶれた

とゆくをひきとめさゝへるまにうわべハ氣づよきあげまきも心ぐるしくやう〳〵とそこをはづして茶屋がのきくるよりはやく泣出す聲もろともにさしこむ積

［茶や］大勢おいらん〳〵揚巻さん〳〵　ト大らんちきの所へしんぞう［早藤］わたくしハこふであろうとぞんじひしたおいらん〳〵マアどうしたらよふうざんせう　茶やはやく硯箱のうへのひき出しに百中丸があるからはやく〳〵（とゝりよせむりに口に入レ湯をつぎこむ）茶や女ぼう揚巻さん〳〵引［揚］ウヽヽヽト（きがつく）［早］氣がつきひしたかえ［女房］はつきりと氣をおもちなされましおいらん〳〵［揚］アイ［茶］やれうれしや氣がつかしつたそうだ

○四　立　日

はや引すぎの人足ハ河岸へのミあつまり大町ひつそり門〳〵しまり折しもミゆる人かげハ手ぬぐひに面をかくしたま〳〵首尾に噺しするに高さは月の悋氣にて下には犬にとがめられあるかとすれば狐火のごとく消へ二階〳〵もひつそりと色と欲とに氣味わるき初會の客のあるのミ目覺しげき小便場の下駄の音ハふられた枕に響くころ義理と爲とに揚まきハあかぬわかれにとりミだしわるひしあんにさだまらぬ心をそばよりひきたてられやう〳〵茶屋より歸りがけ〔早蕨〕おいらんおめへさんも日頃のよふでもざんせんわかれきるといふではなしそのやうに正躰なく泣ミだれどうしておくんなんすへコレ喜介どんしつかりとさつせへな〔喜介〕ヱヽ此こハ人の事ばかりいつてこふかたにつかまつていさつしやるものどうされるものかおいらんのうちかけハおめへいゝよふにするがいゝ〔早〕すかねへ人だのう〔喜〕おめえにすかれねへではこまつたものだ〔女ぼう〕なんだないさかるどころじやアねへわな打かけハおれがいゝやうにするからころばせもうさぬやうに足もとをミていかつせへおいらんへちつとはつきりと氣をお付なさりましもふ木戸ぎわへまいりましたよ

　こゝろならずもあまたのものおいらんをいたわりつきそへゆくところへ今やかへるとまつ折か

らてうちん日あてに　［助六］ヤアあげまきか　［揚］（戀しき人のこへにはつきり）助六さんか　［大ぜい］

ソリヤぬいたハ〳〵〳〵のこへに挑灯星のごとく棒雨のごとし

鐵棒がら〳〵〳〵〳〵

拍子木かち〳〵〳〵〳〵

廓の櫻　大尾

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

いろ男始めハほれられ後に突出れぶ男始めハふられ後に心解る書たる本也

後篇 同廓之癖

此つゞきにてたがひにふかくなり實をつくしあふ所をかきたる本也

三篇 同宵之程

これもたがひわづらひあふ程ほれあふたれども浮世しバし隔らるゝを書たる本也

傾城買猫之巻

女郎のうそをよくしれるよふにかきたる本なり

白狐通

地もの女郎の情かき兩方の論をするおもしろき本也

辛酉新版

契情買言告鳥

つとめの外にきやくに逢ふ
おもしろき本なり

同二篇廓之櫻

闘たるまゝいろ〱しのびあひ
ふてる所まで書たるおもしろき本也

傾城買甲子夜話

甲子の夜いろ客をよぶならいにて
二かいへ色客のあつまるを書本也

契情買中夢之汗

夢によそへてあいかたに手事
をいふおもしろき本なり

鶴岡花撰帳

辰巳のしんの手をかきたる
おもしろき本なり

追々出來仕候間御求御覧可被下候

契情買中夢之盗汗

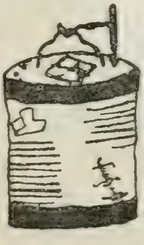
全

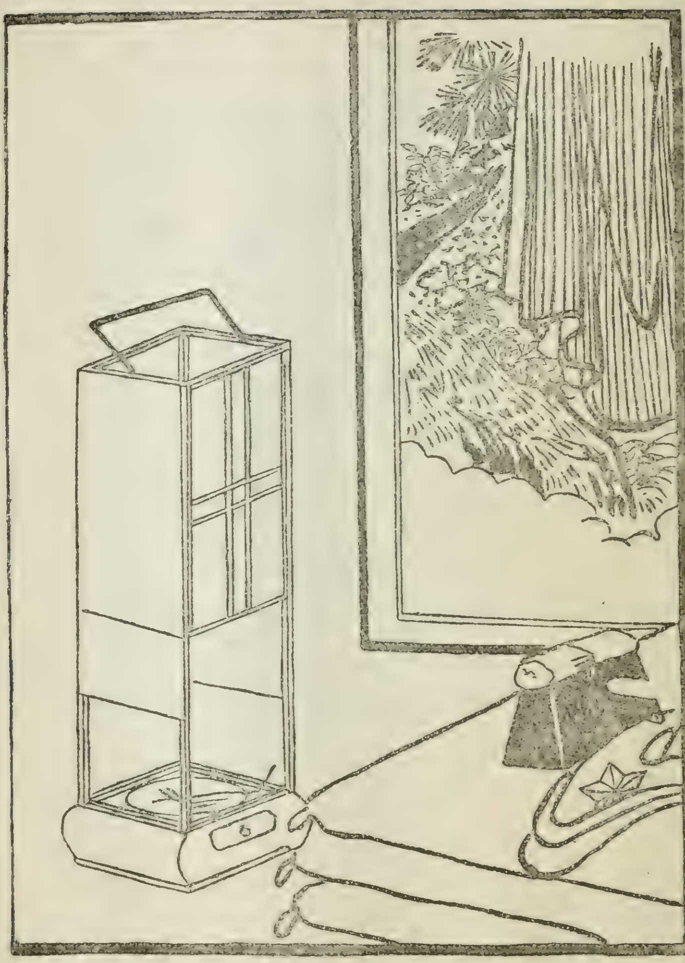
序

勝己者必悪故其長をとらず其短を拾ふハ小人の習也不佞谷峩今我國より二十里の波濤を隔山家に住居寂莫として猿狙を友とし猿のために猿とされん事を患といえども彼一ッ長屋の佐次兵衛ハ四國を廻りてさへ猿となるに況三とせの星霜を經る山家におゐてをや　されバ猿が似たる歟また三毛の多きゆへにや年／＼書肆の小册を請こと頻なれども錯簡魚魯既多きを慚而辭れども固請て不置校合の行屆かざるを茅屋より聲をからす而已

酉の初春

梅暮里谷峩述





目録

○第一回　爽約をせめて再會を約す

○第二回　謀をうけて蜜（マヽ）書を奪ふ

○第三回　夢になぞらへて管を送る

○第四回　意をさぐりて疑を晴す

終

夢之盗汗

梅暮里谷峩 著

○第一回

大江戸の眞中から四五町脇富榮町の朝市にハ綾羅錦繡より襤褸たる布子まで左右にならべ騎馬の勇士も眼をよこたへ江戸見物の田舎者もまづ膽の潰しはじめぞかし爰に軒をならぶる古着屋の其中に質と古着にしつかりと人にしられた古手屋八郎兵衛が見世にハ遊びも渡世も同じ仲間の［乾七］旦那此間のを賣て下さりやし［八郎衛］どうして大ちがひ〳〵［けん七］ハテこまつたものねト（あたまをかく）［八郎衛］そんなにもうけたがらずとマアはなさつせへな三吉よお茶をくめ［けん七］此頃ハ大はづれさト（あたりをミて）ナゼ見世の衆ハへ［八郎衛］干物の仕廻のこりで藏へいつたのさ差合なしだおもしろひ咄をしねへかへ［けん七］おめへさんこそ貳丁目がおもしろひ世界だうけたまわりたい［八郎衛］どうしてきいた［けん七］そりやあ蛇のミちハ蛇さ［八郎衛］まだやう〳〵四五度だが氣をつけてミれば遊蕩といふとしひさしくほりものまでさせてくるやつがある［けん七］今さかんかへ［八郎衛］今ハこねへといふがどふだかおぼつかねへものよ［けん七］よくぜんなくをきゝてへね［八郎衛］されバさおれもちつとまよつ

たほうだからなを我慢でよく〳〵根をほつていかうと工夫最中よ一度つきやわねへか［けん七］どうもあすこの内にハいゝ新がねへ［八郎衛］とんだ事をいふ壁のほうの中ごろのをえたか［けん七］ありやア十とふめねへ［八郎衛］其そばの顔のほそおもてな裏町の大屋の娘といふかほよ［けん七］ム、、ほんにあいつハいゝあれならずいぶん六十からの代物だ（これハ乾日にて八十五匁一兩のわりなりおりから石町の鐘が鳴）ありやア九ツだそうだそれじやアこうしてハいられぬ［八郎衛］ナゼ［けん七］福徳屋の流を一ト口買やくそくさサア旦那こふしておくんなさりやしト（そろばんをよこにしてぱち〳〵いわせる）［八郎衛］今の所へつきやうならまけてやろう［けん七］そりやア賣てせへおくんなさりやアどふとも［八郎衛］嘘をつくまぎハになつてはづしハならんぜ［けん七］こんだハきつといきやす［八郎衛］エヽうるさい男だまけてやれ［兩人］（手をうつ音チヨン〳〵〳〵）

○第二回

雛妓買ハ樓上の囂をミざれバ打紋の吁を聞て情をうごかすのミ我も淋しく人もさミしく音信ゐものにハ油をつぐ若者［新造妻ど］コレ喜介どんおゐらんハ座敷にいさしつたかへ［喜介］今科戸さんと一所ニ下へおりなさつたつけ［客氣樂］妻琴さんにいさゐを噺してくれたらうの［妻戸］さうもふしいした

が客人だから今にお出なんせう［氣樂］なんせうを大盃でなくつてもいゝ一ッつぎや［つまど］アレサわるひいたづらをなんすなこほしひすにへ［氣樂］それでもその哥のつゞきハこれだものを［つまど］アレサいやだよ［氣樂］いやだのすしなら酒の肴にいゝの［つまど］アレよしなんし［氣樂］よしのきせうかちわるそべいハいゝはづだが［つまど］しりいせんよマア口がすかアざんせんかへモチットだまつて酒をのミなんし［氣樂］すい口なら火を入レてなをしやせふと（たばこをつぐ）コリヤ火がね（マヽ）とりかへなをしだ［つまど］アレこれほどざんすものを（折から妻琴科戸つれだつてくる）［つま琴］チヤごめんなんし

［氣樂］ヤアおゐらんじやア起ざアなるめへ［つま琴］アレサよふざんすわな［氣樂］武士ハかたふごぜへす客人だそうにマアよく來てくんなさつた肝心のおめえにあわねへでかへつちやアとんだちまらぬゑんこう［つまど］なんだとへ［氣樂］猿さてがねへにやアおとる［つま琴］（わらひながら）ホンニおめへさんは遊幸さんの友達でざんすそうだね［しなど］マアゆふこさんハどうなんしたへ（これハつま琴がばんとうしんぞう也）［氣樂］イヤモウつり枠ハ世のならひとハいゝながらむかしいぱッはとした全盛寐ぼけたのが目がさめて　今じやア大しんぼうで　まづ内へかいりやした［つま琴］そりやアようざんすね

［しなど］どうぞつれもふして來てあげておくんなんし［氣樂］わつちもその理窟でばかりできやした（トつまどがかほをみて）ホイあんまり情がねへの　此子もあけつばなしの色事がすきだからいゝのふ

【つまど】しりいせん【氣樂】それはともかくも遊蕐もしんぼうしたもせうが早く内へかへりおめへのところへきてへといふが山さ【科戸】そんならナゼはやくつれもふしてきてお上ゲなんせんヱ【氣樂】されバさこゝにへんな事がござへす此間商賣づくで寄合て咄た所が古手屋八郎衛(マヽ)がおめえのとけへなじんでくるそうだそりやう(マヽ)をきくと遊蕐も大氣がもめて私を呼によこしてコウ〳〵いふはなしをきいた　うかつにハ立戻られねへマアどふしたらよからうとそうだんさマアそんな事をたがいゝやしたときいたらば八郎衛が口からいふようすがなんでもたゞゆくやうすじやアねへそれからわたしがいふにやあおめへもまんざらでもなくいつたものなりィヽハおれがおいらんにあつていづれとも心のはれるやうにしてやらうといつてきやしたおめへもめんとむかつてハいゝにくる事もあるもんだから何もわたしにふんりよハねへかけごのねへところをいゝなせへわるいようにははからうめへわな【つまごと】八郎衛さんと云がきんすが此ごろの客人でざんすものを【氣樂】そんならゆふこをつれてこいかへすればしつたどふしの事なれバ一方ハわかれねへけりやアならねへがせうちかへ【科戸】ナニそりやアおめへさん八さんハやう〳〵このごろの客人なり世話になりなんした遊蕐さんがたちもどりなんすなら八さんのほうハどうともされへすわな【氣樂】なんぼおめへばかりのみこんでもかんじんのおゐらんがふせふちでは【しなど】何もつまごとさんのふせうちのことハざんせんそして八さんゆへ遊こさんをよびなんせん

でハ内所のめへもすミいせんわな〔氣樂〕そういふことなら口でばかりのはなし合でハわからねへわたしもあとで彼是があつちやア云ひ訣がねへちよつと一筆かいてやつてくんなぜへ（マヽ）〔しなど〕そんなら文にいさるを書てお上ゲなんし〔妻琴〕おめへもばからしひそんな事がふミにかゝれるものかな〔氣樂〕そんならふみハやられねへのかへ〔つまごと〕文はあげもふしいすがいさるハおめにかゝつてもふしひせうとお世話ながらよくもふしておくんなんし文ハのちにもたせてあげへすにへお休なんし（トゆく）〔科ど〕モシヱつまどさんがいつそほれていなんすにへ〔氣樂〕ほんにか〔科ど〕ほんでざんす（トいゝすてゝゆく）〔つまど〕アレあんな事をいゝなんす（トほんなれバあとないわす）〔氣樂〕ほんだりやしや明王でハかなしばりにしてどつちへも身うごかしハさせねへといふ口の下からモウ寐よふとおもつて身ずくろひをする〔つまど〕ヱヽよしておくんなんしおめへさんでハあるめへし〔氣樂〕そんならこふしやうなんでもねたものハ尻をまくつてたゝきつこにしよう〔つま戸〕それよりか鼻へこよりがよふざんす〔氣樂〕ソレ〳〵もふよハ蟲ころ〳〵をいふ〔つまど〕それでもばからしいそんなことハいや〔氣樂〕そんなら大夫ぶに寐る氣だの〔つまど〕そうじやァざんせんけれどおめへさんも遊舉さんばかりの用でおいでなんしたものをかわひそうにねせもふしひせふね〔氣樂〕ハテアヽいわねへけりやア手なし上總の市味郡だわなせうハあいたい見たひと日頃から思ひ思つたおめへだものを寐ろといつたとてどふまあねら

れるものかと（春中をたゝく）〔つまど〕どふしてそれをわたくしがしるものでざんす〔氣樂〕そういつてハ恨が浦首引ではてしがねへモチツト　三介よつたり〳〵しよ〔つまど〕いつそ茶だね〔氣樂〕茶だねでよく口をきくものと思おふがこれでもよつほど實があるぜこんどきたときでめへといゝめへぜ〔つまど〕それよりおめへさん外の女郎衆ととりかへねへよふになんし〔氣樂〕そりあないとこつもりにもふ一盃呑でぐつとねようホイ　つまどそれ〳〵なんし（此所へ禿ふミもちきたる）〔禿〕おいらんのおいゝなんすそんならおせわながらとゞけておくんなんしと（ふミをいだす）〔氣樂〕よし〳〵おいらんにつま戸さんがいつそわるくしますからむりに酒でもまいらずバこんや一夜がすぐされませんなんぞむまいものを下さりましといつてくりや〔禿〕あい（引トゆく）〔つまど〕たまつていやよコレ〳〵そこへいかう（ト立出て何かさゝやくハほうづきのりくつなるべしすぐさまきて）あんまり口をきゝくたびれなんしたそうでもふ寐なんした（トこは〳〵くすぐる）〔氣樂〕ムヽコレねマアしねへ〳〵

○第三回

廓の日晝ハ世事のうるさき眼にさへぎりチキヤア〳〵の聲四方にきこへ仲の町に男きれ少ければ揚屋町に女藝者の晝寝多したそや行燈のくびとつときにさるれバ首斗化粧た禿表へいづる女郎屋の暖簾

捲上て家名をかくせバ暑を凌（ママ）んと手まくりして間夫をあらわす二階の倡妓短き柄の團扇てん〳〵につかひながら 九重 妻琴さんの八さんハ頃日ハおいでなんせんね 妻ごと アイサどうしひしたか幾度文をやつても返事もよこしひせんはやく逢ねへけりやアなりひせんけれどいつそ人にばかり氣をもませへすよ 九重 とかくどこのも返事をよこす事がきらいでざんすそのくせよこさずともいゝと思ふ客人ハ文をやるたびに返事をよこしいすねへおめへさんハ遊華さんの事でまちなんすのかへ つまごと アイサ主のきなんせんうち八郎兵衛さんがきておくんなんせばいゝ 九重 遊さんを立もどらせて八郎兵衛さんの方ハどふなんせうと思ひなんす氣の多い つまごと ばからしひマア八郎兵衛さんと遊華さんとどふひとつにもふされいすものかへしりなんす通り久しくお出なんしたによつてほんの義理につまつてアヽしてよびいしたからくるなともいわれずそしてあの科戸さんが例の意地わるをいゝすゆへ文はやりひしたがマアどふしたらようざんせうね（トうわさ中ばへ） 禿 するがやの人がいまもつてめへりひしたト（ふミを出ス） つまごと チヤ八郎兵衛さんのとこから返事がめへりひしたマアなんだのうついぞ此やうに大封ハざんせんト（いゝながらふうたきり）チヤ〳〵ふミでハざんせんこんな本がきいした ことの八 ぬしのこせへなんした洒落本でざんせうマアよんでごろうじいし つまごと 讀イせうね

殘る暑の去かねしか（がカ）よふも御いとひ外ならず御うれしく候將此ふしハ御けんもたへしが日〳〵れ

すれねばおもひ出す間もなふ轉寐の非間さへゆるさで結びし夢のいとくるしく盜汗したゝる事のをかし思ひあたればさもあらんと其儘小冊に綴り御めにかけ候患のとのミ多けれどたゞ妓身のミやすからん事をとしかとめ候かしく

文月

はち　より

つま琴どの　かた

こゝのへ　その跡ハ洒落本でざんすねわたくしにおよませなんし　つまごと　サアおよミなんし　こゝのへ　サアよミんすおきゝなんしよ

今宵きたりし客ハ與次郎兵衛と同居のよしミをむすぶ八郎衛にてざしきもなかばすんでしやれもとぎれ折ふし廊下のかたより新造あわたゞしくおゐらんへとよび出す　手ごと　なんだへといづる　新造　おめへさんのうれしがんなんす事がありますよ　てごと　なんだばからしいはやくいひなんしな　しん　遊宰さんがきなはりました　手　うそ　しん　嘘ならどふともなはりましとあらそう中はや遊宰ハ茶屋があんないニ表座敷へ入手事ハ早ゝきて　手　うわさばかりしておりひした念がとゞいたのだそうだうれしひ　遊宰　そりやアおれも同じ事だマアく後にゆるりと咄もあるがあいにくこん夜ハ

客でわるひの [手]マアそりやアよふざんすがおめへさんハやつぱり品川にお出なんすのかへ [つまごと]手事とハわたくしが名でざんすかへいやな名だのう [こゝのへ]よく此やうに品川においでなんすとまでしつてゞざんすね [つまごと]何にもかもうち明て咄イした [こゝのへ]そうでざんせう品川においでなんすのかへ此内人目あればさしたるこんたんもいわれずそんなら今のうちいつてめへりひせうねと行これより八郎衛がほうハそこ〱につとめそう〱くる [手]さゝしうざんしたらうね　わるくしやれるからはらがたつてなりいせんが一座もあるゆへよふ〱今までおりひしたそのかわりモウいかんようにしてめへりひした [遊]こん夜の客ハ馴染か [手]アイ八郎衛さんといふ名のよふなきやく人ざんす [遊]ム、うわさにきゐた八かどふりで手めえがさへると思つた [手]ナゼそのやうな事をいゝなんすへ [遊]いわねへでどふするものだ [手]何もいわれるおぼへハざんせん [遊]そういふこゝろのてめへともしらずあつちにいれバ今頃ハどふしたかおれがことを苦にして煩ひハでハせぬかとそんな事を思ふと飯も心よく喰れねヱ

[つまごと]煩ひハせぬかもつれへのふ [九重]まんざらでもねへからいゝわな [つまごと]なんとでもおいゝなんし [九重]どこだつけの

こゝろよくくわれねへ人の心もおれがやうに實があると思つたハおれがやぼからおこつたことだ人

に答ハねヱ [手]人の氣もしりなんせんでなぜそのよふな事をいひなんすおめへさんこそ品川へおいでなんしてから去年の春一度文をよこしなんしてそれからといふものハ便音信もなんせん品川もにぎやかなとことやらおふかたあつちの女郎衆と色事をなんしておもしろくくらしなんすはしらずわたくしこそおめへさんのとばかりいつておりひすからゝんなもわたくしのよふに情のある者ハねへその念力で大かたおいでなんせうといわれるをちからにくらしておりひすものをそしておめへさんのお出なんす時分ハ丈ぶでざんしたが此ごろハいつそ病身になりいしたこれもおめへさんゆへのことでざんすにそんなことをいゝなんすからくやしうざんす [遊]ナニくやしひもあんまりいゝあつちへいつていや [手]イヤヨ [遊]いやなものがそう足をちかくくる物か大かた馳走がいゝとみえる [手]誰がその様なとをいゝしたへ [遊]誰がいつてもいゝわなハテこうとをざかつてゐるものをばかならおとなしくしていようましてつとめの身のうへでハかわるまくらの數のうち襟元より風のはいるもいやな客ができねへでどふするものださら〳〵むりとハおもわねへ [手]ばからしいすこしハ方しろでもあるとかなんぞのやうに人をじらしなんすマアひさしぶりできなんしたからあつちの様子もきかせなんしたり私とてもつもるはなしもありひすにちつとハやさしくいゝなんしてもばちもあたりひすめへにほんにそう思ひなんすなら義理も人前もいりんせん突出しておめにかけへす

[つまごと]エヽモいやだよ〳〵 [九重]マアだまつておきゝなんしな突出しておめにかけへす [遊]ナンノてめへがつき出しゐゝるものかトこんたん最中ざしきの客八郎衛ハあまりまちあかしてもこぬゆへ大きにいれ(ママ)がきて深夜もかまわず若者〳〵と手をたゝくゆへもはやゆくまじと思ひしにあまりあたり内所の前を氣の毒に思ひふせう〳〵に行て [手]モシエなんざんすへばからしひ用があるならしづかにおいゝなんし [八]ナニしづかにしもうせコフ手をうつばたいてさへたれもでやひもふさぬに遠慮してだれがうつかまいもうすべい [手]わたしが樣なものでも客人の落合時もありひすすこしハふせうなんすがいゝ [八]何もきゝ申さぬまたるゝだけハまち申た われどもハかへりもうすからとめまいぞや〳〵 [手]ナニとめハしひせんがねマア下においでなんし もふしひすことがありいす ムヽト八郎衛ハ下に居る定めてむりむたいにとめるだろうと思ひの外 [手]おめへさんハしりなんすめへが今夜の客人ハ久しくくる人でざんすもつともひとゝをりならず世話にもなりひすのさ今きゝいすればおめへさんをよくしつておりひしておめへさんがきなんしてハきにくひといゝすがどふもいつたんせ話になつた客人を突出しておめへさんをよび申てハ義理も立ず内所のてめへもすみひせんから氣のどくでざんすがおめへさんをバこれからハマアどふもよび申にくうざんす [八]ヤヽヽその人をよんでくれめせ あふての上でかたをつけもふさう [手]なに

もう歸りひしたわな　そのかわり外の女郎しゆを見たてゝかいなんせうともおめへさんのこゝろまかせになんしといわれハツト思ふと一度に目がさめたる處盜汗びつしよりヤレ夢であつたか獏喰〱

[つまごと]ナゼ此ようなことをかいてよこしいしたのういつそ氣にかゝりひすハ　[九重]夕部の事がしれへしたかね　[つまごと]どふでざんすかしれもしいすめへが手をくれにならぬうちはやくはなしておきとふざんすもしほかからしれでもすると氣をわるくなんす　マアこんやらきいせうかね（下いろ〱きなもミ疊ざんなどする所へ）[禿]おゐらんへ占の坊さんがめいりいした

○第四回

倡家の萬燈茶屋の挑灯ハ客の光をあらわし階子ドン〱出し物ガタ〱まづ一ばんに樓へ登るハ[氣樂]マアおいらんハきやく人でなくつて恐悦〱　[つまごと]よくはやくお出なんしたね　[氣樂]遊幸をつれてめへりやしたが用があるとつて道へよりやしたからそこでごさかんのおいらんのことだからとちつとも早くとおふきにいそぎやした（逢かたのしんぞうのくるをミて）ヤア色事おいで〱　[つまど]（アレトにつこり笑ふ）[氣樂]モシへおいらん夕部も寐惚捨にしてねてしまひやした　[つまど]アレあ

んなうそばかりおめへさんこそよくねなんしたものを [つまごと] そりやア情のあるこつてざんすね [氣樂] そのくせ情あり大根をミるよふな足でいつそけだしやしたアナ [つまごと] おめへさんのよふにわる口ばかりきゝとをしなんすちつと淺黄になんし [氣樂] 淺黄の利通た（だカ）チツトだんまり〳〵 [つまど] おいらんちつと酒でもおあがんなんしてごろうじいしそうしたら氣がはれへせう [氣樂] ふさぎかへんな [つまごと] アイ [氣樂] ふさぎ〳〵ハ遊宰が追付來ルをミて晴やせう間違なくきつときやすあんじなさ [つまごと] おいらんのふさぎハそのことでハざんせんわなよくいきすぎなんす [氣樂] コレハけしからぬ事のおらあこつちのつれのこつたと思つたいきすぎだら足休に小便でもしてまちやせう ト（小便所へゆく） [つまごと] ちどりやてめへ今仲の町から歸るとき四ツハうつたようすか [千どり] アイうちいしたそうで土屋の廓が引たようすでありました [つまごと] あんなことをいつてよこしよこし（重複、マヽこ）なんしたからこんやハおいでなん（マヽこ）せうと心待にまちいしたがもふきなんすめへいつそじれつたふざんすさつしておくんなんし [つまごと] どふなんすとかといつそあんじられへす（うハさないへばかげとやら八郎衛ハ茶やを先立 二かいへ上る） [若イ者] お客がござりますからこゝへいれ申そうト（表ざしきへいれるそう〳〵しんぞうが知らせニ來り） [つまごと] もう〳〵はなしがあるから呼にあげへしたに ナゼ來ておくんなんせんへて〳〵まつたことでハざんせん [八郎兵衛] ナンダトまつておりイしたを板彫にし

ておけバいゝ　[九重]（らうかのかたよりばた〳〵きて）　八さんかへつまごとさんがいつそまつておいでなんしたマアよくおいでなんしたねそしてわたくしのハヘ旅か煩うのへ（マヽ）[八郎兵衛]こんやもこよふといふのをとめてよう〳〵ひとりきた　[九重]いゝむしだつけへね　[八郎兵衛]こんや一所にきてはおめへのところへくるじやまにでもなつてハわるひから　[九重]ナゼへ　[八郎兵衛]今にわからアヽなせへ　[うハかぜ]（八郎兵衛とミるとざしきへ入）八さんいつそ洒落本ンがよくできひしたね　[つまごと]マアなんでざんすへ　[うハ風]ナゼおめへさんがたハそんなにおつだへ　[つまごと]なんだかいつそ氣にかゝりひすことをいゝなんすわな　[八郎兵衛]マアおめへがたきひてくんなせへ此間のばんあんまりながひ夢だから書てよこしたアヽいふ夢ハよくあたるものだとおもふやさきこんなものをひろいやしたと（くわいちうよりふミをいだし）遊ゟ琴よりとの此ふミ手もよく似ているからもつてきたおふかたてめへのだろう（ト何くわぬかほでつまごとがまへゝおく　あたりもびつくりする）[つまごと]此ことであいたくつて度〳〵よびにあげへしてもへんじさへよこしなんせんであげくのはてにハあのやうなばからしいことをかいてよこしなんしたゝんなわおかしがつてわらいひしたけれどわたくしハ大かたこれにハなんぞおめへさんのたくミのあることゝ氣が心でハざんせんと（いゝわけがましく氣をもむところへ）[氣樂]ヤアだんなあいつの鈴ともろともに月をあざむく此家の灯まづ一ばんにさきがけしてざしきハまんまとの

つとりましたまづ〳〵あれへ【九重】チヤおめへさんハ八郎兵衛さんの連衆かへ【うハ風】そんならミんなこしらへごとでざんしたか【つまど】アノしら〴〵しい顔でよく啌をおつきなんしたね【氣樂】ヤアおろか〳〵役はらひでハなけれども何もだんなのいゝつけにて犬に這入た此おとこ證據の一通手にいるからハもふかなわぬと覺語(マヽ)して淺黄の頭巾をぬいだ〳〵かくいふわれハ親もなけれバ女房もなし女ぼがなけりや子ハなをなしたつたひとりで浮世をわたる不喰貧樂のたのしミからおもひついたる氣樂の乾七といふ中くらいの男なるハサア〳〵じんじやうにいろおとこのいくたて(マヽ)をガタ〳〵なのれヱヽ引なんとにせ上使ハきつうござへせう【つまごと】ナニモそのやうにたくんできれようとなんす事ハざんせん（トわつと泣出ス）【八郎兵衛】おきやアがれくやしんぼうでなくことハねへ【氣樂】マア〳〵床もとらせておいたから床でのことがようござへせう【八郎兵衛】ナニこゝでもいゝ云ふことをいつてしまやアかへらア【九重】それにハわけのあることでざんすハな【うハ風】そのことをいつそもうくらうになんしたマアよくわけてごらうじひしな【八郎兵衛】よくわけがわかつたからコウ化があらわれたといふものさ【九重】そりやァおめへさんのいゝなんすことだがそれじやアうハべのはらだちでしんそこハつまごとさんがどふいふ氣だかしれへすめへ【妻琴】（なミだながら）うつちやつておいておくんなんしいやになつたからそれで此ようなことをなんすのでざんす【氣樂】モシヱおいらんかたも心ありげにい

ゝなさるからマアこゝろしづかにあらつてごろうじやし［八郎兵衞］なんだなこんたの着物でハあるめへしいく度あらわれるものか［氣樂］ナンノそりよをいつてはじをかゝせずともいゝことさそれじやアわたしばかりわるものになるあんまり［八郎兵衞］ナンダ［氣樂］ハテ短氣此度ハ泊りの天神さまがよからう［八郎兵衞］出神のおした糊飩を見るよふによくそこらぢうへくつゝく男だ［氣樂］それでもあんまりおひらんのこゝろいきが［八郎兵衞］どふするものかへ［氣樂］（口合にて新内をいふ）お天滿ものとおもわんしよがおまへにゝすてられるなら太宰所からとんで死ぬ北野いこゝろがあるならバ湯島であらへといわしやんせぬ竹いの梅を松ふたつに割てあらわす實くらべきこへぬおとことすがりつき前後不覺になきしづむテン〳〵〳〵［八郎兵衞］ナンダ洒落か寄りによつてそのよふなわりひしやれをきくもせつねへよさつせへおもしろくもねへ［氣樂］ホイしくじつた［つまど］マアおめへさんハちつとだまつておいでなんしな［氣樂］ハイ〳〵［九重］そう思ひつめなんしたもむりでハざんせんがちつとハさつしてもいなんせうが妻琴さんの氣から出てやつたふゝでもざんせんのさ［うハ風］アイサわたくしどもが能しつてることでざんすからどふぞ氣をゝじかくなんせずにつまごとさんの心いきをたゞしてもしまたおめへさんのたちなんせんよふなことがざんすならわたくしどもがどうどもなりいせう［氣樂］あのよふにせわをやきなさるしつまごとさんも實をあらわして泣なさるわたしもよしねへ敵役をしたと

今更氣の毒でござりやす骨をおらせたほうびにこんやハとまつてくんなせへしネヱおいらんがた
[うハ風]アイサそれがようざんすマアあつちへ入レもふすがいゝ△(ミなく\／にいざなわれふせうぐ\／に
とこへゆきこのうちいろ\／すてことバありてミなたいさんするあとにハたつたさしむかい)[つまごと](う
らミらしくやつと)此ふミをミなんしたろうね[八郎兵衛]ナニ人のこんたんの文をばかな見るものか
[つまごと]とてものことに見ておくんなんせバいゝ[八郎兵衛]わからぬうちハいろ\／手をまわして
こゝろも引てゝるやうなものゝコウわかつたうへハ何があつたとてかもふものか[つまごと]かまひな
んせんつもりでそれでそのよふに狂言をしてきれなんすのかへ[八郎兵衛]きれるのきれねへのと非人
敵打の土手場じやアあるめへしそんなせりふハこつちの樂屋にハねへたとひ色男でねへとても二月と
三月もきたくらゐならうぬがよふなふとひあまをバ息の根のとまるほどぶちのめさア[つまごと]そり
やアうたぐりせへはれるくらゐならどふされてもいとひハしいせん(トふミをひらき)此とをりなんで
もいやらしいひことハざんせんどふでおめへさんの手にやあかないゝせんけれど氣樂さんとやらにわた
くしがなんといゝしてどんなやうすかきゝなんしたろう何もすこしもうたぐらるゝよふなことハざん
せんわたくしハ遊藝さんのつれ衆とほんにぞんじいしたによつてゆふこさんのことだからおめへさん
を突出してもよばねへけりやア内所の前もすまぬのなんのと科戸さんがいゝすからおめへさんをよぶ

さわりになつてハわるひとおもいゝしたゆへほんの申譯のために書いゝした文でざんす遊こさんのわけもおはなしもふしいして知ておいでなんしながらむりにふしをおつけなんす 八郎兵衛 おれがまわしものとあらわれたればこそそのやうなきれ口をきくがほんとうに遊宰が立戻らバイヽをれに耻をかゝせようい丶かげんに口を聞 つまごと 手をくれになるが殘念でざんすゆへたび〳〵よびにあげへしたもきゝなんせんであたまでゆふこさんと見かへるくらいなら何も氣ハもミいせんけれどしるてゆふこさんを呼めへといゝすと意地の惡ひ科戸さんでざんすから なんのかのとおめへさんの物入りもあらうかと相談のうへでいづれともおめへさんの心のすミいすよふにとまつておりいしたにそういふ事なら遊こさんのお出なんすがほんとうでうたぐりのはれるやうにしてミせとうざんす 八郎兵衛 人がきかねへといつて其様なことをいわぬものだ天知る地知る手前の腕の名がしるぜ つまごと これでざんすかへ 八郎兵衛 こりやなんだ つまごと 富榮町古手屋八郎兵衛二世の妻さ（かねてよりほりたく） 八郎兵衛 チヤノ〳〵氣がちがつたさうさ つまごと 誰もたのミもしいせんにこんなことをしいしたものをあんなことをてにしてきれられてハ氣もちがいゝすのさ 八郎兵衛 そんならてめへハをれがかゝあか つまごと ふせうしてそうおもつておくんなんし 八郎兵衛 ムヽそんなら間夫をぎんミするぞよ つまごと これでざんすかへ（遊ことあるほりものをミせる）こりやアはづかしいことでざんすが夜具の

ときそれもしなどさんが無理にすゝめてほらせへした氣にいちざアどふともなんし（ト手をつきつける）

［八郎兵衛］間夫の仕置にハこれがいゝと（しかも大あたまのがんくびをゆふこといふほりものゝうへゝあてずつぱく〳〵とたばこの火にてやき切ル）なんとあつかろふが

［つまごと］（かほをしかめもせずして）しれた事さ

［八郎兵衛］おもしろいことをした跡ハいつでもこふしたものさ

［つまごと］ごせうざんすにへ

地廻り客悪口にや

色用心さつしやりましよ（トながくいふ）

色用心さつしやりましよ（トみじかくいふ）

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

色男始めハほれられ後に突出れぶ男始めハふられ後に心解る書たる本也

後篇 同廓之癖

此つゞきにてたがひにふかく成實をつくしあふ所をかきたる本也

三篇 同霄之程

これもたがひわづらいあふ程ほれ逢たるとも浮世しバし隔らるゝを書たる本也

傾城買猫之巻

女郎のうそをよくしれるよふにかきたる本也

白狐通

地ものゝ女郎の情かき兩方の論をするおもしろき本也

契	情買言告鳥	つとめの外にきやくに逢ふおもしろき本なり
辛	同二篇廓之櫻	闘たるまゝいろ／＼しのびあひふてる所まで書たるおもしろき本也
酉	傾城買甲子夜話	甲子の夜いろ客をよぶならいにて二階へ色客のあつまるを書本也
新	契情買中夢之汗	夢によそへてあいかたに手事をいふおもしろき本なり
版	鶴岡花撰帳	辰巳のしんの手をかきたるおもしろき本なり

追々出來仕候間御求御覧可被下候

夢汗
後篇

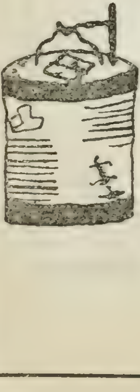
妓情返夢解

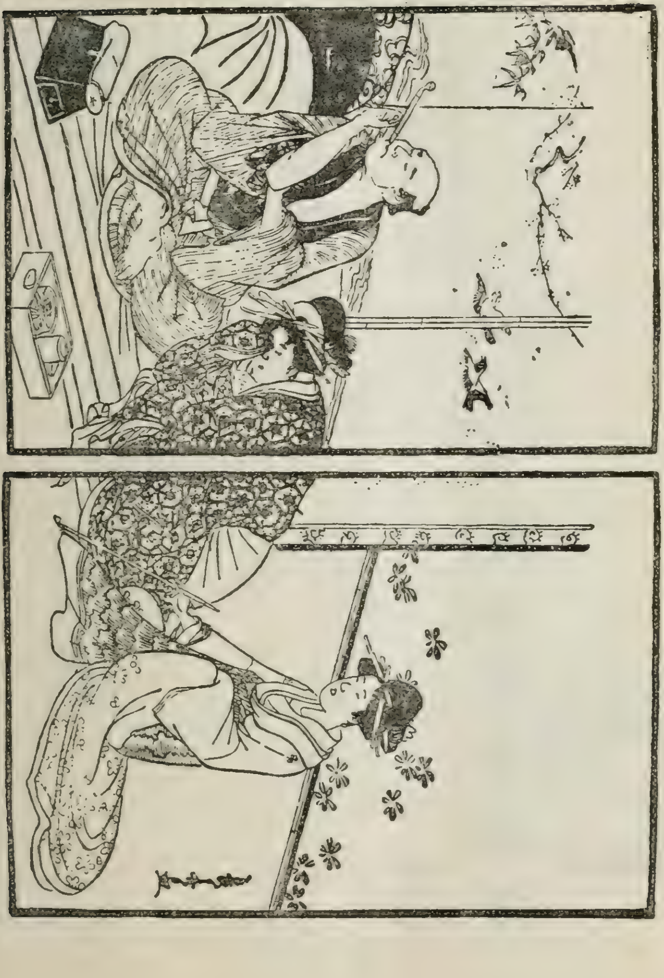
全

自序

倡家昏亂さする情郎は恰韓胴が契の如し天に翔比翼の鳥ハ二人が中の寢臥坐に名あり地ニ生ル連理の枝ハ植込繁き中庭にあづけこの戀中の樹を薄くする氣ばさみに水をさゝせる櫛丁灸をさせんと氣を揉番新あれバ亦苦利切たる番頭の迎ひも木乃伊取の木乃伊となつて細腰に著せん事を計れども左右ハいかぬと張臂に三十二孔の按摩の費もいとわず悟も夢迷ふも夢彼宋人ト の樵鹿の夢も妓の情を書不佞が夢も見せるも見るも悉皆夢中の夢ならんと前置して又夢題を書こととしかり

戍の はつ春　　梅暮里谷峨述





目録

○第一回　我身をかへりミて無常をおこす
○第二回　猜疑をのこして夢中ニ爭ふ
○第三回　倡妓のために雉檀をやぶる
○第四回　赤心をつゝミて怨恨をうける

終

夢汗後篇 妓情返夢解

梅暮里谷峩著

○第一回

人の心と色廓のかわるならひもおゝ〳〵に散行も花咲も花中に實をもつ病葉にたへぬ思ひもなミ〳〵の夜ごとにかわる緣ならバうハべのゑんのゑんならねどつとめも戀も世の義理も吹拂ふたる木地の色こりかたまつたる腐緣[妻ごと]八郎衛さんへモシ〳〵おきなんしなナゼ其樣にねむひとでざんすかねへたま〳〵お出なんしながらほんにわたくしのやうにくろうのたへぬものハざんせん(何かを思ひ廻ししミ〳〵となひていろところへびやうぶの外よりのぞひてミて)[氣樂]チヤまたこゝにも聖天さまが祭てあるどうしても爰の二階にハせうでん樣がはやるそうだ(トむだないへどもたれもあいさつなきゆへ)ねるもよかろう(ト云すてゆくなり)[妻]ナニねはしひせん[氣]おかしなこへだねなくのかへ又思ふ中の小いさかひか思ふ中になるもうつとうしいものだのまた中へ這入かのよくさバきたがるやつさ(トしたにいる)マアどんなちんじができたへコレ八さんもいゝかげんにぢらしなせへしェゝおめへさんもわるいくせだねへ狸ハ通家でハいゝやすぜ[妻]イヽエほんにたハひなく寐ておいでなんす[氣]それにお

めへひとりでそのやうすハ解せぬ法師わがよふな奴のまつ身いかですむとおもつてわつちがのわどこへかいつてかたきしよりつきやせぬから今迄よふうぢくさとひとりぐちをいふなりちつとながひ下の何だが先から泣てへ所だ　おめへひとりでなかずともだいじのものでもわつちにも泣せてハどふだへおめへもしわい紋太郎でもひかうか　ト(まくらもとの三ミせんをとれども返事せぬゆへ)紋太郎がいやならばん太郎でひやうし木カチ〳〵としまいやせうか熱燗こひしや吐逆こいしとうたひてへ所だそれでもふせうちかへ　妻そんなむだどころでハざんせんちつとハわたくしが氣にもなつておくんなんしな　氣アイ　ト(ハしバしかんがへて)なんでもおめへの氣になるにはわつちが氣があつちやァ邪間になつてなられやせんいつそのヿにわつちが氣とおめえの氣といれかへハどふだろうねそうしたら八さんがいやになつてとんだ女がかわゆくなつたらおかしからう　妻たのミに思ふおめへさんまでがそんな氣だものを　氣そふたしなまされてハいちばんちやなしの爺様婆様でじミにきゝやせうまたあらたまつてふさぐにハなんぞ子細ぞあらんきかまほしやとすりよれバツヽン　サアこれからハしんのまじだ　(トはりひじにてりきんでミせる)　妻イヽエもふしひずめへ　氣ナゼ　妻いつたところがおめへさんがたにちやにされたりわらわれたりゐきもねへことでざんすわたくしばかり氣をもめバすミいす　氣こりやァわたしがあやまりましたはつ山じや〳〵ホイわたしハナゼ此やうに酒落てへねへサアすつぱりと

きゝやすマアどふいふわけだへだまつていてハわからねへサアおとけハ(わカ)〳〵たい(だカ)ゝなせへ 〔妻〕ほかの事でもざんせんが八郎兵衛さんもわたくし故(ゆへ)に内(うち)外の都合(つがう)もわるくなりなんしたさうでざんす 〔氣〕なるほどこれでハむだもひつこんだ 〔妻〕それゆへ今じやァひところのやうにしげ〳〵もお出なんせんこつちにゑんりよハざんせんから今までのとふりにおいでなんす事ハできいすめへかといゝしても人にくろうをかけてハ氣もすまずマァそのことハすてたところがどふもちつとしげ〳〵ハきにくゐとおいゝなんすからちからにおよバずほんにおめへさんもしつておゐでなんすとふりアノやうにおいでなんすときは澤山(たくさん)そうにじらしたりじらされたりあげくのはてはおめへさんの世話(せわ)になつてなかゞ直るとモフわかるゝやうになるをひよんなことゝハ思いゝしてもまたばんにハおいでなんすと氣が丈ぶでざんすけれどもそれさへかたときもわかるゝとあじな氣になりいすほどなものが此ごろハよふ〳〵一ト月にかぞへるやうにおいでなんすも何もぬしのためだとわるどめもせずじんじやうにおかへしもふしいすわたくしが心のうちハどのやうであろうかさつしておくんなんし 〔氣〕わつちもこんなにみへてもまたしんミの所ハしんミにせうちしてゐるよおもしろくもねへむだをいふもむかしにかわる八さんの身のうへおもひまわせバむねがいつぱいになつてむだ所でもねへがおめへがたが日にましぐちになるところえおれまでがそのけしきをミせたら涙(なみだ)のたへまもあるめへとせめてハおめへがたの氣をひきたて

たく心に思ハぬ口むだごと實のねへものとさけすんでくんなさんな [妻]それでもほんにそういつておくんなんすハうれしうざんすおめへさんせへそのやうに思つておくんなんすにマアなんにもしらずア〳〵とふり寐て斗おいでなんす [氣]おめへも遠慮ぶかいおこしなせへしな [妻]いろ〳〵におこしもふしいすけれどもおきなんせんあんまりおこしいすとのちにハはらをたちなんすわなひところつゞいてお出なんすときでさへめつたに寐なんしたともありひせんに今此やうにたま〳〵おいでなんすやうになつてからお出なんす度毎に寢てばかりおいでなんすハわたくしにあいそふがつきてのとかとも思いひす　すれバすへハどふなることかとかなしうざんす　そしてわたくしが所へお出なんせんめへからおとミさんとやらいふふかくいゝかわしなんした藝者衆が何かあるそうさ　そりやアとふにきゝひしたからいろ〳〵にもふしいすけれどもモツきれたとばかりおいひなんしてくわしい事ハかくしなんすまだ中〳〵きれなんすのなんのといふところでハねへそふでざんすもと木にまさるうら木なしとやらもふしひすからみかえられハしめへかと氣が心でハざんせん [氣]見かへるのとりかへるのと出神が十九文ミせへいきやアしめへしそんなに自由こになるものかな又八郎兵衛さんも〳〵だいゝかげんにおきなせへやし寐るにハ内がしづかでよふござへすわざ〳〵そう〴〵しい所へきて寐るとハおめへさんもよつほど素人ばなれがしていやすサア〳〵　コレサもふ夜が明るコツケコウソラ鷄がなくあづま男もそふ

寐むつたがつてハあひそづかしだ [妻]うつちやつておゐておあけなんしなわざ〳〵寐におゐでなんしたものを [氣]ソウ〳〵 [八郎兵衛]ア丶やかましひちつと心よく寐ると思へバ [氣]モウそのくらいねたらよふござへしやうこれからハあすのばんのぶんをねるよりほかハござへせんぜいゝかげんにせわもやかせるものさ [八]トロ〳〵トするよふにおもつたがながい夢(ゆめ)をミたよ [氣]マアどんなゆめだへ [八]はなせバながひ事だがとりつまんだところがアノおらがほうの香具屋(かうぐや)彌兵衛(やへゑ)がしきりにつま琴(こと)がところへきておれを邪間(じやま)にしてなんのかのといゝたてがながかつたつけがとふ〳〵突出(つきだ)されるやうになつて氣をもむとおこされた 夢といふものは思ひもつかぬ事を見るものだ[氣]夢の手ごとじやァねへかね久しいものさモウ色(いろ)あけも聞(き)かねるね [妻]彌兵衛さんとやらハおめへさんの心やすいとおいゝなんした人ではざんせんかへ [八]チ丶そうサひとかたならず世話(わ)にもなるこんいの中のものだ [妻]それじやアわたくしがおとミさんの事をじやうぢう夢にミるもむりでもざんせんね [八]おとミが事も今ある事じやァなしちつとねんがいりすぎる [妻]そんなにかくさずとも白狀(はくじやう)なんし [八]ナンノばからしいおれがかくす氣(き)じやァあるめへし白狀しろもいゝそのことにつけてハぜひはなさねへけりやァならぬすじもある [妻]わたくしのほうをきれてくれろといふとでざんすかへ [八]わるくしやれるぜマアだまつてきゝやナ せんどもいふとをりてめへのところへこねへめへからわけのある女だがおとみハそんなにわ

るひ氣のやつともおもわれんが［妻］おめへさんの欲目でかへ［氣］いゝ所をきめなさつた［八］そりやアどふかしらねへがてめへのこぬめへハ女房に迄もしようと思つたが此男も知つてるがお富がお袋が大あく心もので評にたへたゆへおとゝにからまつていてハほか〳〵へのきこへもわるいから得心させてまづきれてしまつた［妻］よくじんぢやうにきれなんしたね［八］そりやアきれねへけりやアならねへ筋があるからきれねへでどふするものだ［妻］マアなんとおいひなんしたへ［八］お富にいふにやアてめへの心いきに何もわるい事もなければあいそのつきるはづハねへが腹をたつかハしらねへがこゝのところをよくきいてくりやてめへもしつてるとをりこれまでだん〳〵お袋のしかたがそでねへてめへも女房にしようなろうとまでいゝやくそくハしたがお袋のゐるうちハまん足にとくしんもしめへしといつて連て逃られもしねへまたなんだいをいつてゝれバおふくろの手をきつたらどふともせわをしてやろうといはバあいそをつかしてわかれるかおふくろと縁を切る二ツよりほかハねへ万一お袋とわかれようといつたところがきけバやしない親とのと猶さら思もふかけれバ今人になつた辻露道にまよわせてハ第一てめへのミやうりがわるしそれをしりつゝすゝむるおれハふ義の中の不義のつミそれもおれハいとわねどそふいふ孝な者を内へ引いれてハおさまらず世間もすまぬすれバ末のとげぬことゝくしんづくできれてしまへバ心がやすいお袋をうらめバうらむやうなものゝそれといふがゐんのねへの

だとあきらめてくれろとよく〳〵わけをいつてきかせたら何もいはずに泣てばかりかわひそうにおれも女房にまでしようと思つたをおふくろの悪心ゆへきれるのだものを泣れて見ればあんまり心もちハよくハなかつたよ 妻 そりやアそうでざんしたらうともそれからどふなりいしたへ 八 お袋の理屈ゆへ何ともいふともならずよつほどせつなくわかれてしまつた所に手めへのところへわけがあつて來るゆへそれで狂言をかゝれてつきだされたのだとしやくるやつがあつたそうでアノ内氣な女がごうぎにおいらをうらんでゐるといふ事だ其上におふくろが金にしようと例のあく心でいろ〳〵手をつけしやくるとのうわさ　また外分のわるひとでも出來ねへけりやアいゝと思ふ 氣 イヤモけしからぬとね色氣のあるおふくろもあれば有ルものだ（トそでなかざして身ぶりなしながら）評だへ〳〵よろほいながらほかへハいかじとおんもふすトツハトキヤレ　イケ〳〵〳〵トもしこゝへふりこんできたらマアおゐらんハどふしやうとおもひなさる 妻 どふいたしいすものかなおとみさんとやらがわたくしと心やすいといふでハなしたとへさうでもいまさらどふなるものでざんすまたお富さんばかりほれられてほかのものにハほれられぬといふわけもありいすめへわな 八 その氣ならおれもあんどだがアヽいふお袋ゆへたしかにつれてきてむづかしをいふを手めえ手ごとにのせられてきれてくれてハたちがたねへから 妻 ばからしいそりやアきづかひなんすななんぼわたくしのやうなばかでもさうもなりひすめへ

わな共かハりおめへさんのとだからほかにいくたりかゝり合があつてもさきをきらせてもわたくしハきれへせんからそう思つておくんなんしむりに義理づめでわかれるやうになりいすとしんでしめへす【八】そうことわらずともいゝわなあんまりきれ口(マヽ)をきいてそのとき死ぬがいやになつたらおかしかろう【妻】おかしかアながひめで(マヽ)ごろうじいし【氣】何にしてもおゐらんがそうどきやうがすハつてハおもしろし／＼サア／＼これからおらもいつてちんぎるべい中よくおやすミへ　さらバいそぎまいらうづるにてゆ此ずるハわつちがやうなどくしんにハきん句だね【妻】ヨゥむだばかりおいゝなんすモシエあしたハお歸へしもふしいせんでもようざんせうね【氣】どふともの黒主しかし番頭さんがまた迎にきやしやうぜ【妻】おめへさんもながしなんしな【氣】ながれならどつこひとふんばる氣だがながすには毎度氣をもむやつさ【妻】ナゼへ【氣】なぜへも氣がつゑゝしりきつていながらおがむ伊勢やさんをト(ゆびをさしわらふ)【妻】ヱヽモふざけなんすな【氣】ふざけるといへバ此屏風の畫の臥猪を見るにつけ此ぢうのミこみすがたでおかしひのがござへした【妻】まだしたにお出なんすのかへ【氣】そう邪間にすることハなしむづかしをおこすと氣樂さんだ／＼(マヽ)といゝながらそんならむづかしのときばかりの氣樂かへ哥〽ミな人の世にあるときハ數ならで浮にハもれぬ我身なりけり【妻】ヱヽモそうではざんせんわな【氣】トいつてむりに一チばんはなしていかねへけりやア氣にたゝつて寐られねへ　そのかわりにはなすと

じきにいきやす　マアきゝな此中わたしがいる向ふのざしきでアノ竹芝さんが屏風をくるりと引まわしてはいるから晝中どうもがつてんがゆかぬがひやうきんな子だからかるわざのまねでも大かたするであろう今とびあがるか〳〵とみてゐてもいつこうなもののさハテそんなら地色の文でもかくのであろうに其様にきうくつにせずともよささうなものだと思ひながらサテハきもをつぶさせてやろうとそつと屏風のそバへいつてみると何かおとがするからいよ〳〵がつてんがゆかずかんがへてゐるうち妻戸がうむなしにわたしが手をひるてゆきばからしいふざけなんすなとごうぎにしかるからマア何をしているのだといつたらうつちやつておきなんしくらう症だとはじしめるけれども例のはやがつてんにもかひしきわからねへすじゆへいわざアいつてみるといつたらヱヽモ　ゐるのでざんすばからしいときくときゝねへこゝがおかしいムヽ　おらアなにをしてゐるかとおもつたとまつのみこみすがたをいつてハみたががつてんがゆかぬやつさよふ〳〵かんがへつけてみた所がこいつしらみをとるのだと思つて　おらがほうでハ猪狩といふといつたら　[妻]ばからしい　かわいそうにそんなむしがおりいすものかへ　[氣]マアまちねへそれをアノ子がほめるうちがいゝ　[八]なんといつて[氣]なるほどそれもさういゝなんすればいゝね猪とやらハ草の中がすきだそうでおいらんの屏風の書にもいろ〳〵のくさの中にかくれて寐ておりいすからくさをからねバ猪もでへすめへねそんなならしゝ

がりのときハまづくさからさきへかりいすかへといはれてまだがつてんがいかなくなつてきたがなん
のことだときくのもごうはらだからやつパりきいたふうでアノよふにたてこめてせつながらうに
せずともいゝ事にとおさきまつくらでやりやしたそうするとばからしいたれもすきでもしわし
いせんたれしもつとめの身のうへじやアすることをしねへけりやァ　なりいせんといふか
らわつちがムヽなるほどさうだろう廓だちとハどつちがせつねへハどうだへ [八]身をこらして神いぢ
りと見たな [氣]アイサどうもおかしなあいさつで氣がすまねへからよく〳〵せんさくしてゝると
[妻]ばからしうざんす [氣]アノ竹芝さんも　するやうかね [妻]アノやうに見へてもよつほど
としをくつておいでなんす [氣]名ハ竹芝なりあたりめへ　かつきるやうかね [妻]イツソ　ざん
すとさ [氣]そんなら女の黒髪にハ大象もつなぐといふから　歸ふ〳〵といふ出神をつなぎハ
どふだへそうすればむだにならぬ理屈だぜ [妻]アノばからしい [八]よふむだをいふ男だはなしにかゝ
ると飯を食ふもわすれるぜ [氣]こんどこそほんまにいぬるじやサア中よくやすまんせ ト(京だんなつか
いしやれながら行) [妻]どうしたらアヽいふ氣になられへせうね [八]アレモいつとくよ　手めへどうぞ
したか日ぶちがはれたぜ [妻]かなしいことがあつたから泣ひした [八]そんなにむだに泣たらまさかのと
きなゝだがでめへぜ [妻]おめへさんも氣さんじなことをおいゝなんす　どふりでたま〳〵きながら其樣

によく寐てばかりおいでなんして人に氣をもませなんす 八こういやァ口功者にいふやうだがめへどのよふに毎晩きてせへあきたらぬやつがコウ隔てミれバ内にいるときハ猶更こつちの事をかたきしもわすれることなく寐ても寐つかず夜深くなれバあたり近所がしん〳〵するにしたがつて心細くハなるし段〻考てミるとろくな了簡ハひとつもでねへそれでも神や佛も見捨きりにもしねへかしてアヽまたばかな事をと思ひ直して寐つくと夜の明るがひとつ其上一ト頃のやうでもねへから世事にハせめられほんにあけしい間もねへ今の身の上コウ手めへのそばにいてミれバ心もおもはずおちつくやら寐る氣ともなくツイねてしもふもそれといふが苦勞するからのとだろうよ腹が立ならかんにんしてかならずわるく思つてくれるなよ 妻エヽモそういふ譯を聞ひすれバうらミつらミもはれへしたモウそんなもつてへねへとをいつておくんなんすないとゞ心が引いれへすうつりかわるハ世のならひとハ言ひながらナゼ其様な氣になりなんしたかとおもへバうきよがうらめしうざんす 八コレ〳〵泣きやんなもとハといへバミんなおれがふじたらくからおこつた事ゆへたれにうらミもなけれども唯氣にかゝるハ手めへのせんどはなしたにハ月の脛水をミねへといつたがマアどうなつたはなしてきかしや 妻アイ其事をもふしいしやうと思へバ胸がいつぱいになつていわれへせん 八ムヽ　マア醫者にでも見せたか 妻アイおいしやさんにもミせへしたが聽任らしくミへるとおいゝなんす心のせへかおなかゞいご

くやうでざんすそしていつそなまつばばかりでへすいよ〳〵さうにきわまらバおめへさんの子とわたくしハうれしうざんすがおめへさんの子とひろうするくらひでハ何やかや物入りもひとかたならず毎度のやうならじまんしたり見せびらかし二階のものにもうら山れせうに思へバほんにふたりがなかへやどりくる親子のえんハありながらうすひ縁なる親子どしやミからやミへやることかと泣よりほかのことハざんせん ト（またなきふす） 八そこのところハおれとてもかわらぬ愚痴ハうかめども ハテまだ海の物とも川のもの共わからぬにばか〳〵しいさきをくゞつて泣事があるものかとハいへまん一チ子にもせようすでな生れのてめへゆへおろすのながすのと手荒事ハかならずしてくれるなうひめつらひめしやうとまゝよ命あつてのものだねだヌそれまでにハいゝ了簡もでようハさ 妻アイ〳〵それにまあ聞ておくんなんし意地のわるい科戸さんがもふしいすにハ五ッ月になれバ廓を引ねバなりひせん八郎兵衛さんの子なら共様にそのとき彼是があつて父なし子をうミなんしてハすミひせんと身に引かけておめへさんをあなどつてはじしめてなりいせんそれだから外の座敷のを （ばんとふしんそうなさしていふ） 見るやうにしミ〳〵とした相談もならず心ぼそくつてなりひせん

またさめ〴〵となき出すを八郎兵衛もとも〴〵にくやし涙のばら〳〵〳〵こぼしながらも身を悔て

八 アヽいつてかへらぬことだ氣なをしに酒にしやう

○第二回

氣 サア〳〵とんだこと〳〵（トいひながらかけくる） 八 なんだ此男ハ氣がちがつたか 氣 氣もちがわねバ見ちがひもせぬ例のお富チヽン〳〵 チミン〳〵 八 なんだなわるく洒落るぜ 氣 うハさをいへバかげとやらほんに今こゝへおとミが大手をふつてきやす 八 ほんか 氣 此期になんのうそをいひやせう 八 ひとりかどこぞの茶やでもつれてきたか 氣 茶屋も居る様子だが科戸さんがつひてきやす 八 わけのわかつたことゝハいひながらおれがあつてハむつかしひおらアとなりざしきへ行からこんたいゝやうにしつてるとふりさばいてくだせへ 氣 せうち〳〵じやアねへせうし〳〵だ

トむだをいふ間もなくお富ハ茶やを引つれて科戸が案内につまごとがざしきへ入バうへを下へと八郎兵衛氣楽もろとも今更に余所のざしきへ逃込あとハつまごとゝ只さしむかひ

お富 何かおとりこミなやうすで氣のどくでござへすね 科戸 ナニよふざんす とミ おめへにハおふきにおせわになりやしたこれがつま琴さんのお座敷かへ 科 アイそこにいなんす（が脱）妻ごとさんでざんす とミ おゐらんはじめておめにかゝりや（し脱）た 妻 どなたかぞんじいせんがよふお出なんしたね

【とミ】チツトおはなし申たいことがあつてまいりやしたがマアゆるりともふしやしやうコレおめへハ新造さん方でも揚ていゝやうにしておくれ【茶や】ハイかしこまりましたとト行【科】わたくしハ客人でざんすからいつてめえりいせふねゆるりとおはなしなんし【富】そんならいつておいでなせへやしほんにマアおゐらんにハわたしがとはお聞およばれもごぜへしやうが富といふものでごぜへやすうけ給ハればハ八郎兵衛さんがおめへのところえ度〳〵きなすつておめへもひととふりならずかわゆがつてあけておくんなさるそうだがおふきにおかたじけなふごぜへすと申たいがめへわくでごぜへやすどふぞいつぞハお禮に參りたい〳〵と思ひ〳〵てよふ〳〵まいりやした【妻】そりやア　マアよく心がけてお出なんしたねしかしさうおいゝなんす　おめへさんハ　八郎兵衛さんのためにハ　マアなんで　ざんすへ

【とミ】アイわたしハ八郎兵衛さんの爲にハ二世も三世もかわるなかわらじといひかわしたマア女房さ

【妻】へエ丶八郎兵衛さんにハおかゝさんハねへはづにうけたまハりひしたがイツ八郎兵衛さんの所へお出なんしたへそふいふことならなんぞいわつてあげれバ　よふざんしたいつそきのどくでざんすね

【富】何もそのやうにあそびなさることハごぜへせん八郎兵衛さんの所へいつ　いかうともいくめへともおめへがたの世話にハなりやせんたとへ親達がふせうちでも神や佛がゆるさずとも又ハどこのか人が邪間をしやうとも心と心の約束をしておいたれバこれにうへこす事ハごぜへせんきりやうがいゝと思

つてあんまり大つらをせずとだますがしやうばいなら商賣のやうに人の男をよこどりをせずともかけかまひのねへものをだましなさるがいゝなんのあそバれるがやくていながら人をあそぶも氣がつよい〔妻〕おいゝなんすとふりいやしいつとめハしておりひすがいやな客にハ身をまかせず思ふ客さへはじめのうちハ只よそ〳〵しくあいそむれど後ハたがひの實くらべ死のもいとわぬやうになりいすはわたくしばかりでハざんせんどの女郎衆もおなじことでざんすなんぼうそがせうばいとやらでも實をつくすとハならぬといふとでもざんすめへ　おめへさんと八郎兵衛さんの中がどういふふかい中かハぞんじいせんがおめへさんも迚もほれなんすならほれどこのねへほどほれなんせバいゝほれなんしやうがかひねへやらわたくしのほれるすきまがざんしたからツイほれへした〔とミ〕なんほすきまがあろうがあるまいが男めづらしくハあるめへし何も人の男にほれずともいゝとでごぜへす〔妻〕人の男ならいいかけんに氣をおもミなんしまた八郎兵衛さんにほれてわるひとこれまでさたもざんせなんだ其くらひ大事の男なら内へ引つけておゐてごらうじいしわたくしが所へおいでなんすれバわたくしが心で私が思ふまゝにほれへす此上も人の世話にハなりいせんおめえさんも今じやァきれなんしたやうに聞ひしたがあんまりみれんらしうざんす〔富〕ミれんでなくてどうするものでごぜへすあきもあかれもせぬ中をきれるやうになつたもミんなおめへのわざでごぜへすから此わけをつけねへけりやァなりやせん

妻わけをつけるといつてどうなんすのだへ　富しれたことさおめへのほうの手をきつてわたしが連て歸りやす　妻ヲヤこわらしひことをおいひなんよ手をきられるとかたわになりひす　富おめへのやうな顔のうつくしい心のおそろしいものハ手をきつて見せものに出したらよふごぜへしやう　妻ほんにおめへさんの心いきハおそろしくざんせんね人を見せものにだそうとハ　富なんのかのとあいた口だとつていひなさる事ハごぜへせん八郎兵衛さんもノ＼だ何もかくされたりかくれたりすることハごぜへせんなんのもつともらしく人をば義理づめにきれやうとハなさけねへとあきれて見たりはらがたつたりあんまり蟲がいひといふもんだおめへもかくさずともいゝかげんに八郎兵衛さんをおだしなせへしな　妻ヲヤばからしい何がおめへさんがこわくつてかくすものでざんす　富なんぼおめへがそうしらをきつてもアノ科戸さんとやらに何もかも聞てめへりやした　妻たとへ八郎兵衛さんがお出なんして歸へらうとおいひなんしても私がおかへしもふすことハなりひせん何もおめえさんがおかミさんといふものか親類方といふわけでハあるめへしわたくしどもの中よりくらゐなかでいながら何もその樣にこわいことばかりおいゝなんすことハざんせんほんのそれが口つうへといふもんでざんす　富ヱヽモどういやアこういふと口おしい（ト齒をギリ／＼いわしてなく）氣おめへがたハなんだマアおとみさんいひかげんにしなつまらねへといふものだおれも今迄ハどういふ理屈かと出る幕にハちつとはや

ひト思つたからひかへていたがあんまりばからしくつてきひていられねへマアあたり近所のめへといふとをしんねへなイケごうさらしな　富　おめへも如在もなくつてそんな生のろいことではごぜへせんあたりの氣がねを思ふくらいなら内に居珠數でもつまぐつていやす　よく／＼なればこそはじをかきに來るくらゐじやァはなやかに白いとか黒いとか譯をつけねへけりやアなりやせん　氣　ハテわるひ合點だ元トがおふくろの理屈からおこつたことじやァねへかおめへもせうちのうへできれてしまつていまになつておもひ出したやうにむつかしをいつたとつてつまらぬといふものだたしかに誰にかしやくられて来たらうそれじやァあんまり知恵がねへぜ　富　おめへまでが今さらそんなことをいゝなさることハねへ知恵があれバおめへがたにこういひやうにハされぬのさ先から氣をつけれバアノ屛風のなかに八郎兵衛さんをおきながら

ト立あがりびやうぶがらりと引あけ八郎兵衛と見るよりひざにかつぱと泣ふして

何もそうしてくんなさることハねへはつだなんでも妻琴さんとやらをきれてくんなせへし　八　コノベらぼうがきゝわけのねへよさねへか　富　いやだいやでごぜへすサアわけをつけなせへしそれもならざアいつそおめへの手にかけてころしてくんなせへしどうでいきてる内ハおめへがたの邪間をしねへけりやァなりやせん　妻　邪間をなんすなら心まかせになんすがいゝわたくしもつとめのいきはりでもそ

ひとけもうさねバたちひせん【富】たつともすハるともそりやアおめへのすきにしなさるがいゝが八郎兵衛さんハわたしがつれもふしていきやすこれを縁きりと思ひなせへしサアうぢ〳〵せずともわたしといつしよにきなせへやし

トむりむたいに引立行と思へバ次の間のふすまをおしあけて

【氣】八さん〳〵おゐらん〳〵【両人】そんなら夢か【氣】わたしもゆめでくるしんでふつとめざめてよふすをきけバおめへさんがたのうなり聲【妻】宵にうハさのおとみさん【八】こゝへふりこミ【氣】三ツがなわ【妻】つめひらきの其中へ【氣】わたしがいつてもやつぱり濟ず【妻】八郎兵衛さんを引立て【八】ゆくと思へバ氣樂子が【氣】がてんゆかずとおこすのも【妻】おこさるゝのも同じ夢【八】ハテかわつた事も【三人】あるものじやナア

▲作者曰此おとミ何者といふことをしらず諸君子察しを待のミ

○第　三　回

【妻】チシヱ秀我さんぜひおめへさんにいわねバならぬことがざんすがどうもはづかしくつてもふしにくふざんす【秀我】ハテたびをかさねてくるくらゐでハ善悪ともかくしてくれてハうらミだサアノ〳〵い

つて聞かしや【妻】ほかのことでもざんせんがエヽどうもいゝにくうざんす【秀】ハテ内氣な女だ【妻】そんなら思ひきつて申しいせうね【秀】チヽサ【妻】つとめの身の上にあるめへはづかしい事でざんすがわたくしハ身おもになりひした【秀】何もそりやアめづらしくもねへいくらもあることだなるほどおらがやうに遊びにきても酒ばかり呑でるものもあればまたしつぶかなものもあるゆへ思ひもよらずそうしたことにもなるも尤だがあいてハだれだ　子をなすくらひでハ定めておぼへがあろう【妻】アノばからしいしれたことでざんす【秀】ムヽそんなら人の子をはなすからハおれにさせてくれるなといふことか【妻】エヽモそんなことでハざんせん【秀】ムヽそんならどうしたわけでマアたれが子だ【妻】アイおめへさんのさ【秀】ムヽ酒ばかりのんで居るアノおれが子か【妻】（思ひこんで）アイ【秀】なるほどこういふつとめの其中でハ夜ごと日毎の客のかずいやと思へバ猶更にしたしき人を心の噂わするゝひまもないからハおもハずゆるす氣のうごきないこととも思ハれぬが何もまたおれが子にせずともよさそふなものだ

口うらきいてつまごとハしバしうつむきいたりしが何思ひけんずつとたちいでゆくすそをしつかととらへ

【秀】コレきつそうかへてどこへゆく【妻】どこへゆかうとかまわづにこゝはなしておくんなんし【氣】（秀ノ誤）こ

ゝハはなさぬ下たにいや名高き女郎のつま琴が父なし子を孕だと評判あらバ世間へすむめへ 妻これゆへにこそ 秀無分別かハテ若とハ云ながら跡先しらぬ氣ゝじかさ 妻はづかしいといひだしてせうちのないうへからハかねて覺悟の此身のうへ 秀ハテおもひこんで手づよくも云ひにくるのも打捨て啌にも假にもおれが子といゝかけられたがうれしさに相談づくならどうともしやうハサ 妻何かのわけもたゞさずに 秀どふするものだ引受て世話をするからあんどしや 妻うれしうざんすがさりながらひよんなとからおめへさんに物入りかけるがいつそきのどくざんす 秀ハテのりかゝつた船ならバどうするものだ マア内證へも其譯を一ト通りはなすでもあろうがかけ合ところへかけあふもなれぬこと故よい樣にしてくりや 妻くわしいことハ科戸さんが知つてお出なんす（トいふところへ折よく科戸來ル） 科秀我さんかへひさしぶりでざんすね 秀これからハまたつゞひて來ル 妻今よびにあげへせうと思た所マア聞ておくんなんし何かのこともおはなし申しひしたらせうちなんしたおめえもとも〴〵よろこんでおくんなんし 科そりやアようざんしたね 妻猶又くハしひことハおめへ秀我さんにはなして聞せ申ておくんなんしな 秀そりやアゆるりときいてもいゝが世話をするくらゐでハこれまでのことハしかたもねへ今日からハいやみらしいことが一分一點外にあつちやアきりかへさせねへけりやアならぬがせうちかへ 科そりやア氣づかひなんすなたとへ外に深くお出なんす客人があつ

てもこうおめへさんに(マヽ)引受て世話をしてお上なんすからどのやうな人でもわたくしがあけさせハしいせん 秀 おめへがそう請合てハ安堵ださあこれから其口のひぬうちかたき役と出かけておれが腹心の病ひを見せようコレつまごとちよつと手をミせや何も其やうにいやがることハねへ見せろといへバミせろト(むりむたいに引よせほりものを見る)コレ此ふるてや八郎兵衛とかいてある此彫ものいつぞ見ずしらずなら打捨るといふこともあるがしつたどふしハ猶更にわけがたゝねバ世話もしにくしことには別而懇意の中かうなつてミれバえんさへあれば女房にもしめへものでもなければ猶ざりにハして置にくひ 妻 シテ八郎兵衛さんと心やすひとおいひなんすおめへさんのほんの名ハなんと申いすへ 秀 おれかおれが名ハ富榮町にかくれのねへ香具屋彌兵衛といふ男でごんすといゝてへ 妻 そんならおめへさんがあのかうぐ屋彌兵衛さんでざんしたか 彌 何もそのやうにきもをつぶすことハねへやつパりありふれたおとこさがてんがいつたらけしてしまや 科 ソレごろうじいしどうで末ハとけぬことにうまれもつかぬからだへ疵をつけ今になつて目がさめなんしたろうそれといふが何ごともわたくしへかくしなんすからろくなことハざんせん何も其様に泣なんしたとてどうするものでざんすばからしいそれ(ハ脱カ)よりはやくけしてうたぐりをはらしなんしなたとへ八郎兵衛さんに心がのこつても内證でもやかましくいつておいでなんした故どうでとけてよぶことハできひせんし見るかげもねへいまの身の上ちゝのあか

ぬことに義りたてをせずともこういふときこういひしほにわかれなんすが身の仕合願ふてもねへことでざんすハ〔妻〕其ミすぼらし(い二脱)なりなんしたもわたくしがわざたとへいやでも今になりつきだすとハあんまりなふにんじやう彌兵衛さんのさつしなんすところもはづかしうざんす〔彌〕なるほどさうきけバまたもつともそのいきじがあれバこそむかしよりしていま迄も此くるハのたつとさゝりながらけさねバ済ぬおれが心けしてハたゝぬふにんじやういらざる脇から入ぢゑせずとけすもけさぬもつま琴が心まかせにしたがいひとハいふものゝマアけすかたが互のためこのほりものさへけしてしまへバおれが心も雪解の水流にきよき胸のうちあらたに思ひをつもらせてこりかたまらせる氷橋跡でハわれて化すのがたとへしれても〔妻〕ヱゝ〔彌〕ハテばかす狐に咎ハなしばかさるゝ身のおろかさと我身をくやむよりほかハねへハな〔科〕マアどふなんす妻ごとさん〔妻〕(なミだとともにやう／＼と)アイけしひせう

トいふよりもはや科戸がはからひ二世までとなか／＼盟ふこゝろ根をゑやハいぶきのさしもぐさゆかりの人の名のうへにつもる思ひをもゆる火のいつかけぶりときへうせるそのせつなさも男のためと心ひとつにしのべども忍ぶをもるゝなミだの實

〔科〕此とふり灸で八郎兵衛さんの名ハきえてしまいひしたからうたがひをはらしてお上げなんし〔彌〕なるほどこう手づよくはからハずバかたがつくめへ　かたがつかねバつまるところハてめへのなんぎ

とハいへいらざるつミをつくつたよ　科おめでた酒をわつさりとなんとのもうじやざんせんか　彌目出た酒やら泪のさけか酒ハうれへをはらふといへバ酒にわすれてしもふのもけつくおとこへ　妻エヽ　彌此おとこへ心の實がとゞくやらとゞかぬことかそれまでハまたバ甘露の日和を見るがマアとふせいといふものだサアハつさりと一ツのまふ若ばや藝者をよびにやりやといや　禿若ばアイ（トゆく）　彌アヽきくたびれがした馬鹿な（トそらハらひ）ハヽヽヽヽヽヽヽ

○第四回

九重つまごとさんどふでもそふいふ身でハ氣ぶんもわるふざんせうがそんなに何かをおあんじなんすことハざんせん惚たおとこのたねをもつとハ願ふてもねへ事でざんすおめへさんうれしくハねへのかへそんなにふさがずともちつとはつきり氣をお持なんしな　妻うれしい事ハ嬉しくつても其うれしいに百倍ましぬしの子と披露もならずそして八郎兵衛さんと秀我さんがしつたどうしといふことハ夢にもしらず　せんどおいゝなんしたこともあつたから　秀我さんが彌兵衛といふをはやくしつたらしやうもやうもざんせうが今となつてハこれとてもしかたがなしもしや彌兵衛さんとしりつゝよんだとおもひなんしハしめへがまだ其上にしばらくもあハれぬやうにもなろうかと涙のたへまハざんせん

さつしておくんなんし［九］それもやつパり男のためおめへさんもちよさいもなくつてうハべのことにきをもまずといつ〳〵迄も秀我さんの其つもりに人にハいつておきなんしどんなわる氣なものがあつて秀我さんの氣をわるくさせめへもんでもざんせんたとへ秀我さんがかまひなんせん氣でも世間といふものがざんすからほんに人の氣ほどかわりやすひものハざんせん［つま］おかたじけのふざんすほんにひととふりにハきゝいせんアノ彌兵衛さんハそのよふにやかましくもおいゝなんせんかわりに科戸さんがふたりめへ八郎兵衛さんのことを彼是いつてなりひせんほんに口惜うざんすめへどのやうなら何かにつけ人の口の端にかゝりなんす事もあるめへにとおもへば（歯たくひしバりなく）それだとつて主の子だとおもへバむごひ事もするがいやそんなことをさうだんしてへにも硯にむかへバ涙がさきだちいろ〳〵に氣がくるひす［九］てうどわたくしが梧架さんのときのやうだと思へバ身につまされてかなしうざんす何事も身二ツになるまでハひよんな氣をおだしなんせずにあとで亦おめへさんの氣にあることでざんす［つま］アイ〳〵

　むかしの派手に引かへて今ハ古手屋八郎兵衛古着に紋ハかハれどもかわらぬ中をたのしみに世間へ見へもうちすてゝ只一トすじにいそ〳〵とくる顔見るよりつま琴ハ物をもいわず泣出す

［九］チヤ八郎兵衛さんがお出なんした（トつまごとが心思ひやりともにあハれと泣出す）［茶や］コレハ〳〵

おゐらんがたマアどふなさりました〔八〕アヽ　ツイわすれてきたすぐに駕籠をいれさせておいてくりや〔茶や〕ハイ（ト氣をとふし行）〔九〕ナゼデざんすへ〔八〕あしたハ太ゝ攜はやく出ねへけりやアならぬ今月ハ攜親だ〔九〕あしたはやくかいんなんしてもようざんせうハな〔八〕ぜんてへこん夜ハこめへと思つたがなんだかしきりに來たくなつたからきてミれバへんだぜ〔九〕これもやつぱりおめへさんの事でざんすハ妻ごとさんそのやうに泣ずとも八郎兵衛さんに相談していゝ知惠をおかりなんしな〔つま〕お出なんせんうちハ心づようぞんじひしたがをりもあらふに今も今迚うわさをして泣て斗りおりひすその中へおいでなんしたとだものを　これがなかずにいられへせうか〔八〕久しぶりできた物だからすこしかなしいことがあつても泣顏をミせずともわらひ顏をナゼミせてくれぬ（ト　いわれて又ふたり共しきりになく）〔つま〕わらつて咄すこともならようざんすけれどもマアどふしてもこんやハおかへし申いせんからおめへさんもおちつひておくんなんし〔九〕早歸りといいづれおいひなんすから床でゆるりとはなしなんすがよふざんす△（此うち九重がさしづにてそう〱とこをとらせ其身ハ捨ゞバありてしりぞく跡ニ出し物おくり物などあれどことしげきなりやくす）〔八〕なんだかおかしな氣になつたつま戸さん銚子をもつてきな〔つまど〕アイ（ト　もちきたる）〔八〕此子もなくぜ九重さんといへバおもいれ泣たうへにまた泣顏をかくしてそう〱行おれもわけハしれねへがあたり近所で泣立られてはつゞかねへなんでもマア

いつぱいのもふ [戸]ぬるうざんすがあつためてあげへせう [八]そのぬるひほうがい丶サア 一ッついでくんな (トひきうけ一ト口のミ むせるむねをた丶きながら) モウこ丶の内の酒ものむなといふしらせか(トいふをきくとミなく) どふもがつてんがいかぬなんでもこれにハやうすがあろうなくすじがあるならばわらふことばかりひとつにせずとうきも倶／＼かたり合ナゼ おれにもなかせてくれねへ あの脛水どまりのことハどふなつた [つま]サア其事でくろうをしいす [八]そんならいよ／＼聴任にきハまつたか [つま]アイ此くる月が五ッ月なれどおなかのおびもせまひかとまよふ心を九重さんつま戸さんもとも／＼に心切にいつておくんなんすに是非な／＼も彌兵衛さんに世話をたのミんした [八]ソノ彌兵衛といふハ香具屋のか [つま]そうださうでざんす [八]アノ香具屋の彌兵衛にか (ム、ト しばしものをいわずいたりしがや丶あつて) そりやきこへぬぞよつまごとうそにも今までわけありがほでよんだでねへかいつから彌兵衛がくるかしらねへがせめてはふミのたよりにでもこふいふわけで彌兵衛がせわになるとしらせてよこしてもなにもばちもあたるめへむしがしらせかくれバこそうすはぢかいてしまふといふもの二階をひるた其あとへなんにもしらずにくるならばつまごとさんハ御病氣引こんでおいでなさりますとよそ／＼しくいわれてもがてんゆかねバあひてへときをもんだとてあわせもしめへ其時のめんぼくなさハいきてもしんでもあらりようかいつてかへらぬことながらおとみがこともおふくろ

のわるひとおれが意地ばりも元トハといへバてめへにまよつた心からッイ手づよくもはからつたをわかれてよりハおとゝめもそれをきにしてわづらひ出しとふ〳〵それがもとゝなりしんだとのほのかのうハさ（トなミだをこぼして）つらひ心りおれともしらずつながれてより朝夕もアノおふくろの氣がねやら世間のめへといろ〳〵にやすひ心ハなかつたらうに今ふびんだとめがさめても何をいふにもあとのことそれゆへにこそぐハんぜんにきのふのあだと思ハれしもけふハ我身へめぐりくるひづゝなき世の車の輪アヽおとみがおもひばかりでもいゝことハねへはづだ［つま］そふ思ひなんすもさら〳〵むりでハざんせんはじめから秀我さんが彌兵衛さんといふことしるならばなんのこれまでよびいせうせつバ（マヽ）つまつて名もしれる深切らしいとのつたハこつちのあやまりで　いゝたひとハかず〳〵ざんすが今もふしいしてもうたぐりなんすうへからハたくミのようにきゝなんして猶更にくしミもつよくなりひせうと思いゝすから彌兵衛さんにまかせる共譯も身二ツになつた共上でおめへさんのとくしんのゆくやうにしておめにかけひせう何ごともまゝならぬうきよゆへとかならずわるく思つておくんなんすなへ

　　トなミだとともにいゝわけも心ありげとおもひてもせきたつむねもあたりもあれバ

［八］アヽ愚痴もいふまい〳〵しねしなふかわるまいとのいゝやくそくの水になるのも人心ながれのミ

でハとさらにかわりやすきハめづらしからず　アヽたとへたれがすすめやうともたのもふともこつちの心がすわつてゐれバこふいふ身にもなるめへと思へバたれにうらミもなく人にうらみもあるよふに一づにはらがたつたゆへくだらぬこともいふてハミたが万一おれが子にもせよこのざまでひろう所か見くびらるゝもむりでもねへたゞ此上ハ彌兵衛が氣をとりそこなわぬやうにして身二ツにしてもらふがかんじんてめへ其ようにミへてもいつたいマア氣のよわひうまれゆへきがねばかりするしんてい勤(つとめ)の身でミもちになつたをはづかしくおもひ思ひ(マヽ)てひよつと産後(さんご)の血(ち)のくるひあるめへともいわれぬからそんなとハくにせずと心をたしかに平ぜいの身もちもきめがいゝとかいふねるときもきうくつに第一ハたべものをずいぶん氣をつけ大事にして安産(あんざん)したとよそながらいゝミをせ(マヽ)かせてくりやどふでこれからハあハれもしめへしあわれたとてこられもしねへなんぼ人の子にもせよ心づけもしたけれどまかせぬ此身ひよんな客につながれたとあきらめてかんにんしてくりやどふでもふ此世(よ)であふこともあるめへえんがあるならミらいにて又あふこともあらふかとせめてハそれをたのしみにわかるゝが此バのはなコレ／＼其やうにないてくれてハたちばをうしなふコレサ／＼

　トなミだの名残(なごり)むねをたゝひて男なき　こなたもなミだにくれながら

[つま]モウ／＼そんなことといつておくんなんすなせつのうざんすかりそめにも其わかるゝといふこと

ぐさハかなしさつらさあるにもあられず　こういふことを文になとしらせてあけらバもしも又はやひわかれにならふかとおそくあふのをちからにしてけふまでくらすはかなさをすこしハさつしておくんなんしミくびるのかわるのと思ふ心があるならバ此やうにせつなくもざんすまひおめへさんハこれきりにきれやうとも思ひなんせうがきれぬ〳〵きれへせん思ひあふた中〳〵ハ世間にいくらもありながら神さんやほとけさん何がにくうて私どもばかりおいじめなんすかたとへ此上どのやうにうきかんなんにあふとてもわかれることができいせうか　おなかのこともミのことも思ふこゝろハありひせん

トかくごのこともまたもどりわつとばかりになきふせバしじうを聞て九重ハとなり座しきををしあけて

[九]それでハかいつてぬしのためになりひせんもれてハことの大じでざんす今宵ハおりもてうどよくどふではなしハつきいすめへがしバしのわかれをおしミなんし [八]その心ざしハうれしいが今わかるゝせへなミだのたねいれバゐるほどたがひのふためあんじるよりうむがやすいといゝながらうるさんなり何かの氣がねひよつと血のミちもあろふかとあわれぬ身でハ猶さらにあんじる心もひとかたならずミれんなものとわらわいでとも〳〵心のおちつくよふ何から何まで心づけてやつてくんなせへいらざることだがたのんだぜ [九]氣づかひなんすな [つま]あれあのやうなことをおいゝなんすものをと

（ひざにかつぱとなきふす）

［若者］アイ彌兵衞さんがお出なされました

大尾

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

いろ男始めハほれられ後に突出れ
ぶ男始めハふられ後に心解る書たる本也

後篇 **同廓之癖**

此つゞきにてたがひにふかくなり
實をつくしあふ所をかきたる本也

三篇 **同宵之程**

これもたがひわづらひあふ程ほれ
あふたれども浮世しバし隔らるゝを書たる本也

傾城買猫之巻

女郎のうそをよくしれる
よふにかきたる本なり

白狐通

地もの女郎の情かき両方の
論をするおもしろき本也

契情買言告鳥
つとめの外にきやくに逢ふ
おもしろき本なり

辛 同二篇廓之櫻
鬩たるまゝいろ〳〵しのびあひ
ふてる所まで書たるおもしろき本也

酉 傾城買甲子夜話
甲子の夜いろ客をよぶならいニ
て二かいへ色客のあつまるを書本也

新 契情買中夢之汗
夢によそへてあいかたに手事
をいふおもしろき本なり

版 鶴岡花撰帳
辰巳のしんの手をかきたる
おもしろき本なり

追ゝ出來仕候間御求御覽可被下候

戊新版

夢汗二編（ゆめのあせにへん）　梅暮里先生作

全一冊

此書ハけいせいのしん手きやくの心いれ其外廓中のいゝを記ス

甲子夜話二編（きのへねやはにへん）　同作

全一冊

けいせいかいのこんたんあるひハ客の見わけ共外こゝんおもしろき小さつ也

通氣多志 婦足髩 全一冊
成二樓主人著
出來
切にきられぬいろ客がふしぎな事にてふたりできたるところまでをかきたり

青樓小鍋立 全一冊
同作
出來
けいせい買のいろもてるもてぬのろん名高けいせいゆび折のけい者茶屋女房共外當世のうがち也

後篇 ふたり禿 全一冊
同作
近刻
ほれた人にハそハぬが義理いやな男にそうのも義理死ぬことならぬハ主人へ義理哀に面白キ本也

契情額小袖 全一冊
近刻
つうな客が女郎にしん手をおしへいろ客をよバせるあたらしきしゆこうの本なり

南門鼠歸

全

旨趣分傾城之虛實
評論顯標客之智愚

南門鼠歸

鹽屋主人著

序

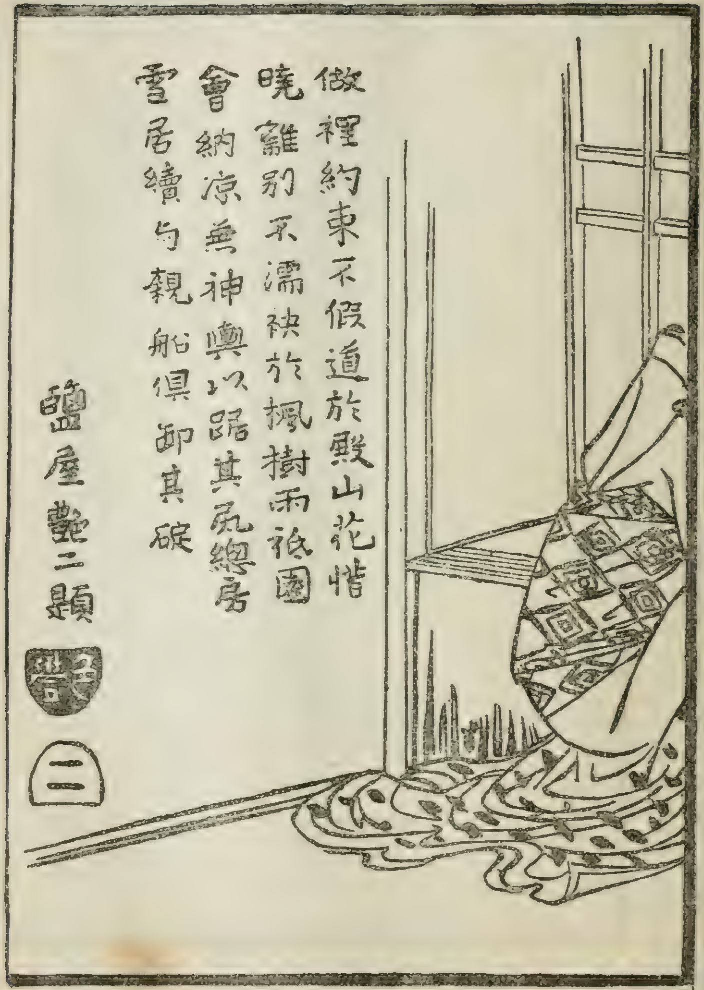
漢土にも掌染といふて染物を司どる役人あり。野馬臺にも染殿は。夫より後世に至て所有の新手を染出し。今や鹽屋主人の

好にハ。紬ゲ浦の蒼海を下染と
して。總房の霞る黑に糊豆墨
を載。小紋は上代にかへる八ッ山の
櫻ほうぶり乃是を鼠歸といふ
近頃の出來なり。派手にして

浮氣ならず。おとなハしくして
淋しからず。染地の丈も能みじか
からず。工ミにして魂膽有又簇の
悪穿もなし勿論古手がへしとは
王戎が眼にも見へぬ程の新手也

此趣を予に序せよと疊さい足
明後日迄の言延も聞ず徧急故
無是非早染の間に合を上畫の
筆を採て細こゝとしるす

清々老人


儌裡約束不假道於毀山花惜
曉離別不濡袂於楓樹雨祇園
會納涼無神輿以踞其凮總房
雪居續与親船倶卸其碇
盬屋艷二題
二

前にゝなと鼠有といへども染あがりのはな〳〵敷にいさゝかさハりありて既にとめ形となり其反物世に甚まれなり今又鼠がへしをそめ出して是が跡をおはしむしかれども穿に當をいはずして只はじめにうしなひたる愛敬をとりおかしゝを專らにしてすごきことをあらハしたるは染物屋の手がらならんどなたも一反ヅゝめしてごらふじろ

南門鼠歸

鹽屋艶二著

○發端

淮南子に曰楊子辻衢を見て哭之以て其南へ行べく北へ行べきと。いまだ己が傾城を蕩すの才なきとを不省先の實虚を論じ。西驛にも東江にも北郭にも南門にも。尻の居らぬ無情客も世にあらむとの謂ならんか知らず。爰に花街の宥一話（客ハ町人にて紫屋佐七、としのころハいまだ三十にハたらね共、身のまハりのこしらへより取廻しに至る迄、萬事如才なき男なり、其相方ハ糸屋の小いと年ハ廿二三と見へ少と色ハ黒けれど、おしたてよく男ぼれのするふうなり　少し病氣と見えてむらさき縮緬のきれにてはちまきをうしろでむすび蚊屋のうちに寐ころんでゐる、佐七ハゆかたのなりにてあんどうの前にて三味せんを取、むだびきをして居る）[糸]アレサ潮來ハおよしなんしなそしてモウ寐なんしな　[佐]いゝのサ（トいひながらやつぱりむだびきをしてゐる）[糸]蚊がくつてなりやアしめへに、どういふ氣だのふ　[佐]おらア三味線がとんだ上手になつたのふ（ト何をいつても一向かまハずにゐる、所へまハりの新ぞうおきよ來る）[喜]チヤ佐七さんよ

く來ないましたねヱ、小糸さんハヱ　[佐]どこへか出ていつたそふだ、マア爰へ這入ねヱな、　[喜]どこへいきないましたらうねヱ、(トいひながらすハる)　[佐]ナゼ用でも有ルのか　[喜]いんにヱ　[佐]そりやアさうと、あいつが居ねへこそ幸ひだが、おめヱおれがいふ事をどふしてくれる、いやならいやだと早くいつておれをこがれ死にころして仕廻ねへ(トまじめに成ていふ)　[喜]どういふ氣だのふ、何で有りますへ(ヱといゝながらたゝきそうにする)　[佐]どふ云氣でもねヱ本氣だアな　[喜]ドレいきませうこうしてゐるに小いとさんに見られてみなんし、しかしおめヱ様の事でならなんぞといハれて見てヱねヱ　[佐]又そんな世事ばかりいつてゐるよ、其世事をおれにもちつとうつてくんねヱ　[喜]イヽヱ仲間賣ハ法度だツサ　[佐]本におらアマアなぜおめヱのやうな女郎衆の有のに、あんな女郎をかつたらう、よしてへ物ッだがどふしたらよからうのふ　[喜]おめヱさんそんなマア事をいゝなんして、今に冥利がつきるだらふ、あんなに惚て居ないます物を、いつつけるからいゝ　[佐]知れてもかまうとハねヱハな、

[喜]アレふざけないますな(トせなかをおもいれたゝく此内小糸ハしどうか屋の内にていきをころしてゐたりしがあまりおかしくなつて)　[糸]モツトおもいれたゝいてやんなんし(トいわれびつくりして)　[喜]チヤ小糸さんそこにゐないましながら、能欺しないましたね(ト佐七をまたたゝく)　[佐]是さ／＼おらアいつの間に來て居たのだか知ぃもしねヱもの、モウ／＼

誤たよ 喜何の知らねヱでどうする物か小糸さんも覺ヱてゐないまし（トたゝいたりつめつたりする）
佐アイタヽヽヽもふ〳〵眞ぴら誤りました 喜アヽアツイせつなくなつた（トいひながらべつたりとすハり）佐七さん扇子を借ないまし、ほんにくやしいよ 糸何がくやしいのだな、今爰へ來てはいつたばかりで、なにも知りもしねへもの 喜うそをつきないまし 糸虚言でも何ンでも本ンに知らねヱ物を 喜ウソ〳〵佐じ様へ欺しないましたかハりにね、黑主を引イてお聞せないましな 糸チウ〳〵（ト鼠なきをする是にハ何歟やうすも有べけれどもどういふ氣か知れず）喜サアひきないまし 佐ウヽヨまあ待ねヱ痰がおこつてゐるから、咳ばらひでもよくしねヱじやアならねヱ エヘン〳〵（トいひながら三味せんを取上ゲてうしをあハせ つめのさきにてめりやすくろぬし）〽鏡山いざ立よりて見てゆかん、よしやわざくれ何のその、我もむかしハぬくめ鳥、其きぬ〴〵の肌薄き寐間着の儘のひとへ帶合ノ手
喜爰のうちがいひ文句だねヱ 〽ふたへ廻るをまハり氣なやるせないのがどこやらに、年經ぬる身の老やしつらん（トひきしまい）佐ヤンヤ〳〵 喜モツト何ぞひゐて聞せないましな 佐蚊が喰てならねヱ物を 糸喜代さん三味線を持て、蚊やの中へはいんなゝ 喜アイヨヤとんだ忘れたとをした、（ト何か用をおもひ出す）佐何ぞ味い物でも忘れたのか 喜ナニそんな物じやア有りません、一寸いつてきましやうね ト（うろたへて出て行）糸そゝつかしいといつちやア

ねエよ 佐 どうもあい子ハ能子だよのふ、ドコカ男の好良だ 糸 本ニかへ男のすく顔ハあゝした物かねエ（フウト少しこすつて見る）佐 アノ子にやア惚ました 糸 じやうだんまぎれに色でもしやうと思つて大笑ひだ 佐 ほんにあの子なら仕ても能のさ 糸 男なら仕て見たんし 佐 するのさ 糸 ほんとうにさ 佐 そんなら仕てもいゝかよし 糸 ヨシもいゝいハせておけバあきれけエるよ（トいひながらむなぐらを取てひつたをす）佐 是さとんだことをする 糸 おめエさんのやうな物ハしれねエよ 佐 何が知れねエ 糸 何もイヽ、めつたな事をして人に外聞なかゝせないますな 佐 何ンの事だかねつからわからねエやつさ 糸 喜代様に本氣で何ぞ云やアしなんせんかへ 佐 馬鹿な事を云ふ物じやアねエがな、てんぐ〳〵がうハきものだから、人迄うハ氣者だと思ふそふだ 糸 イツ何がうハ氣だへ 佐 いつもおかしい 糸 おかしいといつたつて、すぎさつた事迄云ひなんすとハねエ 佐 古い事斗が付イていやアしめエし、何をすることか知れるものか 糸 久しい物よ、何をするか付イて居て見ないまし ト（少しまけ口上をいふハこいつよつぽど此客にほれてゐると見へる）佐 女郎が色事をするだらうといつて、付イて居るやつもねエ者だ ト（いひながらかたはしの方へよりあを向になつて　ゐる）糸 なんだなそんなにそつちへよらずともいゝハな、そばに居るのがいやなら、いやだといゝなんしな 佐 おもしろくもねエ 糸 アイサおもしろくなしともいゝのさ、

が堪忍しないまし

（扇遣ひの音を聞）佐 アヽあつい〳〵（ト云ひながら又かたはらへよる）糸 きつい一ッこくさ 佐 それだつてあつくつてたまらねヱもの 糸 ほんにいつそあつくなつたねヱ 佐 コウトもふ天王にもなるしそれを仕廻と直に七月の節句が來るだらうし夫レからぼんか廿六夜か追欠てもの日が來るがどうする 糸 どうするといつて何もかたひ當ハねヱけれどもそのだんになりやア出來るのさ 佐 そりやアそふだけれど若ひ手合さへ指支ねへのにこつちがぎち〳〵して怪知な事をして居られるものかなそうじやア有ルめヱか 糸 マアそふいつて見りやアそ

うさ。夫レだがモウうつちやらかして置ないましな日頃じやア客人に出るのさへいやでならねヱもの［佐］そんなわからねヱ筋もねヱものだ、客に出るのがいやで済ものか、手前がつがうがわるいからそんな事をいふのだらう［糸］ナニそふじやアねヱけれども［佐］それでなくつてなぜまたいやだらう［糸］只モウ何だか商賣をはやく止たくなつたのさ、もふ〳〵飽〳〵としたものを［佐］あきたつてどう成ものか、ながひ年季を抱へて居てそんなヿをいつた所がおさまるめヱじやアねヱか、［糸］そふいつて見りやアそうだがね、何ンだかおりき様何ぞもおつな異見らしいヿをいふし、おめヱさんの評判だつてあんまり足が近いけれバ能もなしするからね、面白くねヱのさ（此おりきと云ハまかない成べし）［佐］評判がわるひといつて、何もおれが義理のわるい事をしたヿハねヱけれども、何といつた［糸］ソリヤア何も義理のわるいヿハねヱけれども、そうたい客人がそまつになるから氣を付ケなせヱしといふからね、わつちが考へて見るのに御部屋ゝ見世でそんな噂さでもあつたらふと思ふのさ［佐］夫レじやアおれが外の客をせきでもするやうに思つてゐるだらう［糸］ちつとハそうもおもつて居ルのさ［佐］そふいふやうじやア、ためにならねヱとおもふから、今にせくだらふわへ［糸］それハしれねヱのさ、ひよつとそういふように成て見ないまし、どふも仕様が有ルめヱじやアねヱかへ［佐］ウヽそふしてみりやアうか〳〵としてゐるうちにやア、何ンとか角とか云てせくだらう、そのだんに成ッてさ

ハいだ所が、何ンの噛しも出來めヱし、イヽさきもそふいふ心意氣なら、こつちもまた了簡があらアな〔糸〕どふしようと思ひないます〔佐〕どうといつて外にしよふも有ルめいし（ト云さしてしばらくかんがへて）いひハヱにけて呉ヱ〔糸〕ソリヤア隨分いひがね、逃るハ、チイソレといつて手がるく出られもしめヱがどふしたものだらうねヱ〔佐〕手がるい事にやァいかねヱのさ、シタがいよ／＼そういふ了簡なら、どうでもかうでも仕やうが有ルのさ〔糸〕いよ／＼でなくつてさ、今迄人になんのかのといわれて居る處を、もしせかれて見ないまし、あんまり智惠があるめヱじやァねヱかへ〔佐〕何ンでもマアその氣でゐるがいゝ、おれも其氣で何かの都合をするから〔糸〕そんなら其積りでマア爰の内を出るハね、そふして見た所が何といふだらうねヱ〔佐〕どうでやかましいのさ、すぐすなをにやァいくめヱが、そこの處ハ臨機應變で、人に人を掛たなら、金ですまねヱ出入りもあるめへじやァねへか〔糸〕そうささふ云ふ氣でゐないますなら、こつちのかたせヱ付イたなら、たとへ外へ出てかせひでもいゝじやァねヱかへ〔佐〕マァそうさ夫レにした處が迚も宵月夜のうちハむつかしいから、何でも廿日よりすへにしざァ成ルめへ〔糸〕出ようと思ふからにやァいつだつていゝじやァねヱかへ〔佐〕ナニそうでもねへこつちも手配りをして置ねヱじやァ万一見付られた時にいかねヱ〔糸〕知れちやァどうで百年めさ〔佐〕それだからそんな氣遣ひのないやうに都合をする迄待がいゝ〔糸〕そうして見ると天王もまたくるしまねヱ

じやアならねエねェ　佐そりやァさ何ぼ出て行から跡の事ハかまハねエでも居る、内ハ外聞のわるひともなるめへから、浴衣でも出すがよからふじやァあるめヱか　糸今そんな事をするなア夫レでもむたゞねヱ　佐どうでむだはしれた事だけれども、そのくらゐなとハしておかねヱじやァかつかうが悪ひハな、そしてそんなとでもしておけば見勢でも當分ハ氣をゆるすだらふじやァ有ルめヱか　糸そんなら私しの方でもそのつもりで成丈都合をして見て、ちつとでもいつてやれそふな處へハ早くいつてやつて見にやァならねヱ、　佐そうさおれが方でも随分成リ丈ケハ拵らへてよこすから、其氣で居るがいひ　糸なァにさこつちの事ハどふでもならふからかまいないますな、それより跡の都合のいゝやうにして置キないましな　佐それだつてそんなにやァ算斷が出來めヱが、　糸何さふふざゐまさアな　佐そんならばこつちで遣て見るがよしと（トいゝながらしばらくかんがへてゐる）　糸そふしていよ〳〵斯と云時キにやァどうしないます　佐夫レ迄にハまたおれもくるし、何でも噺しハ出來るハな　糸そりやァそふだがね、居るのハ何所から出るがよからうねへ　佐どこといつて裏より外に出所があるものか、そして其時にやァ誰ぞ初會の面で客を拵らへてよこしておゐて、相圖をするハな　糸そしてもおめへ様ハへ　佐おらァ船を河岸へ廻して待てゐらァな　糸内のしがくハわたしがして　佐稲荷の屋根へ階子をかけりやァ何のざうさもねへと（ひそ〳〵はなすこんたんもはや夏の夜の短かくして既に東方

黎明の時なかばたらきの男雨戸をあけに來るその足音におどろきてしばらくむごんでゐる處へおしつゞゐて茶屋の男むかひに來る）ちや屋の男へヱおむかひで御坐りますモシ佐七樣へ〳〵（トおこされいま目のあきし振にて）佐ウヽなんだ　茶屋おむかひでございますモウあけました　佐ナニモウ夜が明たかとんだ短ひぞ　茶屋モウ日頃の夜のみじかいといつちやアござりません　佐何だかねむくつて今日ハ歸られそふもねへから晝時分迄寐てゐるからのその時分ンにむかひに來て下せへな　茶屋ハイ〳〵そんならマアそれ迄御寐なりまし左やうならまいつて參りましようと（いゝすてかへるそのあとにふたりハつかれし樣子にてすや〳〵ねいる戀のひるなか、あなたに聞ゆる天王のお目ざましの太皷の音トコトン〳〵〳〵〳〵〳〵）

嗚呼此客夜短苦メ晝長一何不ニ喚レ妓遊一

○其二

襄王が巫山の契りハ皆人の羨ところ成といへども、夢の間の戯にして覺ての後のものおもひに心を惱めるハ、好色の迷ひ成べし、何ぞ樂人朝に逗止日和の雨と成ことを悦ぶとも、夕べに長持を荷なふ愁を思ひて、驛中の雲なることなかれ、先それハ扨おき爰に後の話を說

（ころしも六月の末つかた二人り連レの客一人ハ[綱五郎]一人ハ[九郎兵衛]いづれも身の廻り如才なく見ゆる、されども此地にハあまり知たかほもなきと見へ、近付きならぬ茶屋を連レ五ツの鐘ぼうを引時分ン新宿へはいりすぐに本宿のいと屋の見世へ上る）[若イ者]いらつしやりまし [九]どつちへ行クのだ [若]ハイこちらでござります（トいひながら見通しへつれゆく、客ハかげ見世を尻目隠（マヽ）て通る）[綱]何だかけふもあつかつたのう（ト云ひながらかうした二人とも海の方を見て）[若]左様フでござりますね（トいひながらくらく成たあんどうをかきたて出行、跡へ茶屋はき物なかた付来る）[茶屋]海の景色も随分よふござりますねヱ [九]さうさの [綱]是程の所をねつから知らねヱで暮しました [茶屋]どふござりますかあなたがたが御存ねヱといふ事がござります物か [九]本ンに来た事ハねヱハな [茶屋]たとへ外にお馴染があつても是からどふぞお出なすつてくださりまし（ト咄して居る処へ小供ちやをくんで来り）[小供]ハイ御茶をおあんないまし [綱]チイく／＼そこへ置イていかつし [小供]アイ（ト茶ハんを置て行）[茶屋]コウ／＼ おたばこ盆を持ツて来さつし [小供]アイ（ト行跡へ若者燭だいを持来り茶屋にそつと聞）[若者]お二人さんながら おはつだつけかね [茶屋]アヽそうさ [若者]どうしよふねへ（トいつてゐる所へ 盃とてうし硯ぶたを小供持来ておゐてゆく）[茶屋]お聞申さふ [若者]そうしてくんなせヱ（トまつて居る）[茶屋]時にどう致しましよう若イのに致ましようか、但しとしまとやらに致しましようか [九]そんな事より野暮に見る方がいゝじやアねヱか

のふ [綱]ウヽ夫レがいゝノ〵 [茶屋]左様なら夫レがよふございます [若]そんなら一寸御覧じるやうにそう申てくんなせへ（トいひすて立て行）[茶屋]マア一ッおあんなさりませんか [九]酒にしよふかの [綱]それよりマアきめておゐてのとにしよふじやァねヱか [九]そんなら見たてよう（ト立てかけ見世の方へふたりながら行茶屋にそつときく）[綱]時キにコウ爰の内に小糸といふ女郎が有ルじやァねヱか [茶屋]エヽ御坐りますアノアレうちハを持ッて居さつしやるいがそでござゐます [九]どれだと [綱]團扇を持ッて居ルのよ [九]アイツァ奇妙だハへ [茶屋]奇麗でござりますね [綱]ウヽおらァあれにするよ [茶屋]そこであなたハどれになさります [九]おれか、何ンだか目うつりがしてわからねヱよふだ [綱]早くきめさつせヱな [茶屋]小いとさんのこつちにゐさつしやるのハどうでござります、御坐敷もおちきお隣でよふござりませう [九]ウヽよからう、ありやァなんといふ [茶屋]おつまさんと申ます [九]そんならあれノ〵 [茶屋]サァ夫レできまりました（トいひながら見廻しへゆく）[綱]内の酒ハどうで飲めへ、ソレ何ンとか云いゝ酒が有ルじやァねヱか、そいつを呑てへの [茶屋]菊の露でござりましよう [綱]それ〵 [九]其序に藝者衆を呼でもらひてヱの [綱]ウヽコウト男女取交てひとり二人り三人よつたり斗り、見ともなくねヱのにしてへの [茶屋]畏りましたお肴も何ぞ申て遣りましよふね [九]そこいらハそつちでいゝようにしてくんねヱ（ト咄して居る所へまかないお力出しものを持來ル）[力]どなたもよふいらつしやり

ました〔九〕アイ〔綱〕おにぎやかだねヱ〔力〕ハイどうしても日頃(このごろ)ハにぎやかで御ざりますが今ン晩(ばん)ハ少ししづかでござります〔綱〕けふはあんまりあつかつたからさ〔茶屋〕大きに夫レもござりますのさ〔力〕お一ッおあんないませんか〔九〕アイ今に酒が來てからにしやしよふかね〔茶屋〕ホイこれハしたり早くそう申て參りませふ（ト立てあつらへものとげいしやの口をかけにやる）〔力〕御酒(ごしゆ)の參りますまでマア私しが是ではじめませう（ト手じやくにて少し吞）はゞかりさまながらあなたお上申ます（ト九郎兵衛に盃をさす）〔九〕是ハちつとあけましようかね〔力〕イエマアおあんなさいましな〔九〕マアちつとついでくんなせへ〔力〕ハイ（ト少しつぐ）〔九〕コレハ憚(はゞか)り〔力〕お肴(さかな)をあげませうかへ〔九〕取りやしよう（ト硯ぶたものをなつまんでくひ）〔茶屋〕只今(たゞいま)お誂(あつら)へ物がさんじます　ト（いひながらすわる）〔九〕綱(つな)さんあけるよ（トさす）〔綱〕アイ私しにも少(すこ)しくんなせへよ（トさかづきをうける、所へ若者女郎をつれきたり　はいり口にゐて）〔若者〕マアどなたもお這(はい)んなさいまし（トいふをしほに向の方へ女郎二人りすハる）〔若者〕そんならお頼(たの)み申ます（ト茶屋へあいさつをして出て行）〔力〕どなたもおはやう〔茶屋〕一寸お盃(さかづき)を〔綱〕ヲイト（吞で臺へのせる）〔茶屋〕ハイ（トいひながら小糸がまへゝもつて行）〔糸〕（だんまりで吞まねをして臺へのせるそのさかづきを）〔九〕が前へ持行（此とき小いとハ手前のきやくのかほを見ぬやうにしてよく見る、おつまもおなじく盃もすむ〔茶屋〕白鳥の菊の露をてうしへあけ、かんをしに遣る處へ　げいしやぞろ〳〵と來る　男の方ハ）

[万藏][才藏]女の方ハ [お艶][お民](一座の顔を見渡し言葉をそろへて) [四人]どなたもよういらつしやりました [茶屋]とんだ仕度が早かつた [万]何サ私しが仕度ハなんのざうさもねへけれども女房どもが埒があきませんのさナアおゐん [艶]チヤいやだのふ [民]あつかましい [万]ナニあつかましいものかおいらがやうな能男がお客にだつてあつたにやアござりませんねへ旦那(ト客の方へあいさつをする) [綱]さうきねへのさ(ト笑て居る) [才]おてうしハどこだね旦那方にちつとあげてヱものだね [茶屋]今お火通にいつたつけ [力]どれ取て來ましようね(トいひながらたつ) [才]コレサおりきさんおいらが来たつてそんなにはたらいて見せねへでもいゝハな [力]是もおめヱがたへの御馳走さ(トいひ捨て行跡へ、揚しんぞう二人りにててうしを持來る、此すてぜりふのうちおゐんお民ハ箱より三味せんを出し、てうしをあわせてしまい、二人りハ顔を見合せ、テ、テン〳〵〳〵(ト引出ス) [万][才]花にたハぶれ枝にふし、(うたひ出ス 中りやくす)露の玉ちるあさぼらけ(トうたひしまふ皆〳〵同音に)ヤンヤ〳〵〳〵 [綱]盃ハどこだの(トたづねる) [九]ラツト宴にあつた例ンにしても見付ケた者が吞事だ(ト一ぱいのみ才蔵へさす) [才]へイさ様フなら先いたゞきませう(トいゝながらのミ)あなた恐れながら差上ゲます(ト綱五郎へさす) [綱]おさへようかね [才]マヅ〳〵 [綱]そんなら吞ふか(トいひながらのみ)へイモシおちか付キのために上ます(トお妻へさす) [妻]アイ(ト言た斗りにて盃を取かつちりいわせる) [綱]なぜへひとつおあんなせヱな [妻]

たべまさんもの）［万］あなたハ盃でハあがりませんのさ［潤］そんなら茶碗にしよふかね［妻］ナニうそ
ざいますア、あんなマァにくひ口だ覺へてるないまし［万］へイ／＼覺ております［妻］お艶様ン、（トい
ひながらさかづきをさす）［艶］ちつとあげましよう［民］チヤ／＼あげませうといひながらお盃をバ取
ルやつさ［艶］ほんにどうしようのふうつかりと一ツぱいうけたよ［民］吞なんし［万］そんなにのんでお
れに寢床を敷せるだらふぜヱ氣をつけさつせへよ［艶］チヤいやだのふ［民］わるい亭主だのふ［艶］あん
な亭主をもつ者も有ふかねへ［才］むごく云フの［艶］あなた上ふせう（ト九郎兵衛へさす）［九］こんどこそ
押へよふ［艶］マア是ハおあんないまし［九］インニヤ押へやう／＼［才］さこやうさ／＼［艶］きつい世話
役だよ（トいひながらたゝきそうにする）［才］おいらじやアねヱもしねヱもの（ト身をかた寄る）［艶］さ様フ
ならもふ一トツたべませうかねヱ　ト（いひながらうける）［民］此子ハどうしたのだ［万］あふかたあいでも
させるだらうと思て待ッて居るのに、又吞かあきれたものだ［艶］イヽノサそんな事を云フ程おめへの
方へハ廻さねへよ［万］イヤコイツ廻しおらんと若者を呼んでいつちくるぞよ［揚断］チヤ能似て居よ
［万］なにとほいてくれちうか　［新造］わつちやアいやだよあれさよしないまし［民］万蔵さ
んにおどらせよふじやアねへか［艶］ウヽ万蔵さんちつと踊んねへな［万］おどると又おめヱがたが惚る
からいやだ［民］インニヱ誰も惚る氣遣ひハねへからいゝよ［九］こいつハよからう［才］此踊ハきついも

のでござります [綱]そんならやらかして見せなせヱな [万]やりませうかね(トいひながら立てぬきゑもん
におき手ぬぐひをする) [艶]いやな形(なり)だのふ(トみな〳〵わらふ) [万]おめヱたちやア笑(わら)つて斗リ居ずと三
味せんでもひきねへ 〽ぐりなアぐりしよウとつくりしよう、とつくりぐりしてやるせがねへ、一貫三
百十しんめへ、それちか斗りがやアちかなとせん事大もくじやあぢはつたのつうからしつうとならん
四文
できうもうたさア〳〵、もちこ〳〵 [皆々]アハヽヽミヽヽ、チホヽミミミ 〽ちきちんちきかまおや
ぢ、そこしんそこ大もくじやなんしまどんこにしまどんこ、とんこの木のぼりいなものじや、ちようふ
豆蔵
にかすげへたハヱがねへとん〳〵からいがなんばのこなまごめかミ〳〵しようべんしよさアさもちこ
いく〳〵 [万]アヽくたびれた〳〵(ト言ながらすハる) [皆々]アハヽミヽヽ、チホミミミ(トしバらく笑ひやま
ずそのうち小糸もおつまも揚新ぞうもおゑんお民もだん〳〵にこらへかねて廊下へ出てわらつてゐる) [綱]さつ
いものだ [九]いヽどうもいへねヱは [綱]あんまり笑ハせたから女郎衆も何もどこへかなくなして仕廻
たぜヱ 才ほんにみんなどこへかにげさしつた [九]サア一ツ呑ねへ(トいひながら盃をさす) [万]戴(いたゞき)まし
やう(トいひながらうけてのむ所へお力来る) [力]何だかとんだおにぎやかだつたねヱ [茶屋]万蔵様ンの踊(おどり)
で見なせへ色気(いろけ)をわらいなくしてしまつた處さ [力]ほんにかへどうりでミんながせつながつてゐるない
ましたつけ [万]おすハんなせへな [力]アイしたがモウちつと片付やうじやアございませんかへ [茶屋]

ほんにようござりませう、夜ハ短かしちつとあちらへいらつしやりまし、［万才］さやうさそれもよふござりましよう［綱］そんならそふしやうかの［九］いかさまモウよからう、サア／＼いきやしよう／＼（ト立）［綱］どつちだの［茶屋］下でござります、サアお出なさりまし（トミな／＼一度にたつて下部屋へ行ところへ）［艶］も［民］（も来り三味せんをしまひとも／＼おつまが座しきまで送り込言葉をそろへ）［四人］へイ左様なら御機嫌能（トいひ捨てかへる）［茶屋］お前様ンハお隣でござります直にあつちへいらつしやりませんか［綱］チイ／＼モウ知れて居るからいゝよお前もモウ帰んねヱ［九］さやうさほんに大きに御苦労だつたいつて寐なせヱな［茶屋］さ様ならおいとま申ませう、御迎ひは何時に致しましよう［九］コウト七ツでよからうノウ綱さん［綱］ウヽ七ツでよからふ（ト云て居る所へお妻としん造送人来る）［妻］チヤモウかいんないますかへ［茶屋］ハイ左様なら（トいひ捨帰る）［妻］浴衣を出して、上申てくんなんし［新造］（ゆかたを出し）モシお着かへないまし［九］チイ／＼着替やしよう（ト言ながら帯をといてゐる所へ今一人の新造来たつて）［新造］おまいはんハこつちでざいますサアお出ないまし（ト云ながら手をとる）［綱］チイいきます／＼そんならお休よ［妻］マアモウ一ツぷくおあんないましな［綱］おじやまにならねへうちめヱりましよう［九］おきやアがれありがてヱときに何かの事ハよからうかの［綱］ウヽヨ合點だサアいつて寐ませう（ト立て行）［妻］そんならお休ないまし（トいゝし迄にて是より此ざしきのおもむきいろ／＼あり

といへどもしばらく畧之、つな五郎小糸が坐敷にいたりゆかたをきかへたばこをのんでゐる所へ小糸もゆかたのなりにて來たり）糸なにかを片付てしまつたならいつて寐なんしよ　新造アイモウ仕舞ましたそんならお休ないまし（ト云捨て出行跡ハ二人さしむかひになる）綱宵の内より涼しくなつたかねヱ　糸ちつとハ涼しく成ツたやうざいます　綱サア寐る事にしませうか　糸寐ないましあをいであげヱしよう（ト云イながら敷居の廻りをうちハであふぐ）綱御めんなせヱ（ト言ながらたばこぼんを持てはいる）糸火ハ有りますかへ　綱有りやす／＼　糸夏ハうつとふしいねヱ　綱サアねなせヱな

糸おまいはんもねないましな　綱時に小糸さんおめヱにちつと噺しがあるが聞イてくんねヱよ　糸なんざいますチヤよく名を知つてゐるないますねヱ誰に聞ないましたへ　綱そりやアおめへ知らねヱでさ名をきゝ及んでわざ／＼来たものふといふとナニカ色身が有ルやうだがまりたくそふじやアねへがの　糸おめへさんの事ならなんでも聞キますのさ　綱おれがとじやアねヱがの（トいわれて見れば少しむねに當りしをしらぬふりにて）糸そして何ざいますへ　綱誰レもち人は聞きやアしめヱかの（トあたりへ氣を付）アノ佐七が事だがの兼て何かの手はづ迄おめへに噺して有りさうだが、其心懸がしてあるかへ　糸成程その約束もして有りますのさ　綱モウ大方佐七も船を河岸へ廻して待ツてるだらふ、それ故お客のつらでおいらが來たのさ　糸本にそりやア能來ておくんなんした、

其後ハ佐七様も來もしないませず、便もしないませんから大きにあんじてゐましたがそういふ譯なら都合をして世間のしづかにねしづまるのを待てから [綱]いよ〳〵迯るりやうけんか [糸]そりやア云ひないませんでも知れた事さ　マア何にしても一寸手水にいつて來ますから待ツて居ておくんないまし（ト云すて出て行其跡に綱五郎ハ只一人まじり〳〵と待てゐたるに、一向おと沙汰もなくいかゞしたるやうすと思ふ折から、あし音がするゆへ、今こそ小糸が來りしならんとおもひの外わかいもの來りはいり口より）[若者]御めん遊ばしましモウおよりましたか [綱]インニヤまだ寐入りやアしねへがなんだ [若者]チトお目に懸りたう存ます [綱]ナンダこつちへはいつていゝなせエ [若者]ヘイ左様なら御免んなさりまし（ト座しきへはいり）外の義でもござりませんが小糸さんの事でござります（トいふ故心得ぬとおもひ起なをつて）[綱]小糸様ンがどうしたへ [若者]ヘイどうといふでもござりませんが何かおまいさんにハおさしが御ざりまして出られませんとおツしやります、それに付キましてハ部屋でも左様申ます、お二人リ様ながらお氣の毒にハ存ますがお早く御歸りなさつてくださりまし（▲ト云をハりハまさしく小糸が佐七を一ツぱいかいたる狂言にて實ハにげるりやうけんもなけれどほんの義理一ぺんのやくそくを佐七ハまとの事と思ひ綱五郎をたのミににげる手引によこしたれバさながらいや共いわれぬゆへさハらぬていにもてなし手水に行ふりにて右の始末を部屋へふつ込かくはからいしならん　誠に娼婦の薄情なる

縦令ヒ然諾シ暫ク相ヒ許ストモ
終ニ是レ悠々タル行路ノ心

かくともしらず佐七ハかねて約束のことなればいまやおそしと河岸へ舟を廻して待居たる所へ　若者大ぜひてうちんをさげてん／＼にばうやら、あるいハまきざつぱをふり廻しやれ盗人よどろばうよと呼ハり／＼佐七が舟をおつとりまく、こハたまらじとおどろくひようしにびつくりして、夢も其儘さめはてゝ佐七ハむツくと起なをりあたりを見ればありし小糸が座敷故扨ハゆめで有たかとうでをくんでしあんをしてゐる所へ〕［茶屋］來り　おめがさめましたか

冊畢

再叙（千客万來）

古人有言曰不以自虚出實未必不遂矣粹哉言也傾城之實著自虚出而完生涯標客之虚著自實出而過終身何夫雖擲數千金知其是非得失者蓋鮮焉嗚呼夫識余罪余亦以足知遊情歟

書于葵丘之寓居

鹽屋艶二

戌孟陽出版目録

鹽屋艶二著

後篇匂帒 袋入小冊 伍大力 全

南門鼠蹄 全 晉手家語 全

標客三躰誌 全

夷曲歌輕多 これハ武江に高名なる人〻の狂哥をえらびたる畫入のうたがるたなり 彩色摺はこ入 全

仇手本後編

通神藏

完

仕懸幕莫

仇手本

前編

初段より六段目までふか川のせかひにならいよび出しの穴ナをうがつ

仇手本後編

通神藏

七段目ゟ十一段め迄よしハらのせかひになぞらへしんの手くだをあらわす

兩册とも本賣出し申候

自序

酒よく人を浮べ酒亦人を覆ふ餅好酒中の趣を不知しらずしられぬ中の町酒で明さぬ夜半もなき魚の林酒の海はまりて行ハうめ酒のすいが身を喰ふゆき過あり浮れて通ば樽底の濁りてかわる水臭き心をしらぬあやまちありうその誠の誠の虚言の酒落がこふじて物狂ひ椀久藤伊が面影を寫し紀文奈良茂が全盛を盡すとも豈虚を以て實を得んや傾城の空言ハ誠を以て買にしかずこゝにおいて當れる哉大星が寓言虚から出たる戯作本を誠の道に引當て其儘仇手本通新戯と題す

小金あつ丸誌

なべ

序

狂言伎語ハ三歩傾契のゐんにして太夫はさんじきの名によバれ合羽もんつきのよび込あれバひつぱりトよぶ傾契有仲の町の櫻の花道にハ袖をとめ場のしんぞうあり紋日の相談にハつんぼさじきのそら耳をはしらせうづら八小夜中の床にふけりとふろう八髮に結ハせ俄のげい盡しは三會目よりあらはし素見ぞめきのまわり仕かけ八朔の中の町は雪げしきのはやがわりにして幕なしの居續にまきちらすこがねあつ丸ぬし此さとにあそぶ事をおかるがのべ鏡に五町をうつして其あかるさはつりどふろうのあかりをかきたてたるごとくあなの穴をうがちてわざおぎのせかいにかきぬき仇手本通神藏と大名題にあらはせしをやつがれ本よみをする事しかり

山旭亭まばゆき述

第七回
仲之町一力樓醉狂ノ妻
一文字樓傾城手管ノ世界
姉妓
香留川

第八回

船中詠冨士栖落話

於紊瀬小波ヲ雪中ニ行

第九回
向嶋由良之助別荘ヲ二婦尋
本蔵氣轉料理之世界
魚作
勇古川

第十回

揚屋町妓女持儀兵衛ガ宅

由良ガ實心於園ヲ救世界

第十一回

夜中ノ煤掃高野屋直隠
大星顔知達本望世界

附言

忠臣藏の淨るりにもとづき大星がすぐミちは義臣をあらハす善惡の二ツ巴定九郎横しまハ財布の金に身をはたすも本色欲の二ツ玉うつてかハりし手くだの世界善惡邪正の狂言きぎよにとよせさとしからんがためたハれ言葉になぞらへしハ惡をこらし善をすゝむるの一助ならんか

仇手本後編 通新戲

小金あつ丸著

七回　中之街一力屋の世界

附　一文字樓の手管

抑此廓の賑ひ今さらいふもさらなる春の朝のさくらかさねハ花のものいふ中の丁秋の夕べの燈籠鬢雁額の艶なるハ漢河の織女かとうたがひ蹴出しの紅葉素足の雪門季につきざる富士額色ならぬ所もなくはりと意氣知の古風をすてずされど有んすハ萬葉時代の風調にしておすざんすの當世にしかず昨日の流行ハけふの昔けふの淵瀬も飛鳥川かハる俄の引道具ふるきをもつて新らしく立つらねたるその中に一力屋の二かいとおぼしくさハぎ

〽あさくさのすミだ川へむらさきちりめんがながれたヤレ〳〵あげまきがうちかけかたどしやア助六がはちまきかヤレ〳〵

［由良介］コリヤ〳〵その盃をよこした丸太先生のミ給へ扱ミかたひぞ是ハどうじや丸太どのハかた過

て石になられたやうだ［九太夫］ハヽヽむかし思へバしのだの狐ばけあらハして一ッこん二こんこん〳〵のこんとのミかけやふか［中居おせん］モシヘおいらんハねお酔なんしたからものほしで風にふかれて醉ざましをなさりますョ［由良介］よいは〳〵平右衛門〳〵どこへ行た扨ミ足のかるひ男だ［平右衛門］おります（と二かいへあがってくるとびのものなれどおやぶんとよバれる男人がらよし由良之介が店内の出入のもの）［由良］てうづにまいらふ［けいしやてつ］おあぶなふございます［秀太夫］まいりませふ（ト前に付て行く）［由良］イヤあぶなひこわひハむかしの事たいこのぶちでも氣づかひあるまひナアおてうぼう（トひよろ〳〵はしごをおりる）［長八］おざうりを［由良］チットよし〳〵ミんな二階に居たまへ（トひとりてうづばへ行あたり見まハしさいぜん力彌がもち來りしわか町のかほよが文きにかゝれバ庭のとうろうにすかしよんで見る〽九太夫もがてん行かずと下ざしきゟこそ〳〵と來りついたてのかげにかくれて文の先をよんでいる〽又かる川ハてうどこのうへがものほしにてうすべりをしひてゐたりしがそれで勘平がくるかこぬかのたゝミざんをするとてかんざしをとりおとし引まどよりてうづばへばつたり）［由良］（びつくり）だれだおいらんか（トかんざしをひろひ）そう〳〵二階へ上る九太も醉たふりでついたての脇へたをれてゐる［かる川］（此かる川ハ勘平が女房おかるなりゐしやう付りやくすばんとう新ぞうかる山かぶろかるじかるも二かいよりおりる）［かる山］モシヘ由良さんへモウおいでなんせんか［由良］いきませう〳〵九太どの〳〵平

右衛門や九太が醉ッてねているから引かつひでつれて來給へ伴内ハどうした 平右衛門 かしへまいつたさふでござります 由良 サア〳〵(トかけだしてはき物をかたちんばにはく) かる川 アレせハしねへざうりがちがひんした 女房 モウいらッしやりますかソレおてうちん長八おはきもの 由良 ミな來た〳〵(二てうつゞミ) おてう おだい 秀太夫 德藏 サア〳〵まいります 由良 さミ子ハどうした 秀 今ばんきのえ子で稲づるさんの茶めしへよバれてめへりました 由良 よし〳〵 ト(是より坐しきのせかい今迄書ふるしたれバすぐに床のせかい)

九太夫が床

(九太が相方ハ新ぞう ねむ川 ねまきのしもげたやうなふり袖そで口のところハやけあなとしミだらけとちくろつたと見へやつ口ハかたまでほころびたやつに前がミよこつちよになり下〳〵の帶もじだらくにまくらをはづしてねてゐる) 九太 コレ〳〵ト(ゆすぶりおこす) ねむ川 なんざんすよくいびりなんすねむつたふざんすハナ 九 用があるからちよつとおきねへ ねむ川 ばからしふすヨごしやうだからだまつてねかしておくんなんし 九 水がいつぱいのミてへ ねむ川 モウちつとしんぼうなんしよが明いすト(ねぼけた聲でいふ) 九 とんだ事をいふぜへまだ八ツめへだののどがかわひてならねへ ねむ川 エヽモばからしひ

客人だヨウ引ト(ふせう〳〵に出て行)［ねむ川］アイト(まくらもとへ水をおいてどこへかいつてしまふ)［九］いまく〳〵しひやつだト(それよりまじり〳〵小べんに行たり立つたりすハつたりねころんだりたばこのんで見たりあたまをなでゝ見たりびやうぶのゑを見たりひとりごとをいつたりわきより見るときちがひのやうな身ぶり也そうかうするうちたばこの火もきへ七ツの二かいまハりねずの男あぶらをつぎにくる)［九］コレ〳〵［男］ハイ［九］ちよつと吸付てもらへてへ(ときせるをなげてやる)［男］ハイ(ト吸付て出し) おやすみなさりまし(トおくの方へ行)［九］どこへいきやアがつたか ト(此時目ハさへいよ〳〵はらがたつゆへ平右衛門がざしきへ行おこす平右衛門があいかたたづれてつれてくる)［いさみ］のねむ川さんおめへもいやだらふけれど茶やのめへも有由良さんのめへもきのどくだからつとめてやんなんし［ねむ川］(なみだぐみ) さつしておくんなんし宵ツからちかたツきしいびつてばかりおりイさアななんのゐんぐハだらふのウト(ふせう〳〵にらうかをいひながらきたり)［ねむ川］ナゼ爰へ来てゐるなんすあつちへ御出なんし ト(手をもつて引ばりつれゆく)［九］手めへハ居ずさびしひからきたのだ ト(はやのろく引ずられて行　)［九］コレ手めへへハなぜそのやうにつん〳〵するとしよりハかわひがるぜへ［ねむ川］わたくしハかわひがられる事ハきつひきらひざんす［九］きつひあいそづかしだ手めへだが坐しきのしんざうだ［ねむ川］こゝの内のしんぞうさ［九］おいらんがむごくしろといひつけたが(ママ)［ねむ川］そんなむつかしひ事ハぞんじいせん

九 ソレふとんのそとへ出るぜへよぎの中へちつとはいらねへかさむひぜへ ねむ川 出てもよふざんす是がわたくしがかつ手でざんすからだまつてゐておくんなんし

ねむ川 わたくしハからだへ手をつけられるのハきつひきらひでざんすごしやうだからそつちへよつて御やすミなんしておくんなんし 九（これよりはらのたつ思ひ入有てぶん〳〵としてにらミつけものもいハずちやんとおきてかしこまりまくらもとのてうし引よせひとり酒をのむ） ねむ川（目をばち〳〵あいて見てゐていつかうかまハず

平右衛門が床

いさゝの（とめそでしんぞう大のげんきもの平右衛門がいきなきやんじたてにまんざらでなきやうすおいらんのざしきでおまんまをたべむねのあたりをミすがゝであふぎながらばた〳〵らうかを來り） もしへおやすミなんしたか ト（つくばつてやうじをつかつてゐる） 平 わつちらアかういふよぎふとんの中へはいりつけねへからねつかれやせん いさゝの いひなんすもんだどこへもいかつしやらねへふうだ ト（たばこ付て出し平右衛門がひたいのぬきぎハをゆびでなでゝ見て） いさゝの ぬしやア

いくつで有らッしやらふ　平あてゝ見なんし　いさゝの廿五六ざんしやう　平それじやァ來ねん明や

うといふもんだァ十七サ　いさゝのむしがいゝよ　平むしがいゝよりやァ鯛のうまにでほぞがつけて

へ　いさゝのよくけびをいゝなんす　平けびハ身をたすけるじやァねへか　いさゝのほぞたァなんざ

んすへ　平おめしのことさ　いさゝのヂャ江戸じやァみんなそう申いすかへ　平そうさ　いさゝのほ

んざんすかへ　平ほんざんすよりやァ戸棚のにまめがいゝ　いさゝのゆだんのならねへいつ見なんし

たへ　平見めへものか　いさゝのアイ見ねへものさ　平見ねへのごむりハごもつともにしてやらふ

いさゝのよくしやれなんす　平しやれなうき名がうれしふて　いさゝのもうよしなんし　平ときに

むだァのけてわつちらがやうなもんでも來てよからふかね　いさゝのようざんすのさ　平もつてへね

へやうだね　いさゝのばからしふざんすハなそりやァおめへさんの心にくるもこねへもありいす人の

しつた事じやァざんせん　平わつちがくる氣でもあげられねへ時にやァつまらねへ　いさゝのうちで

あげいせんでもわたくしがあげいす　平うそをつくぜへうそつきと附やしやう　いさゝのほんざん

すよ　平ほんとの事にせふ　いさゝのむだじやァざんせんわたくしもかふ申いすからハりやうけん

がざんす　平おめへにそういハれちやァちつとうすのろひが　親分といわれねへ法もあれ　くる氣だ

いさゝのその口をわすれなんすな　平何忘れるもんだ　ト（はなしなかバへ九太夫きたりぶう〳〵といふ

ゆへいさミのねぶ川をたづね出し丸めねかす）［平］やぼなおやぢだかわゐそうにあの子のいやがるをむりハねへ［いさミの］それだつてもそこがつとめのしんぼうざんす［平］おめへもつとめのしんぼうであハせてくれるのか［いさミの］しりいせんちつとおやすミなんし［平］これほどねてゐるものを［いさミの］そんならなんにも申んすめへ

由良之介が床

（引過のやうす　かぶろもねてしまひてうづにいつてかへつたといふあんばい　おいらんかる川まくら元でかんがへながらたばこをのんでゐる）［由良］どうぞしたかでへぶいろがわりいぜへ［かる川］アイサ二三日おまんまがたべられへせんよ［由良］ムヽさつきから手めへにいハふと思つてわすれたこねへだちよつとしやれにいつたがほんとうにきうにうけ出すそうだんでいちりきの亭主（ていしゆ）にこんやかけ合ツたからあすのあさこつちへくるはづだ［かる川］エヽ　ト（びつくりしたれどもさあらぬていでなミだをかくし）　おありがたふざんす［由良］（かれて勘平が事をしつてゐてしらぬふりにてかる川がしんていを見とゞけしうへにてうけ出しそハしてやらんと心を付て居）［かる川］それハうれしふざんすといわせておいてわらひなんしやう

てネ　由良　うそから出たまことさ　ト（かれこれれいりしふりにもてなしやうすを見る）　かる川　（由良之介がれいりしやうすを見て屏風の外にてひとりごと）　だん〳〵のおまへの御おん死んでもわすれハいたしいせん何もかもわかつたおまへに打あけて申いせんハわたくしがつミでざんすがかんにんしておくんなんしわたくしハ勘平さんといふ男がありいすゆへおまへさんに身うけの金を出させどうまあおまへをつぶして逃られんせふおまへのかほをたてれバ勘平さんに立たず勘平さんに道を立れバおまへをつぶすといふておまへも中之町でそうだんなんしてそれぎりにやめなんすきぜんでもなく一ッたん云出しなんした事今まで一ッもちがつた事もざんせん今までハおまへの氣にちがつた事もざんせんが是ばかりハゆるしておくんなんしおまへのかほも立勘平さんのかほも立今までのおんがへしにわたくしハ死んでしまいイすからどふぞかわいゝと思ひなんすなら此かきおきにある山家町のとゝさんかゝさんを見つひでやつておくんなんし　ト（手もふるへ文の文句もあとやさき）もう〳〵あきらめいせふと思つてもぐちな事ながら此間から人をやつても來もせず夕べにも勘平さんがきなんせバせめて今の思ひも少ハはれんしやうにたつた一目あひたふおざんすそれに又このぢうもかゝさんのきなんしてくれ〳〵わたしに云なんすにハ　そなたハいつたいひよわひ生れおり〳〵たやさず灸をと氣をつけてちかひころハ大ぶ癪（ママ）もちになりやつた黒丸子と田まちのはんごん丹ハそなたにハあいぐすりじやほどにかなら

ずたやしやんなとやつぱりちいさいときのやうに思つてあんじるかゝさんの心のほどがおもハれんすかならずく\死ンだあとでにくひやつじやとしかつておくんなんすなへ（ト聲をふるハししのびなきしぼるなミだのとばのうミ）しよせん云ひンしてもかへりせんことおさらばでざんす南無　ト（かミそりおつ取すでにあぶなきうしろより）［由良］コリヤ　まてはやまるまひぞ　間夫があるならそハせてやろひまがほしくバひまやらふおれも由良之介だうけ出して三日なりとかこつたうへ一ツたんかほさへ立バすむ　［かる川］ソリヤほんざんすかへ　［由良］うそでなひせうこコレ此證文夕べ身うけハすんだれどていしゆと云ひ合せそなたのしんてい見とゞけるためあすの朝ハむかひのかごおれが女房　［かる川］それもたつた三日　［由良］がつてんさ　ト（いふうち平右衛門らうかゟ）［平］モシ中の町からかごハどういたしませうと長八がまいりました　［由良］モウ夜あけにほどもあるめへかソ（本ノマヽ）小九太ハロがやかましひからおれハ居つゞけのぶんで九太をつれて先へかへりやれそしてすぐにかのむかひのしたくをしやれナ　［平］アノおやぢがまつかになつてゐひきつてたをれて居ます　［由良］引ずりおこして長八とふたりでかつひでなりと中の町までつれて行水ぞうすいをくらハせろ　［平］かしこまりました（折ふし天井でねづミが）チュチュチュュ

八回　船路(ふなぢ)の口合(くちあひ)

（扨もわか町となせやのかゝへ小なミハ力彌にあいぼれのこがれ〱てけふくわんおんまいりながらゆら之介が向ふじまの別莊へたづねぜひ力彌にあひて身をかたづけんとお針のおなせ太夫の銀六魚介をつれかしの大高やよりやれぶれへ稻本の仕出しニてしやれながら行ほどなく古市場までくる）［小浪］向ふの内がわか町へ出たおまちさんのゐた大ち屋か銀六さん［銀］アイあの子も今じやアよつぎといふ所に居なせへす［魚介］つくいから出た三田のおはくさんと同じじぶん出たのおまちさんハ夏本(なつもと)のむすこと一所か［銀］なにさわからにやアならねへわけでかた付たさうさかわいそうに［船頭］もしへアノ三川やを新川(しんかハ)のしうハ小だるといひやすネヘ［小なミ］なぜだのう［銀六］三川ものゝ酒ハ小だるだからそれ出た（て脱カ）ふてうだらふ（向ふよりいし町のいすやの船頭小介客をのせてちよきでくる）［小助］魚介さんチヤ小なミさんどけへいきなさる［銀六］くわんのんさんへめへらア（のぞひて）安さんようト（じぎをする）［安］おたのしミだの（もめん店あたりのわかひものと見へるへほどなく船大川へ出る）［小なミ］ヲヤおなせどん見なおふじさんが見へるヨ［おはり おなせ］ほんにねへ［銀六］けふハいゝなぎだ沖(おき)へつりにいきてへ［魚介］ふじよりそだち［銀六］すそのうハさも七十五日サア〱是から船の中でふじから京までの地口(ぢぐち)をいゝッこだ［小なミ］

魚介さん酒をはじめねへナッ（ト是より酒なのミながら）[魚介]なんでもつかえたものが一ッ宛のミつこまづへかんばらにうだうほとゝぎす [銀]へゆ井ハ身をたすける [魚]へおきつのあめに四ッ日でり [銀]へ江じりめいしよハさまぐ＼に [魚]へふちうかるかやおミなへし [銀]まりこ／＼ [魚]ソリヤ一ツぱい [小なミ]へまりこのとらにでもしねへ [魚]小なミさんきつひもんだ どうしてもへおかべ八月だ [おなせ]ハヽヽヽヽヽ [銀]へ藤枝のためかや今ハ冬がれて [魚]へしまだのきつね [銀]へかなやあんぜん [小なミ]わりイよ [魚]へにつさか取ッちやァうんとこな ト（にらむ）[おなせ小なミ]ホヽヽヽヽヽヽヽ [銀]へかけ川ほん藏 （マヽ）[魚]へふくろ井わかひしゆたいミます [銀]へ見付はづしてとんで出る [魚]へはま松のべんてん [魚]まい坂ばん内 [銀]へあらゐたくミのゑんやどの [魚]へしらすかいがの守 [小なミ]ソリヤアなんだへ [魚]につたの四天王さ [銀]へふた川の八まんさま [魚]へよし田の雨にかゝあらふ [銀]へごゆのたきのぼり [おなせ]こじつけだねへ [小なミ]ホヽヽ ヽヽ [魚]あか坂やこのうらふねに帆をあげて [銀]へふじ川に水たへず [魚]へおかざきにむかへ（バカ）ハたがふ人心トまづ一ッぱいやりやせふ [銀]へちりふ自慢でゐたものを [おなせ]へなるみいのじハきのくにやかネ [小なミ]おはりさんハとつしがひゐきだそうだホヽミ ヽミ [魚]すミにやァおかれねへへミやハいぶきのさしもぐさ [銀]へくわな客にもひよくござ [小なミ]よく出るねへ [魚]へ四日市のちよん／＼まくハ 櫻田がかぶ

さ〔銀〕へ石やくし牡丹ハ似た花だ〔魚〕こいつハこじつけだいゝのをきくかへせうのいなかの片ほとりハどうだ〔銀〕こいつハきつひへかめ山うちにか〔魚〕せきのふる夜も雨のよも〔銀〕坂の下をながくして通ふのか〔魚〕へ土山ものを思ハする〔銀〕へゝな口ころ〱〔魚〕いしべたハらをふんまへて〔銀〕へくさつべんけい〔魚〕へ大津のはちまきしまりが無ひ〔小なミ〕わたいがしめへをいわふじやアねへか〔銀〕コリヤアおもしろひ〔小なミ〕へ京ハなたねのはなしらず〔魚〕どうでも御せうばいむきだ〔小なミ〕すかねへよ〔銀〕ときにモウ舟もめへりやしたわたくしどもハあげやまちへちよつとまいりましてかへりに由良さんの所までおより申ませう ト(かれこれはなして舟ハミめぐりの鳥居の前へつく小なミとお針のおなせハゆらの助が別荘の門口までおくり銀六魚介ハよしハらさしていそぎ行)

九回　向島由良之介が別荘の世界

夫雪ハかもを似てくつてたんのうし人ハくわく中へいて買てこんたんすと (かごの中からしたもまハらぬ大なまゑいでよろぼひ出るたいこのたこ七若ひもの長八わかさやのりやうりばん本蔵ハ夕べより付て行一所にかへりミな〱かいほうして内へ入る)〔女房おいし〕ゝんながこの雪にごくらうだんなおかへりなさりましりんやゝんなに茶をあげや〔下女りん〕ハイ〱〔七〕すぐにむさしやへまいりますけふハ八王子の八

さんに尾張やのおまきさんがついてお出なさるはづだのう長八どん〔長〕さやうさ利八さんも藤十さんもさきへいつてゐるはづだ〔七〕おふくさんもくるか〔長〕そうだらうハイさやうなら〔七〕だんなばんほど〔由良〕ムヽごくろう〳〵一ッばい(マヽ)のんでいけバいゝに ト(ミな〳〵かへる) ナント本藏アノかもをこしらへてのまふじやアねへか〔本藏〕ハイそれハよふござりやせう ト(だい所へ廻りざるをもつてふろしきをかぶりなを取に行)〔いし〕ちとおやすみなさりまし〔由良〕さかなの出來(き)るうち一トねいりやらふ ト(おくへおいしもろともはいるヘ表の方よりおはりのおなせ小なみつれ立)〔おなせ〕モシ由良さんのおやどハ是でござりますか〔りん〕ハイどなたへ ト(出る)〔おなせ〕力彌さんが御うちならちよつと御目にかゝりたふござります〔りん〕マアおはいりなせへ (トざしきへ通しおいしにしらせる)〔お石〕(さしのぞき深川と見しゆへるすをつかひかへさんと) やれ〳〵よく此雪にどこからふられなさつたさむからふ ト(火ばちへ炭をつぎて出す)〔おなせ〕土手からふられました今日ハ力彌さまハお宿でござりますか〔おいし〕アイサまだきのふ出てかへりませんヨ折あしく内でもたべよつて寢(ね)てゐられるマアゆつくりしたくでもして駕(かご)ででもかへんなさるがよからふ力彌がかへりのほどもしれぬから又こちからむかひでもあけやうけふハかへんなさるがよからふ ト(云ひすてゝおくへ行二人ハさし向に成)〔おなせ〕おめへどうしなさる〔小なみ〕わたいハぜひ力さんに逢(あハ)ねバかへりやせんト(はなしこそ〳〵してゐるヘ表のかたにハりやうりに

ん本藏雪なしのぎのふろしきをきてざるをかぶりなを手にさげて内のやうすとなせやの小なミがきてゐるゆへやうすあらんと茶ばんのこも僧といふ見へで立ぎゝする）［おいし］（又出て來て）サア〳〵さむひから一ッあがれと朱のさんぼうのさかづき臺片手にてうしもち出折あしくさかなが何ンにもなひりんになんぞ見にやりたいものじやト（いふ表より本藏ずつと）［本］本藏が御さかな進上いたしませふ（トなを手にさげてはいる）［小なミ］チヤびつくりした本藏どん［おなせ］おめへのなりハなんだト（酒はじまる力彌ハしらぬゆへうらからかへりきたり由良之介もおきて來て大一坐となり本藏大なまゑひにておどり出しさんばうのさかづき臺をふミこハす）チイタ〳〵［ミな〳〵］ホヽヽヽヽミヽ［本］（おとしたはなかミの間より吉原さいけん出る）これ力さんあげやせふ［由良］（見て）ハヽヽ我らがためにハ六とう三りやくだ時にこよひ一夜ハしうとがなさけとへはづかしがるふたりをむりに四疊半へおしやりから紙〆きり［由良］こゝをしきつてかふ〆てハどうだ本藏［本］なにチいわつしやるチヨン〳〵〳〵〳〵

十回　妓女持揚屋町

天川や義兵衛宿の世界

［義兵へ］（此義兵衛ハ大星や遠州やなどへ出入せし魚やなりしがこがれをこしらへげいしやなかゝえ今にてハあ

げやまちのうらにいきなすまゐをしてくらしいろ折ふし表の湯へはいりゆかたのまゝにてかへりうらのいなりさまをおがんでゐる一ッたいしん／＼しやなりわけて辨天しんかうなり）　女房その（そのむかしハ茶やのむすめにてげいしやなりしが義兵衛といふ事にて女房となりよし松といふ子持也）　その　伊吾やだんながけへらしつた茶ハ出來(でき)たかちつとよし松を遊してきや　ト（二かいの上り口へゆき）おやごやお十もおきなせへモウにハかの二ばんだいこがまハるよはやくミごしらへでもしたがいゝおらがうちハいつでもいつちおそひ　義兵衛　伊吾よし松にけがをさせねへよふに遊バせろヨ　伊　アイ／＼　義　おそのきものをよこしやト（ゑんがハへこしをかける）　その　アイ　ト（しよてのにハかにかゝへのげいしやにきせた小のかハ（がカ）じまの八丈をかいまき仕立の廣袖に直したやつを出ス）　義　その細帯(ほそおび)おやごもお十もはやく身ごしらへをしやよおわしやおきたハまだけへらねへかどぶだなのおそしさまへでもまハつたかしらねへそれきのふ御やしきから來た祝義(しうぎ)を神棚(かみだな)へ上ておけけふハ晦日はきもしたしムゝあいをい屋へ晦日そばをそういつて遣つておきや　その　伊吾がかへつたらやりませうよ　お十　旦那さんお茶をおあがんなせへまし　義　ムヽおやごきせるたばこ入を　おやご　たばこ入ハこゝにやァござへません　その　あのそこのたばこ箱(はこ)を出してあげや　義　そう／＼たばこ入ハかなぐがおちたから地内(ちない)のゑびすやへなをしに置て來たお十ちと手めへも氣をつけるがいゝぜへおらアめつたにいやアしねへが二十五日の勘定(かんぢやう)にやァたつた十七しら無(ね)（マこ）へ

二度のにハかにやァ手めへのなりばかりでも十二三兩もかゝる　[お十]アイ　ト(きせるをひねくつてゐる)
[義]おさ〻がやうにくらげへにでも出たらげへぶんもわるからふぜほんにおそのまだ向ふうらからこねへかどうもおきたも二てうつゞみのあいてにやァおほつかねへ　[その]どうもあれもあいしろんがござへせんおかるさんがたしかあいしが引こんだじやァねへかお十　[お十]あの子のあいしハわるひとつておとゝひあの子のほうからことハつたそふでござへます　[義]そりやァてうど能のちにおやごでもお十でも湯へいく時ちよつとはなして見ろ　ト(いふおもてより太田了竹といふいしや)　[了竹]うちかの　[義]了竹さん御出あがんなせへ　[了](ずつとはいりうへえ上りたばこすパ〱のミながら)　これへだのはなしの子をおめへかゝえる氣かもしかゝへる氣ならいそぐからきうにそうだんしてぢきに金ハかしてくれるだらふの　[義]どうもかうひまじやァかゝえるはりやへもねへよいゝ子ならそれでもずいぶんかゝへやせふ三味せんハちつともひくかの年ハいくつくらゐだ　[了]十四だずいぶんちつたァ三味せんもひく第一きりやうがごうせいだァ女郎にすればいゝとすゝめたがおやぢがかつてんしねへけいしやなら出さふといふからそれでおめへに咄した女郎にうれバ十四でも大がらだから年一ッぱい一ト包ハうぬ貫へといつてもかふぞ　[義]それでいくらくれへといふ　[了]七年で十五兩　[義]いゝねだの二三ねんハけいこだのなんだのとなんにもならねへ十兩が高だ　[了]マァなにしろつれてきて見せう　ト(いとまごひして行)

【義】アイそんなら ト(見おくりて) あのぼうずもまうけたがるから高くてならねへ 【その】それだからこねへだからよしなせへといふ事さ 【義】おれがむねに有ハへ 【その】おめへハ外(そと)へばかり出なさるからわたしがてへ〳〵せわなこつちやアごぜへせんひとりヅヽもふへるほどめいわくさ 【義】べらぼうめなんで飯(めし)をくつてゐるそれがしやうばへだアどつからぞふちのくれ人(て)でもあるやうになんぞといふとせわだのやつけへだのと 【その】おめへも久しひもんだちつと内にゐて世話をして見なせへ(そつちこつちたわいもなひ事がいさかいになりおそのハ向ふの蘭壽が所へ行) 【おわし】【おきた】ハイだんなさんたゞ今 【義】でへぶおそひ 【きた】どぶ店(だな)のおそしさまへおいよさんとまいりましたからおはまさんとおくまさんにあつてせう天さまへかへりにまいりました 【わし】お十さん松やへかほを出したか 【十】今にいきやす ト(はや身ごしらへにかゝりお十おわしおやごおきたきやうだいならべてゐるうら口よりねづミをくわへてくろチヤ〳〵と一度に四人立ツてよく〳〵とつた〳〵〳〵とはやし立るじやらすとて長もちのわきへねづミにげこむ義兵衞ながもちの上へあがりおさへてゐるおやごよし松をだひて來る) 【やご】お十さんそつちだヨ 【わし】さいはいでたゝきなナ 【きた】伊吾どんそこを〆なよ ト(さハぐ屏風のわきより思ひもつけぬゆら之介ぬつと出るミなし〳〵きもをつぶす) 【義】(はだを入長持より下りて)いつの間にお出なせへました 【けいしや】チヤぴつくりいたしました 【由良】今來たあんまりさハぐから屏風のわきへはいつてミんなに目をさまさせてや

らふと思つて　ト（はなすうちほどなくょひにあつらへたそばもつてくる）〔かつぎ〕こつちかねへ〔義〕チイそこへおいて下せへもしてうど晦日そばがめへりました是で一ッあがりませぬか〔由良〕コイツハ妙だ時にさつそくながら今むかふの蘭壽が所へ來がけによつてきたらなにかゝさんにかんしやくだつたそうだきゝすてにもなるめへすますがいゝ　いま平右衛門がつれてくるはづだ〔義〕ナニサわけもなひ事ト（いふうちおそのもつれてくろ酒事になり大さかもりと成）〔由良〕時に又中の町へよらねバならぬそしていよ〳〵このごろに急にゝんなが云ひ合て高野やの直めをふぐつてやるつもりだからその時手はづまちがひなくたのゝのすじだ〔義〕それハぢよせへごぜへません〔由良〕そんならかならず〔義〕のちほど〔由良〕中の町で〔義〕おはなし申ませう　チヨン〳〵〳〵

十一回　高野屋の夜すゝはきの世界

ほどなく師走の中の頃由良之介があそび中ヶ間ぬらくらもの四十余人　かねて年わすれの大一坐めん〳〵對のくろ仕立人目しのびのふろしき頭巾高野屋さしておしかけ行〔由良〕（此中のおんべいふりにて）コレゝんなあんまり中の字をいふめへヨ。ト。（すでに直がきん所へきたりやうすを見れバこんやすゝはきと見へてうちんをいくはりもともし立大にぎやかなるところへとろ〳〵とおしかけろ）　家内のものども大音あ

けはうきおつとりそれ〳〵おきやくだすゝをおとすな〳〵とふゝだい小だてに火ばちかたよせ四十余人のめん〳〵ハおくをさしてぞはいりける 高野屋直右衛門 ナンダ由良が一坐が大ぜいで來たおれをゑぐるちうもんだらふ逢ふとめんだうだるすといへ〳〵一ッ盃ヅヽ酒を出してもおぼへがあるト(ほどなくミなく〳〵おくへくろゆへ直右工門かくろゝ) ばんどう大八 ミなさまよふ御出なされました今ばんおやかたハるすでござります 子どもお茶をあけろ 大勢 (くち〳〵に)なにすゝはきにるすといふてんがあるもんだかくれたらふサア〳〵そうがゝりでさがすがいゝ 由良 平右衛門おぬしハ見世へ出ておもてのほうへ逃ぬやふにきをつけやれ ト(ゆらがさしづにめん〳〵われおとらじと二かいのすミ〳〵せつゐんはきだめとにすゝはきの事なればたゝみの下までさがせどミへず) 由良 どうだ居ないか 大ぜい どうさがしても見へない 由良 くやしひこつた ト(ミなく〳〵こぶしをにぎる) 十太 (かけてきて) ものおきのすミべやだミなこひ〳〵 (ソリヤと大ぜいかけて行 つれてくろ) 由良 きたなし〳〵高野や先生 サアすゝはきの御しう儀に自ばらを切おごるかどうにあけやうか 直 御めん〳〵 (トいふ内にミなおつとりまき) 十太 (うしろへ廻りそうがゝりにてどうに上る) 由良 目出た〳〵のわかまつさまヨ引 大勢 えだもさかへてはもしげるお目出たやヨイサ〳〵と。(つきはなしにするろ) 直 ヲヽせつなへ〳〵 由良 まだ夫じやアすまねへこんやハ夜もふけたからミんながすゝはきの手つだひをして夜が明たらすぐにいやといつ

ても品川へとし忘(わす)れにつれていかねへけりやァならねへミんながそうじやァ有めへか［大ぜい］ようござりませう明日ハ早(はや)ふござりますぞ引（おもてのかたゝミをたゝくおと）バタ〳〵バタンバタ〳〵バタン〳〵〳〵

白跋

猫は色客の通言鼠鳴は傾城の常しんすかんすの合言葉も一物猫の客ならバひけたいまつに見だしやせんこゝに新にたつる通神藏ハ舊鼠かへつてねこを喰のいたづら鼠も身上に穴をあくるの災をのぞく手管をのべ戲場の忠臣藏にもとづきすこぶる勸善懲悪のはしくれともなれかしと綴見る人かならずあやしゝ男之助か鼠ならずんばぬらりくらりのこまた猫ならんと笑ひ給ふなといやみ銀山鼠とらず本家あつ丸がしりへにしるす

迴覽奇談　深淵情

完

楓南仁賀志著

黑主撰次
降也入註
不入評

廻覽奇談

深淵情

全

享和三亥望春

通參堂

廻覧奇談深淵情

夫奇怪は。聖人之言ざる所也。神の成ところ。是神。力の成ところ。是力。若異物。おのれにをなるものを見て。これを異物といふがごとし。奇怪〻〻。是を奇怪。と言バ。萬物皆奇怪のごとし。萬物皆奇怪にあらずんバ。何一として奇怪とするにしのびざらむや。故奇にあらずして。奇。奇にして。奇にあらざるを。童子の。一笑と南寸而已

楓某し

已（ママ）亥

望春日

廻覧奇談之心底

月令云。鷹化して。鳩となると。ながゐも。化して。鰻鱺となるハ。童子の能所口なり。妬人能蛇に化す。妬人能蛇に化すといへ共。所以使金能化。使慾能金化也乎。金于此焉。慾于此焉。慾于此焉。金于此焉。是金能化能變ず。何則。美女と。悪女と唯乙皮之隔。經絡相となるといへども。凡釣するの法も。功之上の術。術の上の妙なれバ。積年をかざると雖も。小智ハ大智におよばず。其釣がごとくにして。釣るゝ有。其釣るゝを。笑而つらるゝハ。夫釣るゝの。甚しき也乎。多罪〻〻。

深淵情之胸中

流れミつる時ハ。橋くひミじかく南利。ミたざる時ハ。長くなる。其長たんの鼻毛を集て。網める事。精密と言共。其手だて。なくんバ。不能得其魚。然共。君子ハ。釣して。網せずとかや。況是慾すれ共。寐身をとらざるにおひておや。今世往〻。釣するもの多し。ミだりにこれを。釣す事なし。然共。紅紛。玉釵。羅綺。この。三ッの。百枝叢のたね。なくんバ。美人も不變。君子も好休せず。是金變ず。人心是金。是能變ず。嗚呼。變化〻〻。人間一生。變化之夢。化者乎。人か。人乎。化者か。ナソレあてゝ見なんしと云爾。

凡例

春夜談于蘭皐堂　其二

清矣旅中逢異人　其三至大尾

問荅于鶴跡樓

蘭皐堂ハ清矣ガ住清矣談于一瓢静風

清矣ハ平安島にすめる人

鶴跡樓ハ羅廓島乃樓名

羅廓島之記

唐土に。巫山あり。雲髻雪肌の。すめる處ときく。吾朝ゟ。北の方。十萬里を行て。二里を隔て世界あり。其名を。羅廓島といふ。蓋天女のすめる處。右に三里の海をながめ。左に八町の堤を列す。亭〻たる金門其しよう面に。ぬきんで。艶〻たる少年此にはひくわいす。春の花の顔ハ。ゆふぐれの鐘に。かたむき。秋の月のおもかげハ。閨中の明鏡にゑひずとかや。蛾眉こゝにおひて。時〻せり〻の(節の作字カ)。新粧をこらして。二個の童子をともなひ。其廓中に。逍遙す。暮に。樓に歸て琴書をたのしみ。あしたに文をつゞつて。平安島の公子をまねくと云〻。

平安島之記

羅郭より。西の方二里に當て。一ッの島有。家〻毎に。富んで屋をうるほし。德身をうるほすの人。すめる處名けて平安島といふ。百藝皆たりて。童子すら。はぶたひごしの水に。手洗口そゝぎ。伽羅の油にくしけづりかんつゝみす。日にハ離婁が明を求め。耳ニハ師廣が聽をつんで長じて爲通人矣。夫藍ハ。藍より出て。青く。良鳥は木をゑらんですむ。通人の世にあらずんバ。麒驎(マヽ)の璧も見事あたわず。燈臺のかたわらに。あらずんバ。凰凰(マヽ)のそめじも出る事あたわず。孔子の道のきりうりあれバ。しやかの道に立うり有。傾城に信實ある有バ。じ者に。大滿(假名マヽ)八有と云〻

○黑主云撰次する處の書濁をいつて遂に其淸に至る故に道入やすうして事つゝしむにくひなし

○降也云此書說何の年中にありしをしらず然共古說と爲故さくくわんだつこ多し

○不入云降也之所謂此書多ハ疑說あり故長をきりみじかきを補て降也此ニ註す予も又こゝに評す

廻覧奇談深淵情

春夜談于蘭皐堂詩

夜も更け渡る鐘の聲燈火も湯釜のけむりにねむるがごとく
詩哥も其中にぞありける

靜でへぶあたりがしんとしてきたねへ　淸此閑情ナ所が妙サ、時に一服いたゞたひね　淸本に靜風さんそつから水をどうぞ　靜さすのかへ(といゝながら釜のふたをとりしゝやくにて)なるほどさつぱりだ、茶といへバ此間おつな所へ茶にいきやしたが妙なはなしきく物サ　淸ハテ、北の方へ十万里を先ヅ行のさそれから二里ほど行と一ッの島があつてそこにでへぶ天人がおりているといふ事だがマアおつな說だねへ　淸とんだこつた、所が又百けび百知ださふサ　淸どふも十萬二里さきの事だから變だしかし西方へその位も行バごく樂の世界があるとほうさまがいふからどうもしれねへ　靜イへ〳〵ソレハ本の事さわたしがわかひ時あつちの方を廻國しやしたが口でいふような物じや御ざりやせん(淸ひざをすり〳〵日をいからし)はてね〳〵マア〳〵どういふ物だね　靜お前方詩哥書畫茶の湯だの琴だのといふ様な物をこのみなさるからあつちへいつちやア上なしさソレニおわかひから(淸矣一瓢のりがきて)ち

つとはなしておきかせなせへナ　静どふも是ばかりハ今申ス通りいつて見たと口でいふとハ大ちがひサ　清なんと静風さんいつて見てへねへ　静ある方サ、清矣さんがいきなさるならわたしもいきてへ清どうもいつた所がかつてをしらねへじやアおつなもんだ　静ナニそれハ若お出ならバわたしがしつている通事の方へ手紙をあげやす　清ナルホドあつちにハ通詞が御坐りやしようねへエ　静左様サ、天人のこと葉ハどういふ物だねへ　静何もかわつた事ハないけれ共ねどうしても詞の後先が少ミヅヽおつサマアなんでも清矣さんのおはつめひでハ天人もまよひがおこりやしようヨ　清いつも静風さんハせじがいゝどうか天人よりハおまへにまよひさふだ（三人ハヽヽヽ）そして其ゆく道ハ　静色ゝなばけものが出ルからおつかのふ御ざりやす　清ソレハ　静さしてなにもいたづらハしやせんがこれも又一ツばなしサぜんてへあつちの天人からしてマア只人の目で見てハやつぱり化者のよふナ物サ　二人そりや又なぜへ　静其天人に見こまれたりといつちやア親にあふのもわすれるし故郷へハ猶かへるがいやになるしま事ニ夢さ　清これにハなんぞ法がありさふな物だねへ　静大にサ、ソシテその天人に見こまれてしまひにハころしでもしますかねへ　静されば初メつからころす事も聞ミある事サ二人それハ又　静ソシテくひつひてころす事もあるしつねりころす事も有しマア若うちニしめころされるほうが多からふ　二人いやなはなしだねへ　静こゝだてねこゝをころされねへがこつちの胸中さ

どうもくひつひたりつねつたりしめたりしてころされるのハいまだこつちの胸中がひくひからサおなじ事でもなひてかゝるやつハおそろしふ御坐りやす　二人こひッハおつかなかならふねへ　靜イヤおつかねへのなんのといふよふナ事カヘ其だんになると□□（ソレハサ）髪をちらしてね。枕本でモシへ〳〵といつてしく〳〵なきやす　清ソレジヤアわたしのよふなおくびよう者じやアおへねへ、マアそひからヱ　靜そこで其きみのわるひのをいつこうへへきな面つきでよぎはかむつて寐たふりでいるけれ共しようハおつかなくつて寐られやせん（兩人ナル）　靜所でまづさふしているとやつぱりモシ〳〵といつて冰のようなほうつぺたをこつちの面へおつゝけやす　二人フゥ　清靜風さんのはなしでもぞつとする樣だのふソコデ　靜やつぱり寐たふりでいるとやがてそろ〳〵とよぎの中へはへらふとする所でこつちが彼ノ積を起してなんとかかとかいふのサなんでもよわミを見せてハおひやせんそれだけれ共こつちハいきをころしている物だからやつぱりマアころされた樣な物サ（二人ナル）　靜そこでむこうが手もちぶさたになると指だの髪なんぞきつてそれで又こつちをころしにかゝりやす、其時ハさぞおそろしふ御わりやしようねへ　靜イヤモフおつかねへの位サなんの事ハねへゐにかひたゆうれいサ　清それで詩哥をこのむとハおもしろひねへ　靜それだからミんながいきたがるのサ、そして又むこうをころす傳ハねへかへ　靜イヽ所へお氣が付やしたそれがかんじんサなれ共わるくするとこつちがころされてくる

方が昔しから多いのサ　淸それでも靜風さんの樣にサフなにかをくわしくしつていなすつゝちやア隨分ころされさふナ物だねへ　靜ナニこれも一トさかりサなぜなれバ若イうちハこつちもおもしろく先もおもしろがるのサそれから三十をこしてから段々いろ〳〵の計を胸中にめぐらしてそこで向とくみ打になりやすいふよふな事ハ御ざりやせんマアあひ死に位なら上の中サどふもこればつかりハ天人の心しだひなものサなんの事ハねへようきうを引く樣ナ物でよくあたればよしあてる心位氣であたらねへと先でどん〳〵といふよふナ物サもつと(マヽ)はずれるとからつきりだんまりサ　淸なにしろ男のゝようがに一度いつて見てへどうぞ其通じの處へ御紙翰をねがひてへねへ　靜ソレハモフ心やすひ事サわたしなんぞハ今だに其天人のいつた事が耳につひている樣サ　ハヽヽソシテ内へけへつても其たふざハ天人の香がぬけやせん、其香のつひた處へハ毛がはへハしやせんか　淸よふつまらねへ事チいふぜへ　靜まだおつサ今にあつささむさにたゝかれたうちゝがおこりやす　二人これハ靜風さんのおはなしでも　曉の鐘ゴン〳〵〳〵　鴉〳〵〳〵（ココ、原本少アキ）チヤ夜があけるさふだ　靜なんと時ニたぎつた湯でひやふらふをナ　淸サヽヽ、なんぞちつとさがしてこよう

評曰楓菓子おもしらからぬ長辨を
はじて此に小便おつと無用でハなひ

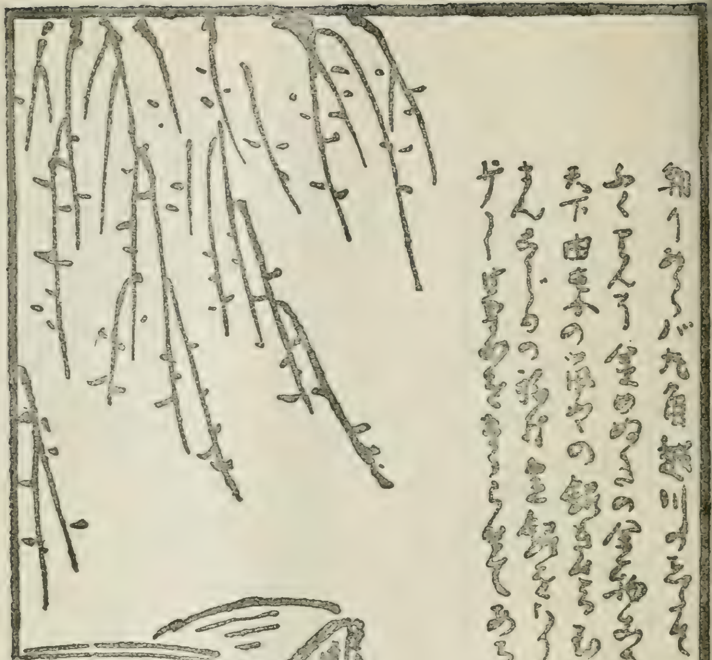
清矣ハ靜風より一書を得又一輸を得て彼羅廓島のつうじ風味閣へぞおもむく事をせきす

其二

説已(すで)に清矣ハ北のかたへとさしかゝる共ありさまハ大(だい)一ヵ瓜ざね面の櫻いろ黒ごろのあわせばおりにあひミじんの島ちりめんの上衣同じく鼠島の下衣しよう／＼汗ハ出れ共こゝが風流にてねまき共おぼしき巾がたのよご水を白じにだしたちくさちりめんじゆばんおなんどちりめんとくびこんハきがつかず金なしもうるのおびにわが朝にあらバ丸角越川のしたてとおぼしき黒ごろふくりんに金めぬきの金物こきんらんの袖呑(マヽ)草入に天下由來の鼠やの銀ぎせるむすこびやのきんちやくにさんごじゆのね付金銀をちりばめたるわきざしに少／＼せなかをそらせてあるく

清よふ／＼先ヅこゝまでハきたがなるほどおそろしひばけものもあれバあるものだどうりでかわゆひ子にハ旅をさせろといつたがちげへねへこれでうんじよう(雲蒸ノ意カ)しねへといふ事ハねへこり／＼したこれからなんでもせへだして羅廓島へいきましようナンダこゝにあるのハ一本塚でもなくおれが國でいわゞてんすひおけを見る様ナ物だがハテナフウこれより東ぢごく道これより北ハ羅廓島道イから(マヽ)ぢごくでころされるよりハまづ羅廓島へ流(ながさ)れる方ガイヽ　どりやいきましようアヽア

いやましの風にもなびく桃(マヽ。柳ノ誤)ばし



きけん取かじおもかじも波ゝならぬ
ふかき瀨にうきおもいなる舟カへ〳〵
又二三げん先でも舟カへ〳〵　ヤツパリ舟カへ〳〵〳〵
○降也云羅廓の道ハ楊(柳ノ誤)桃橋より海上一里有餘
陸地ハ二里也長旅の人多くハこれより海上を行くなり

淸羅廓までやつてくんねへ　房　ハイこちらへおあがりなさりやし　淸　アイ　房吉や〳〵　エヘモフ吉や〳〵　アノやらふめへモフどこひかけつかりヤアがつたさふだ(といふ所へ外の船人通ル)　房チイ八どん〳〵おらが吉をしらねへか　八今橋にいやしたつケ　房フウあつちへ行ならはやくこひといつてくんねへ　ハイ(房又おもてへかけ出して)チイお客だといつてくんなよ　へ、、、、只今參りますおたばこを　淸　アイおかまひなさんナ　(吉歸り來ル)　房なんのこつたナ此人のねヱのにさきをことわつていけバいゝ　吉今煙(マヽ)草をかひにいつたので御坐りやサアナ　ツウ引お前のよふ　房なんだ其つらア(吉口ノ中ニて)おれがつらよりやうぬがつらア見やアがれ水くわのたうらうかつぶしの銀といふつらアしてあれでもわけへ時ハさふおふにばけやアがつたらふ　房エヽきり〳〵していきやアがれ　吉今火なハをさがしていやんす目をあひて見なせへ　房これハモフ大におまたせ申ました　淸ナニそんな

らこれを(トきんちやくを出す) 房ハイこれハ有がたふ御坐りますどふぞこれからちつとお出なさりまし 吉サアよふ御ぜへンす 房お出なさりまし(三橋へきたる)左様なら 清又この間に(と舟へ乗こまんとす) 吉 チツトおまちなせへ 房おあぶのふ御坐ります 吉 サアよふ御ぜへンす 清 イヤどつこひナ(舟ハぐるりとまわる)△(舟そこをやひているせんどう)吉やいふべハどうした 吉大笑よいつて来てはなさふ(巳ニおきの方へ出ル)△(向からくる猪牙舟ばたり) 吉なんだへ此ぜへ六めへ手引をつれて出やアがれ 先それだから取かじといふのだわへつんぼうめへ 吉おれがつんぼうならぬ(マヽ)なア目くらだ 先おべへていやアがれ 吉其口へ風を引しやアがるな(段々舟ハ遠ざかる)

〇楓某云此海上あやしき物度々見れ共いまだ清矣が帰国にあらざれバ予これをしるすことあたわざる也云々

吉 モウまへりやした 清はやかつたのふ 吉 マアおしづかになさひまし(清そろ／＼きせるたばこ入などおさめる) 清これハ／＼御たひぎこれで呑料でもかわつし 吉 コレハ 清けへつたらよくいつてくんな 吉 ハイ／＼(清おかへとびあがる) 吉左様なら 清 アイ此間に

其二

此章ハ清矣風味閣へ行ておしへをもとむるをしるす

墨水の流ハ。平安島の東。楊柳橋に朝し。八町の堤ハ。羅郎島の北。金門に通ず。宜哉白髪ハ。夕陽に黒あぶらをミだし。鼠色の顔ハ。鶏卵のしろミにひつぱる。青眼の翠眉（マヽ）桃色のもすそにひそみ。櫻色のおもかけハむらさきの霞にちぎる。總是老翁ハこゝに背をそらせ。狹骨（マヽ）ハこゝに腰をぬかす。既に德にいるの門ハ。夕ぐれの鐘に花ぞさくらむ。

清なんでもこのあたりのはずだが（トあたりを見まわし　こゝかしら）ヨシ〳〵こゝだわへ　モシ風味閣と申スハおまへかへ　房　ハイ　清主人ハへ　房　ハイおります　清わたしやア靜風さんのさしづできやした　房　ソレハよふこそマアこちらへ（といふ拵もろ共上へあがる）房お茶をもつてきなよハイ　房　サアこちらへお出なさりまし今日靜風さんハ　清イヽへそれで手紙をとゞけてくれろとつてよこしやした　房　へエお出なされバよふ御ざりますに　清靜風さんも此比ハ（トいゝかゝる所に天人通ル）イヤこれハモシうつくしひものだねへ　房ハイアノおいらんハいつそにうわでお出なさります（一寸云　清矣おいらんのこと葉げせれ共まづきゝながしおく）清さふ見へやす（主じゆふべのなかおきに七ツ時分から二度れといふかほで）あなた樣よう御出なさりました　房靜風さんのおつれサ　主ソレハ本ニようこそ時に靜風さんハ　房おさしづでさ　主フウ　ヨフコソ　清わたしやアマダなにもかもさつぱりかつてをしらねへからなんぶん御賴申スます（マヽ）　イヘモフ靜風さんとハ久しひおなじみで御ざりますが近

比ハさつぱりお見かぎりで御ざりますヨ　コレお肴どうしたのださつぱり氣がつかねへ　房只今へヽヽよふノヽ只今しがたかた付ケました　清さぞさ　主ソレニまだかつてをしらねへおりようりばんといふものだから　清ナニモフ　女房(肴のさびくに立ながら)　サもつとまへの方へお出なすつておいらんのお見たてをなさりまし　清へヽヽ　主是からどうぞちよつノヽと御出なさりまし雫(マヽ)かくお心やすひか大一(マヽ)で御ざいます　清それでなければわたしの方でも參りにくい(女三ツもの持きたる)　主やれノヽノヽおれせへまち兼たからお客ハさぞ　女イヘモフ大きにおそなわりました　房來ル　サフお一ツ(マヽ)清先ヽ　主左様ならおどくみを(ちつとのむ)　へイ　清エヽヽ御坐ります　房お前さんはじめつから清はじめたからふんりよいたしますし　房へヽヽノフよく一里さんに似てお出なさるノフ　女左様サわたくしハさつき一里さんがお出なすつたかとぞんじました　そしてお聲までがさ　清一里さんとやらよりハ男がよつほどいゝはずだ　女　チヤそれハ本とで御ざります　清跡ハそんなうそかへ　女あんな事をおつしやる　清ソリヤアいゝがなんと此國のこうしやくをきかねへうちハどふもむねがつかへて酒が飲ねへ　女チヤおまへさん　清それだけれ共しらねへじやアおつなものだね　房けつくさふおつしやるゆだんがなりませんノフお花どん　女左様サなにかに物しりがほでそのくせなんにも御存じなくつて大きにおいらんもふしようちでいたにくう(マヽ)御ざりますのさ　清(手をうつて)フヽウそれで

きこへた　房なにがへ　清さだめし其客の名が一里といゝやァしねへかへ　二人ヲヤく＼　主　モシおまへさんのお名ハへ　清清奕といゝます　主へ、左様なら清奕さんへ　清エ　主左右手があつてハむつかしう御坐ります　清でへぶひようばんがいゝねへ　女どうかお前さんハお見かけ申たよふで御坐りますヨ　主これハ清奕さんにおぼしめしがあると見へる　三人ヽヽヽ　清でへぶあたりがにぎやかになつてきた　房まだく＼だんく＼にぎやかになります　清左様なら　房コレハ　清先ヅどふも酒のみでなひから酒宴ハ一向ナ物サ　主それでも此國へお出なされましてハよふ御坐ります　女まだおいらんがきまりませんからそれでネあがらなひので御坐りましよう　主ナルさふかもしれねへむこうにおるのハどふで御ざります　清アレハなにといふ名だへ　主　アレハこうほんらふの哥泉天人と申まして随分此里でも名だかひので御ざります　清どふか左様と見へますあつちらのハへ　主あれハかひらふいおゝい天人と申ます　清どつちどふ共いわれねへ　主これでハちつとあがられましよう　清まとに天人のすみかだ（トいふ所へ天人通ル）天この間バ（マヽ）　房おいらんおよりンなさひまし（跡から）新造長さんへ　主又くどくのか　新すかねへの引ト行　清なんとおつなこと薬だねへ　主アレがサおつで御ざります此島へまへりますとこんなアヽなります仙人ハ山にすんできんじうのはなしをきゝわけると申ますがすみなれますと左様でも御ざりません　清さふいゝなさればアノあるき様ハやつぱり雲の

上を行様だねへ　房わたくしハ此島へまへりましてからこの様なおはなしハ初てうけたまわりました
清ソシテ又だれがあの様なこと葉をいゝはじめたへ　主されバで御坐りますむかしより唐土(もろこし)と申シつ
たへます天人が御坐りますから大かた其こと葉でゝも御ざりましよう（一寸云此中色〻取肴などいづれ
其長きをおそれて不記）清　へエナルしかしそれにしてハでへぶこつちのこと葉がおほひねへ　主そこ
で御ざります又和国(わこく)と申天人が御ざいます　清（手をうつてナル）きこへやした　主コノ両方のこと葉を
とつたのと見へます　清左様／＼／＼そして其むかしハやつぱりみほの松ばらとやらのつゞきでゝも
あつたかねへ　主まづね　清あまり羽衣をわすれたといふこともあるから　主いかさま其原が藷となり
ましてそれで天人と申かもしれません　女左様おつしやればどふも只人(たゞ)のすがたでハ御ざりません
房本にのふ　清それハさふとつかつき(マヽ)にいつてハどふいふものだね　主ソレハ奇妙で御ざります
清いゝかね　房本にどなたがよからふねへ　主さふさのふ　清わたしやア初の旅(たび)のことだからおまへが
たのいゝよふがいゝしかし人のはなしをきくに名ばかり天人でもちか比(ごろ)ハ雲(くも)(マヽ)のいのたのしみをしらね
へのがあるさふだが天人もまけへができる世の中だからおつだ(マヽ)　三人ハ、、、　主菊岡天人ハどうだら
ふノフ　房さふさ正し垣(かき)川天人乎(か)北本天人か　女この比は高位さんがひようばんで御ざいます　主ウ
ゝなにがいゝ／＼それ／＼蛾山さんがこれハ大一(マヽ)が物しりだといふことだ　房本にそんならさふいた

しましようかねへ　清なんだかしらねへが其物しりハおもしろひね　女申てやり引ましようかねへ
主あれバいゝが女仙(せん)どんアノヽ蛾山さんをおしまひだと。早くよさふ申てきな(だひ所で)アイ鶴(かく)どん此
の七りんをちつとあほひで下さへ一寸いつてくる　清蛾山といふハどこの出生だへ　主やはりもこ(ろノ誤)こ
しの蛾眉(がび)山(さん)の邊(へん)より渡(わた)りましたからそれで號(かう)を蛾山(がさん)と申ます　清もろこしへ和國をまぜたと藥せへわ
からねへノ二蛾眉山ときひちやア唐(から)でもどふか田舎もく\/ヅヽトおくの小名を見るよふだから
しれゝばいゝが　主はてさそのための通じがおつき申てまへります　(若者きたる)　主どうした　若よ
ろしう御ざります　清ソレハしあわせ　房そんならモフ一ッおかさねなさりまして　主さふサ　女
お出なさるがいゝ　清なんだか氣がせかれてならねへ今ッからこうでハすへがおもいやられやすなに
もしゆ行(ぎやう)だ一ばんはじをかくとおもつてやつてのけやしよう　主そしておまへさんかたをどふのこう
のといふおいらんならおさしずはいたしませんしかしわるかつたあとがおもしろひもので御ざります
房サアお出なさりましな　清サヽヽ　女こゝにおきせるが　清ハイく\/そんならどうぞおまへでも
主人でも　主サヽヽお出なさりまし　女ちようどよひじぶんで御ざります　主ソレおにき物をどふ
も氣がつかねへ(とかほをしかめる)

春風にあふうれしさの埋木も今を

さかりの花ふゞきくるわの春も
むさし野もおなじこゝろの長閑さに
おもい〳〵のいろどりハ淺艸
ならぬ深草の春又春の春なれや
月の花さく春もあり霞の衣も
はなにたなびく

其四

此章ハ鶴せき樓の問答をしるす

主おいらんおめしかへ　蝶（はづかしさうながらおもいきつて）ぬしがまだおきておいでなんすつサ　清ヲヤ　蝶さふめへす物を　長サア〳〵清矣さん　若チトこちらへ　蝶（ツントしてゆく）長サアこゝで一ぷくおあがりなさりまし今夜ハ妙で御(マヽ)御ざりますぜへ　清どうだか一寸小用にいつてこよう　長こちらへなんだか大まごつきだあすこに見へるのハ面んかねへ　長ドレへ本ニなんで御ざりますねへ（長ゝそばへきて）お客のぢようだんで御ざります　清かひたのだねわたしやアばけ物かとおもつたア丶身ぶるひがする　長またおと(あノ誤)でおあがりなさひまし　清なんだかさむくなりやした　長エ

こゝで御ざります　清　ホイうか〳〵と　長　花に見とれて　清　フヽ時にト　長　ヤアおとこへ　清

そんならごめんをこうむつて　長おはをりハこれひ　若わたくしが　長とれ（とカ）〳〵　若わたくしハおさ

きへかへりましようかねへ　長　なに今一所にゆく　清　マアいゝわな（トこゝにてしばらくはなしなし）

ム（こゝにいろ〳〵てくだあれ共此さきにこんたんはなはだむつかし依之いさゝか筆をぬく）

夜な〳〵はかわすまくらのうき苦界（くがい）

苦界の中のたのしみハ苦界の

苦界となりてじやけんのほどが嬉

しさにくせまでうつる鶏舌香

おもわぬ人のしげ〳〵になひてうれしひ

その葉もあからさまに夕花の

しほみがちなる　蛾　モフねなんしたかへ　長わたしがお客だととつくに積でけへるのだけれ共　蛾む

ごひ事をいゝなんすねへ　長　サヽおむかひハいつじぶんに　四（マヽ）ッ打たら　蛾　ヲヤ〳〵ぬしやなん

でおすへばからしひあすの朝ョ　長いへ〳〵まつております　長（マヽ）さんまでそんな事をいゝなんすはやく

おけへりなんし　長　モシ清奕さんへおいらんがわたくしをアノよふにけんどんになさひますからお

けへりなさひまし　蛾　長さんモフごしようでおすヨサアけへんなんし〳〵（ト長三をひつぱる）△（所
にかむろきたる）すみれヤアイ此長さんを引つり出してくりやアイサア　長おつとまつたお左様なら清
奕さん　清　モフおけへりか　蛾でへぶにうわになりなんしたの　長こゝの内へくると人がわるくな
る　蛾どうしようのふすみれやお茶一ツもつてきてのさふしてむさしのさん　坐しきへいつての長義
さんによくおいでなんした雛鳥さんハどうしなんした木ぬ（マヽ）さんと鼠山さんがせんどおいでなんしてマ
アそこハいわずといゝからの只よくお出なんしたといつてきや　アイ（ト出て行）蛾モシへなぜさふ
しておいでなんす　清これがかつてゞ御ざります　わたくしハねるのがかつてゞおすからおゆるしな
んし　ちつトはなしがありるす　清左様なら御めんなさ
りまし　蛾　チヤばからしひ　清左様サりこうさふならこんなにまたせハしなさるめへ　蛾なんでお
すとへモフ一ぺんいつてごらうじひし　清わすれやした　蛾茶にしようでおすねへ　清はかりにかけ
たらどつちがおもからう　蛾そんなむつかしひとハしりるせん　モシへぬしやアモフ〳〵そこへらじ
うへいきなんしてよんどころなくわたくしの所へおいでなんしたらふね　清おめへおつなことをかんげ
へだしなさつたの　蛾なにもおつな事ハおつせんハな　清そんならわたしのいふとハミんなわりるか
らどふでもおまへのあすびてへよふになぐさみなせへ　蛾能ぬしがさふいわれていなんしようおつか

ねへだまつておりるしよう　清しよせんおはなしあひてにやアたらねへわたしだからだまつておいでなさるもいゝおこゝろいれさ　蛾にくらしひよ引　ばからしくつてにくらしくつちやアなほ〳〵おあひてにハならねへ　蛾そんならくやしひよ　清なにかへ　蛾おまへさんがサ　清なぜへ　蛾なんとでもおつせへすがいゝのさぬしにとても見ぬかれたわたくしがこゝろでおすから　清へエ左樣かね(蛾山清奕がかほをつく〴〵見て物をいわず)　清なぜだまつていなさる(蛾　例のとふり)　清　ソンナラいゝのサ　蛾これでもなんぼわたくしらがよふなものでもちつとハうれしがらせなんしてもぬしのきずにちなりいすめへあんまりでおさア　清無言　本にもふぬしやアしうねんぶけへよ今わたくしがだまつておりいしたらモフあんなだよ　清わたしやアおつなむまれつきさ　蛾(又無言)　清　マアおどけハのけてきゝねへナまた物をいわねへのかそんならいゝがこれさどういふもんだのふおれがわりるからかんにしねへヨ引　モフこれからハなんともいわねへから　蛾さふおつせへした跡デだまつておいでなんすとはらが立イすハきつとかへ　清きつと　蛾きつとかへ　清　サア　蛾そんなら氣がゝりでおすから早くおきかせなんしサア〳〵おはなしなんせんときゝいせん　清きゝなさらザアだまつていよふ　アレサソノきかねへじやアおつせんハなどうしたらよからふのふ　清なにを　蛾おまへさんをさ　清そんなににくがるとハねへ　蛾

清　アタヽ、ヽ〈（障子カタリ）おいらんへ　蜍これでもまだでおすかへ　衣おいらむへきついのぼせ様でおす　蜍　ヲヤかはごろもさんか　衣ちよつとこゝへおいでなんし　衣どふぞ一寸こゝまで　蜍此子ハなんのこつたのふ　清どなただかおはへり御ゑんりよなしだ　蜍おへへりなんしなじれつてへ（かはごろも　よん所なくびようぶを）　衣　アレさふしておいでなんし　清あまりひれつだ蜍なんだへ　衣一寸耳をあのね（とはなしかゝる）（清業おきる）　蜍ぢつとしておいでなんし　清氣（き）をきかせて小用にいこうとおもつた　蜍ふざけなんすナどこへもやりゐせんこゝおせへていゝす大い女がサアおはなしなんし（衣なにかこま〳〵はなす）　清　モフすんだのかへ　蜍だまつておいでなんし　衣なんといゝしようねへ　蜍どふでも様（マヽ）おすといつておくんなんし　衣アイ　モシへお休みなんしエ清アイ〳〵天玉（マヽ）様ハ　蜍　清　蜍なぜへ　清なぜだか　蜍　おそろしい力ダ　蜍なんとでもおつせへしいやがられても　嬉しうおすモシへ近比おねげへがありイす　清くれろといふとか　蜍　きついゐきすぎサこゝへおくいがいやさにいろ〳〵なことをおつせへしいじわるくいつまでもおりゐすマアわたしがいふことをおきゝなんし　清　命（いのち）をくれろといふとか　蜍　マアおきゝなんし　清おまへのいふとだものを　蜍　うそにもうれしうおすアノどふもいゝにくうおす

清なんのこつたへ　蛾もうしひしようかねへ　清いわねへけりやアわからねへ　蛾あのね。おさけすみなんすなへ　清なにを　蛾なんでもさ　清早くきかせねへナ　蛾どふもおかしいねへ　清そんならよしねへ　蛾あれさ〳〵申スハ　清　サフ（マヽ）　蛾あんまりひらつとふおすがね　清　ウヽ　蛾どうしようねへ　清なんのとッたな　蛾しぬ氣になつて申シィしようぬしにほれへしたヨ　清　イヤこれハこ（マヽ）しからぬと　蛾それおみなんしモチこう申しひすからハなんでも見すてゝおくんなんすなへ今まで外をまよわせておあるきなんした其つみほろほしにどうぞ御（マヽ）しようでおすからそれもならねへ事ならせめて手紙の取かわせでもしておくんなんし又あきれて物をおつせんのかへモシヘ女といふものハいでといふ時ハ男よりあつかましくなるものでおすねへ　どふもいんぐわでおすモア（マヽ）さうおもつておくんなんし　清ナルほどそれハ男でもいでといふ時ハあつかましくもなるものさ　しかし今夜ハ初てのとでハあるしたとへおまへにわたしがほれたといつたつておまへがしんからうれしひものでもなしサそれにハなんぞたしかなしようこがなけりやアかなわねへ段ゝつもるおりからにしやしよう　蛾　さふとをわけておつせへす物をたらねへわたくしでもさふならその様にしあんがありるすからかならず跡でそんなとハしらねへとおつせへすなヱ　清しれたとさ　蛾しかしどふもこれまでにしてハ氣にかゝりるすねへ　マアどうすればこられなんす　どふでもなりるしようからおもいのまゝになんし　清

トいつた所が外にしようもねへのさ　蝶ぢれつてエのふそれまでのやくそくごとでありいしようどうご氣をゆるしておくんなんし氣がつまりゐすスハ　清どうすれバ御意にいゐね　蝶さむうおさア　清それがどうしたのだ御（マヽ）しようでおすヨ　おくんなんしヨ引じれつてへ　清わたしの事かへ

蝶どふでおすか　サアおはなしなんし　清モヲでなくなつた　蝶　すきなことをいゝなんしおはなしなんせんとこうでおす　清　アタヽヽこれもやつぱりしようハにくひのだいたみがちがふ　蝶なんとでもおいゝなんしこつちのこゝろせへまつすぐならてんとうさまのおめぐみでまたあふせもありゐしようサアおきかせなんし　清そんなにむつかしひはなしでハねへのさ　蝶むつかしくなけりやアなをはやくおきかせなんし　清そんならいほうかしら　蝶おゐゝなんし　清どふもおつだのふ　蝶おつだからぬしもおいゝなんすのでおつしようから　清外のこじやアねへがノどふもアノさつきおめへに耳ッこすりをしていつたのが氣にかゝる　蝶　ヲヤノヽあれハナニ外のはなしでおすア　清　ソリヤアサさふでもあらふけれどもノすてつぺんからおまへの目にもしうねんぶけへのなんのといゝなさるからさぞ久しくつきやう人の目にやアとりこゐすようにもめへるだらふかとおもへバおつなこゝろもちさ　蝶よくつもつてごらうじひしさつきもアノ位にまで申しひすこゝろいきだものをぬしにせかれるようナ身のうへニなつたらサゾうれしからふと心でおも

つていさァナそれでおすけれどもぎり一ぺんの　淸どなた　若　チトおいらんへ一寸　蛾ようなんのこつたのふ　じきいつてきひすから　淸どふとも御かつてしだひサ（障子がたり○淸　口の内にて）なんだかさつぱりげせたよふでげせねへおつなばんだ　はてなァウ

其次

千云蛾山初て此島へ漂流しけるに國人其ようぼうに心引レ遂に此地にとゞめおく云々
時々平安島の住人大里といふ者此島を遊覧しけるにそれが晝夜のへだてなく蛾山を寵す

蛾わたくしの中イス事もおきゝなんしそれだから苦界といゝすハ　大今まで此様な事ハないよ〳〵てきの方へ行心なりやサア千雀モフかへらうおれも江戸ツ子じや（註云江戸子ハと　けれ共じやでおそれます）蛾　マアおまちなんし　大　イヤモフかへるトいゝ出したからいやナ女にみれんハないハたとへしろぼうきを本とにたてゝいのつてもかへる君子ハ兎鶏にあそばず　蛾　サアそりやアゑぞつ子でもありゐ　大なんだ　蛾江戸ツ子でもいなんしようけれ共今さらぬしに見はなされてハ死ぬより外ハおつせんそれもわたくしにおあきなんしたのならどうもしようがおざりゐせん（トなみだをふくみいろけありげなるこへにてせかせる）サアおけへりなんし〳〵　午（千ノ誤）おいらんなんのこつて御ざりますそれでハさふだんもなにもできませせん　若左様ならマアあちらへまへつて見ましようか　蛾こなた大におせわでおすいつていゝ位ならなにもこんなに　もめるのじやアおつせん　そつちへひつこんでいさつせへ吉

どん　（茶屋の若もの）ハイ　こなた内へいつての大里さんのとでおす大かた外におもしろひとでもできなんしたさふで今夜にかぎつてあひそづかしばかりいゝなんすがおまへもしつておいでなんすだらうからそんならその様にとをわけておよこしなんしあんまりでおすてつテ　若大里さんのとハわたくしが能ぞんじておりますが中ゝ其様ナ事ハ御ざりません　千そこへいつちやアかたひのふ　蛾それでも大里さんハ方ゝでほめるといゝすからどふも氣がもめてなりゐせんホヽヽ本に女房ニでもなつたらどんなでありゐしようぢれつてへ　千サア〳〵モフきひちやアいられねへ　大なに此女子ハこういふ時というといつでもあんな事をいふがふだんハ露ほどもいつた事ハなひ　千マアこうばかりいつてゝもつまらねへからコフしやしょうまづサさきへ一ツもらいにやつて見てそれからさきのあひさつしだひサ　若左様いたせバ大里さんのお胸もおいらんのお心もはれてよふ御ざります（大里も蛾山首（マヽ）をたれている）　千なにしろおいやでもあらうが其つもりにおいらんなすつて下さりまし　蛾なにもこんなにむつかしくなるのじやアおつせんけれどものとさ初ての客人だからこうしたのなじみの客人だからどうしたのといわれへしちやア人にかほむけができひせんわたくしのはじハ大里さんのはじ大里さんのはじハわたくしのはじでおすから　千イヨてへしおもいめへ　蛾本とでおざア　千なにもはやいがいゝハテナだれをやつたらよかろらう（マヽ）のふ　大きこうでもわるしやつぱりいんきよか　千それまでゝも御ざりま

すめへ時ニわたくしのおいらんハいづかたへさつたかしら　蛾かわごろもさんハしたにいなんしたと
おもいゝした（一寸云かわごろもハ新造なり）　若見てまへりましよう　大そんなら　千大さんこゝで御
ざりますぜへ

人のうわさも浮世なれうきのつとめの浮ことを婕姉が閨にあらね共玉だれへだつきざはしの
ねたむも花のさかるころ南無（障子がたり）

衣ちつとごめんなんし　清ごゑんりよなく（びようぶをあける）　清これハ（白老母跡ゟ來ル）大分おれき
〳〵　衣おさむしうおざりひしよう　清なれているせへかさふも御ざりやせん　老お氣の毒で御ざりま
すがちつとお願イがあつてまへりました　清　アイ　老おいらんのことで御ざりますがおなじみのお
客がおいでなさりましたが尤おかへりハいつでも早ふござりますどうぞ新造しゆでもあげましようか
ら御用が御ざりますならおつひ（マヽ）なすつて下さひまし（清アイト首を傾る）　衣おいらんも客人もおつせへ
すにハ此客人の方をぜひ〳〵もらつておくんなんしツヽサ　清それハ随分こゝろやすひことサ　わたし
がどこぞへなじまうが初けへの客ハまづだされかつてな物サしかしもらつてくれろのなんのといふ様
な客ならお里のしれた男だがさきも客ならわたしも客だらふから其人ニあつてやりやしようたとへ女
郎衆が今夜中こねへといつたれバとてやかましやをいふ様ナわたしでもねへそして又此里へくるくれ

ゐじやァなけられるもなけられねへもなにしようちづくでくるもんだから其おひらんとやらの心位氣（マヽ）でこねへのならわたしが此上くるたんびでもかまわねへが客から客の方へもらほうと男ぶつてでゝきちやァひようたんなりのわたしでも人間の實(たね)の一人りむすこだお（へい）ひやらうとハいわねへあつてやらうから先の男をよこしなせへ　へゝとんだこつたこんなもらいよふが羅郞島ハおいてのけ十角島へいつてもねへ方(はう)ダひれつながら先様のはじになるだらうとソフいつてくんなせへ　老　ナルホドおまへさんのおつしやる所ハ一〻ごもつ共で御ざりますがそれでハせつかくわたくしがまへりましタかひが御ざりません　清　ハテサ間(あいだ)へへつてしたくつての苦勞(くろう)ダやつぱりわたしがいふ様にしなせへ　老申スもわたくしがやくで御ざります　清サフいゝなされバわたしもいわねへじやァすまねへ　衣なにしろおいらんにソフいつて〻なんしな　老おいらんにいつてわかる位ならあくせくハしやせん　衣それだッ老エヽだまつておいでなさりやし　いつでもおいらんのことトいふとさしでたものだせん比のあざがまだなほりもしねへ中にあんまり口(くち)つぱたをはたきナさんなおもいつきでもねへ氣がお心じやァ御ざんやせんモシへ左様ならモフよろしう御ざります　清そつちせへよけりやァなにもいふことハねへ　老ハイ〳〵〳〵大におやかましう御ざりやした（つんと立てから口こゞとに）子をもつても外のしようべゐハさせるものじやねへこゝでせへあゝだからさぞ内じやァ奉公人をいじめるだらう（障子すとんと

明てでる）清　サゾつらからうノフ　衣蛾山さんハわたくしの本と引のあねさんでおすからねいつでもア丶でおす　清かわひさふに　衣ふびんだとおもつてこれからあねさんとわたくしを見すてずにかよつておくんなんし　清わたしがきたくつてもどふもあねさんのこゝろがしれねへ　衣チヤいつそこゝへ（トいゝかゝる所へ若ものきたる）清　コレハ　若又おねがひにまへりましたハテサテどうもこまりました物で御ざります　清今もやりてしゆにいふ通り先の客がこねへ内ア天狗が百度さかとんぼけへりをしてあやまつてもやることハならねへよ　若（首をなでながら）あちらもお客あなたもお客で御ざりますからどちらをこうと致し様も御ざりませんがまづお初けへのことで御ざりますから
清それハさこなたのいふのも尤おれがいふのもそんなにむ　若　イヤあなたに御むりハ御ざりません
清こなたにもソフ見へるならなんとかかとか先へいつてくれゝばいゝ　若　コフなすつて下さりまし
清　ドフ　若今ばんハま〇大里席　千　コフとのくづれたモやつぱり世界で御ざりますがなにしろモフ一ツはかりごとをめぐらしてそこ〇清矣席　清　ソフ貴様の方でひがミで〇大席　大　しよせんこゝでどうのこうのといつた所がつまらねへ　千　で御ざりますけれどもむこうでしよ〇清席　衣　サフいゝなんしな　若おまへさん大きなおせわで御ざります　衣なにもそんなかどをたつていわつしやることハねへ　若いわねへでどうするも〇大席　千どうせ今に喜助がきましようから先のあひさつ

をきひてからのことサしかし○清席　若いらざることに口を出しなさらアどうりで今もやりてしゆがはらをたつて○大席　二人　モフきそうなものだ時に蛾山ハどこへいつたあひつにはからせて見ちやア　千それも隨分あるお方さね○清席　清こゝでソフさわがれちやアめへわくだ　若わたくしもあんまりで　衣（なきながら）わたくしにむし　若　エヘン〳〵〳〵風を引ィたそふだ　衣むし　若エヘン〳〵　衣んをいゝ　若　エヘン〳〵〳〵　衣したのをきらひ　若かわごろもさんかお前氣でもちがひやアし　衣　イエ〳〵〳〵〳〵氣もなにもちがひハしひせんがあんまりゑてかつてゝおす（トむしようになく）　清なにしろあつちへいつて其通りをいわつせへ　若（よふ〳〵にのがれる時節こそ幸なりと早〻出て行）○大席　大今じやアおれも人にしられているものだからコフいゝだしちやアなんでもぜひもらわねへけりやァ男がたゝなひ　千ソレハおまへさんにはじをかゝ○清席　蛾ソフおもつておくんなんし　清其日へちやをのみなさんな　蛾これでもまだうたぐつておいでなんすかへ

衣（たんすによりかゝりてなきながら）モシへどうぞおいらんの所へきておくんなんしそのかわりにいゝぶんがあんなんすならわたくしをぶつともどう　蛾なんだナ此子ハ　清そんなにいゝなさんなてへ〳〵お前のことヲおもつていらアなぜじやけんだのふ　蛾だれにか似てさ又しかられねへうち早くおほゝなほしなサア（折からしようじのそとより）おいらん鳥渡　蛾こゝへお出なんし（口の中にて）ヨフな

んのこつたのふ（といゝながらひざたてなほし　　じれつてへヨ引（トゆく）　其つもりでおすよ（トまた障子のそとから面を出す）〇（すでに跡より入來ル）老又まへりました　清サア〳〵いくたびでも　老あちらの客人がお出なさひました　清　ソレハ　老お通し申ましようか　清大に老こちらへお出なさひまし　千コレハ　清　サアこちらへ　千さつそくながら申しますドフカ相たひの上でやらう様う（マヽ）おつしやると申スとで參りました　清左様ならお前が御當人で御ざいますかへ千　イヽエ　アレハ私のだんなで御ざりますが名代に參りました　清どうも御名代でハわかりません千なぜで御ざゝります　清　ナニモ名代でわかる位ならいまゝで手間ハ取やせん　千そんなら私しの様ナ者ハおあひ手にならぬと申スとで御ざるか　清たとへおまへがどの様にわかる人でも御當人が御ざらねへ中ハあけるとハなりやせん　千　エおもしろくもねへ人をなんだとおもいやアがるへ　老マヽヽヽおしづかになさりましどうでもなりまさア　千あんまりなべらぼうだ　清　ナニべらぼうだコレへけしの花やなの花を見て齒（は）ゞがきをつかつて目をさますのとハちがうわへ　やせていても東男（あづま）ダハへにんじんごぼうのはたけと牡丹ばたけほどちがうのだどうりでこゝまできやァがつた　千なに此やらう（ト巳に立かゝらんとする其物音らうかいうわさの聲ニきゝそひ蛾山若者かけ來ル）　蛾　マアなんのことツておすナ　したにおるでなんし　若隨分とのわかるとで御ざります　清しれたことサそれを　千なに〳〵

いゝかとおも　若老マヽヽヽヽおすわりなさりまし　老モシヘノ＼　清わたしかへ　おまへ（マヽ）さんもたひてへになさるが様御（マヽ）ざります　清こつちでてへげへにしたくつてもおめへがたはじめおかしらしくいゝなさるもんだからサ　若時においらんのおぼしめしをおつしやりまし　蛾わたしだつて　老それでも又おまへさんのお心にもあることでおざります　蛾それだつて（と清矣が顔を見る）　若どうもあなたハお初かひのことで御ざりますからなんならおかへりなすつて又お出なるがよふ御ざりましよう　蛾きさんじな人だのふ　千なにもわたしがはらを立たでもねへがこうすればやられるとかなんとかいゝなさりやァわたしだつて中人のことだからはやくわかるがいゝ　清おまへの方でさふわけていゝなさぃやアなんにもこつ（マヽ）もいふことハ御ざりやせん　蛾そんならあつちへいきひすのカへ　清さふサ　蛾ヲヤ　千どうしなすつた　蛾どうもしひせん　千はてな　清　マァ正直（しやうじき）な所がわたしだつて岩木でハなしおもいきられる物でもなしサでござりやすけれどもさふいつていてハつまらねへから夜の明方まで百兩でうつてあげやしよう　千　イエ引　清なにもソフ氣（マヽ）をつぶしなさることハねへでへじのノ＼わたしが女房をとられるのだものを　若老　それハおなさけなひ　清　ハテ此島へ百萬兩でながされてきた天人でもこん夜一ばんざしきのごみからたばこのけむりまできりかひにしたわたしの女房サァ夜の明るまで百兩だナントやすひかひ物だらうソレ百兩（皆ゝそ（カ））これハ（折から入來ル八）　大それで

いゝぶんハあるまひ　千めつたにおだんな　大なにさ〳〵せんのてへしゆにこと薬ハなひ蛾山おじやれ
ハテサおじやれさ　蛾しりゐせん　大なんと　千おつとせくまい〳〵　蛾モシへ　清エヽびつくり
した　蛾あんまりでおすいかにいやしひつとめをしておりいすとつてさふだんもありいしようにてん
でんひとりしようちしてくやしうおす〳〵（ト泣もんなちからいつぱひにとらへてなきわびる）　大これへ
ソレハマアなんのまねだ　蛾エ　大　サなんのまねだヨ引　蛾ぬしのことをわるくいゝなんすから
それで　大くやしひといふとカ　蛾アイ　千ハテこまつたものだ　蛾此金ハおけへし申シイス
大そりや亦なぜ　蛾わたくしのがひぶんのぬしのはじ　大てめへのはじハおれがはじといふとカ
千ハテこまつたものだ　大してみれバてめへをおれが方へとることハならねへのか　蛾コレモぬし
のため　大しまつをしろといふとカ　千ハテこまつた物だ　大イヤ〳〵〳〵〳〵其手でハ行ぬ
〳〵〳〵此女子の胸中見てとつたサテ〳〵おのれハなア　蛾どうしひした　大もきがつほひ　大サア
約束の百兩其女をこつちへわたせ　清そんなら　蛾あれさわたしにまかせておきなんし　千おいらん
のおこゝろハ　蛾百兩の金ゆへコフいふことがあつたといわれへしてハどふも蛾山の顔が立ィせん
そこでおすから此金ハ　大しまつをしろといふとか　千ハテ又か　大とハいふものゝソレデハおれ
が　千たゝねへのハしれたとり　蛾なんでも此金ハおかへし申シイス　大それでハみんなむだぼね

か　暁の鐘スカン〳〵　清　アレハ明六ツ　千なんとこう致さふでハ御ざらぬか　皆〻どうへ　コフサとても此いきさつハこれでハすむめへから此金をやりてしゆにあづけおひて後扁(マヽ)の會にいたサエ（皆〻顔な見あわせて）そんなら　清かならず　大と葉をかわしたぞよ　からすハッ〳〵〳〵〳〵　鐘スカン〳〵〳〵

金の姿は千變萬化かぎりなきをかぎりあるに樂しまずんバ此に傾國傾城の名字あり清を言て濁を示せバ小子仁よりぐにかへる濁の初をとひて清のおわりをおしゆれバ遂に書面にもとづき孝道に入る故になまなかなることまがきをなさずねがわくハ諸君子の覽をつひやして樂しみをきわめて變化の林をかけおちせんと云爾

廻覽奇談深淵情前扁　大尾

傾城買杓子規

全

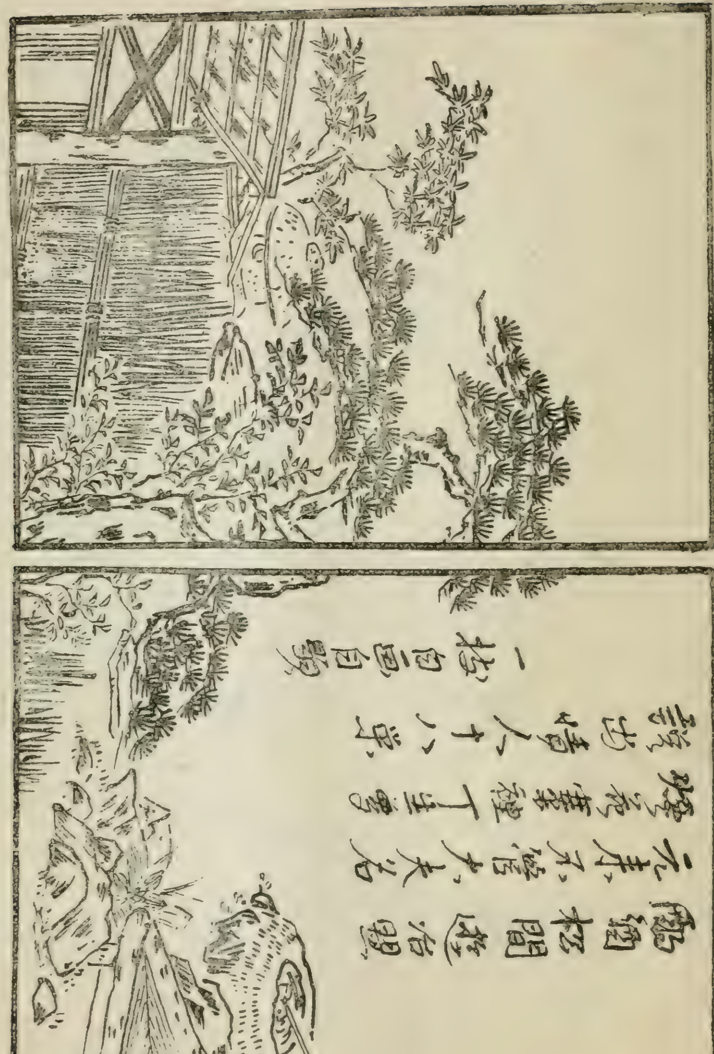
傾城買杓子規自叙

野夫の扱るゝは。さながら飯盞の如く。通子の通臭からぬは。頗定規にすべし。その通となく野暮となく夕には青樓の床に一幅の書畫を愛して裱匠の手際をも賞し。朝にはお釜の前に糖味噌汁を啜りて阿三姐が杓子の顏を笑ひつゝ杓子に邪ミし寄戸の身は定規と極た大盡の果ならずや。定めなき世に定なき身と讀しはひとり傾城の身に限るべからず。浮浪の出來合。强顏の誂。虛かと思へば實になり。掟木にならぬが女郎の常なるべし。さるを揚代の

𠆢に定規あり。曲尺の金でのゝ買んとおもふは。豈杓子捉木にあらずや

時享和第四歳甲子孟春

風月樓一枝應書林需



酒人を酔しめず
人おのづから酔ふ

白屋の宴

色人を迷しめず
人おのづから迷ふ

青樓の睡

傾城買杓子規

風月樓主人一枝戲著

○第一

數ならぬ身とは數へらるゝ人のいふべき事にて無もせぬ智惠とハありあまりし智惠者の言葉なるべしされば自から通とおもふ者は通にあらずいづれのおゝん時にかありけん山の手の片ほとりに里の替名を源と唱へ表徳を一枝といへる一箇の通子あり其性質溫和にして常に香茶のわびを好み又或時は派手にして能しやれ能笑ふ草の庵のしめやかなるは世を捨人にあらずしてこれや鮑魚の肆なるべし頃は靑葉月の末にもやあるらん廓の路次より音なふはおなじ列なる遊里の友ども **榮三郎** と **南幸** なり **一枝** こりやアおそろひなすつてサア／＼おあがんなせへ **榮** **南** せんこく御おしへの御手翰にしたがひ **一枝** それにしてもでへぶ身じめへがはやかつたね **南** まづすぎし世界のそのゝちハ **一枝** ほんに南幸さんにはひさしぶりだよ **榮** いよ／＼ごさかんといふ所かね **一枝** なあにさあるひは浮世の俗事にせめられあるひは雲上の道を樂しんで實に此間は夢にだも北樓の事をおもわずとんと詑た事サ **南** 詑た事さもいゝぜ哥や俳諧茶の湯の指南じやアねへかそれじやア器用すぎるの **榮** なんだかあやしいネ

へ〔一枝〕時に御まねき申したる事でもねへが銘酒の到來が一樽ありやすから肴もとつておき
やすし開かふといふ趣向さ　〔榮〕そりやァありがてへ　〔南〕諸事酒のこつたね　〔一枝〕野暮からぬ酒だから
榮さんも一口おあがんなせへ　ト(いふ内かれこれして酒いづる)　〔榮〕モシ失禮ながら酒の出所をあてよふ
かかしわ屋からの送り物と見たハひが目か　〔一枝〕こいつァきついもんだがおかくれなすつてお世界が
あつたねそふでなくつてあたるものか　〔南〕知つた譯をはなしてもいゝか　〔榮〕(わらつている)　〔南〕其譯と
いつぱきのふ榮さんと淺草へいつたらかしわ屋に逢つてのおうわさをいつたれば助がいふには私もた
ゞいまからあなたへあがります所でござります此間どなたとかお付合で揚屋町から立花やへいらしつ
たそふでございますがそれが車やへしれて文さとさまが大せつこみですでによつほどむづかしふござ
へましたがよふ／＼すましておかへし申ましてからとんといらつしやりませんそれゆへ御やうすをう
かげへながらめへりますといゝやしたから　〔榮〕それでしれねへはづもねへネなんでも文里がせくなざ
アきめうだノ　〔一枝〕さればその事よ此ぢう淺草のほうの連で立花やへあがりのすこし當りがあつて菊
の井をかつた所が第一うつくしくいつていはりがありそふな仕立申／＼文里がおよばん所にあらずさ
そして車やのわけもずぶせうちでよばふといふりくつだからいつて見よふとおもふところが文里にけ
どられているからあしをひいているのさ　〔南〕きついゑん次郎なこつたねへしかし一枝さんにも似やわ

ねへそねへに文里をおそれる事もねへじやァねへかよしんばあらわれた所がどふかこふかしうちによつてのがれよふがありそふなもんだネ　一枝なんぞいゝ新手をかしな　榮作者がそんな事をいつてなるものか　南ソリヤアそのときにのぞんではかりごとをめぐらすべしさトキニもふなんどきだらふ　一枝まだ八ツでもあらふかけふはあつくもなしいゝ日和だぜぬかりんと内にいる日じやアあるめへ　南（少しのりが來て）いかさまいまつから屋ねぶじやれのむかふじまハ氣がねへか　榮さそふ水あらばいなんとぞおもふ　一枝おいらがよふな哥人とお付やいなせへその通り〳〵ちつとむづかしからふが　榮なあにせんべいでおほへた下の句よ　ト（此くれへなことはしつていれど　わざにいふなり）　南いゝ〳〵　一枝そりやアそふと青樓へおよぎりハごめんだよ　南幸よしさ〳〵南幸といふおもりがついてる（とハいへどもやつばりあぶかわしきおもり也）○（三人はいそがしそふにしたくしてほどなく）乘り出す柳橋　榮ハ（きどりよき男なるゆへ）コフ船州つけてもれへてへぜ　せんどうアイなんぞめすのかへ　榮そふさ（トかミ入から南一などとり出し）こんたア大儀ながらこれで酒と肴をまかなつて來てくだせへ梅川がいゝよ　ト（舟ハむめ川のかしへつけせんどうハむめ川へゆく）　一枝どふも榮さんは氣がつくよ　南ほんにせじがいゝよ（いつたい酒には口のない男ゆへ酒といふと口を出すなり）榮なんとでもいふがいゝが酒といふとうれしがるのがおかしいの　コフむかふを通る川一をミな　一枝おやしきだのいづれおつけ澤

山といふたほだぜ　南　アノまん中のふじびてへがありやァ（といゝかけしがこなたを見て）それよりむかふへつけた屋ねがごふてきにいきなひかりじやァねへか　一枝　どふでも水ぎわがたつねけいしやはたつミにとゞめだよのう　ト（いつているところへ）　むめ川わかいもの　（さんばしから）ハイおあつらへものでござります　ト（酒と肴をおくる）　南　チットお世わ　此酒はいゝが徳利じやァあやまるぜ　むめ川　ハイおてうしもちつて参りました　ト（あとから出す）　せんどう　（うけとり）　おせわでござへやした　梅川　おかへりに道具をおたのん申やす　せんどう　アイそのみよしをついてくんねへ　（これより大川へ出て北へ〳〵へとこぐ）　一枝　こけへ出ると氣がはつきりとなるのふどふしても山手はうつよまだいきにはいゝがかへりによこぼりのぼちやァかァがなげへよのふ　南　しかしおめへときちやァついぞまんろくにけへつたこたァねへによ　一枝　うさァねへ　（トわらふ）　榮　どふしてまたたゞけへられるものか　ト（しばらくだんまりなりしが）おりよチば田夫野人の文もうだとばかりおもふからこふもあらふかときている　一首をつらねたね　一枝　なんとだ　榮　こふよ　〽ふわとのる舟も一葉のやなぎばしそれからちらすこひかぜぞふく　なんとよむもんだらふ　一枝　南幸　かんしん〳〵　榮　せんしういつぺい氣をつけるがいゝ　ト（おめいろのちやわんへついでやる）　せんどう　（おつにしやがんで）ハイありがたふございます　南　モシこつちの屋ねをみなすだれおろしのふとざほはどふだ　一枝　あやまるノ　せんどう　ほんにねへあれ

よりやアせがきぶねのおやらんほうのほうがにぎやかでいさゝだ「南」わるくいふこともねへコフせんしうとてものついでに太郎がしへつけて下せへ「せんどう」アイちつと洲がたけへからまわらねへけりやアつけにくふございます　ト(いふ内むかふのかたへくきらの一聲なきすぎしゆへ)「栄」アレありよチきゝなむかふじまのほとゝぎすじやァ南幸さんだんまりじやァいられめへ「一枝」舟を付ねへ内に「南」せわしねへそふ出來るもんか　ト(いひながら)ウヽ出たハ〳〵〽ほとゝぎすなくやあつさにむかふじま「栄」「三」「一枝」めうだ〳〵ト(それよりいつもの内へあがり例のこい四ツ物水がいほうろくやきなどしゆ〳〵のおこりにて)○(まわらぬ舌のめりやすに似ぬこわいろのあつかましきおもしろからぬゆへにしるさずいづれ江戸ツ子のくせとおぼしたまへ)早月も西にたけなわの醉に乘じて三人がたゞゆく事と夕暮よりむかふの堀へとあげしほのみなとをさしてぞ〽漕れゆく　おきやアがれ

○其　二

螢追ふかぶろも廓のほたるかな曲輪の夏の夕けしき茶やがすだれの涼しさに銀燭青烟を吐ては闇の夜も月明らかなるに送りむかへの提灯は星の光の稀なるにあらずこゝも名におふ揚屋町三人がうかれあがりし茶屋ハ紀の國やと見へたり「女房」チヤ源さんよくいらつしやりました(とハ「一枝」が事也おさなゝ

左源之助（といひしゆへ此さといかへ名なり）あなたがたよふたして立花屋からお文がめへつておりますしおうわさばかりでごぜへますよ　一枝又上手をいふぜ實にぜんてへはやく來たかつたがかのがむづかしいからよ見つかつちやァ大へんだから何事も目だゝねへよふにのう　女房左やうサそして文里さんがいつそつけなせへすといふ事でごぜへますよ　南幸とかく色男にうまれたが不運だとおもひなちつとそふいふ目にもあつて見てへよ　榮一枝さんはやく二階へいきやしよふいまいざいたのハたしか車屋のふりしんだぜト（いわれてそう〳〵二かいへあがりいつもかわらぬ酒ごとすみ）しのびてあがる　立花や三人一坐の（あらましハかわりしことなく南幸ハともへ榮三ハおのへふたりながら初くわいわきになじミがあるゆへしんぞうかいなり）早坐敷も引て各陽臺の夢をむすぶが中にも一枝がなじミ今・菊の井（としは十八九きれうよろしくこゝの内い一まいかんばんにて大のがまんものなり○一枝がゐん二郎にてもなくいつたいまんざらでなきゆへ　はやくきたりしがほれたおとこにもいゝいひにくしとやしばらくだんまりなりしが）

モシなぜふさいでお出なんすへそして一枝さんといひなんすかへわたくしハやつぱり源さんといひすよ　源どふともしななにもふさぎはしねへがのちつとかんがへる事があるのさ　菊の井サヤなんざんすへおきかせなんし　源ナニぬしにハわからねへわけさ　菊なにへわかりいせんへどふでわたくしらにはわかりいせんのさなんのわけかは存じいせんがさだめし文里さんのことをおもひ出しておこゝろ

が殘るのでおざりいせふそらほどぬしがこひしうざんすならいつそはじめから來てもおくんなんせず此さとでお目にもかゝりいせずばそらどけのした縁だともおもいゝしてとやかく氣ももめへすめへにいまさらあらためて申しいすもやほらしふざんすがまだ此さとへ身をしづめいせんまへからのわけハわたくしのむねにハ 源 そりやアたけへの事かたときもわすれはしねへが此ぢうもいふ通りそのわけが人にしれてはおや御の外ぶんもわりいからなに事も 菊 水になんすおこゝろでざんせふがあれほどまでに文里さんがつけつまわしつなんすからハさだめてふかくなりなんして始終のやくそくまできめなんしたとおもわれイすよ 源 なにそのくらいならぬけたりくゞつたりしてくるものかへちつとあわねへ内にでへぶかきよふがあがつたぜ 菊 かくのかゝぬのとよそ〳〵しい事ばつかりおいゝなんすがいくらいひわけをしいしても此よな身になりいしてハ（トなミだぐミしがしばらくあつて）エヽむねがわれるもんならわつてお見せ申たふざんす（トさしうつむき 源 がひざへしがミつく） 源 なんだむねがわられねへと。出來ねへ事をいつてじれるなぞもいゝじやアねへか じれるもなくもつとめのつね なにがくやしいくやしいわけがこつちできゝてへ ト（入りくミしわけともしらず） 榮三 がおいかた おのへ（おもしろさふにいそ〳〵きたり　べうぶのそとから）モシおいらんへぬしが申しんすもつとお三味せんをおかしなんしともつて參りいせふか 菊 おもちなんしきつとおたのしミざんすネ おのへ アノおい

らんへぬしはおとゝばなしがいつそでうづでざんすにへよび申しておきゝなんし（といひながらさミせんもちてゆくあとへ　ばた〳〵来るハ【南幸】があいかた）【ともへ】もしへ源さん一寸おきゝなんしわたくしの客人はまだねなんせずにおぶじやれなんしてそしてねわたくしをあげたりおろしたりしてじらしなんすからにげてまいりしたがどふぞお出なんしてねなんすよふに申しておくんなんしへしミ〴〵ごせふざんすよ　ト（いひながら【菊】が耳へよせてなにかさゝやく）【源】まだしやれてるかうつちやつておきねへいまにねるだらふ【菊】よふざんさあなはらさへたちなんせずばあわせておき申なんしそしてネぬしに御むしんがざんすあの耳を出しなんしト（又なにかさゝやけバアイとせうちで下へゆく　此のわけハ作しやもしらずもちろん後へんにもわからず）【源】こんやアでへぶさゝやきのはやるばんだね　色男をもつもてへ〳〵じやアねへもんだネ【菊】きついいきすぎざんすねそれだからもちいせんよ色男とハかわいゝ男のことかへ【源】マアそんなこつたそふよじらさずといやなおいらがよふに客人でねへとおもふものにははなしてもよからふぜマアどつから来るよ　【菊】（ハ【源】をしり目にかけて）なんでも江戸のうまれでおざりいすとさ所は申しいせんよ　【源】そんなら水道の水でみがきあげた男でおらが畠じやアねへの　【菊】どふざんすか曲輪にばかいて方角がしれいすものかへそして色男といふものハしろいものか黒いものか目きゝが出来いせんから　かわいゝといふのハすいかあまいかそれさへふかくハしりいせんくらいさ

其色とやらがありいすほどならまだはたらきもおざりいすけれど 源水どの水をのんだ男ハよべねへからいなかもんの源さんにこいといふのかおこゝろざしハありがてへがちいせへときからのなじみけへもねへそふなぶる事アあるめへぜ茶屋の送りものでまゝごともする氣でいるものをそらなミだのべそをかいておどす事アねへわな 菊むごい事をいゝなんすやり手といふおもりがついていゝすものざんすからどふしていたづらが出來いすものかへ 源それだからおそわつた通りどの客にもまゝになるのか 菊そのおそわつた通りつとめるのをつとめずおちやつたときハ内しよのまへもかまわずおまへさんのほうへばかりいつておりいすのでもこゝろの内をさつしておくんなんしな 源おかしな事をいふぜ此上ともに外ぶんわるくこられちやアわりい・おもつてか今どきハ色じかけがはやるとおもつておつな所からおつな手を出しかけるぜ六ツ指の手でも出しなゑばのかけゝへがあつていゝぜ客人のきどりでねへとつてそふやすくふむこたァねへよ 菊そふじやアおざんせんわるぎばつかりまわしなんすよ叉しかられいすかはしりイせんがまだ奥さんハおもちなんすめへね 源ひろい世の中にも女房やくそくをしとげたためしもありやせふかへ 菊そんなら小どものうちから心と心でちかひをしいしても 源其錠前もすたつた世の中はやくいへばしんぼうが出來ねへからよしにするのさ文里へのつらあでにもしんぼうが出來ばしてミる氣かへ 菊いふにハ及びイせんがわたくしにはぢをおかゝせなんす

なへ 源 それもたけへの事さ 菊 たけへにじれつたふすねへ（ト　れん理の情）源 コレせわしねへおほうさんにするなァ 菊 女郎にも買れておきなんしちつとまゝにもおなん／＼し
ほんに奥さんはなしかへ 源 ねへよ／＼（とのろくなり）見こまれたのハおめへばかりさ病身になるのも男に生れた本もうでハあるめへか

菊 たとこふしていたぶんハいゝじやァねへかへ（とおなじはなしもつきせぬところへ）邪魔をする氣にあらねども花にあらしも（一座の付やい 南幸 ハ　よろ／＼しながらうかから）一枝さん／＼どこだ／＼こゝだな／＼ ト（せうじをあけて内へはいり）一枝さんこれ源さんねたか／＼ねたかに用をこのむじぶんじやァねへが

源 （ねたようなこゑで）なんどきだ南幸さんむけへじぶんか 南 ナニサまだむけへじぶんじやァねへがおらァもふしたくハいゝよむけへでおめへだしたおらがあいしは人玉のよふな女だどこへきへたかゆきがたなしになつたがしかししんぞうでもくゑねへ／＼ 菊 なあにあれでもてへ／＼氣のいゝ子じやァおざんせんよかわるがつておくんなんし 源 なんだかぬしが酔たからくだらねへ事をいつたらふ 南

なにくだるのくだらねへのと様でへがきじやァあるめへしさらさの鳥がやぶかうじへとまつたよふに
ゐてへもねへ事をいやァしねへが（といふところへあいかた［ともへ］来りノチヤ又こゝへお出なんして
じやまになんノ＼すよサァあつちへお出なんし ［南］ちよつと見なせへすこし床をあけると此通りうつ
とふしいねそして身の上をはなしのおびをときさ ［ともへ］エヽもしえゝヽにくいきやく人だようそば
つかり ［源］あんまりうそでもあるめへ ［ともへ］此ぬしのやぶに人をいじめなんす客人はおざんせんよ
ト（きせるでそつとくらわせる）［源］めうだノ＼ そふされてのろくならねへけりやァ客めうりにつきる
ぜ ［ともへ］およしなんしいつそつきをいひなんすものを ［南］なんだへつきをいふつきたァなんだもな
かの月が卅日の月かおいらにやァけせねへ ト（しんぞうかいはきさんじなり かゝる所へ又もばたノ＼のお
としてきたるに ［栄三］と ［おのへ］なり しげりしやうすにみへて中の字のさたなし此しよにもらすはかミかすの
かさなるゆへなりー ［栄］南幸さんモフ支たくをしたかはやくむけへが来ればいゝの引 ［菊］なぜそふおい
そぎなんすへ ［源］栄さんも内がわりいからさ ［菊］そんならあさつてハきつとお出なんしぬしたちもい
つしよに来ておくんなんしよ ［栄］せうちさ ［おのへ］ぬしやァだまつてお出なんすから来なんせんおつ
もりかへ ［南］おらァ来る氣だがマァ内のかゝァに相だんしてからさ ［ともへ］にくいのふ ［源］どふもち
げへねへうそをつかねへ所だノウ南さん ［南］そふよそりやァそふと一枝さんそろノ＼したくがよから

ふぜ 源 そりやアさつきの相だんの通り此ゝへを榮さんにきせのいりもしねへのに用意の頭巾ハこふいふときのためさ貝をかくしの仕組は妙じやアねへか 菊 チヤどふせふそふおしなんしてもかたちでじきにわかりいすにへ 榮 わつちだつても三八といふ男でもねへのにむごい事をいふぜそこは順のまいの所作でやりやす ト(一枝がきものを手ばやくきかへふろしきづきんのしめくゝり一枝が身なりそのまゝなり) 菊 おのへ ともへ チヤおミなんしぬしにしやうざんすよチホヽミヽ 源 南 きめう／＼ (といふところへ) 茶屋男 ハイおむかいこれはおはやふおしたくが出來ました 榮 南 (ふたりとも出かゝつているゆへ) 源 モウ六ツまへだらふなんでもはやいがいゝ(とたちにかゝるを、引とめながら) 菊 (べうぶのかげにてなにかひそ／＼はなす 火がいしれし御事なるべし) 一枝 (源が事也) せうち／＼ ト(ひきわかれ)はしごバタ／＼ 若いもの (榮三がなりを一枝とミちがへ) こんばんはおはやふござります と(かれこれしてくゞりどがらり) 榮三 ハ (さきへいそぎあし) 天水桶のかげよりもまちもふけたる しんぞう かぶろ おまちなんし一枝さん (とおつとりまいてそでたもとひつぱりだこによろ／＼／＼はなせ／＼もくちの内) ばんしん みなさんおはなしなんすなにけなんしたとつてにがしいせうか尻やけざるのみせしめにしよふがおざりいす ト(と口／＼になぐさミはんぶん引ずつて四五けんばかりゆきすぎたり) 時ぶんハよしと 南幸 一枝 かしをまわつてのがれゆく 茶や男 (あとから) もふし／＼ぬしたちやアだんなをどふなさりやす

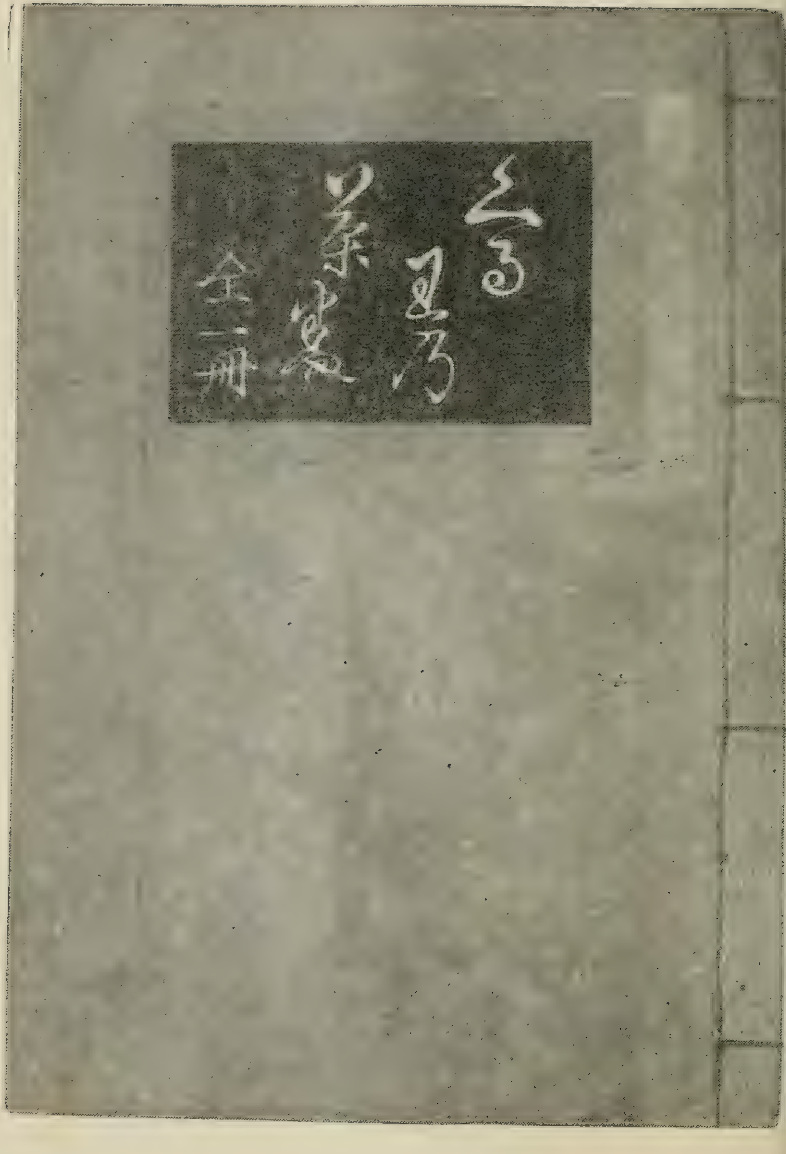
おひとちげへじやァごぜへませんか [ばんしん]なんだよさつせへななんぼうすぐらくつても覺があり
いすマア此頭巾をおとりなんしと(ひつぱるひやうしむすび目とけて) [榮三]がかほ(ミるよりびつくり)チ
ヤちがいんしたばからしいごめんなんし と(パら〱) [茶や男]だんなしゆびは [榮三]シイ聲が高い
○はやあけわたるしのゝめは鳥がわたり駕がとぶ土手にはあらぬ舟やどに [南幸][一枝]のがれ來て(まつ
間ほどなく) おいつく [榮三]やるもんだらふ [南幸]榮さんあんじもいゝがおめへの引ずられるあんべ
いがどふもいへねへ [一枝]客人のけへ玉とはよつほど出來た氣だが [榮]出來は出來たが出來たといつ
たら作者の病付にならふの [一枝]なにさおめへ

後篇

傾城買みつ子の魂 出來

しばしへだゝりしのちほかに又なじミにならふといふ客の出來し事をしるす

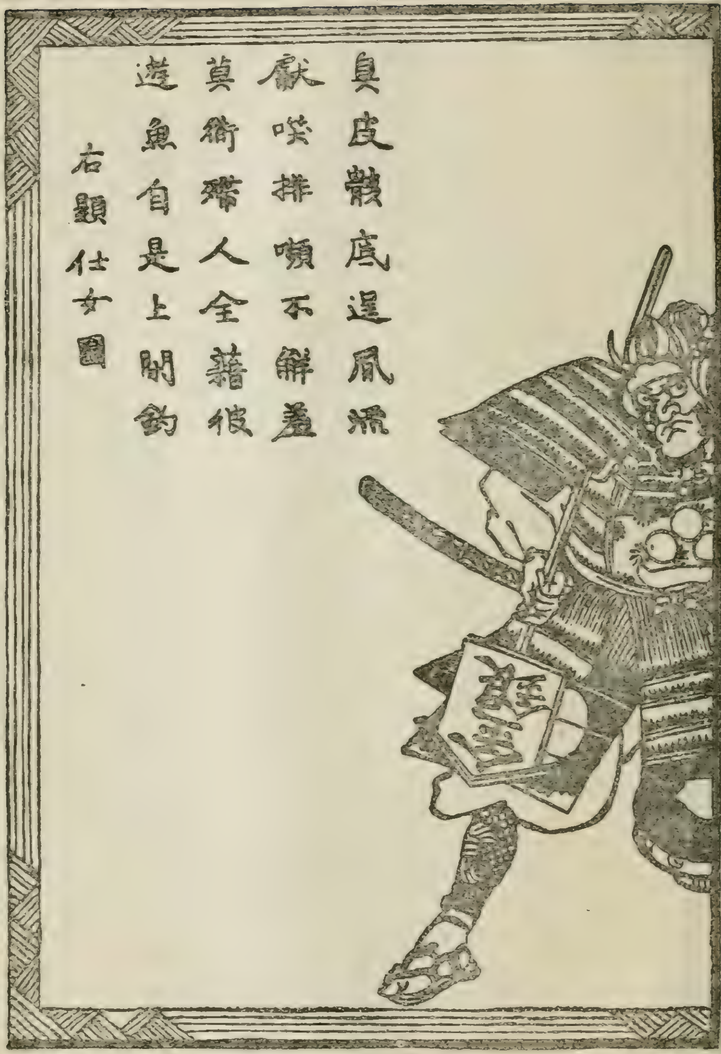
傾城買杓子規 畢


全一冊

序

兵者のまじはり解て雨夜の物語。こは楚満人の遺稿にして。其頃都の南門に。住と聞にし妖怪に。劣で人をまどハすは。是北里の美婦人にて外面如菩薩内心ハ。夜叉楯籠羅生門。鬼ぞと人の　れど其鬼よりもおそろしき。里通ひのありさまを。綱がむかしにくらべこし。ふりすさみたる春雨に晝寐の夢をむすぶてふ。幼遊びの赤本を。鬼やハらげて羅娼門。今亦爰に呼かえて。廓茶番といふとしかり

于時文化十二年乙亥春　　近櫻山人誌


臭皮骸底逞風流
獻咲排噸不解羞
莫衒癡人全藉很
遊魚自是上閒釣
右題仕女圖

傾城に誠なしとハ契情に
空言いふ客のこと葉ならんか
されど由断ハなるべからず
一双の玉手千人のまくら
おさらバよなどゝ
あくびが
かけあがり

四天王廓の茶番

楚満人戯作

莊子ハゆめに胡蝶とへんじ。盧生ハゆめに楚王となる。野暮へんじて通となり。むす子へんじておやぢとなるも。みないつすいのゆめなりけり。地獄の沙汰も金しだい。ゆめも心に添ふものを。實におもしろきゆめを望むハ。さめての後のくやみぞかし。そのくやむのも夢ならめと。昆崙を呑む早合點。せけんしらずのむすこかぶ。親は万屋重兵衛とて。万十と世に名もたかき。金に不足もなつ木だち。けふ長雨のつれ〴〵に。同氣もとむる近所のむす子。金助定七綱次郎。年もたがひに十八九。はたちのきみの下紐もときやならハん浮氣どし。親万十も留守なれバ。むす子賴助が亭主ぶり。うす茶のてまへもしほらしく。こゝろをきなきまじハりなり（坂田やむすこ金助ふこつものゆへちとたいくつして）

金「この席でハ失禮だが。けふのあめハ屋根板と出てへ場だネ。會席じやア氣がつまるから。うちくつろひでのめの若くさ　賴助「なるほど氣がつかなんだ。けふハ親ゆびもるすだから。なんでもさわぎ次第だ。定さんおめへ來なさるとき。安さんをさそつてくんなすつたか　定七「あいちよつとよりまし

たが。お先へとのあいさつさ（わたなべといふせりごふくやのむすめ）　綱次郎「あのね安さんハ此頃寳生流のまひにこツてネ。茶も花もうつちやツてしまツたから。あだ名を寳生といひやすよ　安次郎「これハいづれもおはやひおそろひ　頼「安さんがたつた今おめへのうわさをいつて居た　安「くさめが出たも古いネ　定「サア寳生さんもちあハせたから一ッこん献上天津風としよう　頼「さかなハねへが。きのつまらぬが御馳走だっ　うちくつろいでのミやしよう　金「安さんいわしのぬたを見ねへ。鯨のへどゝいふもんだ　安「久しいわるくちネ（此ところしばし酒もりありめしつかひの下男たちいで）　下男「綱次郎さまにお内からお使が參りました　綱「（どれトたちいでふろしきづゝみをうけとりつかひのものなかへす）おそれ多いが。やひな物を持參いたしました　頼「それハさいわひおこゝろづけのおさかないざじつけん　定「いはねどそれと木のめのかほり　金「かばやきならバ茶づりてへね　頼「是ハ妙だどふでも魚ハ山利のとだよ下谷の穴うなぎハ。せうゆがあたらしいであやまるぎん坐のすゞきは。あますぎてわるし。ふか川のいてうや。しんぼりの越後屋なぞハ。どふもたびをうけてならねへ　定「はてきつい御たんれんネ

頼「サアぜんもかたづいたら。これから雨夜のものがたりだ。なんぞめづらしいはなしハねへかの。

安「こけらしくおとしばなしでもあるめへ。ほんにめづらしいはなしといへバ。此ごろきいたとがごぜへす。南に喬木あり。のぼるべからずとハ。どふやら火の見ばしごのはり札を見るやうだが。漢に

遊女あり。もとむべからずといふ對句で　此席のしゆうハ。みなくるハをばけもの屋しきのやうにおもつてゐなさる。かたいせけへだから。ふ寧もばけもの〻きどりで。はなしやしよう（エヘン〳〵とこうまんにせきばらひして）これより北にあたつて。むまみち。日本堤をこえ。ひとつの島あり。此しまにすむへんけハ。容顔美麗にして。艶〻然たる事。西施も五湖にくらがえし。姐妃もしつぽをふつてにげさるべし。まつ葉やに十かえりのしけれる色をますれバ。玉やに夜光の光をあらハし。貴人高位も手にふる〻。あふぎやの風ゆたかなるに。わきて鷄舌のぜんせい。ひとたびあそべば。長壽をのぶる。にんぎよのいけすといつつべし。これも實ハ長壽のくすりならず。此妖くわいに見こまる〻人。ぶじにかえるときまれにて。はりのつよきハむかしのこと。いまハすべての色じかけ。うぬぼれの虚へつけこむばけもの。もん日をきりかけ。夜具をさせ。ぎりづめにしてとる謀計。ちくぜうと見てつき出す事。甲州りうもそこのけなり。かもじを髪のかえだまにつかひ。しんこをゆびのみがハりとす。きせうのちんくハうけじやうよりもてがゐく。とこ花かへしの小ぎくがみは。白はつならで三ぜんじやうづ〻はこぶとかや。されバ漢語に。一頭の朱唇万客なむと。此ちういせ町の若いしゆが。けいぜつ樓のへんけのほうで。なにかあしにもつれたから。ぐつとぢらしに。丸ゑびの江川と出たのさ。そこであのばけものめが。新造やかむろを討手にむかハせ。かゝをきつてつき出しやした。なんとあんま

りむごい仕うちだねへ。それがうちへしれて。すぐにもうせんでごぜへした（ト馬谷のきどりでのりちになつてはなす） 頼「そりやアきゝミやう〳〵だ。そういふ手のあるばけものじやア。せけんの息子たちア。はだかにされるせんぎだ。ついでにまかしよにでも出れバいゝ 綱「ほうしやうさん。そりやアほんのことかハしらねへが。わからねへもんじやァねへかの。たかゞうりものかひものだから。金をつかつてわきへゆくに。だれがなんといふもんか。そして髪をきられるのを。ぢつとしてゐるべらほうもあるめへ。その丁子やのばけものが。手のあるにもせよ。猫しやくし。ミな大通の御代なれバ。いづくかやほのすミ（マヽ）がなるらんと聞ときハ。そんな客はなしのきりくちだらう 安「ムヽそんなら綱さん。公ハうそだとおもふか。きやくの名ハえんりよだが。傾ハ常盤津といふばけものだ。いまでハ本町三丁めの。いばらきや童次郎といふ。薬種やのむすこが。ごふてきにしこつてゐるから。めつたに手に入るこつちやアあるめへ。夫共うたがハしくバ。こん夜にもおめへぶちころして見ねへ 綱「すりや此綱次郎をゆきかねるものと見たか。そのときハづとやら。とりかぢとやら。へんけでも。へんちきでも。ひとばんでぶちころし。血ぎせうでもとつてミせやう。頼公さんしるしのために金さつを 頼「なるほどしるしハ上やしようが。まあしづかにしなせへ。おめへがたハわづかの酒にまハされたかして。顔をあかめやつてなんのことだな。もしその傾が手にいらぬときにやア。ろうしてこうなしとやら。う

つちやつておきなせへ 綱「いや／＼安こうにいこんハなけれど。せけんのむすこをはだかにするときいちやア。うつちやつておかれねへ。あす見とゞけてこよう。ぜひにしるしを 頼「そんなら金札一つゝみ 綱「たしかにらくしゆ 三人「かならずぬかるな 綱「がつてんだ 頼「雨もやんだそうな 定金綱安「もうおいとま申やしよう

第二

春前に雨あつてはなのひらくる事はやく。秋後に霜なうして。落葉おそきこのさとの。楊柳こゝろをいたましめ。桃李はらわたをたつよそほひ。数千の妓楽ていじやうにゝち。天女ゝづからきゝがために偶す。一夜のゆめのきけんじよう。げん／＼たる大門。えん／＼たるよもい惣ぼり。たてならべたる楼たいハ。長生りざんをこゝにうつす。花美とはでとの仲の町へ。はじめていりくる綱次郎。阿房にのぼりし秦舞陽の。あゆゝわづらふこゝちして。たちやすらひしゐもんざか

綱次郎がけふのいでたちくろはぶたへをついにきながしした八黄八丈にとめがたのこもんをすへはだぎのむくのちりめんもかるくきこなすゆうびのでだちぢうだいのひとこしくろのこまけたくろちりめんのしころづきんをゐくびにきなしてこぢつけの羅生もんがしをめてに見て大門

口にぞいりにける

中の町のふうりう。いまさらいふもさらなり。四季おり〳〵の花ざかり。ながめたへせぬ色くらべ。南驛四隅のたハれ妓も。およぶべきにハあらたまの。はつ鶯のこゑたかく。うつしうゑにしやえざくら。ちれバさつきとさきかへて。のきのとうろうにハかのしゆこう。四面のしろたえ。きくのえんふでにもつきずとばにも。いハぬ色なるやま吹の。つねにふりしく花のさと。天下ぶそうのくるハぞと。綱ハなゝめにミわたせバ。とくさをねかす青すだれ。のきをならべてはなござの。中にも目だつこうらんハ。きりしま山のさかりかと。あけにぞミえしもうせんの。秋はや床右衛門といふばけもの茶や。かねて出むかふてい主が案内。こゝぞえたりと綱次郎。かの頼助より給ハりし。金札とり出しまきちらせバ。女ぼうむすめばけものどもはや千ねんもなじミしごとく。けいぜつ楼と名にたかき。鬼すむ家にあんないせんと。かうべをさげてこうさんせり(げいしやまじりにお定りのしゆえんはじまりしばらくありて) 女房お梅「(シカ)もーイ若だんなてうじやでハどなたをおしまひ申ませうネ 綱「常盤津さ 女房「(さのどくさうなかほにて)常盤津さまハどうもむつかしうござりませう 綱「なぜだ 女房「いばらきやといふきやく人が。いつそせいてゐさつしやるから。お出なすつてもおわるうござりませう。ムゝこふと。綱さんにハどなたがよからうネ。琴のおあいてにハひなづるさん。歌學でハまきの戸さん錦戸さ

ん。そしてせんざん様。ミさやまさんもいつそうつくしうござります　（にょぼうおむめハいばらきやのどう次郎がせわになってゐるゆえかくいふにや）　ていしゆ床右衛門「それでも名ざしでお出なすつたものだから。旦那のおこゝろ次第に。ときハづさんをきいて見や　男鎚「ハイー（トゆきしばらくあつて）ときハづさまをおしまひまうしました　綱「たいぎ／＼　女房「さやうならお出あそバしませ　げいしや「おたばこいれハわたくしがもつてまゐりませう　ていしゆ「お下物ハお遣なさりまし　綱「なにようごぜへす（ト立出る）　ていしゆ「さやうならごきげんよう

かくて綱次郎ハ。にようぼうげいしやにあないさせ。かのようくわいのざしきに來てミれバ。寶生がものがたりにたがハず。とこのかざり。かうろのそなへ。いとたけ和琴のおきかたまで。古法にたがふこともなく。かたへなる唐机にハ。るりの硯屛。くじやくの玉尾。ほんばこにハ史記のだいごうをあらハし。つくえのかたへに。まんよう。こきん。玉よう集などつミしありさま中道ぐやにことならず。つぎの間ハ。ゐこうにあきのもミぢをうつし。たんすのかなものハ名月の光をうばふ。こなたなるふんだいに。たんざく四五枚おきたり。そゞろゆかしきこゝちして。しういつと見とれゐるおりから。ようくわいのしわざならバ。なまぐさき風といふ所をそれにハあらぬとめ木のかほり。ちもとの梅花春かぜに。けふやひらくとうたがハれ。いとしづやかに坐になをる

ときはづがいでたちハしろあやのしたぎをかさねむらさきのうハぎえぞにしきのうちかけかむろふたりきん糸(し)まひづるのふりそでそれよりおしきせのさかづきもすゝはなやかなるざしきのさハぎいろ〳〵のしうちあれどかづのふゝにくわしけれバしばらくこれをりやくすしやれのかけひきけいしやのあつかい十人といろの手くせあれどしよくわいのせきハおしなべてくどからぬこそむべなるかな

はやさかづきもたけなハに。けいしやも茶(ちや)やもおいとまと。ひくや夜(よ)ゝせのひけ四ツどき。床(とこ)もおさまりさゝせんの。いとゞしづかにさよあらし。おとづれて來(く)るまぶもあり。おもふにあハでおもハぬに。そひねのゆめやむつごとゝ。あだとなさけと。三ツぶとん。なニをかごとにかたるらん。ともにひつそと

第　三

にようぼうお梅ハときハづが。こよひのそぶりこゝろえず。もしやこよひのきやく人(じん)に。ぶちころされてハ。いバらきやから。金づくでたのまれしぎりたゝずと。かへるふりにてしのびあし。そつとべうぶのうしろかげ。人(ひと)にしれじとこがくれのいきをつめてぞうかゞひける

かくともしらぬべうぶのうち。ひよくとちぎるむつごとの。つねにかハりてしつぽりと。いとひそやかにはなしごゑ　ときハづ「これほどまでにまうしいしても。まだおうたがひなんすのハあんまりでおす。童次さんのうわさハ聞たうもおざんせん。きいしたらみごとにつき出しておミせ申ィしよう。モシエいつそばからしいなぜねなんすへ（トすこしこゑくもりて）

戀のやまつれなきかたをしたふ身ハ

あだにやひとりふゝまよふらん

綱次郎おきなをりて

ふみまよふ人のこゝろにむらぎりの

はれてぞこさめこひのやまゝち

とき「ムヽはれぬこゝろのむらぎりを。はらしておめにかけまうしいしよう　綱「そりやアどふしてとき「これをおミなんし　ト（いふよりはやくようゐのかミそりとりなをしこゆびをすつぱり）　綱「（おどろきながら）これはやまつたことをした　ト（そばにありあふいんでんのどうらんをかミそりにてきりさき　きづ口をしつとまく。（マヽ）いんでんハきりきづの大妙薬也）　綱「（しづかにゆびをとりおさめて）　こいしんぢうをミるからハ。こんりんざいかよひとげる。かハらぬしようこハこれ　ト（そばなるひばちにおこりきつたるひの

なか（ゆびさしこむなときハづ引とめ）　とき「そんならこれでおうたがひハはれいしたかへ　綱「和歌三神もしようらんあれ　とき「うれしうおざんす　すでにこの夜も五更の一天。ひがしもしらむ鳥のこゑ。おのが名告る鷄舌の。れんじにもるゝあけがらす。夫かとミれバていしゆ床右衛門「ハイ　おむかひ　綱「床右衛門か　ていしゆ「ハイ　おやくそくハいつ日でござります

綱「月ぢうあけづめ　ていしゆ「エヽすりやゆふべのおせけへハ　綱「たゞなにごとも此むねに　とき「あけてハいはじいハしろの　綱「神も見給へこゝろのまと　女房お梅「くわしくきゝしべうぶのかげ。ゆふべのようすをちくいちに。童次さまへ（トおびひきしめ　いつさんにかけだす）「それ言せてハけんくわのたね。此床右衛門が綱さまへたゝぬ。旦那ハおかごで。イザおかへり（どりやひとはしりとしりひつからげ女房があとをしたふて三重）

第四

神道祭記にいハく。鳴弦秘符を。魔王うるときハ。轉身飛遊のじざいをなすとハ。むべなるかな。生野暮も金のゐくハうにハ。だいつう美男とあをがるゝ。うぬぼれの理を自得せバ。色よくみづからうすかるべし。金づくならぬいろざとの。ゐきぢとはりのしよわけにハ。かれをすてこれをしたひよし

なきわけに身をはたすも。ミなうぬぼれのしわざなりけり。さてもわたなべやの綱次郎ハ。頼助よりたまハりし。金札のゐとくにて。かのようくわいとよばれたる。數千手のある傾城を。初會のとこでぶちころし。ゆびをとつてたちかへりければ。頼助はじめ定七金助。寶生安次にいたるまで。よろこびいさみ。酒えんすこくに及ぶおりから。たいこゐしや安倍せいあん(いつさんにかけ來り ためいきつく)ミな〳〵「これハせいあんらう。なにかあハたゞしいらいりんようすハいかに せいあん「さん候ごちうしんといふもおこがましいが。きのふ綱さんが。ときぼうにゆびをきらせなすつたとを。本てうぢうで大ひようばん。そこでかのいばらきや童次郎が。中とうこといふもんでごふてきにあつくなつて。童次がかねてたのミをく。らせうもんがしのわるものをあつめ。日本堤にまちぶせさせ。そのゆびをとりかえしたうへ。うでづくでときハづをもらおふとのわるだくミ。せつしやがしかときゝましたから。こん夜のお出ハおやめなされ。ほかにぞんずるしさいあればさ。そのゆびをはこにおさめ。七日のあいだつゝしミ給へ。かならず他所ゆきごむようと。ふか川のおてばんじやァあるめへし。アゝくちがくたびれた 綱「ナニいばら木やがたくミとな しようなうくせへにやらうめ。ふミのめしてわけをつけけんと(かけいだすを頼助ひきとめ)頼「綱さん待給へ。ものになれたるあべのせいあん。七日のあいだつゝしめとハ。なんぞふかいしあんがあらう 金「童次めハさておき手にたらぬがらくためら。

いくたりあつてもおれがあいてだ　定「こんど町へゆくときにやア。六にんづれでちやばんのきどり。ときんやすゞかけハやなぎ屋でかりるから。六人ながら山ぶしのミへで。おひをしよつてゆきやしよう　頼綱「こいつハミやうけい〳〵　頼「まづそれまでハたんきを出さず　せいあん「七日の間まち給へ　綱「此盃ハ　頼「おつもり申やしよう

第五

さるほどに綱次郎ハ。あべのせいあんがすゝめにより。けんごにまもる一七日。けふまんぐわんぞとこゝろによろこび。ころしも卯月すゑつかた。をやミもあらぬあめのおと。なをふりしきるゆふまぐれ。ものさびしくも夜あらしに。琴ひきよせてばんしきの。てうしゆたかにたてなをし

軒をめぐるてんてき。雨のおとにたぐへて
七ねんの夜の雨かつてしらぬゆめの夜

おりもこそあれしばのとを。いとゞしづかにおとづるゝハのきばをつたふあまだれか。こずゑにふけるくゐなかと。又もしらべをくりかえし

たそやこの夜中にさしたる門をたゝくハ

たゝくともよもあけじ宵のやくそくなければ

女房お梅「そのやくそくの日ものびて。おいらんがいくせのおあんじ 綱「ヤアそのころハおむめじやアねへか 女房「ハイおいらんよりのおふみづかひ 綱「戸をあけてはいらつせへ 女房「さやうならごめんあそバしませ 綱「この大あめにこんやこずとも。あすでもくれバいゝに 女房「それでもおいらんが。まちこがれてゐさつしやるから。ぜひこんやおともしてくるやうにと。おむかひながら。おふミをもつてまいりました。これハ又そまつながら。床右衛門よりのおミまひ。ほんに大あめでいつそ折がぬれましたから。最中の月がしめりましたらう 綱「これハこゝろづかひいたミいる。きのふも床右衛門がきたときいふとをり。ちつとこつちにさハりがあつて。けふまでハどつけへも出ねへ。あすハかならずいきやしやう（トいひながら文くりかえしミて）ム、是にまきこんであるのハ。童次郎がきれぶミ 女房「サアそのことについておはなしがござります。わたくしもいばらきやへハ。ちつとわけがおつすとゆへ。ときハづさまをおまへさまにあハせましてハ。どふもわたくしがたちませんから。このぢうのばんのやうすを。童次郎さんに。くハしくおはなし申いしたところ。それほどまでにおもつてるるを。むりにせこうといふハミちならぬといひ。せけへに女もねへやうに。あんまりやぼだから。ミごとにきれてしまわうと。おつせへして。おいらんへあけたこのふミさ 綱「おもひあハせばせいあん

が。かねておしへし七日もたち　女房「たれはゞからぬおふたりさま　綱「このうへともによろしく頼む
女房「それハ　のミこみ。さりながら。うそハ女郎のつねのならひ。ごゆだんなさるなわかだんな
綱「そんなら此うへときハづが。うそとまことのわけかたハ　女房「人にしらさぬわたしがひでん。まことのこゝろできつたゆびなら。きりくちいたつてすミやかさ。又いつハりの手くだならバ。ゆびをおしんできりくちの。かならずくるふものでおざんす。ものハためしじや若旦那。指じつけんをいたしませう　綱「げにもつともなり。そのゆびこゝにと（まき点のかうばこ。何心なく取出す。女ぼうお梅とつくとミて）　これこそいばらき童次がこひのあだ。ゆびとりかへせバうらみもなし。いざおいとま（ト立あがる）綱「さてハいばらきがまハしものよな　女房「いかにも童次にたのまれた。そのときハづがふミもにせふで。きれぶみとミせたのも。ミなきやうけんの大ちやうさ　綱「チエヽたばかられしかざんねんや。もうゆるさぬと。わきざしすらりとぬきはなせば（おりしもふりくる大あめの。しやじくをながすごとくなり。女ぼうお梅ハそのときに。まなこをいからし。かミさかだち。切こむ刀をおどりこへ。すきをうかゞひ戸をけやぶり。いつさんに逃ゆくを。いづくまでもとあとをおひ、雨にぬるゝと思ひしが。身に大あせに夜ぐのしミ。むねにおく手にうなされし。ねむりのゆめハさめにけり

四天王廓の茶番　終

繹情新話 夜多也れかた手引書 全

譯情新話

夜色のかたまり

江戸 [illegible]亭玉守著

青樓の邊に金龍山の靈場有南驛の邊に千躰荒神の祠有いづれも多き御手の數故人山東京傳が世に著したる四十八手に今の名人手を盡して北郭ハ云も更なり或ハ辰巳里谷中の末迄其手の屆ぬ所も無く手持不作多の時雨月鼻の下と共に長き夜半短き才の筆執て硯の海のひる見世や見立て拾ふ色貝の場變ば南驛の趣向は餘り有まいと己に深入のろけの道深ひ手練もしら紙へ淺い情の戀の海かの舟底の枕にハ幾干の容人を難船し碓枕の打人替實も一度の寐歸に虛と千牙の玉櫛笥一ッに分る比翼紋是金伯の威ならずや紫摩黃金の佛伯をへがして打込所化あれば駕にも乘ず只一騎足曳で來る武士有り丁人有職人あり士農工商貴賤道俗一夜流の同者容打混じたる大湊其根葉のよしあしは難波と伊勢の芦と荻趣向は古躰にもとづ

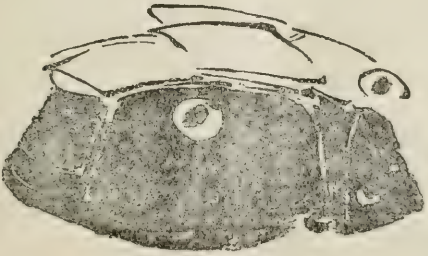
きて名の改たる新當世よしなに見ゆるし
たまへかし

天やすし
三ッのとし
ゑびす講の日

市中庵主人
算盤玉守誌

作者畫

遊れ女の
空にしられぬ
涙雨
濡るもあれば
ふらるゝもあり
たまもり讃ス



○

世界ハ大見世　客ハむすこ 女郎ハへや持　尤も初會

いつものとふり賑やかに鎌納む「けい太夫茶やーへィ左様なら御きげんよふ〳〵〳〵〳〵（ト廊下バタ〳〵引とる　折しも「亥の刻」の鐘ボナミン〳〵「客（年のころ廿ぐらい　むつくりとした色男あまり口をきかぬたち京ちりめんおいミぢんのうハ著おなじ白とあさぎの小べんけいの下着二ツこびちやこどんすのおびかみ入たばこ入とも當世の物ずき床の上にすわりしかみ火鉢へもたれふところから手を出して火ばしではいの中へ丸のゝ字をかいたりけしたりしている尤も此きやく酒ハあまりいけぬと見へすこしゑひてせつなきこなし）「女郎（十八九ぼつとり肉いろ白よほどうつくしきしろ物藤ねづミ山まひの小袖くろびろうどにほんごくおりのくじらまきおびとうひのもんちりめんへ小納戸じゆすへもんおらしのぬひあるがくむくのうちかけすがたかた手にみす紙をもちそへそつと來りはづかしそふにくらいほふへすハり）「女郎モシ今宵ハいつそ寒うありますネもしへ上著をとんなましな「客アィ（トぬぐ女郎たゝんでとこのまのはなりと一しよにおく）「客わつちやアごうせへにいほせやした「女郎そふざるますか氣色でもわるかアありませんかヱ「客何サ呑ゑねへ酒をすごしやしたからせつなくツてなりやせん「女郎夫りやア悪うありますネくすりを上ンせ

う呑でみなまし（トたつてたんすの引だしから紫金錠を出してやる）「客コリヤア有難たうござるやす　ト（かみくだく女郎まくら元のさゆをくんでだす）「客おかげで心持が直りやした「女郎チツト横になりなましな　ト（きぬたのまくらをあてがう）「客御免なせへ（ト横になる　女郎たばこをちよひと一ぷくのんで又一ぷく袖でちよひとふいて出し）「女郎一ぷく呑なましナ（客一トいきふいてだす女郎はたく）女郎（打かけをぬひで寐まきすがた　）「女郎モシへけふハ何所へいきなましたへ「客ナニサ金賀さんに誘引やして海案寺（マヽ）サ「女郎楓ざるますか「客左様サ大分人が出やす「女郎そふでありますとねへアノ金賀さんハおまはんの何でありますヱ「客何でもなしサ俳偕（マヽ）ノ友達サこつちへよく來やすだろう「女郎アヽ能來なますよおまはんも是を御縁にちつと來なましナ「客ちつとハ恨ダネ是からたんと來やすのサ「女郎ナヤ噓にも嬉しいヨ（トにつこり）「客わつちやア生ついて噓ハふ得手さ「女郎ほんとうにかへ「客きつい御念さ「女郎御心にハ叶ひ升まいがお付合に此すへとも「客是非來やす氣サしかしあんまり來られて仕舞にやアうるさがんなさんナ「女郎勿躰ねへきつとざいますヨつかねへ事でありますがおまはんの所ア何所で有ますヱ「客金賀さんの近所サ「女郎夫でハ新橋とやらでありますネ「客さようさ「女郎定ておかみさんがありなませう。客どふしてまだなしサ　女郎「實にネ（トにつこり鼠なき）「客ナゼへ無りやアどふするのだへ「女郎どふでもよふありますチイツとむねにありますのサ

「客羽織の紐のよふだネ　女郎「ヲホヽいつそしやれなますヨ　モシヘおまはんこつちへ度〳〵おいでなませうネ何所のうちへいきなますヱ「客ついに來ずさたつた一度大師の歸りに湊やの內へ行やした「女郎夫から度〳〵ざいませう「客イヽヱ初會切さ「女郎實なしだねへわちきなんぞも其通りざるませう「客外ハとも角もおまへにやアじつに（トいつた斗りあとをいはず）「女郎いやざるますとかヱ　客「どふして地金に迷ひやした　女郎「ヲホヽヽおまはんハたんと手がありなますネ　客「イヽヱ二本はきやアござりやせんおめへこそたんと御所持だろふ　女郎「さつぱりなしサ「客情がか　女郎「ヲヤにくひ（トつめりそふにしてつめらず）「女郎あるか無イか來て見なましもし有ツた時にやアたゞアすみませんぜ「客其折アどうすれバイヽネ　女郎「むづかしひ事アありまへん女房に持てくんないまし（ト思ひきつてすつかりいふ）「客何よりか安ひこつたネなぞとのせられるもんだネ　女郎「ヘンあんまりのりなます風かへ　　折からゲエイプウトいゝながらがらりとせうじをあけて一座の客人金賀年のころ四十ぐらいでつぶりとした男しんしう紬のかんとうがうしくろ八丈のうらへりのかゝつたこそで二ツもちろんうわぎハぬいだと見へこんちくぜんの帯をぐる〳〵と前ではさみしろのゆきみがたのきせるもつともきくきりのふかぼりなにかすましたかほ心のうちでハいつぱしのとふり物の氣とかく人の心をいゝたがるくせありこん夜ハ合イ方にまわしあるゆへあまりよりつかずおもしろから

ぬさま）「金賀あけてもよしかネ（ふたりハわろひ所とおもへどもぜひなく　）「客大よしサ「女郎
這入なましナ「金御免なせへ　ト（びやうぶおしあけまくらもとへさむそうにすわる女郎一ぶくつけて出す）
「金チイト（のむ）モシ花さんかわいがつてくんねへ己の弟だ「客何サひどい目に斗りあはせやすのサ
「女郎チヤこわい　ありやこりやサ「金是からア度〳〵連てくるぜ其かはりもてなしがわりいとわつ
ちが了簡しやせんぜ「女郎實でありますかへ金さんへ是でありますト（おがむまね）「金おきやアがれし
かしあんまりかわいがりすぎられちやア親父のめへ忝すまねへ「女郎そんならどふすればいゝのであ
ります　客「やつぱり今夜のよふにむごくすればいゝのサ「女郎チヤト　「客アイタ
ヽゝ「女郎ちイツとこりなまし金さん今宵ハいつもの通り嘸おたので「金ナアニアノ女郎なざアこち
とらが腹にやア來やせんやつぱりやまさんが相應さ「女郎かわいそふにおまへはんにやアおしづさん
もよつ程おつこちサ「金ヘンアノ女におちられちやア大へんさこつちやア桑ばら〳〵と云て逃やすの
サ「女郎いつそモウ情のねへお師匠さんが夫だものをお弟子ハ其はづさね（ト顔を見る客だまつている）
「金何サおめへなんざア今からだから隨分身に染て客人をとんなせへ（マヽ）罪利生が肝心さ夫だから金ぴら
や聖天がはつかうで兎角意氣はりが無ツちやア信心がうすい譯サ（などゝうぬがどつとせぬくやしんぼう
た此座しきへきてならべてる女郎もこゝろのうちにハおかしくおもえどたゞそうざますなどゝいゝかげんにあわ

していろ金貨はひとりぺら〳〵〳〵しやべつていたりしがかんくびなりすいがらいつのまにかひざのうへ忘ころげてもへだす女郎ミつけて)「女郎金さんへひざへ火がト(いわれてふつときがつきそつとはらいおとし)「金モウ老込やした是だからおしめへサ、客嬉ひろがりだとかいゝやすぜ「金達へねへ今に來なせへそういつてやつた物が有から一ぺい呑やせう花さんおたのミ申やすぜヤレ長ばなしをしやしたヤドツコトナト(たつ女郎ざいに)「女郎マアいゝじやアありまへんか「客そんなら今にいきやすぜ「金ウン來なせへト(ろうかへでゝあたりを見まわしいまのやけあなへゆびをいれて見て)「金チヨツいめへましい(あとにふたりハほつとためいき)「客とんだ邪魔が來たアヽねむひ　女郎「チヤあつかましい今夜ハ寐かしやアしませんヨ

雁の音ガアン〳〵

右評曰

川柳點の秀句に

傾城にかわいがられて運の盡

此客人も右の句に類せり是水道のすいハ身を喰はしにして初會すら此如し況や裏におゐてをや實を結ぶ木ハ花よりしらるゝが如し恐べし〳〵

○

世界ハ小見世　客ハしよく人　女郎ハとしま　尤も馴染

客年の頃卅ぐらい名ハ吉玉つむぎのあいまんの廣袖くろなゝこのそでぐちそうぶりとも八たんのおびとこのうへに大あぐらかし三味せんをとつてつめ引の二上りしんないそばに相方の女郎名はお七油じみた縞ちりめんのねまき小袖みゝのすれたくろびろうどのまきおび年のころ廿五六ひへめきのあたりはげたやつもはや年明前のしろ物火鉢へひらなべをかけていろ／＼なざんぶつをぐつ／＼煮ていろおなじ脇にほうばいの女郎　吉の一座に出た女ナセこん夜ハつれてきてくんなさられへとうらみをいつていろまア／＼一ぺいのみれへあすのばんハきつとつれてくるからなどゝおためごかしのあはせ鏡をいゝながら　ウタ〽ぬしを歸へした其あとで夜着に持れて一人言しかけの遣り操すて利迄「お七ヱヽモよしねへナゐんぎでもねへ「吉くそがあきれらアこん通だろう「ほうばゐ　ほんにさア霜がれ三月きやア往生さ「吉霜枯だのあかぎれだのと德平がせりふじやアあんめへし今に琉球人が來らアそふするとおめへツチもまんが直らア「ほうナゼヱ「吉唐人ハ女にやアのろいそふだから大方出かけて來やせうハサ「ほうてへげへにまぜなましふけいきナ「七お杉さんかめへなさんなあんな後生樂アねへよ人の氣もしらねゐで「吉すてきとふさぐぜべらんめへしつかり

しやなうしろにやァ吉さんと云だい大盡がつひておいでなさらァ「七風の神がきいてあきれらァそりやァそふとおめへでへぶ面工がいゝの日無でもかりたのかいゝべゝが出來たの「吉はゞかりながら吉さんだァこんくれへな物アいくめへも有ァ「七そんなら一二枚よこしねへいつかのゆふきのみしんだアナ　吉「横丁の伊勢やの番頭にかけやわッししかし此がらくたァ根こそぎ遣ても入替にやァおぼつかねへ「七なんだまけてあるのかそんな事だろふと思つたのヨマァ三味せんハいゝかげんにして一盃のゑねへナ　吉「そいつァ奇妙だドレあをるべい　ト(茶わんを出すほうばいの女郎つぐ七分目にて酒なし)「ほうかわりめサ「吉チヨツいめへましい又一斤かべらんにつぎがわりいヤァせめて五合づゝもつぎやァがればいゝどろぼうめ「七なんの高ひの安ひのとついしか丸で拂もしねへでおめへのよふな客人ばかりぢやァ若衆ハ年中地切ばかきれらァ「吉おきやァがれ又癪斗りぬかしやァがる　ト(これより三人してやつたりとつたりてん〳〵にはしをだしてかの小なべだてをくらふ事かみくづひろいのけんくはの如し)折しも見世で(おきやくだよふ引お茶あげな　アイ〳〵引の聲かまびすし)「ほう一寸いつて來よふ(トたつ)「吉ヘンよくばるもんだのおとゝい來さつし「ほうヱゝモにくい　ト(せなかをひとつくらわせてとつぱくさ出てゆく)「吉ヘンかけるざまア家鴨に似たりダ　「七石場に猪牙タァいかねへかネ　「吉どふして「七夫でもアノ子ハおめへにやァ惚てるゼ「吉あきれけへらァ「七あんまりそふでも有めへ物喰がい

ゝからほんに物くひと云やア一ぺい茶づりなまし「吉ウンニヤ飯アよすべへ「七酒斗じやア、毒だにそんなら私ア一ぺいやろう ト(めしにかゝる)「吉てめへ飯もいけるかあきれらア二三日お茶ア挽てお部家で喰止でもされたと見へるヤレ〳〵不便や土瓶やダ「七よしねへふけいきなこッちやアモウ色氣よりア喰氣サ「吉モウ其筈だア世が世なら孫の守でもする年ダア「七かわへそふにまだ子供だア「吉きびのわりいドレ一寸ほぞを拔て來べへ ト(たつ)「七(よふじなつかいながら)ちようづか「吉おつき申シヤナ不性なあまダ「七コレサもう引ケ過だよのしづかにしねへナ「吉能小言をぬかしやアがるト(ふうかへとび出しどつかどう小用をして來りがらりとしやうじたけあけ)「吉いめへましい何だかふんづけたア犬の屎だろうコレ嗅で見てくれヱ「七馬鹿ア言なまし座しきに犬かいるもんかナ「吉(あかりですかして)ヱヽ紙くづだアちく生め　ト(しきいへこすりつける)「七ヱヽきたねへ事ヲすらアソレサ跡をしつかりたてなまし 吉「手めへとおんなじ事ッて尻アあけばなしだア小便に往てきたらすてきとさぶくなつたどれふさるべへ ト(じゆばんひとつになつてとびこみよぎをすつぽり)「七ヱヽモしづかにしねへ灰がたつハナ「吉此半ゑりもしんぼの犬で大分たれしみになつた　どふだ拵てよこそうか「七夜著にもしやせう「吉でハぶしやれが上ッたナ「七洒落でもあるめへヨト(七皮燒のすこしはげたしゆらをのながきせるで一ぷくのミ吉へもつけてやる寐ていながら女郎にもたせていてのんで)　吉この屏風

も久しいもんだやどやの雪隠を見るよふにまんべんなく書キヤアがつたろくナ手ハひとツヽもねへ「七おめへにやアよめゝへ「吉へンよめねへでよこつちの方ナアめゝずと云字だ「七チホヽミそれ見たか「吉ヱヽくたびれたちつと寐べいあすア早出だア「七仕事か「吉ウン

「七じゆうだんハおいてわつちも來年の春ア明やすぜ「吉モウそうか大分早イよふだ「七あんまり早くもねへのサアヽモウあき〳〵しやした「吉てめへもそのくれへ大店に辛抱した、ら今頃ア藏の三とめへも出來たろふにおしいことだつケ「七ちげへねへほんに考て見るとばか〳〵しいのサ年が年中お部屋と高島の奉公斗しているのよ(作者曰此たかしまハたしかにきん所のしろやなるべし○此いへハさかの客と見へたりよろしくこずいさつ)「吉其かわり來年からアれつきとした吉さんの奥様だア其時ア人いつもゝ見けへながいゝ「七見けへされるがきいてあきれらア「吉まだ〳〵鉢にならねへがめつけもんだどふでおさまりやアろくじやアねへ「七ナぜろくでねへヱ「吉大ぜへだました天罪だ(マヽ)アー七それとおいらたアたちがちがひやす「吉くそがあきれらア古狸め

二ばんがらす　ガアー〳〵「吉ドレ歸るべいアヽ引(ト大あくび)「七まだはえへハナ「吉そふもねへ(トそこ〳〵したく)「七おめへ又いつくる「吉晩に來らア「七しまツているぜ「吉ウ

ント（はしごばた〳〵わかいしゆ目をこすりながら）「若イ衆へイ是ハお早う（ト名札のついているぞうりをなをす）「七おさらバヨ「わかいしゆ へイおちかひ内ニ（くゞり戸のおと）ガラ〳〵〳〵 犬の遠ぼへ チヽヲヽヽヽ引

右評曰

川柳點の秀句に

やくそくも年ン明キ前ハ蜘の糸

此遊び右に類せりたがいにうわき一通り能でも無し悪くもなし一寸した事より切たがるたち也先ハ通だけがむだ花なるべし

○

世界ハ大見世　客はさむらい
女郎ハへや持　尤も馴染

ひろ遊びの客年の頃廿七八いろなま白く青ひげのはへた大たぶさのあぶらこて〳〵八丈のとびいろ地に黄のかうしじまおなじよふなる下著二ツもへぎ糸おりのおびはないろらしやのたもとたばこ入しろのぶかつかうのきせるさる御大家のはんちう江戸へも両三度目ゆへすこしハあくぬけたなれどとかく國ふうのかんばしつた聲ざしき

おさまつて二ツかされた。いたじめのがくふとんのうへゑまだ白たびをはいたまゝりちぎにかしこまりりうきう扇をばち〳〵とやつているわきに高なハの茶やさんしうやの男太吉なにかわからぬはなしをしている所へ男げいしや染太夫ミとをしのきやくじんをしまいげいしや安次。おたみおちか。おます。おまきなどゝむだをいゝ〳〵どや〳〵きたりしがふとかのきやくを見つけひとりおべつかをいゝにはいろもちろんひよつと一分にもならふかの下心「そめ太夫ヤ是ハ竹さま先ハ一別已來御機げんの躰（このきやく本名。一竹太郎吉をかくりやくして竹さまとよぶなり）今日ハよふお一人さまでイヤおきつい〳〵肝心またくゞりもちと古川やくしとハどふで御座り升（とふるいしやれをいふ）イヤ是ハ太吉さん御苦労昨夜ハ毎度御ひゐきトキニ竹さま大分しん猫でチト藝者共ハなん澁よふかんさとう餅の御旨事で「客ヤモけふハ來られんはづなれどよふ〳〵くりあわせて參ツたゆへちつとも早う歸らんけりやならぬゆへ手まへたちへも無沙汰に致したマア〳〵一ツのミやれソレ太吉共肴をこつちへ出すがゑゝ「太吉へイ〳〵サア染さん一ツおやんなせへ「染コレハ〳〵まづ竹さまへイいたゞきますト（のみかける○太吉ハ染太夫におつかけて）「太吉モシ竹さまお迎ハ例の通りでヤコノお山さんハきつい御もつたい一寸見て參じます左様なら染さん「染おやどへよろしく御たのん申ヤス（太吉ハ出て行）やがて「女郎（廿一二いろくつきりとしろくりきみのあるたちむらさきじゆすへ金糸でたつなみのぬいくろびろうどのすそまわしのうちかけすがたゆう〳〵ぜんと入きた

り)「女郎ヲヤ染さん ト(いつたばかり)「染是ハお山さんありがたうト(ちよいとじぎ 女郎一ぷくつけて客にやる客とつてよこ目でみながらのんでいるよだれたきのごとし)「女郎チヨツわすれた事チどふしたんだのふ ト(ひざを一ツとんとやつてたつてゆくそめ太夫心のうちでハこいつはづすなと思ひながらわざと)「染イヨノ\かんしやくノ\(など〻あわしてやる女郎出てゆくうしろかげを見)染「モシどふもきついちんでござへますおそらく南国の立物サきぜんといゝ面といゝおべツかじやアねへが十匁ぢやア徳用サモシ高かアいへやせんがおめへさんにやア大のびサ 「客(心のうちにうれしく)のさんノ\なかノ\そふハゆきおらぬテ 染「モシ喰隠しハつみになりやすトキニ琉球人ハいつ頃でござります大そう所々に道ぶしんが始りまして大らんちきネ「客多分霜月中端にもなるであろふどうじや風ハひかぬか「染仕合とのがれましたいやもてへけへどこのうちでも半分くらゐ寝ておりますお七風已来こんな事ア珍説だと申ます「染(条ノ誤)なアる時に同役どものうちも定て参て有ふナ 「染イヱそさつぱり入らツしやいません此頃アどなたも御不精で一昨夜坂元で半さまと清さまと御一所で御座イましたツケ「客両所とも能うわくらふじやてまへこの月のはじめの頃じやが三田で見申たがどれへまいツた(すこしかんがへ)「染エヽなるアノ五日の朝で御座りませうあま御前様へ参りましたどのへんでお目にかゝりましたか大分ぐんじゆ故一切(マヽ)心つきませなんだ ト(くだらぬことをあわしている心のうちでハはやく一分くれよかしすぐにかへつてあ

んまでもちませながらもちたてのかゝアのかほをながめよふにさてらちのあかぬとせつちんのおときやくをみたよふにしりをもぢくしている此とき。きやくよふくふとんのあいだより山のたかいひらしやのふたつおりのかみ入レからもぢくとだしかけるよふす　どつこいこゝぞだいじとそしらぬふりでしやべつている）「客サアト（ほり出すしめたとおもひみればかうとくがんの包）「客其薬ハ国元で製す大奇薬で諸病にきく丸薬ダ案一酒の酔風邪などニハ別してだてまへナニおなぞにハイ丶薬ダ「そめへイ（あてのいちがゝりとちがひがつかりこんなところにながいハむやくあつたら目を二条ト一本ばかりきいたこれぢやア元がきれこむとそうくくすりなふところへおしこみきうにおもひだしたよふに）「楽ヤ大へんな事をわすれた一寸いつて参りますト（そこくにたつてゆく跡に客人しやめんにもれたしゆんくわんといふみでのつたりそつたりよんどころなくびやうぶとさしむかいにとうしぜんを上からよんだり下からよんだりたばこもしけからけむのでるまでのみつくしすゞりぶたのはすのあなをかんじやうしたりえてみたりおきてみたりときぐいおしおとにびくりくすれどみなわきへはいるやらいつかうおともさたもなしいまわたまりかねてうたいのりおといふよふなてたゝく此おとにあげしんぞうかけ来り）「しん　およびなましたかへト（はいる）「客（かんばつたこへで）先刻からよびおるに埒の明ん急に帰らにやならんによつて先刻の羽織を出してくれ「しんマアおまちなまし一寸おやまさんに聞申てから「客何ニ聞事があるもんでおいが羽折をおいが着て行にたがとがむるもんでは

やく出せ〳〵ト(あら〳〵しくいうさすがハ子どもでもへともおもはず)「しん　出して上ゲもうすとわちきがしかられまさアナちつとまちなまし「客イヽヤまたん〳〵ト(二人せりあふてろうかへしんぞうひかれながら出る此こへに女郎ゆう〳〵ぜんとなにくハぬかほできたりきやくじんのむねのあたりをちよつととらへて)「女郎もしへばか〳〵しいどふしたんであり升「しん　さつから(マヽ)帰るといつていなまさアナ「女郎ナゼヘ今時分どうしたんだのう「客イヽヤはなせ〳〵女郎「そら程帰りたかア帰してあげまさアナわからねへマアミつともねへそこへはいんなましト(もとのざしきへおしもどす)「客イヽヤどうでも帰る〳〵「女郎エヽサ帰しまさアなモシ竹さんおまはんハ實なしだねへこねへだもなんといヽましたエじつにしみ〴〵つとめたアおもわずに出ているものをナゼそふだねへそら程いやならナゼ男らしくいヽなませんそんなにもにくひかのふト(客人の紙いれきせるをとつてほふり出しおびもぐる〳〵とゝく)「客イヽヤどふでもきかん〳〵女郎「げんぜへ今も下でおかしらしくいわれまさアナ夫もおまはんゆへだ人の氣もしらねへよふにあんまりふざけなますな　今から爰を出て外へゆく氣かへちらりと聞た事もあいますのサト(うわぎをぬがせるもはや客人ぐにや〳〵)「女郎エヽモにくひト(ぶつつり)「客イテヘハ(しんぞうもう大丈夫と小そでをたゝみ　おびかみいれをかたづけ)「しんお山さんひどゐ目にあわせてあけなましにくい竹さんだよふト(出てゆく)「客ほんに帰らにやならぬおそふなるとわるい「女郎おそ

くなつてもわちきがうけあいサ　男とゆうもなアそう邪見だのう

「客そいでもおそふなるとしくじる　女郎「そふしたらわつちが引とつてあけまさアナ

折しも見世で草履札の音ガラン〳〵ガラ〳〵　東海寺の入相ゴヲミミン引「茶やへイお迎で厶り升

右評ニ曰

川柳點の秀句に

もの丶ふのちからで折ぬ女郎花

右の句に類せり此客はたの爲にハ一切ならず只女郎の爲斗りトハ本文にて御推もじ紛蝶の花を戀ふは其花を愛にあらず其紅をなめんと欲なり娼妓の客を思ハ其才を愛にあらず其財を奪と欲なり可恐愼べし

世界ハ大見世　客ハ商人　女郎ハへや持　女房になろふ　しよふといふ中

客年の頃三十位いやみのなきいきでかうとうで女郎にもいつかれるたち　ゆふきのあいみじんのうハぎをぬいでりうきうつむぎのねづみじまの合着おなじ下着さだめてどうにハおなんどの山まいちりめんこび茶ちくぜんの

おびたゞしく〳〵と前ではさみいまてうづばへいたる所たいこもち高なハのとら八げいしやおやま。おむめ。茶や女。あげしんつきそいろうかのわきにともまちなしている　客やがて出てきたるてなおらふ事きよめのおてうづ〳〵などゝれいのもん切がたろうかより中庭を見おろすおりしも夕べよりふりつもりしらゆきまつにつもりしさまいときようあり）客ごうせへふつたじやアねへか「とら八雪ハがもうに似て飛で散亂人ハ白娼を抱て寐てちん〳〵か「客　アハヽヽ（このしやれげいしやへハ一切おらず下ざしきのろうかよりなじみの女郎うへた見こ）「女郎惣さん御たのしミ御逗留でありますか「客よんどころなくサさむうござへやすネちッと遊にお出なせへ（トがや〳〵いつてざしきへきたる　相方「女郎としのころ廿二三いろあくまでしろくなさけなふくみし顔ばせいとうつくしく作者がおべッかでほめよふならちん魚落雁閉月羞花かの月宮の嫦娥ならずバ龍の都の乙姫なるべし實にけいせい傾國の粧ひとも謂ッべし夕べより雪におてられたと見へてしろねりのづゝうはちまきなんにもさゝぬねみだれがみふつかりとしたしま田わげにの山まへ高柳茶じゆすへ金糸と銀糸で菊桐のちらしぬひしたがくむくのうちかけすがた其まゝよぎへよりかゝり来らなのきせるなづゝうへあてゝものおもはしきていいつものとふり大さわぎの酒もり

ウタ〽空がくもれば雪ハおりイら〳〵〽是じやたまらぬあつがんでのめまつかになつてそこらへぶつたをれ〽おこしてやろぞエヽエヽエヽヽヽ引チン〳〵チリンツテンテンツンテツヽントテチリ

チヤン「客どうだ樫随（とら八のはい名）初雪の名句もうかみそふなもんだノ「とら　できますとも／＼初
雪やあれも人の子猪口ひろい（トちよこをとる）コレお山なにをうつかりしているのだ一ツペへつがッ
セへ（トせなかをたゝく）「おやまヱヽモびつくりしたすかねへ虎八さんダヨ（トかうの物のはちをとつてお
つかけるとら八是にてまつさほになつてにげ出し）「とらコレサどふしたもんだ／＼じよせへもなくッて
あやまるヨ／＼「あげしんお山さんたべさしてやんないまし「とらヱゝおんなじよふに覚へているが
いゝこんどから抱て寐ちやアやらねえぞヨ「しんヱヽモふけへきな髭ツ面だよ「とらヱゝ情ねへ心い
きだぞ（ト又／＼さけ事）○客（かみ入よりそつと金を出しつゝんで茶やの女にわたすめい／＼へくばる）「みな
／＼ヘヱヽ是ハありがたふへイよろしう／＼（ト惣おじぎ　客うなづく）トゞ（茶や女チトおかたづけなき
つかけにげいしや三味せんのさんをさげはこへ納め　らうかへつきだす）「とらしからバ身共ハ下宿へ参ッて
休足せん藝者どもコチまゐれヤドン／＼（大さわぎをしながら茶や女げいしやのこらず引とるあとにしんぞ
うあたりをかたづけ火などよくいけているたちまちおとハひつそりかんたゞなみのおとゆきおろしのミぞきこへ
ける客あたりにあるゆのみをとつて）「客コレ一ぺいついでくりや「しん　アイト（つがんとせしが　女郎の
かほをみて）「しん　およしなましナ　「客　いゝからつがッし（女郎よこ目でちらと見て）「女郎つぎな
まし「しん　アイ　ト（一ばいつぐ　客引うけぐつとのまんとする手を女郎きせるにて茶わんをうちおとす　そこ

らちう酒だらけ）「客　とんだ氣ちけへだ（ト小ぎくをだしてやる　しんぞうふきながら）「しん　それゝなましト（びやうぶをおしよせて出てゆく）○客（しばしうでをくみしあんのてい　たばこをのみフトびやうぶの句を見て）「客ナンダ雪の口や不孝ものめがおりどころ成程ナア常平ぜい耳なれた此附あいけふと云今日己が身にしみ〴〵と當ツてきたばかばかしい居續どこでもあるめへか（トひとりごとます〳〵ふさぐ）「女郎夫もいんぐわとやらでありまさアナ堪忍してくんなまし「客手めへマアどうしんだ今朝から藝者が來てもうき〳〵せず己にもさつぱりあいさつなしでいるからにやア何ぞ氣にくわねへ事があらふハヽアわかつたしがなくなつた己だからモウあいそがつきたのだナそうもマアかわるものかへいめへましい（きせるにてはいふきをとん）「女郎なんざますへあいそがつきましたとへアノわつちにネそりやア今さらあんまりでありますト（すこしなみだこへ）「客こつちからきれる氣ハさら〳〵ねへけれど手めへの方からつき出す了簡ならぜひがねへハ思ひきつてやろふハ「女郎そう早速に思ひきられるくらいならこんなにきがね苦勞ハしませんハ此頃じやァお部屋なんぞでもわちきをよんで度〳〵の異見だてまかねへやほうばいしゆにおつうおかしくからまれてツィかんしやくでかわいそふにとがもねへ小蝶に迄の八ツ當り（これふりしんの名なるか）むりざけやひや酒でとゞのつまりハ癪の種外の客への不あしらいはてハつまりとしりながら片時忘レぬいんぐわゆへいけんぐらいでやむならバなんのこんなに

なるものかま(誤)とことがまちがハゞたかでくらげへするぶんさしみ〳〵苦界にあきはてた「客ばかアいうなそんな不了簡なくらげへすれば夫だけにやつぱり我身をくるしむる世ハ塞翁が馬とやら其中にやア己もいつまでこんなでもあるめへハちつと心當な事もあるあれさへむまく出來たらバ茶やの方へも目鼻をつけてさつぱりとむかし語にしようわさ「女郎茶やにもよつ程ありませうむかしハおしもおされもせぬあんまり遊びが花やかすぎ今さらけちも出來かねておもしろからぬ藝者へまで世事をあわせるおまへの氣性チイットたのんだ事もありますから夫さへ來たら茶やの方へも少シハめはなをつけなましほんに〳〵茶やなぞもあんまり現金すぎまさアな「客まだ〳〵茶やも馴染げへに二階もとめずせがみもせずうつくしくされるだけ一倍こつちでつれへのヨ今日のながしだつても出來た義理じやアねへ事ダこんな事を思ひ過すとアヽいつそモウ死たくならア「女郎すいも辛もとふッていなますゆへ一倍きがねが深ひのサモウ〳〵氣のめへるよふナはなしハやめなまし「客べらぼふづらめ手めへの方から言出してやめなましもよくできたなんの人間五十年だとんぢやくする事アねへトハ云物の己もいつ迄馬鹿も出來めへ三十と云つらア下て遊女ぐるひもばか〳〵しいハ他の息子や若物に異見でもしにやアならねへ「女郎ホンニサ人の異見ハいゝますが我身の異見ハ出來ねへとやらで其身になつて見ないければわからないのサ「客調度醫者が人の病の療治ハすれど己が病にこまる同理ヨホンニ醫者で思ひ

出したがアノお袋の病氣アどふだ　女郎「こねへだ便がありましたつけちつとハいゝ方でありますとサ夫というも兄さんの道樂からおこつた事サ「客まだやまねへかの丁度おれといふもんで兎に角親へ苦をかける不孝な事たアしりながら思ひきられぬとハ惡緣だろふヨ「女郎今さらなんの未練らしいぬれぬ先こそ露とやらでありまさアな「客もう(ウノ誤)かつなつたらあく迄もだアヽさむくなつた

評ニ曰

川柳點の秀句に

おもしろくなり深くなかぐちになり

右の句にて味ふべし斯の如くになりてハたがひに見へもへちまも一切かまわず互ィにためを言もし言れもするなれど自然と女郎ハ外の客がいやになり一圖に思ひこむ物也斯なりての上ハ地者とハ異にして多の中での間夫なれば中／＼別なものなりあいがたき傾城の實に逢時ハ是運命の盡る所か落花心有時ハ流水何ぞ情なからんたとはゞ清き水ありとも(マヽ)散る花ハ誘引離し世の中の野暮闇して悟れ

夜色のかたまり跋

友人玉守机上を膳とし筆を箸とし硯を椀として夜色のかたまりと題せし一ツの小册を編ぬ予けみして謂て曰ア、美味かなうまいかな京傳已來小册はすこしく媚て千代形とよび敵討やら人情やらくわん善ちやう悪旨として義太夫本やら讀本やら洒落本とよぶもののならじ然るにたま〳〵たまもりが綴しは是洒落本にて殊に世界ハ南國のなんにもいらずかうの者ひもじいときにまづい物なく花も實も無き山吹の煮花をヅブトうちかけて此本のはしに茶づるものハ

俳風狂句の呑仲間　二日酔のあした
紫金錠のむ白湯を　硯にうけて
夷講の懸乞を恐る　冬籠の室に

寶玉庵

三箱しるす

孝のため
うかれくがいの
品川は
東海道の
こゝも
親じゆく

算亭主人前著目錄

笑談富士家產　十二冊

辰巳人情 儘の川　三冊

人情 思案の外 小糸佐七・小雛半兵衛　全部九卷

人情

南巷の夢

初編　三冊

來春　出來

こハ南國の賣色をとりくわへくわん善てう惡のむねを專らとしてあわれにおもしろき中形のよみ本なり

雜文穿袋

全

偐紫先生像
北尾重政画

攀二肉林一ニ浴二酒池一ニ

驂ニシ二鸞童一ヲ駕ス二娼妓一ニ

平生晝寐夜寤

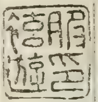
自ラ號ス二似山一ト果シテ是ナリ

雜文穿袋序

夫北方曰吉原南方曰品川東方曰深川西方曰新驛四夷制度不同或鬋髮文身終日不火食粒食者有焉皆其國之風而服飾和味亦各異矣賓至其國則使女子應對設美酒嘉肴以盡慇懃能使客心醉云唯有言語不通嗜欲不同自非寄象鞮譯何以得通其志乎似山先生周旋四方手取鉛槧以記方言膽釋其意遂爲一卷後進年少熟讀此書則於四夷

之事其猶示諸掌乎

倡門　服袪遊撰



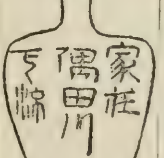
雜もんせん袋序

雛妓問予曰　書物をよむといひす。鼻毛をもよむといひすが。はなげと書物ハおんなじ物かへ。予曰。そのやうなあとなひこといはしやんすのがなをいとしひ。とハ手めへが謂哉。夫書の人に益あるや。ちよびとよめば意氣たんとよめばおそろ。出せば高慢。出さねバおくゆかし。鼻毛はこれに異なり。延ればどうか馬鹿らしく。ぬけバいたくて涙がこぼれる。むかし頼朝公の近臣鼻毛のびたり公命じてその妻を出しむ。婦の德それ可不愼哉。

イヽエイナア　わつちやそんなことしりいせんが。學とやらのある客人ハ。いつそ雅馴なことをいひなんすよ。おつなはづ〳〵ミんな孔子のなさつたこと也

今度来る時おつな書物をやらうか。それより爾来。くんなんすか。くんなんしで。せがミころされ大こまり。朱樂館主人此書を著す。きやつが所謂おつなとなり。讀書に益あり。鼻毛に益あり。さてハおんなじ物じやよナアと兩手をくんでこれに序す。

寶毛子識



自叙

むかし神田といふところに。公冶長といふ人あり。軒に集る雀とすゞめ。紺屋糊はなめたひがねぢがねに舌きられんことをおそると。相談せしをさとれるよし。それから見てハ口ばたに。むしやくしやはえた毛唐人も人間に相違ハなし。何ぞ詞のかよはざらんや。さらバまつかく角な文字。ちんぷんかんのかんがへて。かの俏語のかはりに用ひ。しかつべらしくしやれんとて。口から出るはやたらやへち。絲瓜のかはのだんぶくろ。そこらこゝらをさがしもとめ。虎をゑがけバそのまゝ猫。爪おしたてゝかきあつむるとし

かり。

安永八亥のとし

正月穀日

朱樂館主人題

雜文穿袋

昔時江都楊柳橋の傍に似山先生といふ人有先生姓ハ高名ハ慢字ハ放蕩ーーハほうらつなるをいふ浮世しつかり名聞半分鄕黨の年少を聚てもつぱら當世ちよ〱らの學を敎ゆ一日先生恍惚として隱几て座すちかきわたりに住居をなすこはいろ物まねをする奴の此藏といふ者來りて墨水春を献ず先生曰何が故に我に是をおくるや此藏曰此酒をきのふもらいましたがわたくし顏に似合ぬ大の生下戸酒やのミせに雨やどりをしても眞赤になりやすかういふものもなへものだが打捨置て酢にしようよりこれハ先生へ上るがよいとやう〱今朝氣がつきましたといへば先生拜して受此藏あたまかきながらもてあまし物

を上ましたに御慇懃なる御礼いやもう伊丹諸白だぞ先生曰むかし夫子に魚を贈るものあり是を賣んにハ市遠く極暑の時分くさらかさうよりハ聖人に献ぜんともて來るを孔子拜して受いはんや墨水の美酒我豈敢不拜哉今朝入門の束修に（ーーハ入門の礼物也）巨口細鱗（ーーーーハすゞき也）なるものを得たり肴あれども酒なき事を嘆じて居た所に汝われに惠に以醇醪さらば一杯傾んといひもあへぬに此藏早速厨房に行て料理をなし鱸魚の鱠をもつて酒をすゝむ先生二三椀のミてわれ今朝の腹合墨水にあらずバ不醉松江にあらずバ不飽とつやくく見て橙絲縷更鮮也（橙だいくくなど也なますのこと也）足下の調理にあらずんば墨水松江ありといふともこれを如何とほくく醉眠をもよほす此藏もしくくとおこす先生

ウ、、、ウン　と目をさましはて　とろ〳〵やるうちふしぎやな腹の上に木はへしげり胸のあたりを一人通ると夢見たがこれハきはめて瑞夢ならん　ア、それよ木ハ即十八也一人通れバ大の字也又通るとハ通の事十八大通のしやれ我胸を出ずといふ天の告と覺へたりと又一二杯ひつかけとろ〳〵眠れば此藏曰今朝先生つかれ給ふ事の何ぞはなはだしきや先生曰居われ汝にかたらん曩昔菴崎の孫四郎が許よりわれに双鯉魚を贈る腹の中に尺素書あり　古詩ニ客從二遠方一來遺二我双鯉魚一呼レ童烹二鯉魚一中有二尺素書一　披見るに蘭酒が手紙也　らん酒蓋門人なるべし　孫四郎が許にてぐいのミのそれよりそれといふ所を不佞にはからんとなり不佞さきに北里にいたつて薜蘿館によぎるそれより仙禽樓の忠公が家を主とす　あるじとするとハ共家に宿す也　居る

と三日にして去ル また燕市街の扇樓へ登て花扇に見ゆ 樓へのぼるとハ女郎買に行也 花扇われを容ず 容ずとハ言かまわぬ也 又去て中近江屋の半婦に過る半婦わが賢なる事をしらず 賢ハ今いふ通也下ミな是に倣へ 道をこなはれず深田に入て蛙をふまんやいやなんでも飲でから策ハ定むべしと忽一葉をうながして孫四郎が許にいたりて蘭酒に過酒半酣にしてはや五鼓也 夜の五ツ時をいふ サア行べしと纜を解て船を乗出せばほどなく堀のさんばしへつく船宿の阿叔出むかへて あしゆくハ弟也あにさんなどいふがごとし 這一向ハ御見へなされませぬが御機嫌よふといふ則劍を脱し一茶を吃し 茶を一ぱいのみて也 直に長堤を過て大門に入れば花柳の繁榮にとんと風塵をわすれて仙境へ至し心地す 風塵ハ浮世のことわざ仙境ハよき世界也 それから大門の可礫が所へ行バ老婆出て何やら愛相をいふ

酒肴吸もの種〻此所へ出る　哥妓一兩輩携て哥妓ハ女げいしや　兩〻三〻間大の酩酊老婆小厮に何が私語と須臾にして丁香樓の雛鶴從容として出きたる蘭酒が相かた也　段〳〵數盃かたむけ蘭酒を東道として東道としてとハ酒におぶさる也　雞舌樓へ登不佞も何とかいふ妓を携へたが沉魚落雁ーーーーハ美人をほむる詞ぞ　頗美にして艶也　左傳語　西施毛嬙といふともおさ〳〵三舎をさくべしせいしもうしやうハ古の美人三舎をさくるハその美人も及ぶまいといふ事である　不佞を誰にか似たとかやらいふて欣躍のようすその歓待ほとんど興に入ましたあちこちするまに更酣也私房〳〵へ引とり茶屋の小厮に鷄鳴に迎に來るべしと云付て鴛鴦の衾女郎の夜具也　ぐすと着の寐るとほどなく傾來りてもうねなんしたかとたばこを吸つけさし出し今宵ハ寒ふ御ざんすと

傾蓋宛旧識に等し（舊識ハなじミのことである　傾蓋ハ始て逢ふたることぞ）世上のはなし何やかや種々はなして火坑へ零落したる來由をかたり薄命をなげく芳容まことに梨花帯雨（梨花帯雨ハ美人なげくかんばせにたとふ）たる光景いやもう詞にも述がたし了鬟にたばこの火をとりよせ一ぷくのミ又一ぷく吸付て差出し

を用ひければ　呼〻的吳牛　がごとくしかも蔡妃蕩舟趣あり　左傳語

既に　初見から赤心をあかす

不侫を有趣人とおもふ樣子じやが所詮楊花水性かと疑ふと見へる不侫も最

初ハいろ〳〵食言したが　食言ハことをはむ也そら言を云也　われ當輕薄の兒にあらず何ぞ虎狼の

心をいだかん終にハ寸丹をあかして來た兎角するうちはや五更天茶屋の迎

ひに籃輿を命じて夜深に歸らんとすれば馬鹿らしいまだはやう御ざんすと

いふいや所詮はやくかへらねばならぬ身のうへ幾日にこようと再會を　うらやく

そく約して來たが月落鳥鳴て　曉のけしき也　はや大刀頭の　ーーーハ劍の飾頭に環有かへるといふ事にたとふ　場に

いたればそんならあさつて來なんし待てゐんすといふ言なを耳にありて戀

くゝとしてやまず今朝の空合雨となり雲となりてたゞかの神女がとのミ思ひて（神女ハ昨夜の女郎をさす）わすれがたし此藏曰宣哉（マヽ）きなんしの耳にのこれると扨そのきなんしといふ國あれば又きねへといふ國有詞ハいづれをか雅とせん先生曰きなんしハ則華音也（華音ハよし原のことばをさす）きねへハ則番語也（マヽ）（番語ハおかばしよのことばにたとふ）そのうへに何かわからぬかきくけこのあいとばハこれ南蠻鴂舌也（――――ハ異域の語通ぜざるをいふ）我賢なるを以てこれを說ども語かよハざればほどこすに術なし今汝博望侯にならつて（――――ハ漢張騫諸國夷狄をあるきし人）ひろく所ゝを周旋して夷狄の語も又しんぬべし（夷狄ハをかば所をさす）この場にいたつて我汝をさると遠し此藏曰先生博學でよく事を解す可謂通儒矣小子（自をさす）又物まねをして似ずといふ所なしこれから先生のちんぷん

かんを覺へて通儒のまねをなさんしかしかた假名もよめませぬからいかゞ御ざりましようかといへバ先生當世の人物かたかながよめれバ一かどの學者平假名さへよめればずいぶんまいることで御ざるさようならバ先生その詞をくはしく敎へ給へ奴不敏なりといへどもむだになさじ先生曰小子しるせわれその語をつたへんと白烟管をとり直し口づからおしゆ此藏再拜して先生の銀きせるにハよし及ばずともわれけふよりして白ミながしくらいにハこぢつけべしと採筆て鼻紙のはしにしるす似山先生咳ばらいして扨これからお噺申詞をあらましお覺へなさるゝと詩文章家のやからと御出會の砌はなしが出來ますまつた手紙などへもちよびとおあいしらひなさるがよひ

倡家といひ　倡門といひ　青樓といふゝな女郎屋也　倡妓と云ふハ女郎のこと　花娘おなじ　粉頭ふんばりなどいふがごとし　時妓はやる女郎　困妓うれぬ女郎　村妓おかばしよのいたつてやすき女郎也　猱旦女郎のあだな　蒼妓ハとしま　雛妓しんぞう　姐妓あね女郎　橛丁おやかたくつハ　老主管まハしかた　老婆おかさん　老鴇ごてさん　阿兄あにさん　幇間たいこもち　牽頭同　歌妓女げいしや或ハおどりこ　また地女は　夫人おくさ　未亡人後家　寡婦同　阿娘むすめ　處女同　當壚女料理ちや屋又いざか屋などのしやく給仕に出る女也　絶世うつくしきこと　國色同　佳麗同　佳人びじん　粧資持參金　楚腰とハほそいこし也楚王やなぎごしをこのミし事　新粧けしやうしたて也(假名マヽ)　雅素地がほ　脂粉べにおしろい　時勢粧當世風　玉簪かんざし　金釵同　玉搔頭同　象揥くし　雲鬢びん　蟬鬢とうらうびん　倭墮髻さげがミの事からでもしつています　呉姫　越豔いづれもうつくしい女の事　青蛾よき女　青春わかいとし也　銀牙しろいは　皓齒同　捧心西施といふ美人つかへのおこりし事　花燭婚礼

新婚同　畫眉ひきまゆげ也　的ほうべに也これハもろこし漢の御殿にて女中怨曠房になりし時ほうべにをさしてしるしとす　金閨　紅閨

洞房ゝなねやでござる　空房女房なし　金蓮歩　又　邯鄲歩　などゝいふハ美人のあるきぶりをほめていひます女郎の道中の事也

月下老人むすぶの神　媒妁なかだち　淫蕩しつぶか　絃歌ひいたりかたつたり　素手手のしろきと　朱

唇くちびるのあかき事　包定傾城をあげづめにすると也　包月同　從良うけださるゝと　連椿かいつゞけ　科子やま

ねこ　私窠かくし町也　打絃地いろ　妨占さしある也　情郎いろきやく　浪子うはききやく

巧計手くだ　調これハいまいふてうすと同意なり　村客いなかきやく　倫期客ある女郎よこにくると也　孤老大じん　合意

人きのあいしきやく　忤情客氣のあハぬきやく　串門子つねにいりこむきやく　復爐たちかへりのきやく　跳槽きれると　梳

籠ゝづあげ　上頭同　賣奸ほかごゝろ　虚工むだこと　煙花榻あげやのざしき　遊冶郎色

男　噴碎客（マヽ）むつかしい客　間壁となり　隔壁房となりざしき　鬧熱（マヽ）にぎやか　冷靜さみしい　乾

浄きれい　醃醋きたない　文雅きやしや　風流だて　感激ありがたい　戯弄なぶる　兒戯あどけない　嘲咲さけすむ　看破あいそづかし　誹謗おろす事そしる也　爭口からかふ　奸曲しよにん也

看重人をたてる也　看輕人をやすくあつかふ也　商議だんこう　酌量りやうけんする也　料理わけをつける　隄防用心のかまい也　隄調さしづする　明白らちあく事　出神きぬけ　説謊ちやをいふ　乖巧いきすぎ　掛念（マヽ）きがゝり　生疑うたがいをおこす　猜疑うたがふ　生疎かれ〴〵になる　費心心づかひ　力行つとめる

仔細ねんのいると　穎悟すい也　愚鹵やぼ也　伶俐りこうもの　溫柔おむく也　奢侈おごる　高傲大づらをする也　とのゝをする事　傲慢うぬぼれ也　寄書ふみをやる　致意とづけ　沒信たよりがない　抱仕他人にだきつく也　側声こえをたてる也　慚愧をゝはづかし　走風かくすとよそへもれきこへる也　作色にんそうする事　冷咲さけすゝわらい　耐久ながくこらへる　不妨だいない〳〵　無奈しやうとがない　喫罵しかられる　中計

だまされる　苦辭（マヽ）いくらくどいてもがてんせぬ也　氣苦人人をしやくる也　不諾がてんせず　決不肯おとりあけがない　寃

轉やりくり　不喜歡すかない　空口說むだをいふ　不好說いふにいはれぬ　推落去つきだす　唆

使こしをしをするを　周章あはてる　狼狽うろたへる　可憐かあいく思ふ也　怨恨うらゝる　思想

ほれる　圈套（マヽ）いかさまにかけらるゝなり　支吾ちよく〱らをいふ　不必それにおよばぬ　約定やくそくする

爽約やくそくをへんがへる也　失約同　寧可いつそのこと　良計よいはかりこと　奸計いつはりのはかりこと

闊礙さはりあること　插口さしでぐち　封口くちどめ　送人情人にものをたのみさきへ礼をするをはなぐすりといふ也　推

不知しらぬふり　欠情ぶさた　分手わかるゝ　敬盃さかづきをさす　領盃さかづきをいたゞく　猪

觜鬭わるくち　孟浪之言むだをいふ　莊言左様しかれバ　冷語さへたはなし　煙花使者かよふ

かゝ　信宿居つゞけ　私所所かくす所也　寛毬ゆるきをひろくいふ　緊毬せまくかたきをいふ

また芝居のことハ戯場といひます

○綵棚さんじき　春色臺ぶたい　戯臺同　末たちやく　正生くじつことあらこと　小生わかしゆがた　淨實あくいろあく　丑かたきやく　正旦わか女がた　小旦むすめがた　老旦くはしやがた　捷譏どうけがた　當場たてもの　孟優座もと　脚色しぐさ　白口上いひ　一齣一トまく也　部目かへ名のしだい　唱うたうたひ　扮出では　戯房がくや　保兒とうどり　介ミぶり　忽然指出せりだし　孌童かげま　紫帽ぶたい子　破體わかしゆのミづあげ

また博奕の事ハ

○袁彥道ばくち　骨牌かるた　紙牌同　櫃坊局ばくちうち　賭場どば　呼盧手をたゝきさいの目をよぶこと　樗蒲　奇偶てうはん　負進はごをせおふ事　馬こま也　博徒ばくちうち

扨これからちと酒にいたしましよう

○杜康 といふハ酒をつくりし人の名也すなハち酒をとかうといひます 竹葉 酒をつくる時酒のうちへ竹葉をいるゝことありよつて酒を竹葉といふ 梨花

洛陽梨花の時をもつて酒をかもす すなハち酒の名とす 出門倒 透瓶香 みな酒のこと也 般若湯 僧家酒のことをはんにやとうといふ、はんにやこゝにハ智恵と訓ず 氣違水をなぜはんにやとうと申までござるか 濁醪ハよくない酒也 村醪地酒 醇醪よい酒 魯酒うすき酒

蘭陵 新豐 みなよき酒也伊丹池田などいふがごとし 麴生といふハ葉法喜といふ人道術を行ふ大勢よりあいし所へ見しらぬ人きたれり名をきくせいといふせつほうき劍をぬいてこれをきるとたちまち樽となれり人ゝ此酒をのみてきくせいが味わするべからずといふこれによつて酒をきくせいと云 家釀 手づくりの酒 海量とハそこぬけ上戸也 法華經普門品に九年酒以上宿酒皆無量と御ざるかと覺へましたがこれハ不佞がひがおほへかぞんじませぬ 痛飲 大酒のこと 潦倒ぼうだら 倒載

山簡といふ生酔うしろむきに馬にのりし事 解酲むかい酒 酣暢とハほぎ／＼とゑふ也 如泥後漢の周澤が故事 老酒古酒 新釀新酒 流霞さいつおさへつ 飛觴同 鸚鵡 玉霞 金屈巵みな盃也 荷葉杯これハ蓮の葉のまんなかを針にてつ

き葉からのむ也味きハめて芳し人にさす時ハくきを四五分きりてさす也　蕉葉飲これハ東坡が兄子明酒をのむと三蕉葉にかぎるけだしいにしへ蕉葉盃有　椰瓢やしの

さかづき　酔如泥べくさかづき　金樽　青樽　清樽えなたる也　酒肆　酒家　酒楼　酒壚　旗

亭えな酒屋也　酒旗酒ばた也酒ばやしの事

扨また食物をちと申ましよう

○上饌　珍饌えなよきめし也　白粲しらげたる米　脱粟二番づきをせぬ米也　粗飯まづきめし　卓子しつほく　卓袱同

野芹やさい　菜羹精進物のあつもの也　蓴羹ぬなハのあつもの　玉尺なまうほ　乾鉛錘かつほぶし　枯魚ひもの　馬

面魚かつほ　松魚同　鉛刀魚同　比目ひらめ　棘鬣魚たい　章魚たこ　海参なまこ　石

决明あはび　華臍魚あんこう　海鰌くじら　泥鰌どじやう　西施舌えるくい　鱠残魚し

らうほ　河豚ふぐ　賽河豚ふぐもどき　水梭花僧家にて魚のとをいふたこをてんがいといふがごとし　膏粱　滋味

うまいもの 別淄澠（淄と澠とハ川の名也易牙といふ人あんばいしやにて此川の水の味をのミわけしと也 あんばいのくはしきことをいふ） 海霜鹽 竹胎たけのこ 角黍ちまき 廣耳きくらげ 仙餌まんぢう 豆乳とうふ也入道のくひものゆへひつくりかへしてとうにうといふでござらう 西施乳 馬乳いづれも葡萄のこと也西施のちゝといひ馬のちゝといひますが。せいしハちかづきでござらねばどんなちゝかぞんぜぬが馬のちゝにハよくにました 洞庭柑橘 香實かや 胡桃くるミ 栗子くり 仙卿もゝ 玉實なし 雪華むめ 楊果やまもゝ 氷團雪なし 水晶すいくは 甜瓜まくハうり 胡瓜きうり 越瓜しろうり 茄子なすび 番南瓜かほちや 甘藷さつまいも 胡蘿蔔にんじん 蘿蔔だいこん 雪花菜おかべのから也 ねだん不相應にいきな名をつきました名ほどあつてすこぶる風雅なものでござる 陽羨よき茶 佳茗同 香茗同 だん〳〵これをいひたつればあまりくひ物で手間がとれましよう是ハ御養生心でもつきましたらそのせつ御せんぎなさるがよい さて人倫の事をおはなし申さふ

○毛詩に　桑梓と御ざるハ父母の事でござるすなハち大指と小ゆびとにたとへるやつでござる　高堂家大人也父の事　北堂　大

夫人　大孺人などゝ母の事をいひます　泰山しうと　細君妻　豚犬わが子をさしてひ下の詞でござる　伯惣領　叔

二男　仲三男　季四男　侯伯大名　大夫家老　圉人むまやべつとう　監門門番　閽人同　抱關

せきもり　角觝すまふとり　食客いさうらう　嬖妾氣にいるの手かけ也　嬖臣しゆつとうの家來　奴隷下男　婢下

女　孩兒おさな子　家僮めしつかい　里正名主　五甲五人ぐみ　麒麟兒利口な子也　搢紳先(マヽ)

生とハきん〳〵せんせいといふ事でござる　丈人目うへの人をさしていふ　同僚同役　商客あきんど　遺遊へやずゝ

倅同　友于兄弟中のよい事　家累やくかい　同堂いとこ　庸人やとひ人　痴漢ばかもの

鮑知これハ中のよい友で御ざる管仲鮑叔牙ふかくまぢハりし故事　高粱豎子金持のやくにたゝぬ人をいふ　任俠男だて　浮

屠氏出家　俳優侏儒狂言やくしややうのもの也　新知近比心安くつきあふ人　崑崙奴くろん坊　瞽者めくら　姦

夫問夫　花子こじき　仵作ゐた　さて〳〵御退屈でござらうまづ一ぷく御あがりなさい此藏たばこのミながら御とこの御花ハ梅そうに御ざるがはやう咲ました先生いやあれハ唐花でござるあのとめの寒菊と申ものが雪霜を凌で咲ますがやさしいものでござるナルホド〳〵そばに御ざるハ琴さうにござりますが先生あそばしますか　イヤ琴ハひさしういたしませぬそれゆゑ絃も御ざらず陶淵明が無絃琴といふものでまことの長物で御ざる此藏うなづきあの陶淵明といふ人は酒ずきではござりませぬかなるほどおもしろい酒のミでござる首にかぶつてをるが漉酒巾と申て酒こしでござる　種秫田と申て田地酒をつくる米をつくつた男でござるむだなやつらに折腰よりはひつこ

んでのむがよいと五斗米を辭しました五年米は切米也宦職をすてし事也しかしそれも空囊では

いかぬ事でござる空囊は錢なき事也　此藏さてたゞいまの跡をもそつと承りましよう

先生もそつとおはなし申さふか手紙文などの事は

○魚書　魚封　尺一　尺素　尺牘　竿牘　寸箋巾などゝ　彩翰　朶雲　雲翰

瑤函　雲章　雲牘などゝ人のもとよりよこせし手がみをさしていひます　又　鱗鴻などゝいひ　莊尺などゝいふハ莊敬情修ㇾ書故事有

書いろぶミ　貴閤様御家内　萬福御機げんよく　相思御ゆかしく　加餐折角まめでござれなどゝいふ意也　自玉

自愛いづれも上におなじ手紙の末にかく也　足下貴様　不佞拙者　僕同　尊誨如仰　疎逖とをく〱しき也　候ニ起居一

安否をとふなり　無恙無事　期ニ面晤一とハ期ニ貴面一といふ事　咫尺千里御近所じやが間違て御目にかゝらぬといふ類の事　誦一

采葛一詩経一日不ㇾ見如ニ三秋一兮とあれバ一日あはねバ三年もあはぬ心地する事をいふ　すべて尺牘の事ハその書たゞとりな

がいくらも御ざれバ追而御らうじろ　また會合のことを少々申さん

交臂ひぢをまぢゆるとハ出會する也　握手これも同意　故旧ふるいなじみ　相識ちかづき　一面識一度近付になつた斗の人

初會きりでうらにゆかぬにひとし　交芝眉人に出あふ事也　覩眉宇同　知己懇意の友　同人　同遊　同盟

同袍こな友だち也　雉檀ちかつて朋友交を結ぶこと　斷金交内外懇意のともだち　刎頸交同意也　廉頗藺相如が故事　御李

とハ大通にしたがつて遊ぶ也李膺が故事　登龍門大通の仲ヶ間入をするなり　夙愛むかしからなじみ　心醉とハ大通に逢てその氣性にかんしんして

酒に醉たような心もちのする也　莫逆友中のよい　面落　盡レ歡みな一座して面白く遊ぶ也　投轄とハ陳遵といふ人客のあるたびに客の車の轄を井

戸へ打こミ客をとゞめて酒ゑんをせし故事あり朝かへらんとする時けいせい羽織はながゑ袋などかくして客をとゞむるにおなじ　設榻陳蕃といふ人徐孺といふ人のためにに榻をもうけてまち

し事有　枉顧御來駕などといふがごとし　信宿居つゞけ也　雲談とハ通のしやれるをいふ　十日歡むかし平原十日歡とてけしからぬながい

居つゞけありしよし　眼中人　意中人氣をしつた人なり　聚德星晋の陳寔といふ人荀淑といふ人のもとへゆくつれて行し人もちそうをする人

もゝなよのつねの人にあらず時に太史奏していはく徳星天に見ゆ是五百里の内に賢人のあつまる事ありと

乗ㇾ興　王子猷といふ人夜雪はれ月おもしろかりしかバ友だちの戴安道をとハんとて酒をのみてたちまち舟にのり山陰より剡渓といふ所へいたり門のきはまでゆき興に乗じてきたりしが興つきければかへらんとて内へいらずにかへりしとあり

知音　伯牙よく琴をひく鍾子期よくきく山を思つてひく時ハ、しやうしき、よい哉峩々として泰山のごとしといふ流水を思ふてひけバよい哉よう〳〵として江河のごとしといふ

あらましか様な事でござる此藏筆を置く間なく段〳〵と書つけながら御庭をあるきますハ犬でハござりませぬかぶたで御ざりますかととふなるほどあれハ家猪でござる此藏そんならぶたを家猪と申ますかと書付れバ生類にもいろ〳〵雅な名がござる　ちとおはなし申さふと

○猫王明の代猫のいちもつを猫王といひました　猫兒など丶申事もござる　麒麟猫と申ハ鼠とらずの事　夜蟲鼠　大蟲虎　蠅虎子はいとりくも　豹脚やぶか也きやつが豹の皮のもゝ引をはいたやうな足ゆへ名づけたものでござる　蜈蚣むかで　蚣蝑いなご

地龍ミヽず　堰龍うぐろもち　屬玉白鷺　丁子蛙かいるの子　狻猊獅子の類也香炉の獅子ハミな狻猊でござる
壁錢ぜにくも　四脚蛇とかけ
このたぐひあげてかぞへがたし雅な名でござらねば　おなぐさみにもなりがたし追々かんがへて御はなし申ましよう此藏この類さぞござりましようがこれハ追而の事扨あのむかふに見へます大木がさけてをりますが雷の落た木でもござりますか　ナルホド〳〵　その雷おちかゝりし木を霹靂木といひます此手水鉢の下にある雪の下といふ草を虎耳草といひとらのミヽに似たらしいかたちで御ざるすべりひゆを馬齒莧と申がなるほど葉ハ馬の齒といふ物でござるとかく唐ハ見たてが上手でござる　此類ハ追而の事あまり御退屈で

も御坐らうから部わけなしにこれから出放題におはなし申ます

○莊衙やしき　別莊下やしき　別業同　精舍　香臺　香刹寺の事などゝ申ハみな　井里いなか

僻地かたゐんじよ　雲母碓みづぐるま　水碓同　十字街四ツ辻也　僑居借家　賃房錢やちん

典舖しちや　典物しちもつ　阿堵物ぜに　孔方同　杖頭錢百文なり阮宣杖のさきへ錢百文かけて日〻出あるきし事ありそれ故二百文ハ二枚頭三百文ハ三枚頭などゝいふ　路費路用也　朱提銀　方金金壹歩　碎銀まめいた　貼錢つりの錢也　南廷南鐐也東鑑に出たり　當四錢四文錢也當四錢一鏹といへば四文ぜに一本也　子錢家金かし　借約ハ證文　券書同　表證證古也　息利そく　一圓一兩也　一天同　一地壹歩也　一方同　會計勘定　經濟しんだい所たいなどの事也　稍食切米　月俸扶持方　采地地行所　四寶紙筆硯墨なり　管城子筆　毛穎同　豪家

富家身代よし也　寒素貧賤　英雄人にすぐれし人　豪傑千人万人にすぐれし人　鈍物にぶき人　駑才智

悪なし　老實りちぎ　僥倖こぼれさいハゐ　綽名　渾名いづれもあだ名　紀律おきて　遺業家とく

連城ものゝ直段たかき事をいふ秦十五城をもつて璧にかへんといひし故事　廉直段やすきこと　上直當番　下直あけ番　心胸

磊落きしやうひろくわがまゝなる事　意氣慷慨いきぢたて引などいふがごとし　意氣揚々したりがほに一ぱいなつらをする也　眄睞見

廻す也　睥睨高き所より見おろすなり人をミくだすを人をへいげいすると云　顧眄ふりかへりミる也　仰慕人をしたいのぞむ也　點頭うなつく

蓬頭らんびん　跣足すあし　空心はらのへりし事　亡命かけおち　躊躇たゞずミやすらふ　佇立たゞずむ

豪具おごり道具也　雅馴むつくりとしたる也　強禦權門也　解褐浪人より召出さるゝ也　叔世後世也　胡祝彿

經也　賽御禮參也　鹵簿行列　書淫書物ずき　目睫まつ毛　循覽とくとものを見る　胡做了うさんくさい

といふ事　襏襫雨具　月離畢雨空也ひつハ星の名　南箕巣なんきハ星の名風のふく事　房星馬星也馬の事をいふ　河魚

腹疾はらのやまひ也河魚ハはらはやくいたため也　疥癬患そとしたるたむしなどやうの出來物也さしてくらうにならぬうれへにたとふ　腹心疾むつかしき病

也身ニかゝりし甚キくらうにたとへていふ
疾在二膏肓一左傳の語 これハ平愈せぬ病也
錐脱レ囊毛遂が故事 人のきりやう目だつこと也
褥（ママ）食 早朝に食するを也
蘭闍ミミ ゑびすのことば人をほむる事
喝采 やいや〳〵などほめることば
敬服閉口〳〵などいふことば あやまつたといふがことし
包袱 ふろしきつゝミ
完璧 物をかゑすを也趙藺相如秦の國へやりし玉をとりかへしまつたくしてかへりし故事□□（返還カ）などいふをばにつかふ也
珠履 りつばなるくつ
木屐 あしだ
行厨 べんとう
行李 旅の荷物こり也
結草 恩をむくゆるを
啣環 同
袨服 よき衣服也
袨服遊二倡門一とござるハよい美ふくにて女郎かいにゆくをでござる
怪哉 心よいを也氣のあつた友などゝ出あひ興に入て一ぱいに遊でこゝろよき事也
欠債 借金
討債 借金こい
算還 さん用してかへす
窮鬼 びんぼうがミ
旧債 ふる借金
當東西 物をしちにをくを
没當頭 しちくさがない
現金子 げんきん
價貴 ねだんたかいを
價賤 ねのやすいを
討價 かけね
貴恙 御病氣
賤恙 わたくし病氣
貴庚幾許 お年ハいくつ
賤庚 自分のとし
不肯除 かけにハうらぬ
三十六計走爲二上計一 にげるに手なし
花無二百日紅一人無二千日好一 花にながいさかりなく人ひさしくむつまじからぬを也
畫レ虎畫レ皮難レ

畫レ骨知レ人知レ面難レ知レ心うハべハしれても内心しれぬこと　大丈夫一言駟馬難レ追男の一言相違ハないといふこと　種レ

（ママ）
瓜得レ瓜種レ豆得レ豆善をすれバよいことがあり悪をすれバわるいことが有　さて時令佳節の事を少し申さん

○端月正月　履端元日　椒觴とハ元日柏の酒をすゝむに山椒を盃にいれてのむ也　人日七種の日をいひます　勝花とハ此日つくり花をミる事がござる　花月二月　春社春の社日也日本でハむかしからあまりかまいませぬ唐でハ紋日でござる春社ハ立春の後五度目戊の日でござる　新火清明の節でござる　改火同　桐月三月　脩禊禊ハけがらハしきとむかし一日三女死す水にのぞんで不祥をはらふ盃を水のうへにうかめてのむこれを修禊といふ則曲水也　寒食歳時記冬至より百五日め也　梅月四月　蒲月五月　午日端午　浴蘭午日蘭湯を以てあびます　蒲酒菖蒲酒でござる　暑月六月　河朔飲すゞミなり　瓜月七月　乞巧七夕いろ〳〵の菓をそなへて願ことをこふこと也此夜針に糸を星あかりにて通すことあり糸針に通れバ願ひ叶ふと也　穿針同　蘭燈燈籠なり　日本にてハ七月これをとぼす唐にてハ春上元にとぼす也　火樹同　走馬燈まハり燈籠　中元正月十五日を上元といひ七月を中元といひ十二月を下元といふ　桂月八月　観濤枚乘十五夜に廣陵といふ所にて波をミしことあり

十五夜月此夜ハ青樓へのぼるがよふござる庾亮南樓へのぼつて月をミる興淺からず南樓なら品川がよふござらう　菊月九月　重九重陽　登高

此日高い所へのぼる事　囊萸茱萸を臂にして山にのぼるハ桓景費長房が故事　陽月十月　搖落木の葉の落る也　葭月十一月　至日冬至　亞歲同　添線冬至の後日のながきと一線をそふこれハミな唐のもん日也　臈月十二月　歲杪歲暮　別歲年わすれ　餽歲歲暮の音物也　とあらましかたれどとおほく下手の長はし長ばなしさすがの此藏げんなりしぽくぽく眠ればさし出す枕ちんちんなるハ雞鳴枕いやもう斜陽西に春くまづ今日ハこれぎりの義理できかずにおこのミなら近日後編御日にかけましやう

巻末に

第一巻のやうに、増田七郎氏から、第二巻の誤植か其他に就いて、懇切なお問合があつた。以下である。

イ、八八頁五行目、牛がぶちはしばにあり、

　　右は、ふか。

ロ、九四頁七行目、是は□ざうしを買つて、

　　右の缺字？

ハ、一一〇頁二行目、あきらへす

　　右、或ハ、らの下、め脱か。

ニ、一一四頁七行目、のもふぢやごぜへせんかノ下、

　　右ハ、雪脱か。

ホ、一三一頁末行、空にかざ□バ

　　右、□の所缺字。

へ、一四一頁終より三行目、夕しはゆる〳〵

右、かゝる用語にや。

ト、一五〇頁四行目、本町の客殊のふ

右、のふは？

チ、三四四頁末行、せいかつこうすつかりとして

右、或は、すつきりか。

リ、三四六頁終より三行、□は定か。

ヌ、三五五頁終より四行目、まじくじとしりめにみて

右、まじ〳〵とか。まじくじとの用語ありや。

ル、三六六頁一行目、浮のルビ、はうは、うはか。

ヲ、五七〇頁終より四行目、しるよし（くカ）せる

或は、しるよしせるのマヽにても、可か。

ワ、六四三頁二行、四行、十一行の出新ハ、玉新か。

以上のお尋ねであつた。原本と對校すると、お答へ、次の如しである。いつもながらの御勞讀を篤

く御禮申したい。

イは、原文、ふ。ぶとしたのは、自分の濁音癖であつた。これは、明らかに、ふちと清音に訂正したい。ロは、枕を、わざと伏せたのである。ハは、原本、あきらへす、である。あきらめのめを略く、略音といつたものは、當時花柳語によくあつた。これも其一例だと言へよう。ニは、[雪]がなければ無論、意味は通じないが、無い事は、原本のマヽである。マヽとしなかつたことを、詫びる。ホは、これは、校正摺には、せと現れてゐたが、紙型になつて、消えたのである。せが、入るべきもの。へは、夕しで。原文のマヽ。但しこの夕しは、夕し御けんなどと、普通に使はれてゐるとは思ひますが。しは、語調を延ばすための助辭といふべきであらう。今日を、今日しともいふ。トは、これは當時の假名遣などが亂暴な風から來たので、殊なうの積りで書いてゐよう。のふと字面は無理だが、發音は、なうである。殊のふは、格別の意であるが、語原は、事になうカ。チは、すつかりで、原本のマヽ。但し原本は、すつかつとも見える。リは、これも校正摺には現れてゐて、本摺になつて消えた。紙型に敲く時、飛んだのか。[定]です。ヌは、まじくじで、ママです。まじもくじも、同じやうな意味でと思ふが、如何。漢字を宛てたら、凝視、穿貫か。ルは、これも初校はうはでしたが、最後にオキ變つたと思ひます。うはです。ヲは、しるよしせると讀め、よしがよくとも讀める。原文、三千石をし

る（知る）よしせるでは、ちよつと意が通じない。で、よくせる人、立派に暮す人と意味を取つた。で、（くカ）としたのである。よしのマヽなれば、三千石を知るよしあると、あるでなければ、意が通じないではなからうか。ワは、三ヶ處とも、原本、コノマヽです。但し、玉新の誤だと思はれます。原本筆耕の誤であらう。（マヽ）とすることを、落しました。

誤植のあと、又は、ママの箇處、一々加朱して頂きたい。大方もである。尚、此の卷も、此種の疑ひ、又は誤植、無いとはいへぬ。ぜひ御知らせに預りたい。

×

挿入の寫眞版と凸版に就て。第一卷所載の「孔雀染勤記」の極めての美本を發見したから、その缺の口繪を補ふと同時に、標本として、表紙も銅版に撮つた。中本一冊、茶表紙、此の製版、これでゐて原本より僅かに小である。（四方、一分位の小。）これは、上と下と右を寫眞の一ぱいに截り、右を貼り、左を若干折込んで頂きたい。口繪の凸版は、竪半丁分、原寸大である。これは、本卷の寸に合して、右を窄めて截り、貼り込む事。第一卷、三一二頁の次へ表紙、三一六頁の次へ口繪と挿入ありたい。

――なほ、口繪は、此の口繪の裏が、「それ雪」の文字である。第一卷解題では、表――第一卷、解題の二〇頁、四行目――とあるが、裏の誤植だつた。なほ、本第三卷、口繪・挿繪の製版も、見返し

圖を、一頁大の横に縮めたり、又は、見返しで半丁づつ竪に、即ち二頁に撮つたりして、不統一であるが、これは、私の指定ではなかつた。私の指定としては、全部、前卷通り、横に一頁に縮寫の積りでゐたが、それが徹底しなかつたと見えて、此の區々となつた。運のいいものは、二頁に撮られて、麗々しく揭げられた。がそのため、組版の方でも、一頁つつ頁を狂はして、手間は要つた。そのかはり、此の運の好い篇どもは、最も原本の奥に近くなつた譯である。

第五卷、第六卷。第二卷の卷末に豫定した以外、左の數部を、追加する事を述べておく。

第五卷。安永九年版の「草木芝居化物退治」。同年の「俗談諺種」。

第六卷。寶暦九年の「彌味草紙」。明和初めの「雜俳小夜嵐」。明和七年「戀道双陸占」。寛政十年の「あらんだ鏡」。及び弘化元年「風俗三石士」。格別、第六卷の「雜俳」と「戀道」とは、本編の飜刻によつて、復活する稀本であらうと自ら讃したい。

右、追記。

六月十二日夜十時

編者

洒落本集成　第二卷　大尾

昭和五年八月十三日印刷
昭和五年八月十七日發行

洒落本集成 第三卷
（定價 參圓八拾錢）

著作者檢印

著作者 尾崎久彌

發行者 東京市日本橋區通り三丁目八番地 和田利彦

印刷者 東京市日本橋區通り三丁目八番地 木呂子斗鬼次

印刷所 東京市小石川區諏訪町五十六番地 常磐印刷所

發行所 東京市日本橋區通三丁目八番地
（電話日本橋、五一、六四一、三七八八）
（振替口座東京、一一六一七）
春陽堂

尾崎久彌氏編・小村雪岱氏裝幀

洒落本集成 全六卷

四六判本文七百頁內外
表紙口繪木版數十度摺
定價第一卷三圓半・第二卷三圓八十錢

春陽堂發行

○第一卷（既刊） 郭中掃除○居續借金○福神粹語錄○南極驛路雀○娼註銚子戲語○遊僊窟烟の花○通志選○廓臚競○意妓口○不粹照明房情記○取組手鑑○孔雀染勤記○青樓惚多手買○通俗雲談○通言東至船○假根草○廓數可佳妓○三人酩酊○傾城傳受（傾城買猫の卷）○青樓眞廓誌○青樓夜話色講釋○青樓娭言解（以上、廿二篇）

○第二卷（既刊） 三幅對○驛者三友○通仁枕言葉○かよふ神の講釋○傾情智惠鑑○北廓鷄卵方○五臟眼○部屋三味線○見通し占○白狐通○契情買言告鳥○疇昔茶唐○仇手本○埜良玉子○青樓小鍋立○獨稽古○青樓日記○甲驛夜の錦○素見數子○起承轉合○滑稽遊治郎○魂膽胡蝶枕○教訓角力取草○吉原幘子○契情實の卷○婦身噓（以上、廿六篇）

○第四卷以下、續刊。

相馬御風著

總布裝極美函入　■定價貳圓七拾錢
六百頁寫眞多數　■送料拾　八　錢

大愚良寛

良寛研究として最大の權威者なる御風氏が、高き尊崇の熱意と深大な味解と、周到綿密な考究と、永年に亙る渾身の精進の餘になれる良寛和尚の評傳で、正に「良寛和尚詩歌集」と姉妹篇たるべきもの。これ實に人としての良寛を世に傳へんとした最初の書であり、かの隱れた高僧の謎の如き人間良寛の眞面目は本書によつて始めて明である。大愚か、大凡か、はた大賢か大非凡か、とまれ一個稀有な隱聖の生活が迷ひ苦しめる現代の人心に、いかに大なる福音と光明を與ふるか、本書はその祕鍵に外ならない。

東京日本橋通り三丁目　春陽堂　振替東京一六一七

相馬御風編並解說

四六總布裝
函入極美本

■定價壹圓九拾錢
■送料拾八錢

良寛和尚 萬葉短歌抄

本書は良寛和尙自筆のまゝ保存されて來た萬葉集の中よりその精髓として抄錄した稀覯の書を世に始めて紹介されたもの。良寛の絶唱が萬葉集の本格を把捉しそれに彼獨特の風格を帶びしめたものであるが、彼がいかに萬葉集を好み、理解し、且つ評價したかそれこそ良寛の本質を認識し得ると共に、眞に短歌の本道を完全に味讀し得る極めて貴重なる祕法である。萬葉を尙び、良寛を愛し、短歌に關心を持つ何人にとつても絶對に必要なる文獻である。本書を通ずることにより短歌の玄道は瀏然として眼前に歴々と展開するであらう。

東京日本橋通り三丁目　春陽堂　振替東京一六一七

菊池寛短篇集

道理

定價壹圓　送料拾貳錢

内容。入れ札、蘭學事始、亂世、義民甚兵衞、征南奇聞、マスク、天の配劑、ある青年、祝盃、姉の覺書、島原心中、妻の非難、啓吉の誘惑。

極樂

定價壹圓　送料拾貳錢

内容。出世、盗賊被盗賊、M侯爵と寫眞師、勝負、死床の願ひ、義勇、神の如く弱し、愼しき配偶、形、極樂、笑ひ、名君、盗人を飼ふ、歌舞伎若衆。

東京日本橋・通三　春陽堂　振替(東)一六一七

菊池寛短篇集

冷眼

定價壹圓拾錢
送料拾貳錢

內容。友と友の間、簡單な死去、小說「灰色の檻」、ある戀の話、奧附の印、身投救助業、死者を嗤ふ、順番。

我鬼

定價壹圓拾錢
送料拾貳錢

內容。まどつく先生、藤十郎の戀、ある抗議書、恩讐の彼方に、たちあな姬、葬式に行かぬ譯、晚年、我鬼、舞臺に立つ妻、ある兄弟、奇蹟、鐵拳制裁、後序。

東京・日本橋・通三　春陽堂　振替(東)一六一七

橋田東聲著

平福百穂裝幀　■定價壹圓七拾錢
新四六判極美本　■送料拾貳錢

土の人長塚節

長塚節は人として、又藝術家として、私の最も敬讃する人格である。この人格に對し、私は實に久しい間、思慕と崇敬の心を抱いて來た。この頃自然を思ひ自分を顧みて、長塚節の世界を追慕する心が益々深い。久しく湛へられて來た念々の思慕の情が乃ち私を驅つて本書をなさしめた。

節の生涯、人格、性情、生活、藝術、師友、臨終等については一通り書いたつもりである。まづしい乍ら、いささか自信のある著作である。大方の高評を希ふ。(橋田東聲)

內容

一、長塚節生涯
二、短歌と自然及び農村
三、全人格の藝術
四、正岡子規と節
五、伊藤左千夫と節
六、自然の人長塚節
七、節と女性
其の他十數項

東京日本橋通り三丁目　春陽堂　振替東京一六一七

荻原井泉水著

古人を說く

總布裝堅牢 函入極美本 (三版)

定價 壹圓八拾錢
送料 拾貳錢

大自然の愛と淋しさを魂とする聖者の如き古典詩人芭蕉——貧困の中から圓熟した書と句とを産んだ中世的な藝術家蕪村——どこまでも人間的な生活と苦惱に忍んだ近代人一茶——芭蕉、蕪村、一茶の體驗した深い心境と祕めし生活と高い藝術とは親しく懷しく現代の我等の心に直接に呼びかける。

しかも俳境に於て清新と獨創の鑑識をもつて異常な衆望をあつめたるが著者この眞摯な評論こそ、俳人は固より、廣く諸君の御愛讀を俟つこと頻である。

一、研究、芭蕉雜話「奧の細道」註、一茶の生活の一記錄、一茶が日記から、俳人丈草、夏目漱石尾崎紅葉の俳句に就て。他數篇

一、講話、芭蕉の生活と其俳句、芭蕉といふ人、蕪村の俳句と藝術味、「春風馬堤曲」評釋。

東京日本橋通三　春陽堂　振替(東)一六一七

相馬御風著　總布装高雅　函入極美本　（五版）

靜と動との間

定價　壹圓六拾錢
送料　拾貳錢

「山は靜にして性をやしなひ、水は動いて情をなぐさむ。靜動ふたつのあひだにしてすみかを得るものあり」の芭蕉の句をそのまゝに生き、惱み、その澄明幽玄、現代稀に見る超俗性、大自然の深い大きい脈搏の把捉こそまことに本書である。——「自然と人間」、遊びの世界、こどもの言葉、この安心、表現について、北國春信、良寛雜考、花の開く姿、ある鐘樓守の話から、新民謠の誕生、都會と田舍、海が踊つてゐる。大雪雜記、雪は消える、紙鳶あげ。戯歌四十五首等、すべて朗々愛誦すべき隨想の傑作に充ち滿ちてゐる。

東京日本橋通三　春陽堂　振替（東）一六一七

荻原井泉水著

小村雪岱畫伯裝幀
手摺木版特製表紙（好評）

觀音巡禮

定價 壹圓八拾錢
送料 拾貳錢

春風が吹く、法衣の袂を飜して、山に野に佛を尋ね行くものは著者だ。朝の太陽、夕の燈火、旅こそ地上の人間すべてを佛に近づける。野に出でよ、此著者と共に諸君の心を春光、秋風に放たしめよ。俳人たる著者が痴凡を拂ひ遠離一切、顚倒夢想の眞實を求めて西國三十三所の靈場に心を寄せる。其懷德を述るぶや、新紀行文として何人の心をも旅に誘はないでは措かない。附錄には著者の實踏した「道中案內記」と「巡禮地圖」を添ふ。西國三十三所の絕好の道しるべである。

東京日本橋通三　春陽堂　振替（東）一六一七

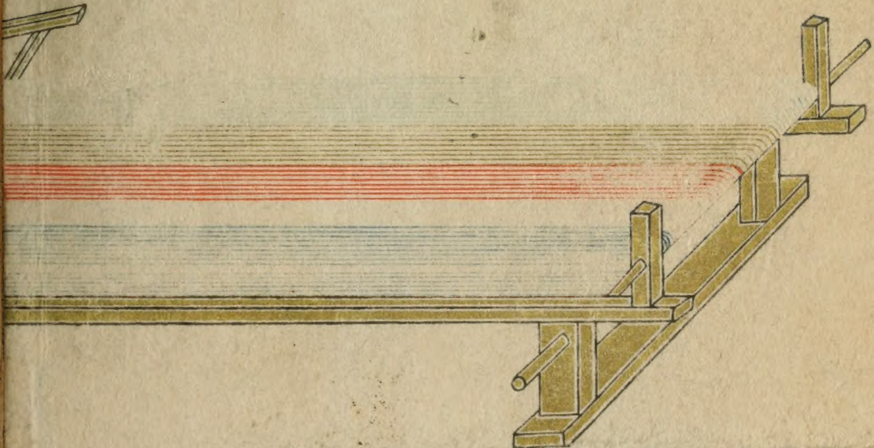
PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

Far Eastern 68

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02993 8081